昭和八年九月十五日印刷
昭和八年九月二十日發行

國譯一切經 瑜伽部 九

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（三二）〇一一六番
　　　（三二）〇四〇一番

製本所　兩角製本所

くは此の能は窮り無からんことを。

攝大乘論釋　終

【三四】三能とは次の三句に之を示せり。

て是の說を作すとも　能く佛は是れ無上師なることを顯はし　涅槃道の資糧に隨順せん
此の言を頂戴すること佛の敎の如くせよ。[八]世に慧人の能く佛に勝るもの無く　智を具し
眞理に通じて餘す無し　是れ佛、自ら法を了りて動し叵し、　若し正法に違すれば佛の敎に由
れ。　若し聖人及び正法を謗るは　迷人の見執の作す所なり　[九]此に於て智を生じ三汚を離る
るは　衣の染を受くるを淨めて垢に非ざるが[一〇]如し。　智鈍にして信及び白法を離れ　邪慢
の法災により執を了せず　貪利邪見の事法の怨　[一一]勝を離れ下願にて正法を謗るは。　火蛇
の怨及び霹靂に於て　法傷は畏る可きも此は畏に非ず　火等は但だ世間の命を斷ずるのみ
[一二]無間の畏る可きは此に由らず。　若し人數々諸の惡友に事ふれば　邪見五逆にて善根を
斷ぜん　法を思ふて速かに無間の苦を離れよ。　法を謗れば何の因によりてか解脫を得ん。
[一三]衆[一四]寶と界如と覺德業とは　我が說く句義の生ずる所の善なり　此に因りて願くは悉
く彌陀を見て　淨眼を得るに由り正覺を成ぜん。

此の如き十偈は總義なり、此の總義を顯はさんが爲に、重ねて三偈を說く、
[一五]此に從り及び　[一六]此が爲にと　[一七]此に由ると　[一八]是の所說と　[一九]此の流とは四偈を說く、[二〇]前の五
義を顯はさんが爲と　[二一]自身の方便を守ると　是の故に二偈を說く、　傷法の因に一を說き
傷法の果に二を說く、　[二二]大集法忍に至り　無上菩提を證す　略して此の　[二三]三法を明か
す、　是れ重ねて勝果を說く。

三藏法師、論を飜講し竟りて此の三偈を說く、
若し了義の論を思へば　智人は三寶を信ぜん　智信の二根に由りて　眞如觀に入ること
を得。　故に我れ本に依りて記し　攝大乘を飜解せり　凡そ生ずる所の功德は　廻向し
て[二四]三能の爲にせん、　佛法僧を供養し　邪行の者を降伏し　衆の苦難を救拔せん　願

【八】次の二頌は佛敎の尊勝なることを示して違順の損益を明かす。
【九】三汚とは煩惱染、業染及び生染をいふ。
【一〇】次の三頌は傷法の因果を明かす。
【一一】菩薩の勝願を離れて二乘の下劣の願に住すること。
【一二】無間とは無間地獄の意。
【一三】後の一偈は結釋廻願を頌す。
【一四】衆寶は三寶をいふ、界如とは衆生にして卽如來藏なり。
【一五】此に從るとは敎及び理に依るの句を指す。
【一六】此が爲にとは造論の所爲を指す。
【一七】此に由るとは燈電等の頌をいふ。
【一八】是の所說とは若し眞實の義云云の一頌を指す。
【一九】此の流とは論を說くの一頌を指す。
【二〇】前五義とは世に慧人云云の三句に當る。
【二一】此の句は若し正法に違はば云云の五句をいふ。
【二二】大集云云は結頌を指す。
【二三】三法とは大集と法忍と證菩提となり。

釋曰　諸佛の證得する法身は一切に是れ有るも、若し自の正勤を離るれば、此の證得は則ち自の證得の因を成ぜず。何を以ての故に、若し是れ因ならば昔より以來復凡夫無けん。皆他に由りて得度するが故に。既に此の義無し。是の故に證得有りと雖も自の因を成ぜず。

（**論曰**　正因を斷除することは理に應ぜず。）

釋曰　正勤と證得と相應するを正因と名く。若し此の二を斷除すれば則ち道理に應ぜず。復次に因に二種有り。一には方便因、二には正因なり。諸佛の證得を方便因と爲す、他に屬するを以ての故に。自の正勤を修するを正因と爲す、自身に依るを以ての故に。若し正因を斷除して方便の因を留むるは、此の事道理に應ぜず、自の所願を成就する能はざるを以ての故なり。復次に諸の菩薩有り。慈悲にて莊飾し相續し、衆生に於て愛念の心を起して、皆子の想の如くし。此の意を作さず。是の衆生利益の事は、願くば他作せ我は作さずと。常に是の意を作す、若し他或は作し或ば作さざるも、我は必ず應に作すべし、と。若し衆生にして菩薩の心に應じて正勤を作さざれば、菩薩の利益の義を得ること無し。此の故に正勤すべし。是の證得の法身は第一の正因なり。此の因は斷除すべからず。若し此の因を斷除して、他に由りて法身を得んこと。是の處有ること無し。

論曰　阿毘達磨大乘藏經の中に攝大乘と名くるを、此に正說し究竟す。

[五]佛言と及び道理とに由りて　論を說くは、自ら清淨を得んが爲めと　智信の正行の人を利せんが爲めと　正法を立てゝ久しく住せしめんが爲となり、　燈と電と寶と日と月との光に依りて　淨眼の人は衆色を見るが如く　智悲を具する三解脫の尊に依りて　通達して論を說くことも亦復爾り。[六]若し眞實の義にして法句に應ずれば　能く皮肉心の煩惱を除き、　諸の涅槃道の功德を顯はさん　此れは是れ聖言にして餘は悉く非なり。　若し[七]亂心の人にし

【五】初の二頌は造論の所爲を明かす。
【六】次の二頌は佛敎及び佛敎に隨順する論藏に依憑すべきことを明かす。
【七】亂心の人とは廣くは凡夫を指すも、此には釋論師自ら謙讓するの語なり。

及び事の二義斷ぜざるに由るが故に常住と名く。

論曰　若し法身は無始の時より無差別無數量なるも、

釋曰　若し法身は無始本有にして、一切衆生に於て差別無く、度量すべからず、諸佛は法身に由りて他を利益するの事に於て勝能を具足すとせば、衆生は法身を得んが爲に何ぞ精進修道を用ひん。

論曰　法身を得んが爲に、應に功用を作さざるべからず。

釋曰　爾りと雖も應に功用を作さざるべからざるは、自然に法身を證得すること無きが故なり。

論曰　此の中に偈を說く、

釋曰　此の難を釋せんが爲に、是の故に偈を說く、

論曰

諸佛の證得は等しく無量にして　是れ因なり、衆生若し勤を捨つれば　證得は恒時に因を成ぜず　正因を斷除することは理に應ぜず。

(**論曰**　諸佛の證得は等しく無量にして、是れ因なり。)

釋曰　過去現在の佛は、法身を證得するも、證得に高下無きが故に「平等」と言ふ。得る所の功德は定まれる齊限無きが故に「無量」と言ふ。此の如き證得は是れ衆生の法身を得んこと求むる正勤の因なり。

(**論曰**　衆生若し勤を捨つれば)

釋曰　此の證得は若し是の衆生にして正勤の因を捨つれば、前に計する所の如く、自ら正勤を作すことを須ひず、他に由りて得度するが故に、

(**論曰**　證得は恒時に因を成せず。)

般涅槃すれば、則ち發願修行の本意に違ひ、願行は但だ自を利益する果のみ有りて、他を利益する果無けん。如來は永く般涅槃せざるに由り、是の故に相應して果有り。

論曰　復次に受用身及び變化身は無常なるが故に、云何が諸佛は常住の法を以て身と爲すや。

釋曰　若し如來は永く般涅槃せざれば則ち如來は常住の法を以て身と爲す。受用身及び變化身は應に是れ無常なるべからず。若し是れ無常ならば、云何が復、常住の法を以て身と爲すと言ふや。

論曰　應身及び化身は恒に法身に依止するに由るが故に、

釋曰　法身は二身の本と爲る。本既に常住なれば、末は本に依り相續して恒に在り。故に末も亦常住なり。

論曰　應身は捨離無きに由るが故に、

釋曰　如來の自の圓德と及び諸の菩薩を利益すと。此の二事は如來と恒に相離れず。此の二事は即ち是れ應身なり。故に應に常住なるべし。

論曰　化身は數々起現するに由るが故に、

釋曰　化身は衆生を度せんが爲に、乃至生死の際を窮め、一刹那の時として相續せざること無く、示現して無上菩提を得及び般涅槃す。何を以ての故に。度する所の衆生は恒に有りて、如來の大悲は休廢すること無きが故に。是の故に化身も亦是れ常住なり。

論曰　恒に樂を受くといふが如く、恒に食を施すといふが如く、二身の常住なることは應に此の如く知るべし。

釋曰　二身の常住なることを顯はさんが爲の故に、此の二事を引いて譬と爲す。世間に此の人は恒に樂を受く、此の人は恒に食を施すと說くが如し。受樂と施食との二事は間無きに非ざるも、之を名けて恒と爲す。本及び事の二義斷ぜざるに由るが故に名けて恒と爲す。二身も亦爾り。本

進するが故に、

釋曰　前には未だ正勤を修せざるが爲に正勤を修せしむるを明かし、此は若し已に正勤を修すれば、正勤を捨てず、定慧を修習して疾かに圓滿することを得しむるを明かす。故に化身は永く住せず。

論曰　此の中に偈を説く、

釋曰　前の六因を攝して、多く忘失する者をして憶持し得易からしめん爲の故に、重ねて偈を説く、

論曰

正事究竟すると　涅槃を樂ふことを除き　佛を輕慢することを捨てしめんが爲と　渇仰の心を發起すと　身に向つて精進せしむると　及び速かに成熟せしめんが爲とに由りて　諸佛は化身に於て　一向に住するに非ざるを許す。

釋曰　如來は永く般涅槃せず。今當に此の義を顯示すべし。

論曰[四]　一切の衆生を度せんが爲に、發願し及び修行して無上の菩提を尋求するに由り、一向に般涅槃するは、此の事道理に應ぜず。

釋曰　如來は昔し願樂地の中に在りて、衆生を度せんが爲に諸の勝願を發して無上の菩提を求め、見等の位の中に於て、衆生を度せんが爲に諸の勝行を修して無上の菩提を尋す。若し極果を得、衆生を捨てゝ般涅槃するは道理に應ぜず。何を以ての故に、

論曰　本願と及び修行とに相違して果無きが故に、

釋曰　菩薩は昔衆生を度せんが爲に、發願し及び修行す。我をして當來に常に能く一切衆生を利益せしめよ、と。衆生を利益するは卽ち願行の果なり。今極果を得て、若し衆生を棄捨して永く

【四】次の一段の論説は隋唐兩譯には前段の化身示現の偈文の次に出づ、但し魏譯は本譯に同じ。

釋曰　若し既に惑障を解脱すれば無餘涅槃を求む。其の意欲を轉ぜんが爲に化身を示すも、實有に非ざるが故に化身を捨て丶、別に常住法身有り、是れ眞實に有なることを示す。應に小乘の無餘涅槃を求むる心を轉じて、常住の法身を求めしむべきが故に、化身は永く住せず。

論曰　三には彼をして佛の所に於て輕慢の心有るを除かんが爲の故に、彼をして甚深の眞如の法及び正説の法に通達せしめんが爲の故に。

釋曰　彼とは謂く一切衆生なり、佛に生老病死等有りて、己と異ならずと計するが故に、如來に於て輕慢の心を起す。衆生をして如來の眞實身と及び假名身とを識らしめんと欲す。眞身とは即ち眞如の法及び正説の法なり。正説の法は眞如の法より流出するを正説の身と名く。此の二を法身と名く。此の法は最も甚深にして通達す可きこと難く、下位の人の境界に非ず。若し此の身に通達すれば則ち如來に於て極尊重の心を起す。假名身は卽ち化身なり。此の身は是れ分別の所作にして眞實に有るに非ざるを示すが故に、化身は永く住せず。

論曰　四には衆生をして佛身に於て渇仰の心を起し、數々見て厭足無からしめんが爲の故に、

釋曰　若し恒に一化身に住すれば、衆生は始め見て渇仰を生ずるも、後則ち歇薄す。若し色形改變し種種にして希有ならば、衆生は數々見て新新に渇仰し、則ち厭足無きが故に、化身は永く住せず。

論曰　五には彼をして自身に向つて極精進を起さしめんが爲なり。正説者は不可得なるを知るに由るが故に、

釋曰　若し佛は、恒に化身に住すれば、衆生は則ち難遭の想を起さず。故に如來は化身を捨て丶、其をして佛は久しく世に住せざることを知らしめ、極正勤を起し、急に自身を度して他を觀ぜざらしむ。又自身其の是非を證するを以て「自身に向ふ」と名く。故に化身は永く住せず。

論曰　六には彼をして速かに成熟位に至ることを得しめんが爲に、自身に向つて荷負を捨てず極精

世界に倶生せず。譬へば轉輪王の如しと。此の中、汝、應に此の經は、轉輪王の義に同じと判ずべし、兩轉輪王は一世界に於て倶生することを得ざるも、餘の世界に於て倶生することを妨げざるが如く、兩如來の倶生するは道理に非ざること、義を判ずるも亦應に此の如くなるべし。

論曰 此の中に偈を說く、

釋曰 具相の無上覺の義を顯はさんが爲の故に此の偈を說く、

論曰

佛の微細なる化身は　多く入胎平等なり　具相の覺を顯はさんが爲に　世間に於て示現す。

釋曰 佛は兜率陀天上に在り、閻浮提に下つて受胎す。是の時の中に如來は、一切の佛弟子を化作す。淨命、舍利弗等の受胎の如し。若し彼を安立すれば具相の無上覺は、則ち顯現することを得。若し下中の二乘無ければ、則ち佛は是れ無上なることを顯はすことを得ず。若し二乘の智慧の淺狹無ければ、則ち佛は是れ具相なることを顯はすことを得ず。此の義を顯はさんが爲の故に、化身は世に出現す。諸佛如來は一向に涅槃に非ず。今當に此の義を顯示すべし。

論曰 六種の因有り。諸佛世尊は、化身の中に於て永く住することを得ず。

釋曰 六因有り。佛は、化身を捨つべきことを證す。

論曰 一には正事究竟せるが故に。已に衆生を解脫し成熟せるに由るが故に、

釋曰 如來の化身の正事は已に究竟せるが故に、化身は永く住せず。衆生を成熟して解脫を得しむるは、是れ化身の正事なり。衆生旣に悉く成熟し解脫す。故に正事究竟すと名く。

論曰 二には若し已に解脫を得れば、般涅槃を求む。彼をして般涅槃の意を捨てゝ常住の佛身を得んことを求めしめんと欲するが爲の故に、

にして、餘の二身に非ず。

論曰　六には若し無上菩提を顯はす方便を離れて、但だ化身を以てのみ、他方に於て佛事を作さんか。若し爾らば則ち應に兜率陀天上に於て正覺を成ずべし。

釋曰　若し汝、但だ一閻浮提處に於てのみ無上菩提を得、餘處には則ち入胎等の方便を離れ、餘處に於ては唯だ化身を現じて佛事を作すと執せば、云何が此の如き菩薩は、兜率陀天上に在りて無上菩提を得、餘處に於ては化身を現じて佛事を作すと執せざるや。是の故に此の身は是れ變化身にして餘の二身に非ず。

論曰　七には若し爾らざれば、云何が佛は、一切の閻浮提の中に於て平等に出現せざるや。若し他方に於て出現せざるは、阿含及び道理として此の義を證す可き無し。

釋曰　若し天の中に於て菩提を得ざれば、則ち應に遍く得べくして、而も菩薩は一切の四天下に於て遍く無上菩提を得ず。但だ一處のみに於て得んは、阿含及び道理とし能く此の義を證すること無し。是の故に此の身は是れ變化身にして餘の二身に非ず。

論曰　八には二の如來一世界に於て倶に現ずるは、此れ相違せず。若し許さは化身は多を成せん。

釋曰　一娑訶世界に、二如來の倶に出世すること有り。此れ義と相違せず。何を以ての故に、化身は多を成ずと許すを以ての故なり。化身既に多なれば、處處に化身有ること、此れ妨ぐる所無し。是の故に此の身は是れ變化身にして餘の二身に非ず。

論曰　四天下は一世界を攝するに由り、轉輪王は一世界に於て或は一主、或は別主、倶に生ずることは道理に應ぜざるが如く、諸佛も亦爾り。

釋曰　此の證に由り說く可し。此の如く一世界有り。百拘胝の世界の中に在り、中に於て佛を見ずと。若し汝、此の如しと說かば、則ち經と相違す。此の如きの說有り。謂く二佛一時に大三千

釋曰 菩薩は三十三大劫阿僧祇に於て、正行の中に於て正勤を修し、福德智慧の行は悉く已に圓滿せり。道理として、最後身に於て邪正の說の異りを了別すること能はざること有る無し。若し此の知無ければ、佛を得るの時、何の法を知ると爲すや。諸の外道を降伏せんと欲するが爲の故に、現じて此の事を爲す。是の故に此の身は是れ變化身にして、餘の二身に非ず。

論曰 四には諸の菩薩は、久遠より來、已に三乘の聖道の正理に通達せり。道を求めんが爲の故に虛なる苦行を修するは道理に應ぜず。

釋曰 諸の菩薩は三十三大劫阿僧祇より來、十解十行に在り、初地に已に三乘の聖道の正理に通達せり。斷常の執を離れ、苦樂の邪行を行ぜざるは、是れ二乘の聖道の正理なり。有無の執を捨て、一切の分別を離れ、無分別の境智の正行を修するは、是れ菩薩の聖道の正理なり。外道の苦行は能く已得の法を滅するも、未だ得ざる法を得ること能はざれば、二世の中に於て但だ損するのみにて益無し、故に名けて「虛」と爲す。道理として菩薩は、應に此の事を習行すること有る無し。衆生を化せんが爲に、苦行を修することを示す。果報有ること無きが故に、現じて此の事を行ず。是の故に此の身は是れ變化身にして、餘の二身に非ず。

論曰 五には、諸の菩薩は、百拘胝閻浮提を捨てて、一處に於て無上菩提を得、及び法輪を轉ずるは道理に應ぜず。

釋曰 諸の菩薩は、修道の時、萬億閻浮提に遍滿し、萬億閻浮提の衆生を成熟せり。成佛の時は則ち應に遍滿して身を受くべし。然るに果報身は唯だ一有ることを得るのみにて、多有ることを得ず。若し爾らば何の故に一勝處に於て受身せざるや。化身を以て遍く一切處に化を行ず。道理として萬億閻浮提を捨つること有る無し。偏へに一閻浮提に於て成佛し轉法輪するは、衆生を化せんが爲に、佛の出世を知らしめんが故に。現じて此の事を爲す。是の故に此の身は是れ變化身

久しく已に三界を離欲せり。道理として天道の中に生ずること有ること無し。何に況んや道理として人間に於て有らんや。釋迦、王種の中に在りて生ずるは、下の衆生を化せんが爲の故に、現じて人身を受くるなり。此の身は因無くして、而も世間に於て是れ有り。故に果報身及び自性身に非ず。但だ是れ變化身なるのみ。

論曰　二には諸の菩薩は、久遠より來、恆に宿住を憶す。

釋曰　菩薩は、初地より十地に至る長時の中に於て、恆に宿命を憶し、先に修得する所の無量の伎能を悉く忘失せず。

論曰　方書・算計・數量・印相・工巧等の論。欲塵を行じ及び欲塵を受用する中に、菩薩の無知なるは道理に應ぜず。

釋曰　六十四種の方土の異書。乘除等の十六種の算計の法。乘除等の十六種を離れ、觀聚して數の多少を知り、觀聚して量の多少を知ること。印を以て物に印して相と爲すこと。或は增し、或は減じ、或は守り或は相し、六十四能、十八の明處、六十四の王伎祕巧の術法、未だ得ざるを得しめ、已に得たるを長ぜしむ。已に長ぜるを善人に付囑するを「欲塵を行ず」と爲す。六塵の中に於て、歌舞・和合・衣著・調鼎等の事の如きを「欲塵を受用す」と名く。菩薩は無量劫來に於て、常に宿世に修する所の一切の伎能を憶して、悉く忘失無し。道理として此等の事に於て知らず憶せざること有る無し。衆生を化せんが爲に、下品の人も轉じて上品を成ず可きを示さんが故に、自身未だ此の能有らざれば、方に須らく修學すべきことを顯はす。是の故に此の身は是れ變化身にして、自性身及び受用身に非ず。

論曰　三には諸の菩薩は、久遠より來、已に邪正の法教を識別す。外道の所に往き、彼に事へて師と爲すは道理に應ぜず。

同じからざるに隨ひ、佛は其の色相の如し、故に相雜と名く。三には其の根性の宜しき所に隨ひて大智・大定・大悲・無量の事用有り、故に相雜と名く。應身に此の相雜有るも、法身は爾らず。若し法身を以て應身と爲せば、佛には、衆生を利益するの事無し。若し應身を以て法身と爲せば、佛には、現世安樂の義無し。恆に喧動にして、寂靜を離るるを以ての故なり。是の故に應身は法身を成ぜず。

論曰 六には阿梨耶識と及び生起識とは轉依を見ること、道理に非ざるが故に、

釋曰 阿梨耶識と及び生起識とは、卽ち是れ受用身なり、此の二識の轉依を法身と名く。若し自性身卽ち是れ受用身ならば、二識の依を轉ずれば復何の身を得るや。此れ道理に非ざるに由るが故に、受用身は自性身を成ぜず。若し受用身卽ち是れ自性身ならば、則ち大智等の衆德無けん。衆德無きにあらざるに由るが故に、自性身は受用身を成ぜず。

論曰 是の故に受用身は、道理として自性身を成ずること無し。

釋曰 此の六因に由りて、是の道理と非の道理との義を證知せり。

論曰 云何が變化身は、自性身を成ぜざるや。

釋曰 變化身は、法身を成ぜざるは、是れ道理なり。變化身は、法身を成ずるは、道理に非ず。是非の義は云何が知るべきや。

論曰 八種の因に由るが故なり。

釋曰 八種の因有りて、是非の義を證す。

論曰 一には諸の菩薩は、久遠より來、無退三摩提を得、兜率陀天道及び人道の中に於て受生するは道理に應ぜず。

釋曰 菩薩は初地を得てより乃し十地に至るまで、三十大劫阿僧祇を經て、五百の不退定を得、

能く正法を說き義を立て疑を釋す。此れは是れ般若の功用なり。般若は卽ち是れ應身なり。日夜六時に衆生の根性を觀じ、彼に往いて爲に利益の事を作す、是れ大悲の功用なり。大悲は卽ち是れ應身なり。若し應身を以て卽ち是れ法身なりとせば則ち菩薩を集化すること能はず。若し法身は卽ち是れ應身ならば則ち諸佛は常住に非ず。此の差別の顯現に由るが故に、應身は法身を成ぜず。

論曰　三には彼の欲樂に隨ひて見れば、自性の不同を顯現するが故に、

釋曰　彼とは謂く無量の菩薩なり。欲樂して如來の衆德を觀ずるに、但だ應身に依りて觀ず。其の欲樂に隨ひて、見る所の衆德の顯現同じからず。此の如く應身の自性は不定なり、多種類なるを以ての故に。法身は爾らず。此の故に應身は法身を成ぜず。復別の經有り。應身は衆生の欲樂に隨ひて現相同じからざることを證せんが爲なり。何を以ての故に。諸の衆生有り、應身に於て黃色青色等、及び樂受捨受等、有識無識等の、種種の不同を見んと欲すれば皆悉く成ずることを得と。此の經は應身の自性不定なるを顯はす。法身は則ち爾らず。故に應身は法身を成ぜず。

論曰　四には別異別異に見れば、自性は變動して顯現するが故に、

釋曰　一衆生有り。先に此の應身の別異の相の顯現するを見。此の衆生は、後に此の應身の更に別異の相有りて顯現するを見る。一人の見ること不同なるが如く、餘の衆生の見るも亦爾り。此の衆生の善根を成熟せんが爲の故に、初に麁相を現じ、次に中相を現じ、後に微妙の相を現ず。應身に此の變動の相有るも、法身は爾らず。故に應身は法身を成ぜず。

論曰　五に菩薩・聲聞・天等の、種種の大集、相ひ雜はりて和合する時、相雜して顯現するが故に、

釋曰　應身は恆時に、菩薩等の種種の大集の相雜はりて法を聽く時、應身に三の相雜有るに由る。一には一切の衆生各各佛を見るに、皆其の前に對す、故に相雜と名く。二には無量の衆生い色相

せず。

釋曰　諸佛は永く惑障及び智障を解脫す。是の故に一向に涅槃す。如來の應に作すべき正事は未だ究竟せず。謂ゆる未だ成熟せざるを成熟せしめ、已に成熟せるを解脫せしむ。此の二事は休廢す可からず。是の故に如來は一向に涅槃せず。若し二乘の如く一向に涅槃すれば、如來の本願は但だ願のみ有りて果無けん。若し了義を說かば、應に涅槃する有り涅槃せざる有りと言ふべし。

論曰　云何が受用身は自性身を成ぜざるや。

釋曰　應身は、法身を成ぜざるは是れ道理にして、應身は、法身を成ずるは道理に非ず。此の是非の義は、云何が知る可きや。

論曰　六種の因に由るが故なり。

釋曰　六種の因有りて是非の義を證す。

論曰　一には色身と及び行身との顯現に由るが故に、

釋曰　十入を色身と名け、受等を行身と名く。

諸佛は眞如の法を以て身と爲す。法身の中に於ては色行は得可からず。應身は則ち爾らず。此の義云何ん。一切智・大定・大悲等の恆河沙等の如來の功德は法身に依ると雖も、若し顯現する時は化身を離れず。此の化身は佛に似て一切衆生に異るを、應身の事相と爲す。故に色行は應身に於て有り、法身に於て無し。是の故に應身は法身を成ぜざるは、是れ道理なり。成ずるは則ち道理に非ず。

論曰　二には無量の大集處の差別顯現するに由るが故に、

釋曰　應身に差別有り。佛弟子の大集輪の差別に由るが故なり。應身は能く、菩薩の弟子衆を集む。法身は爾らず。何を以ての故に。大通慧は能く菩薩衆を集む、大通慧は卽ち是れ應身なり。

經は、若し一世界に一佛出世すと說くも餘處を妨げず。若し一切の世界に一佛出世すと說かば、餘の轉輪王は、別の世界に於て應に生ずることを得べからず。旣に轉輪王、倶生せざることを說きて諸佛に譬ふ。汝、若し餘の世界に別の轉輪王有るを忍許すれば、云何が諸佛の餘の世界に出ることを忍許せざるや。佛の世に出づるは是れ大吉祥なり。何の故に多世界に於て多佛の出世有ることを許さざるや。此れ過咎無し。世間に多くの衆生有り、最勝の利益と相應するが故なり。云何が一世界に於て、二佛倶に出現せざるや。用無きを以ての故に。又宿願に隨ふが故に。諸の菩薩は、昔、是の願を作せり。願くは我れ盲闇の世界の、人の將導するもの無き處に於て正覺を成ずることを得ん。光明と作らんが爲に、彼を將導せんが爲にと。此の願に由るが故に二佛倶に出づること無し。若し爾らば何の故に唯一佛を說いて多佛を說かざるや。衆生をして極尊重を起し及び修行を急ならしめんが爲の故なり。何を以ての故に。若し但だ一佛のみなるに於ては則ち極尊重の心を起す。謂へらく他には此の如きの德無しと。亦能く急に如來の正敎を修行す。何を以ての故に。佛、若し涅槃すれば、我等は則ち歸衣處無けん。故に偈に言く、「一時に多佛あるは此の義成ず」と。

論曰　云何が應に諸佛の法身は一向に涅槃に非ず、一向に涅槃に非ざるに非ず、と知るべきや。

釋曰　諸師の說有り。諸佛如來は永く般涅槃せずと。別部の聲聞乘の人は諸佛如來は永く般涅槃すと說く。此の二執は了義の說に非ず。是れ密意の所顯なり。

論曰　此の中に、偈を說く、

釋曰　此の義を顯はさんが爲に、是の故に偈を說く、

論曰

一切の障を離るるに由り　應作、未だ竟らざるが故に　佛は一向に涅槃し　一向に涅槃

處無く、位なく、前に非ず後に非ず、二の如來・阿羅訶・三藐三佛陀、世に出現するは。處有り、位有れば、若くは一如來世に出現す。譬へば二轉輪王の同時に共に一處に生ずることを得ざるが如し。此の經は、當に大三千世界に二の如來無きことを說くべしと爲すや。當に一切の世界に二の如來無きことを說くべしと爲すや。宜しく應に詳釋すべし。此の經には、一切の世界と說く。何を以ての故に。應に世尊の勝能を限礙すべからず。唯世尊一人のみ一切處に於て勝能有り。若し一佛にして餘處に於て衆生を化度すること能はざれば、餘佛も亦應に能はざるべし。復、經に言へる有り。舍利弗よ、若し人汝の所に至りて是の如きの問を作さん。大德舍利弗よ、今時に於て沙門婆羅門有り、沙門瞿曇と平等平等なるは、無上菩提に於てなりや不やと。汝此の問を得ば、當に云何が答ふべきや。舍利弗言く、若し人有りて我が所に至り、是の如き問を作さば、我れ當に是の如く答ふべし。善男子よ、今時に於て沙門婆羅門と世尊と平等平等なること無きは、無上菩提に於てなり。何を以ての故に。世尊よ、我れ世尊の吉祥口より聞き、世尊より得る所、處無く位無く、前無く後無し二の如來並に世に出づることは。處有り位有り、唯一如來のみ世に出現す、と。若し爾らば云何が梵王經の中に於て、佛は但だ大三千世界の中に我れ自在に成ずと說くや。此の如きの言敎に別に密意有り。若し世尊作意せず、但だ自性の中の無功用心に在れば、大三千世界に於て、言語・光明・五識等の事自然に成ずることを得。若し有功用の心なれば無邊の世界は是れ如來の境なり。復、餘部有り、說く、餘の世界に於て別に諸佛の出世有り。何を以ての故に。無量の菩薩有りて、同時に六度を修行す。因已に成熟すること數量す可からず。道理として諸佛は一處に於て一時に共に生ずること有ること無く。別法の能く彼の餘處に於て出世するを礙ふること有る無し。是の故に定んで知る、餘の世界に於て別に諸佛の出世有ることを、と。此の經は、諸佛は同一時に出世せざること、譬へば轉輪王の如くなることを證す。今當に詳かに此の經を辯ずべし。此の

を說く。云何が或は一なるや。

論曰

一界の中に於て二無きが故に　同時に因成ずること量る可からず　次第に成佛するは理に非ざるが故に　一時に多佛（あるは）此の義成ず。

釋曰 一法界は平等なり。諸佛は是れ法界の所顯なり。法界は一なるに由るが故に諸佛は是れ一なり。復次に一時の中に、一世界に於て二佛俱に出づること無きが故に、或は一なりと說く。云何が或は多なるや。

（**論曰** 同時に因成ずること量る可からず。）

釋曰 一時に於て無數の諸の菩薩有り。同時に福德智慧の二行を修し、因已に成熟す。若し同時に無上菩提の果を得ざれば則ち修行唐捐す。諸の菩薩の修因は、同時に成熟し、同時に果を得るを以ての故に、一時に多くの菩薩の成佛有りて度量す可からず。若し因俱に成ずと雖も、必ず前後次第に成佛すと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。

（**論曰** 次第に成佛するは理に非ざるが故に。）

釋曰 諸の菩薩は是の願を作さず、我れ當に相待つて次第に成佛すべし。此の願に由るが故に因成熟すと雖も、故に次第を持つと、既に此の願無し。云何が因俱に成熟するも、同時に果を得ざるや。云何が多人俱時に因を修して次第を觀ぜざるに、果を得るの時は必ず次第を觀ずるや。故に此の義は理に非ず。

（**論曰** 一時に多佛（あるは）此の義成ず。）

釋曰 此の句は一時の中に、十方世界に無量の佛有り、同時に出世することを明かす。若し佛の經證有りて、世間に於て但一如來のみにして俱出の義無しと言はば、是の義然らず、經に言はく、

[2]法如に於ける平等の意と名く。諸の聲聞等の人は、如來は法華經の中に於て、其が爲に授記して已に佛意を得たり。但だ法如の平等の意を得るのみにて、未だ佛の法身を得ず。若し此の法如の平等意を得れば、彼れ是の思惟を作さく、如來の法如は卽ち是れ我が法如なりと。此の如きの意に由るが故に、一乘を說く。復次に法華の大集の中に於て、諸の菩薩の名の舍利弗等に同じきもの有り。此の菩薩は、[3]此の意を得、佛は爲に授記するが故に一乘を說く。復次に佛は、舍利弗等の聲聞を化作し、其か爲に授記して、已に根性の定まれる聲聞をして更に根を練りて菩薩爲らしめんと欲し、未だ根性の定まらざる聲聞には直に佛道を修せしめ、佛道に由りて般涅槃せしむ。佛の言へるが如し、曰く、我れ今過去世の中を覺了するに、已に無量無數劫を經て聲聞乘に依りて般涅槃せり、と。小乘は究竟處に非ざることを顯はし、其をして小を捨て大を求めしめんと欲するが故に、現して此の事を爲す。此の如きの義に由るが故に、一乘を說く。

(**論曰** 究竟とにて一乘を說く、)

釋曰 若し乘の義を說けば、唯一乘のみ是れ乘にして、所餘は乘に非ず。若し此の乘を過くれば別行無きが故なり。餘乘には上有り謂ゆる佛乘なり。此の義に由るが故に、若し彼の乘を此の乘に比すれば、此の乘は無等にして、彼の乘は失沒するが故に究竟と名く。此の如きの義に由るが故に、一乘を說く。

論曰 三世の諸佛は若し共に一法身ならば、云何が世數は佛に於て同じからざるや。

釋曰 諸佛は既に同じく一法身を得。云何が三世有り、復衆多有るや。若し三世及び衆多有れば云何が一と言ふや。

論曰 此の中に偈を說く、

釋曰 因として諸佛を證するに或は一或は多なる有り。今此の義を顯示せんと欲す。此の故に偈

【二】法如とは唐譯には法性と譯せり、法性眞如の義なり。

【三】此の意とは法如平等の意なり。

一乘を說く。

論曰

法と無我と解脫と　等しきが故に、性不同なるが故に　二意を得て涅槃すと　究竟とにて一乘を說く。

釋曰　法等しく、無我等しく、解脫等しきに由るが故に一乘を說く。此の中、法とは卽ち眞如なり。一切の三乘は皆眞如を離れず。是れ彼の乘に應ずる所の法なり。眞如の法同じきに由るが故に、一乘を說く。一切の法は唯法のみにして人無し。若し人實に無ければ、云何が此の人は是れ聲聞なり、此の人は是れ獨覺なり、此の人は是れ菩薩なりと分別するや。此の如き分別は、道理に稱はず。無我の義同じきに由るが故に、一乘を說く。三乘の人は同じく惑障を解脫す。佛は、解脫と解脫と差別有ること無しと言へるが如く、滅惑の義同じきに由るが故に、一乘を說く。三義同じきが故に「等し」と名く。

（**論曰**　性不同なるが故に。）

釋曰　有る二乘の人は、自乘の位に於て根性同じからず。此の人は二乘道を求むと雖も、未だ二乘を得ず。二乘の根性の未だ定らざるに由るが故に、轉じて大乘の根性と作す可し。此の人を化せんが爲の故に、一乘を說く。

（**論曰**　二意を得て涅槃すと）

釋曰　二意の中、初は衆生に於ける平等の意と名く。諸の聲聞等の人は、一切衆生に於て、此の如きの意を作す。彼は卽ち是れ我、我は卽ち是れ彼なりと。此の意に由るが故に、謂へらく彼れ正覺を得れば卽ち是れ我れ正覺を得、我れ正覺を得れば卽ち是れ彼れ正覺を得。我れ應に自身を解脫すべきが如く、亦此の如く衆生を解脫せしむべしと。此の如き意の故に、一乘を說く。後は

論曰　若し爾らば聲聞獨覺は共に得る所に非ず。此の如き衆德は諸佛の法身と相應す。諸佛は何の意を以ての故に、彼俱に一乘に趣き佛乘と同じと說くや。

釋曰　若し諸佛には、前の五の異り無し、法身の五業は是れ同じきに由る、二乘の人には五業の異り有りて、法身を得ず。五業の同じきこと無きに、如來は何の義の爲の故に、二乘の人は同じく一乘に趣きて皆成佛することを得と說くや。

論曰　此の中に偈を說く、

釋曰　一乘を說く意を顯はさんが爲に、是の故に偈を說く。前偈は了義を以て一乘を說き、後偈は密義を以て一乘を說く。

論曰

未定性の聲聞と　及び諸の餘の菩薩の
大乘に於て引攝すると　定性とに一乘を說く。

釋曰　諸の聲聞等の、小乘の根性に於て未だ定らざるもの有り、引いて大乘を信受せしめんと欲し攝して大乘を修行せしむ。謂く未だ得ざるを得しめ、已に得たるを不退ならしむ。云何が彼をして小乘の道を捨てて大乘に於て般涅槃せしむるや。佛は此の意の爲の故に、佛は一乘を說き、引攝して大乘に入住せしむ。

(**論曰**　及び諸の餘の菩薩の、大乘に於て引攝すると。)

釋曰　諸の菩薩の、大乘の根性に於て未だ定らざるもの有り、云何が彼をして大乘に安立し、大乘を捨て小乘に於て般涅槃せざらしむるや。此の意の爲の故に、佛は一乘を說き、引攝して大乘に入住せしむ。

(**論曰**　定性とに一乘を說く。)

釋曰　諸の菩薩の、大乘の根性に於て已に定んで退異の意無きもの有り、此の菩薩の爲の故に、

論曰　此の中、偈を說く、

釋曰　衆生の不同業と諸佛の同業とを顯はさんと欲す、此の故に偈を說く、

論曰

因と依と事と意と及び諸行と　異なるが故に世間には業の異なるを許す。

釋曰　此れ衆生の五業の不同を明かす。一に因、二に依、三に事、四に意、五に行なり。因の不同とは別因地獄を成じ、別因天を成じ、別因人を成ずるが如く、畜生餓鬼等も亦爾り、因の不同に由るが故に作業も同じからず。依の不同とは、依とは卽ち彼の身なり。身の不同に由るが故に作業も同じからず。事の不同とは、人道の中には、或は商估し、或は耕種し、或は王に事ふるが如く此の如き等の事同じからず、故に業も同じからず。意の不同とは、一切の衆生の根欲性を意と名く。此等は種種不同なるか故に業同じからず。諸行の不同とは、色等の五陰を諸行と名く。色陰の中にて火の作す所は水等の作す所に異なるが如く、受の作す所は想等の作す所に異なるが故に業同じからず。此の五事に由りて、此の作は彼の作に非ず。世間の愚智は皆其の業に異り有ることを許す。

論曰

此の五種の異りは佛に於ては無し　是の故に世將は同一の業なり。

釋曰　前の五種の事は諸佛に於ては悉く無し。何を以ての故に。諸佛の因は同じ、同じく福德智慧の行を修するが故に。諸佛の依は同じ、同一法身なるが故に。諸佛の事も同じ、同じく自利利他の事有るが故に。諸佛の意も同じ、同じく衆生を利益し安樂にするの意有るが故に。諸佛の諸行無きも同じ、同じく有爲法を出離するが故に。此の五の異り無きに由るが故に皆同一の業なり。大悲をもつて衆生を引導して倶に涅槃に向はしむるが故に[一]世將と名く。

【一】世將とは世の敎導者の意にして佛を指す。

根性の定まらざる聲聞とには、能く彼を安立して大乘を修行せしめんが爲の故に、

釋曰　此れ眞實の教力を明かす。乘に人と法と有り。人に大乘人有り小乘人有り。法に方便乘の法有り、正乘の法有り。方便乘を轉じて正乘を修治するか故に、乘を救濟すと名く。摩訶般若經に說くに、乘に三義有り。一に性の義、二に行の義、三に果の義なり。二空所顯の三無性の眞如を性と名け、此の性に由りて十度十地を修するを行と名け、此の行を修するに由りて、究竟して常樂我淨の四德を證得するを果と名く。又中邊論に乘に五義有りと說く。一には出離を體と爲す、謂く眞如なり、二には福慧を因と爲す、能く引出するが故に、三には衆生を攝と爲す、根性の如く攝して果に至らしむるが故に、四には無上菩提を果と爲す、行究竟して此の果に至るが故に、五には三惑を障と爲す、此の三惑を除き前の四義成ずるが故に。諸の菩薩は十信位の中に在りて大行を修して未だ堅固ならず。多く生死を厭怖し、慈悲衆生の心猶劣薄にして、喜んで大乘の本願を捨てて小乘の道を修せんと欲す。故に「偏へに別乘を行ぜんと欲す」と言ふ。小乘は聲聞を說く。若し信等の五根を得るも定根と名けず、未だ聖を得ざるを以ての故に。若し未知欲知等の三根を得れば則ち定根と名く、聖を得るを以ての故に。若し頂位に至るも定性と名けず、四惡道を免れざるを以ての故に。若し忍位に至らば名けて定性と爲す、四惡道を免るるを以ての故に。若し小乘に依りて解すれば、未だ定根性を得されは則ち小を轉じて大と爲す可し。若し定根性を得れば則ち轉ず可からず。此の如き聲聞は小を改めて大と爲すの義有ること無し。云何が一乘を說くを得ん。今大乘に依りて解すれば、未だ菩薩道を專修せざるを悉く未定根性と名くるが故に、一切の聲聞は皆轉じて大と爲すの義有り。此の如き大小乘の人を安立して大乘を修行せしむ。

論曰　此の如き五業に於て、應に知るべし諸佛如來は共に此の業を同じくす。

釋曰　世間の衆生は五業に於て同じからず。諸佛の五業には不同の義無し。

論曰　三には非方便を行ずるを救濟するを業と爲す。諸の外道等の加行の方便に非ざるを降伏して、佛の正教に安立するが故に、

釋曰　此れ威德力を明かす。諸の外道は多く方便に非ざるを行ず。若しは常見外道は多く苦行を行ず、未來の生有ることを計するを以ての故に。斷見外道は多く樂行を行ず、未來の生無きことを計するを以ての故に。或は自在天を思惟して道と爲し、或は我を思惟して道と爲し、或は自性を思惟して道と爲し、或は我と自性との中間を思惟して道と爲す。此の如き等は悉く方便行に非ず。如來は通慧を以て導きて其の高慢を降伏し、記心を以て導きて其の不信を降伏し、正教を以て導きて其の邪見を降伏す。既に降伏し已れば、其の根性に隨つて、三乘の正教の中に安立す。

論曰　四には身見を行ずるを救濟するを業と爲す。三界を過度せんが爲に、能く聖道の方便を顯導するが故に、

釋曰　此れ方便力を明かす。一切の三界の衆生は身見を離るること無し。身見とは若くは多物の成ずる所と爲る、體は是れ無常なるか故に身と名く。五陰等の和合して成ずる所なるが故に多物と名け。未有は有り、已有は滅す。故に無常と名く。外道は多に於て一と計し、無常に於て常と執し、是の一、是の常を、謂ひて我と爲す。此の見を破せんが爲に亦一に非ず常に非ず、故に身見と名く。若し身見を離るれば、則ち三界の集を過ぐることを得て三界の苦を度す。正教を說くを「顯」と名け、彼の三慧を生ずるを「導」と爲す。苦法忍、已去乃至阿羅漢果を「聖道」と名け、出家受戒より乃至世第一法を「聖道の方便」と爲す。顯導して方便を修して聖道を得しむ。又如來は衆生をして身見を離れ三界を出でしむ。此れ未だ是れ眞實の聖道にあらず、但是れ聖道の方便なり。先に顯導して此の方便の聖道を修せしむるは、眞實の聖道の緣由を得んが爲なり。

論曰　五には乘を救濟するを業と爲す。諸の菩薩の、偏へに別乘を行ぜんと欲するものと及び未だ

向に淨と說き、大樂に依りて一向に樂と說き、大常に依りて一向に無失と說き、大我し依りて一向に自在と說く。菩薩は若し如來の富樂を憶念すれば應に此の如く知るべし。

論曰　復次に諸佛の法界は、恒時に應に五業有るを見るべし。

釋曰　此の中には應に法身の業を明かすべし。而も「諸佛の法界」と言ふは、法身は、法界の五義を含むことを顯はさんと欲るが故に、轉じて法界と名く。五義とは、一には性の義、二我無きを以て性と爲す、一切の衆生は、此の性に過ぎざるが故に。二には因の義、一切の聖人の四念處等の法は此を緣じて生長するが故に。三には藏の義、一切の虛妄の法の隱覆する所にして、凡夫二乘の能く緣ずる所に非ざるが故に。四には眞實の義、世間の法を過ぐ、世間の法は或は自然に壞し、或は對治に由りて壞す、此の二壞を離るるが故に。五には甚深の義、若し此れと相應すれば、自性は淨善を成ずるが故に、若し外れて相應せざれば、自性は鷇を成ずるが故に。法身は法界の五義を含むに由り、諸の菩薩は應に法身は恒に五業と相應して、時として暫くも離るること無きを見るべし。

論曰　一には災橫を救濟するを業と爲す。唯盲・聾・狂等の疾惱災橫を能く滅除することを現ずるに由るが故に、

釋曰　此れ大悲力を明かす。若し定れる業報の衆生には、如來は中に於て則ち自在無し。此れ前に釋せるが如し。若し不定の業報にして、或は現に過失に在り、或は對治の業有るも、此の如き衆生は、若し佛の所に至れば、如來は作意し、及び作意せずして、皆能く此等の災橫を離れしむ。

論曰　二には惡道を救濟するを業と爲す。惡處より引き拔きて善處に安立するが故に、

釋曰　此れ正行力を明かす。如來は作意し及び作意せすして、一切の衆生は、若し佛の所に至れば、惡を息め善を行ぜざる無し。

水の爲に汚されさるは、法界の眞如の、世間に在りと雖も世間の法の爲に汚されざるに譬ふ。又蓮花の性は自ら開發するは、法界の眞如の性の自ら開發するに譬ふ。衆生若し證すれば皆覺悟を得。又蓮花は群蜂の採る所と爲るは、法界の眞如の、衆聖の用ゆる所と爲るに譬ふ。又蓮花に四德有り。一に香、二に淨、三に柔軟、四に可愛なり。法界の眞如に總じて四德有り、謂く常樂我淨なるに譬ふ。衆花の中に於て最大にして最勝なるか故に名けて王と爲すは、法界の眞如の、一切法の中に於て最勝なるに譬ふ。此の花は、無量の色相の功德聚の莊嚴する所にして、能く一切法の爲に依止と作るは、法界の眞如の無量の出世の功德聚の莊嚴する所にして、此の法界の眞如は、能く淨土の爲に依止と作るに譬ふ。復次に如來の願力の感ずる所の寶蓮花は、諸花の中に於て最大にして最勝なるか故に王と名く。無量の色相等の功德聚の莊嚴する所にして、能く淨土の爲に依止と作る。此の句は、依止の圓淨を明かす。淨土の中には、何の法か是れ如來の住處なりや。

論曰　大寶重閣に、如來は此の中に於て住す、

釋曰　此れ別に如來の住所を明かす。世間の器世界を受用するか如きは、無量の過失有り。若し淨土を受用すれば何の功德有りや、

論曰　此の如きの淨土の淸淨は色相の圓淨・形貌・量處・因果・主助・眷屬・持業・利益・無怖畏・住處・路・乘・門・依止の圓淨を顯はす。前の文句に由り、此の如き等の圓淨は皆顯現することを得。復次に此の如き淨土の淸淨を受用することは、一向に淨、一向に樂、一向に無失、一向に自在なり。

釋曰　恒に雜穢無きが故に、一向に淨と言ひ、但だ妙樂のみを受けて苦無く捨無きか故に、一向に樂と言ひ、唯だ是れ實善にして惡及び無記無きが故に、一向に無失なりと言ひ、一切の事は悉く外緣を觀ぜず、皆自心に由りて成ずるが故に、一向に自在なりと名く。復次に大淨に依りて一

釋曰　淨土の中には、陰魔・煩惱魔・死魔・天魔無きが故に、一切の怖畏を離る。此の句は、怖畏無き圓淨を明かす。若し淨土の中に、一切の怖畏無ければ、六根の受用する所の法を悉く具有するや不や。

論曰　勝れたる一切の莊嚴は、如來の莊嚴の所依處にして、

釋曰　唯是れ一切の受用する所の具有るのみにあらず最勝にして無等なり。是れ如來の福德智慧の行の圓滿せる因の感ずる所にして、如來の勝報は此の處に依止す。此の故に最勝なり。此の句は作處の圓淨を明かす。淨土の中には、何の法を以て出入の路と爲すや。

論曰　大なる念慧行にて出離す。

釋曰　大乘の正法を大法と名く。大法の中に於て聞慧を念と名け、思慧を慧と名け、修慧を行と名く。此の三は、淨土に於て是れ往還の道なり。故に出離と名く。此の句は、路の圓淨を明かす。若し此の路有れば何の法に乘ると爲すや。

論曰　大なる奢摩他、毘鉢舍那に乘じ、

釋曰　大乘の中、五百定を奢摩他と名け、如理如量の智を毘鉢舍那と名く。此の二を以て乘と爲す。此の句は、乘の圓淨を明かす。若し此の乘有れば何の門より入るや。

論曰　大空と無相と無願との解脫門を入處とす、

釋曰　大乘の中に於て、三解脫門は一體なり。無性に由るが故に空、空の故に無相、無相の故に無願なり。若し此の門に至れば淨土に入ることを得。此の句は、門の圓淨を明かす。世間の世界には地輪は水輪に依り、水輪は風輪に依る。淨土は何の法を依と爲すや。

論曰　無量の功德聚の莊嚴する所の大蓮花王を依止と爲す。

釋曰　大蓮花王を以て、大乘の顯はす所の法界の眞如に譬ふ。蓮花は泥水の中に在りと雖も、泥

論曰　菩薩の安樂の住處、

釋曰　自ら正教を受行し、他をして正教を受行せしむるを安樂と名く。菩薩は淨土に於て佛を助け道を助く。此の二事を具するが故に、安樂の住處と名く。此の句は助の圓淨を明かす。

論曰　無量の天・龍・夜叉・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽人・非人等の行ずる所、

釋曰　淨土の中には實に此の衆生無し。空ならざらしめんと欲するが故に、佛は此の如きの雜類を化作す。此の句は眷屬の圓淨を明かす。若し此の如き衆生、諸の菩薩等有らは、皆何をか食する所なりや。

論曰　大法味の喜樂の持する所、

釋曰　大乘十二部經を大法と名け、眞如解脫等を味と爲す。此の法味を緣じて諸の菩薩の喜樂を生じ、諸の菩薩の五分法身を長養す。此の句は持の圓淨を明かす。此の法味を飡して何等の業を作すや。

論曰　一切衆生の、一切の利益の事を用と爲し、

釋曰　凡夫、三乘を一切衆生と名く。其の能くする所に隨ひて爲に正教を說き、說の如く修行して四惡道を離れ、生死を離れ、二乘の自愛の行を離れしむるを一切の利益と名く。此の句は、業の圓淨を明かす。若し菩薩は、衆生に於て此の如きの業を行せは、能行及び行處に、何の利益を得るや。

論曰　一切の煩惱と災橫とを離るる所、

釋曰　三界の集諦を一切の煩惱と名け、三界の苦諦を一切の災橫と名く。此の二は悉く能行と行處とを離る。此の句は、利益の圓淨を明かす。若し此の如き法を離るれば餘の怖畏有りや不や。

論曰　一切の魔の行ずる所の處に非ず、

成立と言ふ。此の句は形貌の圓淨を明かす。

論曰　大域の邊際は度量す可からず。

釋曰　徑度を度と爲し、周圍を量と爲す。一一の佛の淨土の邊際は、凡夫の由旬等の數を以て能く度量する所に非ず。此の句は量の圓淨を明かす。

論曰　三界の行處を出過す。

釋曰　三界の集諦を行と爲し、三界の苦諦を處と爲す。淨土は三界の苦集の攝する所に非ず。故に三界の行處を出過すと言ふ。此の句は處の圓淨を明かす。若し苦集諦の攝に非ざれば、何の因を以て生ずることを得、何の法を以て體と爲すや。

論曰　出出世の善法の功能の生ずる所、

釋曰　二乘の善を出世と名け、八地より已上乃至佛地を出出世と名く。出世の法は世法の對治と爲り、出出世の法は出世の法の對治と爲る。功能は四緣を以て相と爲す。出出世の善法の功能より此の淨土を生起するが故に、集諦を以て因と爲さず。此の句は因の圓淨を明かす。何をか出出世の善法と爲すや。無分別智と無分別後智との生ずる所の善根を出出世の善法と名く。

論曰　最も淸淨にして自在なる唯識を相と爲す。

釋曰　菩薩及び如來の唯識の智は、無相無功用なるが故に淸淨と言ひ、一切の障を離れて退失無きが故に自在と言ふ。此の唯識の智を淨土の體と爲すが故に、苦諦を以て體と爲さず。此の句は果の圓淨を明かす。

論曰　如來の鎭する所、

釋曰　此の如き相の淨土に、如來は恒に其の中に居る。最も上首と爲るが故に鎭すと言ふ。此の句は主の圓淨を明かす。

卷の第十五

釋智差別勝相第十の三

論曰　復次に諸佛如來の淨土は清淨なり。其の相云何んか應に知るべきや。

釋曰　前に七念の中に於て、如來の大富樂は卽ち是れ淨土なることを明かせり。前には但だ八人の不可得と二人の可得とを說くのみにて、未だ不可得及び可得の所在の處を明かさず。今此の處を顯示せんと欲するが故に、淨土の相を問ふ。

論曰　百千經の菩薩藏緣起の中に說いて言へるが如し。

釋曰　總じて諸經を擧ぐるが故に、言へるが如しと稱す。菩薩藏の中に別の淨土經有り。經に百千偈有り、故に百千經と名く。又華嚴經に百千偈有り、故に百千經と名く。此の經の緣起の中に於て廣く淨土の相を說けり。此の如き淨土の文句は何の功德を顯はすや。

論曰　佛世尊は周遍せる光明の七寶にて莊嚴せる處に在り。

釋曰　一に金、二に銀、三に琉璃、四に摩娑羅、五に阿輸摩竭婆、六に因陀羅尼羅、七に盧嬉胝柯目多。此の一一の寶の光明は皆一切處に周遍す。此の處は七寶を以て莊嚴と爲す。佛は其の中に住す。

論曰　能く大光明を放ちて、普く無量の世界を照し。

釋曰　此れ七寶の光明の照す所の處を明かし、周遍の義を釋す。此の兩句は色相圓淨を明かす。

論曰　無量の妙飾界の處は、各各に成立し。

釋曰　此の莊嚴は希有にして無等なるか故に妙飾と言ひ、衆多の妙飾有るが故に無量と言ふ。遊行する所の地を界と爲し、居る所の地を處と爲す。一一の界の一一の處に、莊嚴具足するが故に

が故に、無功用と言ふ。

(論曰 能く衆生に大法樂を施す。)

釋曰 淨土の自在を得るに由り、大人有りて能く大法を受く。自の如理の行を弘むること得、他をして如理に行ぜしむ、故に法樂と名く。

論曰

遍行するも礙有ること無く 平等に多人を利す、 一切は一切の佛を 智人は此を縁じて念ず。

(論曰 遍行するも礙有ること無く。)

釋曰 八世法に於て、如來の後智は恒に此の事を分別して、中に於て憂喜の心無きが故に、遍行して無礙なり。若し礙有れば則ち苦有り。礙無きが故に安樂なり。諸佛は六塵を行ずと雖も、言說に過ぎたり、有無の執を離れたるを以ての故に。

(論曰 平等に多人を利す。)

釋曰 凡夫、二乘、新行の菩薩及び深行の菩薩を多人と名く。如來は能く平等に利益す。大富行と善道行と安樂行と自利行と二利行とを說く。此は卽ち是れ大事用有るなり。

(論曰 一切は一切の佛を、智人は此を縁じて念ず。)

釋曰 一切とは卽ち智人に目く、謂ゆる諸の菩薩なり。諸の菩薩は此の七相を縁じて一切の佛の法身を念ず。

論曰　七に如來は世間に於て大事用有り、

釋曰　如來、出世し化身を以て成道し、乃至般涅槃するを大事と名け。此の身の作す所の衆生利益の事を用と名く。

論曰　無上菩提及び大般涅槃を現成するに由り、未だ成熟せざる衆生を成熟せしめ、已に成熟せる衆生を解脫せしむるが故に。

釋曰　未だ下種せず及び未だ成熟せざる衆生をして下種し成熟せしめんが爲の故に、現じて菩提を成し。已に成熟するも未だ解脫せざる衆生をして解脫せしめんが爲の故に、般涅槃を現ず。

論曰　此の中、偈を說く、

釋曰　此の中に二偈を說き、重ねて七相を明かし、法身の七種の圓德を顯はす。

論曰

如來の心に隨屬する　圓德は常にして無失なり　無功用にして能く　衆生に大法樂を施す。

(**論曰**　如來の心に隨屬する圓德は。)

釋曰　諸佛の圓德は、謂ゆる六通等なり。但た自心に屬して外緣に關せず。

(**論曰**　常にして。)

釋曰　此の圓德は常住の法身を依とするに由り、眞實の善を性と爲すが故に、衆德は皆常なり。

(**論曰**　無失なり。)

釋曰　法身は一切の障を離るるに由り、所依無失なり。故に能依も亦無失なり。

(**論曰**　無功用にして。)

釋曰　修因及び本願の成熟に由り、作す所の佛事は皆自然に成す。倦むこと無く、難きこと無き

釋曰　大富は外財に由り、大樂は正法に由る。

論曰　一切の佛土は最も微妙清淨にして、富樂と爲すが故に。

釋曰　淨土の中に八の不可得と二の可得と有り。故に最も微妙清淨なりと名く。八の不可得とは、一に外道。二に苦有る衆生。三に生姓家富等の差別。四に惡行の人。五に破戒の人。六に惡道。七に下乘。八に下意下行の諸菩薩なり。二の可得とは一には最上品の意行の諸菩薩と、二には諸の如來の世に顯現すとなり。所住を最微清淨と爲し。能住を最妙清淨と爲す。

論曰　六に如來は最も無染著なり。

釋曰　上心の惑を染と爲し、隨眠の惑を著と爲す。又惑障に約するを染と爲し、智障を著と爲す。又煩惱に二相有り。一に喜を以て相と爲し、二に憂を以て相と爲す。欲、慢、見等は喜を以て相と爲し、瞋、疑、無明等は憂を以て相と爲す。喜相の惑を染と爲し、憂相の惑を著と爲す。二惑を皆滅し盡くすが故に無染著と名く。

論曰　世間に出現するも一切の世法の染する所に非ず。塵の空を染むること能はざるが如くなるか故に。

釋曰　因を立つるが故に出世と名け、果成ずるが故に世に現ずと名く。又自利圓滿の故に出世と名け、利他圓滿の故に世に現ずと名く。或は佛は出世するも未だ世に現ぜざるは、已に成道して未だ法輪を轉ぜざるが如し。若し法輪を轉ずれば、世間は方に能く是れ佛なり、是れ一切智なりと了別す。世間の了別する所なるか故に世に現ずと名く。如來は衣食等の四緣を受用すと雖も、衆生の善根を生長せしめんが爲にして、自身を資益せんが爲に非ず。此の緣の中に於て憂喜を生ぜず、故に世法の染汚する所と爲らず。空は非有を以て體と爲す。體無礙なるか故に物有るも染する所と爲らず。如來も亦爾り。

論曰　二に如來の身は常住なり。

釋曰　十種の因を以て共に法身及び衆德の常住を證す。三因は法身を證し、七因は餘の身を證す。三因は法身を證すとは論の如し。

論曰　眞如は無間に一切の垢を解脫するに由るが故に、

釋曰　此れ卽ち三因の中の一因なり。眞如とは道後の眞如を謂ふ。無間位とは卽ち佛の金剛心なり。能く最後の微細の無明を滅し、及び生死の苦集の二諦有ること無きが故に、一切の垢を解脫すと言ふ。此の無垢淸淨の眞如は是れ常住の法なり。諸佛は此を以て身と爲すが故に、諸佛の身は常住なり。此の身常住にして、此の身に依りて衆德有るに由るが故に、衆德も亦常住なり。此の常住は眞實性を以て相と爲す。

論曰　三に如來は最も無失なり、一切の惑障及び智障を永く相ひ離るるが故に。

釋曰　一切の有失無失の衆生の中にて、如來は最も無失なり。過失の因緣已に滅盡するに由るが故に。現在已に滅し、未來に生ぜず。故に永く相ひ離ると言ふ。

論曰　四に一切の如來の事は無功用にして成ず。

釋曰　作意を功用と名く。三世を緣じて起り、謂へらく、我れ已に作し、正に作し、當に作すべしと。此の如き作意を離るるを無功用と名く。但だ本願の力に由りて、作さんと欲する所の事は自然に皆成ず。

論曰　功用に由らずして恒に正事を起して永く捨てざるが故に。

釋曰　若し功用に由りて正事有れば則ち起不起あり。功用に由らざるを以て、是の故に恒に起る。本願の無盡に由るが故に永く捨てず。衆生盡きざるを以ての故に、本願盡きず。

論曰　五に如來は大富樂の位なり、

礙有り邊有るに同じからざるが故に、如來の通慧は自在無等なり。

論曰　此の中に偈を說く、

釋曰　若し諸佛は一切の法に於て無等の自在有れば、如何が一切の衆生は悉く般涅槃せざる。此の難を釋せんが爲に、是の故に偈を說く。此の偈は此れ此の因に因由するが故に彼れ般涅槃せざることを顯はさんが爲なり。

論曰

　被障と因の具はらざると　一切の衆生界の　二種の定の中に住するとには　諸佛に自在無し。

（**論曰**　被障と因の具はらざると。）

釋曰　一切の衆生は若し業等の諸の障有れば、諸佛は此の位の中に於て彼をして般涅槃せしむること能はず。通慧は被障に由るが故に自在なることを得ず。若し衆生に涅槃の性無ければ、因具はらずと名く。諸佛は此の位の中に於て、彼をして般涅槃せしむること能はず。通慧も亦自在無し。涅槃の性無しとは、生死に貪著して大乘を信樂せざるを謂ふ。

（**論曰**　一切の衆生界の　二種の定の中に住するとには、諸佛に自在無し。）

釋曰　衆生界とは、四大と空と識との六界を謂ふ。是れ實なり。此の六界に依りて衆生を假立す。衆生は是れ假名なり。六道の差別有るが故に一切と言ふ。此の如き衆生は若し二種の[一〇]定の中に在れば、一は所作業の定、二は果報を受くる定なり。作業の定とは謂く凡夫の作す所の十惡等なり。業決定して應に四惡道の報を感ずべし。果報の定とは、謂く極鈍根なる顚狂の衆生と及び正に四惡道の報を受くるとなり。如來は此の衆生に於て亦自在無し。何を以ての故に[一一]外緣無きを以ての故なり。

【一〇】此に定とは決定せることの意なり。

【一一】外緣とは善知識の敎導をいふ。

論曰　諸の菩薩は法身を縁じて佛を憶念す。此の念は幾くの相を縁ずるや。

釋曰　法身に無量の甚深の道理有り。若し法身を縁ずれば應に幾くの相を縁ずべきや。

論曰　若し略して說かば、諸の菩薩は法身に依りて念佛を修習するに七種の相有り。

釋曰　此の七相は是れ法身の正用にして、卽ち是れ法身の圓德なり。念佛は須らく此の圓德を縁ずべきを顯はさんが爲の故に、略して七相を說く。一には諸佛の圓德は自心に屬す、六通の自在に由るが故に。二には此の德は常住なり、是れ眞實の善なるか故に。三には最も過失無し、習氣を滅し盡くすが故に。四には惓むこと無く難きこと無し、無功用なるか故に。五には大法樂を受く、諸の土の淸淨なるに由るが故に。六には苦無く難無し、染障無きが故に。七には大事用有り、平等に他を利するか故に。若し菩薩は此の七種の圓德を憶念すれば、則ち能く法身に通達す。法身に依りて念佛を修習することを須ふるは、一切の觀行の門は皆眞如を縁じて成ずるを得るを學することを顯はさんが爲なり。若し眞如を縁ぜざれば則ち觀行は淸淨ならず。

論曰　何等をか七と爲す。一には諸佛は、一切法に於て、無等の自在に至る。

釋曰　三世の諸佛は六通の境に於て最極の自在を得。同類の人は礙を爲すこと能はず。下類の人の能く及ぶ所に非ず。有心無心の位の中に在りて恒に廢せず。修習し成熟するを以ての故に、故に自在と名く。聲聞、獨覺、菩薩の得る所に非ず。又世間に於て譬ふ可き無し、故に無等と名く。

論曰　此の如く念佛を修習す。

釋曰　此の念をして法身と一を成ぜしむ、故に修習と名く。

論曰　一切の世界に於て、無礙なる無邊の六通智を得るに至るが故に。

釋曰　諸佛は六通を成就し、十方世界に於て能く沮損すること無く、限極有ること無し。二乘の

事に由るが故に、修道究竟して習氣滅盡することを得、及び圓智を證す。

論曰 諸惑は覺分を成じ　生死は涅槃と爲り　大方便を成ずることを得　故に佛は難思議なり。

(**論曰** 諸惑は覺分を成ず。)

釋曰 此の下は第十二の不可思議甚深を明かす。若し惑を留むるに由るが故に惑盡くることを得は、二乘の集諦は菩薩の覺分を成ず。二乘の覺分は能く彼の集諦を滅するが如く、菩薩は彼の集諦を用ひて心惑を滅するを以ての故に覺分を成ず。

(**論曰** 生死は涅槃と爲り。)

釋曰 若し集諦は是れ覺分ならば、苦諦は卽ち是れ涅槃なり。何を以ての故に。諸の菩薩は生死に在りて染汚せられず。自他の兩利を起して皆圓滿するを得。譬へば二乘は有餘涅槃に在りて、二惑の爲に染汚せられずして能く自利を得るが如し。

(**論曰** 大方便を成ずることを得　故に佛は難思議なり。)

釋曰 因位に在りて大方便を得るは、謂く般若と大悲となり。果位に在りて大方便を得るは、謂く三身なり。法身は是れ自利の方便、餘の二身は是れ利他の方便なり。是の故に如來は不可思議なり。

論曰 此の義に由るが故に十二種の甚深とは、應に知るべし、謂ゆる生と不住と業と住との甚深、安立と數と業との甚深、正覺の甚深、離欲の甚深、陰滅の甚深、成熟の甚深、顯現の甚深、菩提般涅槃顯現の甚深、住の甚深、顯現自體の甚深、滅惑の甚深、不可思議の甚深なり。

釋曰 佛に三身有り。諸の菩薩は若し佛を念ずれば應に何の身を緣ずべきや。應に法身を緣ずべし。

釋曰　此の下の一偈は第十の顯現自體甚深を明かす。如來の後智は善惡無記の法の中に於て、遍滿して恒に行ず。

（**論曰**　亦一處にも行ぜず）

釋曰。無分別智に由れば智を離れたる境界にして分別す可からず、故に一處にも行ずること無し。復次に化身に由れば處として行ぜざる無し。法身と應身とに由れば行ずる處有ること無し。

（**論曰**　一切の生に於て現ずるも、六根の境界に非ず）

釋曰　諸佛如來は化身に由りて、一切衆生の中に於て顯現して相を具す。諸佛は化身に由りて、乃至地獄道等の衆生にも亦現ず。彼の受生に在りて彼を化度せんが爲の故なり。諸佛は似の變化の性を[九]示現するに由り、彼の衆生は見ると雖も了別すること能はずして、謂へらく是れ已と同類なりと。故に佛の化身は地獄等の衆生の六根の境界に非ず。

論曰

諸惑を已に滅伏して　毒の呪に害せらるゝが如し　惑を留め惑盡くるに至り　佛は一切智を證す。

（**論曰**　諸惑を已に滅伏して　毒の呪に害せらるゝが如し）

釋曰　此の下の一偈は第十一の滅惑甚深を明かす。諸惑とは謂く見修の煩惱なり。菩薩地の中に於て、先に滅盡せり。餘心の煩惱は復未だ滅せずと雖も、智念に由りて伏せられ、其の功用を廢す。譬へば衆の毒の、呪の力に害せられて復本の能無きが如し。心惑も亦然り、智念に守られ、復二惑の染汚を生ずること能はず。

（**論曰**　惑を留め惑盡くるに至り　佛は一切智を證す）

釋曰　諸の菩薩は隨眠の惑を留めて助道分と爲す。二乘の速かに般涅槃するに同じからず。此の

【九】示現は原文には不現となすも意通ぜざるが故に示現と改む。

じ、有る處には般涅槃を現ず。譬へば火性の有る處には然え、有る處には滅するが如し。諸佛も亦爾り。諸の衆生にして已に成熟するもの有れば、如來は彼に於て般涅槃を現ず。未だ成熟せざるに於ては、正覺を得ることを現ず。彼をして成熟し及び解脱を得しめんが爲の故なり。譬へば火性は種類に由るに是れ一なるが如く、法身も亦爾り。眞如の性に由るに是れ一なり。

(**論曰** 此の二は實に有ならず　諸佛は常住なるが故に)

釋曰 菩提と般涅槃とを二と爲す。但だ他心を變異し、他をして二體と謂はしむるのみ。實には有ならず。如來の法身は常住にして前後無きに由るが故に。

論曰

如來は惡事と　人道と及び惡道とに於て　非梵行の法に於て　第一の住と我とに住す。

釋曰 此の一偈は第九の住甚深を明かす。諸佛如來は最勝の住に住し、最勝の我に住す。諸佛は若し住すれば此の二處を離れず、或は最勝の住に住し、或は最勝の我に住す。「惡事」とは一切の不善の法を謂ふ。如來は不善の法に於て恒に最勝の住に住す。最勝の住とは謂ゆる眞空定にして、卽ち是れ聖住なり。衆生にして、若くは人道の中に在り、若くは惡道の中に在れば、如來は彼の衆生を緣じて住し、或は第四定に由る、卽ち是れ天住にして、謂ゆる最勝の住なり。或は大悲に由る、卽ち是れ梵住にして、謂ゆる最勝の住なり。「非梵行の法に於て」とは、六塵の染著を謂ふ。此の中には佛は最勝の我に住す。最勝の我は卽ち法界の清淨なり。如來は恒に六塵の空を觀じて體と爲し境と爲す、卽ち是れ佛住なり。

論曰

佛は一切處に行じ　亦一處にも行ぜず　一切の生に於て現ずるも　六根の境界に非ず。

(**論曰** 佛は一切處に行じ)

論曰

失に由りて尊の現ぜざることは　月の破器に於けるが如し　諸の世間に遍滿するは　法光の日の如きに由る。

(**論曰**　失に由りて尊の現ぜざることは、月の破器に於けるが如し)

釋曰　此の下の一偈は第七の顯現甚深を明かす。諸佛は世間に於て顯現せず、而も世間は諸佛の身は常住なりと說く。若し身常住ならば、云何が顯現せざる。譬へば破器の中に於て、水の住することを得ざるが如し。水の住せざるに由るが故に、破器の中に於て實に月有るも顯現することを得ず。此の如く諸の衆生には奢摩他の軟滑の相續無く、但だ過失の相續有るのみ。彼に於ては實に諸佛有るも亦顯現せず。水は奢摩他の軟滑性に譬ふるが故に。若し佛顯現せざれば佛無かる可きや。

(**論曰**　諸の世間に遍滿するは　法光の日の如きに由る)

釋曰　若し諸佛は過失有る衆生の見る所に非ざるに於ても、亦恒に諸佛の正事を作し、三乘十二部經を說くこと、猶光明の如し。定んで是れ諸佛は應に下種し成熟し解脫する等の諸の利益の事を作すべし。世間の中の生盲人の如きは、日を見ずと雖も、日光は恒に一切の色像を照す。目有る者をして見ることを得しめんが爲の故なり。

論曰

或は現じて正覺を得　或は涅槃して火の如し　此の二は實に有ならず　諸佛は常住なるが故に。

(**論曰**　或は現じて正覺を得　或は涅槃して火の如し)

釋曰　此の下の一偈は第八の菩提般涅槃甚深を明かす。諸佛は有る處には正覺を得ることを現

釋曰　此の下の一偈は第五の滅陰甚深を明かす。諸佛は已に色等の五取陰を過ぐ、五陰を得ざるに由り、陰の法如の中に於て住す。

(**論曰**　陰と一異に非ず)

釋曰　諸佛は已に陰の分別を捨てゝ、依他性と陰と一に非ず、異に非ず。何を以ての故に、佛の住する所の五陰の眞如は、是れ分別依他の陰家の法なるが故に、異ならず。此の義に由りて一なりと雖も異ならざるに非ず。眞如は是れ清淨の境界なるも、陰は清淨の境界に非らざるが故に一に非ず。

(**論曰**　陰を捨てずして涅槃す)

釋曰　陰と眞如とは永く相應するに由り、捨離の義無し。故に如來の般涅槃は最勝なり。

論曰

諸佛の事相、雜はること　猶大海の水の如し　我れ已に正しく應に　他の事を作すと是の思ひ無し。

釋曰　此の下の一偈は第六の成熟甚深を明かす。諸佛は衆生に於て利益の事を共に同じくす。譬へば衆流の大海に入れば、同じく龜魚等の爲に受用せらるが如し。此の如く諸佛は共に法界に入り、眞如平等にして利益の事を作し、衆生を成熟す。

(**論曰**　諸佛の事相、雜はること　猶大海の水の如し。)

釋曰

(**論曰**　我れ已に正しく應に　他の事を作すと是の思ひ無し)

釋曰　我れ已に他の利益の事を作し。正しく作し、當に作すべしと。三世の中に於て並に作意の思量無し。作意せずと雖も、利益の事は、法の如く成ずることを得。譬へば摩尼寶及び天鼓の作意有ること無くして而も所作の事成ずるが如し。

（論曰　欲に依りて出離を得）

釋曰　諸の菩薩は、永く上心の欲を除き、但だ隨眠の欲のみを留むるに由るが故に、諸の菩薩は出離して成佛することを得。何を以ての故に、若し此の隨眠の欲を留めざれば則ち二乘の涅槃と同じ。若し上心の欲を除かざれば則ち凡夫と異ならず。無上依經に說くが如し。菩薩は是の念を作さく、諸惑は本來衆生の自性清淨の心に入らず。諸惑は唯是れ客塵にして自の分別の起す所なり。我れ今能有り。諸の衆生の客塵煩惱を除かんが爲に、能く如理の正敎を說く。此の念に由りて菩薩は下劣心を起さず。菩薩は此の念に由りて、衆生に於て貴敬の心を生ず。諸の菩薩は復是の念を作さく、諸惑に力無く、能無し、何を以ての故に、諸惑には眞實の依止無く、但だ虛妄に諸惑を分別するのみ。如理なる正思惟の所觀には、更に乖違を起さず。是の故に我等は應に此の如きの觀を作すべし。此の觀に由りて諸惡は更に染著を生ぜず。若し諸惑復染著すること無ければ、是を最善と爲す。是れ染著に非ず。若し我れ惑の染著を受くれば、我れ云何んぞ能く衆生の煩惱の繫縛を解かんが爲に如理なる正敎を說かんや。此の惑は能く生死を相續して善根と相應し、衆生を成熟せしむ。是の故に我れ今應に此の惑を攝留すべし。

（論曰　已に欲は無欲なることを知る　故に欲の法如に入る）

釋曰　菩薩は欲は是れ分別性なるが故に欲は有にあらずと見る。欲の無相の性は卽ち是れ欲法の眞如なり。菩薩は欲の有にあらざるを知り、此の眞如に入ることを得るが故に、欲に於て出離を得。

論曰

諸佛は五陰を過ぎ　五陰の中に於て住し　陰と一異に非ず　陰を捨てずして涅槃す。

（論曰　諸佛は五陰を過ぎ　五陰の中に於て住す）

不有の所顯なり。

(論曰　一法として能く覺するもの無く)

釋曰　此の下の一偈は第三の正覺甚深を明かす。人法の二は有に非ず。所覺既に無きが故に能覺も亦無し。

(論曰　一切覺せざるもの無し)

釋曰　諸佛は假名に由るが故に、是れ佛に非ざる無し。是の故に一として覺に非ざるもの無し。此の法を覺すること如何ん。

(論曰　一一の念に無量にして)

釋曰　一一の刹那に無量の諸佛は眞如を正覺す。若し爾らば諸佛と眞如と一と爲すや、異と爲すや。若し一ならば則ち無覺なり、若し異ならば則ち眞如無けん。

(論曰　有不有の所顯なり)

釋曰　一切の法を有不有と名く。謂ゆる一切の法は空なり。諸佛は是れ諸法の空の所顯なり。是の故に能覺と說くべからず、不覺と說くべからず。

論曰

欲も無く、欲を離るゝことも無し　欲に依りて出離を得　已に欲は無欲なることを知る

故に欲の法如に入る。

(論曰　欲も無く、欲を離るゝことも無し。)

釋曰　此の下の一偈は第四の離欲甚深を明かす。欲は有にあらざるに由るが故に如來は無欲なり。本より欲無きが故に亦欲を離るゝことも無し。若し欲是れ有ならば欲を離るゝこと有るべし、欲既に本より無きが故に欲を離るゝこと無し。

に住することを得るを顯はす。施主の淨信を因と爲す。功德善根を生長せんが爲の故なり。此の食は如來の食事と作らず、如來の食する時、諸天は爲に受けて諸の衆生に施す。是れ如來の意の許す所なるが故に、衆生は此の食に由りて當に成佛を得べし。衆生をして成佛を得しめんが爲の故に、如來は手を以て食に觸るゝことを示現す。此の如き等の義は悉く甚深なり。

論曰　無異にして亦無量なり　無數量なるも一事なり　最堅と不堅の業と　無上とは三身に應ず。

(論曰　無異にして亦無量なり)

釋曰　此の下の一偈は第二の甚深を明かす。此の甚深の中に復三種の甚深有り。一に安立、二に數、三には業なり。此の句は安立の甚深を明かす。諸佛の法身は差別無きが故に無異なり。衆多の依止の法は此の法身を證得するが故に無量なり。

(論曰　無數量なるも一事なり)

釋曰　此の句は數の甚深を明かす。三乘の衆生は數量有ること無く、中に於て諸佛の一事なり。

(論曰　最堅と不堅の業と　無上とは三身に應ず。)

釋曰　此の兩句は業の甚深を明かす。諸佛に三身の相應有り。實體は常住なるが故に無上と稱す。應身に由りて如來の業は堅固にして改轉す可らず。眞實なるを以ての故なり。化身に由りて如來の業は堅固ならず。權に由り方便を以て二乘を引出し、後に應身を以て、彼を敎へて菩薩道を修せしむるが故なり。

論曰　一法として能く覺するもの無く　一切、覺せざるもの無し　一一の念に無量にして　有

所作已に辦ずるが故に、九には應作未だ辦ぜざるが故に、十には一切法の中に自在を熟修するに由るが故なり。

（論曰　第四食を食と爲す）

釋曰　此の句は住甚深を明かす。亦十因有り、證と爲す。一には[八]諸佛も亦四食を資することを示す、以て自身は食に由りて住することを顯すが故に。二には衆生の善根を長ぜんが爲の故に。三には諸人に同じきことを顯はさんが爲の故に。四には弟子をして、法の如く四種の命緣を受用することを學ばしめんと欲するが故に。五には他をして知足行を學ばしめんと欲するが故に。六には他をして正勤の方便を起さしめんが故に。七には他の善根を成熟せんが爲の故に。八には自身の無染著を顯はさんと欲するが故に。九には正法恭敬の心を治せんが爲の故に。十には本願の生を圓滿せんが爲の故なり。若し如來は此の義に由るが故に食すれば、四食の中に於ては是れ何の食なりや。是れ第四食なり。四食とは、一には非清淨の依止の住する食、謂ゆる段等の四食にして、欲界の衆生身をして相續して住することを得しむ。欲界の衆生は見修の二縛を具するが故に、依止は清淨にあらず。此の依止は四食に由りて住することを得、故に非清淨の依止の住する食と名く。二に淨不淨の依止の住する食、謂ゆる業識觸の三食にして、色無色界の衆生身をして相續して住することを得しむ。此の二界の衆生は已に下界の惑を離るゝも、未だ自地及び上界の惑を離れざるが故に、依止も亦淨不淨なり。此の依止は三食に由りて住することを得るが故に、淨不淨の依止の住する食と名く。三に清淨依止の住する食、謂ゆる段等の四食にして、聲聞緣覺の身をして相續して住することを得しむ。二乘の人は三界の惑を已に盡くすが故に依止清淨なり。此の依止は四食に由りて住することを得、故に清淨依止の住する食と名く。四に能顯依止の住する食、段等の四食は悉く是れ諸佛の食なり。何を以ての故に、諸佛は此の食に由るが故に、自身世

【八】此の句は原文には「示諸佛不資四食」とあるも意通じ難し、故に不の字を亦の字に改めて國譯せり。

論曰　佛は無生を以て生と爲し　無住を以て住と爲し　作事無功用にして　第四食を食と爲す。

(**論曰**　佛は無生を以て生と爲す)

釋曰　此の下の一偈は、第一の甚深を明かす。此の甚深の中復四種の甚深有り。一に生、二に不住、三に業、四に住なり。此の句は生の甚深を明かす。諸佛の受生は無生を相と爲す。十種の因有り、以て此の義を證す。一には無明と同相ならざるが故に、二には種種不同なるが故に、三には攝受自在の故に、四には住に於て自在なるが故に、五には捨に於て自在なるが故に、六には無二の相なるが故に、七には唯似の顯現なるが故に、八には幻化の譬に同じきが故に、九には無住處を住處と爲すが故に、十には能く大事を成就するが故なり。

(**論曰**　無住を以て住と爲す)

釋曰　此の句は不住甚深を明かす。諸佛は生死涅槃に於て悉く住する所無し。亦十種の因有り、以て此の義を證す。一には永く離るゝ所に非ざるが故に、二には滅不盡なるが故に、三には諸佛は非有の法なるに由るが故に、四には有爲の性に非ざるを知るに由るが故に、五には無所得無分別の故に、六には已に心を離るゝに由るが故に、七には心を得るに由るが故に、八には心平等なるに由るが故に、九には住の因は不可得なるが故に、十には不住の因は不可得なるが故なり。

(**論曰**　作事無功用にして)

釋曰　此の句は業甚深を明かす。亦十因有り、證と爲す。一には一切の礙滅するが故に、二には依止無きが故に、三には應作に無思なるが故に、四には作者心を作さざるが故に、五には業、運動に非ざるが故に、六には非有に於て無功用なるが故に、七には宿願の疾利に由るが故に、八には

する菩薩の境界に非ず。何を以ての故に、凡夫人は色等の諸法に於て此の如き性無く。我及び我所の性有りと執す。身見を滅離せる處の甘露界を信樂すること能はず。何に況んや能く正覺せる諸佛の境界の如來藏をや。二乘の人は常住最勝なる應修の中に於て、常住の相を倒修して、無常の相に遊戲す。樂我淨を修するも亦爾り。此の如き二乘の人は倒修に由りて、諸佛の法身の道を得ること能はず。中に於て遊戲するが故に、四德と相應する法身は其の境界に非ず。始修行の菩薩は如來藏の空の道理に迷ふて空解脫門を信樂し、滅に物有り以て空と爲すと計す。謂く諸法は先の時に是れ有にして、後則ち斷滅すれば卽ち是れ空なりと。復諸の菩薩有り、空相を得るに由りて空義を思擇す。謂く色等の法を離れて別に物有りて空と爲す。我れ今修行するは此の空を證せんが爲なり。當來は必ず應に得べしと。如來藏は有に非ず、無に非ざるを理と爲すが故に。散亂心の偏執する有無の境界に非ず。「人天等」とは卽ち前の四の衆生なり。法身は甚深にして其の境界に非ざるが故に、此の四種の衆生の迷惑の行を生起す。法身に於て此の四事有るが故に、自性身は三輪の中に於て人天の能く見るに非ず。

論曰 復次に如來の法身は甚深、最甚深なり。

釋曰 行じ難く、通達し難く、得難きを以ての故に、甚深最甚深なり。復次に言說を以て了達し難きが故に甚深と稱し、義理底無きが故に最甚深と稱す。復次に文義量り難きが故に甚深と稱し、品類一に非ざるが故に最甚深と稱す。

論曰 此の甚深は云何んが見る可きや。

釋曰 何の相を以て此の甚深を顯はし、見る可きことを得しむるや。

論曰 此の中、偈を說く、

釋曰 大乘の中に顯はす所の如く、法身の甚深の義には十二種有り。今偈を以て此の義を說く、

論曰

無盡等の功德と　相應して世に現じ　三輪に於て見易し　見難きは人天等なり。

(論曰　無盡等の功德と相應して世に現ず)

釋曰　此の兩句は法身の相應を明かす。無盡等に五種の功德有りて法身と相應す。一には淸淨を勝と爲し、二には一切を勝と爲し、三には無量を勝と爲し、四には難思を勝と爲し、五には無盡を勝と爲す。初地より七地に至り、嫉妬等の所對治の習氣の垢永く滅して生ぜざるを依止と爲すが故に、諸德の淸淨なるを勝と爲し、法身と相應す。第八地に於ては、無分別にして間缺無く、自然の無流道を依止と爲すが故に、諸佛の無流界の諸の功德に於て一切に勝と爲し、法身と相應す。第九地に於ては、數量す可からざる三摩提陀羅尼門の海は、能く無量の法智を攝して依止と爲すが故に、此の海より一一の功德を生じ、皆無量なるを勝と爲し、法身と相應す。第十地に於ては、一切の如來の有する所の秘密の處に、現前する證智を依止と爲すが故に、難思を勝と爲し、法身と相應す。次に此の後に佛地を證得する時、一切の障を解脫する智を依止と爲すが故に、諸の功德の無盡なるを勝と爲し、法身と相應す。無盡は卽ち是れ常住なり。常住を顯はさんが爲の故に世に現ずと言ふ。前の四の功德は諸地に約して其の差別を明かすと雖も、同じく果に至りて方に究竟するが故に悉く法身と相應す。

(論曰　三輪に於て、見易し　見難きは人天等なり)

釋曰　此の兩句は生起を明かす。三輪とは卽ち是れ三身なり。三身の中に於て應化の二身は見易く、法身は見難し。又法身は深行の菩薩、及び諸佛に於ては見易しと爲し、四種の衆生に於ては見難しと爲す。一には凡夫、二には聲聞、三には獨覺、四には始修行の菩薩なり。經に言へるが如し。如來藏は身見に墮する衆生の境界に非ず。顚倒に遊戲する衆生の境界に非ず。空に於て散亂

論曰　是の故に應に知るべし、諸佛の法身には無上の功德有り。
釋曰　大小乘の中に於て、他と共ならざるが故に上有ること無し。
論曰　此の中、偈を說く、
釋曰　此の六種の功德を顯はさんが爲に、是の故に偈を說く。
論曰
　　尊は眞如を成就し　　諸地を修して出離し　　他の無等の位に至り　　諸の衆生を解脫す。
（論曰　尊は眞如を成就し）
釋曰　此の句は法身の自性を明かす。眞如を成就すとは是れ無垢淸淨なり。若し道前と道中とに在れば、垢累未だ盡きざれば、未だ成就すと名くるを得ず。道後は垢累已に盡くるが故に成就すと名く。此の眞如を法身の自性と爲す。
（論曰　諸地を修して出離し）
釋曰。此の句は法身の因を明かす。因位に在りて眞如を修し、所顯の十地究竟して、皮、肉、心の三障を出離す。卽ち是れ智斷の二種の轉依なり。此の轉依に由るが故に法身を得。
（論曰　他の無等の位に至り）
釋曰　此の句は、法身の果を明かす。若し法身の果を證すれば、則ち淨我樂常の四德の果を得。淨は闡提と等しからず。我は外道と等しからず。樂は聲聞と等しからず。常は獨覺と等しからず。
（論曰　諸の衆生を解脫す。）
釋曰　此の句は法身の業を明かす。若し此の果を得れば衆生を解脫す。解脫に四種有り、謂ゆる善道と及び三乘とを安立するなり。業は凡夫と及び三乘の人を解脫せしむ。

我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は一切相の最勝の智を明かす。三身とは卽ち是れ三德なり。法身は是れ斷德。應身は是れ智德。化身は是れ恩德なり。三身に由るが故に、三德の相を具する果に至り。無上覺を得るに由るが故に最勝なり。衆生は一切法の中に於て疑を生ずるも、如來は悉く能く爲に除斷す。

論曰

無繫にして過失無く　麁濁無く住すること無く　諸法に於て無動にして　戲論無きに頂禮す。

釋曰　此の偈は如來の六種の清淨を顯はす。一には惑障清淨、卽ち無繫なり、惑等の三障を滅するに由るが故に。二は業障清淨、謂く過失無し、二十二の業障を滅するに由るが故に。三には報障清淨、謂く麁濁無し、七種の生死を除くに由るが故に。四には利益清淨、謂く住すること無し、生死涅槃に於て隔礙無きに由るが故に。五には自在清淨、謂く諸法に於て無動なり、功用に由らずして一切の法に於て意の如く能く現ずるが故に。六には無戲論清淨、言語、覺觀、思惟の境界を過ぐるに由るが故なり。前の三は自利を明かし、後の三は利他を明かす。故に「等」[七]と言ふは卽ち此の六清淨を等す。

論曰　諸佛の法身は、但だ恆に此の如き等の功德と相應するのみならず。復、餘の功德と相應す。

釋曰　前に明かす所の功德は大小乘に通ず。已に法身は此の功德と相應することを說けり。復、大乘の不共の功德有りて法身と相應す。

論曰　謂ゆる自性と因と果と業と相應と行事との功德と相應す。

釋曰　此の中、略して大乘の六種の功德は法身と相應することを說く。謂ゆる法身の自性、法身の因、法身の果、法身の業、法身の相應、法身の生起なり。

【七】等とは此の一段の偈文の前の長行の終に「一切相最勝智等の諸法と相應す」とあり、此の等の字を釋するなり。

るを「住」と爲す。衆生の三世の事は、皆是れ圓智の境なるが故に、能く三世を遍知す。眞如を體と爲すが故に「實の體」と名く。體實にして智圓かなるに由るが故に忘失無し。復次に佛は因位に在りて、十地を修するを「行」と爲し、佛を得るを「住」と爲す。圓智は能く此の自の因果の事に通達し、一切世を遍知する明は能く衆生の三世の事に通達す。此れ通明は能く自他を知ることを辨す。

論曰

日夜六時に　一切の衆生界を觀じ　大悲と相應して　利樂する意を我れ禮す。

釋曰　此の偈は大悲を明かす。佛は常に衆生を觀ず。而も「六時」と言ふは、物の爲に軌模を作して修道を示さんと欲するなり。自利利他の行有り。六時を以て利他の行を修し、六時に自利の行を修す。「衆生界」とは卽ち衆生の性なり。衆生の性は同じからず、或は惡に因りて善を生じ、或は善事に因りて善を生じ、或は怖畏の事に因りて善を生じ、或は歡喜の事に因りて善を生ず。大悲能く此の性に稱ひて化度するが故に、皆大悲と相應す。根及び欲樂も亦爾り。

論曰

行に由り及び得に由り　智に由り及び事に由り　一切の二乘に於て　無等なるに我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は十八不共法を明かす。行は是れ因、得は是れ果なり。智は是れ如理、如量の智、事は卽ち衆生を利益する事なり。十八不共法は四義を出でず。二乘と等しからざるが故に不共と名く。

論曰

三身の尊に由りて　具相の無上覺に至り　一切法に於て他の疑を生ずるを　能く除くに

論曰　衆に於て他の說を伏し　二惑は遠離する所なり　護無ければ忘失無く　衆を攝するものを我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は三念處を明かす。若し衆生有り、大集の中に於て如來の說法を聞き、毀謗を生ずるも、如來は亦瞋らず。若し能く信受するも、如來は亦愛せず。若くは毀無く信無きも、如來は亦捨てず。此の三處に於て常に大悲を起し、方便力を以て巧みに正法を說き、其をして理に入らしめ、大衆の中に於て能く此の如き衆生を降伏す。正法を說かんが爲に瞋欲の二惑を起さず。既に瞋欲無ければ、卽ち無明無きを知る。守護の心に由らざるが故に忘失せず。大念、大悲にして常に自ら堅固なるが故に忘失無し。此の大悲を以て能く大衆を攝す。

論曰　他を利益する事に於て　導いて過ぎず、時を待ち　所作恆に虛ならず　迷ひ無きものを我頂禮す。

釋曰　[六]十方の無量の衆生は、一刹那の中に於て應に利益を得べし。如來は大悲力を以て、一刹那の中に於て悉く利益を得しめ、空しく過ぐる者無く、亦一衆生として、道を得る時未だ至らざるに預め其の所に往くこと無く、時の至るを待つて方に說法を爲す。凡そ所作有れば皆時に應じて益を得。故に所作虛しきこと無し。「迷」とは是れ無明なり、無明は卽ち習氣の體なり。習氣盡くるに由るが故に利益虛しからず。

論曰　一切の行住に於て　圓智の事に非ざる無く　一切世を遍知する實の體を　我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は忘失無きを明かす。已に受生し及び未だ受生せざるを「行」と爲し。正に受生す

【六】他の偈釋に準ずれば此の釋文の初にも「此の偈は拔除習氣を明かす」と有るべきなり。

釋曰　出家受戒より、乃し世第一法に至るまでを悉く「方便」と名け。苦法忍より乃し第二果に至るまでを「歸依」と爲す。四の不壞信を得るを以ての故なり。第三と第四との果を「淨」と爲す、欲界乃至無色界を離欲するを以ての故なり。魔は此の中に於て能く衆生を障へ、此の道果を得ざらしむ。若し大乘の中にて、十地の行を修して、三障を出離せんとすれば、魔も亦中に於て能く障礙を爲す。如來は十力を具するに由るが故に、能く衆生の爲に衆魔を摧伏す。

論曰

　智と滅と及び出離と　障事とを能く顯説し　自他の兩利に於て　邪を降すものを我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は四無畏を明かす。智とは卽ち一切智無畏、滅とは卽ち流盡無畏、出離とは卽ち説盡苦道無畏、障事とは卽ち説障道無畏なり。若し外道有りて佛を難して、一切智に非ずと言ひ、或は諸流は未だ盡きずと言ひ、或は如來の説く盡苦の道は之を修するも苦を離れしむること能はず、障道の法を説くも、此の障を起すも道を得ることを妨げずと言はば。如來は中に於て無畏にして能く邪難を降す。

論曰

　制すること無きも過失無く　染濁無く住すること無し　諸法に於て動ずること無く　戯論無きものを頂禮す。

釋曰　此の偈は四不護を明かす。師の制止無きも、身口意と命とに自ら十惡等の過失無く、但だ貪瞋、邪見の煩惱無きのみにあらず、一切の煩惱は皆已に滅盡す。諸法に著せざるが故に、染濁無く住すること無しと言ふ。作意して諸法を知らず、諸法を知るも復た學ぶの義無く。分別を離れて、智慧遍滿するが故に動ずること無しと言ふ。過失已に除くが故に戯論無し。

萬大劫等を經。止に八萬劫のみに非らず、住せんと欲すれば多劫にも意の如く能く住す。捨てんと欲するも亦意の如く能く捨つ。又諸定の中に於ても亦此の三能有り。一身の中より無量の身を分出するを變化と爲し。金土等を轉ずるを改性と爲す。通慧は皆定に由りて成じ、意の如くにして無礙なるが故に定と智との自在を得と言ふ。

論曰　諸の衆生は尊を見れば　信敬して勝士と謂ふ　他の見ることに由りて能く　淨心を生ずるものを我れ頂禮す。

釋曰　此の一偈は、合して三十二の大人相、八十の小相を明かす。衆生は佛の大小の相を見て信心及び敬心を生じ、如來は是れ最勝の士なりと謂ふ。如來の大小の相は並に能く衆生の淸淨心を生ず。

論曰　故に彼の類と音とに隨ひ　行と往と還と出離とを證知して　諸の衆生の爲に　正教を說くものを我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は、四種の一切相の淸淨を明かす。衆生の形類及び音辭に隨ひ、示現して彼の衆生の如くす。過去に生を受くるを往と爲し、現在に生を受くるを還と爲し。二世の中に行じて、三乘道の果を得ることを出離と爲す。佛は皆此の事を證知して、所應の如く爲に正教を說く。四淸淨に由るが故に此の能有り。

論曰　方便と歸依と淨との　中に於て衆生を障へ　大乘の出離に於ける　魔を摧くものを我れ頂禮す。

釋曰　此の半偈は、願智を明かす。三世の一切事に於て知らんと欲するを願と爲す。如來は皆能く證知するを智と爲す。修習すること熟するが故に功用無く。習氣盡くるが故に著すること無し。此の二義に由るが故に、皆能く三世の境を證知す。如量に能く知るが故に無礙なり。如來は恆に觀を出でざるが故に寂靜なり。寂靜は無功用を顯はし、無礙は無著を顯はす。

論曰

一切衆生の難を　能く釋くに我れ頂禮す、依と及び能依と　應說言と及び智とに於て
能と說とに於て無礙にして　說く者を我れ頂禮す。

（**論曰**　一切衆生の難を、能く釋くに我れ頂禮す）

釋曰　此の下の一偈半は四無礙解を明かす。四解を具するに由るが故に能く衆生の難を釋く。

（**論曰**　依と及び能依と　應說言と及び智とに於て）

釋曰　依に於てとは是れ義にして、能依は是れ諸の法門なり。應說言とは是れ方言なり。及び智とは是れ巧辯なり。

（**論曰**　能と說とに於て無礙にして）

釋曰　此の四の中に於て功能無礙なり。他の偈に說くも亦無礙なり。

（**論曰**　說く者を我れ頂禮す）

釋曰　已に惑愛を離れて說く所無垢なり。能說の德有るが故に說者と名く。

論曰[五]

壽を攝すと住すと及び捨すと　變化と及び改性と　定と智との自在を得たる　世尊を我れ頂禮す。

釋曰　此の偈は通慧を明かす。若し壽命應に盡きんとすれば能く更に攝受して長からしめ、乃至八

【五】次の三偈は論本及び他の諸譯に於ては其の順序を逆置せり。

れ無流なるが故に、修習の障即ち見諦等の惑を除く。是れ究竟なるが故に、勝類の障、即ち下劣の心を除く。

(論曰　世を降伏する智者にして。)

釋曰　此の句は八制入を明かす。是れ無流にして究竟に非ず。是れ究竟にして無流に非ず。八制入に屬するが故に、八解脱に異る。心能く境を制し、境をして心に從はしむ。故に世を降伏する智者と名く、即ち是れ佛なり。

(論曰　應に知るべし智遍滿し。)

釋曰　此の句は[三]十一切入を明かす。應に知るべし、是れ十境なり。智は十境を緣じて一切處に遍ず故に「遍滿す」と言ふ。

(論曰　心解脱せるに頂禮す)

釋曰　心は此の三處に於て皆解脱を得。

論曰

諸の衆生は餘すこと無く　能く一切の惑を滅す　惑を害し、染汚有るを　常に憐愍するに頂禮す。

(論曰　諸の衆生は餘すこと無く、能く一切の惑を滅す)

釋曰　此の偈は無諍三摩提を明かす。凡そ所作有れば、一切の衆生の煩惱諍を起さず。

(論曰　惑を害し、染汚有るを　常に憐愍するに頂禮す)

釋曰　佛は能く衆生の惑を害す。衆生に染汚有れば、如來は常に憐愍の心を起す。

論曰

功用無く著すること無く　無礙にして恆に寂靜なり、

【三】八制入は新譯には八勝處なり。

【四】十一切入とは新譯には十遍處といふ。

釋曰　此の句は大慈を明す。染著を離れたる意は衆生に樂を與ふ。

(論曰　衆生を離れざる意と。)

釋曰　此の句は大喜を明かす。衆生若し已に苦を離れ樂を受くれば、則ち恒に彼に於て歡喜の心を起す。

(論曰　利樂する意とに頂禮す。)

釋曰　此の句は大捨を明かす。苦を拔き樂を與へざるの意を捨て、常に利樂の意を懷く。又怨親等の相を捨て、常に平等利樂の意を懷く。此の德有るに由り、是の故に頂禮す。復次に諸の結縛を離れたる意とは、外道及び二乘の悲心を離れたることを明かす。外道の悲心は衆生を緣じて起れば結と爲す。二乘の悲心は法を緣じて起れば縛と爲す。如來の大悲は此の二を緣じて起らざるが故に「離る」と言ふ。大悲既に爾り、慈等も亦然り。衆生を離れざる意とは、衆生及び法の緣を離ると雖も、如來は衆生に於て常に四無量の意を離れず。苦有る者に於ては拔苦の意を離れず。樂無き者に於ては與樂の意を離れず、已に苦を離れ樂を受くる者に於ては歡喜の意を離れず。此の如き衆生に於て平等の意を離れず。「利樂する意とに頂禮す」とは、出世の益を得しむるを利と爲し、世間の益を得しむるを樂と爲す。四無量は具さに二益を有す。

論曰

一切の障を解脫し　世を降伏する智者にして　應に知るべし智遍滿し　心解脫せるに頂禮す。

(論曰　一切の障を解脫し。)

釋曰　此の一偈は三德を顯はす。此の句は八解脫を明かす。八解脫は二種の障を除く。一には修習の障、二には勝類の障なり。八解脫は二義を具す。一には是れ無流、二には是れ究竟なり。是

論曰　能依止の差別に由るが故に差別無きあらず。無量の依止の轉依なるが故に。[二]

釋曰　無量の菩薩は道を修して轉依す。菩薩の數量の如く應身も亦爾り。依止の無差別に由りて無差別を說かず。身各々異なるに由り、應身も亦爾り。故に差別有り。

論曰　變化身も應に知るべし受用身の如し。

釋曰　法身に依るに由るが故に差別無く、應身に依るに由るが故に差別有り。

論曰　此の法身は應に知るべし、幾種の功德と相應するや。最淸淨の四無量と相應し、八解脫、八制入、十一切入、無諍三摩提、願智、四無礙辯、六通慧、三十二の大人相、八十の小相、四種一切相の淸淨、十力、四無畏、四不護、三念處、拔除習氣、無忘失法、大悲、十八不共法、一切相最勝智等の諸法と相應す。

釋曰　此の身は諸の功德の法と相應す。故に法身と名く。相應の法を顯はさんと欲するが故に此の問を爲す。

論曰　此の中偈を說く、

釋曰　偈に兩義有り。一には如來の功德を顯はし、二には功德を有する人を恭敬することを顯はす。

論曰

衆生に於て大悲あり　　諸の結縛を離れたる意と　　衆生を離れざる意と　　利樂する意とに頂禮す。

（**論曰**　衆生に於て大悲あり。）

釋曰　此の下の一偈は、四無量を顯はす。此の句は卽ち大悲を明かす。

（**論曰**　諸の結縛を離れたる意と。）

【二】此の句は隋譯には直截に「依止に差別有り、無量の依止轉ずるが故に」と譯せり。

論曰　此の如き六種類の法の所攝なる諸佛如來の法身を應に知るべし。

釋曰　此の六法の、前の四は是れ自利、後の二は是れ利他なり。利他に二種有り、一は永利、二は暫利なり。永利は是れ眞實にして、暫利は是れ假名なり。並びに是れ法身の證得の類なるが故に、法を攝すと言ふ。應に此の如く知るべし。

論曰　諸佛の法身は差別有りと說く可しと爲すや、差別無しと爲すや。

釋曰　十方の諸佛は同一法身なりと爲すや、當に異り有るべしと爲すや。

論曰　依止の意用と業と異り無きに由るが故に、應に差別無しと知るべし。

釋曰　諸佛は同じく法身を以て依止と爲す。衆生を利益し安樂にする意用に於ても亦同じ。衆生の中に於て現じて正覺を成じ、乃至般涅槃す、此の業も亦同じ。此の義に由るが故に、應に諸佛の法身は差別無しと知るべし。

論曰　無量の正覺等の事に由るが故に、應に差別有りと知るべし。

釋曰　諸佛は、法身に於て已に正覺を得、乃至已に般涅槃せるもの有り。諸佛は、正しく正覺を得るもの有り。諸佛は當に正覺を得べきもの有り。乃至般涅槃も亦爾り。此の如き等、無量の事有りて前後同じからず。是の故に應に法身に差別有りと知るべし。

論曰　法身の如く受用身も亦爾り。

釋曰　諸佛の應身に差別無しと、差別有りとの義も法身の如し。

論曰　依止と業と異らざるに由るが故に、應に差別無しと知るべし。

釋曰　十方の諸佛の應身は同じく法身に依止す。依止異らざるが故に應身に差別無し。應身は化身を以て業と爲す。諸佛の應身は皆化身の依止と爲らざるもの無し。化身を起すこと業同じきを以ての故に差別有ること無し。

釋曰　此の轉依に由りて、十方世界に於て無礙の六通の智を得。此の自在の法は是れ證得の類なるが故に、自在類の法と名く。

論曰　五に言説類の法、

釋曰　如來には不共得の四無礙辨有り。正説の中に於て勝能を具足するを言説の法と名く。云何が此の言説の法を得るや。

論曰　一切の見聞覺知の言説の依を轉ずるに由るが故に、

釋曰　世間の中に於て、見聞覺知の四種の言説有り。六識の境に依りて意識の分別を起す。此の分別に由りて四種の言説を生ず。對治起る時、此の言説の識を滅するを名けて轉依と爲す。

論曰　此れ能く一切衆生の心を飽滿する正説智の自在に由るが故に。

釋曰　此の轉依に由りて、如來は四言説の中に於て、不共の四無礙辨を得。能く衆生の根性に稱ひて意の如く説法して皆果を得しむ。此の言説の法は是れ證得の類なるが故に言説類の法と名く。

論曰　六に拔濟類の法、

釋曰　是れ諸佛の衆生を利益し安樂にする意にして、卽ち是れ大悲なり。云何が此の拔濟を得るや。

論曰　一切の災橫過失を拔濟する意の依を轉ずるに由るが故に、

釋曰　世間の中に於て、王等の起す所の災橫の如き、菩薩は昔、善友力と自の勢力と財物力等に由りて、衆生の災橫過失を拔濟せり。對治起る時、此の拔濟の識を滅するを名けて轉依と爲す。

論曰　此の一切衆生の災橫過失を拔濟する智の自在に由るが故に。

釋曰　此の轉依に由りて、能く意の如く一切衆生の災橫過失を拔濟す。此の拔濟の法は是れ證得の類なるが故に拔濟類の法と名く。

論曰　有色根の依を轉ずるに由るが故に、
釋曰　對治起る時、眼等の五根の色識を滅するを、名けて轉依と爲す。
論曰　果報の勝智を證得するに由るが故に、
釋曰　此の轉依に由りて諸佛は果報類の智を得。此の智は五塵の中に於て、十方世界の衆生の五根の生ずる所の識に當る。此の智は五塵の中に於て起るが故に果報の類と名く。此の果報の類の法は是れ證得の類なるが故に、果報類の法と名く。
論曰　三には住類の法、
釋曰　如來は遍く一切の法を證得するを、名けて住法と爲す。云何が此の住法を得るや。
論曰　受行欲塵の依を轉ずるに由るが故に、
釋曰　對治起る時、世間の受行欲塵の識を滅するが故に轉依と名く。
論曰　無量の智慧の住に由るが故に、
釋曰　此の轉依に由りて　如來は無量の智住を得、無量の境を皆忘失せず。此の智は卽ち當に受行欲塵の觸中に忘失有るべし。識は卽ち是れ[一]四不護の體なり。此の住類の法は是れ證得の類なるが故に、住類の法と名く。
論曰　四には自在類の法、
釋曰　一切處に於て勝能無礙なるを名けて自在の法と爲す。云何が此の自在の法を得るや。
論曰　種種の業等を轉じて、自在の依を攝するに由るが故に、
釋曰　世間の中に於て種種の諸業有り。耕稙商賈等、或は財物を蓄聚するが如き、此の種種の事業を攝す。對治起る時、此の業等の識を滅するを名けて轉依と爲す。
論曰　此に由りて一切の十方世界に於て無礙の六通の智自在なるが故に、

【一】四不護とは後に釋論に出づ。

卷の第十四

釋智差別勝相第十の二

論曰　幾種の佛法有りて、應に此の法身を攝するを知るべきや。

釋曰　法身の體を攝することを顯はさんが爲の故に、此の問を爲さず法身の證得を攝することを顯はさんが爲の故に、此の問を爲す。

論曰　若し略して說かば六種有り。

釋曰　若し廣く說かば無量種有り。今は略說するが故に止だ六種と言ふのみ。

論曰　一には淸淨類の法、

釋曰　不淨品を滅し盡くして法身を證得するを名けて淸淨法と爲す。云何が此の淸淨法を得るや。

論曰　阿梨耶識の依を轉ずるに由るが故に、

釋曰　對治起る時、本識の不淨品の一分を離れ、本識の淨品の一分と相應するを、名けて轉依と爲す。

論曰　法身を證得するに由るが故に、

釋曰、此の轉依に由りて、金剛道の後に法身を證得す。滅德以外の其の餘の諸德を淸淨法と名く。是れ證得の類なるが故に淸淨類の法と名く。

論曰　二に果報類の法、

釋曰　如來の法は是れ果報の類なる有り。色等を見るが如き智を果報の法と名く。云何が此の果報の法を得るや。

論曰　諸佛は恒に四の無盡を見る、

釋曰　復次に如來は前の四喜を見て、乃至生死の際を窮むるも滅盡有ること無し。設ひ無餘涅槃に入るも亦滅盡無し、是の故に喜を生ず。此の喜は何の相ぞ。一には最勝を相と爲す、三界及び二乘の喜に過ぐるを以ての故に。二には無失を相と爲す、一切の惑乃至習氣は滅盡して餘すこと無し。此れ最圓滿と及び最清淨とを顯はす。是を第一自利の依止と名く。

論曰　種種の受用身の依止は、諸の菩薩の善根を成熟せんが爲の故に、

釋曰　諸佛の應身は無量なるが故に「種種」と言ふ。又一一の佛の應身の品類は説くべからず、故に種種と言ふ。此の法身は應身の依止と爲る。何の故に依止と爲るや。此の身を生ぜんが爲の故なり。若し應身を離るれば地に登る菩薩の善根は則ち成熟することを得ず。故に應身を須ゆ。應身は法身に由りて立つが故に、法身は應身の依止と爲る。此れ即ち第二の菩薩を利益する依止なり。

論曰　種種の化身の依止は、多くは聲聞獨覺の善根を成熟せんが爲の故なり。

釋曰　此の法身は但だ應身の依止と爲るのみにあらず亦是れ化身の依止なり。何を以ての故に、若し化身を離るれば下願の衆生、謂ゆる聲聞獨覺の所有の善根は成熟するを得ず。多の言は、止だ二乘を利益する願樂のみにあらざることを顯はす。地中の菩薩の善根も亦化身に因りて成熟するが故に、法身は化身の依止と爲る。此れ即ち第三の二乘を利益する依止なり。

の故に、諸佛は同一の法身を體と爲す。體既に是れ一なるが故に、餘佛の勝能は即ち是れ一佛の勝能なり。諸佛の勝能は無量なり。一佛の勝能も亦無量なり。故に一佛の勝能を得れば諸佛の勝能に等し。諸佛の法身は同じく勝能を得、此の故に喜を生ず。自界を證して、此の勝能を得るを見るに由り、是の故に喜を生ず。二には作事の立つに因るが故に喜を生ず。一佛の作す所の衆生利益の事は是れ一切の佛の正事なり。是れ一切衆生を利益する事なり。何を以ての故に、一切の佛の作す所の淨土等は衆生利益の正事にして、即ち是れ一佛の作す所の正事なり。諸佛は設ひ皆正事を作さゞるも、一佛の作す所の正事は通じて等しく諸佛の作す所の正事なり。若し一衆生を利益すれば即ち是れ一切の衆生を利益す。若し一衆生成佛すれば、此の衆生は復能く一切の衆生を敎化す。此の如く轉じて相ひ利益す。若し諸佛、已に自界を證すれば則ち此の正事を成立す。自界を證して作正事の立つことを見るに由り、是の故に喜を生ず。三には法の美味に因るが故に喜を生ず。如來は、昔時に三乘の十二部經を學ぶに由り、後に成佛の時、各々一切の法を觀ずるに、此の法身より生ぜざること無し。還つて此の法身を證せざること無きが故に、一切の法門は同一の法身を味と爲す。修多羅、祇夜等の經は、同一法身の味なるを見るに由り、是の故に喜を生ず。四には欲と德との成ずるに由るが故に喜を生ず。欲する所、成ずるを得れば功德も亦成ず。欲する所成ずとは、佛の思ふ所の如きは成就せざる無し、謂ゆる淨土及び大集等の事なり。功德成ずとは、謂ゆる十力四無畏等なり。一切の如來の不共の法は圓滿せざる無し。此の二事の成ずるを見るに由り、是の故に喜を生ず。

論曰　喜を得れば、最勝にして失有ること無し。

釋曰　三界の喜樂に過ぐるが故に最勝なり。一切の惑乃至習氣は皆盡くして餘り無きが故に失無し。

釋曰　菩薩も亦此の五德有り。但だ未だ圓滿せざるのみ。唯だ佛のみ具足するが故に、諸佛如來と言ふ。喜の體は唯だ一のみ。但だ無失最勝を以て體と爲す。五の因に由りて得る所なるが故に五喜と言ふ。諸佛は自ら解脱を得、化身を以て二乘の人を敎へて解脱を得しむ。何の故に如來は自ら五喜を受くるに、而も二乘は得ざるや。

論曰

　皆、自界を證得するに因るが故に、　　二乘の喜無きは證せざるに由る、

釋曰　因異り有るに由るが故に、果を得ること同じからず。自界を證するを以て因と爲し、五喜を果と爲す。界は是れ如來の性にして、卽ち性淨の法身なり。如來は自の大功能の所證にして、無因に由らず、他に由りて得せず。故に「自界を證す」と言ふ。自界を證するに由るが故に、五喜の果を得。二乘は此の界を證せず、故に五喜無し。

論曰

　喜を求むるは要ず　　須らく佛果を證すべし、

釋曰　若し人五喜等の法を求めんと欲すれば、必ず須らく道を修して以て法身を證すべし。何を以ての故に。果は因を離れて得ること無きを以ての故なり。此の偈は法身は五喜の依止と爲ることを顯はす。法身を證するに由るが故に五喜を得、法身を證せざれば則ち五喜無し。

論曰

　能の無量と作事の立つとに由り　　法の美味と欲と德との成ずるに由る。

釋曰　此の偈は五因に由るが故に五喜と稱することを示す。何をか五と爲す。一には自の能の無量なるに因るが故に喜を生ず。一切の佛は同じく法身を覺了し、一切の佛は、同じく勝能を得。一切の佛の勝能は、卽ち是れ一佛の勝能にして、一佛の勝能は等しく一切の佛の勝能なり。何を以て

摩提、陀羅尼門を守り、此の法門の中に於て取らんと欲する所の法は意の如く礙ふること無く、譬へば財主の其の庫藏を守るが如く、取用無礙なり。是を迴觀の智と名く。能く兜率陀天の生を受け、及び般涅槃し、聲聞及び下地の菩薩の無流の善根を立てんが爲に、能く如來の事を顯はす。是を作事の智と名く。此等の事に於て皆如意を得、故に自在と名く。

論曰　識陰の依を轉ずるに由るが故なり。

釋曰　識識を識陰と爲し、了別を識の體と爲す。故に識陰の依を轉じて此の自在を得。

論曰　此の法身は應に幾くの法の依止と爲ることを知るべきや。

釋曰　如來の無量の功德は皆法身より生じ、法身を以て依止と爲すことを顯はさんと欲するが故に、此の問を爲す。

論曰　若し略して說かば唯三のみ。

釋曰　若し廣く說かば無量の法の依止と爲る。今略說すれば唯三のみ。

論曰　諸佛如來の種々の住處の依止なるが故に、

釋曰　住に四種有り。謂ゆる天住と梵住と聖住と佛住となり。諸住の中に於て如來は多く此の四法に住す。故に偏へに此の四を說く。得に二種有り、一には自在得、二には現前得なり。初て成佛する時、一切の如來の法を具足して皆得るを、自在得と名け、後時に正しく用ふる所の者に隨ふを現前得と名く。若し法身を證すれば、一切如來の法を皆な自在に得るが故に。法身は住等の法の依止と爲る。何を以ての故に、法身を離るれば此の法を得ること無きが故に。

論曰　此の中、偈を說く、

釋曰　法身は住等の法の依止と爲るを顯はさんと欲するが故に、重ねて偈を說く、

論曰　諸佛如來は五喜を受く、

釋曰　受識を受陰と名く。苦樂を領するは是れ受の體なり。受陰の依を轉ずるに由るが故に、此の自在を得。

論曰　三には一切の名字・文句・聚等を具足する中、正しく說く自在、

釋曰　一切の諸法の名字及び諸の言教の文句は、偈より以去、一章一品、乃至一部を皆名けて聚と爲す。悉く能く了知して意の如く正しく說く、故に自在と名く。

論曰　想陰の執相の差別の依を轉ずるに由るが故なり。

釋曰　想識を想陰と爲し、執相の差別を想の體と爲す。想陰の依を轉ずるに由るが故に、此の自在を得。

論曰　四には變化し改易して大集を引攝し、白淨品を牽く自在、

釋曰　未だ有らざるに有を現じ、及び一を分つて多と爲すは是れ「變化」なり。其の本性を轉ずるを「改易」と爲す。見んと欲する所の衆生は、其の遠近に隨ひて意の如く引導し、天人、夜叉等の大集の中に來れば、彼の宜しき所に隨ひて、四攝を以て攝化す。有流の善を「白」と爲し、無流の善を「淨」と爲す。此の白淨品の法を牽きて生じ相續する中、此等の事に於て皆如意を得、故に自在と名く。

論曰　行陰の依を轉ずるに由るが故なり。

釋曰　行識を行陰と爲し、作意を行の體と爲す。行陰の依を轉ずるに由るが故に此の自在を得。

論曰　五には〔七〕顯了・平等・迴觀・作事の智の自在なり。

釋曰　如來は一切法に於て過去有ること無し。非現前の境を證知するに、現前に對するが如し。譬へば人の憶持し熟習する文句の如し、是を顯了の智と名く。眞如に通達してより以來、一切の衆生に於て平等の心を得。平等なる清淨法を證するに由るが故に。是を平等の智と名く。能く三

【七】顯了平等等は唐譯には圓鏡、平等、觀察、成所作の智といふ。

釋曰 五陰に約して轉依を顯はさんと欲し、法身の自在を明かす。故に此の問を爲す。

論曰 若し略して說かば五の自在有り、中に於て自在を得。

釋曰 若し廣く說かば無量の自在有り。今は略說して止だ五種を明かすのみ。

論曰 一には淨土の顯示と自身の相好と無邊の音と不可見頂の自在、

釋曰 意の如く能く頗梨珂等の淨土を現じ、衆生の類に隨つて意の如く身を現じ、大集の中に於て、皆衆生に對して背く者有ること無し。又衆生の樂見する所に稱ひて種々の身を現じ、衆生の樂見する所に稱ひて、種々の相好を現じ、說く所の法音は意の如くに十方世界に遍滿し、一音の中に於て、諸の衆生の聞かんと欲する所の法に隨ひて各々聞くことを得しめ、諸の梵天等の佛を見たてまつるの時は、如來の身量倍して彼よりも高きが故に、頂を見るべからず。此等の事に於て皆如意を得、故に「自在」と名く。此の如き自在は何の因にて能く得るや。

論曰 色陰の依を轉ずるに由るが故なり。

釋曰 一一の陰に、皆滅の差別の中に說く所の如き前の四轉依有り。色識を色陰と名く。形礙は是れ色の體なり。對治起る時、分別性の不淨品の一分は永く相ひ離るゝことを得るに由り、淨品の一分は恒に相應することを得。卽ち是れ色陰の轉依なり。此の轉依の中に於て淨土等の自在を得。

論曰 二には無失無量の大安樂住の自在、

釋曰 諸惑及び習氣の爲に染汚せられざるが故に「無失」と名け、如來の安樂住は數量すべからざるが故に「無量」と言ひ、三界の樂を過ぎて最勝無等なるが故に、「大安樂住」と名く。此等の事に於て皆如意を得、故に自在と名く。

論曰 受陰の依を轉ずるに由るが故なり。

得て退失無きを「熟」と名け、最上の上品を得るを「成」と名け、數數觀察するを「修習」と名く。此れ二種の因を明かす、一には不失の因、二には圓滿の因なり。故に得の因と名く。

論曰 一切地に於て善く資糧を集め、

釋曰 此れ得の伴類を明かす。初地より乃し十地に至るまで福德智慧の行を聚集して資糧と爲すが故に、得の伴類と名く。

論曰 能く微細にして破し難き障を破するが故に、

釋曰 此れ得の功能を明かす。前の二義に由るが故に能く智障を破す。此の煩惱は二乘の無流道と俱に起る、故に「微細」と名く。二乘道の能く破する所に非ざるが故に「破し難し」と名く、故に得の功能と名く。此れ卽ち第四に定を得ること識の亂れざるが如きを明かす。

論曰 金剛譬三摩提なり。

釋曰 四義有るが故に金剛を以て三摩提に譬ふ。一に能く煩惱の山を破し、二に能く無餘の功德を引き、三に堅實にして毀壞す可からず、四に用利にして能く智慧をして一切法に通達して無礙ならしむ。

論曰 次に此の三摩提の後に一切の障を滅離するが故に。

釋曰 此の定を得竟り、一切の障を滅して方に盡くす。此れ卽ち第五に闇等の障無きが如きを明かす。

論曰 是の時依止轉ずるに由りて、證得を成ずること、應に知るべし。

釋曰 金剛心滅する時を「是の時」と名く。是の時、第十地の依止轉じて佛の依止を成ずるを「證得」と名く。應に此の如く知るべし。

論曰 此の法身に幾くの自在有り、中に於て自在を得るや。

に、法身は衆生に於て本來是れ得なり。得の義は此の如し。證の義云何ん。

論曰　是の觸は初より得る所、

釋曰　觸得に始有ることを顯はさんが爲なり、方便に由りて利益を成ずること窮り無きが故に。眼の色を證見するに、必ず五義を具するが如し。一には實境有りて根に對す、二には根壞せず、三には覺觀有り、四には識亂れず、五には闇等の障無し。五の義若し具せざれば、則ち色を證することと能はず。法身を證知するも亦爾り、必ず須らく五義を具すべし。

論曰　[七]相雜の大乘法を緣じて境と爲すに由り、

釋曰　眞如は是れ大乘の法なり。大乘の十二部經に說く所の法門は皆共に此の眞如を顯はす。一切の正說は眞如の法に於て則ち同一味なり。故に「相雜」と名く。衆流の海に歸するが如く、相雜して共に一味と爲る。智と境と差別無きが故に「緣ず」と言ふ。菩薩は相雜の大乘を緣ずる中、眞如の法を境と爲す。此れ卽ち第一に境實有にして最勝なることを顯はす。

論曰　無分別智と無分別後所得智は、

釋曰　證智は無分別を以て相と爲す。此の智は眞如の境に於て起るに由り、分別を離るるが故に清淨にして、證智を成ず。此れ卽ち第二に智清淨にして、根の壞せざるが如きを顯はす。無分別後所得智は是れ前後の助法なり。此の智の後に更に眞觀に入るに由りて後々に轉勝す。此れ卽ち第三に助法は覺觀の如くなることを明かす。若し毘鉢舍那有りて奢摩他無ければ、證得の義無きが故に、須らく奢摩他を修すべし。奢摩他を修するに三相有り、一に得の因、二に得の伴類、三に得の功能なり。

論曰　五相に修して成熟し修習し。

釋曰　此れ得の因を明かす、五修及び五修の得る所の五果は、因果修差別の中に說けるが如し。

【七】相雜とは隋唐兩譯には總相の大乘法と爲す。

り。覺觀の行處に非ざるが故に聞慧の境に非ず。譬喩無きが故に思慧の境に非ず、自證智の所知なるが故に世間及び二乘の修慧の境に非ず。是の故に不可思議なり。二には無分別最上の眞實なるが故に不可思議なり。無分別とは、菩薩の自證智の所知にして、凡夫の分別の境界に非ず。凡夫は生盲の色を分別すること能はざるが如し。未だ曾て色を見ざるを以ての故なり。亦二乘の分別の境界に非ず。此の境は最極にして二乘の證する所に非ざるが故に、分別することも能はず。二乘は新生の嬰兒の日輪を見ざるが如し、根弱きを以ての故なり。最上なる者は譬喩無きが故に、法身は一切法の中に於て最極無等にして、餘法の譬喩を爲す可き無きが故に、[五]有上の人の能く知る所に非ず。眞實なる者は言說すべからざるが故に、若し言說す可らざれば、未だ曾て眞實を見ざる衆生は分別すること能はず。一切の覺觀は言說に隨つて起る、既に言說無きが故に覺觀の行處に非ず、是の故に不可思議なり。三には法身は是れ諸佛の證智の所知にして、世間の聰慧の人の能く分別する所に非ず。世間の中に於て物として法身に等しかるべきもの無し。此の物を見て以て法身を比知すべきに由り、法身の中に於ては一切の心行皆絕す。境智差別無きを以ての故に、是の故に不可思議なり。

論曰 復次に此の法身の證得云何ん。

釋曰 證して得ならざる有り、得にして證ならざる有り、亦は證亦は得なる有り、證ならず得ならざる有り。今は亦は證亦は得なることを顯はさんと欲す。一切の衆生は生死に在るも、衆生に本より法身無きこと有る無し、恆に法身と相應するが故に。此の相應は無始より法自然に成ず。此の如く相應するを說いて名けて得と爲す。此の得は[六]觸得に非ず、根識の證する所に非ざるが故に相應得を離れんが爲の故に此の問を立つ。經に言へるが如し、衆生聚の中に於て衆生は法身の外に在るもの無し。一色も虛空の外に在ること無きが如し。一切の衆生は皆法身を離れざるが故

【四】有上の人とは無上の佛果に對して修行位の者を指す。

【五】觸得とは證得の意。

釋曰　眞如は卽ち清淨の法界なり。法界異なること無きか故に諸佛の依止に差別無し。此の二偈は法身に一異無き相を顯はす。

論曰　四には常住を相と爲す。眞如清淨の相なるが故に、

釋曰　此の下は三證を引きて法身常住の義を立つ。眞如は若し一切の垢を出離して無垢清淨なれば說いて佛果と名く。此の眞如は常住なり。諸佛は是れ清淨なる眞如の所顯なり。故に法身は常住なり。

論曰　昔の願の引通を最も極と爲すが故に、

釋曰　初發心より乃至八地まで、二十七大劫の阿僧祇を經、中に於て如來は法界に依りて發願し成就す。願は願を乘持する是を「引」と名け、一切處に於て無礙なるが故に「通」と名け。生死際を窮むるが故に「最極」と名く。法界に依りて此の願を起すに由るが故に、法界若し無常なれば願は則ち盡くること有り、願旣に無盡なるが故に、法界の常住なることを知る。又此の願の引通は最極なるに由り、果を空無せざるが故に法身を得。願旣に無盡なるが故に法身は常住なり。

論曰　應に作すべき正事を未だ究竟せざるが故に。

釋曰　若し佛は衆生利益の事を作し竟らば、先の願は應に窮るべし、願を以て法身の常住を證す可からずと言はば、是の義然らず。何を以ての故に、正事は未だ究竟せざるに由るが故に、今時より乃至無窮の世まで正事は無邊なり。若し衆生未だ皆佛を得ず、未だ悉く般涅槃せざれば、此の正事は息むこと無し。正事は法身に由りて成ず。正事盡きざるが故に法身も常住なり。

論曰　五には不可思議を相と爲す。是れ眞如は清淨にして自證智の所知なるが故に、譬喩無きが故に、覺觀の行處に非ざるが故に。

釋曰　法身には三の因緣有るが故に不可思議なり、一には三慧の境界に非ざるが故に不可思議な

論曰　前に多くの依の證するが如きは　假名にして不一なりと說く。

釋曰　前の因地に無量の依止の能く證するが如くなるが故に、若し一一の世間身に法身有ること無れば、菩薩は則ち證する所無し。菩薩は各々自身に依りて此の法身を證するに由るが故に、假名に約して一と說く可からず。

論曰

性と行と異なるも虛なるに非ず　圓滿にして初無きが故に　不一なり、異無きが故に

多ならず眞如に依る。

釋曰　諸の菩薩の發心は多なるが故に性異なると名く。性異なるに由るが故に加行も亦た同じからず、加行異なるに由るが故に功力有り、功力有るに由るが故に能く果を得、因の義有るが故に虛に非ず。若し但だ一佛有るのみならば。諸の餘の菩薩の修行は則ち空にして得る所無けん。諸佛の衆生を利益する事を作すは圓滿せざること無し、彼をして三乘に於て安立するに由るが故に。若し諸佛は他をして無上菩提に安立せざれば、則ち所作の佛事は圓滿せず。利益の事は圓滿するに由るが故に、佛は一にあらず。生死に初め無きが如く、無量の諸佛も亦爾り、初無く無量なり。若し唯だ一佛のみ成じて前後の佛は成ぜざれば、則ち一佛に於て始を立て終を立つ、義則ち成ず可し。此の五義に由るが故に諸佛は一にあらず。

（**論曰**　異無きが故に多ならず。）

釋曰　依止異ならざるが故に諸佛は多ならず。多ならざるが故に異なること無し。何をか依止と爲すや。

（**論曰**　眞如に依る。）

は清淨の境に非ず、一なりと說く可からず。法身は有爲無爲に非ざるを相と爲し、有爲無爲に非ざるに非ざるを相と爲す。何を以ての故に。

論曰　惑業の集の生ずる所に非ざるが故に、

釋曰　一切の有爲法は皆惑業より生ずるも、法身は業惑より生ぜざるが故に有爲に非ず。

論曰　自在を得るに由りて能く有爲の相を顯はすが故に。

釋曰　法身は自在を得るに由りて能く數々有爲の相、謂ゆる應化の二身を顯はすか故に、無爲に非ず。

論曰　復次に一と異と無二なるを相と爲す、諸佛如來の依止は異ならざるが故に、

釋曰　無二とは謂く一無く異無きなり。三世の諸佛は法身に由りて異なること無し。法身は即ち是れ依止なり、是の故に異ならず。

論曰　無量の依止に由りて能く此れを證するが故に、

釋曰　此の法身の無量なるに由りて、已に善根を成熟せる諸の菩薩は無間に證する所なるが故に一と說く可からず。若し一ならば餘人の修行は則ち應に用無かるべし。

論曰　此の中に偈を說く。

釋曰　法身は一異にあらざる義を顯はさんが爲の故に、重ねて偈を說く、

論曰

我執有らざるが故に　中に於て依の別無し。

釋曰　世間に於ては、我執に隨つて分別するに由り、衆生の依止に差別有るも、法身に於ては我執の分別有ること無きが故に、如來の依止には差別無し。若し爾らば、云何が多佛有りと立つるや。

て能く自ら用ひ亦能く他をして我が用ふる所の如くならしむ。故に自在と名く。菩薩は能く諸菩薩の諸の甚深の定心を得るに由り、事に隨つて調伏す。若し五通處を[三]引けば自他に於て意の如く皆成ず。

論曰　九には智の自在、十には法の自在なり。此の二は般若波羅蜜の圓滿に由りて成ずることを得。

釋曰　菩薩は般若波羅蜜の圓滿に由り、無分別智を以て、陰等の法門に於て心通達して餘すこと無く、一切種智を得るを智の自在と名け、無分別後智を以て、一切法の品類に通達して一切智を得るを智の自在と名く。無分別後智を以て自ら證する所の如く他の爲に法門を安立し、理の如く成ずることを得るを法の自在と名く。

論曰　三には無二を相と爲す。有無の二相無きに由るが故に。

釋曰　無二とは謂く有無く、無無きなり。有を常と爲し、無を斷と爲す。有無く、無無きは、即ち是れ不常不斷にして二邊を離る。

論曰　一切の法は所有無し、空相無にあらざるを相と爲すか故に。

釋曰　更に上の語を釋す。一切の法は皆分別の所作にして、悉く所有無しとは、即ち是れ二空の相なるが故なり。有無く無にあらざるは二空の相なるか故に、法身無きこと無きは即ち是れ二空なるか故に、二邊無きを以て法身の相と爲す。

論曰　復次に有爲と無爲と無二なるを相と爲す。

釋曰　無二とは謂く有爲無く無爲無きなり。一切の有流の法は必ず有爲を以て相と爲す。一切の無流の法に二種有り、若し道等ならは有爲を以て相と爲し、擇滅等ならは無爲を以て相と爲す。法身と有爲無爲とは一にあらず異にあらず。是の故に偏へに有爲、無爲を以て相と爲さず。眞如は是れ有爲無爲の通相なるに由り、異なりと說く可からず。眞如は是れ清淨の境なり。有爲無爲

【三】引くとは引發するの義。

釋曰　若し人一切處に施し、一切の物を施し、大悲を以て施せば、則ち施圓滿す。大悲の行施を因と爲すに由りて心の自在を得、一切處の施を因と爲すに由りて命の自在を得、一切物の施を因と爲すに由りて財物の自在を得。

論曰　四には業の自在、五には生の自在。此の二は戒度の圓滿に由りて成ずることを得。

釋曰　業を因と爲し生を果と爲すが故に、此の二は相應す。能く身口の業を制するに由るが故に、業の自在を得。乃至若し分分に斷じて身心に變異無ければ、身口の業は。此の心に由りて成ずるが故に戒度圓滿す。戒度の圓滿に由りて、若し餘生を受けんと欲すれば、意の如く能く引きて、此の業を悉く現前せしむるが故に、業の自在と名く。業の自在に由り、業果の生の中に於ても亦自在を得、六道の類に隨ひて意の如く往生して利益す。若し竟れは意の如く能く[三]捨つ。取捨の二事は功能無礙なり、故に生の自在と名く。

論曰　六には欲樂の自在、忍度の圓滿に由りて成ずることを得。

釋曰　忍に三種有り、一には忍辱忍、二には安受忍、三には通達忍なり。他の毀損の事に於て心壞せざるを忍辱忍と名け、自らの苦事に於て心變異無きを安受忍と名け、正法の甚深の道理に於て心能く明かに證するを通達忍と名く。此の三忍に由りて諸法は皆心に隨逐し、後、諸法の中に於て欲樂する所に隨ひて意の如く成ずることを得。

論曰　七には願の自在、精進度の圓滿に由りて成ずることを得。

釋曰　精進波羅蜜は能く一切の所作の事を度し、未來世に於て一切の所願は意の如く成ずることを得、故に願の自在と名く。

論曰　八には通慧自在、此れ五通の攝する所にして、定度の圓滿に由りて成ずることを得。

釋曰　五通の中に於て、未だ得ざるを得、已に得たるを失はざるが故に自在と名く。又五通に於

【三】捨つとは命を捨つるの義。

釋曰　此の依他性の一分は能く一切法の同一無性に通達し、已に失無きことを得るが故に自在と名く。

論曰　清淨性の分の依他性の轉依を相と爲すが故に、

釋曰　無分別後智に異ることを顯はさんと欲す。一切の分別を離るゝが故に「清淨性の分」と言ふ。此の無分別智は又是れ依他性の一分なり。依他性に二分有り、前に障を滅して無分別の境を顯はすことを明かし、後に一切法に於て自在を得ることを明かす。能く無分別智を顯はさんが爲なり。此の二分は是れ轉依なり。轉依を法身の相と爲す。

論曰　二に白淨の法を相と爲す。

釋曰　一切の法に二種有り、一には黑、二には白なり。黑は卽ち是れ惡、白は卽ち是れ善なり。善の中に自ら四種有り。法身は是れ眞實の善なるか故に「白淨の法を相と爲す」と言ふ。

論曰　六度圓滿するに由りて、法身に於て十種の自在の勝能を得るに至るを相と爲すか故に。

釋曰　六度を修して究竟するに由り、法身に於て十自在を得。此の十自在は是れ法身の勝能にして、卽ち法身を以て性と爲す。六度の究竟に由りて十自在を得とは、其の義云何ん。

論曰　何者か十と爲すや。一には命自在、

釋曰　壽命の中に於て、[一] 修短及び捨を意の如くに成ずることを得。

論曰　二には心自在、

釋曰　生死に於て生を受くるも生死の爲に染汚せられず。

論曰　三には財物の自在、

釋曰　十種の財物は飮食を初と爲し、隨時隨處に意の如くに能く得。

論曰　此の三は施度の圓滿に由りて成ずることを得。

【一】修短とは壽命の長短の義。

釋曰　相等の十義を引いて法身を成ずることを證せんと欲す。法身若し成ずれば餘の二身も亦成ず。故に此の問を爲す。

論曰　若し略して說かば其の相は應に知るべし、五種有り。

釋曰　若し廣く說かば無生無滅等の如く無量の相有り。今は略說するが故に五相有りと言ふ、卽ち十義の中の第一の相の義なり。

論曰　此の中、嗢陀那偈を說く。

釋曰　散の義を攝持せんが爲の故に此の偈を說く。偈の中の十義は後に次第に釋す。

論曰

相と證得と自在と　依止と、及び攝持と　差別と德と甚深と　念と業とは佛身を明かす。

五相とは、一に法身は轉依を相と爲す。

釋曰　法身は卽ち是れ菩薩の轉依なり。

論曰　一切の障及び不淨品の分の依他性滅し已り、

釋曰　障に二種有り、一には具分障、二には一分障なり。菩薩の斷ずる所の一切の智障は、三界の內外に通ずるが故に具分と名く、卽ち是れ一切の障なり。二には二乘の斷ずる所の惑障は、唯だ三界の內に在れば一分障と名く、卽ち是れ不淨品の分なり。並に依他性を以て依止と爲す。治道起る時は卽ち此の二障を斷ず、故に「滅し已る」と言ふ。

論曰　一切の障を解脫し、

釋曰　二分の障已に滅するに由りて、依他性の一分は一切の障を解脫す。

論曰　一切の法に於て自在を得るを能と爲す。

則ち此の二の受用無し。故に應身を以て此のこの受用の因と爲す。變化身と法身應身との異相は云何ん。

論曰　變化身は法身を以て依止と爲す。

釋曰　法身には依止無く、此の身には依止有り。前に言へるが如く、一切の法に於て自在の依止なるが故なり。此れ卽ち變化身は法身に依止するか故に、二身に異り有ることを明かす。

論曰　兜率陀天に住し及び退いて生を受けてより、

釋曰　此の下は化身の體は應身に異ることを明かす。應身は大智・大定・大悲を以て體と爲し、化身は但だ色形を以て體と爲す。所現の色形は先に兜率陀天の中に住し、後人中に生る。先に二十年中陰の生を受くるが故に「退」と言ふ、後、釋迦家に於て生を受く。

論曰　學を受け、欲塵を受け、

釋曰　王の祕密の巧、六十四能等を修習し、受學納妃等を爲し、欲塵を受ることを爲す。

論曰　出家して外道の所に往いて苦行を修し、

釋曰　王位を捨てて鬱陀阿羅々仙人の所に往き、備さに外道の一切の苦行を修す。

論曰　無上菩提を得、法輪を轉じ、大般涅槃等の事の顯現する所なるか故に、

釋曰　後に外道の法を捨てて不苦不樂の行を修し、無等覺を成じ、三乘教を說き、後、方に化を捨つ、變化の事一に非ず、乃至滅後も猶遺形有りて佛事を爲すが故に、「等の事」と言ふ。此等の事を以て化身を顯はす。佛は何の故に先に兜率陀天に住し、後に人中に生ずるや。自身は是れ天人の類なることを顯はさんと欲す。天人は是れ聖道の器なるを以ての故に、天人の師と爲り同類を攝利せんことを示さんと欲するが故に、外道の毀謗を斷ぜんが爲めの故に。

論曰　諸佛如來の所有の法身は其の相云何ん。

論曰　一切の法に於て自在の依止なるか故に、

釋曰　一切法の自在とは謂く十種の自在なり。又因中の十波羅蜜と、果中の一切の不共法とは皆得て已に失はず、意の如く運用するが故に自在と名く。自在は數量すべからず、諸法の數量に隨ひ自在も亦爾り。云何んが此の法は法身に依止することを知るや。淸淨及び圓智を離れず、卽ち如々如々の智なるか故に。

論曰　受用身とは諸佛の種々の土及び大人の集輪の依止して顯現する所なり。

釋曰　土に衆寶の差別有り、數量す可からざるが故に種々と稱す。此の無量の寶土は佛の應身に依りて成ずることを得。諸の菩薩を大人集と名く。是の菩薩衆は善友に親近して正聞し、正思し、正修す等は是れ輪の體なり。聖王の金輪の、能く此より彼に至るか如く、未だ得ざるを得しめ、已に得たるを失はざらしめ、能く上下平行するは此は是れ輪の用なり。菩薩も亦爾り、若し應身を離るれば則ち二事成ぜず、故に此の二事は應身を以て依止と爲す。能依止成ずるに由るが故に所依止顯現す。

論曰　此は法身を以て依止と爲す。

釋曰　法身には依止無く、此の身には依止有り。前に言へるが如く、一切の法に於て自在の依止なるが故なり。此れ卽ち應身は法身に依止するが故に、二身に異り有ることを明かす。

論曰　諸佛の土は淸淨なり、大乘の法を受樂し受用する因なるか故に、

釋曰　菩薩は諸佛の淨土の中に於て、自ら大乘の法を聽受して法樂を受け、他の爲に大乘の法を說きて亦法樂を受く。菩薩は備さに此の二の法樂を受用す。若し應身無ければ則ち此の二の法樂の受用無し。故に應身を此の二の法樂の受用の因と爲す。又釋す、受用に二義有り、一には塵を受用す、卽ち淨土を受用す。二には法樂を受用す、卽ち大乘の法樂を受用す。若し應身無ければ

義を具するが故に三身有り。故に三身を以て智の差別を顯はす。何の法を三身と名くるや。

論曰　一には自性身、二には受用身、三には變化身なり。

釋曰　身は依止を以て義と爲す。能く諸法を持するに由る。諸法は身に隨ふが故に成ずることを得、隨はざれば則ち成ぜざるが故に、身を諸法の依止と爲す。譬へば身根は餘根の依止と爲るが故に身の名を得るが如し。法身も亦た爾り、應化身及び如來の一切の功德の所依なるが故に名けて身と爲す。又身は實を以て義と爲す、破壞せざるか故に實と名く。身は卽ち是れ體なり、體は性を以て義と爲す。此の性は一切位の中に於て改めざるが故に實と名く。實の故に破壞せず。身に二種有り、一に自然に得ると、二に人功にて得るとなり。自然に得とは、經に言へるか如し、若くは佛の出世し、若くは出世せざるも法性は常然なりと。謂く一切の法は二空に由りて空ならず。二空は虛妄に由りて空ならず。此の二法は皆自然に得、故に說いて自性と名く。人功にて得とは、謂く六道の身は、惑に依りて善と惡と不動との業を起すに由り、業に由りて七種の果を得、果に依りて更に惑を生ず、是を人功の所得と名く。如來の身も亦二種の得有り、一には自性得、此れ法身なり。二には人功得、是れ應化の兩身なり。人功の所得に異ることを顯はさんが爲の故に自性身を立つ。自性身に依止して福德智慧の二行を起す。二行所得の果は謂く淨土の淸淨と及び大法樂となり。能く二果を受用するが故に受用身と名く。他の修行地の中に於て、佛の本願の自在力に由るが故に、彼の識は衆生に似て變異して現るゝが故に變化身と名く。

論曰　此の中、自性身とは是れ諸の如來の法身なり。

釋曰　此の三身中、若し自性を以て法身と爲さば、自性に二種有り、定んで何の自性を以て法身と爲すや。一切の障滅するか故に、一切の白法圓滿するか故に。唯だ眞如及び眞智有りて獨存するを說いて法身と名く。身は依止を以て義と爲す。何の法を依止と爲すや。

涅槃なり。無分別智を得て、生死に所有無きことを見れば、即ち涅槃に所有無きことを見る。故に此彼の異り無し。若し此の智を得れば何の功能有りや。

論曰

是の故に生死に於て　捨に非ず非捨に非ず。

釋曰　無我を觀ずと雖も生死を離れず、是れ非捨の義なり。生死に在りと雖も常に無我を觀ず、是れ非捨に非ず。若し爾らば涅槃に於て云何ん。

論曰

涅槃に於ても亦爾り　得も無く不得も無し。

釋曰　生死を離れて別の法無きを涅槃と名く。菩薩は既に生死を得ず、亦た涅槃を得ず、是れ得無き義なり。菩薩は生死に於て常に勝妙にして寂靜なることを觀ず、是れ不得無き義なり。

釋智差別勝相第十の初

論曰　此の如く已に寂滅の差別を說けり。云何んが應に智の差別を知るべきや。

釋曰　前に已に菩薩の解脫と二乘の解脫との差別を說けり。菩薩の解脫知見と二乘の解脫知見とも亦應に差別有るべし。云何んが知るべきや。

論曰　佛の三身に由りて應に智の差別を知るべし。

釋曰　智の差別は是れ菩薩の解脫知見にして、即ち菩提道の究竟の果なり。二乘道の究竟の果を解脫知見と名くるが如し。二乘の解脫知見の中には三身無く、菩薩の解脫知見の中には三身の差別有り。何を以ての故に、二乘は智障を滅すること能はず。一切智無きが故に、淸淨法身を圓滿することを得ず。大慈悲無く、他を利益する事を行ぜざるが故に、應化の兩身無し。菩薩は此の二

釋曰　菩薩の無分別智は無明を滅するに由るが故に、一切の虚妄の法、謂ゆる我相等を捨て、二空の眞如を顯はす。無明の生ずるは是れ凡夫の依にして、無明の滅するは是れ菩薩の依なり。此の偈は滅を轉依の相と爲すことを明かす。

論曰

顯現せざると顯現すと　虚妄と及び眞實とは、

釋曰　虚妄は是れ分別性なり。分別起らざれば卽ち虚妄は顯現せず。眞實は是れ三無性なり。虚妄顯はれざるが故に眞實顯現す。

論曰

是れ菩薩の轉依なり　解脫如意なるか故に。

釋曰　顯現せざると顯現すとは是れ菩薩の轉依なり。此の轉依は卽ち菩薩の解脫なり。解脫を得れば已に復繫縛無し。利他の爲の故に意の如く六道の中に遍行す。二乘の解脫の、永く滅して利他の義無く、首を斬らるれば命必ず續かざるが如きに同じからず。此の偈は虚妄を解脫せる淸淨の法身を明かす。此の二は無分別智に由りて成ずることを得、卽ち三德に就いて轉依を明かせり。

論曰

生死と涅槃とに於て　若し智起らば平等なり。

釋曰　生死と涅槃とは並に是れ分別の所作にして同一の眞如なり。若し無分別智を得れは、此を緣じて平等に起る。

論曰

生死は卽ち涅槃なり　二は此彼無きが故に、

釋曰　不淨品を生死と名け、淨品を涅槃と名く。生死は虚妄にして、人法の二我無きは卽ち是れ

菩提の自性なり。此の轉依には應に知るべし、四相有り。一に生起の依止を相と爲し、二に永不生の依止を相と爲し、三には成熟し思量して知る所の果を相と爲し、四に法界の清淨を相と爲す。生起の依止を相と爲すとは、是れ佛の相續の所攝にして出世道の依止なり。若し爾らざれば、未だ此の轉依に至らず、佛の聖道成ぜず。道理に應ぜず、若し佛道は此の轉依を離れて成ずとすれば、依は未だ轉せざるに道は應に先に成ずべし。永不生の依止を相と爲すとは、一切の惑及び習氣の永く生せざる依止なり。若し爾らざれば、因緣已に聚集し、未だ此の轉依に至らざるに、諸の惑及び習氣は永く生ぜざることは成ぜず。(これ)道理に應せず。成熟し思量して知る所の果の依止を相と爲すとは、尋思を成熟し、及び善く所知の眞如、所知の實際の果に通達す。若し爾らざれば、諸佛の自性は應に更に尋思すべし、應に更に障を滅すべし。法界の清淨を相と爲すとは、一切の相を伏滅したる最清淨の法界の所顯なり。若し爾らざれば、諸佛の自性は應に無常なるべし。應に佛の自性は常住なりと思ふべし。思ふ可からざるを相と爲すことも亦た說くべからず。

論曰　此の中に偈を說く、

釋曰　此の轉依を顯はさんが爲の故に、重ねて偈を說く。

論曰

凡夫に於ては眞を覆ひ　　彼に於ては虛妄を顯はす。

釋曰　見諦の無明は、凡夫に於ては一切法の人無我眞空を覆ふ。「彼に於て」とは謂く凡夫に於てなり。此の無明は彼の心を倒にし、我相衆生相等と及び六塵の相との諸の虛妄の法を見せしむ。此の顯現は無明を其の依止と爲すに因る。

論曰

菩薩に於ては一向に　　虛を捨てて眞實を顯はす、

釋曰　三失有ることを顯はさんと欲するが故に此の問を爲す。
論曰　衆生の利益の事を觀ぜざるが故に。
釋曰　此れ菩薩の恩德を失することを明かす。
論曰　菩薩の法を過離[一]し、
釋曰　如理如量の智と及び智に隨つて起る所の福德とは是れ「菩薩の法」なり。菩薩の智慧の法を行ぜざるを「過」と爲し、菩薩の福德の法を捨遠するを「離」と爲す。此れ智德を失することを明かす。
論曰　下乘の人と同じく解脫を得。此を過失と爲す。
釋曰　但だ惑障を滅するのみにて智障を滅せず。此れ斷德を失することを明かす。
論曰　諸の菩薩は若し廣大轉の位に在れば、何の功德有りや。
釋曰　三德有ることを顯はさんと欲するが故に、更に此の問を爲す。
論曰　生死の法の中に於て、自の轉依を依と爲すに由るが故に、諸の自在を得。
釋曰　無分別智を得て智障の種子を滅す。此の滅は卽ち是れ轉依なり。此の轉依を以て依止と爲し、菩薩は一切法の中に於て十種の自在を得。
論曰　一切道の中に於て能く一切身を現ず。
釋曰　自在を以て依止と爲し、六道の中に於て彼の形類に隨ひて種々の身を現ず。
論曰　世間の富樂に於て、及び三乘に於て、種種の敎化の方便勝能に由りて、能く彼を正敎に安立す。是れ廣大轉の功德なり。
釋曰　富樂は是れ三界の善道なり。先に世間の善道を得しめて、後に三乘の聖道を得しめ、三輪を以て化度して正法に住せしむ。何の法をか大菩提の自性と爲すや。轉依の二乘に異るは是れ大

【一】過離は一本には遠離とあり、唐譯には違越と譯せり。

捨離するが爲の故に。

釋曰　人と境と功能との三義に下劣なり。是れ聲聞人の故に人下劣なり。但だ人無我を見るが故に境下劣なり。心に生死を免離することを求めて自ら三界を出づるも未だ究竟を得ず、又衆生を拯濟すること能はさるが故に、功能下劣なり。身見は是れ聲聞の繋縛なり。此の見を除かんが爲の故に、人無我の觀を修す、苦集を通じて生死と名く。若し人無我を得れば則ち能く苦に背き集を捨つ。

論曰　六に廣大轉、菩薩は法無我に通達するに由るが故に。

釋曰　人と境と功德との三義に皆廣大なり。是れ菩薩人なるが故に、人廣大なり。法無我を觀ずるが故に、境廣大なり。自ら度し他を度すること又能く究竟するが故に功能廣大なり。分別は是れ菩薩の繋縛なり。此の繋縛を除かんが爲の故に法無我觀を修す。法無我は是れ本にして、人無我は是れ末なり。若し法無我を得んには必ず先づ人無我を得よ。復先に得と雖も猶ほ未だ清淨ならず、根本未だ除かざるを以ての故に、法無我を證して清淨なることを得。法無我の境は能く四德を顯はす。故に此の境を觀ずれば八倒を離るることを得。

論曰　中に於て寂靜の功德を觀ずるが故に。

釋曰　謂く生死の中に於て法無我を觀ずるが故に、寂靜の功德と稱す、

論曰　捨と不捨との爲の故に。

釋曰　此れ法無我觀の功能を顯はす。生死の中に於て寂靜を觀ずるに由りて、能く分別を離れ、惑の爲に染せられざる故に煩惱を捨て、生死は寂靜にして眞如と異らざることを見るに由るが故に、生死を捨てず。

論曰　若し菩薩は下劣轉の位に在れば、何の過失有りや。

を修するか如く、今觀を出つるも亦た爾り。

論曰　此の轉は初地より六地に至る。

釋曰　此の中、同じく出入の觀の異り有るが故に、六地を以て其の位と爲す。

論曰　二に修習轉、未だ障を離れざる人に由る。是れ一切の相顯現せず、眞實の顯現する依なるか故に。

釋曰　前位の修習は相に依りて起るも、此の位の修習は無相に依りて起る。已に惑障を離るるも、一切智障を離るゝことは未だ盡くさず。是れ有學の大乘の人、能く此の轉を得。一切の相とは、謂く相相と生相と眞實相となり。此の三相の體顯現せざるは、此の轉依に依止して成ずることを得、三無相の顯現することも亦此の轉依に依止して成ずることを得。

論曰　此の轉は七地より十地に至る。

釋曰　此の中、同じく無相行を修するが故に、四地を以て其の位と爲す。

論曰　四に果圓滿轉、已に障を離れたる人に由る。一切の相顯現せずして、清淨の眞如顯現し、一切相の自在を得るに至るの依なるか故に。

釋曰　三德の具足を果圓滿と名く。已に一切の障を離れたる人は、卽ち是れ諸佛にして、能く此の轉を得。「一切の相顯現せず」とは卽ち是れ斷德なり、一切の相滅するを以ての故に。「清淨の眞如顯現す」とは卽ち是れ智德なり、如理如量の智圓滿するが故に。謂く一切智及び一切種智を具す。「一切相の自在を得るに至る」とは卽ち是れ恩德なり。一切相の中に得る所の自在に依止す。此の自在を得るに由りて意の如く能く一切衆生の利益の事を作す。三德は並に此の轉を以て依止と爲す。

論曰　五に下劣轉、聲聞は人無我に通達するに由るが故に、一向に生死に背くに由りて永く生死を

論曰　此の轉依は若し略して說けば六種の轉有り。

釋曰　若し三乘道及び道果に約して廣く說けば、則ち多くの轉依の義有り。今は略して說くが故に但だ六種有るのみ。

論曰　一には力を益し能を損する轉、隨信樂の位に由り、聞熏習の力に住するか故に。

釋曰　三乘の聖道起るに由りて、阿梨耶識の中に聞熏習の功能の更に增すを、說いて「力を益す」と名く。阿梨耶識の中に於て有する所の諸惑の熏習は、對治の起るに由るが故に復本の用無きを、說いて「能を損す」と名く。此の二事は何の位に、何の因にて成ずることを得るや。若し人願樂位の中に住して、如來の廣大甚深の正敎を說くを聞き、中に於て三信を起し、願樂し、修行し、隨順して違はず。此の損益は聞熏習の力を以て因と爲し、聞思の慧を聞熏習の體と爲し、此の二慧に因りて修慧を生ず。修慧は是れ聞熏習の力なり。若し修慧無ければ本依は則ち轉ずることを得ず。此の力に由るが故に損益の義成ず。若し人已に此の如き轉依を得れば、煩惱行は此の人に於て云何ん。

論曰　煩惱は羞有りて行じ、暫く弱行し、或は永く行ぜざるに由るが故なり。

釋曰　若し人已に此の轉依を得れば、煩惱若し起れば卽ち慚羞を生じ、起るも亦久からず、又復微弱なり、或は永く起らず。何を以ての故に、能く自身を羞じて深く諸過を見るが故なり。

論曰　二に通達轉、謂く已に地に登れる諸の菩薩は眞實と虛妄との顯現を能と爲すに由るが故に。

釋曰　無分別智を得て眞如を證するが故に、通達と名く。此の通達に別の轉有るに由りて地前に異る。若し已に地に登れば、有時は觀に入り、此の通達は眞實の顯現の因と爲る。何を以ての故に、初の通達に明かに眞如を證するか如く、後觀に入るも亦爾り。有時は觀を出で、此の通達は虛妄の顯現の因と爲る。何を以ての故に、先に未だ觀に入らさるに、散心を以て自利利他の俗行

す。凡夫は生死に著し、二乘は涅槃に著す。菩薩は無分別智を得れば生死と涅槃とに差別有ることを見ず。惑を滅すと雖も涅槃に住せず、分別を起すと雖も生死に住せず。故に此の涅槃は轉依を以て相と爲す。此の轉依は即ち依他性に依止す。

論曰　此の中、生死は是れ依他性の不淨品の一分を體と爲し、涅槃は是れ依他性の淨品の一分を體と爲す。

釋曰　此れ二の所依止の義を釋す。本識を依他性と名く。本識若し分別を起せば即ち是れ不淨品なり。此の一分を說いて生死の體と爲す。依他性を分別するか如く、此の性は此の如く有ならず。此の分別に所有無きは即ち是れ淨品なり。此の一分に依りて涅槃の體と爲す。

論曰　本依は是れ淨不淨品の二分を具する依他性なり。

釋曰　分別性は是れ生死、眞實性は是れ涅槃なり。本より以來、此の二品は依他性を以て依止と爲す。即ち依他性を說いて本依と爲す。

論曰　轉依とは、對治起る時此の依他性は、不淨品の分に由りて永く本性を改め、淨品の分に由りて永く本性を成ず。

釋曰　轉依も亦依他性に屬す。三乘の道は是れ對治なり。此の依他性は道未だ起らざる時は見諦等の惑は、能く諸業を起し、惡道の報を感ずるか如きを不淨品と名く。道起りて已後は、此の如きの不淨品は滅して更に生ぜず、故に永く本性を改むと言ふ。此の依他性の道及び道果を淨品と名く。道とは即ち戒定慧なり。道果に二種有り、謂く有爲と無爲となり。有爲とは即ち解脫と解脫知見にして、無爲とは即ち本惑の滅と及び未來の惑の不生となり。道未だ起らざる時には、戒等の淨品は未た成立せず、但だ本性清淨有るのみ。道起るに由るが故に、五分法身及び無垢清淨と相應す。此の如く相應し乃至佛を得て變異有ること無し。故に永く本性を成ずと言ふ。

卷の第十三

釋學果寂滅勝相第九

論曰　此の如く已に依慧學の差別を說けり。云何んが應に寂滅の差別を知るべきや。

釋曰　菩薩道と二乘道とには既に差別有り。道に由りて滅を得れば、菩薩の滅と二乘の滅とにも亦應に差別有るべし。云何が知るべきや。

論曰　諸の菩薩の惑滅は卽ち是れ無住處涅槃なり。

釋曰　二乘と菩薩とは同じく惑滅を以て滅諦と爲すも、二乘の惑滅は一向に生死に背いて涅槃に趣き、菩薩の惑滅は生死に背かず、涅槃に背かず。故に二乘に異る。菩薩の此の滅は四種の涅槃の中に於ては是れ無住處なり。一には本來清淨涅槃、二には無住處涅槃、三には有餘、四には無餘なり。菩薩は生死涅槃の異なることを見ず。般若に由りて生死に住せず、慈悲に由りて涅槃に住せず。若し生死を分別すれば則ち生死に住し、若し涅槃を分別すれば則ち涅槃に住す。菩薩は無分別智を得て分別する所無きが故に無所住なり。

論曰　此の相云何ん。

釋曰　無住處涅槃は何の法を以て相と爲すや。

論曰　惑を捨離すると、生死を捨離せざるとの二の依止する所の轉依を相と爲す。

釋曰　若し菩薩にして轉依の位に在れば、諸惑の與に緣起する處ならざるが故に、惑を捨離すと名く。出觀の位に在れば、必ず分別を起すが故に、生死を捨離せずと名く。若し偏觀ならば、前後に此の二義を明かすも亦た一時に二義を具することを得。若し雙へて二義を觀ずれは、必ず一時に在り。此の二義は並に依他性を以て依止と爲し。無住處涅槃は轉依を以て相と爲す。卽ち二著を轉

業障と善を礙ふると　　現を厭ふと及び惡の增すと　　他を害するとを見て、彼の衆生は菩薩の施を感ぜず。

釋曰　有る衆生は業障有りて菩薩の施を感ぜず。有る衆生は樂具有れば則ち善を礙へ、有る衆生は貧窮に由りて生死を厭惡する心恒に現前し、有る衆生は樂具有れば惡法を生長し、有る衆生は大富樂に由りて能く他を逼害す。菩薩は此の如きの事を見て、自を損し他を損することを離れしめんと欲するが故に、其に樂具を施さず。是の故に彼の衆生は菩薩の施を感ぜず。

論曰　菩薩は若し彼に樂具を施すは、則ち是れ一切の惡法を生長する因緣なりと見るに由り、

釋曰　菩薩は有る衆生は、乃至恒に貧窮の報を受くるも、此の時の中に於て惡法を長ぜざるを見て、菩薩は彼れ恒に貧窮の報を受くることを願ひ、彼れ一剎那の中に於ても富樂の報を受け、而も諸の惡法の因緣を作すことを願はず、謂く自を愛し、他を憎むこと、此の二の因緣は能く惡法を生成す。菩薩若し彼に財物を施せば則ち彼の愛憎を成就す。是の故に菩薩は其に樂具を施さず。此れ即ち菩薩の遍行道智の力なり。

論曰　菩薩は若し彼に樂具を施せば則ち是れ餘の無量の衆生を逼害する因緣なりと見るに由り、

釋曰　菩薩は有る衆生は若し大富を得ば、止（ただ）に自を損ずるのみに非ず、復能く無量の衆生を損惱するを見て、菩薩は彼れ貧窮の苦を受くることを願ひ、彼れ大富樂に由りて衆生の身心及び善根を損惱することを願はず。是の故に菩薩は、其の樂具を施さず。此れ亦是れ菩薩の遍行道智の力なり。

論曰　是の故に、菩薩には此の如きの勝能無きに非らざるも、世間に亦此の如き受苦の衆生有りて顯現す。

釋曰　勝能に三有り、即ち是れ三德なり、一に能く因を得。謂く三學處なり。二に能く果を得。謂く十自在なり、三に能く他を利す、謂く衆生の根欲性等を了別し、若し施に利益有るを見れば則ち施し、若し不施に利益有るを見れば則ち施さず。菩薩は利益を以て[二〇]定と爲し、施不施を以て定と爲さず。施に利益無きに由るが故に、世間に苦を受くる衆生有り。

論曰　此の中、偈を說く。

釋曰　前の五義を攝せんが爲の故に重ねて偈を說く。

論曰

【二〇】定とは行爲を決定する規準の意なり。

論曰　云何が世間の中に於て衆生の重苦の難に遭ふもの有るを見るや。

釋曰　此れ次に難を立つ。若し菩薩の此の如きの三德は、皆一切の衆生を拔濟せんが爲なりとせば、云何が衆生は世の苦難に遭ふや。若し苦を視て救はざれば則ち勝能無し。若し勝能無ければ亦菩薩無けん。苦難に二種有り、謂く内と及び外となり。内外の此の二苦の難に輕有り重有り。若し對治す可きものならば輕と爲し、若し對治す可からざるものは重と爲す。

論曰　菩薩は、彼の衆生は業有りて能く苦報を感じ、勝れたる樂果を障ふること見るに由るが故に。

釋曰　菩薩は有る衆生には業障有りて、菩薩の勝能を障へ能く苦報を感ずることを見る。菩薩は彼に於て此の業の智有り、勝能を懷くと雖も捨てゝ用ひず。此れ卽ち菩薩の業力なり。譬へば江有り八功德水有りて、衆生の飮むに隨ひて人の遮護するもの無きも、餓鬼は業障に由るが故に飮むことを得る能はざるが如し。菩薩は江の如く、財物は水の如く、業障有る衆生は猶餓鬼の如し。業障に由るが故に菩薩の財物を受用することを得ず。

論曰　菩薩は此の如く見るに由り、若し彼に樂具を施せば則ち其の生善を障へんと。

釋曰　菩薩は、有る衆生には業障無けれども、若し貧窮なれば能く善法を生長し、若し富樂なれば則ち放逸にして罪を造ることを見て、菩薩は彼れ現在世に於て貧窮の苦を受くるも、隨順し成就して善法を生起せんことを願ふ。是の故に菩薩は其に樂具を施さず。此れ卽ち菩薩の〔一九〕處と非處との力なり。

論曰　菩薩は彼に樂具無きも、能く現前に生死を厭惡することを見るに由り、

釋曰　菩薩は有る衆生は貧窮の苦に由りて生死を厭惡する心恒に現前するを見て、菩薩は彼れ樂具無きも、厭惡する心を成就して善行に隨順せんことを願ふが故に、其に樂具を施さず。此れ卽ち菩薩の根欲性の力なり。

〔一九〕處と非處とを知る智力にして十力の中の一なり。次の諸句も準して知るべし。

るのみならず、復智慧に依りて福德を修す。福德は即ち餘の五度なり。此の句は自利勝れて二乘に異ることを顯はす。復勝れて異るの義有り、謂く利他の爲に大悲に依りて福德を修す。福德は即ち餘の五度なり。若し人此の二を具すれば何の果報を得るや。

論曰 [一六]世出世の富樂は　此を說いて遠しと爲さず。

釋曰 轉輪王、欲界の上の五天王、色界の梵王と作り、乃至無色界の定及び菩薩の獨り得る所の世間定を世の富樂と名け。二乘の解脫及び無上菩提を出世の富樂と名く。此の如きの果は意の如く得易きが故に遠しと爲さず。諸の菩薩は已に極自在位に至り、恒に慈悲を世間の貧苦の衆生に行ず。菩薩は此の意に由りて財物を施さず、此の意用云何ん。

論曰 [一七]若し菩薩は世間に於て實に有なることも亦復知る可し。

釋曰 此れ菩薩に體有り恩有ることを顯はす。體有るが故に實に有りと言ひ、恩有るが故に知る可しと言ふ。

論曰 若し菩薩は此の如く戒定慧學に依る功德聚と相應すれば、十種の自在に至り、一切の利他の事に於て無等の勝能を得。

釋曰 三學、十度及び世間の一切の功德を攝するが故に「功德聚」と名く。若し菩薩にして未だ得ざるを得、已に得たるを失はざれば「相應す」と名く、即ち因圓滿なり。十種の自在に至るは即ち果圓滿なり。他を利益するの事に、或は二種有り、或は四種有り。二種とは謂く先に思ひ後に行ず。復二種有り、即ち[一八]後の二無畏なり。或は四種有り、前に說くが如し。此の如き無等の勝能を得るは即ち恩德圓滿なり。此の三德の中、因果の二德は自利を顯はし、恩德は利他を顯はす。已に三學を說き竟り、菩薩の三德の圓滿を顯はさんと欲するが故に、此の義を明かせり。

【一六】此の句は、隋譯に似て唐譯と相違す、參照。

【一七】此の論本の一句は他の諸譯に無し。

【一八】四無畏の中の後の二無畏を指す。

の中に於には具さに人法二空に通達して、一切所に於て如理如量の智を生じ、利益衆生分の中に於ては一切衆生の利益の事に依る、謂ゆる自他の身に(依りて)發願し修行す。此の二分中に於て各〻二分を具す。二分は一分に異るか故に一分に非ざる差別と言ふ。

論曰 無住の差別に由る。無住處涅槃に住するが故に。

釋曰 聲聞は涅槃に住著し、凡夫の如きは生死に住著す。菩薩は爾らず。生死涅槃倶に是れ分別の所作と見る。同じく無相の生なるが故に二處に住せず。

論曰 恒の差別に由る。無餘涅槃に於て斷と盡との邊際に墮せざるが故に。

釋曰 二人は無餘涅槃に於て差別有るが故に、智慧に差別有り。二乘は無餘涅槃に於て應化二身無し。他の利益の事を觀ぜざるを以ての故なり。應身無きが故に斷に墮し、化身無きが故に盡に墮す。菩薩は無餘涅槃に於て恒に二身を起して邊際有ること無し。何に況んや法身をや。自利利他の圓滿を以ての故に、應身有るが故に、斷に墮せず。化身有るが故に盡に墮せず。

論曰 無上の差別に由る。實に異乘の此に勝るもの無きが故に。

釋曰 聲聞獨覺乘には上有り、大乘に及ばざるを以ての故に。菩薩には上無し、別乘の大乘に勝るもの無きを以ての故なり。乘は智を以て體と爲す、大乘の中に於ては智を上首と爲すが故に。此の五義に由るが故に、二乘の智と菩薩の智とに差別有り。

論曰 此の中に偈を說く。

釋曰 前の五義を攝し、及び五義の功德を顯はさんが爲の故に、重ねて偈を說く。

論曰

智の五勝に由りて異り　大悲に依りて福を修す。

釋曰 諸の菩薩の智慧は五種の差別に由るが故に二乘に勝る。但だ勝れたる智慧に於て知足せざ

處に應ぜざるを以ての故なり。無分別智に五種の差別有り、前に離るる所の五處に異なる。一には無倒の差別、此に倒無きも、彼には倒有るが故に。二には無分別の差別、此は無分別なるも、彼は有分別なるが故に。三には無住處の差別、此は無住處なるも、彼は有住處なるが故に。四には正行の差別、此の正行は能く惑智の二障を滅するも、彼の正行は但だ能く惑障のみを滅するが故に。五には至得の差別、此は常住の三身を得るを果と爲すも、彼は永斷せる涅槃を得るを果と爲すが故に。

論曰　聲聞の智慧と菩薩の智慧との差別云何ん。

釋曰　已に無分別智と般若波羅蜜とは是れ一なりと說けり。今、更に無分別智の般若波羅蜜と二乘の智とに差別有ることを顯はさんと欲す。

論曰　應に知るべし無分別の差別に由る。

釋曰　聲聞は有分別にして菩薩は無分別なり。應に知るべし、此の義に由るが故に差別有り。

論曰　陰等の諸の法門を分別せざるが故に。

論曰　聲聞は智慧に由りて陰等の諸の法門を取りて境と爲し、有分別の相を起すも、菩薩は陰等の諸の法門を分別せず、無分別の相起るが故に差別有り。

論曰　一分に非ざる差別に由る。二空の眞如に通達して一切所知の相に入るが故に、一切衆生の利益の事に依止するが故に。

釋曰　分に二種有り、一には所知分、二には利益衆生分なり。所知分の中に復二種有り、謂く人法二空なり。利益衆生分の中にも亦二種有り、謂く自身と他身となり。聲聞は所知分の中に於ては但だ人空に通達し、苦等の四諦に於て止だ無流智を生ずるのみ。利益衆生分の中に於ては但だ自身の利益の事に依止して發願し修行す。此の二分の中に於て各〻一分有るも。菩薩は所知分

論曰　何者か非處の修行にして、能く圓滿して所餘の波羅蜜と修習するや。謂く五種の處を離る。一には外道の我執の處を離る。

釋曰　外道の如きは、彼の般若に住して我執を起し、謂へらく今般若に住す、般若は卽ち是れ我所なりと。諸の菩薩は般若に住すれば、則ち是の如くならず。故に我見の執處を離ると言ふ。彼の處に應ぜざるを以ての故なり。

論曰　二には未だ眞如を見ざる菩薩の分別の處を離る。

釋曰　地前の菩薩の如きは、未だ眞如を見ず、無分別を分別して般若波羅蜜と爲し、謂へらく此は是れ般若波羅蜜なりと。若し菩薩にして已に眞如を見て般若波羅蜜の中に在れば、則ち此の分別無し。故に分別の處を離ると言ふ。彼の處に應ぜざるを以ての故なり。

論曰　三には生死涅槃の二邊の處を離る。

釋曰　凡夫衆生の如きは生死の邊に住し、聲聞人は涅槃の邊に住するも、菩薩は般若波羅蜜に住して此の二邊を離る。故に二邊の處を離ると言ふ。彼の處に應ぜざるを以ての故なり。

論曰　四には唯だ惑障を滅するのみにて知足する行處を離る。

釋曰　聲聞の如きは惑障の滅する處に於て知足を生じ、餘處に於て復欲樂すること無し。謂く知障の滅する處の如きなり。菩薩は卽ち是の如くならず。智障を滅せんが爲に般若波羅蜜を修學するが故に、知足の行處を離ると言ふ。彼の處に應ぜざるが故なり。

論曰　五には衆生を利益する事を觀ぜずして無餘涅槃に住する處を離る。

釋曰　獨覺の如きは、衆生利益の事を觀ぜずして無餘涅槃に住す。菩薩は則ち是の如くならず。般若波羅蜜に住して衆生利益の事を捨てず。般涅槃するも亦は有餘、亦は無餘なり。法身に於ては是れ無餘にして、應化身に於ては是れ有餘なり。故に無餘涅槃に住する處を離ると言ふ。彼の

無し。

釋曰　若し菩薩は無分別觀の中に在れば、一切の義は、或は內に、或は外に、或は內外に、復顯現せず。是の故に應に知るべし、諸塵は皆實に有に非ざるを。若し外塵無ければ則ち內識無し。何を以ての故に、所識既に有らず、能識云何が有らん。此の義實に爾り。所識有に非ざるが故に能識も亦た有に非ず。應知勝相の中に已に具さに此の義を顯はせり。此の智は般若波羅蜜と一と爲すや、異と爲すや。

論曰　此の無分別智は卽ち是れ般若波羅蜜なり。名は異るも義は同じ。

釋曰　名同じからざるを以て異と爲さず、義同じきを以て一と爲す。一なるを以ての故に「卽ち是れ」と言ふ。若し名異らば、義云何が同じきや。如來は法を立つるに、自性の義に約して諸法を攝するを同と爲し、名を以て攝して同と爲さず。何を以ての故に、名は諸方に於て同じからざるも、義は諸方に於て則ち同じ。名は是れ假立にして、此の義に目けんが爲めの故に方に隨ひて同じからず、義には定性有るが故に義は是れ同じ。行は義に依りて成じ、名に依りて成ぜず。云何が義は是れ同なりと知るや。

論曰　經に言へるが如し、若し菩薩にして般若波羅蜜に住すれば、非處の修行に由りて、能く所餘の波羅蜜を修習し圓滿す。

釋曰　無分別智と般若波羅蜜と異らざることを成就せんと欲するが故に、般若波羅蜜經を引いて證と爲す。菩薩は般若波羅蜜を修して退失無きが故に「住す」と名く。又菩薩は餘の波羅蜜を修せんと欲して、先に般若は波羅蜜を修して方便と爲し、餘の波羅蜜は般若波羅蜜の中に住して成ず。故に「住す」と言ふ。菩薩は般若波羅蜜の中に住して、五處を離れて餘の波羅蜜を修行すれば、一一の波羅蜜の中に於て若干の時を經て修習し、成就することを得しむるが故に「圓滿す」と稱す。

ひて方さに成じ遂ぐることを得。若し深行の菩薩ならば、衆生を利益する事を作さんと欲すれば、現在には發願し及び觀に入り觀を出づることを須ひず。但だ本願力に由りて、作さんと欲する所に隨ひて一切皆成ず。若し聲聞等にして九定の自在を得れば、此の定の自在に因りて六通の自在を得、一物の中に於て、願と樂との力に隨ひて各〻能く變異して無量種と爲す。若し諸塵に實に自性有らば、此の事は則ち成ずることを得ず。譬へば[一四]二空の如く、一切の自在も變異すること能はざる所なり。何を以ての故に、眞實なるを以ての故なり。此の偈は外境に約して諸塵の無自性なることを顯はす。內境の無自性に於ては其の義云何ん。

論曰　簡擇を成就せる人と　有智にして定を得たる人とは　內に於て諸法を思ふに　義の如く顯現するが故に。

釋曰　簡擇とは卽ち是れ毘婆舍那にして、三無流根を得たるを成就と名く。須陀洹向より乃し阿羅漢果に至るまでを簡擇を成就せる人と名く。有智の人とは謂く菩薩なり。聞思位を以て智人と爲さず、但だ修位に入れるを取りて智人と爲すことを顯はさんと欲するが故に、得定と言ふ。聲聞及び菩薩は、內に於て一切法を思量する時、二人は十二部經の法を思惟するが如く如く、所顯の義は此の如く此の如く、其の義は此の二人に於て顯現することを得。若し其れ佛義を思惟すれば、種々の法の中に於て佛義顯現す。佛義の顯現する如く、色等の五陰及び無常等の[一五]十想も亦た此の如く顯現す。此の偈は內境に約して諸塵の無自性を顯はす。云何が外內の境は皆無自性なることを知るや。

論曰　無分別を修する時　諸義顯現せず　應に知るべし塵有ること無し　此に由るが故に識

【一四】二空とは我空と法空の理をいふ。

【一五】十想とは無常想、苦想無我想、食不淨想、一切世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離欲想、盡想なり。大智論第二十三卷・十想釋論に詳解せり。

論曰　若し塵にして境と爲ることを成ずれば　無分別智無けん。

釋曰　若し塵に體有りて境と爲るの義成ずとせば、則ち無分別智有ること無し。何を以ての故に、所分別の境若し實に有ならば、能分別は則ち倒を成ぜずして、無分別は則ち倒を成ず。若し爾らば一切の凡夫は皆顚倒を離れ、一切の聖人は皆顚倒を成ぜん。斯れ何の失か有る。

論曰　若し此れ無ければ佛果の　應に得べきことは是の處無けん。

釋曰　無分別智は是れ正道なり。若し此の智無しと言ひ、而も應に佛果を得べしと說かば、是の處有ること無し。此の執は阿含及び道理に違ふ所と爲る。是の故に應に知るべし、諸塵は體無くして分別すべし。分別す可き體は無なるに由るが故に、分別も亦た無し。故に無分別智は如理にして無倒なり。復次に別の道理有り。諸塵は體無くして分別す可きことを證す。

論曰　自在を得たる菩薩は　願と樂との力に由るが故に　意の如く地等成ず　定を得たる人も亦爾り。

釋曰　菩薩は定に於て入住出の自在を得、通慧に於て變異・折伏・通達の自在を得、諸地に於て十自在を得。菩薩は先に衆生を利益する事を作さんと發願し、無分別智を得て後出觀して、菩薩の意に隨ひて作す所有らんと欲すれば、一切皆成ず。或は現在の願に由り、或は本願に由る。願を因と爲し、樂を果と爲す。先に衆生を利益する事を作さんと發願し、後、心の欲樂する所に隨ひて皆成ぜざること無し。謂く地等を轉變す。若し淺行の菩薩ならば、衆生を利益する事を作さんと欲すれば、現在に於て先づ願を發し、發願し竟つて即ち眞觀に入り、出觀の後、欲樂する所に隨

釋曰　譬へば一江を四の衆生の分別に約すれば、則ち四境を成ずるが如し。餓鬼は謂く膿血と爲し、魚等の畜生は謂く住處と爲し、人は謂く水と爲し、天は謂く是れ地なりと、分別する所に隨ひて各一境を成ず。若し境是れ實ならば、應に互に相ひ妨ぐべし。一處一時に並びに四境を成ず。當に知るべし、皆是れ意識分別の所作なることを。若し汝、四識並びに緣ずと許さば、識は境を離れず、汝は亦た應に一時一處に並びに四境有ることを許すべし。若し並に四境有りと許さば、則ち應に一切の分別は皆實有に非ざることを信ずべし。若し實の境無ければ、識は應に自から生じて境を緣じて起らざるべし。若し爾らば唯識の中に四難、還つて成じ、四義は成ぜず。此の難は[三]彼の論に釋するが如し。識有りて境無しとせば、斯れ何の失か有る。此の義を顯はさんが爲の故に、重ねて偈を說く。

論曰

過去と未來に於て　夢と二影との中に於て　智は非有の境を緣ず　此の無は轉じて境と爲る。

釋曰　過去未來の事は但だ名のみ有りて體無し。若し心此の二世を緣ずれば、但だ識のみ有りて境無し。夢中の所緣も亦た爾り。影に二種有り、一には鏡中の影、二には定中の影なり。定心の起す所の青黃等の相は、心を離れて別に此の法無きが故に、說いて影と名く。若し心此の二の影を緣ずれば、亦但だ識のみ有りて境無し。若し此の四境無ければ識は何を所緣となすや。

(**論曰**　此の無は轉じて境と爲る。)

釋曰　外塵は本來是れ無にして、識の變異の所作なり。識は卽ち此を緣じて境と爲すが故に、無は轉じて境と爲ると言ふ。此の義已に立てば、應に復疑ふべからず。何を以ての故に、若し此の理を撥無すれば、成佛の義無し。此の義を顯はさんが爲の故に、重ねて偈を說く、

【三】彼の論とは二十唯識論を指す。

て言說を立つ、故に戲論と名く。言說に四種有り、卽ち是れ四謗なり。若し有と說かば卽ち增益謗なり。若し無と說かば卽ち損減謗なり。若し亦有亦無と說かば卽ち相違謗なり。若し非有非無と說かば卽ち戲論謗なり。菩薩は無分別智を得、言說を以て顯示す可からざるが故に、無戲論無分別と稱す。何を以ての故に、世間智を出過するが故に、又世間智の知る所に非ざるが故に。

論曰　無分別後智に五種有り、謂く通達と憶持と成立と相雜と如意との顯示の差別の故に。

釋曰　此の五は事に約して差別有り。後得智は能く顯示するを以て性と爲す。此の中、顯示とは覺了を以て義と爲す。此の智に由りて、通達の後時に於て此の如きの事を顯示し、我れ觀の中に於て此の如く此の如きの事を知見せりと云ふが故に、通達顯示と稱す。此の智に由りて出觀の後時に、通達する所の如く憶持して退失せざるが故に、憶持顯示と稱す。此の智に由りて自ら通達する所の如く能く正敎を立て、他をして修行せしむるが故に、成立顯示と稱す。此の智に由りて、菩薩は先の如く一切の法を緣じて境と爲し、謂く[二]先の雜境界の智の如く此の境を觀察すと。此の觀察に由りて卽ち轉依を得るが故に、相雜顯示と稱す。此の智に由りて菩薩は已に轉依を得。菩薩の思欲する所の如きは意の如く、皆な成ず。謂く地等の[三]諸大に於て轉じて金等と爲すが故に、如意顯示と稱す。

論曰　無分別智を成立せんが爲に、復別偈を說く、

釋曰　已に無分別智の差別の義を說けり。更に無分別の義を成立せんと欲するが故に、重ねて偈を說く。

論曰

餓鬼と畜生と人と　諸天等は應の如く　一境に心異なるが故に　彼の境界の成ずることを許す。

【二】此の句は本文難解なり、隋唐兩譯には相雜を和合となし、釋文明瞭なり、參照。
【三】諸大とは地水等四大種をいふ。

無分別智を、今當に其の差別を說くべし。

論曰 此の中無分別に三種有り、一には加行無分別智、二には無分別智、三には無分別後智なり。

釋曰 自性無分別の中に於て、若し總說すれば此の三種有り。此の三種は卽ち道の方便と道の正事と道の究竟とを顯はす。謂く方便に入り、方便に住し、方便を出づ。若し因に約し、人に約し、事に約して別說すれば則ち十一種有り。

論曰 加行無分別に三種有り。謂く因緣と引通と數習との力にて、生起する差別の故に。

釋曰 此の三因に約して差別有り、加行無分別は三力に由りて成ず。或は因緣の力に由り、或は引通の力に由り、或は數習の力に由る。此の三力に由りて成ずるが故に、生起に差別有り。若し因緣力に由りて成ずれば、卽ち是れ性力に由りて成ず。若し引通力に由りて成ずれば、卽ち是れ宿生力に由りて成ず。若し數習力に由りて成ずれば、卽ち現在に於て功力を作すに由りて成ず。

論曰 無分別智も亦た三種有り、謂く知足と無顚倒と無戲論となり。無分別の差別の故に。

釋曰 此の三は、人に約して差別有り、卽ち凡夫・二乘・菩薩なり。知足無分別とは、應に知るべし、聞思の二慧の究竟を得るに由るが故に、知足に由るが故に無分別なり、故に知足無分別と說く。若し[九]凡夫の菩薩は聞思慧の究竟事に至り、應に得べき所有るは皆悉く已に得て、知足の心を生ずるが故に無分別なり。復次に世間の衆生に知足無分別有り。此の知足に由りて彼の衆生は上有頂に生じ、中に於て計して出離究竟せりと爲し、此を過ぐれば更に行く處無しと、知足の心を起し、復進んで修せざるが故に無分別なり。無顚倒の無分別とは、謂く二乘なり。彼[一〇]已に眞境の、無常等の四種の無倒の相に通達するに由りて、常等の四の倒相無きに由り、永へに更に分別せざるが故に、無分別なり。無戲論の無分別とは謂く諸の菩薩なり。諸の菩薩は一切の法を分別せず、乃至無上の菩提を分別せず。何を以ての故に、諸法に言說無きが故に、無言說の中に於て强い

【九】凡夫の菩薩とは隋譯に「此の菩薩は凡夫地に住在すれば」とあり、唐譯亦同じ、故に今も凡夫地に在る菩薩の意なり。

【一〇】此の句は本文には「由彼已通達眞境、無常等四種無倒相、由常等無倒相、永不更分別故無分別」とあるも意通し難し、後の無倒相の無の字は恐くは由の下に置くべきか、他の諸譯に參照して國譯せり、唐譯參照。

故に智に非ざるに非ずと說く。復次に、此の智は分別の中に於て生ぜざるに由るが故に、非智と說き。此の智は餘處に於て生ぜず、但だ分別の法如の中に於てのみ生ずるに由るが故に、智に非ざるに非ずと說く。此の偈の前句は卽ち後句を釋す。

(**論曰**　境と差別無き、智を無分別と名く。)

釋曰　若し智にして、能取所取の二相に由りて起らば分別有り。加行智を無分別と名けざるが如し。若し智にして所取と異らず平等平等にして起らば、是を無分別智と名く。餘經の中に於て、佛は一切法の自性は無分別なりと說けり。此の道理を顯はさんと欲するが故に、重ねて偈を說く。

論曰

佛は一切法の　自性は無分別なりと說く　所分別無きが故に　彼に無分別も無し。

釋曰　一切法の自性は分別無しと。此の義は云何が知るべきや。此の義を證せんが爲の故に第三句を立つ。分別すべき類は實に有にあらざるの義に由る。無分別に至れば法は眞實に是れ有なるが故に、一切法の自性は無分別なりと說く。若し所分別は有ならざるに由るが故に、一切法の自性は無分別なりとせば、云何が衆生は自性解脫せざるや。

(**論曰**　彼に無分別無し。)

釋曰　諸法の自性は無分別なるに由り、智は境の如く無分別なり。若し爾らば何が故に自性解脫せざるや。實に爾り、諸法の自性は無分別にして、智も境の如く亦た自性無分別なり。而も自性解脫を得ず。智を修得して能く此の法を證す。非智の障に由るが故に智起ることを得ず。必ず須らく智を修し障を滅して、方に解脫を得べきが故に、自性解脫の義無し。自性無分別の中に於て、若し分別を起せば、此を非智と爲す、卽ち是れ無明なり。自性無分別の法の中に於て、有る所の

生を利益する事を起す。利益の事に二種有り、一には化身の利益、如意寶の如し。二には說法の利益、猶天鼓の如し。此の無分別智の甚深の義云何ん。境に約して甚深の義を立つ。此の智は當に所分別の依他性を緣じて起るべしと爲すや、當に餘境を緣じて起るべしと爲すや。若し爾らば何ぞ妨げん。若し所分別の依他性を取りて境と爲さば、此の智は無分別の義成ぜず。若し餘境を緣じて起るとすれば、此の境を離れては則ち別の餘境無し。餘境を緣ずるの義も亦た成ぜず。復次に、若し餘境を緣じて起らば、境智無差別の義は則ち成ぜず。

論曰　此に非ず此に非ざるに非ず　智に非ず智に非ざるに非ず　境と差別無き　智を無分別と名く。

釋曰　此の智は依他性を緣じて境と爲さず。何を以ての故に、此の智は分別を以て境と爲さゞるが故に。故に此に非ずと言ふ。亦餘境を緣ぜず。何を以ての故に、此の智は但だ依他性の法如を緣じて境と爲すが故に。[七]法と及び法如とは一異と說くべからず。非淸淨と淸淨の境なるが故に、通相と不通相と爲すが故に、識を緣ぜざるに非ざるが故に、此に非ざるに非ずと言ふ。復次に、此の智は當に是れ智なるべしと爲すや、當に非智なるべしと爲すや。若し爾らば何ぞ妨げん。若し智を性と爲さば、云何が分別せざる。智は是れ分別の性なるを以ての故に。若し非智を性と爲さば、云何ぞ智と稱せん。無分別は智性に非ざるが故に、云何ぞ說いて無分別智と爲さん。

（**論曰**　智に非ず智に非ざるに非ず。）

釋曰　云何ぞ智に非ずと說くや。加行及び後得智の中に於ては生ぜざるが故に、智に非ずと言ふ。若し爾らば云何ぞ非智の惑を成ぜざる。此の義も亦た成ぜず。何を以ての故に、非智の惑は不正思惟より生じ、能く[八]欲等の流を起す。此は無分別加行智より生じて、能く無分別後得智を生ず。

【七】法とは依他の諸法、法如とは依他の實性としての眞如をいふ。

【八】欲等とは欲流、有流等の四暴流をいふ。

開くが如し。此の偈は境を取らざると境を取ると異り有るが故に差別有ることを顯はす。此の二智の威德の差別云何ん。

論曰

空の如く無分別には　染と礙と異と邊と無し、　空中に色の現ずが如く　後得智も亦た爾り。

釋曰　譬へば虛空に四種の德有るが如し。一には無染、二には無礙、三には無分別、四には無邊なり。根本智も亦た爾り。一切の世間の八法七流等の染すること能はざる所なり。是れ彼の對治なるに由るが故に、故に無染と說き。一切の境に於て、如理如量に障無く著無きが故に、無礙と說き。一切の法に於て一味の眞如の空遍滿するが故に、故に無分別と說き。一切の諸邊を離れ、中道にして量るべからざるが故に、故に無邊と說く。譬へば色の空中に於て顯現するに、空は分別すべからざるも、色は分別すべきが如し。後得智も亦た爾り。因は分別すべからざるも、此の智は分別すべし。謂く此は是れ能分別にして、亦た是れ所分別なりと。若し佛果は是れ無分別智の所顯にして、衆生を分別することを離るれば、云何が衆生利益の事を作して、理の如くにして不倒なることを得るや。無功用の作事を顯はさんが爲の故に重ねて偈を說く。

論曰

譬へば摩尼と天鼓とは　思無くして自事を成ず　此の如く分別せざるも　種々の佛事を成ず。

釋曰　譬へば如意寶には分別有る事無きも、能く衆生の願求する所の如き事を作すが如し。譬へば天鼓は人の扣擊すること無きも、能く彼の衆生の欲する所の意に隨ひて、四種の聲を出すが如し。謂く[六]怨來と怨去と受欲と生厭となり。諸佛も亦た爾り。已に分別を離るゝも、能く種々の衆

【六】怨敵來る時に天鼓鳴り亦去る時に鳴り、天鼓鳴りて諸天の心勇み、天鼓鳴りて修羅畏怖すと、今の四聲亦其の意なり。

未だ識らずして解を求むるが如く　　讀んで正に法を受くるが如く　　法を受けて義を解するが如く　　次第に三智に譬ふ。

釋曰　譬へば人の未だ論文を識らずして但だ文字を識らんことを求むるが如し。加行無分別智も亦た爾り。未だ眞如を識らずして、但だ眞如を見る方便を學ぶ。此れ未だ解せざることを顯はす。譬へば人の已に文字を識るも未だ文字の義を了せず、正に文字を讀みて但だ能く法を受くるのみにて未だ義を受くること能はざるが如し。根本無分別智も亦た爾り。自利の功用已に成ずるも、未だ利他の功用有らず。此れ已に解することを顯はす。譬へば人の已に文字を識り、又已に義を了じて正に思の中に在るが如し。是の人は具さに二能を有し、能く文字を識り又能く義を了す。功用の究竟せるを以ての故なり。無分別後智も亦た爾り。已に眞如に通達し又已に觀を出で、前に見る所の如く解說して無倒なり。此れ解已に究竟せることを顯はす。此の偈は學の功に異有るが故に差別有ることを顯はす。前に已に三種の次第を明せり。謂く未解と已解と及び解究竟となり。前の一には境無く、後の二には境有り。謂く法と及び義となり。後の二に境有らば異相云何ん。

論曰　人の正に目を閉づるが如く　　無分別も亦た爾り、　　人の正に目を開くが如く　　後得智も亦た爾り。

釋曰　此の偈は、但だ根本智及び後得智のみは依止同じからざるに由るが故に差別有ることを顯はす。根本智の依止は心に非らず非心に非らざるも、後得智は則ち心に依止するが故に、二智は境に於て異有り。根本智は境を取らず、境と智と異り無きを以ての故なり。後得智は境を取る、境と智と異り有るを以ての故なり。根本智は境を緣ぜず、目を閉づるが如し。後得智は境を緣ず、目を

因緣無きが故に説くこと能はず。後は已に得て觀より出づるに由るが故に、前に見る所の如く能く説いて倒無し。此の偈は、三種には無言説と有言説と異るが故に差別有ることを顯はす。

論曰　愚の塵を受けんことを求むるが如く　愚の正に塵を受くるが如く　非愚の塵を受くるが如く　三智の譬も此の如し。

釋曰　未だ物類を識らず、之を名けて愚と爲す。愚の譬は次第に三義に譬ふること前に釋するが如し。此の偈は無分別と有分別と異なるが故に差別有ることを顯はす。無言説は無分別を以て因と爲し、無分別に由るが故に言説無し。有言説は有分別を以て因と爲し、有分別に由るが故に言説有り。愚の譬は即ち無分別を顯はす。此の三智の境の虚實は云何ん。

論曰　五の塵を受けんことを求むるが如く　五の正に塵を受くるが如く　非五の塵を受くるが如し。　三智の譬も此の如し。

釋曰　五の名は無分別の眼等の五識に目く。譬へば人の五識の中に在りて五塵を求覓するに、或は實を縁じ、或は虚を縁ずるが如し。意識と五識とは相ひ間りて起るが故に。加行無分別智も亦た爾り、或は一分を證するを實と爲し、或は證せざるを虚と爲す。譬へば人の正に五識の中に在りて眞實の境を得るも、分別無く言説無きが如し。根本無分別智も亦た爾り。眞實の境を得るも分別無く言説無し。譬へば人の意識の中に在りて、但だ先に受くる所の塵を縁ずるを虚境を縁ずと名け、分別有り言説有るが如し。無分別後智も亦た爾り。虚境を縁じて分別有り言説有り。此の偈は三種には、所縁の境に實有り虚有るが故に差別有ることを顯はす。

論曰

ず。

釋曰　虛空は水も濕すこと能はず、火も然くこと能はず、風も動ずること能はず。無分別智の無染なるも亦た爾り。變異無きが故に無染と說く。何を以ての故に。菩薩は此の智に依りて一切衆生の利益の事を觀ず。此の智力に由りて菩薩は故さらに心を作して三界に入り、種々の本生を現ず。生れて世の中に在りと雖も、世間の八法の變異する所と爲らず。八法とは、謂く得と不得と好名と惡名と讃と毀と樂と苦となり。此の八法に因るが故に欲瞋を起すも、欲瞋は能く變異すること能はず。欲瞋の根本無明も能く動ぜしむること能はず。何を以ての故に、虛妄は能く眞實に對すること能はざるが故なり。此の智は無分別智より生ずるが故に無分別と名く。此の偈は後得智の能く報障を免るゝことを顯はさんが爲なり。生死涅槃の二處に於て任せず、但だ利他を爲すのみ。此れ即ち後得智の功德なり。此の三種の無分別の差別云何ん。此の差別を顯はして相濫せざらしめんが爲に。是の故に譬を立つ。

論曰

瘂の塵を受けんことを求むるが如く　瘂の正に塵を受くるが如く　非瘂の塵を受くるが如し。　三智の譬は此の如し。

釋曰　譬へば瘂人の諸塵を求覓するも、能く塵を說くこと能はざるが如し。加行無分別も亦爾り。方便道の中に在りて眞如を尋思するも、而も說くこと能はず。譬へば瘂人の正に諸塵を受け、已に塵を得と雖も、塵を說くこと能はざるが如し。根本無分別も亦た爾り。正に眞如觀に在りて、證見する所の如く亦說くこと能はず。譬へば非瘂の人の正に諸塵を受け、又能く塵を說くが如し。後得智も亦た爾り。其の見る所の如く能く正教を立て、他の爲に解說す。初は未だ得せずして得に向ひて分別を離る、說の因緣無きが故に說くこと能はず。次に正に得て分別を離るゝも、說の

れば、伴類有るが故に重と名く。此の惡業に因るも染汚すること能はず。若し人正說を聞くによりて無分別智に於て信樂を生ずれば、此の信樂に由りて四惡道の業を破壞す。何を以ての故に、惡業は非理に依りて起り、信樂は是理より生ず。非理に依りて起るが故に虛にして、是理によりて生ずるが故に實なり。虛は能く實に對すること能はず。是の故に破壞す。此の偈は加行無分別智は能く四惡道の業を對治することを顯はす。惡業と相雜せざるに由るが故に、此れ即ち加行の功德なり。根本無分別智の功德と及び清淨とは云何ん。

論曰

清淨なること虛空の如し　此れ無分別智にして　一切の障を解脫し　得及び成就に由る。

釋曰　虛空の烟雲等の四障を離るゝが如きは、世間に說いて清淨と爲す。無分別智の清淨も亦た爾り。何の法を離るゝが故に清淨なることを得るや。

(**論曰**　一切の障を解脫す。)

釋曰　一切の障とは、謂く皮肉心の三障なり。或は、一闡提・外道・聲聞・獨覺の四德の障なり。此の如き障を解脫するが故に清淨なり。此の解脫は何の因によりて成ずることを得るや。

(**論曰**　得及び成就に由る。)

釋曰　諸地の至得と相應するに由り、第十地の中に於て因成就するに由り、佛地の中に於て果成就するに由る。故に一切の障を解脫することを得。此の偈は根本無分別智の、能く一切の障を對治することを顯はす。此れ即ち根本の功德なり。無分別後得智の功德及び無染は云何ん。

論曰

虛空の如く染無し　是れ無分別智にして　若し世に出現するも　世法の染する所に非

論曰

諸の菩薩の究竟は　淨の三身を得るに由る　是れ無分別智にして　勝自在に至るが故に。

釋曰　究竟に二種有り。一には清淨の究竟、二には自在の究竟なり。清淨の究竟とは、初地に始めて清淨を得、後、地々の中に於て轉々して清淨にして、十地に至り究竟して清淨なり。譬へば金を錬るが如し。此の清淨に由りて菩薩の得る所の三身は、後々に轉じて清淨なり。自在の究竟とは、但だ三種の清淨身の究竟を得るのみにあらず。復た別の究竟有り、謂ゆる十自在なり。論に後に説くが如し。此の十自在は後々に轉勝す。此の二種の法は最後に極勝す、是の無分別智の得る所の究竟を增上果と名く。無分別智の功德は云何ん。無分別に三種有り。一には加行無分別、二には根本無分別、三には後得無分別なり。云何が加行は無分別の名を得るや。先に他より無分別智は是れ眞の菩薩なりと聞くも、菩薩は未だ眞の道理を證せざれば、但だ此の智に於て信樂の心を起すのみ。此の信樂の心に依止するに由り、後に方に此の無分別智の理に入度することを得。無分別智は此の信樂より生起するが故に、此の信樂を説いて加行無分別と爲す。此の加行無分別の功德を無染と謂ふ。其の譬へ云何ん。

論曰

不染なること虛空の如し　此れ無分別智にして　種種の重惡業　唯だ信樂するに由るが故に。

釋曰　此の無分別智は清淨にして無染なり。譬へば虛空の如く、四塵の爲めに染せられず。何の法か染すること能はざる、謂く種々の重惡業なり。身口意より生じ、見修道の異有りて、十惡の差別有るが故に種々と名く。極重の煩惱は緣と爲りて起り恒に作す。若し作して悔心無く對治無け

の果は是れ化身なり。正體無分別は初地より乃し佛果に至るを、皆至得と名く。若し正體無分別の所得の果報に依れば、是れ應身なり。果報若し爾らば、此の等流果は云何ん。

論曰　菩薩の等流果は　後々の生の中に於て　是れ無分別智にして　展轉して增勝するに由る。

釋曰　果は或は因に等しく、或は因に勝る。此の果は同類を以て因と爲す、是を等流果と名く。無分別智の等流果は二の圓聚の中に於て初地を轉じて二地と爲し、乃至十地を轉じて佛を成す。後後の位の中に於て轉增し轉勝す。初地は二地の同類因と爲り、二地は是れ初地の等流果なるが如く、諸地悉く爾り。利他に於て增と爲し、自利に於て勝と爲す。又學位を增と爲し、無學位を勝と爲す。無分別智の出離して成就を得る義云何ん。

論曰　諸の菩薩の出離は　得と成と相應するが故に　是れ無分別智にして　應に知るべし十地に於てなり。

釋曰　惑と業とを滅するを出と爲し、果報を滅するを離と爲す。即ち是れ有餘無餘の二種の涅槃なり。出は是れ離の義、離は是れ出の義なり。何の故に重ねて說くや。離に三義有るに由るが故に重名を作す。一には永離、二には上離、三には決離なり。無分別智は出離の中に於て二義と相應す。一には得と相應し、二には成就と相應す。此の二の相應は應に知るべし、十地を出です。初地に於て始めて無分別智を得るを得と相應すと名け、初地より後乃し十地に至る無數劫に於て、無分別智を修し乃至究竟するを成就と相應すと名く。此の無分別智は二道に藉り、三阿僧祇劫に於て修學す。何の法を以て究竟と成すや。

別と後智とは是れ能攝持なり。菩薩は是れ所攝持なり。何の法か是れ無分別智の伴類なりや。

論曰　諸の菩薩の伴類は　是れ二種の道なりと說く　是れ無分別智にして　五度の品類なり。

釋曰　伴類は相助を以て相と爲す。相助とは共に一事を成ずるが故に相助と名く。一事とは是れ菩提の果なり。二種の道とは是れ菩薩の伴類にして謂ゆる資糧道及び依止道なり。施等の四波羅蜜は是れ資糧道なり。定波羅蜜は是れ依止道なり。何を以ての故に。四波羅蜜より生ずる所は善法にして、此の善法は般若波羅蜜を生ず。此の般若波羅蜜は定に依止して生ず。般若波羅蜜は即ち是れ無分別智なり。未だ無上菩提を得ざるに、其の中間に於て常に能く無分別智乃至極果を生起す。離せば則ち五度有り、合すれば則ち二道を成ず。能く第六度を助け、共に一の極果を成ずるが故に說いて伴類と爲す。若し無分別智は二道に依りて成ずれば何の果報を得るや。

論曰　諸の菩薩の果報は　佛の二の圓聚に於て　是れ無分別智にして　加行と至得とに由る。

釋曰　但だ果のみにして報に非らざるもの有り、是れ果是れ報なるもの有り。若し因より生じて共用する者ならば果と名け、若し因より生じて獨用する者ならば果報と名く。果は是れ生の義、報は是れ熟の義なり。化應の二身を佛の二の圓聚と名く。無分別智の果報成熟すれば、佛の二の圓聚の中に在り。若し果にして無分別智の加行の中に在りて生ずれば、此の果は化身に屬す。若し果にして無分別智の至得の中に在りて生ずれば、此の果は應身に屬す。云何んが知るや。

(**論曰**　加行と至得とに由る。)

釋曰　前に無分別に三種有ることを說けり。一に加行。二に正體、三に後得なり。加行無分別に自ら二種有り。一には地前に在り、二には登地以上に在り。若し此の二處の加行に依れば、所得

論曰　字字相續するが故に　相應に由りて義成す。

釋曰　字字相續すとは即ち第一の相應なり。此の相應に由りて即ち餘の二の相應具はる。此の三の相應の故に自義を得るを、相應に由りて此の義成ずることを得と說く、譬へば眼根等の如し。言辭相續して說く中に於て、衆生は執して以て義と爲すが故に、說いて相應と名く。此の義は是れ所分別なり。是の故に所分別は但だ言說有るのみ。義も亦た但だ言說有るのみ。若し一切の法は言說すべからざれば、此の義云何んが成ぜん。

論曰　言說を離れて智慧は　所知に於て起らず、

釋曰　若し人未だ方言を了別せざれば、所言の境に於て智慧生ぜず。若し汝、說言の中に於て言ふ所の智生ずと言はゞ、此の義然らず、何を以ての故に。

論曰　言に於て不同なるが故に、　一切不可言なり。

釋曰　是れ言說と所言と同じからず。相貌の異るを以ての故なり。言相異なれば所言の相も異なる。是の故に一切の言及び所言は同じく言ふべからず。何の法か是れ無分別智の攝持する所なりや。

論曰　諸の菩薩の攝持は　是れ無分別智にして　此の後得の行持は　生長し究竟することを爲す。

釋曰　是の無分別智の後に得る所の智は能く菩薩の福慧の二行を得。二行の依止なり。此の智は生長し、相續し、乃至究竟することを得るが故に、無分別後智は能く菩薩の正行を生長す。無分

るべしと爲すや。若し無體無ければ體則ち還つて有り。若し無體有れば無と言ふべからず。此の義に由るが故に、法性は眞俗に約して皆有無と言ふべからず。法性は二の無我の眞如を以て體と爲す。分別性に由るが故に、依他性に人無く、法無きを、二の無我と名く。斷見を離れんが爲めに、此の無我は無ならず。故に說いて眞如と名く。此の眞如は是れ菩薩の境なり。何を以ての故に、是の無分別智若し起らば、必ず此の境を緣じて起るが故なり。此の智は不可言の眞如を緣じて起る、其の境を取る相貌は云何ん。

論曰

諸の菩薩の相貌は　眞如の境の中に於て　是れ無分別智にして　無相無差別なり。

釋曰　是の智は眞如の境の中に於て平等平等に生し、無異、無相を相と爲す。即ち是れ其の相なり。譬へば眼識の色を取るに、青等の相の如く顯現して青等の色に異ならさるが如し。此の智と眞如の境とも亦爾り。又眼識と色と同じからず。色には體無くして色有り、眼識には體有りて色無し。此の智と眞如の境とは相稱ひて、異と說くべからず。若し一切の法は言說すべからさるを性と爲さば、何の法か是れ所分別なりや。

論曰

相應は自性の義にして　所分別は他に非ず。

釋曰　一切の言說に三種の相應有り。謂く數習と相續と次第となり。此の三は相ひ離れさるが故に相應と名く。又三法和合して能く自義をなすが故に、相應と名く。此の相應は是れ自性の義なり。此の義は即ち是れ所分別なり。若し此の義を離るれば別に餘の義無し。是の故に一切の法は言說すべからず。云何んが此の性を離れて、別に餘の義無きを知るや。此の義を成立せんが爲の故に、

諸の菩薩の因緣は　有言の聞熏習なり、　是れ無分別智にして　理の如く正し　思惟す。

釋曰　四緣の中三緣を除き但だ因緣のみを取る。因緣に何の相有りや。若し因と果と同類ならば因緣と名く。譬へば先の善心は後の善心の爲に因と作るが如し。他より聞く所の法音に依つて聞熏習の因を起す。此の熏習は後に正思惟を生ず。是の正思惟は他の正說を聞くより起るが故に有言と稱す。此の智の因緣は卽ち有言の聞熏習と及び正思惟とを以て體と爲す。此の因緣に由りて無分別智は有言を因とし、未だ生ぜざるを生ぜしめ、已に生じたるを堅住せしむ。若し此の熏習無ければ無分別智は生ずることを得ず。是の故に此を說いて因緣と爲す。此の智は聞熏習に因りて起り、何の法を緣じて境と爲すや。

論曰

諸の菩薩の境界は　不可言の法性なり、　是れ無分別智にして　二の無我の眞如なり。

釋曰　前の偈には菩薩の因緣を說き、此の偈には菩薩の[五]緣緣を說く。境界とは、卽ち是れ緣緣なり。緣緣に何の相有りや。若し法此を緣じて生ずれば、猶羸人の杖に因りて起つことを得るが如し。若し此の法を觀ずれば、彼の法生ずることを得るが故に、此は彼の緣と爲る。五塵の五識を生ずるが如し。此の境に二義有り、一には依止の緣緣、二には比度の緣緣なり。人の、心の無常の相に依止して、色等の餘法も皆是れ無常なりと比度するか如し。不可言の法性は是れ菩薩の緣緣なり。一切の法は分別性に由りて言說すべからず。何を以ての故に、諸法は自體に所有無きに由り、心の分別に由りて顯現するが故に、一切の法は有と說くべからず、亦た無とも說くべからず。此の如く顯現するも此の如く有ならず、是の故に有と說くべからず。此の如く有ならず、無ならずして顯現するが故に無と說くべからず。識の緣ずる所の法の如く、此の如く有ならざるが故に、是の故に分別には體相無し。是の分別に體相無ければ、當に有るべしと爲すや、當に無か

【五】緣緣とは新譯には所緣緣といふ。

釋曰　菩薩は無分別智を以て體と爲し、無分別智と菩薩と異ならず。無分別智の自性は卽ち是れ菩薩の自性なり。無分別智は五相を離る、卽ち是れ菩薩は五相を離る。眞に於て分別無きに由るが故に、五相を離るれば無分別の名を得。衆生は是れ假名にして法は是れ實有なり。若し此の智を離るれば、別の法の菩薩の名に應ずるもの有ること無し。盡無生智は是れ菩提なり。此の衆生は菩提を以て體と爲す。菩提は卽ち是れ無分別智なり。無分別智は卽ち是れ菩薩なり。無分別智は卽ち是れ菩薩なることを示さんと欲するが故に、菩薩の自性は五相を離ると說く。無分別智の後得を言はさるも例して爾り。此の如く菩薩の自性を說き已る。此の依止に由りて是の性は生ずることを得。今當に此の依止を說くべし。前に此の智を說いて無分別智と名けたり。此の智は心に依止して生ずと爲すや、心に依止せずして生ずと爲すや。若し心に依止して生ずとすれば、能く思ふが故に心と名く。思は卽ち是れ分別なり。此の智にして、若し分別に依りて生ずれば無分別と謂ふに非ず。若し心に依止せずして生ずとすれば、則ち色等の法と同じく、復た應に智と名くべからず。此の二失を離るゝことを顯はさんと欲するが故に重ねて偈を說く、

論曰

諸の菩薩の依止は　心に非ず、非心に非ず。　是れ無分別智にして　思疾の類に非らさるが故に。

釋曰　此の智は心を以て依止と爲さず、此の智の不思議なるに由るが故なり。亦た非心を以て依止と爲さず、心の疾利の類の相續を以て依止と爲すに由るが故なり。疾利の類は是れ心の種性なり。既に此を以て依止と爲すが故に、非心を依止と爲すと說く可からず。因緣は此の智を生起することを顯はさんが爲の故に重ねて偈を說く。

論曰

【四】思疾の類とは隋唐兩譯には思義の種類とある。

寂靜を離るゝが故に。四に色の自性を離るゝが故に。五に眞實の義に於て異の分別を離るゝが故に。

釋曰　此の智若し思惟を離るゝに由るが故に無分別智と名くとせば、熟眠・放逸・狂醉も同じく思惟を離るれは、應に無分別智を得べし。若し覺觀地を過るに由るが故に無分別智と名くとせば、二定より以上は已に覺觀地を過ぐれば、應に無分別智を得べし。若し此の二義に依れば凡夫も應に無分別智を得べし。是の處にして能く心及び心法を離るれば、應說いて無分別智と名くべし。謂く想受の滅する定等なり。若し人此の位の中に在りて無分別智を得れば此れ則ち智を成ぜず。何を以ての故、滅定等の位に於ては心及び心法無きが故なり。若し色の自性の如く智の自性も亦た此の如としと言はゞ、色は鈍にして無知なるか如く、此の智も應に鈍にして無智なるべし。若し眞實の義に於て已が分別に由りて顯現すれば、是の分別は應に無分別智を成ずべし。何を以ての故に、此の分別は能く眞實の義を分別す。謂く此の義は眞實なりと。

論曰　是の五相を離るゝ所の智は、此の中、應に知るべし無分別智なり。

釋曰　若し智にして五相を離るれば眞實の義を緣じて起る。若し眞實の義を異に分別せず、謂く此の法は眞實なりとせば但だ眞實の義を緣ずるのみ。眼識の如く、分別を以て性と爲さず。是を無分別智の相と名く。

論曰　[三]此の中に於て、說く所の如きは無分別智の性の中なり。故に偈を說いて言く、

釋曰　此の依慧學の中に於て、前に說くが如き十九義の所顯の無分別智の性を。更に偈を說いて此の義を成立す。此の偈は何んの所顯を欲するや。無分別智は最勝にして修する所の衆行の中に於て最も上首たることを顯はさんと欲す。

論曰　諸の菩薩の自性は　五種の相を離るゝ所の　無分別智の性にして　眞に於て分別無し。

【三】隋譯に「此の中に所說の如き無分別智を成立せんが爲の故に偈を說く」とありて文意明瞭なり。

義顯はれず。[一]自性等の十九の差別の義も亦成ぜず。若し後智を成立すれば、但だ果の義のみ顯はれて因亦顯はれず。自性等の十九の差別の義も亦成ぜず。何を以つての故に、此の智は尋思の智を因と爲すを以て、此の智は是れ尋思の智の果なり。此の智は是れ後智の因なれば、後智は是れ此の智の果なり。此の智成立するに由りて前後の智も亦成立することを得。是の故に但だ應に此の智のみを成立すべし。成立の中に於て先に應に無分別智の自性を説くべし。自性とは即ち是れ體相なり。

論曰　無分別智の自性と、依止と、緣起と、境界と、相貌と、[二]立つと、難を救ふと、攝持と、伴類と、果報と、等流と、出離と、究竟と、行善との加行と無分別智と、後得智との功德と、無分別の差別と、加行と無分別智と及び後得智との譬と威德と、無功用の作事と甚深の義とに由るが故に、應に依慧學の差別を知るべし。依慧學の差別に由りて、應に無分別智の差別を知るべし。

釋曰　謂く無分別智の自性に由りて應に依慧學の差別を知るべし。依慧學の差別に由りて應に無分別智の差別を知るべしとは、若し是れ次第に十九義を説くに、悉く須らく此の語を作すべし。今略を存せんが爲の故に、一の「無分別智に由る」を以て初を標し、次に列して十九義を出し竟り、後に總じて「應に依慧學の差別を知るべし、依慧學の差別に由りて應に無分別智の差別を知るべし」といひ、十九義を以て無分別智を成立せり。此の智は即ち是れ慧學の體なり。慧學の差別は即ち是れ此の智の差別なり。應に此の如き知を作すべし。無分別智の自性云何ん。

論曰　無分別智の自性は應に知るべし、五種の相を離る。

釋曰　若し具さに五相を離るれば則ち是れ無分別智なり。若し具さに五相を離れざれば則ち無分別智に非ず。

論曰　五相とは、一に非思惟を離るゝが故に。二に非覺觀地を離るゝが故に。三に想受を滅する定の

【一】本釋論には十九種の差別となすも、隋譯には十八種とし、唐譯には十六種となす。

【二】隋譯には「若くは建立、若くは釋難」といふ。

卷の第十二

釋依慧學差別勝相第八

論曰　此の如く已に依定學の差別を說けり、云何んが應に依慧學の差別を知るへきや。

釋曰　菩薩の定と二乘の定とには既に差別有り。定は慧の依止と爲り、慧は定に依りて成ずることを得れば、菩薩の慧と二乘の慧とにも亦應に差別有るべし。云何んが知るべき。何の法を以て依慧學と名くるや。無分別智を依慧學と名く。是の無分別智の差別は、應に知るべし、卽ち是れ依慧學の差別なり。此の無分別智に三種有り。一には加行無分別智、謂く尋思等の智にして卽ち是れ道の因なり。二には無分別智、卽ち是れ道の正體なり。三には無分別後智、卽ち是れ出觀の智にして、道の果を謂ふ。此の三智は悉く是れ依慧學の體なり。尋思の智を依慧學と爲すとは、觀行の人は當來の無分別智に依るが故に、方便智を修す。未來の無分別智の果を求むるに由るが故に、現世の方便を成ずることを得。是れ能依なるを以つての故に依慧學と名く。又此の方便智は能く當來の無分別智を引き、無分別智の起るは必ず此の方便に依りて成ずることを得。是れ所依なるを以ての故に依慧學と名く。道の正體を依慧學と爲すとは、謂く內に依りて起る智は觀に在り。散動を離るゝが故に名けて內と爲す。此の智は觀に依りて起るが故に依慧學と名く。又、自體有るを內と爲す、因已に謝して果未だ起らざるも、道體自ら相續す、卽ち自體を說いて內と爲す。自體に依りて起るが故に依慧學と名く。出觀の智を依慧學と爲すとは、無分別智に依りて此の智を成ずるを依慧學と名く。何を以ての故に、觀に入る時の所緣の境を、後得智は此を緣じて生ずるが故なり。此の三智の中、應に何の智を成立すべきや。應に但だ無分別智のみを成立すべし。若し此の智を成立すれば卽ち餘智を成立す。若し前智を成立すれば、但だ因の義のみ顯れて果の

論曰　波羅蜜を修行せんが爲に。衆生を成熟せんが爲に。佛土を清淨にせんが爲に。一切の佛法を引攝せんが爲の故に。菩薩の三摩提の業の差別を應に知るべし。

釋曰　此の論の中に、菩薩の三摩提を明かすに、別に事の差別を說かずして、但だ通じて業の差別のみを說けり。諸の菩薩の定を修するに、總有り、別有り。總には此の四有り、別には五百有り。此の四は、是れ諸定の通業なり。何を以ての故に。諸の菩薩、定を修得し已れば、此の定に依りて十度を修し。此の定に依りて衆生を成熟す。云何んが衆生を成熟するや。此の定に依りて、通慧を起し、引いて正定位に入らしむればなり。又、此の定力に依りて佛土を清淨にす。何を以ての故に。心、自在なるに由りて、意の如く能く金寶等の淨土を成ずるが故に。又、此の定に依りて現在の安樂住を得、能く引攝して一切の佛法を成熟するが故に。此の四事は、是れ一切の定に通する差別の業なり。應に此くの如く知るべし。

釋曰　一切の佛法は無所得を以て性と爲す。此は是れ正說なり。三無性は定んで有無を說くべからざるに由るが故に、無得を以て性と爲すと雖も、亦能得の義有り。若し佛法を離るれば、所對治の惑を了別することを得る能はず、能對治の道を安立することを得る能はざるが故に。

論曰　一切の佛法は、有欲を性と爲す。有欲の衆生を愛攝して、自體を成ぜしむるが故に。一切の佛法は、有瞋を性と爲し、一切の佛法は有癡を性と爲し、一切の佛法は凡夫法を性と爲す。

釋曰　此に二義有り。一には、菩薩は一切有欲の衆生を攝して自體と爲す。一切の佛法は、皆自體に依るが故に。二には、大悲を愛と爲す。愛は卽ち是れ欲なり。菩薩は大悲を以て一切の衆生を攝す。大悲に依つて、福德智慧の行を生ずるが故に。瞋癡と及び凡夫法とも亦爾なり。

論曰　一切の佛法は、染著無きを性と爲す。成就せる眞如は、一切の障も染することと能はざるが故に。

釋曰　[一〇]道後の眞如は、一切の障を斷じ盡す、是れ無垢淸淨なるが故に成就と名け。一切の障の染することと能はざる所なり。一切の佛法は此の眞如を以て、體性と爲すが故に。

論曰　一切の佛法は、染著すべからず。諸佛、世に出現するも、世法の能く染する所に非ざるが故に。

釋曰　前には眞如の境を明かし。此には眞如の智を明かす。諸佛菩薩は眞如の智を以て體と爲す、卽ち是れ應身なり。此の體は、是れ唯識眞如の所顯にして、根塵分別の起す所に非ず。八種の世法と及び世法の起す所の欲瞋等の惑との能く染著する所に非ず。何を以ての故に。是れ彼の對治なるが故なり。無分別智を修得し成就するを、諸佛世に出現すと名く。

論曰　是の故に、佛法は甚深なりと說く。

釋曰　此の語は前意を結びて、難思・難行・難得を示す。三義を具するが故に、甚深なり。

【一〇】道後の眞如とは對治道の後邊に顯はるゝ眞如の意なり。

釋曰　大乘には、有分別を以て、邪性と爲す。分別性の依他性に遍行するは、即ち是れ邪性なり。若し分別を離るれば、人法空の眞性と名く。小乘には、身見を以て邪性と爲す。此れ身見に因りて、諸惑を生ずるが故なり。若し身見を離るれば、一切の邪執は皆起ることを得ずして、人空の眞性を得。菩薩は能く理の如く此の邪性を觀察し、其の是れ邪なることを見るが故に、邪見を起すと名く。

論曰　復、經に言へる有り。佛法は甚深なりと。

釋曰　初には六度を明かし、次には十惡を顯はせり。此の下には道と及び道の果とを明かすが、故に甚深と言ふ。

論曰　何者か甚深なる。此の論の中に、自ら廣く分別せり。一切の佛法は常住を性と爲す。法身の常住に由るが故に。

釋曰　諸佛の法身は常住なり。一切の佛法は、皆、法身に依り、法身を以て上首と爲すが故に、法身の常住を、一切の佛法の性と爲す。

論曰　一切の佛法は、皆、斷を性と爲す。一切の障を皆斷盡するに由るが故に。

釋曰　一々の佛法に悉く惑障と及び智障と無きが故に、障の斷盡を、一切の佛法の性と爲す。現在の煩惱の滅するを斷と爲し、未來の煩惱の生ぜざるを盡と爲す、即ち是れ盡無生智なり。

論曰　一切の佛法は、生起を性と爲す。化身は、恒に生起するに由るが故に。

釋曰　慈悲の本願に由つて、化身を生起し、相續して盡くること無きが故に、化身の生起を一切の佛法の性と爲す。

論曰　一切の佛法は、能得を性と爲す。能く共に衆生の八萬四千の煩惱行を對治することを得るが故に。

名く。

論曰　云何んが菩薩は兩舌を行ずるや。若くは菩薩は、恒に最極の空寂處に住す。

釋曰　兩舌は彼此をして和せざらしむ。菩薩は空を思ひ、空を說きて、自他をして此彼を見ざらしむ。何に況んや和合せんや。故に兩舌を行ずと名く。

論曰　云何んが菩薩は能く波留師に住するや。若くは菩薩は、所知の彼岸に住す。

釋曰　若し直語に依らば、波留師とは、名けて惡口に目く。惡口に住する人は、他の爲に親近せられず。菩薩は所知の彼岸、卽ち三無性の理に住す、亦衆生の爲に親近せられず。此の理は、凡夫二乘の所行處に非ざるを以ての故に。故に能く惡口に住すと名く。又、若し密語に依らば、波留師の名は彼岸住に目く。卽ち密語を以て直語を顯はす。

論曰　云何んが菩薩は能く不相應語を說くや。若くは菩薩は、能く諸法を分破し類に隨つて解釋す。

釋曰　菩薩は能く諸法を分破す。謂はく根塵識は、皆所有無しと。此の無所有は定んで是れ無に非らず、亦定んで有に非ず。有無は悉く不可得なるが故に、能く不相應語を說くと名く。

論曰　云何んが菩薩は阿毘持訶婁を行ずるや。若くは菩薩は、數々自身をして無上の諸定を得しむ。

釋曰　若し直語に依らば、阿毘持訶婁の名は、貪欲に目く。貪欲を行ずる者は、必ず外塵を愛樂す。菩薩は恒に樂つて自身をして最勝の定を得しむるが故に貪欲を行ずと名く。又、若し密語に依らば、阿毘持訶婁の名は、數々定を得るに目く。卽ち密語を以つて直語を顯はす。

論曰　云何んが菩薩は憎害心を起すや。若くは菩薩は、自他の心地に於て、能く諸惑を害す。

釋曰　瞋恚は憎害を以て相と爲す。菩薩は作意して自他の一切の煩惱を斷ぜんと欲するが故に、憎害心を起すと名く。

論曰　云何んか菩薩は邪見を起すや。若くは菩薩は、一切處に遍行する邪性を、理の如く觀察す。

じからず。是の故に菩薩は施に於て無盡なり。

論曰 施經の如く、戒乃至、般若に於ても、理の如く應に知るべし。

釋曰 施經に、施を說くに不了義語有るが如く、餘度を說くにも、亦不了義語有り。皆、須らく理の如く分判すべし。

論曰 復、經に言へる有り。云何んが菩薩は殺生を行ずるや。若くは菩薩は、命有る衆生の、其の相續を斷ず。

釋曰 若し命有れば則ち業有るを知り、若し業有れば、則ち惡有るを知る。此の三を具するに由つて、六道四生に相續して斷ぜざるなり。若し菩薩は、其の根性に隨つて、爲に三乘の聖道を說き、彼をして修行して、此の三法を斷ぜしめ、無餘涅槃の果を得て、相續せざらしむ。卽ち是れ命を斷ずるが故に殺生と名くるなり。

論曰・云何んが菩薩は他の所與に非ざるを奪ふや。若くは菩薩は、自ら奪ひ、他の所與の衆生に非らす。

釋曰 菩薩は大悲を以て、一切の衆生を攝して、自の眷屬と爲し、生死の嶮難を離れしむ。彼は、父母、及び人主等の所與に非ざるが故に、他の所與に非ざるを奪ふと名く。

論曰 云何んが菩薩は邪淫を行ずるや。若くは菩薩は欲塵に於て、邪意等を起す。

釋曰 菩薩の三業は婬欲と相ひ反す。意に其の虛妄不實にして衆惡の本と爲ると知れは、口も亦此の如きの說を作し、身に其の事を行せず、亦是れ相ひ反す。卽ち是れ欲塵に於て邪意等を起すが故に邪婬を行ずと名く。

論曰 云何んが菩薩は、能く妄語を說くや。若くは菩薩は、是の妄を能く說きて妄と爲す。

釋曰 一切の法は、皆是れ虛妄なり。菩薩は虛妄の如く、而かも說くが故に、能く妄語を說くと

論曰　云何んが菩薩は施に於て清淨なるや。若くは菩薩は、闍波提貪恪なり。

釋曰　闍波提の名は、二義に目く。一には生起に目け、二には拔根棄背に目く。生起は是れ直語にして、拔根棄背は是れ密語なり。若し直語を取りて、貪恪と生起すとせば、則ち清淨施と相違す。若し密語を取りて、根を拔き貪を棄て恪に背くとせば、則ち清淨施と相符す。拔根とは、是れ身見を除く。身見は是れ貪恪の根本なり。棄背とは是れ貪恪の體を除く。菩薩は能く身見を斷じ、貪恪を滅するに由るが故に、施に於て清淨なり。

論曰　云何んが菩薩は能く施に住するや。若くは菩薩は究竟の後際に住せず。

釋曰　究竟の後際に二義有り。一には施に初中後有り、最後を以て究竟の後際と爲す。若し此の義に依らば、施の最後分に住せず。豈に能く施に住すと言ふことを得んや。此れ則ち相違す。二には、若し有餘涅槃を究竟と名けば、無餘涅槃を究竟の後際と名く。若し聲聞にして、無餘涅槃に住して、更に心を起さず、衆生を利益するの事無ければ、則ち施に住すること能はず。菩薩は大悲に依つて、聲聞の無餘涅槃に住するに同じからざるが故に、恒に六度を起して窮盡有ること無し。若し此の義に依れば、則ち能く施に住すと相符す。

論曰　云何んが菩薩は施に於て自在なりや。若くは菩薩は、施に於て自在なることを得ず。

釋曰　若し菩薩にして施障の自在を得ざれば、菩薩は施に於て則ち自在なることを得。昔、凡夫地の中に在りては、見修二惑に道對治無く、起さんと欲すれば便ち起るが故に自在なることを得。今、聖位に入りては、道對治の爲の故に、菩薩は惑に於て自在なること得ざれば、施に於ては能く自在なることを得るなり。

論曰　云何んか菩薩は施に於て、無盡なりや。若くは菩薩は、無盡の中に住せず。

釋曰　無餘涅槃を名けて無盡と爲す。菩薩は聲聞の無盡の中に入りて、他を利益する事無きに同

論曰　云何んが菩薩は布施を樂行するや。若くは菩薩は一切の施を樂行せず。

釋曰　若くは菩薩は隨至等の[一七]八施を樂行せず。[一八]至義は但だ菩薩の淨心施を樂行するのみ。復次に、若くは菩薩は世間の三輪に著する施を樂はずして、三輪に著せさる施を樂行す。復次に、著を名けて樂と爲す。若し菩薩にして、施因に著し、或は施果に著すれば、施を樂行すと名け、若し菩薩にして、行施に著せざれば施を樂行せずと名く。

論曰　云何んが菩薩は、施を信する心を行ずるや。若くは菩薩は、諸佛如來の信心を行せず。

釋曰　菩薩は自ら施を證するに由るが故に施を行ずるも、他を信ずるに由るか故には施を行ぜず。前の信は根有るが故に信を成ずるも、後の信は根無きが故に信を成ぜず。

論曰　云何んが菩薩は布施を發行するや。若くは菩薩は布施の中に於て自身を策せず。

釋曰　若くは菩薩は、自性能く施を行じて、貪悋・嫉妬等の障有ること無ければ、自身を策して、方に能く施を行ずるに非らず。

論曰　云何んが菩薩は恒に布施に遊戲するや。若くは菩薩は、布施の時無し。

釋曰　[一九]菩薩は非時に施し、隨つて一物も施さず。

論曰　云何んが菩薩は、大いに能く施を行ずるや。若くは菩薩は、施に於て娑羅の想を離る。

釋曰　娑羅の名は、二義に目く。一には貞實に目け、二には散亂に目く。貞實は是れ直語にして、散亂は是れ密語なり。若し直語を取りて、貞實を離るとせば、則ち大施と相違す。若し密語を取りて、散亂を離るとせば、則ち大施と相符す。若し三界を離欲して、後、施を行ずる時は、名けて大施と爲す。何を以ての故に。離欲の菩薩の行施は、具縛の凡夫の行施の百千萬倍も、及ぶこと能はざる所なり。若し施と定と互に相ひ妨ぐれば　大施と名けざるも、相ひ妨げざるに由るが故に大の名を得るなり。

【一七】八施とは一に隨至施、二に怖畏施、三に報恩施、四に求報施、五に習先施、六に希天施、七に要名施、八に心を莊嚴せんか爲に、心を資益せんが爲に、瑜伽に資せんが爲に、上義を得んが爲に惠施を行すとなり、此の中、前七は眞實の施にあらず、第八のみ眞實最勝の行施なり、而かも此處には菩薩の不具淨心施を揀ぶが故に八施を樂はすといふ。

【一八】至義は原文には義至とあるも略疏に依つて至義となせり、至極の義趣の意なるべし。

【一九】此の釋文は意明了ならず、唐譯參照。

釋曰　具さに三身を顯はすか故に諸佛如來と言ふ。一切の障とは、謂く三障・四障・三十障等なり。法身は已に無垢淸淨を得、是の故に一切の障の解脫の中に住す。法身は常に解脫の中に住して、生死の後際を窮む。法身に依りて應身を起し、一切の正事に於て自然に恒流して、功用を作さず。應身に依りて化身を起し、一切の衆生の利益の事を行じ、根性に隨ひて善種を下し、乃至解脫を得しむ。

論曰　此の如き加行を樂修するが故なり。

釋曰　得んと欲するを「樂」と爲し、正勤を起すを「修」と爲す。恒に修し恭敬して修するを加行と爲す。是の故に難修なり。

論曰　隨覺難修に於て、諸佛如來は不了義經を說くとは、其の義云何ん。菩薩は應に理に隨ひて覺察すべし。

釋曰　十難修の中にて九義は解し易く、第八は解し難し。菩薩は應に隨つて覺察すべきが故に、更に其の相を示すことを須ゆ。

論曰　經に言へるが如し。云何んが菩薩は一物をも損せず一人にも施さざるや。若くは菩薩は善く能く施を行すること無量無數にして、十方の世界に於て布施の行を修し、相續して生起す、

釋曰　菩薩は自愛を捨て、一切の衆生を攝して自體と爲す。一切の行道と一切の財物とは、悉く衆生に屬するが故に、財は已の有に非ず、用ゆる者は他に非ず、彼の物を彼が用ゆ、豈我に闕せんや。若し能く此の如く心を運べば、則ち是れ善く能く施を行ず。復次に菩薩は自愛を捨てて、一切の衆生を攝して自體と爲せば、一切衆生の行施は即ち菩薩の行施なり。故に菩薩は、隨喜の心を起して、無量の施福を得るも、亦是れ一物をも損せず、一人にも施さゞるを善く能く施を行ずと名く。

釋曰　菩薩は愛に由るが故に生死に入るも、生死に入り已つて、世間の八法の染汚する所と爲らず、愛して而も染せず、是の故に難修なり。

論曰　六には信樂難修、無底の大乘を行じ、能く廣大甚深の義を信樂するが故に、

釋曰　無底に三義有り、一には教思ひ難く、二には道行じ難く、三には果得難し。威德圓滿するが故に、廣大の理は微細なるか故に。甚深の威德に三種有り、一には如意、二には清淨、三には無變異の理にして、即ち三無性の理なり。並ひに下地の境界に非ず、是の故に難修なり。

論曰　七には通達難修、能く人法の二の無我に通達するが故に、

釋曰　先に十解に於て已に人無我に通達し、今初地に於て又法無我に通達す。此の二空は有無の性を離る。若し能く通達すれば則ち此の法と同じ、是の故に難修なり。

論曰　八には隨覺難修、諸佛如來の甚深なる不了義の經を、能く理の如く判ずるが故に、

釋曰　如來の說く所の正法は、了義及び不了義を出でず。若し衆生に但た信根のみ有り、未だ智根有らざれば、如來は其の信根を成ぜんが爲の故に、不了義の說を作す、二乘の教の如し。又憍慢の衆生を伏せんと欲するが故に、不了義の說を作す、廣く說くこと十七地論の如し。聞思修の慧を生ぜんが爲の故に了義經を說く。不了義經は其の言祕密なるを、能く理の如く判す、是の故に難修なり。

論曰　九には不離不染難修、生死を捨てず、生死の爲に染汚せられざるが故に、

釋曰　慈悲に由るが故に生死を捨てず。般若に由るが故に染汚せられず。生死と涅槃とに於て著すること無く住すること無し、是の故に難修なり。

論曰　十には加行難修、諸佛如來は一切障の解脫の中に於て住し、功用を作さすして、能く一切衆生の利益の事を行じ、乃至生死の後際を窮む。

釋曰　他事を成就することは已に前に說けるが如し。此の下は更に菩薩の自行を明かす。此の定は能く菩薩の正行を引く、二乘の能く行ずる所に非ず。

論曰　能く十種の修し難き正行を攝するを以ての故なり。

釋曰　此の十種の正行は是れ定の種類なるが故に、定は能く此の正行を攝す。

論曰　何をか十と爲すや、一には自受難修、自ら菩提の善願を受くるが故に、

釋曰　若し他に依りて十願を發せば、此れ難行に非ず、未だ成立せざるを以ての故に。菩薩は自ら三能有り、一には智慧有りて能く方便を了別し、二には慈悲有りて能く衆生を攝し、三には正勤有りて能く十願を成滿す。此の三の得難きを菩薩は能く得。此の三能を具するに由るが故に、他に依らずして自ら能く發願す。又若し自身の爲に善願を受くるは、此を難しと爲さず。若し因緣無くして但た他の爲にのみ受くれは、此を則ち難しと爲す。

論曰　二には不可迴難修、生死の衆苦に由るも退轉せしめざるが故に、

釋曰　無始よりの生死の八苦と、及び發心の後當に受くへき長時の八苦とは、菩薩の慈悲に違ひて菩薩の菩提の行を退くること能はず。廣說すること地持論の如し。是の故に難修なり。

論曰　三には不背難修、衆生は惡を作るに由り、一向に彼に對するが故に、

釋曰　衆生は生死の中に於て恒に惡行を起すも、菩薩は過失を觀ぜず。解脫せしめんが爲に恒に彼に向つて善を行ず。是の故に難修なり。

論曰　四には現前難修、怨有る衆生の現前に於ても、爲めに一切の利益の事を行ずるが故に、

釋曰　若し衆生は菩薩に對して極重の惡を作すも、菩薩は彼に對して大恩德を以て之に報ゆ、是の故に難修なり。

論曰　五には無染難修、菩薩は世間に生るゝも、世法の爲に染せられさるが故に、

を「隱」と爲す。

論曰　八自在を具して、

釋曰　八數は前に說けるが如し。又佛世尊は魔王をして佛道を修行して、後に成佛を得しむる等の如きも亦自在と名く。

論曰　他の神力を伏障し、

釋曰　菩薩は定の力に由りて、他の通慧をして皆成就せざらしむ。

論曰　或は他に辯才を施し、

釋曰　若し人問難せんと欲するも亂情拙訥なれば、菩薩は能く其の辯才を施す。

論曰　及び憶念し、

釋曰　若し人邪見なれば、宿命を識りて自ら因果を驗せしむ。

論曰　喜樂し、

釋曰　菩薩は或は地獄に入り、或は飢饉の世に生じ、或は有疾の處に在るも、菩薩の受くる所の喜樂の如く、此の衆生をして平等に皆爾らしむ。或は但だ樂を與へ、或は先に定を與へ、或は正しく法を聞く時、此に由りて喜樂して、六十小劫を經るも刹那の頃の如く謂はしむ。

論曰　或は光明を放ち、

釋曰　他方の菩薩を引いて皆來り集會せしめんが爲なり。

論曰　能く具相の大通慧を引き、

釋曰　聲聞の聖の通慧の如きは、能く百一事を作すも、菩薩の通慧の所現の事は、稱り數ふ可からず。復未だ說かざるの事を顯はんと欲するが故に、先に此の總句を標す。

論曰　能く一切の行じ難き正行を引く。

論曰　顯示し、
釋曰　餘の衆生は菩薩の通慧を承けて、能く無量の世界及び諸佛菩薩を見るに、所應に隨つて意の如く皆觀る。
論曰　轉變し、
釋曰　四大等の性を互に改異せしむ。
論曰　往還し、
釋曰　一刹那の中に於て能く無量の世界に往還す。此の通慧に自ら三種有り、一には心疾通慧、心の所緣の如く念に應じて卽ち至る。二には將身通慧、猶ほ飛鳥の如し。三には變異通慧、謂く長を縮めて短と爲す。
論曰　遠を促して近と爲し、
釋曰　遠をして近を成じ復中間無らしむ。此に三事有り、謂く見・聞、及び行なり。
論曰　麁を轉じて細と爲し、
釋曰　無數の世界をして[六]隣虛よりも細ならしめ、隣虛の中に入るゝも隣虛は本の如し。
論曰　一切の色をして皆身中に入らしめ、
釋曰　一切の希有に、多種の事有るを、皆身の中に觀ず。
論曰　彼の同類に似て大集の中に入り、
釋曰　諸の菩薩の忉利天に往くが如く、彼の形飾及び音聲を同じくして、大集の中に入り、教へて彼を化度す。
論曰　或は顯はれ或は隱れ、
釋曰　能く無の中に於て一を現じ、多を現ずるを「顯」と爲し、能く有の中に於て一、多の相無き

【六】隣虛とは物質を分析してそれ以上分析すること能はざる最少限に至れるもの、新譯に所謂極微なり。

ひて正法を聞くことを得るを「勝れたる生處」と名く。此の定に由るが故に、菩薩は勝れたる生處に於て取・住・捨の三能を得、意に隨ひて運用して退くこと無く、盡くること無し。聲聞乘の中には此の如きの定無し、故に差別と言ふ。

論曰　隨引の差別とは、能く無礙の通慧を一切の世界に引く。

釋曰　菩薩に大事の定有り、謂く一切の事及び一切の處に於て、悉く礙有ること無し。引に二義有り、一には能引、謂く定の勢力は、或は人に隨ひ、或は境に隨ひ、或は修に隨ふ。若し利根の人、無を緣じて境と爲せば、入住出の三種の自在を得。二には所引、謂く定の成ずる所の事は、地を動かし、光を放つ等にして、此の事の中に於て勝れたる通慧も奪ふこと能はず、所現の事は悉く心の如くにして、惑も障ふること能はず、業も阻むこと能はず。故に無礙の引と稱す。但だ體のみ有りて用無し。用は卽ち事の差別なり。但だ菩薩のみに此の定有りて、二乘の修する所に非ず。故に差別と言ふ。

論曰　事に由る差別とは、

釋曰　此の如きの事に由りて、應に知るべし、菩薩の定と二乘の定とには差別有り。何をか事と爲すや。

論曰　動ぜしめ、

釋曰　意の如く能く十方の世界を動ず。

論曰　光を放ち、

釋曰　意の如く能く十方の世界を照す。

論曰　遍滿し、

釋曰　光明法音の分身は、意の如く能く十方の世界に遍滿す。

を行じ、能く獨覺の自愛の習氣、卽ち是れ無有生死の障を破す。大常に於て此の障を破するに由るが故に大常の果を得。等とは通じて諸定を擧ぐるを言ふ。

論曰　種々の三摩提の品類を攝するが故に、

釋曰　五百の定を「種々」と名く。皆是れ四定の品類にして、悉く四定の所攝と爲す。

論曰　對治の差別とは、一切法を緣じて通境の智慧と爲すに由る。

釋曰　無分別智は一切の有爲無爲等の諸法の眞如を緣じて、通じて一境と爲す。此の智と境とは復分別無し。

論曰　楔を以て楔を出だすの方便の如くなるが故に、

釋曰　世間の木を破らんと欲するに、先に細楔を用ひ、後に麁楔を用ふるが如く、觀行の人の煩惱を破するも亦爾なり、先に劣道を用ひ、次に中道を用ひ、後に勝道を用ふ。

論曰　本識の中に於て、一切の麁重の障を拔出すが故に、

釋曰　本識の相續する中に、煩惱・業・報の三品の染濁の種子有るを說いて習氣と名け、能く四德を障ふ。此の定に由るが故に、未だ滅せざるを滅せしめ、已に滅するを生ぜざらしむ。能對治と所對治と、及び對治の所得とは、二乘と悉く同じからず、故に差別と言ふ。

論曰　隨用差別とは、現世に於て久しく三摩提の樂の中に安住し、意の如く能く勝處に於て受生す。

釋曰　菩薩は種々に方便して、心を治して熟せしむること、猶ほ金師の金を錬つて眞とならしむるが如し。已に心を熟治するを說いて「隨用」と名く。何を以ての故に、此の定に由るが故に、菩薩は若し佛法を成熟せんと欲すれば、一境を緣じて、意の如く能く久しく住することを得、未だ得ざるを得しめ、已に得たるを滿せしめ、已に滿せるを退かざらしむ。現在世に於ては此の如き能有り。未來世に於て受生する所の處に、能く多く衆生を利益する事を行じ、及び佛の出世に値

だ長ぜざるを能く長じ、未だ圓かならざるを能圓かにするが故に「集」と名け。生と長と圓との三處に於て自在なるが故に「王」と名く。自在に由るが故に能く施等の十度を行ず。菩提の資糧なる福德の行を圓滿するが故に、能く外道の我見の習氣、卽ち是れ因緣生死の障を破す。大我に於て此の障を破するに由るが故に大我の果を得。復次に一切の善法は眞如に依止し、眞如は能く一切の善法を集む。眞如を名けて「集福德」と爲す。此の定は眞如の中に於て自在を得るが故に名けて王と爲す。

論曰　賢護三摩提、

釋曰　賢に二義有り、一には能く安樂住を現前す、二には能く諸の功德を引攝す。安樂住を現前すとは、此の定は能く菩薩の身をして虛空の性を捨てざらしめ、三際を免離するが故に安樂住を得。諸の功德を引攝すとは、能く數量す可からざる諸定を引攝し、二乘の聞知する所に非ず。此の一一の定に因りて、無量の通慧を起す。此の二義に由り、此の故に菩薩は能く聲聞の怖畏の習氣、卽ち是れ有有生死の障を離る。大樂に於て此の障を破するに由るが故に大樂の果を得。此の定は眞如を緣じて菩薩の體と爲すが故に、智を離れず、能く諸定及び通慧を引くが故に、定を以て體と爲す。

論曰　首楞伽摩三摩提等、

釋曰　此の定は是れ十地の菩薩及び佛の所行なるが故に此の名を得。何を以ての故に、十地の菩薩及び佛には四種の勝德有り、故に「首楞」と名く。一には怖畏無し、一切智を得るに由るが故に。二には疑無し、淸淨の衆生に於て自身の無等なるを見るが故に。三には堅實の功德、恒に觀に在りて散亂無きが故に。四には勝能有り、能く破し難き無明住地の障を破するが故に。四德を具する人は此の定に於て能く得、能く行ずるが故に「伽摩」と稱す。此の定は多く他を利益する事

化身を成就す。十一・十二の境は、謂く一切智と一切種智との所緣の境にして、卽ち如理如量の境なり。此の十二の境は通じて奢摩他、毘鉢舍那の所緣と爲る。一切の定慧の所緣は此の十二の境を出でず。

論曰　衆類の差別とは、

釋曰　四の三摩提有り、是れ五百定の品類なるが故に衆類と名く。小乘の中に於ては、乃至其の名をも聞かず、何に況んや能く修習せんや、故に差別と言ふ。此の四種の三摩提は能く四德の障卽ち四種の生死を破して、能く四德の果、卽ち淨・我・樂・常を得るが故に、此の四定を立てゝ四德の道と爲す。

論曰　大乘光三摩提、

釋曰　大乘に三義有り、一には性、二には隨、三には得なり。性とは卽ち三無性なり、隨とは卽ち福德智慧の行の所攝にして、十地の十波羅蜜は無性に隨順するなり。得とは卽ち得る所の四德の果なり。此の定は此の三を緣じて境と爲すが故に「大乘」と名く。此の定に依止して無分別智を得、無分別智に由りて眞如を照らし、及び佛に異らざるが故に「光」と名く。又十五種の光有り、功德は外光に勝れたるが故に光と名く。又此の定は能く一闡提の習氣の無明の闇を破す。是の闇の對治なるが故に光と名く。此の定は眞如の實有にして得易きを緣じて、無量の功德有るが故に能く一闡提の習氣を破す。卽ち是れ方便生死の障なり。大淨に於て此の障を破するに由るが故に大淨の果を得。

論曰　集福德王三摩提、

釋曰　一切の善法は、唯般若を除いて、所餘は悉く福德と名く。此の福德に四品有り、謂く凡夫と二乘と菩薩となり。菩薩は此の定に由るが故に、四福德に於て、未だ生ぜざるを能く生じ、未

明かすのみ、應に此の義を知るべし。

論曰 何をか六と爲すや。一には境の差別、二には衆類の差別、三には對治の差別、四には隨用の差別、五には隨引の差別、六には事に由る差別なり。境の差別とは、大乘の法を緣じて境と爲して起るに由るが故なり。

釋曰 所緣に三境有り、一には一切の眞如の境を緣ず、二には一切の文言の境を緣ず、三には一切の衆生を利益する事の境を緣ず。此の三境を大乘の法と名く。但だ是れ菩薩のみの定の所緣にして、二乘の定の境に非らざるが故に差別と言ふ。復十二種の境有り、中邊論に說くが如し。一には所成立の境、謂く十波羅蜜にして、是れ眞如の十種の功德の成立する所なるが故なり。二には能成立の境、謂く法界の十種の功德にして、能く十波羅蜜を成立するが故なり。三には持境、謂く聞慧の緣ずる所の法門にして、聞慧は能く阿含の體を得、即ち聞慧を說いて持と爲す。四には決定持の境、謂く思慧の緣ずる所の如理如量の境にして、思慧は能く阿含及び道理を簡擇す、是れ熟したる慧なるが故に決定して持すと名く。五には證持の境、謂く修慧の所緣にして、修慧と道理とは一體なるが故に證と名け、能く文及び義を攝するが故に名けて持と爲す。六には通達の境、謂く初地に見る所の眞如なり。七には相續の境、謂く二地以去の緣ずる所の眞如にして、已に眞如に通達し傳流するを相續と名け、此の相續の緣ずる所なれば相續の境と名く。八には勝行の境、謂く無相の無功用心の緣ずる所にして、即ち八地の境なり。九には生智の境、謂く九地の緣ずる所の智自在依止の眞如にして、四無礙辯を得て、能く他の智を生じ、又如來の法藏を緣じて能く自ら世出世の智を生ず。十には勝境、謂く上上品の智の所緣なり、此の智は復上有ること無し、即ち十地の境なり。此の智は十力を以て體と爲し、無邊の智能を力と名く。此の智は十境に約して說けば十力と名く。此の十力は能く菩薩の十地、及び如來の九種の正事、乃至無邊の

論曰　是を菩薩の甚深の戒の差別と名く。

釋曰　此の實行及び化身所行の戒は、下地の能く行ずる所に非ず、二乘の能く通達する所に非らざるが故に、甚深の差別と名く。

論曰　此の四種の差別に由りて、應に知るべし、是れ略して菩薩の受持する戒の差別を説く。

釋曰　他より得るを受と名け、自の清淨の意の得るを持と名く。又初に得るを受と名け、受けて後乃ち成佛に至るを持と名く。又戒法を修行するを受と名け、文句を憶念するを持と名く。

論曰　復次に此の四種の差別に由りて、更に差別有り數量す可からず。菩薩の戒の差別は、毘那耶瞿沙毘佛略經の中に說けるが如し。

釋曰　此の四種の差別より、更に差別有り數量す可からず。何を以ての故に、但だ品類の差別の中に於て正護の一戒を取るも、二乘の教に依りて分別すれば、則ち四萬二千を成ず。若し此の戒及び餘の二戒を以て、菩薩の教に依りて分別すれば、數量す可からず。毘那耶瞿沙毘佛略經の中に、廣く菩薩の戒に十萬種の差別有ることを說けり。

釋依心學處勝相第七

論曰　此の如く已に戒に依る學の差別を說けり。云何んが應に心に依る學の差別を知るべきや。

釋曰　菩薩の戒と二乘の戒とは既に差別有り。戒は定の依止と爲り、定は戒に依りて成ずることを得。菩薩の定と二乘の定とも亦應に差別有るべし。云何んが知る可きや。

論曰　略して說くに六種の差別に由る。應に知るべし。

釋曰　若し廣く說かば大乘藏の立つる所の三摩跋提は、體類の差別に五百種有り。小乘の清淨道論の立つる所の三摩跋提は體類の差別に六十七種有るが如し。今は略說して止だ六種の差別を

處に安立せしむ。此の戒は思量し難きが故に甚深と言ふ。本より身口の所作に非ずして、云何んが戒を成ずるや。能く戒の事を成就するを以て、衆生をして惡を離れ善を生ぜしむるが故なり。又此の變化は菩薩の意業より生ず、菩薩は意業を以て戒と爲すが故に。

論曰 此の戒に由りて、有る時には菩薩は正しく大王の位に居て、或は種々に衆生を逼惱することを現す。衆生を戒律の中に於て安立せんが爲なり。

釋曰 衆生に二種有り、或は歡喜せしめて教化するに宜しく、譬へば拘物頭花の涼月に因りて開敷するが如きと、或は逼惱せしめて教化するに宜しく、譬へば蓮華の烈日に因りて開敷するが如きとなり。菩薩も亦爾り、[一五]那羅王及び善財童子の如く、或は愛すべき事を現じ、或は畏るべき事を現じて、衆生を善處に安立す。

論曰 或は種々の本生を現じて、他を逼惱し及び怨對を逼惱するに由り、他をして相愛して利益し安心せしむ。

釋曰 邪見の衆生の因果を信ぜざるものを化して、正信を得て惡を離れ善を修せしめんが爲めの故に、種々の本生を化現す。毘荀陀王の兒を捨て〻婆羅門に與ふるが如きは、是れ他を逼惱す。此の兒は是れ化作なり。何を以ての故に、菩薩は此の人を逼惱すること無く、彼の人に安樂を生ずるが故なり。又藥藏菩薩の、眉絺羅王をして毘提訶王に與へしめて、互に相ひ逼惱せしむるが如し。此れも亦是れ化作にして、後に悉く相愛して利益し安心せしむ。菩薩は此の如きの事を行じて何の利益有りや。

論曰 他の信心を生ずるを先と爲し、後に三乘の聖道の中に於て、彼をして善根を成熟せしむ。

釋曰 先に菩薩に於て信を生ぜしめ、後に則ち能く菩薩の教の如く修行せしむるが故に、三乘の善根は皆成熟することを得。

【一五】那羅王は隋譯に阿那羅王 anala といひ、唐譯には無厭足王となせり。

む。此の四種の廣大の戒は、並びに是れ無上菩提の依止にして、但だ菩薩のみ能く修し、二乘には悉く此の事無し。故に差別と稱す。

論曰　甚深の差別とは、若し菩薩は此の如きの方便勝智に由りて、殺生等の十事を行ずるも、染濁の過失無くして無量の福德を生じ、速かに無上菩提の勝果を得。

釋曰　菩薩は能く堪行する所の如き方便と勝智とを行ずるが如き、今此の二義を顯はす。若し菩薩は能く此の如きの事を知らば、「人有り必ず應に無間等の惡業を作すべし」と。菩薩は其の心を了知し、別の方便の此の惡を離れしむべきもの無く、唯命を斷つこと有りて方便と爲して、能く此の惡を作さゞらしめ。又此の人、命を捨つれば必ず善道に生るゝも、若し命を捨てずして、此の業を決行すれば、劇難の處に墮して長時に苦を受けんと知らば、菩薩は此の事を知り已つて是の如き念を作さく、若し我れ此の殺業を行ずれば必ず地獄に墮せんも、願くは我れ彼が爲に此の苦報を受け、當に彼の人をして現在世に於て少輕の苦を受け、未來世に於て久しく大樂を受けしめんと。譬へば良醫の、病有る者を治するに、先に輕苦を加へて、後に重疾を除くが如く、菩薩の所行も亦復是の如し。菩薩の道に於ては福德に非らざるもの無きが故に、染濁の過失を離る。此に因りて無量の福德を生長するが故に、能く疾かに無上の菩提を證す。此の如き方便は最も甚深と爲す。盜を行ずる等の行も亦復是の如し。

論曰　復次に變化の作す所の身口の業有り、應に知るべし、是れ菩薩の甚深の戒なり。

釋曰　前には實事を明かして、通慧を顯はすに非ず。此の下は通慧を明かして、實事を論ぜず。菩薩の戒に三品有り、即ち身口意の業なるも、(こゝに)意業を除くは變化無きを以ての故なり。身口の二業に時には變化の所作有るも、亦是れ菩薩の戒なり。此の身口の戒は、或は現に善を爲し、或は現に惡を爲し、或は怖畏を生じ、或は歡喜を生ずるも、皆衆生をして惡處を遠離して善

論曰　一には種々無量の學處の廣大、

釋曰　菩薩の學處に二義有り、一には種々、二には無量なり。種々は多を顯はし、無量は大を顯はす。一切の惡を離れざる無く、一切の善を修せざる無く、一切の衆生を度せざること無きが故に、「種々」と名く。此の三戒を持して、時節無際にして功用餘り無し、故に「無量」と稱す。

論曰　二には能く無量の福德を攝する廣大、

釋曰　六度四攝の因果に各九品有り、是を無量の福德と名く。地持論に說けるが如し。此の如き無量の福德聚は、悉く是れ菩薩戒の攝なり。

論曰　三には一切の衆生を攝して利益し安樂にする意の廣大、

釋曰　善く衆生を敎へて惡處を離れ善處に安立せしむ、是を利益の意と名く。此の功德の未來に於て得る所の果報を、一切の衆生は意の如く受用せんことを願ふ、是を安樂の意と名く。又大悲にて苦を拔くを利益の意と名け、大慈にて樂を與ふるを安樂の意と名く。又一切の出世の事を得しむるを利益の意と名け、世間の勝事を得しむるを安樂の意と名く。又此の廣大は四攝を以て體と爲す。前の二攝を安樂の意と名け、後の二攝を利益の意と名く。

論曰　四に無上菩提の依止の廣大なり。

釋曰　菩薩の戒に三品及び九品有るに由り、戒は能く如來の三種の勝德、及び九種の勝德を攝するが故に。正護戒は如來の斷德の因と爲り、攝善法戒は如來の智德の因と爲り、攝衆生戒は如來の恩德の因と爲る。九品の戒は如來の九德の因と爲る、此れ前に說けるが如し。果の廣大に由るが故に因廣大なり。果の廣大に三義有り、一には廣大の因より生ず、謂く三十三大劫阿僧祇に、十度、十地等を修行するを因と爲す。二には所得の廣大、謂く一切智、一切種智の所攝なる、如來の恒伽沙數の功德なり。三には利益の廣大、謂く凡夫及び三乘を利益し、乃至生死の後際を窮

論曰　若し略說すれば有らゆる身口意業の事にして、能く衆生の利益を生じて、過失有ること無ければ、此の業を菩薩は皆應に受學し修行すべし。

釋曰　若し利益有るも過失有れば應に行ずべからず。譬へば女人の、菩薩に語りて言ふが如し、汝、我を取れ、若し汝我を取らざれば是の處有り、我れ應に死すべし、若し我れ死せされば必ず當に汝を殺すべし、と。菩薩若し其の語に隨へば、彼は則ち死せず、又惡事を起さゞれば、則ち利益有り。但だ女人を取れば、則ち過失を成ずるが故に應に行ずべからず。若し利益無く過失無きも亦應に行ずべからず。二乘の如きは他を利すること能はざるも亦過失無し。利益有りて過失無きは、卽ち是れ菩薩の戒なり。應に聞慧を生ずべきを受と爲し、應に思慧を生ずべきを學と爲し、應に修慧を生ずべきを修行と爲す。

論曰　此の如く應に共不共戒の差別を知るべし。

釋曰　此の如く菩薩と二乘とは、性戒の中に於て亦差別有り。卽ち心に持する所と及び心に持する所に非らざるとなり。制戒の中に於ても、亦差別有り、謂く他を利すると他を利せざるとなり。故に菩薩と二乘との戒に差別有り。菩薩と二乘との戒に復差別有り、謂ゆる廣大の差別なり。此の廣大には何の義有りや、復幾種有りや。

論曰　廣大の差別とは、應に知るべし四種有り、四種の廣大に由るが故に、

釋曰　廣大に四義有り、一には最勝の義を以て、專ら他の爲にして、報恩及び生死の果を求めず、又利益無窮なり。此の二義に由るが故に名けて勝と爲す。二には長遠の義、三大劫阿僧祇の修行の故に。三には圓滿の義を以て、眞俗及び他を利益する事の三境に依りて、福德智慧を生じて具足するが故に。四には自在の義を以て、大乘光等の四種の三摩提に依り、他を利益せんが爲に能く種々の方便を行ずるが故に。

釋曰　殺生等を「性罪」と名く。性罪は必ず煩惱に由りて起り、染汚の心地の後に則ち殺等の業を作す。又制と無制と有り。若し此の業を作せば皆悉く罪を成するが故に、性罪と名く。又如來の未だ出世せず、及び出世の後に未だ制戒せざるも、若し人此の罪を犯せば、世間の中に於て王等は理の如く治罰す。外道等は此の罪を離れんが爲に、出家の法を立つるが故に性罪と名く。性罪の中に於ては、菩薩と二乘とは同じく離るるが故に、共學處と名く。

論曰　不共學處の戒とは、是れ菩薩の遠離する制罪として立つる所の戒なり。

釋曰　謂ゆる地を掘り草を拔く等の制を立つ。菩薩の遠離は二乘と同からず。何を以ての故に、

論曰　此の戒の中には、或は聲聞は是の處に罪有るも、菩薩は中に於て罪無し。或は菩薩は是の處に罪有るも、聲聞は中に於て罪無し。

釋曰　如來の制戒に二種の意有り、一には聲聞の自度の爲の故に戒を制す。二には菩薩の自度他度の爲の故に戒を制す。聲聞と菩薩との意を立てゝ受戒するも亦復是の如し。故に此の二人の持と、犯とに異り有り。聲聞の如きは若し安居中に行くは則ち犯戒にして、行かざるは則ち不犯なるも、菩薩は、遊行は衆生に於て利益有りと見て、行かざれば則ち犯戒なり、行けば則ち不犯なり。

論曰　菩薩は身口意の三品を治すること有るを戒と爲し、聲聞は但だ身口を治すること有るを戒と爲す。

釋曰　戒類同じからず。菩薩の戒は三業の善行を以て體と爲し、聲聞の戒は身口の善行を以て體と爲す。

論曰　是の故に、菩薩には心地の犯罪有るも、聲聞には則ち此の事無し。

釋曰　菩薩は若し[一四]七種の覺觀等有れば、菩薩の心地の罪を起し、菩薩の戒を犯すも、聲聞は則ち此の如くならず。菩薩の戒の通相云何ん。

【一四】　七種の覺觀とは地持論等に八種の惡覺を說く、一に欲覺、二に瞋覺、三に害覺、四に親里覺、五に國土覺、六に不死覺、七に族姓覺、八に輕侮覺なり、今の七種の覺觀とは其の中の前七種をいふものなるべし。

止なり。

釋曰　攝善法戒は、先に聞思修の三慧を攝し、一切の佛法は皆此れより生起す。何を以ての故に、一切の佛法は皆智慧を捨てざるを以ての故なり。攝衆生戒は謂ゆる四攝なり、初の攝は自の眷屬を成じて惡に背き善に向はしむ。第二の攝は未だ發心せざるものを發心せしむ。第三の攝は已に發心せるものを成熟せしむ。第四の攝は已に成熟せるものを解脫せしむ。此の三種の戒は何の法を以て因と爲すや。三根を別因と爲し、二根を通因と爲す。三根を別因と爲すとは、精進根を第一戒の因と爲し、智根を第二戒の因と爲し、定根を第三戒の因と爲す。二根を通因と爲すとは、信と念との二根を通じて三戒の因と爲す。復次に六法を因と爲す、一には善知識に依り、二には正聞に依り、三には正思に依り、四には信根に依り、五には生死を厭惡するに依り、六には慈心に依る。復次に四種の因有り、一には他より正受して得、二には淸淨の意より得、三には對治を厭怖するにより得、四には不犯戒より起り、恭敬憶念して得るなり。復次に四種の因有り、能く菩薩戒を淸淨ならしむ。一には能く犯戒の因を離る。二には破戒の對治に依止す、謂く念處等なり。三には寂靜に依止す、謂く勝れたる生處に依止せず、迴向して一切衆生の爲に涅槃を得しむるが故に。四には[九]根本を具するに由る、十善の成する所、[一〇]方便の隨ふ所、[一一]非覺觀の損する所、[一二]憶念の攝する所、佛果に迴向するが故なり。此の三種の戒は何の法を以て體と爲すや。他を惱害する心を起さずして、善の身口意の業を生ずるを體と爲し、取を離るるを類と爲す。此の三種の戒は何の法を以て用と爲すや。正護戒は能く心をして安住せしめ、攝善法戒は能く佛法を成熟し、攝衆生戒は能く衆生を成熟す。一切の菩薩の[一三]正事は此の三用を出でず。心安住することを得て疲悔有ること無きに由るが故に、能く佛法を成熟す。佛法を成熟するに由るが故に能く衆生を成熟す。

論曰　共學處の戒とは、是れ菩薩の性罪を遠離する戒なり。

【九】　根本を具するとは五支戒を具するをいふ。五支戒とは涅槃經に說く所、一は根本業淸淨戒、二は前後眷屬餘淸淨戒、三は非諸惡觀覺淸淨戒、四は護持正食念淸淨戒、五は迴向具足無上道戒なり。

【一〇】　方便の隨ふ所とは五支戒の第二戒は十不善業の前後の方便を離るゝが故なり。

【一一】　非覺觀の損する所とは第三支の戒は諸の惡思惟を離るゝが故なり。

【一二】　憶念の攝する所とは第四支戒は六念を修して戒行を助成するが故なり。

【一三】　正事とは菩薩として正に作すべき事。

釋曰　此の戒は二乘と一向に不同なり。

論曰　四には甚深の差別、

釋曰　如來は二乘の中に於て說かず、亦二乘の行ずる所にも非ず。

論曰　品類の差別には三種有り、一には攝正護戒、

釋曰　謂く比丘・比丘尼・[五]式叉摩尼・[六]沙彌・[七]沙彌尼・優婆塞・優婆夷なり。此の戒は是れ在家・出家の二部、[八]七衆の持する所の戒なり。

論曰　二には攝善法戒、

釋曰　正護戒を受くるにより、後に大菩提を得んが爲に、菩薩は一切の善法生長す。謂ゆる聞思修の慧及び身口意の善、乃至十波羅蜜なり。

論曰　三には攝衆生利益戒、

釋曰　略說するに四種有り。謂く衆生の根性に隨ひて、衆生を善道及び三乘に安立す。復四種有り、一には四惡道を拔濟す、二には不信及び疑惑を拔濟す、三には正教に憎背するを拔濟す、四には下乘を願樂するを拔濟す。云何んが此の三は二乘と差別有りや。二乘は但だ攝正護戒有るのみにて、餘の二戒無し。何を以ての故に、二乘は但だ解脫の障のみを滅せんことを求めて、一切智の障を滅せんことを求めず。但だ自ら度せんことを求めて他を度せんことを求めざれば、佛法成熟し及び衆生を成熟すること能はず。是の故に攝善法戒と及び攝衆生利益戒とは無し。

論曰　此の中、攝正護戒は、應に知るべし、二戒の依止なり。

釋曰　若し人惡を離れざれば、能く善を生じ及び能く衆生を利益せんこと、是の處有ること無し。故に正護戒は是れ餘の二戒の依止なり。

論曰　攝善法戒は是れ佛法の生起すること得る依止にして、攝衆生利益戒は是れ衆生を成熟する依

【五】　式叉摩尼 Śikṣamāṇā 學法女又は正學女と譯す、沙彌尼より比丘尼に至る中間の修行者をいふ。

【六】　沙彌 Śrāmaṇera 勤策男と譯す、出家の弟子をいふ。

【七】　沙彌尼、(Śrāmaṇerikā) 沙彌の對にして女姓、比丘尼の弟子をいふ。

【八】　七衆とは前說の比丘より優婆夷に至る七類の僧俗をいふ。

釋依戒學勝相　第六

論曰　此の如く已に入因果の修の差別を說けり。云何んが戒に依る學の差別を知るべきや。

釋曰　前に入因果の修の差別の中に於て、已に諸地に約して修の差別を明かせるも、未だ菩薩の戒に依る學は二乘と差別有ることを明かさず。故に、云何んが應に知るべきやと問ふ。

論曰　應に知るべし、菩薩地正受菩薩戒品の中に於て說くが如し。

釋曰　地に二種有り、一には十地經、二には地持論なり。十地經には二地品の中に於て、廣く正受菩薩戒法を說き、地持論には尸羅波羅蜜品の中に於て、廣く正受菩薩戒法を說けり。應に此の如く知るべし。

論曰　若し略說すれば四種の差別に由る。應に知るべし、菩薩の戒に差別有るを、

釋曰　若し廣く釋すれば、戒に十一種の義有り、一には名、二には名義、三には相、四には因、五には果、六には對治、七には淸淨、八には不淸淨、九には得方便、十には立難、十一には救難なり。若し此の解に依らざれば、名けて略說と爲す。又若し具さに九品の差別を明かさば廣と爲し、若し四品の差別を說かば略と爲す。

論曰　何をか四と爲すや。一には品類の差別、

釋曰　一切の菩薩戒は、若し品類を以て之を攝すれば、三種を出でず。

論曰　二には共不共學處の差別、

釋曰　性戒の中に於ては共學處と名く、制戒の中に於ては不共學處と名く。此の二の中に菩薩と二乘とは皆差別有り。

論曰　三には廣大の差別、

【四】共學處とは菩薩と二乘と共通の學處の意。

論曰　十地の中に於て、地々各三阿僧祇なり。謂く入と住と出となり。

釋曰　皮煩惱障を除かんが爲に初地に入り、肉煩惱障を除かんが爲に初地に住し、心煩惱障を除かんが爲に初地を出づ。何を以ての故に、地々の菩薩の煩惱に三品有り、上品を皮と名け、中品を肉と名け、下品を心と名く。上品は下品の道の破する所、中品は中品の道の破する所、下品は上品の道の破する所なり。乃至第十地にも其の義亦爾り。此の三品に約するが故に各三阿僧祇を立つ。是の故に異部は三十三阿僧祇有りと執す。此の三十三阿僧祇は、前の三阿僧祇と亦等し。短長有ること無き義は前に釋すが如し。前に已に三種の阿僧祇有ることを說き竟れり。菩薩は此の如き劫を經て、修行して無上菩提を得。菩薩は無始の生死の中に於て、恒に施等の行を行じ、恒に出世の諸佛に奉事するは、何の時より修行するを始と爲すや。或は三阿僧祇を說き、或は七阿僧祇を說き、或は三十三阿僧祇を說くは、此の義を顯はさんが爲の故なり。

論曰　此の如き阿僧祇に修行して十地の正行を圓滿す。[三] 善根と願力と有り、

釋曰　菩薩に二種の力あり、一には善根力、二には善願力なり。善根力とは、一切の散亂も違ふこと能はざる所なり。善願力とは、一切時の中に於て、恒に佛菩薩に値ひて善知識と爲すなり。

論曰　心堅くして進んで增上すれば、

釋曰　善知識に事ふるに由りて菩提心を捨てず、生々及び現世に恒に善根を增長して、復滅失すること無し。

論曰　三種の阿僧祇に、正行成就すと說く。

釋曰　若し善根力と善願力と、心堅くして、增上するの四義を具すれば、此の時を以て阿僧祇の始と爲す。諸師の說不同なるが故に、三種有り。此の如き阿僧祇を經る時、正行を修して成就することを得と說く。

【三】異譯諸本に依るに善根以下は偈文となす。本譯の論本別行も亦偈頌としたれは、之を五言四句の偈と見るべし、且らく隋譯を擧ぐるに「淨妙と勝上との力、牢固心にて轉勝す、菩薩の三阿僧祇を、說いて正修行と名く」と倚ほ唐譯參照。

能く自ら自利し、他を利す。已れ寂靜位を度りて、多く他を利益する事を行ず。若し智慧の行を離るれば、別に利他の方便無し。此の二地は多く智慧を行ずるに由るが故に、依智慧は又二地を攝す。此の義の爲の故に、別部は七阿僧祇有りと執す。

論曰　復次に云何んが三十三阿僧祇なるや。

釋曰　諸の大乘師有り、行に下中上有ることを顯はさんと欲し、未だ得ざるを得んが爲の方便を顯はさんと欲し、已に得たるを失はざる方便を顯はさんと欲し、已に得たるを失はざる增上の方便を顯はさんと欲し、三自在に入り、住し、出づることを顯はさんと欲するが故に、阿僧祇を分つて三十三と爲す。

論曰　方便地の中に三阿僧祇有り、一には信行阿僧祇、二には精進行阿僧祇、三には趣向行阿僧祇なり。

釋曰　地に二種有り、一には方便地、二には正地なり。未だ正地に入らざる方便の中に於て三阿僧祇有り。此の中に菩薩は諸佛に奉事し、心に發願し、口に誓を立て、如來の正說を信じ、及び如來を信じて信根を修するを勝と爲す。何を以ての故に、未だ法明を證せざるが故に、信根を修するに約して一阿僧祇を立て、名けて「信行」と爲す。若し菩薩は已に法明を證し、信根轉た堅く、決定して果は必ず應に得可きを知れば、此の中に菩薩は精進を勝と爲す。何を以ての故に、方便を得るに於て心已に明了にして、樂を惜まず苦を厭ふて精進を修するが故に、精進を修するに約して又一阿僧祇を立てゝ、「精進行」と名く。若し菩薩は精進成就して、心清淨なることを得て、惑障已に除けば、此の中に菩薩は趣向を勝と爲す。何を以ての故に、眞如觀に於て、求得の心生起し相續して、背捨すること無きが故に、此の趣向に約して、又一阿僧祇を立てゝ、「趣向行」と名く。

なり。三諦の所攝は能く三失に違ふ、是を依諦と名く。三捨の所攝は能く三失に違ふ、是を依捨と名く。三の寂靜の所攝は能く三失に違ふ、是を依寂靜と名く。三慧の所攝は能く三失に違ふ、是を依智慧と名く。依諦は依捨・寂靜・慧を攝す。昔の誓に隨順するが故に、相違せざるが故に、依捨は依諦・寂靜・慧を攝す。能く所對治を捨つるが故に、是れ一切の捨の果なるが故に、依寂靜は依諦・捨・慧を攝す。惑及び業の焦熱は寂靜なるが故に、依慧は依諦・捨・寂靜を攝す。智慧を先と爲すが故に、智慧の所隨なるが故に、是の故に六波羅蜜は依諦の生ずる所、依捨の攝する所、依寂靜の長ずる所、依智慧の淨むる所なり。何を以ての故に、依諦は是れ彼の生ずる因、依捨は是れ彼の攝する因、依寂靜は是れ彼の長ずる因、依慧は是れ彼の淨むる因なればなり。初めは諦を以て依と爲す、誓つて眞實を言ふが故に。中には捨を以て依と爲す、先に已に誓を立て、他の爲に能く自愛を捨つるが故に。後には寂靜を以て依と爲す、一切は寂靜を後と爲すが故に。初中後に慧を以て依と爲す、若し此れ有れば彼れ有り、若し此れ無ければ彼れ無きが故なり。四依と十地との相ひ攝すること云何ん。初地より三地に至るまでは依諦を勝と爲す。何を以ての故に此の中に菩薩は但だ修治して眞境を觀ずるも、道品等の功行に於て成せざるが故に、依諦は三地を攝す。四地より六地に至るまでは、依捨を勝と爲す。何を以ての故に、此の中に、菩薩は修治して眞境を觀じ、已に眞境に於て無功用の心を成ずるも、但だ對治の惑の爲に道品等を成就するのみ、道品の觀行、四諦の觀行、十二緣生の觀行を修治するに由りて、能く一切の惑を捨するが故に、依捨は又三地を攝す。七地八地は依寂靜を勝と爲す。何を以ての故に、菩薩は道已に成就するに由りて、諸惑多く滅し、多く伏し、復能く心に觸れず。此の二地には無相及び無功用の觀行已に成就し、心地の轉ずること細にして寂靜に安住するが故に、依寂靜は又二地を攝す。九地十地は依智慧を勝と爲す。一には自ら解すること勝れ、二には他をして解せしむること勝る。皆

此の行を成就し及び前の誓を安立せんが爲に、方便の中に於て智慧と、*相行誓と相應し、智慧を勝と爲す。此の三は皆實に無倒にして相違せず、故に名けて諦と爲す。菩薩は昔立つる所の誓の如く、今衆生利益の事を作すが故に諦に依つて住す。菩薩は能く六度の障を捨つるが故に、捨に依つて住す。菩薩は六度の功德と相應するが故に、寂靜に依つて住す。菩薩は自行の六度に由りて、善く利他の方便を解するが故に、智慧に依つて住す。菩薩は誓を立てゝ求むる者の心に違はず、必ず皆施與す。此の誓を立て、誓に違はざるに由るが故に實に能く施與す。其の施す所に隨ひて悉く歡喜を生ずるが故に、諦に依りて施を行ず。菩薩は能く財を捨て果を捨つるが、故に捨に依りて施を行ず、菩薩は財物と、受者と、行施及び滅じ盡くす中に於て、貪・瞋・無明・怖畏を生ぜざるが故に、寂靜に依りて施を行じ、應の如く、時の如く、實の如く施與し、前三の中に於て此の用最も勝れたり。故に智慧に依りて施を行ず。昔立つる所の誓の如く、先に受くる所の戒に違はず、惡戒を捨離して一切の惡行は寂靜なり。此の中に智慧を勝と爲す。故に諦等に依りて戒を行ず。昔立つる所の誓の如く、能く忍び、能く他の過失を分別することを捨て、瞋恚の上心寂靜なり。此の中に智慧を勝と爲す、故に諦等に依りて忍を行ず。昔立つる所の誓の如く、能く他を利益するの事を作し、能く憂弱の心を捨離し、惡法寂靜なり。此の中に智慧を勝と爲す、故に諦等に依りて精進を行ず。昔立つる所の誓の如く、能く衆生を利益するの事を思修し、五蓋等を捨離して心常に寂靜なり。此の中に智慧を勝と爲す、故に諦等に依りて定を行ず。昔立つる所の誓の如く、他を利益する方便を了達し、偏非の方便を捨離し、無明の焦熱已に寂靜を得、能く一切智を證す、故に諦等に依りて般若を行ず。應知の境及び昔の誓に隨ふは、應に知るべし、是れ依諦の義なり。類欲惑欲を捨離するは、應に知るべし、是れ依捨の義なり。一切の邪業永く息むは、應に知るべし、是れ依寂靜の義なり。覺及び通達に隨ふは、應に知るべし。是れ依慧の義

*相の字は衍なるべし。

論曰　地前に三有り、地の中に四有り。地前の三とは、一には不定阿僧祇、二には定阿僧祇、三には授記阿僧祇なり。

釋曰　復別部有り執すらく、七劫阿僧祇は行に淺深有りと爲す。境に眞俗及び第一義有るが故に、地前に三劫の阿僧祇を經。此の三境を緣じて三種の行有り、一には第一境に依る、白法と黑法と相ひ雜はる有るを、少分の波羅蜜と名く。二には第二境に依る、非黑白の法と白法と相ひ雜はる有るを、波羅蜜と名く。三には第三境に依り、非黑白無雜の法有るを、眞の波羅蜜と名く。卽ち此の三に約して三阿僧祇を立つ。一には不定阿僧祇、黑白相ひ雜はるを以て、凡夫と異らざるが故に。二には定阿僧祇、已に無流法と有流法と相ひ雜はるを得、已に無流法を得るも、定んで猶ほ相ひ雜はるが故に授記す可らず。三には授記阿僧祇、但だ是れ無流法にして餘法を雜へず。但だ無流法のみなるが故に定んで餘法を雜へず。故に授記す可し。故に地前に三劫の阿僧祇を經。

論曰　地の中に四有り、一には實諦に依る阿僧祇、二には捨に依る阿僧祇、三には寂靜に依る阿僧祇、四には智慧に依る阿僧祇なり。

釋曰　初地より三地に至るまでを依實諦地と名く、初地に發願し、二地に十善法を修し、三地に諸定を修習するは、並びに境界に依るが故に、依實諦地と名く。四地より六地に至るまでを依捨地と名く。四地に道品を修し、五地に四諦を觀じ、六地に十二緣生を觀ずるは、並びに道に依りて惑を捨つるが故に依捨地と名く。七地八地を依寂靜地と名く。七地は無相の有功用、八地は無相の無功用なるを以ての故に、依寂靜地と名く。九地十地を依智慧地と名く。九地に自ら解勝を得、十地に他をして解勝を得しむるを以ての故に、依智慧地と名く。諦に三種有り、一には誓諦、二には行諦、三には慧諦なり。誓諦とは、初發心より誓を立てゝ他を利益することを爲す。行諦とは、立つる所の誓の如く修行して誓と相應し、誓の實なるが如く、行も亦實なり。慧諦とは、

て七數と爲すのみ(といふ)。第一の大劫阿僧祇には願行地を度して、歡喜地に行くことを得、第二の大劫の阿僧祇には歡喜地より、依戒學地と依心學地とを度りて、燒然地に行くことを得、第三の大劫阿僧祇には、燒然地より依慧學地を度りて、遠行地に行くことを得。又一大劫阿僧祇を無相の不定行と名け、無相の有功用地を度り、又一大劫阿僧祇を無相の定行と名け、無相の無功用地を度り、又一大劫阿僧祇を無相の勝行と名け、無礙辯地を度り、又一大劫阿僧祇を最勝住と名け、灌頂地を度る。阿僧祇に二種有り、一には謂く阿僧祇劫、何を以ての故に、此の劫に由るに日夜・半月・月時・行年雙等の時は數ふ可からざるが故に、阿僧祇劫と名く。二には謂く劫阿僧祇、何を以ての故に、此の劫の中に於て菩薩は修行す、若し劫を以て量と爲せば、此の劫は又數ふべからず、故に劫阿僧祇と名く。前の阿僧祇劫の中には時數ふ可らざるに由り、後の阿僧祇劫も又數ふ可らざるに由り、若干の大劫阿僧祇を經て無上菩提を得。今は定んで三大劫阿僧祇に無上菩提を得て、過ぎず減らず。若し菩薩にして最上品の正勤を修行すれば、能く無數の小劫を超え、或は無數の大劫を超ゆ。唯大劫阿僧祇を超ゆること能はず。皮肉心の三煩惱を除くに約すが故に、三阿僧祇劫を立つ。第一劫阿僧劫は菩薩の心明利ならず、方便成ぜず、正勤猶ほ劣れり、是の故に實に一大劫阿僧祇の時を經て、方に願行地を度る。此の位の功行は時と相符す。第二の大劫阿僧祇は、若し功行を以て時に約すれば、應に九劫の阿僧祇を經るべく、菩薩の心用明利にして方便已に成じ、正勤又勝れたるに由り、時を經ること少なりと雖も功行多きを得、功は八大劫阿僧祇を超ゆるも、止だ第二の一大劫阿僧祇を經るのみ。第三の大劫阿僧祇は、若し功行を以て時に約すれば、應に二十一の大劫阿僧祇を經べきも、菩薩の智慧・方便・正勤は最勝なるに由りて、時を經ること少しと雖も功行彌多く、功は二十大劫阿僧祇を超ゆるも、止だ第三の一大劫阿僧祇を經るのみ。

含を第五人と爲す。菩薩の位も亦爾なり。初地を第一位と爲し、二地より七地に至るまでを第二位と爲し、第八地より第十地に至るまでを第三位と爲す。亦製立して五人と爲すことを得。方便より初地に至るまでを第一人と爲し、二地より四地に至るまでを第二人と爲し、五地より六地に至るまでを第三人と爲し、七地を第四人と爲し、八地より十地に至るまでを第五人と爲す。復次に聲聞の位地に等しきに由りて、應に知るべし、菩薩の十二地の次第も亦此の如し。聲聞の性地の如く、菩薩の初位も亦此の如し。聲聞の正定位の加行、謂ゆる苦法忍等を修するが如く、菩薩の第二位も亦此の如し。聲聞の已に正定位に入るが如く、菩薩の第三位も亦此の如し。聲聞の已に不壞の信を得て、聖の愛する所の戒位に住し、上地の惑を滅することを爲すが如く、菩薩の第四位も亦此の如し。聲聞の依戒の學にて依心の學を引攝するが如く、菩薩の第五位も亦此の如し。聲聞の已に依慧の學位を得たるが如く、菩薩の第六・第七・第八位も亦此の如し。聲聞は復境界を思量せず、是れ無相三摩提の加行なるが如く、菩薩の第九位も亦此の如し。聲聞は已に無相の定位を成就せるが如く、菩薩の第十位も亦此の如し。聲聞は已に無相の三摩提を出でて、解脱の入位に住するが如く、菩薩の第十一位も亦此の如し。聲聞の、具相の阿羅漢位に住する如く、菩薩の第十二位も亦此の如し。此の十二人の菩薩は五位の所攝なり。第一位に第一・第二・第三の三人を攝し、第二位に第四・第五・第六の三人を攝し、第三位に第七・第八の兩人を攝し、第四位に第九の一人を攝し、第五位に第十・第十一・第十二の三人を攝す。若し聲聞の五位に約するも、亦十二人を攝することを得るは、菩薩の位の攝に異らず。

論曰 復次に云何んが七阿僧祇劫なるや。

釋曰 餘部の別執を顯はさんと欲するが故に「復次に」と言ふ。七阿僧祇劫の時と前の三阿僧祇劫の時と、等しと爲すや、短長有りと爲すや。此の執は三阿僧祇劫に等しとし、但だ別義有り開い

位に至らざるが故に、淸淨の意行に非ず。世第一の人の未だ無流の心を得ざるが如きを、說いて淸淨にあらずと爲す。無流心の所緣の法相には忘失有ること無きが故に、無流の心を得るを說いて正定位と爲す。有流の心には忘失有るが故に、正定の名を受くることを得ず。菩薩も亦爾り、未だ初地に入らざれば正定の名を得ず。此の不淸淨の意行の人にして、若し眞如を見れば、卽ち淸淨の意行地に入り、初地より十地に至るまで同じく此の名を得。淸淨意行の人に自ら四種有り、初の一は通によりて名を立つ、謂ゆる淸淨意行なり。後の三は別によりて名を立つ、謂ゆる有相行・無相行・無功用行なり。此の淸淨意行の人は、第六地より以還を說いて有相行と名く。有相行とは境界の相に四種有り、一には有分別の相、二には無分別の相、三には品類究竟の相、四には事成就の相なり。有分別の相とは、定の緣ずる所の境は等分に毘鉢舍那の境と爲す、若し無分別にして奢摩他の境と爲らば、此の境を緣じて捨[二]を生ず、是れ定の相なり。定境を緣じて無分別眞如の起るを、無分別の相と名く。品類究竟の相とは、謂く如理如量の二修なり。事成就の相とは、謂く菩薩の地々の中の轉依なり。第七地は是れ無相行の有功用にして、如來の說く所の十二部の法門の相、乃至十二緣生の相を熟ら思量するが故に、法門の相を緣ぜずして直に眞如味に通達す。此の通達は功用を離るれば則ち成ぜざるが故に、此の地を說いて無相行の有功用と爲す。淸淨意行と有相行と、無相行との三人は、第二の阿僧祇劫に修行して圓滿することを得。若し人八地に入るも、無相行有りて無功用未だ成就せず、若し八地圓滿すれば、八地の無相行に於て無功用已に成ず。九地十地の無相行に於ては、無功用未だ成滿せず。第三阿僧祇劫に此の無相の無功用乃ち成ず。譬へば須陀洹・斯陀含・阿那含の三位を製立して五人と爲すが如し。若し三位を云何が製立して五人と爲すや。位の差別に由るが故に五人を成ず。初の方便より須陀洹に至るまでを第一人と爲し、家々を第二人と爲し、斯陀含を第三人と爲し、一種子を第四人と爲し、阿那

【二】捨とは止觀平等の義にして、或は不觀又は不行ともいふ。

卷の第十一

釋入因果修差別勝相第五の二

修時章　第五

論曰　幾時の中に於て十地を修習して、正行圓滿することを得るや。

釋曰　此の十地は是れ菩薩の大地にして、修行の時も、二乘に同じかるべからず。何を以ての故に、唯自身の爲のみならず、濟度する所多きが故に、修する所の方便多きが故に、至るべき所の處は最も高遠なるが故に、譬へば王の行は貧人に同じからざるが如き故なり。大小乘の修行の時に長短有り、此の義を顯はさんと欲するが故に修行の時を問ふ。

論曰　五種の人有り、三阿僧祇劫に於て修行し圓滿す。或は〔一〕七阿僧祇劫、或は三十三阿僧祇劫あり。何者か五人と爲す。願行地を行する人は、一阿僧祇劫を滿す。清淨意行を行ずる人と、有相行を行ずる人と、無相行を行ずる人とは、六地乃至七地に於て、第二阿僧祇劫を滿す。此れより後は無功用行の人にして、乃至十地に第三阿僧祇劫を滿す。

釋曰　何等をか五と爲すや。一には一人有り、謂く願樂行の人なり。二には三人有り、謂く清淨意行の人と、有相行の人と、無相行の人となり。三には一人有り、謂く無功用行の人なり。是を五人と名く。願樂行の人に自ら四種有り、謂く十信・十解・十行・十迴向なり。菩薩の聖道に四種の方便有りと爲すが故に四人有り。須陀洹道の前に四種の方便有るが如く、此の四人を願樂行地と名け、第一阿僧祇劫に於て修行は圓滿することを得。此の地若し已に圓滿するも、此の觀行の人は未だ清淨の意行を得ず。未だ眞如を證せざるを以て、未だ無分別智を得ずさるか故に。無分別智は即ち是れ清淨の意行なり。又猶ほ二乘の心に同じきが故に、清淨の意行に非ず。又未だ菩薩の不退

〔一〕七阿僧祇の説と、三十三阿僧祇の説とは本譯に出づるのみにて、他の異譯に無し、唐譯參照。

と名く。故に[三]重藏の名有り。復次に佛は二乘の爲に說かされば、二乘に於て隱祕の義有り、故に名けて藏と爲す。此の經の中には、一切の波羅蜜を地々に各々修習して、此の地を成ずるを得ることを說けり。諸佛は一切の土處に於て恒に勝行の人の爲に說く。此の正說の地義は、如來の法の中にて無等の說と爲す。此の地に勝ることを得る義無く行無きを以てなり。此の地は能く一切の義の爲に依止と作るが故に。何を以ての故に、[三三]如來は簡擇して勝處に於て說くに由るが故なり。勝れたる所以は、外塵及び能住の衆生と所住の處とは皆勝れたるを以ての故なり。

【三二】重藏とは論本に波羅蜜藏を藏する經といへるを釋す。

【三三】唐譯參照。

惡を伏し善を行ずるが故に、兼て大悲に屬す。若し分別を離るれば此の事成ぜず。故に是れ無分別後智の攝なり。云何んが智波羅蜜は是れ無分別後智の攝なるを知るや。復何の法を以て此の波羅蜜の體と爲すや。此の兩問に答へんが爲の故に、

論曰　四に[一九]若那波羅蜜、此の度は是れ能く前の六度の智を成立し、能く菩薩をして大集の中に於て法樂を受け、及び衆生を成熟せしむ。

釋曰　此の度は謂ゆる智波羅蜜なり。智に二種有り、一には有分別、二には無分別なり。今は有分別の智を明かす。何を以ての故に、能く前の六波羅蜜を成立するを以ての故なり。「能く成立す」とは、如來の六波羅蜜に依りて說く所の一切の正法を、菩薩は能く思量し簡擇して自ら通達することを得、及び他をして通達することを得しむ。能く六度を成立するが故に、菩薩は大集の中に於て法樂を受くることを得。自他をして通達せしむるは、衆生を成熟せんと欲するが爲なり。此れ卽ち智波羅蜜の事なり。亦思慧を以て體と爲す。此の智は旣に物を利せんが爲の故に、兼て大悲に屬す。若し分別を離るれば此の事成ぜず。故に是れ無分別後智の攝なり。

論曰　後の四波羅蜜は應に知るべし、是れ無分別後智にして、一切の波羅蜜を攝し、一切の地の中に於て同時に修習せず。

釋曰　[二〇]別義に隨ひて、諸地に各一度を修するが故に、同時ならず。

論曰　波羅蜜藏を藏する經によりて、應に知るべし、此の法門は廣く諸義を顯はす。

釋曰　一切の大乘法を波羅蜜藏と名く。他を利益せんが爲の故に佛は大乘を說いて、諸の波羅蜜を攝藏す。聲聞乘は此の藏の名を得るに非ず。聲聞乘は他を利する爲に說かざるを以ての故なり。若し一切の大乘を皆波羅蜜藏と名くれば、此の法門は何より出づると爲すや。此の法門は是れ[二一]十地の波羅蜜藏の所攝なり。文を以て義を攝するが故に藏と名く。部黨の義類の相攝を又藏

【一九】若那波羅蜜 Jñāna-pāramitā 智度と譯す。

【二〇】此の段の釋は唐譯に意を盡くせり、參照。

【二一】十地の波羅蜜藏とは十地經を指す。

名く。若し分別を離るれば此の事成ぜず。故に是れ無分別後智の攝なり。復云何んが願波羅蜜は是れ無分別後智の攝なるを知るや。復何の法を以て此の波羅蜜の體と爲すや。此の兩問に答へんが爲の故に、

論曰　二に[一七]波尼他那波羅蜜、此の度は能く種々の善願を引攝し、未來世に於て六度の生緣を感ずるが故に、

釋曰　此の願は現在世に於ては諸の善行に依りて、能く種々の善願を引攝す。此の願は未來世に於ては能く隨つて六度の生緣を感ず、謂ゆる好道器及び外の資糧なる善知識、正聞等なり。是を善願の因果の事と名く。清淨の意欲を以て其の體と爲す。般若に依るが故に清淨を得、大悲に依るが故に意欲有り。若し分別を離るれば此の事成ぜざるが故に、是れ無分別後智の攝なり。云何んが力波羅蜜は是れ無分別後智の攝なるを知るや。此の波羅蜜は復何の法を以て體と爲すや。此の兩問に答へんが爲の故に、

論曰　三に[一八]波羅波羅蜜、思擇修習の力に由りて諸の波羅蜜の對治を伏するが故に、能く六波羅蜜を引いて相續して生じ、間缺有ること無し。

釋曰　餘經の中に於て力に二種有りと說く、一には思擇力、二には修習力なり。「思擇力」とは、諸法の過失及び功德を正思し、此の思擇にして若し增勝すれば自地の惑の能く動ずる所に非ず。堅强なるが故に「力」と名く。「修習力」とは、心此の法を緣じて觀行を作せば、心と法と和合して一を成ぜしむ。猶水乳の如く、亦熏衣の如し。是を名けて修と爲す。此の修若し增して上上品を成ずれば、能く下地の惑を斷除す。亦堅强なるを以ての故に力と名く。此の中には但だ思擇力を取り、諸の波羅蜜の對治の惑を伏し、六波羅蜜を行じ相續して間缺無からしむ。此は卽ち是れ力波羅蜜の事なり。既に但だ思擇力を取るが故に、思慧を以て其の體と爲す。他を利益せんが爲に

【一七】波尼他那波羅蜜 Praṇidhāna-pāramitā は願度と譯す。

【一八】波羅波羅蜜 Bala-pāramitā 力度と譯す。

智を行ずること圓滿す。故に

論曰　十地の中に於て十波羅蜜を修するに、次第に隨つて成ず。前六地に於て六波羅蜜有り、次第に說けるが如し。

釋曰　前の六地は、法界の六種の功德に通達するが故に、各一波羅蜜を行ず。此の義は前に說けるが如し。

論曰　後の四地に於て四波羅蜜有り、

釋曰　若し六波羅蜜を說けば、方便勝智等の四波羅蜜は、應に知るべし、六の中に攝在す。攝の義は前に說けるが如し。若し十波羅蜜を說けば、前の六波羅蜜は是れ無分別智の攝にして、後の四波羅蜜は是れ無分別後智の攝なり。後の四地には無分別後智に依りて、四波羅蜜を修行す。云何んが方便勝智は是れ無分別後智の攝なるを知るや。此の波羅蜜は、復何の法を以て體と爲すや。此の兩問に答へんが爲の故に。

論曰　一に[一六]漚和拘舍羅波羅蜜、六波羅蜜の生長する所の善根の功德を、一切の衆生に施與して悉く平等ならしめ、一切の衆生の爲に無上菩提に迴向す。

釋曰　若し人無上菩提を得んと求むれば、先づ自ら思惟すらく、凡そ是の一切の衆生を利益する事を我れ悉く應に作すべし、是の故に無上菩提を求むと。一切の菩薩道を行ずるの人は、其の心皆爾なり。衆生を利益せんと欲するが爲に由るが故に、所作の善根功德を悉く無上菩提に迴向す。因果皆同じ、是を平等と名く。此の平等は是れ方便勝智の用なり。般若と大悲とを以て其の體と爲す。何を以ての故に、是れ六波羅蜜は般若に依りて生長し、大悲に依りて衆生の爲に無上菩提に迴向して平等に皆得しむ。般若に由るが故に梵釋等の富樂の果に迴向せず。大悲に由るが故に二乘の果に迴向せず。是の故に生死を捨てず、中に於て染汚せられず。是を方便勝智の波羅蜜と

【一六】漚和拘舍羅波羅蜜 Upāya-pāramitā は方便度と釋す。

薩は法界の垢位に增有るを見ず。法界の無垢位に減有るを見ず。又無垢の位に道の生ずるを增と爲すと見ず。有垢の位の道の生ぜざるを減と爲すと見ず。一法にして增減有ることを見ざるが故なり。此の法界に依りて勝願成ずることを得。菩薩は八地に於て眞俗の境を緣じて兩智相違す。若し願力を離れては並びに成ずるの義無し。何を以ての故に、眞を緣ずるは是れ無分智の自在なり、無功用心を以ての故に。俗を緣ずるは是れ淨土の自在なり、清淨なる有功用の心を以ての故に。此の二の自在は必ず願力に依りて成ずることを得。此願は何の法を以て體と爲すや。未だ得ざるを得んと求むるは、是れ願の體なり。先に求むる所の如く自然に成ずるは是れ願の用なり。一切の生處に恒に諸佛に値ひ、常に施等を行じ善根を成立して斷ぜざるは、是れ願の事なり。此の願は但だ利他の爲にして自利の爲に非ず。斷ぜざるを以ての故に、一切の生處に利他は無窮なり。是の故に八地には願を行ずること圓滿す。九地には、智の自在の依止の義に通達するに由りて、九地の中に於て二種の力を得、謂ゆる思擇力と及び修習力となり。此の力に由るが故に能く一切の正行の對治を伏し、能く善行を決定せしむ。此の力は何を以て體と爲すや。無邊の智能は、是れ力の體なり。能く對治を伏して起らざらしむるは、是れ力の用なり。行ずる所をして善く決定して清淨に無雜無礙ならしむるは、是れ力の事なり。此の力は但だ利他の爲にして自利の爲に非ず。決定を以ての故に利他は無窮なり。是の故に九地には力を行ずること圓滿す。十地には業の自在依止の義に通達するに由りて、菩薩は眞如の遍滿を觀ず。是れ應化身の依止なるが故に、眞如に隨つて、十方の世界に於て二身を顯現して、自他の利益の事を作すことを得。此の業は是れ應化の二身の所顯なり。此の智は何を以て體と爲すや。般若及び定は是れ智の體なり。生死と涅槃とに任せざるは、是れ智の用なり。凡夫及び聖人を利益するは、是れ智の事なり。此の智は但だ利他の爲にして自利の爲に非ず。二身の所顯なるが故に利他は無窮なり。是の故に十地には

無ければ、此の愛は滅す可らず。此の愛若し滅すれば正勤已に成れることを知る。是の故に四地には精進を行ずること圓滿す。五地には相續の不異なる義、謂ゆる一切の諸佛の法身は自性別異無しと通達するに由りて、菩薩は十種の淸淨の意の平等を得。此の意の平等なるは卽ち是れ菩薩の定なり。何を以ての故に、菩薩の定は境界平等にして、眞如及び衆生を緣ずるに由るが故に、行平等にして、通して六度を攝するに由るが故に、方便平等にして、高下心を離るゝに由るが故に、道平等にして、有無の二邊を離るゝに由るが故なり。此の如き等の十種の意の平等を定の體と爲す。是の故に五地には定を行ずること圓滿す。六地には無染淨の義に通達するに由りて、菩薩は六地に在りて十二緣生を觀ず。此の觀の中には一法として淨有り染有ることを見ず。何を以ての故に、法界は自性淸淨なるが故なり。無明等の十二分は唯分別を性と爲す。分別は既に無相を性と爲すが故に、法に染有るを見ず。染既に成ぜざるが故に、法に淨有るを見ず。經に言るが如く、龍王よ、十二緣生は、或は生或は不生なり。世諦に約すれば生と說き、眞諦に約すれば不生を說く、と。復次に十二緣生に於て、法として染と名くるもの無く、法として淨と名くるもの無し。法性に別異無きが故なり。是の故に六地には般若を行ずること圓滿す。七地には種々の法の別異無き義に通達するに由り、謂ゆる如來は三乘無量の法門を說くも、同一の眞如味にして、十二部經に說く所の種々相の想は、永く復生せずと。諸法に別異無き義を知るに由り、所有の眞俗の諸行は一向に無上菩提に迴向す。卽ち是れ方便して勝智に迴向するを方便の體と爲し、他をして益を得しむるを方便の用と爲し、施等の善根の滅せず盡きざるを方便の事と爲す。此の方便は但だ利他の爲にして自利の爲に非ず。盡きざるを以ての故に利他は無窮なり。是の故に七地には方便行を行ずること圓滿す。八地には不增減の義に通達するに由りて、菩薩は煩惱の滅する時に滅無く、道の生ずる時に增無しと觀ず。法界に兩位有り、一には有垢の位、二には無垢の位なり。菩

して常に能く施等を修行す。是の故に願は能く力を引く。此の力に因るが故に、言の如く義を執する無明は則ち滅し、施等の增上緣なる正說法の樂を受くることを得。此の法樂に因りて能く衆生の善根を成熟するが故に、力は能く智を引く。

[一五]初地には遍滿の義に通達して出世の智を得たる菩薩は、見道の所攝の法界、謂ゆる二空を見るが故に、能く自他の平等を了知す。平等を得るに由りて自らを愛し他を憎むことをせず。自他の利益に於て能く平等に行ず。是の故に初地には施を行ずること圓滿す。二地には最勝の義、謂ゆる自性清淨なるに通達するに由り、菩薩は此の如き意を作す、經に言へるが如く、我等は同じく此の清淨を得るが故に出離す、是の故に應に唯眞道を修すべしと。此の經は二義を顯はす、一には法界の自性清淨にして最勝無別なることを顯はす。二には眞道は法界に歸趣することを顯はす。既に法界に上中下品有ることを見ざるが故に、二乘の果を求めず、但だ無上菩提を求むるのみ。此の清淨の道は卽ち是れ菩薩の戒なり。是の故に二地には戒を行ずること圓滿す。三地には勝流の義に通達するに由るが故に忍を行ず。何を以ての故に、如來の說く所の十二部經は是れ法界の勝流にして、法界に通達するによりて生ずるが故なり。若し人理の如く文に依りて修行すれば、此の希有の法を證することを得。菩薩は是の思惟を作す、經に言へるが如く、此の文を得んが爲に、忍び難くして而も忍ぶこと能はざるもの有ること無しと。假ひ三千大千世界の中に滿つる盛火にも、菩薩は此の法を求めんが爲には能く身を火中に投ず。是の故に三地には忍を行ずること圓滿す。四地には無攝の義に通達するに由りて、法界を觀ずるに繫屬する所無し。是れ無分別智の境なるを以ての故なり。經に言へるが如く、此の持訶那に通達するに由りて、三摩提、三摩跋提及び善法の愛滅して更に生ぜず。此の地の中には一切の定、及び三十七道品の法は極めて成就し、中に於て愛染して捨離す可らず。何を以ての故に、過失見難きが故なり。若し最勝の正勤

[一五] 以下第四に十地に十度を行ずることを明かす。

めに、或は下界に願生するに由り、或は心の羸弱なるに由り、恒修習と及び心の內に住するとに於て、功能の、定んで菩薩藏の文句を緣じて生ずるもの有ること無く、功能の、出世の般若を引くもの有ること無し。菩薩の行は薄くして善根功德少ければ、未來世に於て煩惱薄少にして無力ならん等と願ふ。是れ菩薩の願波羅蜜の力にして、煩惱をして薄少ならしむる等、能く菩薩の精進波羅蜜を起す。自ら爲すこと旣に爾り、他をして亦然らしむ。故に願波羅蜜は是れ精進波羅蜜の助伴なり。此の已に精進を得たる菩薩は、善知識に事へて正法を聞くことを得るに由り、聞くが如く正しく思惟するが故に、能く羸弱の心地を除き、美妙の境に於て强勝の心地を得。是れ菩薩の力波羅蜜なり。此の修力に由りて、菩薩は能く心を引いて、內境に住せしむるが故に、力波羅蜜は是れ定波羅蜜の助伴なり。此の已に力を得たる菩薩は、菩薩藏の文句の生ずる所の聞思修の慧を緣じ、及び五明の智を緣ず。此の智は能く理の如く眞俗の境を簡擇す。此の智は或は無分別智の前に在り、或は無分別智の後に在り。是れ菩薩の智波羅蜜なり。此の智に由りて能く定を生じ、及び般若を引出するが故に、智波羅蜜は是れ般若波羅蜜の助伴なり。

【一四】復次に菩薩の十種の學處の次第云何ん。前々の波羅蜜は能く攝して後後の波羅蜜を成ず。彼の依止と爲るが故なり。若し菩薩は六塵及び自身の樂を惜まざれば、禁戒を受持することを得。菩薩は戒を護惜せんが爲の故に、他の毀辱を忍受す。能く忍受するに由るが故に、精進して懈らず。此の精進に由りて惡を息め善を生ずるが故に、三摩提に觸る。若し定成就すれば則ち能く出世の般若を引く。般若は前六度に迴向するに由りて、大菩提を得んが爲の故に、施等盡くること無きが故に、般若は能く方便の因を引く。此の方便は諸の善願を發し、能く攝して生處に隨順し、一切の生處に恒に如來の出世に値ふ。是の故に常に施等を行ずるが故に、方便は能く願を引く。此の願に因るが故に二種の力を得、謂ゆる思擇力と及び修習力となり。施等の對治を破して、決定

【一四】以下三に十の學處の前後の次第相攝を明かす。

乃至法界の業自在依止の義に通達す。此の分に由るが故に十地圓滿す。菩薩は十地に於て未だ勝能有らず。未だ清淨にして圓滿せる法身を得ず。未だ一切の應知の境に於て無著無礙の見及び智を得ること能はず、未だ得ざる所以の者は三障に由るが故に、一には一切應知の境に於て微細の著の無明、二には一切の應知の境に於て微細の礙の無明、此の二の無明の所感の〔二〕無有の生死を麁重報と名く。此の三障を滅せんが爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因りて三障を滅して、已に如來地に入れば七種の最勝清淨と離生の清淨とを得、及び清淨なる圓滿の法身の無著無礙の見智等を得。此の分に由るが故に如來地圓滿す。十地の功德は皆是れ上有り、如來地の功德は悉く是れ無上なり。

〔三〕諸の波羅蜜は是れ菩薩の學處なり。何の故に或は說いて六有り、或は說いて十有りや。六有りと說くに凡そ二義有り、一には前の三は他の世間の利益を成ず。二には後の三は他の煩惱の對治を成ず。菩薩は施を行ずるに由りて、衆生の資生の具を立つるが故に、他をして貧窮の苦を離れしむ。菩薩は戒を行ずるに由りて、衆生を逼害し損惱することを離るるが故に、他をして怖畏無からしむ。菩薩は忍を行ずるに由りて、衆生の逼害損惱の惡事に報いさるが故に、他をして疑無く安心せしむ。故に此の三は是れ他の世間の利益を成ず。菩薩は精進を行じて、若し他未だ惑を伏せず、及び未だ惑を斷ぜざれば、能く此の人を善及助善の處に於て安立す。此の精進に由りて、諸惑は彼をして善及助善の處を退かしむること能はず。菩薩は定を行じて、能く他の煩惱を伏滅す。菩薩は般若を行じて、能く他の煩惱を斷除す。是の故に後の三は他の煩惱對治を成ぜんが爲なり。或は十有りと說いて、更に後の四波羅蜜の數を立つるは、前六を助成せんが爲の故に後の四を立つ。前の三波羅蜜の利益する所は、四攝の所顯に由る。方便波羅蜜は能く彼を善處に安立するが故に、方便波羅蜜は是れ前の三波羅蜜の助伴なり。若し菩薩は現世に於て或は煩惱多きが爲

〔二〕無有の生死とは之を滅して如來地に入るが故に後有無き生死の意にして第十地の所感なり。

〔三〕次に六度及び十度を立つる理由を明かす。

る所の因縁の生死を麁重報と名く。三障を滅せんが爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因りて三障を滅して、已に第七地に入れば八種の轉勝の清淨を得、及び有爲法の微細なる行の起す諸相を離れ、乃至法界の種々の法の無差別の義に通達す。此の分に由るが故に七地圓滿す。菩薩は七地に於て未だ勝能有らず。未だ功用の心を離れて無相修の中に住することを得る能はず。未だ自利利他の相の中に於て心自在なるを得ること能はず。未だ能はざる所以の者は、三障に由るが故に、一には無相觀に於て功用を作す無明、二には相行に於て自在なる無明、此の二の無明の感ずる所の〔二〕有有の生死を麁重報と名く。三障を滅せんが爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因りて、三障を滅して、已に第八地に入れば八種の轉勝の清淨を得、及び功用心を離れて無相修の中に住する等を得、乃至法界の無增減の義に通達す。此の分に由るが故に八地圓滿す。菩薩は八地に於て未だ勝能有らず。未だ正説の中に具足する相の別異の名言品類等に於て自在を得ず。未だ善巧に陀羅尼を説くことを得ず。未だ得ざる所以の者は三障に由るが故に、一には無量の正説法の無量の名句味の難に答ふる巧言の自在陀羅尼の無明、二には四無礙辯に依りて疑を決して解を生ずる無明、此の二の無明の感ずる所の有有の生死を麁重報と名く。此の三障を滅せんが爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因りて三障を滅して、已に第九地に入れば八種の轉勝清淨を得及び正説の中に於て具足せる相の自在等を得、乃至法界の智の自在の依止の義に通達す。此の分に由るが故に九地圓滿す。菩薩は九地に於て未だ勝能有らず。未だ正しく圓滿せる法身を説くことを得る能はず。未だ無著無礙の圓滿の六通慧を得ず。未だ得ざる所以の者は三障に由るが故に、一には六神通慧の無明、二には微細なる祕密の佛法に入る無明、此の二の無明の所感の有有の生死を麁重報と名く。此の三障を滅せんが爲の故に正勤を修す、正勤を修するに因りて三障を滅して、已に第十地に入れば八種の轉勝の清淨を得、及び能く正しく圓滿せる法身を説くことを得る等、

〔二〕有有の生死とは尙後有ある生死の意にして七八九の三地に之を感ず。

だ能はざる所以の者は三障に由るが故に、一には三摩跋提の愛の無明、二には行の法愛の無明、此の二の無明の感ずる所の方便の生死を麁重報と爲す。此の三障を滅せんが爲の故に、正勤を修す。正勤を修するに因つて三障を滅して、已に第四地に入れは八種の轉勝清淨と、及び助道品の法の中に於て意の如く久住すること等を得て、乃至法界の無攝の義に通達す。此の分に由るが故に四地圓滿す。菩薩は四地に於て未だ勝能有らず。菩薩正に四諦觀を修し、生死と涅槃とに於て未だ一向に背取する心を捨離すること能はず。未だ四種の方便の所攝の菩薩の道品を修すること能はず。未だ得ざる所以の者は、三障に由るが故に、一には生死と涅槃とに一向に背取する思惟の無明、二には方便の所攝の修習の道品の無明、此の二の無明の感ずる所の[10]因緣の生死を麁重報と名く。此の三障を滅せんが爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因りて三障滅して、已に第五地に入れは八種の轉勝清淨を得、及び背取の心を捨離する等を得、乃至法界の相續して異らざる義に通達す。此の分に由るが故に五地圓滿す。菩薩は五地に於て未だ勝能有らず。諸行の法の生起し相續することを理の如く證するが故に、多くの修行に由りて有爲法の相を厭惡するが故に、未だ長時に意の如く無相の思惟に住すること能はざるが故なり。未だ能はざる所以の者は三障に由るが故に、一には諸行の法の生起し相續するを證する無明、二には相想の數起る無明、此の二の無明の感ずる因緣の生死を麁重報と名く。此の三障を滅せんか爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因りて三障を滅し、已に第六地に入れは八種の轉勝の清淨及び諸行の生起し相續するを證せさる等を得て、乃至法界の無染淨の義に通達す。此の分に由るが故に六地圓滿す。菩薩は六地に於て未だ勝能有らず。未だ有爲法の微細なる諸相行の起るを離るること能はず、未だ長時に意の如く無間に無流の無相の思惟の中に住すること能はず。未だ能はさる所以の者は三障に由るが故に、一には微細なる相行の起る無明、二には一向に無相の思惟の方便の無明、此の二の無明の感ず

【一〇】因緣の生死とは八相示現の生死をいふ、四五六の三地に之を感ず。

の故なり。五には已に出世の行に至る、所得の諸地は必ず無流なるか故なり。六には已に菩薩の法如を得、自他の平等を得るに由るが故なり。七には已に善く菩薩の處を立つ、眞實の菩薩の法を證するに由るが故なり。八には已に三世の平等に至る、一切法の無我の眞如を覺了するに由るが故なり。九には決定して如來性の中に在り、當來は必ず成佛すべきが故なり。十には已に明事を離壞す、佛道に由りて無明の㲉を破し、外に於て般涅槃するが故なり。菩薩は初地に於て、法界遍滿の義を見るに由りて、此の十分を得。聲聞の初果に在りて十分の功德有るが如し。此の分に由るが故に初地圓滿す。菩薩は初地に於て未だ勝能有らず、未だ菩薩の戒の中の、微細の犯戒の過行に了達すること能はざるが故なり。未だ能はざる所以の者は三障に由るが故に、一には微細の犯過の無明、二には種々相の業行の無明、此の二の無明の感ずる方便の生死なるが故に、麁重報と名く。三障を滅せんが爲の故に正勤を修す、正勤を修するに因りて三障を滅して、已に第二地に入れば八種の清淨の功德を得、一には信樂の清淨、二には心の清淨、三には慈悲の清淨、四には波羅蜜の清淨、五には佛を見佛に事ふる清淨．六には衆生を成熟する清淨、七には生の清淨、八には威德の清淨なり。上上地に於て如來地を離るるまで、此の八種の功德は轉上し轉勝す。此の分に由るが故に二地圓滿す。菩薩は二地に於て未だ勝能有らず。未だ世間の四定四空の三摩跋提、及び聞持陀羅尼の具足する念力を得ず。未だ得さる所以の者は三障に由るが故に、一には欲愛の無明、二には具足聞持陀羅尼の無明、此の二の無明の感ずる所の方便の生死を麁重報と名く。三障を滅せんが爲の故に正勤を修す。正勤を修するに因つて三障を滅して、已に第三地に入れば、八種の轉勝清淨と及び四定等とを得、乃至法界勝流の義に通達す。此の分に由るが故に三地圓滿す。菩薩は三地に於て未だ勝能有らず。未だ自ら得る所の助道品の法の中に隨つて意の如く久しく住すること能はず。未だ三摩跋提と法との愛心を捨離して清淨に住すること能はず。未

の行を修するや、[八]菩薩は先に願行地の中に在りて、十種の法行に於て願忍を修して成ずることを得、願忍の成ずるに由りて願行地を過ぎて、菩薩の正定位に入る。願とは十大願有り、一には供養の願、勝縁なる福田師法主を供養せんと願ふ。二には受持の願、勝妙の正法を受持せんと願ふ。三には轉法輪の願、大集の中に於て未だ曾て有らざる法輪を轉ぜんと願ふ。四には修行の願、說の如く一切の菩薩の正行を修行せんと願ふ。五には成熟の願、此の器世界の衆生の三乘の善根を成熟せんと願ふ。六には承事の願、諸の佛土に往きて常に諸佛を見、恒に敬事することを得て正法を聽受せんと願ふ。七には淨土の願、自土を清淨にして正法を安立し、及び能く衆生を修行せしめんと願ふ。八には不離の願、一切の生ずる處に於て、恒に諸佛菩薩を離れずして、意行を同じくすることを得んと願ふ。九には利益の願、一切時に於て恒に衆生を利益する事を作して空しく過くること有ること無からんと願ふ。十には正覺の願、一切衆生と同しく無上菩提を得て恒に佛事を作さんと願ふ。此の十願は初地に登るに至りて乃ち成立することを得。何を以ての故に、此の願は眞如を以て體と爲し、初地に能く眞如を見るが故なり。忍とは卽ち無分別智なり、願に由りて忍成ずるが故なり。二種の勝能有り、謂ゆる能く滅すると能く得るとなり。何者か是なるや。二十二の無明と、十一の麁重報と有りて十一地を障ふ。諸地に各能く三障を滅して、各勝れたる功德を得。初地に能く三障を滅すとは、一には法我を分別する無明、二には惡道業の無明、此の二の無明の感ずる[九]方便の生死を麁重報と名く。三障を滅せんが爲の故に、正勤を修す。正勤を修するに因りて三障を滅し已つて初地に入ることを得、十分の圓滿を得、一には菩薩の正定位に入る、菩薩は初めて無流地に入るを以ての故なり。二には佛家に生在す、諸の菩薩は法王の家に生るるが如く、尊勝を具足するが故なり。三には種性の譏嫌す可き無し、二乘及び世間の種性を過くるを以ての故なり。四には已に一切世間の行を轉ず、決定して殺生等の邪行を作さざるを以て

【八】以下別釋に入つて四段あり、初に願忍成ずるに由つて二種の勝能を得ることを明かす。

【九】方便の生死とは菩薩の度生の爲の方便の生死をいふ、地前及び初の三地に之を感得す。

釋曰　三乘の法に約して「一切處」と說き、又內外の法に約して一切處と說き、又眞俗に約して一切處と說く。此の如き一切處に、菩薩は能く無量の相を見て、佛の說く所の法相、及び世間の立つる所の法相の如きを、菩薩は皆能く了達す、卽ち是れ如量智なり。其の數量の如く、菩薩は如理智を以て、無分別の相に通達す。此の二智は能く眞俗の境を照了す。故に「善法の光明」と名く。此の二智の果は是れ無功用修の得る所なり。

論曰　四には分別する所の法相の如きは、轉じて淸淨分を得、恒に相續して生し、法身を圓滿し成就することを爲す。

釋曰　昔聞く所の如く、思量覺觀の中に於て、奢摩他、毘鉢舍那は未だ滿せず、未だ大ならず、未だ隨って行を緣ぜず、未だ熾盛修有らざるを以ての故に、此の修を得已りて障を離るるに由るが故に、轉じて淸淨分を得、相續して生ずるに由るが故に、圓滿することを得、圓滿に由るが故に法身に觸るることを得。究竟位に至るが故に成就することを得。謂ゆる起る時と、圓滿の時と、究竟の時となり。復次に如來に二種の身有り、一には解脫身二には法身なり、惑を滅するに由るが故に解脫身圓滿し、解脫身の圓滿に由るが故に法身成就す。此の出離の果は是れ熾盛修の得る所なり。

論曰　五には上品の中に於て、轉た增して、最上の上品の因緣の聚集と爲る。

釋曰　菩薩は地に登りて已に上品を得、善法に於て不知足なるに由るが故に、更に進んで修習し、初地より轉して二地に觸れ、乃至十地より轉じて佛果に觸れ、最上の上品を成ず。先に修する所の福德智慧の資糧は、無分別智を因と爲し、諸の助道法を緣と爲して、一時に滿足するが故に、「因緣の聚集」と言ふ。此の圓滿の果は是れ不知足修の所得なり。

[七]所餘の諸地の義は、應に知るべし十七地論に說くが如し。謂ゆる有能無能等なり。十地の中に於て幾種の法有りて、未だ滅せざるを滅せんが爲に、未だ得ざるを得んが爲の故に、菩薩は十地

【七】以上五修の因と果とを明かし竟り、次に別に諸地の義を明かす、初は總標。

釋曰　諸地は皆五修を須ゆるに二義有り、一には未だ得ざるを得しめ、二には已に得たるを失はさらしむ。

論曰：此の五修は五法を生ずるを果と爲す。

釋曰　五修は是れ因にして、五法を果と爲す。果に二種有り、一には眞實の果、二には假名の果なり。五法は是れ眞實の果にして、地は是れ假名の果なり。五法を以て地を成ずるが故に、地は是れ假名の果なり。

論曰　何をか五と爲すや。一には刹那々々に能く一切の麁重の依法を壞す。

釋曰　惑障を「麁」と爲し、智障を「重」と爲す。本識の中の一切の不淨品の熏習せる種子を、此の二障の「依法」と爲す。初の刹那を次第道と爲し、第二の刹那を解脱道と爲す。初の刹那に現在の惑を壞して滅せしめ、第二の刹那に未來の惑を遮して生ぜざらしむ。復次に奢摩他、毘鉢舍那の智に由りて總法を緣して境と爲し、刹那々々に能く諸惑の聚を破壞す。是れ所對治の者を滅せしめ、所對治に非らざる者を羸せしむ。此の惑滅して生ぜざる果は、是れ總修の得る所なり。

論曰　二には能く種々の亂想を出離する法樂を得。

釋曰　能く種々の相を立つる想を出離して現に法樂を受くることを得。何を以て故に、如來は衆生の根性及び煩惱行に隨ひて、種々の法相を立つ。若し人文の如く義を判ずれば、此の種々の法は前後相違す。若し此の相に執して疑惑を離れざれば、正法の中に於て、現世に安樂住を得るの義有ること無し。若し無相修に依れば、正法の中に於て種々の相を立つる想を出離し、此の正說は同一の眞如味なりと觀じて、心に疑厭無く、正法の中に於て、縱任に自在なるが故に現世に安樂住を得。此の佛法を成就する果は、是れ無相修の得る所なり。

論曰　三には能く一切處に無量にして分別の相無き善法の光明を見る、

不顚倒は毘鉢舍那に屬す。諸地は各々五相を具して修習して、菩薩の地を成ずることを得。若し此の五修無ければ菩薩地に入ることを得ず。

論曰　何をか五と爲すや、一には集總修、

釋曰　佛の說く所の大乘の正教に依るに、種々の文句、種々の義理、種々の法門は、四尋思及び四如實智に由りて名義と法門とを觀察すれば、自性及び差別は皆不可得なり。此の不可得は、有と說く可らず、三性を離るるが故に。無と說く可らず、是れ清淨なる梵行の果なるが故に。如來の所說は通して是れ一味なり、故に「總修」と名く。此の修は智慧に依りて行ず。

論曰　二には無相修、

釋曰　前に說く所の如き無著等の[六]五種の清淨なるが故に「無相」と名く。又自身の報恩に於て、果報に著せさるが故に無相と名く。此の修は大悲に依りて行ず。

論曰　三には無功用修、

釋曰　菩薩は功用を作す心に由らずして、自然に菩提の行に在り。若し餘事に於ては須らく功用の心を作すべし。此の修は自在及び正見に依りて行ず。

論曰　四には熾盛修、

釋曰　菩薩は悠悠の心を以て道を修せず。下中の心を捨て上品の心に依止して、之を修行する時、身命財に於て悋惜する所無し、故に「熾盛」と名く。此の修は精進に依りて行ず。

論曰　五には不知足修なり。

釋曰　前に說く所の如く、長時に於て施等の行を修するも、疲厭を生ぜざるが故に「不知足」と名く。此の修は信行に依る。經に言へるが如し、若し人信有れば則ち善に於て厭くこと無し、と。

論曰　應に知るべし、諸地に於て皆此の五修有り、

【六】第九卷の五種清淨參照。

是れ淨障の道なり。

論曰　三には已に通達を得る相に由る。先に初地に於て眞如法界に通達せる時、皆能く一切地に通達するが故に、

釋曰　四尋思、四如實智に由りて、得る所の眞如は地々に異らず。

論曰　四には已に成就を得る相に由る。此の十地は皆已に究竟に至る修行なるが故に、

釋曰　成就の心に四種有り、所緣の境にも亦四種有り。菩薩は願樂地の中に於て善く善根を增長し、已に菩提道に依りて二執を出離せり。是の菩薩の心は四種の境を緣して起る。何をか四と爲すや。一には未來世の菩提の資糧を緣して、速かに疾く圓滿せんとし、二には衆生の利益を作す事を緣して圓滿せんとし、三には無上菩提の果を緣じ、四には諸の如來の具相を緣じて佛事を圓滿せんとす。此の四境を緣すれば卽ち四心有り、一には精進の心、二には大悲の心、三には善願の心、四には善行の心なり。

修相章　第四

論曰　云何んが應に諸地を修する相を知るべきや。

釋曰　已に諸地を得る相を說けり、復何の方便を以て修して能く諸地を得るや。故に問ふ、「云何んが應に知るべきや」と。

論曰　諸の菩薩は先に地々の中に於て、奢摩他、毘鉢舍那を修習するに、各に五相有りて修習成ずることを得。

釋曰　三世の菩薩の修行は悉く同じきも、未だ曾て得ざるを得たるか爲に「先に」と爲す。此れ修時の淸淨意の位に在ることを顯はすが故に「地々の中に於て」と言ふ。修する所の十波羅蜜には、通じて二體有り、一には不散亂を體と爲し、二には不顚倒を體と爲す。不散亂は奢摩他に屬し、

くべきが故に、「云何んが應に知るべきや」と問ふ。

論曰　四種の相に由る、

釋曰　四種の相の中、隨つて一相顯現すれば、卽ち此の人は已に菩薩地に入れることを驗す。何を以ての故に、此の四相は登地の人を離れて餘處に於ては則ち無ければなり。

論曰　一には已に信樂の相を得るに由る、一一の地に於て決定して信樂を生ずるが故に、

釋曰　五種の信樂有り、地持論に說くが如し。一には無放逸、二には苦難に遭ふ衆生の救ひ無く依る無きに、爲めに救濟依止の所と作り、三寶に於て極尊重の心を起し、諸の供養を窮めしむ。四には過有る所を知れば一念も覆藏せず、卽ち皆發露す。五には一切の事及び思修の中に於て、先づ菩提心を發す。此の五の中に於て、隨つて一顯現すれば、卽ち已に菩薩は地に入れることを驗す。譬へば須陀洹の人の四の不壞の信を得るが如し。何を以ての故に、此の五は是れ菩薩の常に行ずる所の法なり。是の故に能く菩薩の已に地に入れる相を顯はす。

論曰　二には已に行相を得るに由りて、地と相應する十種の法の正行を得るが故に、

釋曰　若し菩薩は十地を修行せんとすれば、十種の正行を出でず。此の十種の正行は是れ十地の依止なり。十種の法の正行とは、[五]十七地論に說くが如し。諸の菩薩は大乘の中に於て、衆生を成熟せんが爲に、十種の善法の正行有りて、大乘と相應し、十二部の方等經の菩薩藏の所攝なり。何等をか十と爲すや。一には書持し、二には供養し、三には他に施し、四には若し他のもの正說すれは恭敬して聽受す、五には自ら讀み、六には他を敎へて得しめ、七には說く所の如く一心に習誦し、八には他の爲に理の如く廣く釋し、九には獨處空閑に正思し稱量し簡擇し、十には修相に由りて意に入る。此の如き十種の正行は、幾くか是れ大福德の道なりや。幾くか是れ加行の道なりや。幾くか是れ淨障の道なりや。一切は是れ大福德の道なり。第九は是れ加行の道なり。第十は

【五】十七地論は瑜伽論の異譯にして眞諦三藏の譯あるも僅かに五卷のみ。

三摩提門を藏と爲すが故に雲に譬ふ。能く虚空の如く麁障を覆ふが故に、能く法身を圓滿するが故に。

釋曰　菩薩は此の地の中に於て此の如き智を得て、能く一切の法を緣じて通じて一境と爲す。此の智に勝れたる功能有り。雲に譬ふるに三義有り、謂く能く藏すと、能く覆ふと、能く益すとなり。淨水の、雲の内に在りて雲の含む所と爲るが如きは、卽ち是れ能藏の義なり。此の智も亦爾なり、陀羅尼門及び三摩提門は、淨水の如く、此の智の内に在りて、此の智の含む所と爲るが故に、能藏の義有り。雲は能く空の一分を覆ふ。此の智も亦爾り、能く一切の麁大の惑障を覆ひ、能對治と爲るが故に、自地の滅道と作り、餘地の不生の道と作る。復次に雲の能く虚空に遍滿するが如く、此の智も亦爾なり、能く菩薩の轉依の法身を圓滿す。此の二意に由るが故に能覆の義有り。菩薩は此の智有るに由りて、大雲の如く、一切の衆生に於て、根に隨ひ性に隨ひて常に法雨を雨らし、能く衆生の煩惱の焦熱を除き、能く衆生の三障の塵垢を脫し、能く衆生の三乘の善根を生長するが故に、能益の義有り。法は此の智に目け、雲を以て智に譬ふ、故に「法雲」と稱す。通じて地と名くるに四義有り、一には住の義、二には處の義、三には攝の義、四には治の義なり。是の十は一の無流勝智の住する位なるが故に、住を以て義と爲し、是の受用は現世に安樂に住し、佛法を成熟し、衆生を成熟する處なるが故に、處を以て義と爲し、總じて一切の福德智慧を攝するが故に、攝を以て義と爲し、能く惑流を對治するが故に、治を以て義と爲す。

得相章第三

論曰　云何んが諸地を得る相を知るべきや。

釋曰　若し菩薩は已に歡喜地の得る所の實州を得れば、此の相は能く菩薩の自の精進心を發起し、能く衆生の信樂の心を生じ、能く菩薩をして增上慢の心を離れしむ。須らく所得の地相を說

無分別の住は卽ち是れ般若波羅蜜なり。此の般若波羅蜜は恒に明了に住するが故に「現前」と稱す。

論曰 云何んが七地を遠行と名くるや。有功用行の最後の邊に至るに由るが故に、

釋曰 菩薩は此の地の中に於て、功用心の修行を作し已つて、究竟して思量し、一切の相を皆決了す。此の思量は功用に由りて成ずるを得。加行の功用心の中に於て、最も後邊に在るが故に、「遠行」と稱す。復次に間缺すること無く、諸法の相を思惟し、長久に修行の心に入りて、淸淨地と相ひ隣接するが故に遠行と稱す。

論曰 云何んが八地を不動と名くるや。一切の相及び作意の功用は動ずること能はざるに由るが故に、

釋曰 無相及び一切の相に於て、功用を作す心と及び惑とは動ずること能はざるが故なり。菩薩は此の地に於て二種の境有り、一には眞境、二には俗境なり。眞境を無相と名け、菩薩は此の境に住して、一切の相及び功用の轉ずること能はざる所なり。俗境を一切の相と名く、卽ち衆生を利益するの事なり。菩薩は此の境に於て一切の惑も染むこと能はず。菩薩の心は此の二義に由るが故に「不動」と稱す。復次に一切の相、一切の法、一切の功用も、菩薩の無分別の心を轉ずることと能はず。何を以ての故に、此の無分別の心は自然に相續して恒に流るゝが故に不動と稱す。

論曰 云何んが九地を善慧と名くるや。最勝なる無礙辯の智の依止に由るが故に、

釋曰 菩薩は此の地の中に於て得る所の四辯を「慧」と名く。此の慧は圓滿にして無退無垢なるを「善」と名く。故に「善慧」と稱す。復次に菩薩は此の地の中に於て、能く具足して一切の法を說く。廣大の智慧を失ふこと無きを得るに由りて此の功能有り、故に善慧と稱す。

論曰 云何んが十地を法雲と名くるや。通境を緣じて一切の法を知るに由り、一切の陀羅尼門及び

に、大法光明の依止なるが故に、

釋曰　菩薩は此の地の中に於て、三摩提及び三摩跋提を離れず、此の定を退かざるを以ての故に、說く所の大乘敎は是れ此の定の依止なり。「大法」とは謂く、大乘の法なり。無分別智及び無分別後智を「光明」と名く。菩薩は亦恒に此の智を離れず、聞持陀羅尼を此の智の依止と爲す。定を以て明と爲し、智を以て焰と爲す。故に「明焰」と稱す。又釋す、定は智の根と爲るが故に依止と名け、智は定の根と爲るが故に亦依止と名く。復次に此の地は、是の無量の智慧の光明と、無量の三摩提と、聞持陀羅尼との依止なるが故に明焰と稱す。

論曰　云何んが四地に燒然と名くるや。菩提の法を助くるに由りて、能く一切の障を焚滅するが故に、

釋曰　菩薩は此の地の中に於て、恒に助道法に住するが故に「然」と名く。此の法に住するに由りて、大小の諸惑を焚滅するが故に「燒」と名く。故に「燒然」と稱す。復次に道火熾盛にして、能く惑薪を燒くが故に燒然と稱す。

論曰　云何んが五地を難勝と名くるや。眞俗の二智更互に相違す。能く合し難きを合して相應せしむるが故に、

釋曰　眞智は無分別なるも、俗智は工巧等の明處の如く、有分別なり。分別と無分別と此の二は互に相違す、合して相應せしむるは、此の事難しと爲す。菩薩は此の地の中に於て能く相應せしむるが故に「難勝」と稱す。

論曰　云何んが六地を現前と名くるや。十二緣生の智の依止に由るが故に、能く般若波羅蜜を現前して住せしむるが故に、

釋曰　菩薩は此の地の中に於て、十二緣生觀に住し、十二緣生の智力に由りて、無分別の住を得。

此の如き二偈は、中邊分別論に依りて、應に了知すべし。復次に此の無明は、應に知るべし、二乘に於ては染汚に非ず、菩薩に於ては是れ染汚なり。

釋曰　二乘の修行は十地に入らんが爲にあらざれば、此の無明は二乘を障へず。二乘道の所破に非らざるが故に、二乘を染汚せず。菩薩の修行は十地に入らんが爲なれば、此の無明は菩薩の十地を障ふ。菩薩道の所破と爲るが故に、菩薩を染汚す。若し菩薩は初地に於て、能く一切地に通達すれば、云何んが次第に諸地の差別を制立するや。此の住に由るが故に、菩薩は十度を修行す。通別の二行には、此の住に因りて別行を修するが故に、次第に十地の差別を制立す。

立名章第二

論曰　云何んが初地を歡喜と名くるや。始めて自他を利益する功能を得るに由るが故に、

釋曰　菩薩は初めて地に登る時に於て、即ち具さに自利々他の功能を得。昔は未だ得ざる所を此の時に始めて得、是の故に歡喜す。聲聞は初めて眞如を證する時に於て、但だ自利の功能を得るのみにて利他の功能無ければ、聲聞も亦歡喜の義有るも、菩薩に及ばざるが故に、唯菩薩の初地のみに「歡喜」の名を立て、聲聞の初果には此の名を立てず。復次に昔未だ證せざる所の出世の法を今始めて證することを得たる、無量の因緣に大慶悅有りて、恒に相續して生ずるが故に歡喜と稱す。

論曰　云何んが二地を無垢と名くるや。此の地は菩薩戒を犯す垢を遠離するが故に、

釋曰　菩薩は此の中に於て自性淸淨の戒有り、初地の正しく思量することに由りて得る所の如きに非らざるが故に「無垢」と稱す。復次に此の地の中に於て、一切の細微の犯戒の過失の垢は之を離るゝこと已に遠く、自性淸淨の戒は恒に相續して流るゝが故に無垢と稱す。

論曰　云何んが三地を明焰と名くるや。三摩提及び三摩跋提を退すること無き依止なるに由るが故

又釋す、法界に通達するを業の自在の依止と爲し、法界に通達するを陀羅尼門、三摩提門の自在の依止と爲す。此の通達に由りて十方の衆生を化度せんが爲に、三身の三業を得るが故に「業の自在」と名く。陀羅尼門、三摩提門を得るに由りて、如來の一切の秘密の法藏は意の如く通達するが故に「自在」と名く。此の三自在は並びに眞如を以て依止と爲す。此の義を觀ずるに由りて十地に入ることを得。若し法界に通達すれば、眞如の十種の功德は何の果を得と爲すや。若し法界の遍滿の功德に通達すれば、一切障の空の義に通達することを得て、一切の障を滅する果を得。若し法界の最勝の功德に通達すれば、一切の衆生に於て最勝無等の菩提の果を得。若し法界の勝流の文句の功德に通達すれば、無邊の法音及び能く一切衆生の意欲を滿す果を得。何を以ての故に、此の法音は無邊にして無倒なるが故なり。若し法界の無攝の功德に通達すれば、所應の如く一切の衆生を利益する事の果を得。若し法界の相續して異らざる功德に通達すれば、三世の諸佛と差別無き法身の果を得。若し十二緣生の眞如の染淨無き功德に通達すれば、自の相續を淸淨にし、及び能く一切衆生の染濁を淸淨にする果を得。若し種々の法の無別の功德に通達すれば、一切の相滅して恒に無相に住する果を得。若し不增減の功德に通達すれば、諸佛と共に平等なる威德、智慧の業果を得。若し四種の自在の依止する功德に通達すれば、三身の果を得。若し無分別の依止に通達すれば、法身の果を得。若し土及び智の自在の依止に通達すれば、應身の果を得。此の應身に由りて大集の中に於て、衆生と共に法樂の果を得。若し業の依止に通達すれば、化身の果を得。此の果に因りて、能く無量の衆生の無邊の利益の果を作す。

論曰　此の中に偈を說く、

遍滿と最勝との義　勝流と及び無攝と　無異と無染淨と　種々の法の無別と　不增減と[四]四種の　自在依止の義と　業自在の依止と　總持と三摩提となり。

【四】異譯何れも四種の自在依止とあるも、本論のみは別に第十地の業自在を出したれば三種といふべきなり、他の譯にては第十地を別に出ださざるが故に四種の自在なり、唐譯參照。

釋曰　十二部經の所顯の法門は、種々の義に由り成立して異り有るも、一味の修行、一味の通達、一味の至得に由るが故に、異り有ることを見ず。此の義を觀ずるに由りて七地に入ることを得。

論曰　八地に於ては不增減の義に由る、

釋曰　菩薩は一切の法を見るに、道の成ずる時增さず、惑の滅する時減ずること無し。此の如き智は是れ相自在及び土自在の依止なり。相自在とは、欲求する所の如き相は、自在なるを以ての故に、卽ち現前することを得。土自在とは、若し菩薩は分別の願を起して、此の土は皆頗梨柯等を成ぜんと願はゞ、自在を以ての故に、其の所願の如く卽ち成ず。初の自在は佛法を成熟せんが爲なり。後の自在は衆生を成熟せんが爲なり。此の二の自在は、不增減の智に由りて成ずることを得、卽ち不增減の智を以て依止と爲す。此の義を觀ずるに由りて八地に入ることを得。

論曰　九地に於ては定自在の依止の義に由り、土自在の依止の義に由り、智自在の依止の義に由る。

釋曰　初の二の依止の義は前に釋するが如し。智自在とは、四無礙解の所顯を智と名く。此の智は無分別後智を以て體と爲す。何を以ての故に　遍く一切の法門に悉く無倒なるが故なり。此の智を得るに由るが故に大法師を成じ、能く無窮の大千世界の衆生をして甚深の義に入らしめ、意の如く能く成ずるが故に「自在」と名く。此の自在は無分別智を以て依止と爲す。此の自在を得るに由るが故に九地に入る。又釋す、法界に通達するを、智の自在の依止と爲す。故に四無礙解を得。此の義を觀ずるに由りて九地に入ることを得。

論曰　十地に於ては業の自在の依止の義に由り、陀羅尼門、三摩提門の自在の依止の義に由りて、應に法界を知るべし。

釋曰　法界に通達するは、衆生を利益することを作さんが爲なり。若し諸佛の三業を得、及び陀羅尼門、三摩提門を得れば、則ち能く如來の一切の秘密の法藏に通達して、十地に入ることを得。

眞如の所流なり。此の智は諸智の中に於て最勝なり。此の智に因りて無分別後智の生ずる所の大悲を流出す。此の大悲は一切の定の中に於て最勝なり。此の大悲に因りて、如來は正法を安立して衆生を救濟せんと欲し、大乘十二部經を說く。此の法は是れ大悲の所流なり。此の法は一切の說の中に於て最勝なり。菩薩は此の法を得んが爲に、一切の行じ難きを行じ、忍び難きを能く忍ぶ。此の法を觀ずるに由りて三地に入ることを得。

論曰　四地に於ては無攝の義に由る、

釋曰　最勝の眞如及び眞如所流の法に於て、菩薩は中に於て無攝の義を見る。謂く此の法は我の攝する所に非ず、他の攝する所に非ず。何を以ての故に、自他及び法の三義は得べからざるが故なり。譬へば北鳩婁越人の、外塵に於て自他の攝の想を生ぜざるが如し。菩薩は法界に於て亦爾なり。故に法愛は生ずることを得ず。此の義を觀ずるに由りて、四地に入ることを得。

論曰　五地に於ては相續して異らざる義に由る、

釋曰　此の法は復無攝なりと雖も、三世の諸佛の中に於て相續して異らず。眼等の諸根、色等の諸塵、及び六道の衆生の相續して異り有るが如きにあらず。何を以ての故に、此の如き等の法は分別の所作なるが故に、相續に異り有り。三世の諸佛は眞如の所顯なるが故に、相續して異らず。若し此の義を觀ずれば五地に入ることを得。

論曰　六地に於ては無染淨の義に由る、

釋曰　三世の諸佛は此の法の中に於て、復相續して異らずと雖も、此の法は未來の佛に於て染無し、本性淨なるを以ての故なり。過去現在の佛に於て淨無し、本性無染なるを以ての故なり。此の義を觀ずるに由りて六地に入ることを得。

論曰　七地に於ては種々の法の無別の義に由る、

を利益する事を起す能はざるが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば、九地に入ることを得ず。故に此の無明を九地の障と爲す。衆法の中に於て自在を得ざる無明は、是れ十地の障なり。若し人十地を修行せんとすれば、三身の業及び微細の秘密陀羅尼、三摩提門を成就するに於て、自在を得ざるが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば十地に入ることを得ず。故に此の無明を十地の障と爲す。

論曰　何者か能く法界の十相を顯はすや。

釋曰　此の問は眞如に十の功德の相有ることを顯はさんと欲す。此の十功德は能く十の正行及び十の不共の果を生じ、以て法界の體を顯はす。十功德は是れ法界の本を顯はすが故に、先に十功德の相を問ふ。

論曰　初地に於ては、一切遍滿の義に由りて、應に法界を知るべし。

釋曰　眞如法界は、一切法の中に於て遍滿して餘すこと無し。何を以ての故に、諸法の中に一法として無我に非ざるもの有ること無きが故なり。人法二執の起す所の分別は、法界の一切遍滿の義を覆藏す。此の障に由るが故に、願行位の人は初地に入ることを得ず。若し此の障を除けば、卽ち眞如遍滿の義を見て、人法の二執は永く清淨なることを得。此の義を觀ずるに由りて、初地に入ることを得。

論曰　二地に於ては最勝の義に由る、

釋曰　人法の二空は一切法を攝し盡くす、是れ遍滿の義なり。此の義は一切法の中に於て最勝淸淨なり。此の義を觀ずるに由りて二地に入ることを得。

論曰　三地に於ては勝流の義に由る。

釋曰　眞如は一切法の中に於て最勝なり。眞如を緣じて無分別智を起すに由り、無分別智は是れ

に入ることを得ず、故に此の無明を四地の障と爲す。下乘の般涅槃に於ける無明は、是れ五地の障なり。若し人、四諦觀に依りて五地を修行せんとすれば、生死は無量の過失の火の燒然する所と爲るを見、涅槃は最も清涼なる寂靜の功德の圓滿せるを見れば、生死を捨つることを欲せざるも、此の行行じ難く、涅槃を取るを欲せざるも、此の行も亦行じ難し。若し人五地を修行せんとすれば、心多く般涅槃を求むるが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば五地に入ることを得ず、故に此の無明を五地の障と爲す。麁相行の無明は、是れ六地の障なり。若し人六地を修行せんとすれば、一切の諸行相續して生じ、如量如理に證し已るも、多く諸行を厭惡する心中に住して、未だ多く無相の心中に住すること能はざるが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば六地に入ることを得ず、故に此の無明を六地の障と爲す。微細相行の無明を七地の障と爲す。若し人七地を修行せんとすれば、心は百萬大劫の中に於て、諸行の相續する相、謂ゆる生及び滅を離るゝ能はざるに由るが故に、法界の無染淨の相に通達すること能はず。經に言へるが如し、龍王よ、十二緣生とは、或は生或は不生なり。云何んが生なるや、俗諦に由るが故に。云何んが不生なるや、眞諦に由るが故にと。十二緣生の中に於て、未だ生相を離れて無生の相に住すること能はざれば、七地に入ることを得ざるが故に無明と稱す、若し此の無明を斷ぜざれば七地に入ることを得ず、故に此の無明を七地の障と爲す。無相に於て功用心を作す無明は、八地の障と爲す。若し人八地を修行せんとすれば功用の心を作すに由る、微細相の行の無明を除かんが爲に、及び無相の心中に住せんが爲にして、未だ自然に恒に間缺無き無相の心に住すること能はざるが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば八地に入ることを得ず。故に此の無明を八地の障と爲す。衆生を利益する事に於て功用に由らざる無明は、是れ九地の障なり。若し人九地を修行せんとすれば、心自然に恒に無相に住す。但だ衆生を利益する事の、[三]四種の自在の中に於て、自然に恒に衆生

【三】これ四無礙解を指す。

ず。故に此の無明を初地の障と爲す。身業等に依りて、諸の衆生に於て邪行を起す無明は、是れ二地の障なり。菩薩は未だ二地に入らざれば此の如き想を生ず、謂く三乘の人には[一]三行の差別有りと。一乘の理に迷ふが故に無明と稱す。又釋す、一切衆生の行ずる所の善は、菩薩の大淸淨の方便に非ざる無し。何を以ての故に、淸淨は既に一なり、未だ大淸淨の位に至らざれば、住の義無きが故なり。若し悉く應に同じく菩薩の大道に歸すべければ、云何んが[二]方便を修して正道を修せざるや。未だ二地に入らざれば則ち此の智無し。此の義に迷ふに由るが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば、則ち二地に入ることを得ず。故に此の無明を二地の障と爲す。心遲苦の無明は聞思修忘失の無明にして、是れ三地の障なり。未だ智根位に至らざるを「遲」と爲し、未だ菩薩の微妙なる勝定を得ざるを「苦」と爲す。根及び修を障ふるを以ての故に無明の障と稱す。聞持等の陀羅尼を成就するを得ざれば、聞思修する所に忘失有らしむるが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば、三地に入ることを得ざるが故に、此の無明を三地の障と爲す。微細煩惱行と共に生ずる身見等の無明を、四地の障と爲す。煩惱行とは、法執分別の種子を體と爲し、生住滅して停らざるが故に行と名く。此の種子を身見の因と爲す。此の種子の體も亦即ち是れ身見なり。是れ法の分別の種類なるを以ての故なり。此の煩惱は最下品なるが故にとは、此れ微細の義を釋す。是れ最下品なるに由り、菩薩の心を染汚すること能はず、故に微細と名く。思惟に隨つて起るが故にとは、此れ共生の義を釋す。復菩薩の心を染むること能はずと雖も、正思惟に隨つて起り、正思惟と相應するが故に無と說くべからず。能く菩薩の一切智を障ふるを以ての故なり。已に遠く本所行の事に隨順することを離るゝが故にとは、此れ離伴の義を釋す。昔凡夫と共なる位の中及び地前に在りて、本(もと)行ぜし所の一切の煩惱の事に隨順せるも、今四地を修行し、之を離れて已に遠し。法我空を了ぜざるに由るが故に無明と稱す。若し此の無明を斷ぜざれば則ち四地

【一】三行の差別とは聲聞、緣覺、菩薩の三乘道は各差別すとの見なり、これ即ち一乘の理に達せざるが故にり。

【二】方便とは此には二乘道をいひ、正道は一乘をいふ。

論曰　地の障たる十種の無明を對治せんが爲の故なり。

釋曰　眞如には實に一二の分數無し。若し眞如の體に約すれば、十種の差別有りと立つべからず。眞如に十種の功德有りて、能く十種の正行を生ず。無明に覆はるゝに由るが故に、此の功德を見ず。功德を見ざるに由るが故に、正行成ぜず。所障の功德と正行とに十種有りと爲すが故に、能障の無明を分別するにも亦十種有り。

論曰　十相の所顯の法界に於て、

釋曰　十相とは謂く十種の功德及び十種の正行なり。此の相は皆能く法界を顯はす。

論曰　十種の無明猶ほ在る有りて障と爲す。

釋曰　此の十種の相は復實に有りと雖も、無明に覆はるゝに由りて顯現することを得ず。故に知る、菩薩は初に眞如觀に入れば、見道を障ふる無明は卽ち滅するも、所餘の無明は猶ほ在りて未だ滅せざるが故に、十の無明は十の功德を覆ひ、十の正行を障ふ。何をか十種の無明と爲すや、一には凡夫性の無明。二には身業等に依り、諸の衆生に於て邪行を起す無明。三には心遲苦の無明にして、(卽ち)聞思修忘失の無明。四には微細の煩惱行と共に生ずる身見等の無明。此の煩惱は最下品なるが故に、思惟に隨つて起るが故に、已に遠く本所行の事に隨順することを離るゝが故に、故に微細の煩惱と名く。五には下乘の般涅槃に於ける無明。六には麁相の行の無明。七には微細相の行の無明。八には無相に於て功用心を作す無明。九には衆生を利益する事に於て功用に由らざる無明。十には衆法の中に於て自在を得ざる無明なり。凡夫性の無明は是れ初地の障なり。此の無明は卽ち是れ身見なり。身見に二種有り、一には因、二には果。法我執は是れ因にして、人我執は是れ果なり。因は卽ち凡夫性にして、法無我に迷ふが故に無明と稱す。二乘は但だ能く果を除くのみ、因を斷ずること能はず。若し此の無明を斷ぜざれば則ち初地に入ることを得

卷の第十

釋入因果差別勝相第五の一

對治章第一

釋曰 此の義に五章有り、一には對治、二には立名、三には得相、四には修相、五には修時なり。

論曰 此の如く已に入因果の勝相を說けり。云何んが應に入因果の修の差別を知るべきや。

釋曰 前に已に總じて六度の因果の差別を說き、願行位に在るを因と爲し、淸淨位に在るを果と爲せるも、未だ地に約して修の差別を辯ぜざるが故に、前に總說せるを目けて「此の如く」と爲す。唯識の智を「入」と名け、三無性を「勝相」と爲す。六度は卽ち是れ唯識の智にして、三無性に入る因果なり。諸の波羅蜜の修習の差別を顯はさんと欲するが故に、云何んが應に知るべきやと問ふ。

論曰 十種の菩薩地に由る。何をか十と爲すや。一には歡喜地、二には無垢地、三には明焰地、四には燒然地、五には難勝地、六には現前地、七には遠行地、八には不動地、九には善慧地、十には法雲地なり。

釋曰 若し修の差別を知らんと欲すれば、十地の差別を觀じて、卽ち因果の修の差別を知る。

論曰 云何んが應に、此の義を以て成立して諸地を十と爲すことを知るべきや。

釋曰 此の問は何の義を顯はさんと欲するや。若し菩薩は初地に入れば、眞如を見ること卽ち盡くす。何を以ての故に、眞如に分數無きが故なり。若し眞如を見ること盡くさざれば、眞如には則ち分數有らん。若し分數有れば則ち有爲法に同じ。若し見已りて盡くせば、何の故に十地有りと說くや。

することを得。故に定は能く施を成す。若し菩薩は正しく施を行ずる時は、因果を了別する由りて三輪に著せず、故に般若は能く施を成す。是を餘の波羅蜜は一波羅蜜を助成すと名く。故に合して六波羅蜜を說き、總じて名けて施と爲す。施の如く戒等も亦爾り、一度は六を具するが故に三十六句を成す。

論曰　此の中に嗢陀那偈を說く、

位と數と相と次第と　名と修と差別と攝と　對治と及び功德と　互顯とは諸度の義なり。

論曰　云何んが諸の波羅蜜は更互に相顯することを知るべきや。

釋曰　般若波羅蜜經の中に[四二]三十六句を說くが如きは、一一の波羅蜜を說くは即ち餘の五波羅蜜を說くことを顯はす。云何んが應に知るべきや。

論曰　世尊は、或は施の名を以て諸の波羅蜜を說き、或は戒の名を以て、或は忍の名を以て、或は精進の名を以て、或は定の名を以て、或は般若の名を以て諸の波羅蜜を說く。

釋曰　五波羅蜜は一波羅蜜の攝に入り、一波羅蜜の中に則ち六を具有するも、但だ施等の一名を以て之を說くのみ。

論曰　如來は何の意を以て此の如きの說を作すや。諸の波羅蜜に於て方便を修行する中に、一切の餘の波羅蜜は皆聚集して助成するが故に。此れ即ち如來の說意なり。

釋曰　若し菩薩は一一の波羅蜜に於て加行を修すれば、餘の波羅蜜は皆此の一を助成す。諸の菩薩の如きは正しく施を行ずる時は、身口を守護して[四三]七支の惡を離る。即ち正語・正業・正命の戒を持す。此の戒に由るが故に施は成就することを得。故に戒は能く施を成ず。若し菩薩は正しく施を行ずる時は、能く受施の人の相違の言語、及び相違の威儀を安受し、乃至行施の苦事を安受す。此の忍に由るが故に施を成就することを得。故に忍は能く施を成ず。若し菩薩は正しく施を行ずる時は、施を行ぜんと欲するに由りて心能く貪愛を除き、大悲有るに由りて能く瞋恚を除き、身心を下すに由りて能く憍慢を除き、受者をして安樂ならしめんと欲して能く慳悋と嫉妬とを除き、施に因果有ることを知りて能く無明と邪見とを除く。精進は能く此の如き善を生じ、此の如き惡を對治すれば、精進に由りて施を成就することを得。故に精進は能く施を成ず。若し菩薩は正しく施を行ずる時は、一心に相續して衆生を利樂する事を緣ず。此の定に由るが故に施を成就

【四二】　六度の各各に六度を開くが故に三十六句となる。

【四三】　七支の惡とは身の三即ち殺生、偷盜、邪婬と口の四(妄語、綺語、惡口、兩舌)の七をいふ。

釋曰　資生を立てんが爲の故に工巧明處を須ふ。卽ち[三七]十八の明處は能く現在未來及び解脫の法を立つ。此の中に[三八]立破の二理有り、若し聰慧有れば則ち能く此の事を成ず。菩薩は凡夫の若し般若を修すると同じく此の報を得。異に四種有りとは。

論曰　[三九]意の如くなると、

釋曰　[四〇]菩薩は施等を行ずれば、富樂等の報を得。中に於て常に過失を離る。謂ゆる無染汚にして自他を利益するが故なり。世間の施等を行ずるに、功德有りと雖も、則ち此の事無し。是を第一の異相と名く。

論曰　失無き富樂と、

釋曰　菩薩は施等を行ずれば、富樂等の報を得。中に於て意の如くなり、謂ゆる自ら用ひ及び他の爲に用ふ。常に[四一]三種の歡喜を生ずるが故なり。世間の施等を行ずれば、功德有りと雖も則ち此の如くならず。是を第二の異相と名く。

論曰　衆生を利益するを正事と爲すが故にと、

釋曰　菩薩は施等を行じて、生ずる所の功德は常に衆生の爲にし、世出世の利益の事を作して、自身の爲にせず。世間の施等を行ずれば、功德有りと雖も、則ち此の如くならず。是を第三の異相と名く。

論曰　菩薩の六度を修行する功德は、乃至究竟淸涼の菩提に入住するまで、恒に在りて異らざるが故にとなり。

釋曰　菩薩の施等を行じて生ずる所の功德は、初發心より乃し極果に至るまで、本の如く恒に利他に在りて異らず。此れ卽ち常住の功德なり。世間の施等を行ずれば、功德有りと雖も、則ち此の如くならず。是を第四の異相と名く。

【三七】　十八明處とは或は十八大經ともいふ、四吠陀と六論と八論となり、詳くは百論疏、演奥鈔等に出づ。

【三八】　立破の二理とは正義を成立する論理と、邪義を破する論理とにして因明に所謂能立と能破となり。

【三九】　次の四項の論本は四種の異相として釋論に解釋したれば且らく之れに隨つて國譯したるも、之を異譯に對檢するに四異明瞭ならず、隋譯に「此等の果報は譏嫌すべき無く、乃至道場に坐し、一切の衆生に一切の利益の事を作し功德を現前す」となし、唐譯亦其の意趣を同じくす、參照。

【四〇】　此の釋文と次の釋文とは前後錯亂したるものの如し。

【四一】　三種の歡喜とは求むる者と施す者の兩者に於て、見ることを得る時と、願を遂ぐる時と、見んことを求め遂げんことを求むる時との三時に喜悅を生ずるをいふ。

論曰　若し菩薩は生死に輪轉すれば、大富位の自在の所攝なり。

釋曰　轉輪王・天帝・梵王等を「大富位」と爲す。中に於て主と爲るが故に「自在」と名く。菩薩は凡夫の施を行ずると同じく此の報を得。

論曰　大生の所攝なり。

釋曰　大生に三種有り、一には道勝、二には性勝、三には威德勝なり。菩薩は凡夫の戒を持すると同じく此の報を得。

論曰　大眷屬の徒衆の所攝なり。

論曰　親戚を「眷屬」と名け、攝領する所の者を「徒衆」と名く。眷屬及び徒衆に亦三勝有り、前に說く所の如し、故に稱して「大」と爲す。皆相ひ親愛して憎嫉を生ぜず、恒に共聚することを歡びて未だ甞て遠離せず。菩薩は凡夫の忍を行ずると同じく此の報を得。

論曰　大資生の業事の成就する所攝なり、

釋曰　資生の業に四種有り、一には種植、二には養獸、三には商估、四には事王なり。和同して諍に乖くを「事」と名く。爲さんと欲する所の如きは諧遂げざる無し、故に「成就す」と名く。菩薩は凡夫の精進を行ずると同じく此の果を得。

論曰　疾惱無く少欲等の所攝なり、

釋曰　四無量所攝の定なり。此の定の得る果は身に諸病無く、心に衆惱を離る、故に恒に歡悅す。其の餘の諸定の得る所の果報は、復在家なりと雖も、欲を離れたる仙人と異ならず、煩惱少きを以ての故なり。等とは謂く好き形相及び長壽を得る等なり。菩薩は凡夫の定を修すると同じく此の果を得。

論曰　一切の工巧明處の聰慧の所攝なり、

釋曰　信、輕安等の諸の善法は、是れ菩薩道の所攝なり。菩薩の欲する所に隨つて波羅蜜を行ずれば、皆能く成就す。波羅蜜は即ち是れ彼の所流の果なるが故に、相ひ攝することを得。

對治章　第九

論曰　云何んが應に諸の波羅蜜の所對治に、一切の惑を攝することを知るべきや。

釋曰　波羅蜜は能く一切の清淨品を攝し盡すが如く、波羅蜜の所對治も、亦能く一切の不淨品を攝し盡すことを、云何んが應に知るべきや。

論曰　彼の性と爲るを以ての故に、

釋曰　波羅蜜は無著を以て性と爲すが故に、一切の善法を攝し盡すが如く、波羅蜜の所對治は著を以て性と爲すが故に、一切の不淨品を攝し盡す。

論曰　彼の生ずる因と爲るが故に、

釋曰　不信・邪見・身見等の諸法は、能く慳惜・嫉妬・邪行・瞋恚等の果を生ず。同性なるを以ての故に彼の因と爲ることを得。

論曰　彼の所流の果と爲るが故に、

釋曰　此の慳惜・嫉妬・邪行・瞋恚等は、自他に著するに由るが故に、諸の惡行を生ず。謂く十惡等も亦同性なるを以て彼の果と爲ることを得。此の諸義に由るが故に相ひ攝することを得。

功德章　第十

論曰　云何んが諸の波羅蜜の功德を知るべきや。

釋曰　世間の施等の行を行ずるも亦功德有り、菩薩の波羅蜜の功德は云何んが應に知るべきや。菩薩の波羅蜜の功德は世間と同なる有り、異なる有り。同に六種有り、異に四種有り。同に六種有りとは、

なり。
釋曰　無相大乘教を開くことによりて、聞思修の慧を得、分別想の空に入るを、通じて無分別加行の般若と名く。已に三無性に入れば卽ち無分別智なれば、無分別の般若と名く。無分別智の後に出觀を得て、前に證する所の如く、或は自ら思惟し、或は他の爲に說くを、無分別後得の般若と名く。般若に復三品有り、謂く未知欲知根と、知根と、已知根とにして、出世間の事を[三六]生し住し用ひんが爲の故なり。此の義を具するに由るが故に般若に三品有りと說く。

攝章第八

論曰　云何んが諸の波薩蜜の攝の義を知るべきや。
釋曰　餘の一切の善法と、諸の波羅蜜とは互に相ひ攝するの義を、云何んが知るべきや。
論曰　一切の善法は皆六波羅蜜の攝に入る。
釋曰　一切の善法とは、謂く願乃至四無礙・六通・如來の有する所の祕密の法藏等なり。皆是れ六波羅蜜の所攝なり。
論曰　彼が性と爲るを以ての故に。
釋曰　波羅蜜は是れ願等の法性なるに由るが故に、此の願等も亦諸の波羅蜜を攝す。願等は是れ波羅蜜の性なるに由るが故に、諸の波羅蜜と同じく無分別智を以て性と爲すが故に、相ひ攝することを得。
論曰　彼は是れ六波羅蜜の所流の果なるが故に、
釋曰　彼とは卽ち六通・十力・四無所畏、乃至不共法等の諸佛の法なり。皆是れ六波羅蜜の所流の果なり、波羅蜜と同性なるを以ての故に。
論曰　一切の善法は隨つて成ずる所なるが故に、

【三六】生と住と用とは次第の如く前の三無漏根の功能を顯はす。

く皆能く行ずるが故なり。不下、難壞、無足の精進を顯はさんが爲に、次第に「勇猛有り、強制力有り、善輙を捨てず」との三句を說く。何を以ての故に、人有り、始の時は無上菩提を得んが爲に、先に貞實有り、加行時に勝能有るも、時の長遠なるが爲に、求むる所の果相は未だ現ぜざるに、此の中間に於て下劣の心を生ず。此の心を對治せんが爲に不下の精進を顯はす、故に勇猛と說く。若し人復勇猛の心にて退弱無しと雖も、若し生死の苦難に遭ふて、其の心を沮壞すれば、則ち菩提の願を退く。此の心を對治せんが爲に難壞の精進を顯はす、故に強制力有りと說く。強制力有るに由り、生死の苦難も退かしむること能はず。若し人復苦に遭ふて退かずと雖も、少しく得る所に於て足れりとの想を生ずれば、此の知足に由りて最上の菩提を得ること能はず。此の心を對治せんが爲に無足の精進を顯はす、故に善輙を捨てずと說く。此の義を具するに由るが故に精進に三品有りと說く。

論曰　定の三品とは、一には安樂住定、二には引神通定、三には隨利他定なり。

釋曰　定有るは現世に安樂住を得んが爲なり。何を以ての故に、能く一切の染汚の法を離るゝが故なり。此の定に依りて自利、謂ゆる三明を生ずるが爲の故に、能く六神通を引成す。通定を引成するに因り、隨利他の定を生ず。利他は卽ち是れ三輪なり、一には神通輪、謂く身通・天眼通・天耳通なり。此の輪は邪に向ふ者を引いて其をして正に歸せしむるが爲なり。二には記心輪、謂く他心通・天眼通・天耳通なり。此の輪は已に正に歸する者を引いて、若し未だ信受せざれば其をして信受せしめんが爲なり。三には正教輪、謂く宿住通、漏盡通なり。宿住通に由りて其の根性を識り、漏盡通に由りて自ら得る所の如く爲に正教を說いて、[三五]下種し、成熟し、解脫することを得しむ。此の義を具するに由るが故に定に三品有りと說く。

論曰　般若の三品とは、一には無分別加行の般若、二には無分別の般若、三には無分別後得の般若

【三五】下種とは成佛の種子を植うること。

則ち成ずるを得ず。若し人守護戒に住すれば、能く攝善法戒を引き、佛法及び菩提の生起る依止と爲る。若し前二戒に住すれば、能く攝利衆生戒を引き、衆生を成熟する依止と爲る。復次に守護戒は惡を離るゝに由るが故に、悔惱の心無く、能く現世に安樂に住することを得。此の安樂に住するに由るが故に、能く攝善法戒を修す、佛法を成熟せんが爲なり。若し人、前二戒に住すれば、能く攝利衆生戒を修す、他を成熟せんが爲なり。此の三品の戒は即ち四無畏の因なり。何を以ての故に、初戒は是れ斷德なり、第二戒は是れ智德なり、第三戒は是れ恩德なり。四無畏は此の三德を出でざるが故に、即ち四無畏の因なりと言ふ。此の義を具するに由るが故に戒に三品有りと說く。

論曰　忍の三品とは、一には他毀辱忍、二には安受苦忍、三には觀察法忍なり。

釋曰　毀辱忍に由りて、能く他の起す所の過失を忍ぶ。何を以ての故に、菩薩は他を利益する事を作さんが爲の故に、發心修行せるに由り、他の爲に毀辱せらると雖も、此の過失に著するに由りて本行の心を還退せざればなり。安受苦忍に由りて、復生死の諸の苦難の中に墮在すと雖も、此の苦に由りて本行の心を退かず。觀察法忍に由りて、菩薩は能く諸法の眞理に入る。此の忍は即ち是れ前の二忍の依處なり。能く人法の二執を除くを以ての故に。此の義を具するに由るが故に忍に三品有りと說く。

論曰　精進の三品とは、一には勲勇精進、二には加行精進、三には不下、難壞、無足精進なり。

釋曰　云何んが精進に三の體有ることを知るを得るや。佛世尊は經の中に於て說くに由る。經に言はく、此の人に貞實有り、勝能有り、勇猛有り、強制の力有り、善軛を捨てずと。三の體を顯はさんが爲に此の五句を說く。勲勇精進を顯はさんが爲に「貞實有り」と說き、加行精進を顯はさんが爲に「勝能有り」と說く。何を以ての故に、此の人は加行時に於て勝能有り、前に欲する所の如

釋曰　大悲にて獨り之を求むるの心無きことを顯はさんが爲なり。此の三思惟は即ち三心を除く、一には不行の心を除き、二には[三二]進退の心を除き、三には[三三]偏進の心を除く。

論曰　若し人、六意所攝の菩薩の思惟修習を聞くことを得て、一念の信心を生ずれば、是の人は則ち無量無邊の福德聚を得、諸の惡業障は壞滅して餘すこと無し。

釋曰　業障を滅するに二義有り、一には能く業を壞して盡くさしめ、二には業在りと雖も、善力の大なるを以ての故に、能く惡道の報を遮して、永く業を受けざらしむ、亦壞滅の義有り。若し人但だ聞くすら尚ほ無量無邊の福德を得。[三四]何に況んや菩薩は盡く能く修行するをや。

差別章第七

論曰　云何んが諸の波羅蜜の差別を知るべきや。

釋曰　此の問は何の所顯を欲するや。諸の波羅蜜の品類は數量す可からず。眞體を顯はさんと欲するが故に此の問を作す。諸の波羅蜜の差別を明かすことに由るが故に、眞體顯現すればなり。

論曰　各に三品有るに由り、其の差別を知る。

釋曰　此れ總じて數を標して、以て問に答ふ。

論曰　施の三品とは、一には法施、二には財施、三には無畏施なり。

釋曰　法施は他心を利益す。法施に由るが故に他の聞慧等の善根は生ずることを得。財施は他身を利益し、無畏施は通じて他の身心を利益す。復次に財施に由りて、惡に向ふ者有れば引いて善に歸らしめ、無畏施に由りて、彼を攝して眷屬を成ぜしめ、法施に由りて、彼の善根を生じ及び解脫を成熟せしむ。此の義を具するに由るが故に施に三品有りと說く。

論曰　戒の三品とは、一には守護戒、二には攝善法戒、三には攝利衆生戒なり。

釋曰　**守護戒は是れ餘の二戒の依止なり。**若し人惡を離れざれば、善を攝して他を利することは

【三二】進退の心とは修行不定にして一進一退するをいふ。
【三三】偏進の心と自利の一邊に偏進する心をいふ。
【三四】「何に況んや云云」の釋文の此の結句は之を論本の結句と見るべし、異譯諸本及び本譯の論本別行にも之を論本の結句と爲せり。

釋曰　此の下は、菩薩の餘の五度を修することを明さんと欲す。此の長時の一一の刹那の中に於て、常に極苦の難處に在り、資身の具も恒に供足せず。菩薩は此の苦を受くると雖も、此の時の中に於て諸の波羅蜜を修し、未だ嘗て厭足せず。

論曰　戒・忍・精進・三摩提・般若の心を、菩薩は恒に現前に修し、乃至究竟清涼の菩提に入住するも、是の菩薩の戒忍等の意は亦滿足せず。是れ無厭足の心なり、是を菩薩の廣大の意と名く。若し菩薩は初發心より乃し成佛に至るまで、無厭足の心を捨てされば、是を菩薩の長時の意と名く。若し菩薩は六波羅蜜に由りて作す所の他を利益する事に、常に無等の歡喜を生じ、衆生の益を得て其の心に歡喜することも及ぶ能はざる所なり。是を菩薩の歡喜の意と名く。若し菩薩は六波羅蜜を行じて衆生を利益し已り、衆生は己に於て大恩德有ることを見るも、自身は彼に於て恩有りと見ず。是を菩薩の有恩德の意と名く。若し菩薩は六波羅蜜より生ずる所の功德善根を一切の衆生に施し與へ、無著の心を以て迴向して、爲に彼をして愛重すべき果報を得しむ。是を菩薩の大志の意と名く。若し菩薩は行ずる所の六波羅蜜の功德善根を、一切の衆生をして平等に皆得しめ、彼が爲に無上菩提に迴向す。是を菩薩の善好の意と名く。此の六意所攝の愛重の思惟に由りて、菩薩は修習す。

釋曰　求得の心を顯はさんが爲なり。大功德有るを見るが故に、之を得んことを求欲す。

論曰　若し菩薩は無量の菩薩の、加行を修する六意の生ずる所の功德善根を隨喜すれば、是を菩薩の六意の所攝の隨喜の思惟と名く。

釋曰　無疑心を顯はさんが爲なり。既に勝人の所行を隨喜するが故に、決定して疑ひ無し。

論曰　若し菩薩は一切の衆生の六意の所攝の六波羅蜜を修行せんことを願ひ、及び自身に六意の所攝の六波羅蜜を修行せんことを願ひ、加行を修習して乃し成佛に至らば、是を菩薩の六意の所攝の願得の思惟と名く。

志の意、六には善好の意なり。廣大の意とは、若くは菩薩は若干阿僧祇劫に能く無上菩提を得、

釋曰　總じて劫數の無限の多少を擧ぐるが故に若干と言ふ。大小乘の經に劫數を說くこと同じからざるを以ての故に、定んで劫數の多少を說かず。小乘は三阿僧祇劫に成佛を得ることを明かし、大乘は或は三或は七或は三十三阿僧祇劫に成佛を得ることを明かす。

論曰　此の如き時を以て、一刹那刹那と爲す。

釋曰　或は三阿僧祇劫を合して一刹那と爲し、或は三十三阿僧祇劫を合して一刹那と爲す。故に再び刹那と稱す。此の如くして一刹那より無量の刹那に至り、一日、一月、乃至一阿僧祇劫と爲す。一阿僧祇より三十三阿僧祇に至りて、方に成佛を得。菩薩の意に厭足無きことを顯はさんと欲するが故に、此の長時を說く。

論曰　菩薩は此の時の中に於て、刹那々々に常に身命を捨て、

釋曰　「此の時」とは即ち總じて長時を擧ぐ。刹那は世間所說の刹那を明かす。向に說く所の長時の中に於て、世間に說く所の如き刹那に、一一の刹那の中に於て、常に身命、及び外財を捨て、乃し成佛に至るも、厭足の心有ること無し。

論曰　及び恒伽沙數に等しき世界の中に、滿つる七寶を奉施して如來に供養し、初發心より、乃し究竟清涼の菩提に入住するに至るも、

釋曰　有餘涅槃を「清」と名く、煩惱の濁を離るゝを以ての故なり。無餘涅槃を「涼」と名く、衆苦の熱惱を離るゝを以ての故なり。又菩提は淨樂を以て體と爲す、淨德を顯はさんと欲するが故に「清」と言ひ、樂の義を顯はさんと欲するが故に「涼」と言ふ。

論曰　是の菩薩の施意は猶滿足せず。此の如く多時の刹那々々に、三千大千世界に熾火を滿し、菩薩は中に於て行住坐臥して四威儀を爲し、一切の資生の具を離るゝも、

論曰　四には方便勝智修、

釋曰　卽ち無分別智にして三義有り、一には廣大、二には清淨　三には速成なり。此の三義を具するが故に、方便勝智の名を立つ。

論曰　五には他を利益する事を修す。此の中、前の四修は應に前の如く知るべし。他を利益する事を修すとは、謂く佛の無功用の心にて、如來の事を捨てざるなり。

釋曰　大乘敎の中に說く所を明かす。諸佛は已に般涅槃すと雖も猶更に心を起す。般涅槃は卽ち法身なり。更に心を起すは、卽ち應化の二身なり。諸佛は已に法身に住するも、本願力に由りて三業を離れ、衆生を利益する事に隨つて、自然に應化の二身を顯現して、恒に如來の正事を捨てず、及び諸の波羅蜜を行ず。是の故に諸佛に諸の波羅蜜の修習有り。

論曰　諸の波羅蜜を修習して圓滿位の中に至るも、更に諸の波羅蜜を修す。

釋曰　佛及び[三二]菩薩は、或は隨つて分に圓滿し、或は具分に圓滿す。此の圓滿位に於て、若し諸の波羅蜜を修すれば、自の事は已に成ずるが故に、自の爲にせず。衆生は此の行に由りて四趣を離れ三乘の道果に入ることを得るを見るが故に、更に諸の波羅蜜を修す、卽ち是れ他を利益する事なり。

論曰　復次に思惟の修習とは、愛重・隨喜・願得の思惟にして、六意の攝の修する所なり。

釋曰　此の章は通じて修習の義を明かす。前に五修を明かせるも、未だ修位に異り有ることを分別せず。云何んが願行位の修は清淨位の修に異ることを知るを得るや。若し六意の攝の三思惟にて、諸の波羅蜜を修すれば、應に清淨位に在ることを知るべし。願行位の中には、則ち此の義無し。三思惟は是れ修行の本。六意を以て莊嚴して此の三を攝持す。

論曰　六意とは、一には廣大意、二には長時の意、三には歡喜の意、四には有恩德の意、五には大

【三二】菩薩は其の修行の程度に隨つて一分づつ圓滿す、佛は完全に圓滿するが故に具分といふ。

論曰　若し略して說かば應に知るべし、修習に五種有り、

釋曰　若し廣く說かば、修に十二種有り、一には顯示修、二には損減修、三には治成修、四には後行修、五には相應修、六には勝修、七には上上修、八には初際修、九には中際修、十には後際修、十一には有上修、十二には無上修なり。顯示修とは、謂く四念處を修す、能く四諦の義を顯示するを以ての故に。損減修とは、謂く四正勤なり、能く諸の惡法を漸滅するを以ての故に。治成修とは、謂く四如意足なり、能く定を治成するを以ての故に、[26]五失を除き及び[27]八滅の資糧を持せんが爲の故なり。後行修とは、謂く五根を修す、解脫分の善根を具するを以ての故なり。相應修とは、謂く五力を修す、應に見道に續くべきを以ての故なり。勝修とは、謂く七覺分なり、四諦の觀に入るを以ての故に。上々修とは、謂く[28]八分聖道なり、勝れたる見道なるを以ての故に。初際修とは、謂く凡夫位なり、戒を修し、乃至不淨觀及び數息觀を得て、[29]顚倒に隨順するを以ての故なり。中際修とは、謂く有學位なり、此の中には倒非倒の倒する所無きが故に。有上修とは、謂く聲聞獨覺の修なり、[30]彼の位に及等せんとするが故に。無上修とは、謂く菩薩の十地等なり、最勝なるを以ての故に。

論曰　一には加行方法修、

釋曰　謂く身口意の業は、能く廣大にして淸淨の最勝を成ずるが故に、

論曰　二には信樂修、

釋曰　聞敎に約す、初章に釋するが如し。

論曰　三には思惟修、

釋曰　思惟修の中に自ら三種有り、謂く愛重と隨喜と願得となり。合して思惟修と名く。亦初章に釋するが如し。

【二六】五失とは懈怠、妄念、惛沈、掉擧、不作行作行なり。

【二七】八滅とは新譯に八種斷といふ、欲、勤、信、安、念、正知、思、捨をいふ。

【二八】八分聖道とは八聖道支のこと。

【二九】凡夫位なれば顚倒の見尙ほ息まざるが故なり。

【三〇】彼の位とは上位を指す、上位を望んで同等ならんとするの意。

五には思惟散亂、謂く下劣の心にして、菩薩は、大乘を捨てゝ小乘を思惟するなり。

論曰 復能く心を引いて內境に住せしむるが故に那と稱す。

釋曰 心を引いて[二三]五種の寂靜に住せしむるを、名けて內境と爲す。此の義を具するに由るが故に持訶那と稱す。

論曰 能く一切の見行を滅し、能く邪智を除くが故に[二四]般羅と稱す。

釋曰 見行とは謂く六十二見なり。邪智とは謂く世間虛妄の解なり。見行は卽ち是れ惑障にして邪智は卽ち是れ智障なり。

論曰 能く眞相を緣じて

釋曰 謂く眞如を緣ずるは卽ち如理の智なり。

論曰 其の品類に隨ひ、

釋曰 品類に二種有り、謂く有爲、無爲と及び名等の[二五]五の攝となり。若し此の法を知れば、卽ち如量智なり。

論曰 一切の法を知るが故に若と稱す。

釋曰 眞如の相及び品類を一切の法と名く。如理智を般若と名け、如量智は是れ般若の果なれば、亦般若と名く。此の二智は三義の所顯と爲す、一には對治、卽ち二障。二には境界、卽ち眞相。三には果、卽ち如量智なり。此の義を具するに由るが故に般羅若と稱す。

修習章 第六

論曰 云何んが應に諸の波羅蜜の修習を知るべきや。

釋曰 世間及び二乘に、皆施等の修習有り。菩薩の施等の修習は、世間及び二乘に異ることを、云何んが知るべきや。

【二三】五種の寂靜とは前の五種の散亂を滅除したる境界をいふ。

【二四】般羅若 prajñā 隋譯には鉢羅肾穰となす普通には般若と音寫す。

【二五】名等の五とは名相、分別、正智、如如なり。

損害を生ぜんと欲するやと觀ず。此の五觀に由るが故に能く瞋恚を滅す。瞋恚既に滅するが故に能く忿恨を除く。

論曰　復能く自他の平和の事を生ず、故に提と稱す。

釋曰　此の事は因果に通達す。此の忍は能く自身をして瞋恚の過失の染する所と爲らざらしむ。即ち是れ自の平和に於て既に忿恨せざれば、他の苦を生ぜず、即ち是れ他に於て平和なり。經に言へるが如し、若し忍を行ずる者には、則ち五德有り、一には無恨、二には無訶、三には衆人に愛せられ、四には好名聞有り、五には善道に生ずと。即ち此の五德を平和の事と名く。此の義を具するに由るが故に羼提と稱す。

論曰　懶惰及び諸の惡法を滅除するが故に、〔二〕毘と名く。

釋曰　惡處に於て沈沒するが故に懶惰と稱す。又惡行を厭惡せざるが故に懶惰と稱す。懶惰に因るが故に諸の善行を離れて、諸の惡法を生ず。三業恒に過を起すが故に、惡法と名く。懶惰を滅するに由るが故に、能く懶惰の生ずる所の諸惡を除く。此を黒法を滅する精進と名く。

論曰　復不放逸を行じ、無量の善法を生長するが故に梨耶と稱す。

釋曰　此れ因果を信樂するに約して以て精進を明かす。因の行ず可きを信じ、果の得べきを樂ふ。是の故に恒に行じ、恭敬して行ずるを不放逸と名く。恭敬を行ずるに由りて、未だ生ぜざる善を能く生ぜしめ、已に生ぜる善を能く增長せしむ。此れ即ち法を生得する精進なり。此の義を具するに由るが故に毘梨耶と稱す。

論曰　能く散亂を滅除するが故に〔三〕持訶と名く。

釋曰　散亂に五有り、一には自性散亂、謂く五識なり。二には外の散亂、謂く意識の外塵に馳動するなり。三には内散亂、謂く心の高下及び噉味等なり。四には麁重散亂、謂く我々所等を計す。

〔二〕毘梨耶 virya。

〔三〕持訶那、Dhyāna 普通は禪那と音寫す、隋譯には地耶那となせり。

に貧窮下賤の苦を受くることは、是の處有ること無し。

論曰　復大富主と爲るを得、及び能く福德の資糧を引くが故に那と稱す。

釋曰　能く施し能く用ゆるを大富主と名く。是の主に由るが故に能く福德の資糧を引く。此の義を具するに由るが故に陀那と稱す。

論曰　能く邪戒及び惡道を寂靜にす、故に[一七]尸と名く。

釋曰　因時に能く邪戒を破して、果時に能く惡道を離る。若し人惡業を捨てずして、而も能く戒を持するは、是の處有ること無し。故に先に邪戒を破す。若し人邪戒を破し正戒を持して[一八]四趣に墮するは、是の處有ること無し。故に果時に能く惡道を離る。

論曰　復能く善道及び三摩提を得、故に羅と稱す。

釋曰　先に戒を持するに由りて、後に人天の善道の果を受く。或は因の中に在るも、或は果の中に在るも、戒を持するに由るが故に身口清淨なり。清淨なるが故に悔無く、悔無きが故に心安し。心安きが故に喜を得、喜の故に[一九]猗を得、猗の故に樂を得、樂の故に定を得、定の故に如實を見る、如實を見るが故に厭離を得、厭離の故に解脫を得。故に持戒に因りて三摩提を得。此の義を具するに由るが故に尸羅と稱す。

論曰　能く瞋恚及び忿恨の心を滅除するが故に、[二〇]羼と名く。

釋曰　因時に五義を觀ずるに由るが故に、瞋恚及び瞋恚の生ずる所の忿恨の心を滅除す。五義とは、一には一切の衆生は無始より以來我に於て恩有りと觀ず。二には一切の衆生は恒に念々に滅す、何人か能く損し、何人か損せらるやと觀ず。三には唯法のみにして衆生無し、何ものか能く損し及び損せらるもの有りやと觀ず。四には一切の衆生は皆自ら苦を受く、云何んが復之に加ふるに苦を以てせんと欲するやと觀ず。五には一切の衆生は皆是れ我が子なり、云何んが中に於て

【一七】尸羅、Sīla。

【一八】四趣とは四惡趣なり。

【一九】猗とは輕安をいふ。

【二〇】羼提 kṣānti。

釋曰　六種及び三種の最勝無等有り。六種は前の[一四]六相の中に釋するが如し。三種は、一には時無等、二には加行無等、三には果無等なり。一一の度は皆三阿僧祇劫の修行なるが故に、時無等なり。加行無等には、四種五種有り、復五種有り、復六種有り。四種とは即ち前に明かす所の四修なり。五種とは即ち前に明かす所の五種の清淨なり。復五種有り即ち五修なり。復六種有り即ち六意なり。[一五]五修と六意とは後文に自ら說けり。果無等とは、謂く三身の顯はす所の無上菩提なり。

論曰　能く彼岸に到るを以ての故に、是の故に通じて波羅蜜と稱す。

釋曰　彼岸に到るに自ら三種有り、一には隨つて修行する所究竟して、餘り無きを到彼岸と爲す。世間及び二乘も亦應じて修行する所有るも、之を修して盡くさゞるが故に到彼岸に非ず。二には衆流の海に歸するを以て極と爲すが如し。施等も亦爾なり。眞如に入るを以て究竟と爲し、即ち眞如に入るを以て到彼岸と爲す。世間及び二乘は施等を修すと雖も、眞如に入ること能はざるが故に、到彼岸に非ず。三には應に無等の果を得べきを以て到彼岸と爲す。更に別の果の此の果に勝れたるもの無ければ、諸果の中の上と爲すが故に彼岸と名く。世間及び二乘は施等を修すと雖も、此の果を求めざるが故に到彼岸に非ず。菩薩の修する所の彼岸は皆此の三義を具す。故に通じて波羅蜜と稱す。何の故に別に陀那等と名くるや。

論曰　能く慳惜嫉妬、及び貧窮下賤の苦を破滅するが、故に[一六]陀と稱す。

釋曰　慳惜は是れ多財の障なり。嫉妬は是れ尊貴の障なり。因時に能く慳惜の障を滅して、果時に多財を得るが故に、貧窮の苦を離る。因時に能く嫉妬の障を滅して、果時に尊貴を得るが故に、下賤の苦を離る。何を以ての故に、若し人未だ慳惜嫉妬の心を破せざれば、則ち施を行ずる能はず。故に能く此の障を破すと說く。若し人施を行じて、能く此の障を破すれば、此の人は後

【一四】六相とは前に說く六種の無等をいふ。

【一五】五修と六意とは後の修習章に出づ。

【一六】陀は陀那 Dāna の陀にして布施を義に由りて分類せり、即ち滅怨と生善とに依つて且く梵音を分解せるものにして原語の意義に基くものには非らず、他も之に準して知るべし。

む。心の調和は定を得る所以なるに由り、故に精進に因りて定を生ず。若し心定を得れば、則ち能く眞如に通達す。故に定に因りて慧を生ず。此れ即ち前は能く後を生ずるなり。

論曰　復次に前々の波羅蜜は、後々の波羅蜜に由りて清淨にせらるゝが故なり。

釋曰　施は戒に由るが故に清淨なり。若し人戒を持せざれば、身口意の業は則ち清淨ならざれば、所行の施も亦清淨ならず。依止清淨ならざるを以ての故なり。能く戒を持すれば依止清淨なるに由るが故に、施は清淨なることを得。戒は忍に由るが故に清淨なり。若し人能く忍なれば、身口意の業は皆清淨なることを得。忍は精進に由るが故に清淨なり、精進は能く善を生じ、惡を滅するが故に、精進は定に由るが故に清淨なり。若し精進は修位に在らざれば、則ち惑を除くこと能はざるが故に、定は智慧に由るが故に清淨なり。若し眞如を了別せざれば、復定を得と雖も、有流を以ての故に、即ち生死の法なり。若し眞如を見れば所得の定は、即ち無流を成じ、涅槃の道と爲る。此れ即ち後は能く前を清淨にするなり。此の二義に由るが故に次第有り。

立名章第五

論曰　何の義に依りて六度の名を立つるや。此の義を云何が見る可きや。

釋曰　世間に名を立つるに自ら多くの因有り。生類に因りて名を立つる有り、相に因りて名を立つる有り、假に因りて名を立つる有り、輕賤に因りて名を立つる有り、敬重に因りて名を立つる有り。此の五因の中に於て、六度は何の義によりて名を立つるや。二因によりて名を立つ。種性異るが故に、生類によりて名を立つ。功德多きが故に、敬重によりて名を立つ。所立の名に自ら通別有り。六種を皆波羅蜜と稱するは是れ通名なり。施戒等の異り有るは是れ別名なり。何の故に通じて波羅蜜と名くるや。

論曰　一切の世間、聲聞、獨覺の施等の善根の中に於て、最勝にして無等なるが故なり。

釋曰　謂く前三句を離れて別に無記及び不善等を行ず、皆是れ第四句の攝なり。

論曰　施の中の四句の如く、應に知るべし、餘度にも亦四句有ることを。

釋曰　施に是非を簡別するが如く、餘度も亦應に此の如く簡別すべし。

次第章　第四

論曰　云何が六波羅蜜を說くに、此の如く次第するや。

釋曰　此れ或は疑ふに由るが故に問ひ、或は解せざるに由るが故に問ふ。疑ふが故に問ふとは、一切の所行は必ず先づ智に由りて、因果を知り已つて方に正懃を起す。此の二因に由りて、其の欲する所に隨ひて則ち皆能く行ず。是の故に應に次第を倒（さかしま）にし、及び次第無かるべし、と。此の疑有るに由り、是の故に須らく問ふべし。解せざるに由るが故に問ふとは、若し人衆行を修せんと欲するも、淺深と難行易行とを知らず。淺なれば則ち行じ易く、深なれば則ち行じ難し。易きを應に先に學ぶべく、難きを應に後に學ぶべし。此の義を知らんが爲に、是の故に須らく問ふべし。

論曰　前々の波羅蜜は、隨順して次に後々の波羅蜜を生ずるが故なり。

釋曰　菩薩は衆生の貧窮困苦を見るを忍ぶこと能はず、捨財を數習して以て[二]串とし、能く捨つるが故に、衆生を損惱する事を作すことを欲せず。即ち家を捨てゝ戒を持するが故に、施に因りて戒を生ず。菩薩は受くる所の戒を愛護せんが爲に、衆生を忿恨する事を以て淨戒を毀破するを欲せず。即ち忍を習行するが故に、戒に因りて忍を生ず。煩惱盡きざるに由りて或は成じ（或は）成ぜず。菩薩は此の忍を愛護せんが爲に、即ち精進を行ずるが故に、忍に因りて精進を生ず。若し人恒に精進を行ずれば則ち能く心を治す。此の精進に由りて、若し心沈沒すれば、則ち[三]拔いて起さしめ、若し心掉動すれば、則ち抑へて起さゞらしめ、若し心平等なれば、則ち持して相續せし

【二】　串とは串習の意。

【三】　拔いてとは引き立てること。

ことをと。此の施は迴向するに由りて、他をして無上菩提を得しむるが故に、此の施行は永く盡くること有る無し。若し餘度を行ずるも亦皆迴向す。世間及び二乘には迴向無し。故に迴向を以て菩薩の行ずる所の六度の相と爲す。

論曰 六には淸淨の無等なるに由る。謂く惑智の二障は永く滅して餘すこと無し。菩薩の行ずる所の諸度は、分々に二障を除き、乃至皆盡くするが故なり。

釋曰 此の中に二種の淸淨を顯はす。一には淸淨の因を顯はし、二には淸淨の位を顯はす。淸淨の因とは、惑智の二障を滅するに因るが故に、施等の事淸淨なり。淸淨の位とは、先づ地前に於て漸く惑障を除き、後に初地に登りて漸く智障を除く。此の兩處を分々の淸淨と名く、即ち是れ因位なり。若し佛果に至れば六度圓滿して、具分の淸淨と名く、即ち是れ果位なり。

論曰 施は卽ち是れ波羅蜜なり、波羅蜜は卽ち是れ施なるや。

釋曰 此の問は何の所顯を欲するや。是れ波羅蜜と及び波羅蜜に非ずとの相を簡別せんと欲するなり。

論曰 是れ施にして波羅蜜に非らざる有り、

釋曰 謂く依止無等等の六相の行施を離れては、此の施は六度の所攝に非らざるが故に、但是れ施にして波羅蜜に非ず。

論曰 是れ波羅蜜にして施に非らざる有り、

釋曰 謂く依止無等等の六相を具するも、戒等の餘度を行ずるなり。

論曰 是れ施にして是れ波羅蜜なる有り、

釋曰 謂く依止無等等の六相を具する行施なり。

論曰 施に非らず波羅蜜に非らざる有り、

するには、必ず皆品類を具足す。故に品類の無等を以て、菩薩の行ずる所の六度の相と爲す。

論曰　三には行事の無等なるに由る。謂く一切の衆生を安樂にし利益する事にして、菩薩の行ずる所の諸度は、皆此の二事を成ぜんが爲めの故なり。

釋曰　此れ行事に異り有ることを明かす。菩薩は六度を行ずるに何の能有りや。先には衆生に現在未來の世間の樂を生じ、後には根性に隨つて、衆生に三乘道の果を生ぜんが爲めなり。世間及び二乘の施等を行ずるは、但だ自身を安樂にし利益せんが爲めなるも、尙ほ成就せず、何に況や能く衆生を安樂にし利益せん。故に行事を以て菩薩の行ずる所の六度の相と爲す。

論曰　四には方便の無等なるに由る。謂く無分別智なり。菩薩の行ずる所の諸度は、皆是れ無分別智の所攝なるが故なり。

釋曰　此れ方便に異り有ることを明かす。三輪に於ける清淨を菩薩の方便と名く。三輪に於ける清淨は即ち是れ無分別智なり。菩薩は此の智に由りて、能施、受施及び所施の財物を分別せず。世間及び二乘は、三輪の分別を捨つること能はず。是の故に我愛を起し、及び財物に著す。他に於て平等なること能はず。故に方便を以て菩薩の行ずる所の六度の相と爲す。戒の三輪とは、衆生と事と時との分別を離る。忍の三輪とは、自と他と過失との分別を離る。精進の三輪とは、衆生の高下と事と用との分別を離る。定の三輪とは、境と衆生と惑との分別を離る。般若の三輪とは境と智と衆生との分別を離るゝなり。

論曰　五には迴向の無等なるに由る。謂く無上菩提に迴向す。菩薩の行ずる所の諸度は決定して轉じて一切智の果に趣かしむるが故なり。

釋曰　菩薩は若し施等を行ずれば、先づ是の心を作さく、我れ此の物を以て一切の六道の衆生に施與するも、此れは是れ衆生の財物なり、我れ彼が爲に施を行ず、願くは彼れ皆無上菩提を得ん

て菩薩は善く衆生に敎ふ。

釋曰　善く敎ふるに二義有り、一には理の如く爲に說くが故に敎と名け、二には恒に爲に說くが故に善く敎ふと言ふ。

論曰　故に成熟することを得。是を一切の衆生に隨順して成熟せんが爲の依止と名く。波羅蜜に六數有りと立つるは、此の如きの義に由る。是の故に應に知るべし、波羅蜜を成立するに六數有ることを。

相章第三

論曰　此の六波羅蜜の相は、云何が見る可きや。

釋曰　何の故に此の如きの問を作すや。世間・二乘・菩薩に皆施等の六行有り。若し菩薩の行ずる所の六波羅蜜の相を明かさざれば、云何んが此は是れ波羅蜜にして、此は波羅蜜に非らずと知ることを得ん。是の故に須らく波羅蜜の相を問ふべし。

論曰　六種の最勝に由る。六波羅蜜の通相に六有り、一には依止の無等なるに由る、謂く無上菩提の心に依止して起る。

釋曰　此れ依止する所に異り有ることを明かす。世間及び二乘の、施等を行ずるは、無上菩提の心に依止して起らず。唯菩薩の施等を行ずるは、必ず無上菩提の心に依止して起る。故に依止の無等なるを以て、菩薩の行ずる所の六度の相と爲す。

論曰　二には品類の無等なるに由る。謂く一一の波羅蜜は略說すれば皆三品有り。菩薩は皆具さに修行す。

釋曰　此れ所緣の事に異り有ることを明かす。世間及び二乘の、能く施等を行ずるに、品類、謂ゆる[一]外と內と及び內外とを具足すること有ること無きに等しからず。若し菩薩にして施等を行

[一] 外とは財寶等を施すこと、內とは身肉手足等、內外とは妻子等を施與すること。

論曰　是の故に六種の惑障を對治せんが爲に、波羅蜜に六數有りと立つ。「一切の佛法を生起する爲の依處なるが故に」とは、

釋曰　六度は是れ佛法を生長する因なり。

論曰　前の四波羅蜜は是れ不散亂の因なり、

釋曰　四障有り、散亂の因と爲る。一には棄捨の障、二には遠離の障、三には安受の障、四には數治の障なり。貪著するに由るが故に、棄捨すること能はず。貪瞋癡に由りて十惡を生ずるが故に、遠離すること能はず。瞋恚に由るが故に、安受すること能はず。貪瞋癡の煩惱に由るが故に數治すること能はず。此の四障に由るが故に心散亂す。前の四度は能く此の四障を對治するが故に、四度は是れ不散亂の因なり。復次に五蓋を以て定障と爲す。四蓋は定因を障へ、一蓋は正定及び定の發す所の慧を障ふ。貪・掉悔[九]・瞋・睡眠の四蓋は、是れ散亂の因にして、前の四度を障ふ。四度は此の四蓋を對治するが故に、四度は是れ不散亂の因なり。[一〇]疑は境を緣じて決せざるが故に心散亂す。定心は決して一境を守るが故に、疑は正定を障ふ。疑に由りて理を見ざるが故に、定の發す所の慧を障ふるが故に、定と慧とを以て疑を對治す。

論曰　次の一波羅蜜は是れ不散亂の體なり。此の不散亂に依止するに由るが故に、能く如實に諸法の眞理を覺了して、一切の如來の正法は皆生起するを得、是の故に一切の佛法の生起する依處と爲るに、波羅蜜に六數有りと立つ。「一切の衆生に隨順して成熟せんが爲の依止なるが故に」とは、施波羅蜜に由りて衆生を利益し。戒波羅蜜に由りて衆生を損惱せず。忍波羅蜜に由りて能く彼の毀辱を安受し、怨に報ゆるの心を起さず。精進波羅蜜に由り　彼の善根を生じ、彼の惡根を滅す。此の利益の因に由りて、一切の衆生を皆調伏することを得。次に彼の心未だ寂靜を得ざれば、寂靜ならしめんが爲に、已に寂靜を得れば解脱せしめんが爲の故に。定慧の二波羅蜜を立つ。此の六度に由り

【九】掉悔とは心の輕擧浮動し、後之を悔ゆるをいふ。
【一〇】疑は五蓋の後の一のなり。

は、財物及び室家に貪著するなり。

釋曰 財物を貪著するは施を障へ、室家に貪著するは戒を障ふ。此の貪著に因りて修行の心を發すこと能はず。

論曰 若し已に修行の心を發せば、退弱心の因を對治せんが爲の故に、忍と精進との二波羅蜜を立つ。

釋曰 已に能く施と戒とを行ずと雖も、若し苦事を忍受せざれば則ち施戒の心は退弱せん。能く苦を忍ぶと雖も、若し諸善を勤修して一切の惡を息めざれば、則ち施、戒、忍の心は皆退弱せん。故に退弱心を對治せんが爲に、須らく此の二度を立つべし。

論曰 退弱心の因とは、謂く生死の衆生の違逆の苦事と、

釋曰 理を得ざる者を「生死の衆生」と名く。菩薩の敎に乖反するを「違」と爲し、菩薩の身を侵毀するを「逆」と爲す。此れ並びに是れ苦事なり。若し此の苦事を忍受すること能はざれば、則ち瞋心を生ぜん。瞋は卽ち是れ退弱心の因なり。

論曰 長時に善法を助くる加行の疲怠となり。

釋曰 精進の行は久遠時の中に於て、一切の善を修す。若し衆生に於て慈悲心無ければ、自身を愛惜し、修行する所に勝れたる功德有ることを見ざるが故に、修行する所の中に於て疲怠の心を生ず。此の心有るに由りて精進すること能はず、卽ち是れ懶惰なり。懶惰は卽ち是れ退弱心の因なり。

論曰 若し已に發行と及び退弱せざる心とを起せば、壞失の心因を對治せんが爲の故に、定と慧との二波羅蜜を立つ。壞失の心因とは謂く散亂と邪智となり。

釋曰 散亂に由るが故に靜心を壞し、邪智に由るが故に正解を失す。

說く。若し菩薩は法流に在らば、何の所見を爲すや。三種の佛性を信ずるに由るが故に、先に法身を思惟し、後に法身を證す。先に比智を以て法身を見、後に證智を以て法身を見る。此の樂信には何の功德有りや。

(**論曰**　已に菩提の近きを知る、難きこと無く得易きが故に)

釋曰　若し人、淸淨の樂信の位の中に在れば、明了に無上菩提の已に近づけるを見る。已に身は四十心を過ぐ、是の故に正方便に入ること、難きこと無し。所以に得易し。此の三偈に由りて、資糧としての忍の境界を成就し、思惟の體性相貌は皆顯現することを得たり。

成立六數章　第二

論曰　何の故に波羅蜜に唯六數のみ有りや。

釋曰　此れ波羅蜜は何の故に定んで六數を立てゝ、增さず減ぜざるやを問ふ。

論曰　能く六種の惑障を對治することを安立せんが爲の故に。一切の佛法の生起せんが爲の依處なるが故に、一切の衆生に隨順して成熟せんが爲の依止なるが故に。

釋曰　波羅蜜を立つるに其の數に六有るは、凡そ此の三義の爲めなり。一には惑を除かんが爲に、二には佛法を生起せんが爲に、三には衆生を成熟せんが爲なり。惑を除くは現在に自ら利益を得。佛法を生起し、衆生を成熟するは、未來に自他の利益を得るなり。若し惑已に永く滅すれば、則ち現在に於て安樂に住することを得。何を以ての故に。更に功用を起して、此の惑を滅し及び此の惑を遮することを爲すを須ひずして、復生ぜざらしむるが故に、現在に於て自の利益を得。惑障既に滅すれば、未來世に於て必ず自ら佛法を具足し、又能く衆生を成熟するが故に、自他の利益を得るなり。

論曰　行心を發さゞる因を對治せんが爲の故に、施と戒との二波羅蜜を立つ。行心を發さゞる因と

すや。

(論曰　無著の智を得るが故に、)

釋曰　菩薩は一切の法は但是れ分別のみにして復外境無しと見る。外境を成ぜざるが故に分別も亦成ぜず。若し菩薩にして內外有所無しと見れば則ち著する所無し。即し是れ無分別智なり。此の智は即ち是れ清淨なり。此の清淨の體性は云何ん。此の義を顯はさんが爲の故に第三句の偈を說く、

(論曰　是の樂信は清淨なれば)

釋曰　樂信とは即ち是れ無分別智の體なり。[七]七有を愛せざるが故に「樂」と名け、三種の佛性に於て、心決して疑ひ無きが故に「信」と名け、[八]七愛を離るゝが故に樂清淨なり、虚妄を離るゝが故に信清淨なり。

(論曰　清淨の意地と名く)

釋曰　樂信の清淨に由るが故に、此の位は「清淨」の名を得。及此の位は是れ菩薩の見位にして、無分別智の境の清淨なる處なり。此の智は樂信を以て體と爲すが故に、此の位を說いて清淨の意地と名く。清淨の樂信は其の相云何ん。

論曰

菩薩は法流に在り　前後に諸佛を見て　已に菩提の近きを知る　難きこと無く得易きが故に。

(論曰　菩薩は法流に在り、前後に諸佛を見て)

釋曰　清淨の樂信に二種の相有り。一には恒に寂靜に在るを相と爲す。二には恒に明了に佛を見るを相と爲す。七愛を樂捨するに由るが故に、恒に修道に入觀するが故に、「恒に法流に在り」と

【七】七有とは七種の生死をいふ、前に已に解せり。
【八】七愛とは七種の生死を感招する煩惱、所知の二障に攝せらるゝ惑をいふ。

く。修する所の行は已に四十心位を過ぎたるが故に「圓かにす」と名く。施戒修[五]の三品の清淨法を「白」と名く。復、白法有り、謂く信根・智根・精進根・定根なり。此の四根は卽ち是れ四位なり。念根は四位に通じて、能く[六]一闡提・外道・聲聞・獨覺の四種の黑障を除き、能く淨我樂常の四德を得るが故に白法と名く。若し資糧圓滿せば更に何の得る所ぞ。

（論曰　能く利疾の忍を得）

釋曰　能く行を樂受するは是れ「忍」の義なり。廣大甚深の法に於て、受け難く行じ難きを而も能く受行するが故に「利」と名け、數々起りて息まざるが故に「疾」と名く。此の句は忍は是れ上々品なることを顯はす。若し菩薩にして此の忍の位に在れば、此の境界に由りて必ず清淨なることを得。此の境界を顯はさんが爲の故に。

（論曰　菩薩は自乘に於て甚深廣大と說く）

釋曰　大乘は唯是れ菩薩のみの境界なるが故に「自」と名く。大乘に乘ずれば能く菩薩をして清淨ならしむ。此の乘の中に於て別の境界有り、一法として我無きを「甚深」と名け、虛空器等の定を「廣大」と名く。前は是れ智の境、後は是れ定の境なり。此の二境は能く菩薩をして清淨ならしむ。此の思惟に由りて菩薩は清淨なることを得。此の義を顯はさんが爲の故に、第二偈を說く。

論曰

唯分別なるのみと覺るが故に　無著の智を得るが故に　是の樂信は清淨なれば　清淨の意地と名く。

（論曰　唯分別のみなりと覺るが故に）

釋曰　菩薩は大乘の一切法、乃至、甚深廣大なるは皆是れ分別の所作なりと覺了す。此の如き覺了を名けて思惟と爲す。此の思惟は、能く菩薩をして清淨ならしむ。菩薩の淸淨は何の所得と爲

【五】修とは修定のこと。

【六】一闡提、Icchantika は斷善根と譯す、無姓有情のこと。

故に

論曰　正說を信樂するに由りて、愛重し隨喜し願得し思惟するが故に、

釋曰　如來の正說は六度と相應して甚深難解なりと雖も、此の人は亦信樂して疑ひ無し。此の信樂に由りて行ぜざるの義無し。六度の行の中に於て無窮の功德を見て、心に愛重を生ず。此の愛重に由りて行ぜざるの義無し。此の如き信樂の意は何人か能く得るや。唯諸佛如來の已に究竟の波羅蜜の位に至れるものゝみ、能く此の意を得。是れ勝人の成ずることを得る所なることを知り。勝人に於て深心に欣讃するが故に「隨喜す」と名く。此の隨喜に由りて行ぜざるの義無し。衆生と及び我と平等ならんことを願ふ。此の清淨なる信樂の意を得るが故に、「願得」と名く。此の願得に由りて行ぜざるの義無し。佛の立つる所の大乘の法門の如く。施等の六度及び十二部の阿含に依りて、聞思修の慧に由り數々思惟す。聞慧の思惟に由りて果圓滿することを得、思慧の思惟に由りて所聞の法に於て、心、理に入ることを得、修慧の思惟に由りて自の事成ずるを得、能く地に入り及び地を治するを以ての故に、此の四種の思惟に由りて行ぜざるの義無し。

論曰　恒に休息無く行ずるが故に、六波羅蜜を修習し究竟し圓滿す。

釋曰　此の四思惟に由りて、菩薩は恒に放逸無し。放逸無きが故に六度を修習して、因に在りて究竟し、果に至つて圓滿す。此の位は能く六度を攝し、悉く五種の清淨を具足せしむ。故に清淨意の位と名く。其の相云何ん。此の相を顯はさんが爲の故に、次に長行の後に更に三偈を說く。

論曰　此の中に偈を說く、

修習して白法を圓かにし　能く利疾の忍を得　菩薩は自乘に於て　甚深廣大と說く。

(**論曰**　修習して白法を圓かにし)

釋曰　先に願行位の中に於て、善く道の資糧を生長せり。此の義を顯はさんが爲の故に初句を說

(**論曰**　六波羅蜜に依止するに由りて、菩薩は已に唯識地に入り、次に清淨なる信樂の意に攝する所の六波羅蜜を得。)

釋曰　若し菩薩は六度に依りて六障を除くに由り、已に唯識に入る。是の時、菩薩は更に清淨なる信樂の意に攝する所の六波羅蜜を得。六度の正教の中に於て心決して疑ひ無し、故に名けて「信」と爲し、信ずる所の法の如く修行せんと求欲するが故に、名けて「樂」と爲す。此の信樂の意に五の因緣有るが故に「清淨」と稱す。一には無著清淨、謂く波羅蜜と相違する法を起さず。二には不觀清淨、謂く自身及び波羅蜜の果報の報恩の中に於て、心常に觀ぜず。三には無失清淨、謂く波羅蜜と相ひ雜はる染汚の法を離れ、及び非方便の行を離る。四には無分別清淨、謂く言の如く波羅蜜の相を執することを離る。五には迴向清淨、謂く六度の已に生長し及び生長せざる中に於て、常に大菩提を得んことを求む。一一の波羅蜜は、皆此の五種の清淨を具して信樂の所攝なり。復清淨なる信樂の意有り、謂く已に願樂地を過ぎて、見地等に入れば、聖人の信樂を得。地前の信樂に異るが故に清淨と名く。復清淨なる信樂の意有り、謂く奢摩他、毘鉢舍那に由りて眞如觀に入れば、無分別智及び無分別後智の所攝の信樂の意を得るが故に、清淨と名く。

論曰[四]　此の正法の內に諸の菩薩有り、富樂に著せざる心と、戒に於て犯過無き心と、苦に於て壞無き心と、善修に於て懶惰無き心と、此の散亂の因の中に於て住著せざるが故にと、常に行じて一心に理の如く諸法を簡擇するとによりて、唯識觀に入ることを得。六波羅蜜に依止するに由りて、菩薩は已に唯識地に入り、次に清淨なる信樂の意に攝する所の六波羅蜜を得。是の故に此の中間に於て設ひ、六波羅蜜の加行の功用を離るとも、

釋曰　已に唯識觀に入るが故に「是の故に」と言ふ見。位より乃至究竟位までを中間の假設と爲す、此の人は其の中間に於ては功用を作さずして、六度を修行し、六度自然に滿足す。何を以ての

【四】此の一段の論本の前の過半は前三段に別出して已に之を釋せり。

に唯識に入ることを得ず。施は能く此の障を除くが故に、施は是れ唯識に入るの因なり。第二の障とは、心を縱にして身口意の業を起す。此の障に由るが故に唯識に入ることを得ず。戒は能く此の障を除くが故に、戒は是れ唯識に入るの因なり。第三の障とは、輕慢・毀辱・寒熱等の苦を安受すること能はず。此の障に由るが故に唯識に入るを得ず。忍は能く此の障を除くが故に、忍は是れ唯識に入るの因なり。第四の障とは、修行せざるを執して樂と爲し、未だ得ざるを得たりと計[一]し、得たるに於て功德を見ず。此の障に由るが故に唯識に入るを得ず。精進は能く此の障を除くが故に、精進は是れ唯識に入るの因なり。第五の障とは、相雜はりて住することを樂ひ、世間の希有の事及び散亂の因緣に於に功德有るを見る。此の障に由るが故に唯識に入るを得ず。定は能く此の障を除くが故に、定は是れ唯識に入るの因なり。第六の障とは見聞覺知に於て計して如實と爲し、世間の戲論に於て懃心に修學し、不了義經に於て文の如く義を判ず。此の障に由るが故に唯識に入ることを得ず。智慧は能く此の障を除くが故に、智慧は是れ唯識に入るの因なり。

[二](**論曰**　此の正法の內に諸の菩薩有り)

釋曰　唯正法の內の修行に依りてのみ、能く唯識に入るの因を成立す。若し正法の外の二乘の教及び外道世間の敎に依れば、此の因を立つることを得るの義有ること無し。故に先に正法の內を因を立つる所と爲すと明かす。能く因を立つるの人は、二乘等の能くする所に非らざるが故に、菩薩と言ふ。菩薩は何の法を行じて能く唯識に入るや。

[三](**論曰**　富樂に著せざる心より、乃至、理の如く諸法を簡擇すると云ふまでにて、唯識觀に入ることを得。)

釋曰　此れ布施の障を離れ、乃至智慧の障を離るることを明かす。具さには前に釋するが如し。故に六度を以て入因と爲す。

【一】　計すと計度するの義。

【二】　以下三段の「論曰」は次の論本より別出して釋せるものなれば論本としては重複せり。

【三】　此の文は次に出づる論本を省略して出だせるもの。

卷の第九

釋入因果勝相第四

因果位章　第一

釋曰　此の義に十一章有り、一には因果位、二には成立六數、三には相、四には次第、五には立名、六には修習、七には差別、八には攝、九には對治、十には功徳、十一に五顯なり。

論曰　此の如く已に入應知の勝相を說けり、云何んが應に入因果の勝相を知るべきや。

釋曰　總じて前に明かす所の四位の唯識觀に入ることを擧ぐるが故に、「此の如く」と云ふ。前に已に方便道・見道・修道・究竟道の四位の中に於て、應知の勝相に入ることを說けり。云何んが廣く此の勝相の因に入ることゝ、及び後所得の果に入ることゝを說くや。其を開顯して見易からしめん。

論曰　六波羅蜜に由る、謂ゆる陀那・尸羅・羼提・毘梨耶・持訶那・般羅若波羅蜜なり。

釋曰　此れ向きの問に答へて、因果の勝相を易く見ることを得べきを明かす。六度を因果の體と爲す。先に六度々以て因と爲し、後に六度を以て果と爲す。

論曰　云何んが六波羅蜜に由りて唯識に入ることを得るや。復云何んが六波羅蜜は唯識の果に入ることを成ずるや。

釋曰　向に六度を說いて因果の體と爲すと雖も、未だ義意を釋せざるが故に、更に何の義を以ての故に、六度を說いて因と爲すやを問ひ、復何の義を以て六度を說いて果と爲すやを問ふ。此の六度は能く六種の唯識に入るの障を除くが故に、六度を唯識に入るの因と爲す。第一の障とは、欲塵を喜樂し、富める財物に於て自身に受樂する中に、勝れたる功徳を見る。此の障に由るが故

（論曰　功德海の岸に智人は至る。）

釋曰　如來の功德の因の中に、十地・十波羅蜜等有り。果の中に、智德・斷德・恩德有り。此の如き諸德は唯佛一人のみ、餘人の能く得ざる所なり。故に名けて「海」と爲し、因果の究竟せる、之を名けて「岸と爲す」。「智人」とは卽ち是れ菩薩なり。菩薩は前二智に乘じて能く未だ曾て至らざる功德の海岸に至るなり。此の中の五偈は總じて衆義を明かす。第一偈は道の資糧を顯はし、第二偈は道の加行を顯はし、第三偈は見道を顯はし、第四偈は修道を顯はし、第五偈は究竟道を顯はす。

佛は正法を說きて善く成立し　心と有根とを法界に安じ　已に憶念は唯分別のみと知りて
功德海の岸に智人は至る。

(論曰　佛は正法を說きて善く成立し)

釋曰　一切の三世の諸佛は共に此の法を說き、所說の理は同じく相ひ違背せず、故に「正法」と名く。又說者の勝れたることを顯はさんと欲するが故に「佛說」と言ふ。所說の道理の勝れたると及び所得の果の勝れたるとに由るが故に正法と名く。如來の成立する正法に三種有り、一には小乘を立て、二には大乘を立て、三には一乘を立つ。此の三の中に於て第三は最も勝れたり、故に「善く成立す」と名く。

(論曰　心と有根とを法界に安じ)

釋曰　菩薩は先に已に聞思の二慧を得て、如來の正法の中に心を安んじ、後に如來の一切の正說を合觀して境界と爲すは、即ち是れ無分別智なり。此の智を「有根」と名く。此の智を得已れば餘智は皆滅し、唯此の智のみ動壞すべからず、故に有根と名く。復次に[二六]三無流根の中に於て、此の智を第一と爲す、謂く未知欲知根なり、故に有根と名く。復次に解脫に三事有り、一には能生解說、二には能持解說、住して失はざらしむ、三には能用解說、自利利他なり。此の解脫の三事は即ち三無流根に配すれば、此の無分別智は通じて三處に於て名を得。自體是れ根にして、又能く他作の根と爲るなるが故に、有根と名く。此の有根心を法界の中に安住す。

(論曰　已に憶念は唯分別のみと知りて)

釋曰　菩薩は已に有根心の中に住し、後に觀を出づる時は無分別後智心の中に在りて、前に觀に入る事の如きは皆能く憶念す。此の憶念は實に有るに非ず、唯是れ分別のみなることを知る。無分別智及び無分別後智に由りて、菩薩は進んで何の位を得るや。

【二六】三無流根とは新譯に三無漏根といふ、即ち未知當知根、已知根、具知根にして無漏清淨の法を增勝せしむる三種の法なり。

遣滅すること藥の能く毒を除くが如し。

(論曰 無分別智に由る慧の人は、恒に平等に行じて一切に遍ねく)

釋曰 此の已に眞如を見る菩薩を說いて「慧の人」と名く。已に見道の中に於て無分別智を得たればなり。此の智は何の相ぞ。一に無退を以て相と爲す、不退なるが故に「恒に」と稱す。二に平等の行を以て相と爲す、此の智は一切法の平等の理を見ること、猶虛空の如く、如來の所說の十二部の修多羅、三乘等の法に於て、同じく一味にして差別有ること無きを見る。內外の法を「一切」と名け、內外の諸法は同一の如の性なるが故に名けて「遍ねし」と爲す。平等の行は智慧の體を顯はし、一切に遍ねしとは、智慧の境界を顯はす。此の如く無分別智に由る菩薩は何の所作を欲するや。

(論曰 染依の稠密なる過聚の性を)

釋曰 三種の不淨品を「染」と名く、此の染は過聚の性を以て依止と爲す。過聚の性より生ずるが故なり。此の過聚の性を「稠密」と名く、解し難く破し難きを以ての故なり。如來の正敎を離れては、餘敎をして解せしむること能はざるが故に、「解し難し」と言ひ、無分別智を離れては、餘智の破すること能はざるが故に「破し難し」と言ふ。一切の染汚法の熏習の種子は、是れ過聚性の體なり。

(論曰 遣滅すること藥の能く毒を除くが如し)

釋曰 此の性は是れ三品の不淨法の因にして、解し難く破し難き惑等の熏習せる種子を性と爲す。無分別智に由る聰慧の人は、此の過聚の性を能く遣り能く滅すること、阿伽陀藥の能く諸毒を除くが如し。遣は現在に約し、滅は未來に約す。即ち是れ菩薩の盡無生智なり。

論曰

す」と名く。

(論曰　能く二相と及び無二とを離る)

釋曰　證する所の法界には何の相か有る。能取所取の二相を離れ、及び人法の二の分別無し。此の如き法界を菩薩は已に證す。

論曰

若し心を離れて餘無きを知れば　此に由りて卽ち心の非有なるを見る　智人は此の二の有たらざるを見て　無二の眞法界に住することを得。

(論曰　若し心を離れて餘無きを知れば)

釋曰　此の方便に由りて法界を可證せしむ。今此の方便として、唯識を離れて外に別に餘法有ること無きを知ることを顯はす。

(論曰　此に由りて卽ち心の非有なるを見る)

釋曰　所緣の義は有に非らざるを見るに由りて、能緣の心も亦非有なることを知る。

(論曰　智人は此の二の有ならざるを見て)

釋曰　智人とは、謂く諸の菩薩なり。境及び心の二は皆非有なることを見る。

(論曰　無二の眞法界に住することを得)

釋曰　菩薩は若し二皆非有なりと見れば、則ち眞法界に住することを得。「眞法界」とは、無塵無識なるが故に「無二」と言ひ、顚倒及び變異の二の虛妄を離るゝが故に「眞」と名く。是れ諸法の第一の性なるが故に「法界」と名く。

論曰

無分別智に由る慧の人は　恒に平等に行じて一切に遍ねく　染依の稠密なる過聚の性を

の功力あり、凡そ幾くの時を經れば道を成就することを得るや。功力は無量にして時節は無際なり。「無」の言は長遠を顯はす。譬へば大海は無量なり、大劫は無際なりと說くは、長遠を以ての故なるが如し。資糧も亦爾り、一一の度を修するに、皆一切の衆生に遍ねきが故に、功力は無量なり。一一の度を修するに、三阿僧祇劫を經るが故に、時を經ること無際なり。

(**論曰**　法に於て思惟して心決するが故に)

釋曰　定後の心に由りて諸法を觀察す。是の故に法に於て心決定を得。又菩薩は備さに五明を修すれば、度量の方便に於て具足して自ら能くするが故に、思惟に於て心に決定を得。

(**論曰**　能く義類の分別の因を了す)

釋曰　菩薩は[二五]能く比し能く證するが故に「能く了す」と名く。眞俗の二諦を名けて「義類」と爲す。此の義類を知るは但だ分別を以て因と爲す。是の故に能く了するなり。

論曰

已に義類は但だ分別のみと知れば　似義の唯識の中に住することを得　故に觀行の人は法界を證し　能く二相と及び無二とを離る。

(**論曰**　已に義類は但だ分別のみと知れば)

釋曰　菩薩は已に義類及び分別に於て心決定するに由るが故なり。

(**論曰**　似義の唯識の中に住するを得、)

釋曰　菩薩は此の如く思惟すれば、但だ識は塵に似て顯現するのみなるに由るが故に、菩薩の心は唯識の中に住して、外を緣じて起らず。

(**論曰**　故に觀行の人は法界を證す、)

釋曰　觀行の人は外塵を離れて、但識を緣じて住するに由り、塵の無相なるを知るを、「法界を證

【二五】能く比し能く證すとは解行と證得の意なるか、或は比量知と現量知とをいふか更に考ふべし。

釋曰　經は義深く隱れて解し難し。如實に經中の正義を顯了するが故に、莊嚴經論と名く。論は此の經を解するが故に莊嚴の名を得。莊嚴經論の中に衆多の義有るも、今は但だ略して五偈を取るのみ。此の偈は何の所顯を欲するや。此の偈は修道の中に於て覺了し難き義を顯はさんが爲なり。

論曰

菩薩は福と及慧とを生長して　二種の資糧は無量際なり　法に於て思惟して心決するが故に

能く義類の分別の因を了ず。

（**論曰**　菩薩は福と及慧とを生長して）

釋曰　菩薩は、前に釋するが如く、[二二]生ずることとは見位に在り、[二三]長ずることとは修位に在り。又初刹那を「生ず」と名け、後刹那を「長ず」と名く。又[二四]單を生ずと名け、複を長ずと名く。菩薩の修する所は唯複のみにして單無きが故に、生ずると長ずるとは一時にして而も成ず。生長する所は何の法なるや。謂く「福と及び慧」となり。施等の三度を福と名け、般若を慧と名く。精進及び定にして、若し福を生ぜんが爲なれば、則ち福に屬す。若し慧を生ぜんが爲なれば則ち慧に屬す。爾る所以は、精進にして若し布施・持戒・忍辱を生ずれば則ち福に屬し、若し聞思修の慧を生ぜんが爲なれば則ち慧に屬す。定にして若し四無量に依りて起り、衆生を緣じて境と爲せば則ち福に屬し、若し盡智無生智及び無分別智等を生ぜんが爲なれば則ち慧に屬す。誰れか能く生長するや、謂く菩薩の人なり。

（**論曰**　二種の資糧は無量際なり）

釋曰　此の福と及び慧とに二種の功用有り。一には能く道を助け、二に能く道の體を成ず。此の二に由るが故に道は成就することを得、故に此の二を說いて道の「資糧」と爲す。此の二用は幾く

【二二】生とは福慧を生ずること。

【二三】長とは福慧の己に生じたるを增長すること。

【二四】單とは福と慧の何かの一方のみをいひ、複とは兩者を並取す。

釋曰　若し人寂靜位の中に在れば、已に心は唯是れ影のみなるを了別して、能く外塵の相を除き、是れ自心の、法及び義の相に似て起るのみと、此の如きの觀を作す。

(**論曰**　菩薩は內に住すれば、)

釋曰　若し菩薩の心、此の如く住することを得れば、實に塵有ること無く、心は內心を緣じて起る。外塵を緣せざるが故に內に住す。若し內に住すれば、此の心は定んで何の所觀ぞ。

(**論曰**　所取の非有なるに入り、)

釋曰　是の所取の義は實に所有無ければ、菩薩は能く所取の境の空を見る。

(**論曰**　次に能取の空を觀じて、)

釋曰　所取の義は既に實には有なるに非らざるに由り、世間の說く所の心は是れ能取なれば、此の如きの道理も亦成ずることを得ず。是の故に觀行の人も亦能取の心有ることを見ず。前に已に所取を見ず、後に又能取を見ず。是の時觀行の人には何の所得有りや。

(**論曰**　後に二の無得に觸る。)

釋曰　眞如は所取に非ず能取に非ず、無所得を以て體と爲すが故に、眞如を說いて「二の無得」と爲す。是の人は先に已に無相の性に入り、次に無生の性に入り、後に眞如の無性の性に入るなり。「觸る」とは入得を以て義と爲す。眞如に入得するに由るが故に名けて觸と爲す。前の兩偈と後の兩偈との異相云何ん。前の兩偈は、名義と及び假說とに約し、四尋思と及び四如實智を方便と爲して眞觀に入ることを得るを顯はし、後の兩偈は、三性の體及び三無性を明かす。又前の兩偈は、正教を顯はして、三性及び三無性に入ることを明かし、後の兩偈は、所入の三性及び三無性を顯はす。

論曰　復大乘莊嚴經論に說く所の五偈有り、此の道を顯はさんが爲めなり。

が故に、能分別も亦所有無しと見れば、此の菩薩は何の觀に入ることを得るや。

（**論曰**　三無性に入ることを得。）

釋曰　菩薩は名義は更互に客と爲ることを見れば、異の名義の分別性に入る。若し菩薩は名と自性の假說と差別の假說とは唯分別を體と爲すと見れば、分別の無相性に入ることを得。若し菩薩は但だ亂識は六種の相無しと見れば、此の亂識の體成ぜざるが故に、說くべからず。因緣成ぜざるが故に、生起有りと執すべからず。此の中に分別は旣に無ければ、言說も亦得べからず。則ち依他の無生性に入る。若し菩薩は此の二義の有と無とに所有無しと見れば、則ち三無性の非安立諦に入る。

論曰　又正敎の兩偈は分別觀論に說くが如し、

釋曰　今、此の論の中には見道の境智に入ることを顯はすこと圓滿せざるが故に、[三] 分別觀論の兩偈を引いて此の義を成ずることを顯はす。何人か何の位に能く此の心は但だ是れ影にし實の法義無しと見るや。

論曰

菩薩は靜位に在れば　心は唯是れ影のみと觀じ　外塵の相を捨離し　唯定んで自想を觀ずるのみ。　菩薩は內に住すれば　所取の非有なるに入り　次に能取の空を觀じて　後に二の無得に觸る。

（**論曰**　菩薩は靜位に在れば、心は唯是れ影のみと觀じ、）

釋曰　唯菩薩の人のみ寂靜の位に在れば、能く此の觀法を作す。義は實には所有無きも、心は法と義とに似て顯現す、故に唯是れ影のみと說く。

（**論曰**　外塵の相を捨離して、唯定んで自想を觀ずるのみ。）

【三】分別觀論は新譯には分別瑜伽論といふ。

釋曰　名は義の中に於て是れ客、義は名の中に於て亦是れ客なり。本性の類に非らざるを以ての故なり。菩薩は寂靜の位に入りて、此の道理を觀ずべし。此れ卽ち第一の尋思の方便なり。

（**論曰**　二の唯量と、及び彼の二の假說とを觀ずべし。）

釋曰　菩薩は名義の二法は、唯所有無きを量と爲すと觀ずべし。何を以ての故に、義に二種有り、一には自性、二には差別なり。悉く所有無く、但だ是れ假說のみ。此の假說にして、若し義と同じければ、義に所有無く、假說にも亦所有無し。若し義と同じからざれば、則ち自然に所有無し。假說は卽ち是れ名なり。名に所有無きが故に、義に於て是れ客なり。義に所有無きが故に、名に於て是れ客なり。無所有は是れ名義の本性なるが故に、本性を以て唯量と爲す。若し分別して名義と作せば、此の分別の本性は無相なるが故に、無相を以て名義の唯量と爲す。此れ卽ち第二の如實智の方便なり。

（**論曰**　此によりて實智を生じ、塵の分別の三を離る、）

釋曰　四種の尋思によりて四種の如實智を生ず。何人か能く此の四智を得るや。若し人能く三種は、但だ是れ分別にして實に外塵無しと見れば、此の人は則ち一分の如實智を得。何者か是れ三の分別なるや、一には分別の名、二には分別の自性、三には分別の差別なり。

（**論曰**　若し其の非有なることを見れば、）

釋曰　前の二句は三の分別に了達すれば、無塵觀に入ることを得、依他性に依りて以て分別性を遣ることを明かし、此の句は眞如に依りて依他性を遣ることを明かす。云何んが能く遣るや。名義に所有無きに由り、能分別も亦是れ有なることを得ず。何を以ての故に、若し所分別の名義にして是れ有ならば、能分別は此の名義を緣じて、是れ有なりと說くべきも、名義に所有無きに由りて、所分別の因緣は既に是れ無なれば、能分別の體も亦所有無し。若し菩薩は名義に所有無き

家を生ず」と稱す。如來の家を生ずるに由りて、乃至、[19]當來に成佛を得んが故に、「生ぜんが爲めの故に」と言ふ。小乘には則ち此の事無し。

論曰　十には顯現の差別に由る、謂く佛子の大集輪の中に於て、常に能く顯現す。正法を攝受せんが爲なり。

釋曰　諸の菩薩を通じて「佛子」と稱し、衆多の菩薩の聚會なるが故に「大集」と言ふ。如來の所説の法に三義有るが故に「輪」と名く、一には能く上下し、二には未得を能くを得、已得を能く守り、三には能く此より彼に到るなり。菩薩は常に大集の中に於て顯現して[20]不破僧を示し、常に法輪の中に於て顯現して能く正法を護持することを示し、已に得たるを失はざらしむるを「攝」と爲し、未だ得ざるを得しむるを「受」と爲す。小乘には則ち此の事無し。

論曰　十一には果の差別に由る、謂く十力、無畏、不共の如來の法と、及び無量の功德の生ずるとを果と爲すが故に、

釋曰　菩薩の修道は皆如來を得んが爲なり。此の如き等の果は、小乘には則ち此の事無し。

論曰　此の中に兩偈を説く、

釋曰　「此の中」とは、卽ち見道の中なり。兩偈を説くは、見道の方便によりて眞如觀に入ることを顯はす。

論曰

名と義と互に客と爲ると　菩薩は尋思すべし　應に二の唯量と　及び彼の二の假説とを觀ずべし、　此によりて實智を生じ　塵の分別の三を離る　若し其の非有なることを見れば　三無性に入ることを得。

(**論曰**　名と義と互に客と爲ると、菩薩は尋思すべし。)

【一九】乃至とは發心修行を乃至す。

【二〇】不破僧とは教團の和合を破らざること。

ち此の事無し。

論曰　五には地の差別に由る、謂く十地に依りて出離を爲す、

釋曰　道に下中上有り、上は卽ち是れ十地なり。此の十地は四種の生死を出離するを通じての功能と爲す。此の十地の菩薩道に依りて、能く出離することは、小乘に異る。後の六は果の差別を明かす。

論曰　六と七とは清淨の差別に由る、謂く煩惱の習氣を滅し、及び淨土を治するを清淨と爲す。

釋曰　前に五事有り已に道の差別を明かせり。此の下の六事は、次に修道の得る所の果は二乘と異り有ることを明かす。第六は內の清淨を明かし、第七は外の清淨を明かす。內は自の相續の中に道を修するに由りて、煩惱の習氣を滅除するが故に、內の清淨と名け、外は淨土の行を修するに由りて、所居の土に五濁有ること無く、頗梨柯等の世界の如くなるが故に、外の清淨と名く。內は自の清淨ならんが爲にして、外は他を清淨にせんが爲なり。小乘には此の事無し。

論曰　八には一切の衆生に於て平等の心を得る差別に由る。謂く衆生を成熟せんが爲に、加行の功德と善根とを捨てず、

釋曰　菩薩は自身に應に般涅槃すべきが如く、一切の衆生をして般涅槃せしめんと欲す。此の平等の心に由るが故に、加行の功德と善根とを捨てず。餘度を功德と爲し、般若を善根と爲す。又五度を功德と爲し、精進を善根と爲す。又般若と精進とを善根と爲し、餘度を功德と爲す。小乘には則ち此の事無し。

論曰　九には受生の差別に由る、謂く如來の家を生じて生ぜんが爲めの故に。

釋曰　眞如の理を見、佛の法身を證して、能く如來の種性をして絕えさらしむるが故に、「如來の

論曰　聲聞と菩薩との見道には、應に知るべし、十一種の差別有り。
釋曰　前の五は道の差別を明かし、後の六は果の差別を明かす。前の五は道の差別を明すとは、
論曰　何をか十一と爲すや。一には境界の差別に由る、謂く大乘の法を緣じて境と爲す。
釋曰　如來の說く所の大乘の十二部經に修行の法を說く。此の法を緣じて境と爲すが故に道心を發す。小乘の道には則ち此の事無し。
論曰　二には依止の差別に由る、謂く大福德智慧の資糧を依止と爲すに依る、
釋曰　此の道は二乘及び世間の道と異り有り。世間は但だ福德を修するのみにて智慧無く。二乘は但だ智慧を修するのみにて而も福德無し。菩薩は具さに福德と智慧とを修するが故に、助道成することを得。助道とは卽ち是れ依止なり。此の依止は道の方便の中に在り、卽ち思修の二慧なり。
論曰　三には通達の差別に由る、謂く人法の二の無我に通達す、
釋曰　先に方便の中に於て已に思修の慧を得て、此によりて眞觀に入ることを得、能く人法の二無我の理に通達するが故に、人法に於て愛著を生ぜず。凡夫は人に著し、二乘は法に著するも、菩薩は並びに著せず。故に離欲の人法と言ふ。此れ卽ち菩薩の得る所の眞の修慧を明かす。是れ正道の體にして小乘と異るなり。
論曰　四には涅槃の差別に由る、謂く無住處涅槃を攝して以て住處と爲す。
釋曰　此の涅槃は是れ道果に非ず、是の道の住處なり。何を以ての故に、菩薩は般若を行ずるに由りて、生死の過失を觀察するが故に、修道は生死に在らず。菩薩は大悲を行ずるに由りて、衆生の苦を觀じ救濟の心を起す、生死に在らずと雖も而も生死を捨てざるが故に、涅槃に住せず。此の處に道住するに由りて[一八]眞俗二相の生に執せざるが故に、無相の道と名く。小乘の道には則

【一八】眞俗二相の生とは般涅槃を眞諦門の生とし、生死に住するを俗諦門の生となす。

安立する所の道理に隨ふ。復次に

(論曰 一切の如來の所說の大乘十二部經を攝するに由るが故に現前することを得。)

釋曰 如來の所說の一切法を合して通じて一境と爲す、復次に

(論曰 說く所の通別の二境を治するに由り、)

釋曰 合する所の境を[一五]單と爲すや、[一六]複と爲すや。雙べて眞俗を觀じ、通じて一の無相なることを顯はさんと欲す、復次に

(論曰 極通の境を緣ずる、出世の無分別智と及び無分別智の後に得る所の奢摩他、毘鉢舍那の智を生起するに由り。)

釋曰 道の二體は更互に相攝することを顯はす。奢摩他に由るが故に智散ぜず。毘鉢舍那に由るが故に、定に噉味等の染汚無し。復次に

(論曰 [一七]無分別智の後に得る所の奢摩他、毘鉢舍那智は無量無數の百千俱胝の大劫の中にて、數々修習するに由り、昔得る所の轉依に由り、三種の佛身を得んが爲に更に加行を修す。)

釋曰 此の智は是れ世智と爲すや、出世の智と爲すや。是れ世智なりと說くべからず、世間の習ふ所に非らざるを以ての故に。是れ出世の智なりと說くべからず、世間心の中に於て起るを以ての故に。故に此の心は無分別智の心に異る。此の心も亦世、出世、及び非世、非出世なりと說くべし。此の二智は長時に於て數習するが故に、轉依を得。轉依に由るが故に菩薩は心を作して云く、我れ今必定して三種の佛身を得べしと、此の義の爲の故に更に加行を修するなり。

論曰 是れ聲聞の見道、是れ菩薩の見道なり。此の二の見道の差別云何ん。

釋曰 聲聞の見道は是れ他道なり、菩薩の見道は是れ自道なり。此の二の見道の差別及び果の差別は、其の相云何ん、

【一五】單とは眞俗を別說すること。

【一六】複とは眞俗を双へて說くこと。

【一七】此の一段までは前文の再出なり此の初の句は前段の終に在るも、次の釋の便宜上之を一連の文として再出せり。

は三慧の功能を明かし、以て此の問に答ふ。初に聞慧は是れ修慧の方便なることを明かし、次に思慧は是れ修慧の資糧なることを明かし、後に無分別智は是れ修慧の體なることを明かす。三には修位の修慧の因果に約して問を爲す。後に無分別智の後の所得を明かして、以て此の問に答ふ。修慧に由りて此の智生ずることを得るが故に、是れ修慧の果なり。若し此の智無ければ後の道に進むことを得ざるが故に、是れ修慧の因なり。四には修位の四修に約して問を爲す。後に長時の修より乃至、無餘修までを明かして、以て此の問に答ふ。五には修位の依止に約して問を爲す。後に轉依を明かして、以て此の問に答ふ。若し此の轉依を依止と爲すこと無ければ、修位は聖道を成ぜず。何を以ての故に、凡夫の依未だ轉ぜざるが故なり。六には修位の勝用に約して問を爲す。後に三身を明かして、以て此の問に答ふ。自利利他の兩用を圓滿せんが爲の故に、加行を修するなり。復次に、

(**論曰**　云何ん。)

釋曰　通じて修位の次第を問ひ、後に具さに次第を明かす。初め修心を起してより、乃至、修位の究竟までを以て此の問に答ふ。先に三句を以て聞思修の位、即ち三慧の境を明かし、次の三句は能入の三境の功能を顯はす、即ち是れ三慧なり。次に利他の功能を顯はす、即ち無分別智の後の所得は、自ら證する所の如く他の爲に解説す。次に[一四]四修を明かして修位を顯はす。四修成滿することを得るに由り、次に轉依を明かし、自利の轉依を顯はす、是れ法身の四德を得るの本なり。故に是れ自利なり。次に三身を明かす。三身は究竟の修位に於て成ずることを得、能く平等に自他を利益す。法身は是れ自利にして、應化の二身はは是れ利他なり。復次に

(**論曰**　佛の廣く說けるか如く、安立する所の法相は菩薩の十地に於て、)

釋曰　「十地」とは、即ち華嚴經の中の十地品の所顯の文句なり。此の文句の中に、如來は廣說し

【一四】四修とは長時修、無間修、恭敬修、無餘修なり。

論曰　奢摩他、毘鉢舍那の智を生起するに由り、

釋曰　此の二智は寂靜無倒なることを顯はす、奢摩他に由るが故に「寂靜」なり、毘鉢舍那に由るが故に「無倒」なり。

論曰　無量無數の百千倶胝の大劫の中に、數々修習するに依るに由り、

釋曰　此の文は三慧に四種の修を具することを顯はす。譬の類を以て知ることを得べからざるを「無量」と爲し、數へ知るべからざるを「無數」と爲す。百億を一倶胝と爲し、一倶胝に非らさるが故に「千」と言ひ、亦一千にも非らさるが故に「百」と言ひ、小劫に非らざるが故に「大」と言ふ。此れ卽ち長時の修を明かす。「數々修習す」とは卽ち無間と恭敬と無餘との三修を顯はす。

論曰　昔及び今得る所の轉依に由り、

釋曰　先に見位に入る時に於て「得る所の轉依」なり。此の法は是れ修道の攝持なるか故に、一切の修する所は皆聖道を成ず。已に願樂地を過ぐるが故なり。

論曰　三種の佛身を得んが爲に更に加行を修す、

釋曰　是れ修道の攝持する究竟の用なり。此の如き道理に由りて、菩薩は更に加行を修するは、先の修道は眞如を見んが爲めにして、今重ねて道を修するは三身を得んが爲の故なれば、「更に修す」と言ふ。復次に

(一三)(論曰　云何ん。)

釋曰　「云何ん」とは是れ問の詞なり。凡そ六義に約して問を爲す、一には修位の境界に約して問を爲す。修道の境界に自ら三種有り、一には加行の依止、謂く文教なり。二には修行の資糧、謂く理に依りて義を判ずるなり。三には修行の通達する所の處、謂く修慧の境界なり。後の三句は三慧の境界を明かし、以て此の問に答ふ。二には修位の三慧の功能に約して問を爲す。後の三句

【一三】以下七段の「論曰」として論本を擧げて釋したるは前段の修道の論本を再出して別釋せるものなれば、論本としては「是の聲聞の見道云云」の文に續く。云何んといふ以下は先きに釋論に「此の云何んとは凡そ十義を問ふ云云」に應じて十義の釋を擧ぐ。

故に觀行と名く。又見道を觀と名け、見道より後に得る所を悉く名けて行と爲す。菩薩は見道に依止し、何の相等を以て初地に入ることを得るや。

論曰　佛の廣く說けるが如く安立する所の法相は菩薩の十地に於て、

釋曰　此の中には先づ三慧の境を明かし、後に三慧の功能を明かす。此の文は卽ち三慧の境を明かす。「佛は廣く說く」とは是れ聞慧の境なり。「安立する所の法相」とは、卽ち相等の十種の法相にして、是れ思慧の境なり。「菩薩の十地に於て」とは、卽ち修慧の境なり。小乘にも亦十地有るが故に、「菩薩」を以て之を標す。地々に皆十相有るが故に「十地」と言ふ。

論曰　一切の如來の說く所の大乘十二部經を攝するに由るが故に現前することを得。

釋曰　此の下は三慧の功能を明かす。此れ卽ち聞慧の功能を明かす。聞慧は能く十二部教に通達するが故に「攝す」と言ふ。

論曰　說く所の通別二境を治するに由り、

釋曰　此れ思慧の功德を明かす。通別の二境は卽ち相等の十法なり。思慧は能く此の十法を研習するが故に「治す」と言ふ。

論曰　[二](生起)極通の境を緣ずる、

釋曰　此の下は修慧の功能を明かす。方便を「生」と爲し、正觀を「起」と爲す。無間道を生と爲し、解脫道を起と爲す。分に入るを生と爲し、分を出づるを起と爲す。見道を生と爲し、修道を起と爲す。出世道を生と爲し、世間道を起と爲す。如理如量の智の緣ずる所を「極通の境」と爲す。

論曰　出世の無分別智と、及び無分別智の後の所得なる。

釋曰　此れ正しく修慧の體を明かす。

【二】(生起)は原文は「由生起緣極通境」とあるに依って釋文に生起の二字を釋す、故に且らく生起の二字を此の處に出せり。

論曰　若し菩薩は此の如く初地に入りて已に見道を得れば、通達して唯識に入ることを得。

釋曰　此の下は見道は修道の依止と爲ることを顯はす。先に見道を成立するに由るが故に、修道成ずることを得。若し菩薩は願樂地の中に於て、具さに諸の方便を修すれば、初地に入ることを得。初地に入ることを得る所以は、見道を得るに由るが故なり。見道は即ち無分別智なり。無分別智を得る所以は、眞如及び俗諦に通達するに由る。故に知る、塵に所有無きは是れ眞如に通達し、唯識有るのみとは是れ俗に通達することを。復此の識に生性有ること無しと知るは、是れ眞如に通達するたり。此の識は是れ假有なりと（知る）は爲れ俗に通達するなり。若し俗に通達せざれば、以て能く眞を見ること無し。俗を離れて眞無きを以ての故なり。若し眞に通達せざれば、以て俗を遣ること無し、俗に別の體無きを以ての故なり。能く眞俗に通達する所以は、能く唯識の理を解するに由るが故なり。此の文は即ち四義を顯はす、一には出世の果、二には出世の行、三には出世の境、四には出世の方便なり。初地は是れ果なり。總じて有爲無爲の法を體と爲す。福德智慧の行は是れ有爲なり。眞如及び煩惱の生ぜざるは是れ無爲なり。初地は是れ假名なり。是の總に由るが故に見道は是れ行なり。通達する所の眞俗は是れ境なり、唯識に入るは是れ方便なり。唯識に入るを方便と爲すに由るが故に、能く眞俗の境に通達す。眞俗の境に通達するに由るが故に無分別智の行を得。勝行を得るに由るが故に初地の果を得。

論曰　云何が菩薩は觀行を修習して修道に入るや。

釋曰　此の「云何んが」とは、凡そ十義を問ふ。一には相、二には次第、三には修、四には差別、五には攝相助、六には攝相礙、七には功德、八には更互觀察、九には名、十には淨不淨なり。數修して得る所を「修習」と爲し、福德智慧を「行」と爲し、般若を「觀」と爲す。一切の行は悉く是れ般若の事にして、皆般若に屬するが故に「觀行」と名く。又六度の中には般若を第一と爲すが

「忍」と名く。又能く上品の諦義を安受するが故に忍と名け。上品の諦の中に於て心に退失無きが故に忍と名く。

論曰　此の三摩提は最後の刹那に唯識の想を了伏し、

釋曰　此の三摩提とは卽ち是れ通行三摩提にし。通行の上上品の最後の一刹那の定を取る。先に無相の性を了別するに由り、後に更に、所緣既に所有無ければ、能緣も必ず生ずることを得ずと思量す。此の了別に由るか故に能く唯識の想を伏滅す。唯識の想既に滅すれば、最後の刹那より更に第二の刹那に進み、卽ち初地に入る。

論曰　轉じて無間三摩提と名く。

釋曰　此の定は初地と相ひ隣り、餘心の隔つる所と爲らざるが故に「無間」と名く。又下地の惑は其の初地に入ることを礙ふる能はず、下地の道の、勝方便を隔てゝ卽ち初地に入ることを得ざるが如くならざるが故に無間と稱す。

論曰　應に知るべし是れ世第一法の依止なり。

釋曰　菩薩は地前を以て世法と爲し、地に登るを出世の法と爲す。此の無間定は猶是れ世法なり。世法の中に於て無等なるが故に第一と名く。何を以ての故に、世間の衆生は修行して能く此の法に等しき者有ること無ければなり。又此の定は是れ世法なりと雖も、能く菩薩の出世道の增上緣と爲るも、餘の世法は則ち此の義無きが故に第一と名く。又唯一刹那なるが故に第一と名く。

論曰　此の四種の三摩提は、是れ菩薩の非安立諦の觀に入る前方便なり。

釋曰　前の二定は是れ無間修、後の二定は是れ恭敬修なり。此の四定は眞道に非らざることを顯はさんと欲するが故に、故に是を前方便と說く。

人の頭頂の能く身命を持するが如く、修道者も亦爾り。若し此の位に至れば善根は則ち斷ずべからず。二には山頂は是れ退際にして、人の山頂に至るもの有れば退還するが如く、修道者も亦爾り、或は此の位に至る有れば、方便の中に住して進まざるが故に退と名く。三には山頂は是れ進際にして、或は人有り、山頂に至るも而も更に昇進するが如く、修道者も亦爾り、或は此の位に至るもの有るも、而も進んで勝位に入るが故に頂の名を立つ。已に菩薩は四種の尋思に於て煖頂の二種の方便道を修することを說けり。四種の如實智の中に於ては修道云何ん。

論曰　四種の如實智に於て、菩薩は已に唯識觀に入る。無塵を了別するが故に、

釋曰　若し菩薩は四種の尋思を過ぎ、煖頂の兩位を度れば、則ち四種の如實智の位の中に在り。菩薩は何の境を緣ずるや。菩薩は但だ、唯識を緣じて境と爲す。唯識の境を緣じて復何の得る所ぞ。無塵の義を了別するなり。無明及び疑惑を除くが故に「了別す」と名く。此の三句は位と及び境智とを顯はす。

論曰　正に眞義の一分に入る。

釋曰　此の智に由るが故に菩薩は眞義の一分に入る。謂く無相の性なり。未だ無生の性と及び無性の性とに入らず。

論曰　通行の三摩提、是れ非安立諦の忍に隨ふ依止なり。

釋曰　體は無塵智なるを「通」と名く。此の定は無塵智を以て「行」と爲す。即ち無塵智を行ずる依止と爲るが故に「通行」と名く。三無性の所顯なり。入法二空を「非安立諦」と名く。何を以ての故に、此の諦は一切法に通じて、差別有ること無きが故に非安立と名け、無倒にして變異無きが故に「諦忍」と名け、能く此の義に符從するが故に「隨」と名く。亦福德智慧の二行を以て忍の體と爲す。菩薩は已に外塵無き義を決了して、能取所取無き義の中に於て、心に信樂を生ずるが故に、

す。云何が應に此の法を見るべきや。

論曰　四種の尋思に由り、下品の無塵觀の忍に於て、

釋曰　無塵の義を樂觀ずるが故に名けて「忍」と爲す。此の忍は未だ三相を離れず、謂ゆる善く成就する因緣と惑汚と淸淨とを觀ず。意に隨つて修習せざるが故は是れ下品なり。

論曰　光得三摩提あり。

釋曰　無塵の智を「光」と名く。此の定は無塵智を以て所得と爲し、此の定は無塵智の依止と爲る。故に「光得」と名く。定は即ち奢摩他にして、智は即ち毘鉢舍那なり。若し[二]五分五智を具すれば此の定を三摩提と名く。

論曰　是れ煖行通達分の善根の依止なり。

釋曰　福德智慧の二行を煖行の體と爲す。即ち是れ三十七品なり。此の行は是れ能く惑薪を燒く道火の前相なるが故に「煖」と名く。此の煖行は已に地前の四位を過ぐれば、決定して眞如智を了別するを「通達」と名く。此の方便道は能く通達智を助成するが故に「分」と名け。能く究竟位を資生するが故に「善根」と名く。此の定は能く通達分の增上緣と爲るが故に「依止」と名く。又三十七品の中には、定を立てゝ所依止と爲し、餘の三十六を能依止と爲す。三十六の中に就て、般若は是れ通達にして、餘の三十五を「分」と爲す。三十六を通じて「善根」と名く。又四善根は即ち是れ四分なり。

論曰　最上品の無塵觀の忍に於て光增三摩提あり。是れ頂行通達分の善根の依止なり。

釋曰　已に三相を離るゝが故に、是れ「最上品なり」。無塵觀の忍は前に釋するが如し。無塵智を「光」と名く。此の智は方便の中に於て勝進するが故に「增」と名く。此の定は無塵の勝進智の依止と爲るが故に「光增」と名く。亦福德智慧の二行を以て、頂行の體と爲す。頂に三義有り、一には

【二】五分五智とは聖五支三摩地と五聖智三摩地を指すか。

釋曰 菩薩は無分別後智を以て、此の因果の相を觀じて、自然に顚倒無し。外塵有りと執せず、內根の唯識のみ是れ實有の法なり。何を以ての故に、菩薩は已に此等の法は幻化等の譬に似ると了別するが故に、見聞覺知の相に依つて諸法を判して實有と爲すべからず。何を以ての故に、此の心は是れ清淨の本より流るゝ所なるが故なり。

論曰 此の義に由るが故に、菩薩は幻師の一切の幻事に於て自ら無倒を了ずるが如く、

釋曰 幻師は幻事に於て見聞等の四識を生ずるも、此の識に依りて幻事を了別せず、本解する所の如く幻事を了別するが故に、幻事の中に於て無倒なるが如く、菩薩も亦爾り、本智に依りて了別するに由るが故に、一切の相及び因果の中に於て、復顚倒無し。是を菩薩の自利と名く。

論曰 一切相の因緣及び果の中に於て、若し正しく說く時には常に偏倒無し。

釋曰 若し菩薩は本智に依りて利他の事を作し、謂ゆる正しく三乘の三藏及び五明等の義を說けば、常に偏倒し相違すること無し。不實不定なるを「偏」と名け、理に符ひ眞實にして動かすべからざるを「偏無し」と爲す。處と時と相ひ濫するを「倒」と名け、處に隨ひ時に隨ひ相に隨ふを「倒無し」と名く。是を菩薩の利他と名く。

二智依止章　第九

論曰 是の時、正しく唯識觀に入る位の中に、四種の三摩提有り。是れ四種の通達分の善根の依止なり。菩薩は云何んが應に見るべきや。

釋曰 此の問は觀に入るに三義有ることを顯はさんと欲す。一には眞境、二には奢摩他、三には毘鉢舍那なり。應に入るべき處を明かさんが爲の故に「正しく唯識觀に入る位の中、」と言ふ。唯識の處は卽ち三無性の眞如なり。此の眞如は散動智の境に非らざるが故に、「四種の三摩提」を說いて依止と爲す。是の境と智とは分別すべからざるが故に、四種の通達分の善根を說いて能證と爲

を得んが爲なり。

論曰　一切如來の正法を得んが爲に、

釋曰　即ち是の能說の障道と能說の盡苦の道との二無畏は、他を利益せんが爲めと、正法を安立せんが爲めとなり。

論曰　一切智々を得んが爲に、

釋曰　即ち是れ一切智の無畏なり。[九]此の三句は即ち三德を顯はす。初は斷德を明かし、次は恩德を明かし、後は智德を明かす。

論曰　故に唯識觀に入る。

釋曰　前の三用を成就せんが爲の故に唯識觀に入る。若し無分別智に由りて障を滅し、因を立て、果を得るが故に唯識觀に入れば、觀に入りて後の無分別後智は其の用云何ん。若し無分別智に依らば、正しく諸法の因果を說かんに功能有ること無けん。此の智は無分別なるを以ての故なり。無分別後智に由りて、諸法の相の中に於て菩薩は自ら顚倒無く、自ら證する所の如く、亦能く他の爲に諸法の因果を說く。此の兩用を得んが爲の故に、菩薩は無分別後智を修す。

論曰　無分別智の後に得る所の智とは、本識と及び所生の一切の識々、及び相識との相の中に於て

釋曰　此の文は、菩薩は此の智に由りて因果の中に於て無倒なることを顯はす。「本識」は是れ依他性にして、即ち是れ正因なり。「所生の一切の識々」とは、即ち是れ本識の所生の果にして、七識を謂ふ。即ち是れ分別性なり。「相識」とは、即ち是れ器世界及び六塵にして、亦は是れ本識の果、亦は是れ分別性なり。此の文は具さに[一〇]三相を明かす。謂ゆる內相と外相と乃び內外との相なるが故に「相の中」と言ふ。菩薩は此の如き因果の中に於て復顚倒無し。

論曰　幻化等の譬に似ると觀ずるに由りて、自性顚倒無し。

【九】此の三句は論本の前三句にして次第の如く三德に配す。

【一〇】三相とは內外等の三相なり、已に前に詳說せり。

釋曰　此れ如量智は一切の境に似て起ることを顯はす。一切の境識を以て相と爲し、一切の所知に於て無礙なり。此の智に由りて唯識の後觀に入ることを得。此れ即ち後觀の方便に入るなり。前後の方便に入り難きに由るが故に、唯識觀は得難し(といふ)。

論曰　[八]共本の阿梨耶識の中の一切の有因なる諸法の種子を除滅せんが爲に。

釋曰　此の下は正しく二智の用を明かす。二智の用に三種有り、一には滅障、二には立因、三には佛法の用を得となり。此の文は即ち第一の滅障の用を明かす。現在の惑の滅せざるを滅せしむるが故に、「除く」と言ひ、未來の惑の未だ生ぜざるを遮して生ぜざらしむるが故に「滅」と稱す。唯識の道は通じて不淨品の種子の因果を滅す。因に三種有り、一には因緣、二には增上緣、三には緣々なり。果は即ち是れ不淨品の種子なり。既に通じて種子の因果を滅するが故に「共」と稱す。阿陀那識と及び六識とを、不淨品の因緣と爲すが故に、「本」と名く、阿梨耶識は、是れ不淨品の增上緣なり。緣々は即ち是れ六塵なり。六塵は種子の緣々と爲るが故なり。一切法の種子は即ち是れ一切の不淨品の法の種子なり。種子は即ち是れ果なり。此の果には緣々等の三因有り。阿梨耶識は既に是の種子の增上緣なるが故に、種子は阿梨耶識の中に在り。

論曰　能く法身に觸るゝ諸法の種子を生長せんが爲に、

釋曰　即ち第二の立因の用を明かす。「諸法」とは即ち是れ六度なり。菩薩の行ずる所の六波羅蜜の熏習は、能く無上菩提の因と爲るが故に「種子」と名く。此の種子は若くは生じ若くは長じて、能く如來の法身を證得するが故に名けて「觸るゝ」と爲し、「生じ長ず」と爲す。此の如き福慧の二因の故に、唯識觀に入るが故に、唯識觀は能く因を立てゝ、無上菩提を得しむるなり。

論曰　依を轉ぜんが爲に。

釋曰　此の下を第三佛法を得る用を明かす。如來の無垢清淨の法身、即ち漏盡きて無畏なること

【八】此の論本の文は隋譯に「有因の相の阿梨耶識の一切の因相種子を滅せんが故」といふ、唐譯參照。

釋曰　此の問は二義を顯はす。一には唯識觀に入り難きことを顯はし、二には若し入ることを得れば無窮の利益の用有ることを顯はす。

論曰　[七]極通の法を緣じて境と爲すに由り、

釋曰　先に前後兩觀の方便に入ることを明かしで、第一問の唯識觀に入る道を答ふ。此の智に四德有り、一には無倒、二には淸淨、三には寂靜、四には微細なり。此れ卽ち第一の無倒を明かす。通法に四品有り、謂く下と、中と、上と、上々となり。下品とは一切の有流の苦を謂ひ、中品とは一切の有爲の無常を謂ひ、上品とは一切法の無我を謂ひ、上々品とは三無性を謂ふ。三無性を緣じて境と爲す、是の故に無倒なり。

論曰　出世の、

釋曰　卽ち第二の淸淨なり。是の出世の無流智に由るが故に淸淨なり。

論曰　奢摩他と、

釋曰　卽ち第三に寂靜を明かす。此の智は奢摩他に依りて起るに由り、散動地を離る、是れ奢摩他の智なるが故に寂靜と名く。

論曰　毘鉢舍那との智(に由るが)故に、

釋曰　卽ち第四の微細なる、是れ菩薩の修慧にして、聞思の慧及び二乘の修慧に非らさることを顯はす。此れ卽ち初めて唯識觀の方便に入るなり。

論曰　無分別智の後に得る所の、

釋曰　此の智は無倒智より生ずるが故に、無倒なることを顯はさんと欲す。無倒なるが故に是れ如理の智なり。

論曰　種々の相識を相と爲す智に由るが故に、

【七】 極通の法とは至極の通法の義にして三無性を指す。

す。復次に菩薩は已に自他の平等を得るに由り、他の苦を滅することを求むるは自の苦を滅することを求むるが如くなり。

論曰　一切の菩薩の心の平等を得。

釋曰　即ち第七に勝れたる意用の果を得ることを明かす。菩薩は若し爲作する所有らんと欲すれば、必ず先に思量するが故に名けて「意」と爲し、後に思量する所の如く而も作すが故に名けて「用」と爲す。復次に三事を得んことを求むるを意と爲す、謂ゆる未だ下種せざるを下種せしめ、未だ成熟せざるを成熟せしめ、未だ解脱せざるを解脱せしむるなり。四攝を行ずるを用と爲す。前の二攝に由りて發心せしめ、利行に由りて成熟せしめ、同利に由りて解脱せしむ。

論曰　一切の諸佛如來の心の平等を得。

釋曰　即ち第八に、勝れたる至得の果を得ることを明かす。菩薩は見位の中に在りて、已に如來の法身を得たり。此の法身を得たるに由り、是の故に諸佛の心と平等なり。復次に自身に於て法界の無差別なるを見るが故に、三世の諸佛の法界は自の法界と異ることを見ざるが故に、諸佛の心の平等を得。

論曰　此の觀を菩薩の見道と名く。

釋曰　菩薩の見に三種有り、一には除の方便の見、二には應に除くべき見、三には除滅の見なり。除の方便の見とは、謂く四種の如實智なり。應に除くべき見とは、謂く分別と依他との二性なり。除滅の見とは、謂く三無性なり。此の三見は皆唯識觀を因として成ずることを得るが故に、此の觀を名けて見道と爲す。[六] 相生は次第を明かせり。

二智用章　第八

論曰　復次に何の故に菩薩は唯識觀に入るや。

【六】三見の順次に相生することは其の次第を明かすとの意。

論曰　善く法界に通達し、

釋曰　即ち[一]第四に、勝れたる通達の果を得ることを明かす。勝れたる通達に三義有り、一には[二]四依を得るに由るが故に、菩薩は法に依りて人に依らず等なり[三]。此に由りて如來の說く所の一切の三乘の三藏に通達す。菩薩は理の如く文を釋す、是の故に文に由りて能く自他をして眞如法界を解せしむ。二には如來の安立する十地なり。法界に約すれば十重有り、初の通達より乃至上地まで皆善く通達す。三には[四]四種の方便に約するが故に、善く法界に通達す、謂く能く生死の苦に通達して、而も能く恒に此の[五]二の方便に入り、能く涅槃に通達して、而も速かに是の二の方便を求めず。能く苦に通ずるは凡夫に異り、苦に入りて而も厭ひ怖れざるは二乘に異り、能く涅槃の樂に通達するは凡夫に異り、而も速かに涅槃を求めざるは二乘に異る。

論曰　十方の諸佛如來の家に生ずることを得。

釋曰　即ち第五に、勝れたる定位の果を得ることを明かす。此の勝相に入るに由りて、是の人は決定して應に無明の𣪘を破し、卵の中に於て爛壞し捨命せざるべし。復次に是の人は此の勝相に入るに由りて、決定して應に十方諸佛の種性を續いて斷絕せざらしむべし。以て自ら應に成佛すべく、又他をして成佛せしむるを以ての故なり。復次に佛子に五義有り、一には無上乘を願樂するを種子と爲し、二には般若を以て母と爲し、三には定を以て胎と爲し、四には大悲を以て乳母と爲し、五には諸佛を以て父と爲す。此等の義に由るが故に、佛家に生ずることを得と說く。

論曰　一切の衆生に心の平等を得。

釋曰　即ち第六に、勝れたる恩養の果を得ることを明かす。恩養に四種有り、一には廣大、二には最極、三には無邊、四には無倒なり。此の四義に由るが故に、衆生に於て平等なる恩養の心を得。復次に菩薩は自身に於て般涅槃の心を起すが如く、一切の衆生に於て平等に般涅槃の心を起

【一】八種の果の中の第四なり。
【二】四依とは人と法と行の三種の四依の中に今は法の四依なり、謂ゆる一に法に依りて人に依らず、二に了義經に依りて不了義經に依らず、三に義に依りて語に依らず、四に智に依りて識に依らずの四類なり。
【三】人に依らず等とは他の三の不依を等す。
【四】四種の方便とは四尋思と四如實智となり。
【五】二種とは尋思と如實の二方便をいふ。

釋應知入勝相第三の二

入資糧果章　第七

釋曰　應知の勝相に入るに由りて、菩薩は何の果を得るや。菩薩の資糧の果に八種有り。

論曰　此の相に入るに由りて初歡喜地に入ることを得。

釋曰　此の文は卽ち三果を顯はす、一には勝時を得、二には勝方便を得、三には勝果を得るなり。「初」は卽ち第一の勝時の果を得ることを明かす。始めて發心してより修行して此の時に至らんことを求め、今始めて之を得るが故に、名けて「初」と爲す。求むる所の時とは是れ眞觀に入るの時なり。此れ眞如の果に住するを得ることを明かす。又凡夫二乘の位を捨てゝ、始めて菩薩の眞位を得るが故に「勝時」と名く。此の時は是れ轉依の時なるが故に、此の初時を名けて勝時と爲す、卽ち是れ轉依の果を明かす。「歡喜」とは、卽ち第二に勝方便の果を得ることを明かす。自愛を捨つるを「歡」と名け、他愛を生ずるを「喜」と名く。若し自身を惜まず、他を憎惡せず、衆行の中に於て難行無き者は、此の心は方便の中に於て最も勝れたり。衆行の根本と爲るを以ての故に。故に初地は此によりて名を立つ。又未だ曾て大用と及び出世心とを得ずして、得る時には、大欣慶有るが故に、歡喜地と名く、卽ち第三の勝果を得ることを明かす。住攝は是れ地の義なり。出離眞如は是れ地の體なり。此の體に住するが故に勝果と名け、地の因を攝と名く。謂く福德智慧の二種の資糧なり。又所攝を攝と名く、謂く利益する所の衆生なり。又果を攝と名く、謂く無上菩提なり、又障を攝と名く、謂く三煩惱なり。此の如き等の義を說いて名けて地と爲す。是れ地の所攝なるを以ての故なり。

（論曰[二七] 十名は境を差別す。）

釋曰 此の十種の差別の名は、悉く是れ菩薩の境界なるも、菩薩の住する所は唯第十の「一切法に通ずる」名の中にのみ在り。復次に略說すれば、名に十種有り。是れ菩薩の境界なり。法の名とは、謂く眼等なり。人の名とは、謂く我、衆生等なり。法の名とは、十二部の正教なり。義の名とは、謂く十二部の正教の義なり。性の名とは、謂く阿字を初と爲し、訶を最後と爲す、音字合して三十七なり。略の名とは、謂く有爲、無爲なり。廣の名とは、謂く色受等及び空等なり。不淨の名とは、謂く凡夫等なり。淨の名とは、謂く須陀洹等なり。究竟の名とは、謂く極通の境を緣ずる出世の智と及び出世の後智の緣ずる所の一切法の眞如の境なり。

論曰 此の如くして、菩薩は唯識觀に入るに由るが故に、應知の勝相に入ることを得。

釋曰、「此の如くして」とは、方便、次第、時節、捨得等を謂ふ。菩薩は此の如き義に由りて唯識觀に入ることを得。或は唯識の方便觀に入り、或は唯識の眞觀に入る。唯識觀は能く三無性に通達するに由るが故に、應知の勝相に入ることを得るなり。

【二七】前の偈の最後の一句のみを再出して十名を釋す。

が故に、無分別智を生ず。又無分別智は二種の平等に依る。謂く智と及び境と、能緣と所緣とは悉く平等なるが故に、無分別智を生ず。又無分別智は最極の平等に依り、能緣所緣に住せざるが故に無分別智生ず。

論曰　此の義に由るが故に、菩薩は眞實性に入ることを得。

釋曰　前來次第に釋するが如き諸の方便の義と及び後に應に說くべき所の義との故に、「此の義に由るが故に」と言ふ。初地に向ふ人を「菩薩」と名く。此の諸義に由りて眞實性を證見することを得。此の位は言說すべからず。何を以ての故に、自ら證する所なるを以ての故に。證する時には覺觀思惟の分別を離るゝが故なり。前に、菩薩は唯だ無分別の一切の義と名との中に住すと說けり。此の名に幾種有りや。復次に何の法を以て名と爲すや。

論曰　此の中に偈を說く、

釋曰　此の問に答へんが爲の故に此の偈を說く。

論曰

　法と人と及び法と義と　性と略と及び廣との名　不淨と淨と究竟との　十名は境を差別す。

釋曰　名に十種有り、是れ菩薩の境界なり。何等をか十と爲す。一には法の名、謂く色受等、眼耳等なり。二には人の名、謂く信行、法行等なり。三には法の名、謂く修多羅、祇夜等なり。四には義の名、謂く十二部經の顯はす所の諸の義の名なり。五には性の名、謂く義無き文字なり。六には略の名、謂く衆生等の通名なり。七には廣の名、謂く衆生には各々別名有り。八には不淨の名、謂く凡夫等なり。九には淨の名、謂く聖人等なり。十には究竟の名、謂く一切法に通ずる眞如實際等なり。

釋曰　無分別智は是れ名なり。此の名は其の相云何ん。謂く一切の義を分別せざるなり。義は卽ち是れ境なり。此の智は一切の境に於て復能取所取の二種の分別無し。卽ち此の智を立つるを菩薩と爲す。復次に名とは謂く至究竟の名は一切の法に通じ、一切の法に於て差別有ること無し。此の名は卽ち是れ法界なり。此の法界は一切の法に通ずるを以て、一切の義を分別せざることを相と爲す。或は說いて無分別の境と名く。菩薩は唯此の法の中に於て住す。[二五]此の兩つの復次は第一問に答ふ。

論曰　無分別智に由りて眞如法界を證得し住することを得。

釋曰　能取、所取及び人法より、乃至は相と生と性との差別を分別せず。此の如きの無分別智を得るが故に、眞如法界に證住することを得。地々に皆三分有り、謂く入と住と出となり。「證得し住することを得」とは、卽ち前の二分なり。未だ得ざるを得しむるを證と爲し、已に得たるを失はざらしむるを住と爲す。又初得を入と名け、得已り相續するを住と名く。此れ卽ち[二六]第二問に答ふ。

論曰　是の時、菩薩は平等平等にして、

釋曰　是れ眞觀に入る時には、菩薩の智は十種の平等に依る。十地經に說けるが如し。又二種の平等に依る、謂く能緣所緣なり。能緣は卽ち無分別智なり。智無分別なるを以ての故に平等と稱す。所緣は卽ち眞如の境なり。境も亦無分別なるが故に平等と稱す。又此の境と智とは能取と所取との義の中に住せず。譬へば虛空の如し。故に「平等平等」と說く。平等の中に於て最上にして無等なるを以ての故に重名を作る。

論曰　能緣と所緣との無分別智生ず。

釋曰　無分別智の生ずるに、何の相貌有りや。十種の平等に依りて、能緣と所緣と悉く平等なる

【二五】兩つの復次とあるも此の釋文中には一の復次釋有るのみ、思ふに「復次」に依つて隔てられたる前後の二釋を指すものなるべし、第一問とは前段の釋中の第一問をいふ。

【二六】第二問に答ふとは何の境界を緣ずるやに答ふるなり。

別」と言ふ。先に聞く所の法の數習して生ずる所なるが故に「熏習す」と言ふ。後時に憶持する所の境界は、猶是れ先時の境界より流るゝ所なるが故に「種類」と名く。

論曰 菩薩は已に塵想を了別し伏滅すれば、

釋曰 菩薩は四尋思に依りて、已に六塵を了別し、四如實智に依りて已に塵想を伏滅せり。

論曰 一切の義に似て顯現することも、復生ずる緣無きが故に生ずることを得ず。

釋曰 昔の意言分別の顯現する、聞思する所の一切の義に似たるものも、乃至は唯識想のみ有るに似たるものも皆生ずることを得ず。何を以ての故に、生ずる緣を得ること無きを以ての故なり。生緣に二種有り、謂く分別性と及び依他性となり。分別性已に滅すれば、依他性又生ずることをず。既に二境無きが故に、一切の義より乃し、似の唯識想に至るまで皆生ずることを得ず。復次に是の時には一塵の品類として、菩薩の了別する所に非らざるもの無し。猶此の塵に似て意言分別を起すことを得んも、意言分別の生ずる緣は皆盡きたり。既に生緣無きが故に、此の時の中には一切の意言分別は悉く生ずることを得ず。

論曰 是の故に似の唯識の意言分別も亦生ずることを得ず。

釋曰 此の言は何の義を顯はさんと欲るや。此の唯識想を若し心の分別と爲さば、此の想は則ち境界を成ず。此の境界の執は一向に伏滅せるに由るが故に、乃至、唯識の想も尙ほ起ることを得ず。何に況や餘の意言分別にして而も當に生ずることを得べけんや。

論曰 此の義に由るが故に。

釋曰 菩薩は依他性に依りて分別性を除くに由り、眞實性に依りて依他性を除く。若し悉く除かるれば、菩薩は何の處に住在し、菩薩の心は何の境界を緣ずるや。

論曰 菩薩は唯無分別なる一切の義と名との中に住す。

論曰　六相の義を伏滅する中に於て、是の唯識の智も亦應に伏滅すべし、譬へば藤智の如し。

釋曰　分別性に入る位の中に於て、菩薩は已に無相の性を證せり。此の無相の性は能く無生の性智を引くが故に、唯識の智も應に伏滅すべし。[二四]四微を了別せる時には藤智も生ぜざるが如し。

論曰　眞如智に依るに由るが故なり。

釋曰　無相の性智に依りて無生の性に入ることを得。此の言と及び譬とは、依他性と及び眞實性とに入ることを顯はす。

論曰　此の如く菩薩は、似義の顯現する意言分別の相に入るに由るが故に、分別性に入ることを得、唯識の義に入るに由るが故に依他性に入ることを得。云何んが眞實性に入ることを得るや。

釋曰　若し菩薩は已に一切の法は、但だ是れ意言の分別のみと、了別すれば、此を離れて外に實に所有無きを以て、意言分別に依るに由りて、分別の無相性を了別することを得。若し菩薩は外塵を見ず、但だ意言の分別のみを見れば、即ち依他性を了別す。云何が此の法を了別するや。若し因緣を離るれば自ら根塵を生ずることを得ず。因緣と爲る根塵既に成ぜず。此の法は因緣無くして云何んが生ずることを得ん。故に菩薩は能く依他性と及び無生の性とを了別す。即ち是れ眞實性を了別するなり。

論曰　若し唯識の想を捨て已れば、

釋曰　若し菩薩は初の眞觀に依りて、依他性に入り、第二の眞觀に由りて依他性を除けば、則ち唯識の想をも捨つ。

論曰　是の時の意言の分別は、先に聞く所の法の熏習する種類なり。

釋曰　是れ眞觀に入る時なるが故に、「是の時」と言ふ。初めての修學より乃し眞觀に入るに至る前には、意識の覺觀思惟は昔聞く所の正教と及び正教所顯の義とを憶持するが故に、「意言の分

【二四】四微とは前に云ふ四塵のこと。

釋曰　未だ聞思の慧を得ざる時には、凡夫位の中に於て人法有りと執せり。此の執には本より境有ること無し。聞思の慧を得て後は、依他性を了別すれば、此の執は即ち滅し唯依他性の智のみ在り。

論曰　此の藤智は微細の分析に由れば、虛にして實の境無し。

釋曰　若し人、四塵の相を緣じて此の藤を分析すれば、但だ四相を見るのみにして、別の藤を見ざるが故に、藤智は是れ虛なり。虛なるが故に是れ亂にして實の境有ること無きに、妄りに境の執を起せり。

論曰　何を以ての故に、但だ是れ色香味觸の相のみなるが故なり。

釋曰　何を以ての故に、藤は實相に非ずや。四塵を離れて外に別に、藤有ること無きを以ての故なり。

論曰　若し心に此の境を緣ずれば、藤智も亦應に滅すべし。

釋曰　此れ藤智は能く麁の亂執を遣ると雖も、而も自ら是れ細の亂執なるが故に、應に除くべきことを明かす。方便の中に在りては、依他性を以て、分別性の麁の亂執を遣ると雖も、依他性有ることを見るは、自ら是れ細の亂執たるを免れず。後に眞觀に入れば、即ち此の執を遣るが故に應に除くべし。

論曰　若し此の如く見已れば、六相の顯現する、似の名及義の意言分別を伏滅して。

釋曰　一切の法は但だ六相有るのみ。此の六は、但だ是れ意言の分別なり。意言の分別を離るれば、此の六相は實に所有無し。此の如きの智に由りて、觀行の人は分別性に入ることを得。

論曰　塵智生せず譬へば蛇智の如し。

釋曰　分別性に入る時は塵智生ずることを得ず、藤を了別する時には蛇智の生ぜざるが如し。此の言と及び譬とは分別性に入ることを顯はす。

釋曰　此れ卽ち此の相と見相とに於て能取所取に非ず。何を以ての故に、塵に似て顯現するが故に能取に非ず、識を離れて別塵無きが故に所取に非ず。見も亦能取所取に非ず、顯現して識に似るが故に所取に非ず、所取の塵既に無ければ、識も亦是れ無なるが故に能取に非ず。既に能取所取無きが故に、義有るに非ず。能取所取に體有るを見ざるに由りて、相見觀に入ると名く。已に相見觀に入ることを明かせり。云何んが種々相貌の觀に入るや。

論曰　一時に顯現して種々の相貌に似及び生ずるが故なり。

釋曰[二〇]　若し菩薩は依他性顯現して種々の相貌に似るも實には相有ること無しと見（及び）依他性顯現して生ずるに似るも、實には生有ること無しと見れば、一時の中に於て能く種々の相貌の無相と無生とを觀ずるを、種々相貌の觀と名く。三性の觀に入ることを顯はさんが爲の故に藤の譬を說く。

論曰[二一]　譬へば暗中に藤は顯現して蛇に似るが如し。

釋曰　人、藤の相を見て執して是れ蛇なりと言ふ。此の下は第二問に答ふ。衆生本より以來、大乘の十二部經に說く三無性の義を聞かざれば、未だ聞慧を得ずして[二二]三煩惱の爲に覆はる。之を譬へば闇の如し。[二三]人有りとは二乘凡夫に譬へ、藤相は依他性に譬へ、蛇は分別性に譬ふ。二乘凡夫は依他性を了ぜずして、分別性に人法有りと執すればなり。

論曰　猶藤の中に於ける、蛇のごとし、卽ち是れ虛にして實に有ならさるが故に、

釋曰　依他性の中に於て、分別性は是れ虛にして、實に人法無きが故なり。

論曰　若し人已に此の藤の義を了別すれば、

釋曰　菩薩は已に聞思の二慧を得て、唯識の方便觀に入れるに譬ふ。

論曰　先時の蛇は亂智にして境を緣せずして起れば、卽便ち謝滅して唯藤の智のみ在り。

【二〇】　此の釋は隋譯に一詞く名句味身の種々相の義に似て生ずるが故に、彼も亦名の所目の義に似て種々の相生ずるが故に」といふ。

【二一】　以上所入の法を明かして第一問に答へ、以下は譬を擧げて第二問に答ふ、異譯諸本には蛇繩の譬なるも本譯のみは藤蛇の譬なり。

【二二】　三煩惱とは已に明かせる皮肉心の三煩惱をいふ。

【二三】　「人有り」とは論本に無きも執人を指す。

論曰　但だ唯量に入り。

釋曰　此の下、先づ第一問に答へて、但だ唯識の量に入る（といふ）、此の唯識の量は幾種の法を攝するや。

論曰　相見の二法と、

釋曰　此の唯識は二法を出でず。一には相識、二には見識なり。復次に塵に似て顯現するを「相」と名く、謂く所緣の境なり。識に似て顯現するを「見」と名く、謂く能緣の識なり。此の二法は、一は是れ因、一は是れ果なり。又一は是れ所依、一は是れ能依なり。

論曰　種々の相貌と（に入る）、

釋曰　〔一八〕此の二法は無始の生死より來（このかた）、數々習するに由るが故に速疾なり。是の故に一時の中に於て種々の相貌有りて起る。此の如き〔一九〕の三法には、唯識觀に於て觀行の人入ることを得。

論曰　名と義と自性、差別とは假說の自性差別の義なり、六種の相に義無きが故に（とに入る）、

釋曰　名と義とに各三有りて六と爲る。名の三とは、一には名、二には自性、三には差別なり。義の三も亦爾なり。此の六種の相は並びに義無し。何を以ての故に、名は本より自の義なり、義に所有無きが故に、名に義無し。此の名は自ら義有りと爲すや、當に義無かるべしと爲すや。若し義有らば、義に所有無きが故に名に義無し。若し名無ければ義も亦無し。所有無きが故なり。名に義無ければ義にも亦義無し。識量を離れて外に別に義有ること無きが故に、義にも亦義無し。名既に義無ければ、名の自性及び名の差別にも亦義有ること無し。義既に義ければ、義の自性及び義の差別にも亦義有ること無し。此の六相に義無きことを明かすは、唯量觀に入ることを顯はす。唯量觀に入ること〻明かし已る。云何んが相見觀に入るや。

論曰　此の能取と所取とは非有を義と爲すに由るが故に、

〔一八〕此の句は隋譯には「唯是れ一の識にして種々の相生ず、速疾に非らざるが故に次第にして生ず」といふ。今の釋と其の意甚だ異る、更に唐譯を參照せよ。

〔一九〕三法とは論本の前三項を指す。

論曰　是の觀行の人は名及び義を見ず、自性差別の假說を見ず、實相に由れば自性差別の義有ることを得ず。

釋曰　名と義とは是れ本なり。名義に各自性及び差別の假說有り。卽ち是を「自性差別の假說を見ず」と名く。卽ち是れ自性差別の名を見ざるなり。此の四法を遣り、永く盡くして餘すこと無ければ、心は意言の分別を緣して境と爲すに由り、決定して堅住す。是の故に復餘境を分別せず。四種の尋思及び四種の如實智に由りて、已に此の四法は決定して所有無しと了別するが故に、心は此の相を緣ぜず。此の相を緣ぜざるが故に此の四種の分別を得ず。若し二種の方便に由りて外塵と分別とを遣れば、復何の別の方便と及び別の境界と有りて、眞觀に入ることを得るや。

論曰　已に四種の尋思及び四種の如實智に由りて、

釋曰　先に前問に答へて別の方便無しといふ。四種の尋思及び四種の如實智は、四種の三摩提の所攝なるを以て、入方便と爲すに由る。

論曰　意言の分別に於て似の名及び義を顯現して、

釋曰　次に後問に答へて、別の境界無しといふ。凡夫は本より來、意言分別に二種有り、一には名に似、二には義に似る。名と義とは一切法を攝して皆盡す。此の名と義とは但だ是れ意言の分別の作す所、此を離れては別に餘法無し。

論曰　唯識觀に入ることを得。

釋曰　此の方便に依り、此の境界を緣じて、唯識の眞觀に入ることを得。

論曰　[一七]唯識觀の中に於て何の法に入るや、如何にして法に入ることを得るや。

釋曰　此の下には八處の中の第八處を明かす。此の中に兩問有り、一には所入の法を問ひ、二には所入の譬を問ふ。

【一七】以下第八處を明かす。

釋曰　願樂位より乃し究竟位に至るまでを「觀の中」と名く。意言の分別を緣じて境と爲し。此を離れては別の外境無し。何を以ての故に、此の意言の分別は文字言說と及び義とに似て顯現するが故なり。

論曰　此の中に、是の字言の相は但だ意言の分別のみと、此の如く通達することを得。

釋曰　唯意言の分別有るのみ、別に名有ること無し。菩薩は能く名に所有無しと通達すれば、則ち外塵の邪執を離る。

論曰　此の義は名言に依る、唯意言の分別のみと、亦此の如く通達す。

釋曰　前に已に名を遣る。此の下は名に依つて以て義を遣る。「義」とは卽ち六識の緣ずる所の境なり。名を離れて別に此の境無し。是の故に名に依つて以て義を遣る。名言は旣に唯意言の分別のみなるが故に、義も亦別の體無しと。菩薩は能く通達すれば、義も所有無し、亦外塵の邪執を離る。

論曰　此の名と義の自性と差別とは、唯假說を量と爲すにも亦此の如く通達す。

釋曰　前に已に名と義とを遣りて、名義旣に無ければ、名と義との自性及び差別は云何が立つべき。若し假說を離るれば別に名義の自性及び名義の差別無し。此の二法は得べからずと證見するに由るが故に、名けて「通達」と爲す。

論曰　[一六] 次に此の位の中に於て、但だ唯意言の分別のみなるを證得す。

釋曰　是の觀行の人は、已に外塵を遣る。此の觀の中に於ては復何の境を緣ずるや。一切の境は唯是れ意言の分別のみと觀ずるが故に、此の觀行の人は意言の分別を緣じて境と爲し。未だ此の境を遣ること能はず。若し唯識の境を遣ること能はざれば、此の位の中に在りては已に何の境を遣りて、皆盡して餘すこと無きや。此の位には但だ四境を見ざるのみ。何をか四と爲すや。

【一六】次に意言の分別を證得して分別を遣ることを明かす。

て顯現す。是れ自性の尋思の引く所の第三の如實智と名け。甚深の義を以て境界と爲す。何物か差別の尋思の引く所の如實智なるや。若し菩薩は差別の言說の中に於て已に唯言說有るのみと尋思すれば、色等の類の中に於て、菩薩は差別の言說には二義有ること無しと見る。此の類は有にあらず非有に非ず。言の體は成就せざる可きに由るが故なり、有にあらず、非有にあらず、言の體は成就すべからざるに由るが故なり。此の如く色に非らず、眞諦に由るが故に。非色に非らず、俗諦に由るが故に。中に於て色言說有るが故に、有、非有と、及び色、非色との如し。此の如く有見無見等の差別の言說の別類は、此の道理に由りて應に知るべし、皆爾なり。若し菩薩は如實に差別の言說に二義有ること無しと知れば、是を差別の尋思の引く所の第四の如實智と名く。先に已に名及び義を說き、後に自性及び差別を說けり。此の四の中には、皆言說を假立せり。何の所顯を欲するや。義の得べからざることを顯はさんが爲なり。義は得べからざるに由り、名にも亦自性及び差別無し。是の故に菩薩は此の名を尋思して、唯自性と差別とを假立す。此の如く疑を度り決了する等を說いて尋思と名く。此の尋思に因りて、菩薩は名義の二に所有無しと觀ず、是を如實智と名く。

論曰　若し菩薩は此の如き等の義に已に入り已に解すれば、

釋曰　「已に入る」とは、謂く已に四種の尋思を得るなり、「已に解す」とは、謂く已に四種の如實智を得るなり。

論曰[三五]　則ち加行を修して唯識觀に入ることを爲す。

釋曰　地前の六度及び四種の通達分の善根を「加行」と名く。願樂位より乃し究竟位に至るまで通じて「唯識觀」と名く。若し唯識觀に入らんと欲して加行を修するに何の境界を緣するや。

論曰　此の觀の中に於て、意言の分別は、字言及び義に似て顯現す。

【三五】次に唯識觀に入ることを明かす、中に亦二段あり、初に四境を觀して外塵を遣る。

ざる有るもの有るべからず。復次に若し有るが執すらく、義異れば名異ると。此の名に由りて義に於て邪執有ること無し。譬へば凡夫人は五陰は但是れ行聚のみと識るが如し。數習に由るが故に、自他の相續に於て我執を起す。義の中に於て邪執無きにあらず。若し義と名と一ならば、此の二事は成ずべからず。此の如き等の義に由り、是の故に、名は義に於て客と爲ることを知る。義の名に於て客と爲ることも亦爾なり。

入資糧章　第六

論曰〔一四〕四種の如實智に由る、謂く名と義と自性と差別との如實智の四種は得べからざるが故に。

釋曰　此れ即ち八處の中の第七處なり。何をか尋思の引く所の如實智と名くるや。若し菩薩は、名に於て已に唯名有るのみと尋思し、後に如實に唯名有るのみと知り、世間に此の義を顯はさんが爲の故に、此の義の中に於て此の名を立つ。言說を想見せんが爲の故なり。若し世間に色等の名を安立せざれば、色類の中に於て、一人として能く此の類を想ふこと有ること無けん。是の色にして若し想ふこと能はざれば則ち增益せず。若し增益せざれば執著を起さず。若し執著せざれば互に相教示すること能はず。若し菩薩にして、此の如く名を知れば、是を名の尋思の引く所の第一の如實智と名く。何者か義の尋思の引く所の如實智なるや。若し菩薩にして、義に於て已に唯義有るのみと尋思すれば、如實に義は一切の言說を離れ、言說すべからざることを知る。謂く色受等の類は、色とも非色とも說くべからず。法とも非法とも說くべからず。有とも非有とも說くべからず。是を義の尋思の引く所の第二の如實智と名く。何者か自性の尋思の引く所の如實智なるや。若し菩薩にして、色の名等の類の、自性の言說の中に於て、已に唯言說有るのみと尋思すれば、自性の言說に由りて此の類は其の自性に非らずして、其の自性の如く顯現すと、菩薩は如實に此の類に通達す。譬へば變化・鏡像・谷響・光影・夢想・幻事等の如く、類に非らざるも類に似

〔一四〕次に第七處を明かす、初に四中に於て、二段あり、初に四如實智を明かす。

惟を「意言の分別」と名く。此の意言の分別に二種有り、謂ゆる相と及び見となり。今は但だ見のみを取りて、相を取らず。何を以ての故に、此の觀は識を緣して塵を遣るが故なり。

論曰　四種の尋思に由る、謂く名と義と自性と差別との假立せる尋思なり。

釋曰　此れ卽ち八處の中の第六處なり。若し菩薩にして、名に於て唯名のみを見、義に於て唯義のみを見、名義の自性の言說に於て唯名義の自性の言說のみを見、名義の差別の言說に於て、唯名義の差別の言說を見るのみならば、此の四處に於て、見度して、疑を決了するを說いて「尋思」と名く。菩薩は名義の相は各異るを見、及び相應は義に依つて相應することを見る。菩薩は自性の言說と及び差別の言說とは、皆義に屬することを見るが故に、名と義と相應す。云何が名と義と互に客と爲ることを知るを得るや。先に名に於て智を生ぜざるが故に、若し名と義と同體ならば、名を聞かざる時にも、義の中に於て名の智は應に成ずべし。又名多きが故に、若し名と義と同體ならば、名の多ければ義も亦應に多かるべし。又名不定なるが故に、若し名と義と同體ならば、名既に不定なれば義も亦應に爾るべし。若し一物にして相違の法を成ぜざれば則ち應に同體なるべし。又此の名は當に有義の中に於て起ると爲すや、無義の中に於て起るべし（と爲すや）。若くは已有、若くは未有の義の中に名起れば則ち一體の義成せず。又若し汝、先に已に義有りて、後に名を以て義を顯はす、譬へば燈の色を照すが如しと說かば、若し爾らば此の人は先に已に義を執して、後方に名を立つるなり。義を執せざる時に名を立つるに非らず。此の執にして卽ち能く義を了ずべければ、何ぞ後更に名を立てゝ義を顯はすを須ふるや。此の執にして若し義を了すること能はざれば、名豈に能く了せんや。復次に此の名に由りて、餘人は此の義に達せざるもの有り、此の名を了ぜざるを以ての故なり。若し名は定んで能く義を了すれば、則ち應に此の如くなるべからず。若し名は定んで能く義を了すれば、此の名に由りて應に人は物を識る有り、物を識ら

釋曰　一切相に二種有り、謂ゆる現住と及び所立となり。散心の緣ずる所の六塵を「現住」と名け、定心の緣ずる所の骨等を「所立」と爲す。復次に一切の相に二種有り、一には外の如く顯現し、二には內の如く顯現す。外の如くとは是れ相なり、內の如くとは是れ思惟なり。

(論曰　智人は分別せず。)

釋曰　菩薩を「智人」と名く。已に唯識の道理を聞思せり。此の聞思に由るが故に智人と名く。作意して分別せず乃至無功用にして分別せず。

(論曰　故に無上覺を得。)

釋曰　分別せざるに由るが故に、無分別智を成就して、初地に入ることを得、卽ち初地以上を「無上覺」と爲す。

論曰　法及び義を緣じて境と爲す。

釋曰　此れ卽ち八處の中の第五處の因、及び方便にして、能く唯識觀に入らしむ。今當に之を說くべし。

論曰　何の因、何の方便にて入ることを得るや。

釋曰　此の間に兩意有り、先に因を問ひ、後に方便を問ふ。

論曰　聞熏習の種類は正思惟の攝する所なるに由り、顯現して法及び義とに似る、有見の意言分別なるが故に。

釋曰　此れ卽ち第一問に答ふ。大乘の十二部經の生ずる所の聞慧の熏習に因る。此の熏習に種類有り。「種類」とは卽ち是れ聞慧なり。此を以て生因と爲す。此の聞慧に依りて、數ゝ正思惟を起し、增長して堅住せしむるが故に「攝す」と名く。持して正思惟を堅住せしむるを長の因と爲す。憶念して攝持する有り、或は正敎に似て顯現し、或は正敎の所詮の義に似て現ず。意識の覺觀思

く三苦を離ると執するが如し。此の如き等の執を名けて「邪執」と爲す。若し此の執を滅せざれば、唯識の四位に入ることを得る能はず。法執を滅除するに由るが故に、能く唯識の四位に入ることを得。復次に所聞及び所思の法の我及び我所の執を遠離す。此の中、但だ法の體及び用を執して有と爲すを說いて「我我所」と名け、人の我我所を執せず。何を以ての故に、此の人我の執は前の十解の中に已に滅除せるが故に、唯法我のみ未だ除かざるが故に。唯識の方便に入ることを顯はす。

論曰　安立し、現前に住する、一切の相と思惟とを悉く分別せず。是の故に能く分別を滅除す。

釋曰　散亂位の中に於ては色等の六塵は自ら[三]證知せらるゝを「現前に住す」と爲し、寂靜位の中に於ては、骨鎖聚等は定心より起れば「安立す」と爲す。此の如き等の一切の相は是れ散亂と寂靜との二心の境界なり。「思惟」とは、謂く覺觀思惟にして、苦・無常・無我等を觀するなり。此の心は內境を緣じ、見境無相はなるに由りて、見識生は無生なり。是の故に能く分別を滅す。無分別を方便と爲すに由るが故に、四位に入ることを得。若し分別を起せば則ち入ることを得ず。復次に現前に住し及び立つる所の「一切の相と思惟とを悉く分別せず」とは、是の人は、分別觀の方便道の中に在るが故に、無分別の意を作すも、若し方便已に熟すれば功用を須ひずして自然に能く無分別なり。

論曰　此の中に偈を說く。

釋曰　此の偈は最後の所滅を顯はす。

論曰

現住し及び安立する　一切の相と思惟とを　智人は分別せず　故に無上覺を得。

（**論曰**　現住し及び安立する、一切の相と思惟とを。）

【三】證知とは現量知のこと。

釋曰　此れ即ち八處の中の第四處なり。此の四種の障を菩薩は皆應に滅除すべきを。今當に之を說くべし。

論曰　聲聞獨覺の思惟を捨離するに由るが故に、邪思惟滅す。

釋曰　「二乘の思惟」とは、謂く數〻苦無常等の生死の過失を觀じ、及び數〻涅槃寂靜の功德を觀ず。此の觀は但だ自身を愛するのみ、衆生を利益する事を捨つ。若し此の觀を離るれば「邪思惟を滅す」と名く。

論曰　大乘の中に於て信心及び決了心を生ず、故に、一切の邪意及び疑を滅す。

釋曰　大乘の甚深廣大なる法の中に於て、眞諦に於て信心を生じ、俗諦に於て決了の心を生ずるが故に、眞如に於て非撥の意を捨て、如來の說く所の大乘十二部經に於て、文の如く義を判ずる意を捨つ。故に一切の邪意及び疑を滅す。復次に大乘の中に於て安立する所の法相に依りて、如來は三性を說く、謂ゆる一切は無性なり、一切の法は不生不滅なり、本來寂靜にし自性涅槃なり、是の如き等は品類有ること無しと、是れ分別性に依りて說く。若し幻事・鹿渴・夢相・光影・鏡像・谷響・水月・變化と說けば、是れ依他性に依りて說く。若し眞如・實際・無相・眞實・法界・空等と說けば、是れ眞實性に依つて說くなり。此の三性を說く中に、不信及び疑ひを生ずることを得ざるが故に、「邪意及び疑を滅す」と說く。

論曰　是の聞思する所の諸法の中、我及び我所の邪執を捨離するが故に、是れ法執を滅除す。

釋曰　聞思の境界を「聞思する所の諸法」と名く。文句の顯はす所の義は、是れ聞慧の境界なり。此の義に依りて如理如量に道理を推尋す。此の道理は是れ思慧の境界なり。中に於て、若し法體は是有なりと執すれば、法我執と名く。譬へば涅槃有り。謂く集諦無生にして寂靜なるを體と爲すと執すが如し。若し法體用有りと執すれば、法我所の執と名く。譬へば涅槃の用は。謂く能

心を以て施等の行を行ず。復諸の外道有り、惡心を以て施等の行を行ず。此の惡と無記とを離れんが爲の故に「善心」と説く。無上菩提を得んことを求むる者を「善心の人」と名く。復次に施等は是れ善なり。若し無善の心を因と爲せば、則ち施等の行を成ぜず。是の故に須らく勝因を以て勝果を生ずべし。勝因とは卽ち信樂なり。信樂に由るが故に施等の諸度を生ず。此の兩句は三義を顯はす、一には增上緣を顯はし、二には同類因を顯はし、三には等流果を顯はす。

(**論曰**　勝人は此の意を得、故に能く施等を修す。)

釋曰　諸の菩薩を「勝人」と名く。此の意とは卽ち是れ菩薩の正意にして、信及び樂を謂ふ。此の意有るに由りて施等を修するに於て能有り。是の故に我れ施等を修するを以て難しと爲さず。(といふ)

(**論曰**　若し善人の死する時には、)

釋曰　善人に二種有り、卽ち凡夫及び二乘なり。凡夫は施を修し、戒を修す。二乘は道品を修す。死する時にも亦二種有り、卽ち死墮と及び移位となり。

(**論曰**　卽ち勝れたる富樂を得。)

釋曰　亦二種有り、凡夫は人天、梵世の富樂を得、二乘は六通等の富樂を得。若し此の因を立つれば必定して果を得。

(**論曰**　滅位圓淨の善に、此の義云何んが無からん。)

釋曰　我れ今十地の福慧と及び無流の道品とを修す。「圓」は諸地に約し、「淨」は道品に約す。金剛心の滅したる後を名けて「滅位」と爲す。此れ卽ち無上菩提の果にして、「勝れたる富樂」と名く。我れ決定して應に此を得べし。云何んが無しと言はん。

論曰　四處の障を滅除するに由るが故に。

釋曰　偈の中に更に前の三義を顯はす。

論曰　人道の中の衆生は　念々に菩提を證す　處所は數量を過ぐ　故に下劣の心無し、　善心の人は信樂にて　能く施等の度を生ず　勝人は此の意を得　故に能く施等を修す、　若し善人の死する時には　即ち勝れたる富樂を得　滅位圓淨の善に　此の義云何んが無からん。

（論曰　人道の中の衆生は。）

釋曰　此れ同類のもの能く無等の果を得るが故に、自身を輕賤すべからざることを顯はす。

（論曰　念々に菩提を證す。）

釋曰　此れ時に定れる無きことを顯はす。因を修すると及び果を得るとは、並びに定れる時無し。是の故に恒に須らく勤修し、時として修すべからざること無かるべし。因を修すること既に爾らば、果を得ることも亦然らん。是の故に應に時に障有りと謂ひて自身を輕賤すべからず。

（論曰　處所は數量を過ぐ。）

釋曰　處所の定れること無きを顯はす。隨處に因を立つることは皆成ずることを得べし。果を得ることも亦爾なり。

（論曰　故に下劣の心無し。）

釋曰　此れ前の三義を解するが故に退屈心を生ぜざることをか明す。謂く我れに功能有ること無きも、應に無上菩提を得べしと、故に心下劣ならず。

（論曰　善心の人は信樂にて、能く施等の度を生ず。）

釋曰　惡心及び無記心にて能く信樂するに非らず。何を以ての故に、諸の人有り、散漫なる無記

るとに由りて、則ち衆善を成す、亦品類多きを以ての故なり。

論曰　後命を捨つる時、一切の受生の中に於て、愛すべき富樂は自然にして成す。

釋曰　若し凡夫にして、先に施を修して滿足すれば、後に命を捨つる時に、即ち人中に生れ、愛すべき富樂の果を受く。此の事差ふこと無し。若し先に戒を持して滿足すれば、後に命を捨つる時に即ち天の中に生れ、愛すべき富樂の果を受く、此の事差ふること無し。若し定を修して滿足すれば、後命を捨つる時に、即ち色無色界に生じて、愛すべき富樂の果を受く。此の事差ふこと無し。此れ[一]死墮に就いて得果を明かす。若し二乘にして三十七品を修して、滿足すれば、後に凡夫の壽を捨てて聖人の壽を得、六通等の愛すべき富樂の果を受く、此の事差ふこと無し。此れ[二]移位に就いて得果を明かすなり。

論曰　是の人は有礙善を得るも、此の義尙ほ應に成ずべし、云何が我れ圓滿の善及び無礙の善を得て、一切の意の如くなる愛すべき富樂を而も當に成せざるべきや、と。是を第三の鍊磨心と名く。

釋曰　十地の中に於て好んで福德智慧の二品の善法を生長す、故に「圓滿」と名く。心の麁重なる破し難きの障は、金剛定に由りて破壞せらるゝが故に、金剛定の後に能く一切の障を離る。轉依成ずる時は「無礙の善」と名け。佛果を「富樂」と名く。自在なるが故に樂と稱し、德を具するが故に富と稱す。此の富樂は是れ「一切の意の如くなる愛すべき」法なり。若し小乘に約すれば、智斷を以て如意と爲し、恩德を可愛と爲す。若し大乘に約すれば法身を富樂と爲し、應身を如意と爲し、化身を可愛と爲す。此の三は無上菩提を攝し盡すが故に、一切と言ふ。前に「命を捨つ」と言ふは、譬へば智障を離るゝなり。智障既に滅す、云何が我れ意の如くなる可愛の富樂を而も當に成せざるべき。第三の鍊磨心に由りて、方便の中に於て第三の退屈心は則ち滅して生ぜず。

論曰　此の中に偈を說く。

【一】死墮とは凡夫は死に依りて人天の生死に墮すること、これ次の二乘の移位に對す。

【二】移位とは凡夫位より聖位に移轉すること。

の三の功能を必定得べきか、故に「則ち難しと爲さず」と說く。復次に「此の正意に由る」とは、此に何の義有りや。謂く信及び樂なり。信に三處有り、一には實有を信じ、二には可得を信じ、三には無窮の功德有ることを信ず。實有を信ずとは、實に自性住佛性有ることを信ず。可得を信ずとは、引出佛性を信ず。無窮の功德有ることを信ずとは、至得果佛性を信ずるなり。三信を起し已れは、能得の方便なる施等の波羅蜜の中に於て、修行を求欲するが故に、名けて樂と爲す。此の信及び樂を正意の體と爲す。此の信樂を得るに由りて、施等の波羅蜜を修行するは則ち難しと爲さず、能く究竟して圓滿せしむ。復次に菩薩に正意有り、謂く、我れに能く六度を生ずる心有り、貪悋等の諸障を出離し、能く諸の波羅蜜の障を遮し、滅盡して餘すこと無し。是の故に大功用に因らざるも六度は圓滿すべきこと易し。六度の圓滿に由りて、無上菩提は自然に成就せん。我れ已に此の堅住せる正意を得たり。是の故に六度を修行することは以て難しと爲さずと。第二の鍊磨心に由りて、方便の中に於て、第二の退屈心は則ち滅して生ぜず。三には應に得べきを疑ふ退屈心なり。此の心を除かんが爲めの故に、第三の練磨心を顯はす。何を以ての故に、諸の菩薩有り、諸佛の甚深廣大の功德を思量して、菩薩は是の念を作さく、無上菩提は最も得べきこと難し。[九] 一刹那の心に障へらる。謂く金剛心なり。生死の心有ること無ければ、此の心を除くことも亦應に得べし、此の義は思ひ難し、と。此の執有るに由りて、無上菩提を得るに於て心則ち退屈す。此の心を除かんが爲の故に、須らく第三の鍊磨心を修すべし。

論曰 若し人、衆の善法と相應すれは、

釋曰 「人」とは卽ち凡夫及び二乘なり。凡夫に施と[一〇]戒と修との三種の善法有り。此の善法を或は數ゝ偏へに修し、或は圓滿に修す。若し偏へに數々修し及び圓滿に修すれは、施戒修は則ち衆善を成ず。品類多きを以ての故なり。二乘に三十七品の善法有り、無間に修し及び恭敬して修す

【九】 隋譯に「一刹那の心斷し已れは乃ち得」といふ、唐譯參照。

【一〇】 本文に修とあるは後の釋に依れば修定の意なり、故に修の字は定を顯はす、尙ほ後にも其の例あり。

べからず、此の意欲を我等は云何が應に得べけん。故に施等の法は我等の能く行ずる所に非ず、と。此の執有るに由るが故に、能得の方便心に於て則ち退屈す。此の心を除かんが爲の故に、須らく第二の錬磨心を修すべし。

論曰　此の正意に由りて、

釋曰　此れ方便を體相に譬ふることを顯はす。三世の諸の菩薩は若し此の如きの正意を得れば、是れ眞の方便の體なり。

論曰　施等の諸波羅蜜は必ず生長することを得。是れ我が信樂にして、

釋曰　此れ方便を功能に譬ふることを顯はす。功能に三種有り、一には平等の功能、二には生の功能、三には長の功能なり。此の正意に由りて、若し諸の波羅蜜を生長すれば、具足せざること無きが故に、平等の功能と名く。未だ有らざるを有らしむるを生の功能と名く。已に有るを圓滿せしむるを長の功能と名く。三世の諸の菩薩の方便の體及び功能の如きは決定して二無し。我等も亦應に彼に同じかるべし。何を以ての故に。我の信樂するは即ち彼の正意にして、爲れ譬ふる所の方便の體なり。此の體は已に定まる、何を以ての故に動失無きが故なり。

論曰　已に堅住を得たり。

釋曰　此れ即ち動失せざる義を釋す。貪悋等の壞する能はざる所なるが故に「堅」と名け、小乘、惡知識等の邪化も退かしむること能はざるが故に「住」と名く。

論曰　此の正意に由りて、我は施等の波羅蜜を修習し、進得し圓滿せんは則ち難からずと爲す、是を第二の錬磨心と名く。

釋曰　此は譬ふる所の三種の功德を顯はす。「此の正意に由りて、我は施等の波羅蜜を修習す」とは、平等の功能を明かし、「進得す」とは生の功能を明かし、「圓滿す」とは、長の功能を明かす。此

論曰　三相の錬磨心有るに由るが故に、四處の障を滅除するに由るが故に、法と義とを緣して境と爲し、奢摩他毘鉢舍那を無間に修し恭敬して修して、放逸無きが故に。

釋曰　此れ卽ち三處なり。此の三相の錬磨心は能く三種の退屈心を對治す。何をか三と爲すや。一には自身を輕賤する等の退屈心なり。此の心を除かんが爲の故に第一の錬磨心を顯はす。何を以ての故に、諸の菩薩有りて、無上菩提の廣大甚深にして修し難く得難きを聞いて、我れ今云何んが能く此の如く得難き、無上の菩提を得んや、と。此の執有るに由るが故に、自身於て心則ち退屈す。此の心を除かんが爲の故に、須らく第一の錬磨心を修すべし。

論曰　十方の世界は無數量なるか故に。

釋曰　此れ無上菩提は定んで一處に修得するにあらず、隨處に修學して、悉く皆得べきことを顯はす。

論曰　數量すべからざる人道に在る衆生は、

釋曰　此れ無上の菩提を[八]等類は皆得、是の故に此の身は輕賤すべからざることを顯はす。

論曰　刹那刹那に、

釋曰　此れ無上の菩提を得るには定時有ること無く、時を待つて修得するに非らざることを顯はす。

論曰　無上菩提を證得す。是を第一の錬磨心と名く。

釋曰　此れ菩提は與に等しむべきもの無く、必ず勤修を假りて方に證得す可きことを顯はす。此の錬磨心に由り、方便の中に於て第一の退屈心は則ち滅して生ぜず。二には能得の方便を輕賤する退屈心なり。此の心を除かんが爲の故に第二の錬磨心を顯はす。何を以ての故に、菩薩有り、此の如きの心を作すに由る、此の施等は是れ菩提の資糧なり。若し菩薩の意欲を離るれば則ち得

【八】等類とは人界に在る我れと等類なる他の無量の衆生の意なり。

るや。

論曰　一切の法は實には唯識有るのみと、説の如く聞くに隨つて信樂するが故に、理の如く通達するが故に、能く一切の障を對治するが故に、障垢を出離して最も淸淨なるが故に。

釋曰　此の言は四種の位に入る境界を顯はす。云何が四位の境界と爲すことを得るや。「一切の法」とは謂く有爲無爲、有流無流、及び[七]四界、三乘の道果等なり。此の如き等の法は實に唯識有るのみ。何を以ての故に、一切の法は義を以て相と爲し、眞如を體と爲すが故なり。若し方便道ならば識を以て相と爲す。若し見道に入れば眞如を以て體と爲す。此の境界を聞くに隨つて信樂するに依つて信樂位に入り、理の如く通達して見位に入ることを得、能く一切の障を對治して修位に入ることを得、障垢を出離して究竟位に入ることを得るなり。

入方便道章　第五

此の方便に因りて菩薩は四位に入ることを得。今當に此の義を顯説すべし。

論曰　云何が入ることを得るや。

釋曰　此の問は八處に善根力を持するを入の方便と爲すことを顯はさんと欲するなり。何をか善根力と爲し、何をか八處と爲すや。善根力に四種有り、一に因力、二に善知識力、三に正思惟力、四に依止力なり、(これ)前に明かす所の如し。

論曰　善根力の持するに由るが故に。

釋曰　未だ有せざるを生ぜしめ、已に有するを增長せしむるが故に、菩薩の善根を持すと名く。或は說いて六波羅蜜と爲し、或は說いて福慧の二行と爲す。能く對治を破するも對治の遮する所に非らざるが故に、名けて力持の善根力と爲す。應に知るべし、八處有ることを。何をか八と爲すや。

【七】四界とは分段生死の三界と變易生死とをいふ。

の法は唯識のみ有りとの理の中に於て、意言の分別を生ず。此の願樂に由りて意言分別するが故に、菩薩は已に唯識觀に入ると說く。此の如き知を作すを唯識の願樂位に入ると名く。

論曰　見道、謂く理の如く通達するが故に。

釋曰　此の如く方便して菩薩は唯識の見位に入る。今當に此の方便を說くべし。即ち理の如く通達するなり。此の意言は顯現する如き相を分別して、實に是の如く有なるにあらず、但唯識のみ有り。此の識は法に非ず義に非ず、能取所取に非ずと通達す。此の如く通達すれは唯識の見位に入ると名く。

論曰　修道、謂く能く一切の障を對治するが故に。

釋曰　意言の分別は、修道の中に入ることを顯はす。今當に此の方便を說くべし。此の意言の分別は、法にあらず、義に非ず、能取に非ず、所取に非ず。此の如く觀察して能く一切の三障を對治す。是を唯識の修位に入ると名く。此の修道と見道とは異らず。智に由り境に由るが故なり。若し爾らば見修の二道の差別は云何ん。昔眞如を見ず、今始めて見ることを得るを見道と名け、先に已に眞如を見、後に更に數〻観ずるを修道と名く。又能く三乘の通障を除くを見道と名け、但菩薩の障を除くを修道と名く。又觀未だ圓滿せざれは退出の義無きを見道と名け、觀未だ圓滿せざるも退出の義有るを修道と名く。又但[五]通境のみを觀ずるを見道と名け、備さに通別の境を觀ずるを修道と名く。又[六]事成ぜざるを見道と名け、事成ずるを修道と名く。

論曰　究竟道の中、謂く障垢を出離して最も淸淨なるが故に、

釋曰　究竟道に二種有り、一には有學の究竟、二には無學の究竟なり。此の位は最も淸淨の智慧の生ずる處なるが故に、最も微細なる障の滅盡して餘すこと無きが故に、故に究竟位と名く。諸地より乃し、如來地に至るまでは皆此の究竟の義有り。若し人此の四位に入れば何の境界を緣す

【五】通境とは諸法の通相をいふ。
【六】事成ぜずとは俗諦差別の事相を照了せざるをいふ。

釋曰　若し人、已に一向に決定して信樂すれば、樂ふ所の法を得んが爲に、殷懃に恭敬して、觀行の法を修す。若し觀行の法を修すれば功德の善根を增長す。此の如く思惟力に由りて、是れ善く福德智慧の資糧を成熟す。次第に成熟すれば、此の福德智慧を用つて依止と作して、初地に入ることを得るが故に依止力と名く。此の四種の力は能入を顯はす。

入境界章　第三

論曰　諸の菩薩は何の處に於て唯識觀に入るや。

釋曰　此の問に二意有り、一には何の處か是れ唯識の境界なるやを問ひ、二には何の處か是れ唯識の位なるやを問ふ。

論曰　[四]有見と、法と義とに似て顯はるゝ相との意言の分別にして、大乘の法相の生ずる所なり。

釋曰　此の法を唯識觀の持と名け、亦は境界と名く。「意言の分別」とは、是れ心の覺觀思惟なり。此の思惟に二相有り、一には有見の識を相と爲すか故に、「有見」と說く。二には有相の識を相と爲す、謂ゆる似の十二部の大乘敎及び似の大乘敎所詮の理を顯現するを說いて「有相」と名く。「大乘の法相の生ずる所」とは、大乘の法を因と爲すが故に生ずることを得。此の中境界の體を顯はすを「意言の分別」と謂ひ、境界の相を顯はすを「有見有相」と謂ひ、境界の因を顯はすを「大乘の法相」と謂ふ。

入位章　第四

此の意言の分別に四位有り、此の四位を顯はさんが爲の故に、

論曰　願樂行地に於て入る、謂く聞くに隨つて信樂するが故に、

釋曰　意言の分別有るは願樂行地の中に在り。何を以ての故に、諸の菩薩有りて、但だ一切の法は唯識のみ有ることを聽聞するのみに由り、此の敎に依り、聞くに隨つて信樂の心を起し、一切

【四】此の論本の文は隋譯には「彼の有見の法及び義に似たる意言に於てす、大乘の法相の所生の中なるが故に」といふ、更に唐譯參照。

爲る。

能入人章　第二

論曰　何人か能く應知の相に入るや。

釋曰　此れ何の觀行を修する人は、能く唯識觀に入る人なるかを問ふ。是の菩薩の觀行に四種の力有り、菩薩は何の相にて善く福德智慧の二種の資糧を得るや。此の資糧は何の次第を以て修して圓滿することを得しむるや。四種の力有り、一には因力、二には善知識力、三には思惟力、四には依止力なり。

論曰　大乘の多聞熏習相續し。

釋曰　小乘の多聞を離れんが爲の故に「大乘」と云ふ。一生に非ず無窮の生處に於て、數ゝ多聞を習して熏習する心の相續することを顯はす。是を因力と名く。

論曰　已に無量の出世の諸佛を承事するを得。

釋曰　數量を過ぐる諸の如來世に出現し、是の人は佛に依りて正教を聽受し、教の如く正しく修行するか故に「承事す」と名く。先に已に此の如きの承事を得たるが故に、善知識力と名く。

論曰　已に決定せる信樂の正位に入り。

釋曰　若し人、大乘の中に於て信樂すれは、惡知識等の能く轉壞する所に非ず、故に「決定」と名く。信に三種有り、一には[一]有を信し、二には[二]可得を信じ、三には[三]無窮の功德有ることを信ず。若し已に信有れば、求め修行して因を得るが故に名けて「樂」と爲す。十信より十迴向に至るまでは、是れ信樂の正位なり。今明かす所の位は、但十迴向のみを取り、決定せる信樂を思惟力と名く。大乘の多聞熏習は此の力の因と爲る。

論曰　善く善根を成熟し修習し增長するに由り、是の故に善く福德智慧の二種の資糧を得。

【一】有を信ずとは佛性の實有を信ずること、所謂自性住佛性なり。
【二】可得を信ずとは佛性開發の可能を信ずること、所謂引出佛性なり。
【三】無窮の功德とは至得果佛性を信ずること、尙ほ後に釋論に出づ、參照。

論曰　阿梨耶識の種子を成ずるか如く、

釋曰　阿梨耶識は、一切の不淨品の法の因と爲るか故に、種子を成ずるが如く、多聞熏習も亦爾たり。一切の淨品の法の生ずる因と爲る。阿梨耶識の種子を成ずるが如く、何の法を以て多聞熏習は種子と爲すや。此の問に答へんが爲の故に、

論曰　正思惟の所攝にして。

釋曰　此の下の四法は、並びに多聞熏習を以て種子と爲す。若し覺觀思惟ならば、大乘の多聞熏習に依りて此の覺觀を生じ、邪の思惟及び偏の思惟を離れ、正思惟を以て性類と爲すが故に、「正思惟の所攝」と言ふ。

論曰　法及び義に似て顯るゝ相の生ずる所。

釋曰　法に似るとは謂く、十二部の方等敎なり。義に似るとは、謂く方等敎の所詮の理なり。心相は此の理と敎とに似て顯現し、此の理と敎とを緣緣と爲して覺觀分別を生ず。

論曰　所取の種類に似たる。

釋曰　此の覺觀若し起れば、此の所取に似るを以て體相と爲す。此の二句は同じく識の相分を顯はす。

論曰　有見の、

釋曰　此の覺觀は能く了別す、即ち是れ識の見分なり。此の義は識の二法を成立す。謂く相識と及び見識となり。

論曰　意言の分別なり。

釋曰　意識の覺觀思惟は、但た意言を緣じて分別するのみ、別に義の緣ずべきもの有ること無し。又必ず名に依りて諸法を分別するか故に、「意言の分別」と言ふ。多聞熏習の依止は此の法の因と

卷の第七

釋應知入勝相第三の一*

正入相章　第一

論曰　此の如く已に應知の勝相を說けり、云何が應に應知の入勝相を知るべきや。

釋曰　此の品十章有り、一には正入の相、二には能入の人、三には入の境界、四には入位、五には入の方便道、六には入の資糧、七には入の資糧の果、八には二智の用、九には二智の依止、十には二智の差別なり。

一切の法を應知と名け、三性を諸法の勝相と名く。復次に三性を應知と名け、同一にして無性なるか故に勝相と名く。復次に應知に二種有り、一には淨品、二には不淨品なり。淨品とは依他性の無分別を謂ひ、不淨品とは依他性の有分別を謂ふ。依他に於て三種の性有り、應に知るべし、一には依他性、二には依他性の中の分別、三には依他性の中の無分別眞如なり。餘義は分別章の中に說けるが如く、前に已に此の義を顯はせり。若し人此の如き行有れば、應知の相に入ることを得。今當に此の義を說くべし。此の問は但だ入の體相を問ひ、應知と及び勝相とを問はず。復次に此の問は唯識觀の中には何の法を緣して境と爲すやを問ふ。故に此の問に答ふるなり。

論曰　多聞の熏習する所の依止にして

釋曰　大乘法の中に於て多聞の熏習する所、此の熏習は、有るは說く、卽ち是れ依止なりと、又別に、依止とは謂く身體の相續なりと、說く。

論曰　阿梨耶識の所攝には非ず。

釋曰　此の多聞熏習は是れ阿梨耶識の對治を顯はすが故に阿梨耶の所攝に非ず。

*朗本は第六。

故に、別を以て總を釋するなり。

論曰　此の中に偈を說く。

釋曰　更に一偈を以て、前に說く所の德は總別の義に因ることを顯はす。

論曰[四九]　前說の如き句を取れば、　德に隨つて、句、差別す。　前說の如き句を取れば、　義の別なるに由り、句、別なり。

【四九】隋譯には「初句の所攝」といひ、唐譯には「最初の句に由る」といふ、推して考ふるに取とは最初の句を取ればの意なるべし。

住せしめんと欲し、此の二事を安立せんが爲めの故に、他を安立する業と作す。

論曰　大乘に引攝す。

釋曰　此の釋は初句なり。破戒の人に於て、棄捨せず。亦、永く擯せず、惡處より濟拔して善處に安置す。持戒の人に於て、其の根性に隨ひ、進んで定慧等の行を修せしむ。

論曰　一向に決定して言說すとは。謂く、疑心有ること無く、正教と學處とを立つ。

釋曰　智慧に由りて決了して疑無く、一向に教と及び學處とを立つるが故に信受すべし。若し先に此の如きの教と、此の如きの學處とを說き、後に先の所說を非と爲すと言はゞ、此の事は不定の言說なるに由り、則ち信受すべからず。不定無きが故に信受すべし。

論曰　實事を恭敬すとは、謂く法財の兩攝なり。

釋曰　此の人は、實語を以て、眞實の道理に依りて法を說くに由り、是を法攝と名く。如法にして得る所の衣服等の財物は、此を以て衆生を攝す。是を眞實の財攝と名く。

論曰　先に恭敬して菩薩の心を行ずとは、謂く染汚無き心なり。

釋曰　此の人は、菩薩の心を攝持するに由り、能く一切衆生の利益の事を作す。[四七] 衆生の我を敬事せんが爲ならず。云何が彼の衆生は、我が利益に由りて正教を信受し、當に無上菩提を得んと。此の善意の爲の故に、法財の二攝を行ず。是を染汚無き心と名く。

論曰　此の如き等の法と相應するを說いて菩薩と名く。此の如き文句に由りて、前に說ける初句を。應に知るべし。初句を解釋すとは、謂く一切衆生に於て利益安樂の意なり。此の利益安樂の意の文句に、別に十六の文句有り。顯はす所の業は應に知るべし。十六業を解說すとは、[四八] 此の如き等にして應に初句を解說すと知るべし。

釋曰　初句は利益安樂を明かす。所餘の十六業と及び十六句とは、皆是れ利益安樂の別義なるが

【四七】隋譯には「自ら供養を求めんが爲に非ず、但だ念ずらく云何か此の善を以て衆生をして無上の菩提を正覺せしめん」といふ。

【四八】「十六業を解說すとは」の次に前十六句の「謂く」の下の十六業を順次に列示せり、本譯にては之を已に會釋せるが故に此の處には「此の如き等」の語を補へり。

の覺觀を遠離すと名く。

論曰　下品の乘に於て、喜樂の心を生ぜず、大乘教に於て、實の功德を觀ずとは、謂く正しく功德を思惟す。二句有り。

釋曰　小を離れ、大を修す。此の二句を正思惟と名く。

論曰　惡友を遠離し、善友に敬事すとは、謂く善友に事ふる功德を顯はす。二句有り。

釋曰　惡を遠さけ、善に親しむ。此の二句を、善友に近づく功德と名く。[四六]此の六法を治するに由るが故に、利益安樂の事を成就することを得。故に方便を成就する業と名く。成就する體相は云何ん。

論曰　恒に四種の梵住を治すとは。謂く成就業を顯はす。三句有り解釋す、應に知るべし。

釋曰　前に三句有り。後に更に三句を以て、前の三句を釋す。

論曰　無量心の淸淨を治す。

釋曰　此の釋は初句なり。

論曰　恒に五通の慧に遊戲すとは、謂く威德を得るなり。恒に智慧に依りて行ずとは、謂く證得の功德なり。

釋曰　先づ衆生に於て、無量心を起し、無量心に由りて衆生を引いて正位に入らしめんと欲するが故に五通の慧を現す。若し衆生、已に正位に入らば、正行を修せしめんと欲するが故に、智慧に依りて行ぜしむ。應に識に依るべからず。證智生ずるに由るが故に、能く善惡の兩法を了別す。

論曰　正行に住すると、正行に住せざるとの衆生に於て捨離の心無しとは、謂く他を安立する業なり。四句有りて解釋す、應に知るべし。

釋曰　前に四句有り。後に更に四句を以て、前の四句を釋す。衆生をして惡法を離れて、善法に

【四六】此の六法とは前六句の顯はす法をいふ。

り。七句有りて解釋す。應に知るべし、正しく加行の六波羅蜜を修し、恭敬して四攝を行ずることを。

釋曰 前に七句有り。後に總じて六度四攝を擧げ、前の七句を結ぶ。此の業は能く利益安樂の意を増長す。若し未だ生ぜざれば、此の業に由りて生ずることを得。若し已に生ずれば、此の業に由りて增廣することを得。即ち是れ生長の因なり。

論曰 持戒破戒の中に於て、善友として無二なりとは、謂く、方便を成就する業なり。六句有り解釋す。應に知るべし。

論曰 善知識に事へ、

釋曰 [四五]前に六句有り。後に更に六句を以て、前の六句を釋す。

釋曰 此の釋は初句なり。若し人、持戒するも破戒するも其の過を觀ぜずして、但だ其の德を取るのみ。若し未だ彼の德を得ざれば、則ち彼の修學に依り、若し已に彼の德を得れば則ち彼と共に數習して堅固ならしむ。若し自ら德有れば、彼をして修學して、我が所得に同ぜしめ、此彼互に相ひ事ふるが故に、爲れ「善友として無二なり」と言ふ。

論曰 恭敬の心にて法を聞くとは、謂く正法を聽聞するなり。

釋曰 未だ得ざるを得んが爲めに、已に得たるを修治せんが爲めに、是の故に善友に依りて正法を聽聞するなり。

論曰 恭敬の心にて、樂つて阿蘭若處に住すとは、謂く阿蘭若處に住するなり。

釋曰 修行して、所聞の法の如くならんと欲するが故に恭敬して阿蘭若處に住す。若し此の中に住すれば、一切の邪なる覺觀は起ることを得ず。

論曰 世間の希有に於て、安樂の心を生ぜずとは、謂はく邪の覺觀を遠離するなり。

釋曰 譬へば妓樂等の如きは、是れ世間の愛する所なるも、中に於て喜樂の心を生ぜず。是を邪

【四五】前の六句云云とは次の十二句の中の前六句と後の六句となり。

釋曰　若し菩薩にして、自身を輕賤して、我れ今、無上菩提に於て功能有ること無く、一切の所作は、皆成就せずと言はゞ、(之を)退弱の心と名く。菩薩は此の心を生せざるが故に、所作は皆成就することを得るを、退弱の無き心と名く。

論曰　厭倦無き心とは、謂く退轉せしむべからざる業なり。

釋曰　菩薩は無上菩提に於て、正勤を起し厭倦有ること無し。厭倦無きに二種有り。一には[四三]因の定まることを見、二には[四四]果の希有なることを見る。故に、難行の中に於ても、心に厭倦無し。

論曰　義を聞きて足ること無しとは、謂く攝方便の業なり。

釋曰　若し人、多く聞いて、能く他を化するの方便を了別し、聞くことに由りて義を解せば、則ち正行に於て疑心有ること無きが故に、自ら能く修行し、亦他をして修行せしむ。

論曰　自作の罪に於ては其の過を顯はし、他作の罪に於ては怪まずして訶責すとは。謂く厭惡に對治せらる業なり。二句有り解釋す、應に知るべし。

釋曰　智と及び大悲とに由るが故に、此の能有り。智に由りて能く因果を了別するが故に、自の所作の惡を覆藏せず。大悲に由りて他作の苦因を見るに忍びず。恒に訶責すと雖も、而も瞋り怪しまざるなり。

論曰　一切の威儀の中に於て、恒に菩提心を治すとは、謂く、無間に思量する業なり。

釋曰　此れ無間の修を顯はす。無間の修は一切の放逸の行を遮せんが爲なり。譬へば威儀淸淨品の中に明かす所の如く、菩薩の所作は衆生をして無上菩提を得しめんが爲めならざること無し。

論曰　果報を求めずして布施を行じ、一切の怖畏と及び道生とに著せず、禁戒を受持し、一切の衆生に於て忍辱にして礙ふること無く、一切の善法を引攝せんが爲に精進を行じ、三摩提を修して無色定を滅離すると、方便と相應する智と、四攝と相應する方便となりとは、謂く、行進勝位の業な

【四三】因の定まると佛性を具有して成佛の因決定せりの意。
【四四】果の希有とは成佛の希有なるをいふ。

事を行ずるなり。

論曰　永く善友と作るの意にして、乃し、無餘涅槃に至る。謂く、隨順して行し、乃し、餘生に至る。

釋曰　隨順して利益安樂の事を行して、今生より乃し未來生を窮むるに至るまで、永く捨離せざるが故に、求欲すること無き業と名く。此の求欲すること無き意を、云何が知るべきや。隨處に身口の二業と相應するに由る。是の故に知るべし。

論曰　量に稱ひて談說し、歡笑して先づ言ふとは、謂く、隨處に相應して言說する業なり。二句有りて解釋す、應に知るべし。

釋曰　此の二句は、法と及び安慰とに約し、以て口業を顯はす。「量に稱ひて談說す」とは、是れ法に約す。「歡笑して先づ言ふ」とは、是れ安慰に約するなり。量に稱ふといふに二種有り。一には法に稱ひて餘語を離れず、二には所解に稱ひて非所解と及び疑とを離る。此の如く量に稱ひて談說す。「歡笑」は他をして、疑畏の心、無からしむ。「先づ言ふ」とは、是れ他の所作を引く方便なり。此の二種の口業は怨・親・中の三人に於て、別異有ること無し、卽ち求欲無きの業を成就す。

論曰　諸の衆生に於て、慈悲異ること無し。謂く、有苦と有樂と無二との衆生に平等なる業なり。

釋曰　有苦の衆生に於ては、苦々に由りて、慈悲を起し、有樂の衆生に於ては壞苦に由りて慈悲を起し、無二の衆生に於ては行苦に由りて慈悲を起す。無二とは、謂く無苦無樂にして、卽ち是れ捨受の慈悲平等なり。是れ身口の業なり。何を以ての故に。菩薩は衆生に於て、先に意地の慈悲を起し、後に隨時隨處に拔苦與樂の行を行ずるが故に、是れ身口の業なり。此の身口の業は、怨と親と中との三人に於て別異有ること無ければ、亦求欲無きの業を成就す。

論曰　所作の事に於て、退弱の心無しとは、謂く下劣無き業なり。

論曰[三八] 我れ今、何の處の中に於て、當に此の如きの智と相應すべきや、謂く無倒の業なり。

釋曰 若し菩薩に利益安樂の意有るとも、菩薩にして、如實に自身を識らざれば、則ち道理に中(あた)りて衆生を安立すること能はず。譬へば、人有り、利益安樂の意有るも衆生を飲酒に於て安立するが如きは、是れ顚倒の業なり。若し如實に自身を識れば、能く道理に中りて、衆生の爲に說きて增上慢無く、衆生を安立して中[三九]善の處に入らしむ。此の利益安樂を無倒の業と名く。

論曰 高慢の心を捨つとは、謂く[四〇]他事に由らずして、自ら行ずる業なり。

釋曰 此の人は高慢心を捨離するに、他の請ひを待たざるに由る。若し衆生にして、是れ法器ならば、則ち自ら往いて爲に正法を說く。

論曰 堅固なる善意とは、謂く壞すべからざる業なり。

釋曰 菩薩の心は堅固なるに由る。若し衆生に過失有るも、菩薩の利益安樂の心を破壞すること能はず。

論曰 假りに憐愍を作すに非ざる意とは、謂く、求欲すること無き業なり。三句の解釋有り、應に知るべし。

釋曰 [四一]前に三句有り。後に更に三句を以て、前の三句を釋するなり。

論曰 報恩を貪らず。

釋曰 此釋は初句なり。自の爲に利養を求むるに非ざるが故に他を憐愍す。

論曰 親と非親との所に於て、平等なる意とは、謂く、有恩と無恩との衆生に愛憎の心を生ぜざるなり。

釋曰 親を有恩と名け、怨と及び[四二]中との人は、是れ非親なれば、無恩と名く。若し非親をして利益安樂の事を堪受せしむれば、菩薩は則ち不平等の心を捨てゝ、平等親友の心を起し、利益の

【三八】此の句は隋譯には「我れ何の價なるかを知るが故に」となす。唐譯參照。

【三九】本文に中善と有るも中の字は略疏に云へるが如く衍なるか、或は道理に中たる善といふ意なるか更に考ふべし。

【四〇】隋譯には「他の作すことを請はざるも亦自ら行ずる業」といふ。

【四一】前の三句とは次の三句をいひ、後の三句とは「量に稱ひて云云」以下の三句を指す。

【四二】中とは怨にあらず親にあらざる中間の人の意。

ることを知るべし。若し此の如く、正說すれば法義を成ずるを得。[三六]

釋曰　二十の道理に由りて、如來の智慧の最も清淨なることを成就するが故に、如來の自利、滿足す。智慧の清淨なるに由りて如來の所說の法の教理も圓正なるが故に、利他を成ずることを得。第一句を本と爲し、餘の二十句を能成就と爲す。

論曰　因事の義の依止とは、經に言へるが如し。若し菩薩は、三十二法と相應すれば說いて菩薩と名く、と。

釋曰　因事に二義有り。一には、意を以て因と爲し、十六業を以て事と爲す。二には諸句を以て因と爲し、所成の業を事と爲す。菩薩に二種有り。一には正定位に在るもの、二には不定位に在るものなり。若し正定位に入る者ならば、三十二法と相應して、菩薩の名を得。若し不定位に在らば、未だ三十二法と相應せざれば、菩薩と名くることを得ず。

論曰　一切の衆生に於て、利益安樂の意と相應す。

釋曰　一切の衆生に於て、眞實道を起さんと求欲して、方便有るが故に利益の意と名け、一切の衆生に於て現在と未來との二世の拔苦與樂を起さんと求欲する方便の故に安樂の意と名く。菩薩は此の意と恒に相ひ離れざるが故に相應すと名く。此の初句は利益安樂の意を明かす。後に十六業と及び十六句と有り、合して三十二法は並びに初句の義を顯了するなり。

論曰[三七]　一切智智に入らしむる意、謂く傳々して行ずる業なり。

釋曰　若し菩薩に意有りて、衆生を一切智々に入らしめんと欲すれば、此の意に由り、傳々して衆生を化度して一切智々を得しむ。譬へば一燈を傳へて千燈を然(とも)すが如し。此の句と及び業とに由らば、菩薩の利益安樂の意は則ち顯現することを得。此の如く一切の句と及び業とに於て、各各初句を顯はすことは、悉く應に之を知るべし。

【三六】論本にて此の解釋の規則を示す文に續いて、「最清淨慧者諸佛如來智慧、於一切法清淨無不了別、如此本義、應知、由二十一佛功德所攝、於有所知一切無障行起功德、於有無無二相眞如最清淨令入功德云云」とありて此に前文の「謂」以下の釋文を出せり。

【三七】此の段も論本にては此の處は十六句を列示し、「謂く」以下の十六業は十六句の後に之を列示せるも解釋の便宜の爲に十六業の論本の文を十六句に相應せしめて會釋せり。

論曰　無差別なる如來の解脫智の究竟に至る。謂く衆生の意に隨つて、純淨なる佛土を顯現する功德なり。

釋曰　相雜すること無き如來智の中に於て、解脫の究竟に至るなり。如來の智慧は眞如と差別すること無く、衆生の願樂する所に隨つて、能く清淨なる佛土等を顯現す。善心を生じ及び解脫を成熟せんが爲の故なり。

論曰　已に無邊なる佛地の平等を得。謂く、是れ三種の佛身の無離無別處の功德なり。

釋曰　如來の三種の身の中に、法身は處所に約して度量すべからず。應化の兩身も亦爾なり。但だ此の世界のみに有りて、彼の世界に無しと言ふべからず。一法として法身の外に出ること有ること無し。衆生界も應化兩身の外に出づること有ること無し。

論曰　法界を勝と爲す。謂く生死の際を窮めて、能く一切衆生の利益安樂を生ずる功德なり。

釋曰　如來は法界を以て勝と爲す。法界に二種有り、一には有染、二には無染なり。無染にして清淨なる法界を後の最勝と爲す。何を以ての故に。如來は生死の際を窮めて衆生を利益し安樂にする功能盡くること無ければなり。盡くること無き所以は、體に由る。[三五]能の體は卽ち法界にして、能は卽ち應化の兩身なるに由る。化身に因りて、如來の應身を得、應身に因り後轉して如來の法身を成ずることを得。若し法身を成ずれば、則ち窮盡すること無し。

論曰　虛空界を後際と爲す。謂く無盡に由る功德なり。

釋曰　如來の智慧の盡くること無きは、譬へば虛空の如し。虛空は一切の色際に遍滿し、生住滅の變異有ること無し。如來の智も亦爾なり。一切の所知に遍く、無倒にして變異無きが故に虛空の如しと說く。

論曰　「最も清淨なる慧」（といふ）此の如きの初句を、所餘の句に由りて、次第に應に分別し解釋せ

【三五】能とは佛の攝化の功能をいふ。

論曰　法智に於て疑無し。謂く未來世の法に於て、智を生ずる功德なり。

釋曰　此の法は、未來に於て、應に能く此の如きの智を生ずべし。是の故に未來世の法に於て、疑無し。他をして此の法を得しめんが爲に、衆生の根性に隨つて、能く敎を立つるなり。

論曰　分別すべからざる身なり。謂く、衆生の樂ひに隨つて顯現する功德なり。

釋曰　衆生界は數量を過ぐ。意欲及び入道の方便も、亦數量を過ぐ。處所も亦數量を過ぐ。如來は能く此の事の差別に隨つて、化身を示現する數量と相貌と時節と處所とは、並びに分別すべからず。

論曰　一切の菩薩の受くる所の智慧なり。謂く[三三]能く無量の依止なる衆生を正しく敎化する事を行ずる功德なり。

釋曰　無量の菩薩の依止は、是れ衆生を敎化する事なるに由り、應に此の事に依るべし。佛の無我を得るに由りて、勝我と爲す、此の智は但だ是れ菩薩のみの受くる所なるが故に、但だ佛のみ能く菩薩を化し、但だ菩薩のみ能く佛の化を受く。無量の菩薩の依止とは、此れに二義の無量有り。[三四]或は菩薩に屬し、或は依止に屬す。若し菩薩に屬すれば、一切の菩薩は同一の依止なり。謂く無我を以て勝我と爲す。若し依止に屬すれば、法身の遍滿を顯はし、通じて一切の菩薩の依止と爲る。

論曰　無二の佛住なる波羅蜜に至る。謂く平等の法身の波羅蜜を成就する功德なり。

釋曰　如來の法身を佛住と名く。三世の如來は此の住に、異ならざるが故に、無二と言ふ。無二の故に平等なり。四德を究竟するが故に波羅蜜と名く。成就に二義有り。一には淸淨なる佛の法身なり。已に一切の障を離れて、究竟して淸淨なるが故に成就と名く。二には四德なり。是れ法身の成就する所なればなり。

【三三】隋譯には「無量の身にて衆生を敎化する事を爲す功德」といふ。

【三四】無量を菩薩の方に屬すると、依止の衆生の方に屬するとの二義なり。

論曰　[二七]思惟すべからざる所成立の法なり。謂く正法を安立する功德なり。

釋曰　修多羅等の十二部の正法は、量るべからず、思ふべからずして、凡夫の能く知る所に非ず。如來は此の法を安立し竟れば、乃至嬰兒等も亦能く通達す。[二八]鳩摩羅迦葉等の如し。是れ前の「淸淨なる慧」の句は、餘句に於て、一一應に相應すと知るべし。

論曰　[二九]三世の平等に至る。謂く、四種の善巧にて他問に答ふる功德なり。

釋曰　如來は現在に於て一切法を證し、過去と未來とに於ても、亦證すること比ひ無し。此の智の平等を證するに由りて、若し他、三世に約して問難すれば、證智に依りて、[三〇]四種の答を作さざること無し、故に智と答とは皆等し。如來は此の[三一]二種の平等に至るなり。

論曰　一切の世界に於て、身を現ず。謂く一切の世界の中に於て、應化身を顯現する功德なり。

釋曰　菩薩と及び二乘とを化せんが爲に、衆生の根性に隨つて、二身を顯現し、爲に說き爲に行ず。

論曰　一切法に於て、智慧は無礙なり。[三二]謂く、能く他の疑を決する功德なり。

釋曰　四の無畏を得るに由るが故に、自ら決して疑無く、四の無礙辯を得るに由るが故に、能く他の疑を決す。是の故に、能く難に答へ疑を決す。

論曰　一切の行は智慧と相應す。謂く種々の行に由りて、能く他をして入らしむる功德なり。

釋曰　如來は他を利益するの事を行ぜんと欲す。此の事は先づ是れ智の所緣なり。此の事に由りて、他は眞位に入ることを得れば、則ち他の智慧と相應す。此の事は自の智慧を以て因と爲し、他の智慧を以て果と爲す。一切の如來の行ずる所の方便とは、謂く神通輪と記心輪と說法輪と、乃至、出入息等にして、自ら智慧と相應せざること無く、他をして智慧を得しめざること無く、空しく過ぐること有る無し。

【二七】　隋譯には「不可思議の成立」といふ。

【二八】　鳩摩羅迦葉(Kumāra kāśyapa)童子飲光と譯す、八歲にて出家し阿羅漢果を得たりと傳へらるるが故に此に引例せり。

【二九】　隋唐兩譯には此の句を釋して授記の功德といふ。蓋し四記を授くる功德の意なるべし。

【三〇】　四種の答とは一に定答二に分別義答、三に反問答、四に置答なり、之を或は四記ともいふ、故に隋唐兩譯には此の句を授記の德と釋したるものなるべし。

【三一】　二種の平等とは智の平等と答の平等とをいふ。

【三二】　此の句は隋唐兩譯には斷疑の功德といふ。

るが故に、此の法は有相を離る。自體は、實に有なるに由るが故に、此の法は無相を離る。無相の法に於て、最も淸淨なるに由る。是の故に自ら能く通達し、亦能く他をして通達せしむ。故に無相の法を說いて「勝依の意行と爲す」なり。

論曰 佛住に住す。謂く功用に由らず、如來の事を捨てずして佛住する功德なり。

釋曰 此れ無住處涅槃を顯はす。生死に在らざるが故に功用の心無く、涅槃に在らざるが故に如來の衆生を利益するの事を捨てず。此の如きの二義は、無住處涅槃に由るが故に成立することを得。故に此の涅槃を說いて、名けて佛住と爲す。

論曰 諸佛の平等を至得す。謂く法身の依止と及び意と事とに於て差別無き功德なり。

釋曰 依止は卽ち法身にして、意は是れ應身、事は是れ化身なり。此の如きの三身は、一切の十方三世の如來に平等にして異ること無し。此の如きの平等は、一切の如來は皆已に至得せるなり。

論曰 無礙の行を行ず。謂く一切の障對治を修習する功德なり。

釋曰 一切の[二五]三障を對治せんが爲に、如來は恒に對治の慧を修す。是の故に如來の智は、法體と及び法相とに於て、皆障礙無し。

論曰 破すべからざる無對の轉法なり。謂く、一切の外道を降伏する功德なり。

釋曰 世間の中に於て、天魔と及び外道との諸說にして、能く理の如く如來の所說の正法を破して自法を安立するもの有ること無く、亦自の所立の法を以て如來の正法に對翻するもの有ること無し。何を以ての故に。如來の所說は本性を失すること無きが故なり。

論曰 [二六]變異すべからざる境なり。謂く世間に生ずるも、世間の法に染汚せられざる功德なり。

釋曰 世間は是れ如來の出生する處なり。如來は復世間に生ずと雖も、貪愛等の八法と及び四倒とは染汚すること能はず。境は卽ち四念處にして、謂ゆる眞如空なり。

【二五】三障とは惑業苦の三をいふ。

【二六】隋譯には「無礙の境界」といふ。

釋曰　此の義を顯はさんが爲の故に、重ねて偈を說く。

論曰　依他の中には分別無く、但だ眞實のみ有り、故に不得と及び得とは、中に於て、二は平等なり。

釋曰　「中に於て」とは、謂く依他性の中に於てなり。此の「二は平等なり」とは、謂く依他性の中に於て分別は無く、眞實は有なるが故なり。故に凡夫人は顚倒して執するも、此の如きの得と不得とを聖人は正しく見るが故に、依他性の中に於て、亦得と不得の義有り。

論曰　成立して說く所の諸義を廣く解すとは、譬へば初に說く所の文句を、所餘の諸句に由りて、顯示して分別するが如し。或は功德の依止に由り、或は因事の義に依止す。功德の依止とは、廣く佛世尊の功德を說いて「最も清淨なる慧なり。」

釋曰　前の二義に因りて、一切の所說を應に此の如く解釋すべし。今、當に此の方便を說くべし。此の中に說く所は、或は功德の義に依り、或は因事の義に依る。功德の義に依る中[二三]「最も清淨なる慧」は是れ初句にして、所餘の諸句は各〻此の義を顯はす。

論曰[二四]　無二の行にしてとは、謂く所知に於て一切の無障行を起す功德なり。

釋曰　聲聞、獨覺の智慧に、障有り、障無きが如くならず。障有るに由るが故に、清淨ならず。障無きに由るが故に清淨なり。如來の智慧は、一切處に於いて悉く障無し。是の故に淨、不淨無し。此の義に由るが故に無二なり。

論曰　無相の法を勝依の意行と爲す。謂く有と無との無二なる相に於て、眞如の最も清淨なるに入らしむる功德なり。

釋曰　即ち是れ無垢淸淨の眞如を說いて、無相の法と名く。此の一切法は所有無きを體と爲すに由

【二三】佛の功德を廣く解說する例として「最清淨の慧」以下の諸句を擧ぐ、而して「最も清淨なる慧」とは初句にして佛德の總體を示すもの、餘の諸句は別德を列示せるものと爲す。

【二四】「無二の行」以下は別德なり、論本にては「最清淨慧、無二行、無相法爲勝依意行、住於佛住云云」といふが如くて、前句のみ二十句を列ね、「謂く」以下は此の處に無くして其の後に續いて二十一德を順次に列示せり、然るに本譯にては解釋の便宜上、二十一德の句を前の諸句に合し「謂」の字を加へて之を會合せり、是に由つて文意は解し易しと雖も論本の體裁は失はれたり、唐譯を參照して論本の組織を知るべし。

論曰　法爾を相と爲す。

釋曰　謂く眞實性なり。

論曰　此の言說に由りて、三性中に於て諸法の體相は則ち顯現することを得。

釋曰　此の言說に由りて、一切の因緣より生ずる所の法は、法爾に由るが故に虛なり。虛なるが故に倒を成ず。倒に由るが故に虛果を得。果有るに由るが故に分別有り。分別に由るが故に法爾有り。是の故に或は順に相ひ成じ或は逆に相ひ成ず。此の三種の性相は遍く一切の果を攝す。

論曰　偈に言へるが如し。

釋曰　此の義を顯はさんが爲の故に重ねて偈を說く。

論曰

有相有見從よりて　應に知るべし、法は三相なることを。

釋曰　諸法は二種を出でず、一には相、二には見なり。相と見との中に於て應に三性を相と爲すと了別すべし。此の三相は此の如く方便して解釋すべきことを、今當に顯說すべし。

論曰　云何が此の法相を解說することを得るや。分別性は依他性に於て實に所有無きも、眞實性は中に於て實に有り。此の二の不有と有とに由るが故に、非得と及び得とは、未見と已見となれば、眞如は、一時に自然に成ず。依他性の中に於て、分別性は無なるが故に、眞實性は有なるが故に、若し彼を見れば此を見ざるも、若し彼を見ざれば、即ち此を見ればなり。

釋曰　二とは、謂く分別性と及び眞實性となり。此の二の、第一は無にして、第二は有なるが故に、「此の二の不有と有」と言ふ。分別を見るに由りて、眞實を見ず。とは、謂く未だ眞實を見ざる人は、是れ凡夫の見ざる時なり。聖人は分別を見ずして即ち眞實を見るなり。

論曰　偈に言へるが如し。

と欲するを以ての故に此の偈を說く。或は人有り憍慢にして說者を輕蔑し、自ら理の如く義を判ずる能はざるには、彼の慢心を破せんと欲するが故に此の偈を說く。是を翻依と名く。

論曰【二】若し人廣く大乘の法を解釋せんと欲すれば、略說するに、三の相應に由りて、當に此の如く解釋すべし。一には緣生の體相を廣く解す。二には因緣に依つて、已に生ぜる諸法の實相を廣く解す、三には成立して說く所の諸義を廣く解す。緣生の體相を廣く解すとは、偈に說くが如し。

【三】言熏習の生ずる所の　諸法は、此れ彼に從る、　此の如く果報識と、　及び生起識とは、更互の因に由りて生ずと。

釋曰 外塵は分別の生ずる所にし、本識の中に熏習せる種子なるが故に、言說の熏習と稱す。一切の餘法は此を以て因と爲して生ずることを得。謂く生起識を性と爲す。言說の熏習は諸法を以て因と爲すが故に、此の法は彼より生ずと言ふ、此の言說に由りて、已に本識と生起識とは更互に因と爲ることを顯はす。

論曰 因緣に依りて已に生ぜる諸法の實相を廣く解釋すとは、諸法とは謂く生起識を相と爲す。有相及び見識を自性と爲す。

釋曰 是れ諸法の有相と有見を自性と爲し、生起識を相と爲す。應に此の如く諸法に兩體有りと知るべし。若し塵識ならば相を以て體と爲し、若し識識ならば見を以て體と爲する、因緣より生する果法の性相に三種有り。

論曰 復次に諸法の依止を相と爲す。

釋曰 謂く依他性なり。

論曰 分別を相と爲す。

釋曰 謂く分別性なり。

【二】次に大乘を解釋する三相を明かす。

【三】言熏習云云は本釋論には長行なるも前に偈に說くが如しとあるのみならず、他の諸譯はいづれも偈文なれば、長行とせるは誤なり。但し偈文としては字數不同なれば或は脫字あるものか更に考ふべし。

（論曰　阿婆離。）

釋曰　謂く定なり。何を以ての故に、婆離には二義有り、一には實、二には動なり。阿婆離とは謂く不實と不動となり。不實は是れ文句の明了の義にして、不動は是れ祕密の義なり。不動の故に定と名く。

（論曰　婆羅摩多耶。）

釋曰　實心を起すに名く。謂く定に於て尊重心を起すなり。

（論曰　毘跋耶斯者。）

釋曰　謂く四念處の智慧なり。何を以ての故に、毘跋耶斯には、亦二義有り、一には倒、謂く無常に於て常倒を起す等なり、二には翻倒、謂く常に於て無常の解を作すなり。倒は是れ文句の明了の義にして、翻倒は是れ祕密の義なり。

（論曰　修絺多。）

釋曰　謂く善住なり、善く念處に住す。

（論曰　僧柯履多。）

釋曰　亦二義有り、一には染汚、二には疲倦なり。染汚は是れ文句の明了の義にして、疲倦は是れ祕密の義なり。菩薩は衆生の爲に生死に於て、長時に恒に苦行を行ず。是の故に疲倦す。羅睺羅法師の言へるが如し。世尊は長時に生死に於て劬勞す。但大悲のみに由りて餘事に由らずと。

（論曰　羅槃底菩提物多摩。）

釋曰　羅槃底は、菩提を得るを言ひ、覺を言ふ。物多摩は勝れたるを言ふ。若し此の偈の明了の義を取りて文を判ずれば、則ち相違を成ず。若し祕密の義を取りて文を判ずれば、則ち是れ正說なり。衆生をして理に依りて文を判し、理を以つて依と無し應に文を依となすべからざらしめん

に毀呰す可し。若し出世間の修ならば則ち毀す可き義無し。[一七]意と及び依との異相云何ん。如來は心に先づ此の事を緣じて、後に他の爲に說くが故に名けて「意」と爲す。此の因に由りて衆生は決定して、正定聚に入るが故に、此の因を名けて「依」と爲す。

論曰 四依とは一には[一八]令入依、譬へば大小乘の中に於て、佛世尊は人法の二種と通別の二相とを攝する所の俗諦を說くが如し。

釋曰 正說の中に於て世諦の理に約して人法及び通別の二相有りと說くは、衆生をして正義に入らしめんが爲なり。故に令入依と名く。

論曰 二には相依、譬へば隨つて說く所の法相の中には必ず三性有るが如し。

釋曰 正說の中に於て若し應に法相を說けば必ず三性を說くべし。此の三性は是れ一切法の總相なり。若し一切法を了別せんと欲すれば、必ず須らく此の三相に依るべし。故に相依と名く。

論曰 三には對治依、此の中には、八萬四千の衆生の煩惱行の、對治顯現す。

釋曰 正說の中に於て、若し衆生の行對治を說けば、八萬四千を出でず、謂く四諦等を說くなり。此の說は能く衆生の因果の中の身見、戒取疑を除く。能く衆生の煩惱の對治を成立するを以ての故に、對治依と名く。

論曰 四には[一九]翻依此の中には別義の言詞を說くに由り以て別の義を顯はす、譬へば偈に言へるが如し。

釋曰 正說の中に於て別義を顯說するに由る。文字は但別の義を說くが故に翻依と名く。偈に言へるが如し。

論曰

[二〇]阿婆離・婆羅摩多耶・毘跋耶斯者・修絺多・離施那者・僧柯履多・維槃底菩提物多摩。

【一七】 次には意と依の意義の相異を釋す。此の釋文は唐譯には此の一章の最初に出づ但し隋譯は本譯と一致せり。

【一八】 隋譯には「一に令入の義、所　辟聞乘の中若くは大乘の中に於て世諦の道理に、依つて、人法二種と自性及び差別とを說くが如し」と爲す、但し唐譯は本譯と意を同じくす。

【一九】 唐譯には轉變の祕密と譯せり。

【二〇】 此の密語の偈文は唐及び魏譯には譯文を出し、本譯及び隋譯は原音を出せり、唐譯參照、尙ほ莊嚴論の弘法品の中の梵文は次の如し。
As'ra s'ilama'ayo vi'narg'a ca susthitah / Kle'ena ca susaṃklistā labhante bodhim uttam in.
同漢譯には「不堅堅固解、善住於顚倒、爲煩惱所惱、速得大菩提

とを得と。

釋曰　前の如く應に知るべし是を別時の意と名く。

論曰　三には別義の意。

釋曰　此の言は自ら實相を覺了するは、三性の義に由る道理なることを顯はす。若し但だ聞くのみにて義を覺了するが如き、是れ如來の意ならば、嬰兒凡夫も亦能く覺了せん。是の故に如來の意は此の如くならず。如來の意云何ん。

論曰　譬へば、是の如き等の恒伽の所有の沙數の諸佛に事ふれば、大乘の法義に於て、覺了を生ずることを得と說くこと有るが如し。

釋曰　此の覺了は聞くのみにて成ずることを得るに非ず。若し人已に恒伽沙數の佛に事ふれば、方に成就することを得。是を別義の意と名く。

論曰　四には衆生の樂欲の意。譬へば如來は先に一人の爲に布施を讚歎し、後に還つて毀呰するが如し。

釋曰　有る衆生には、如來は先には爲に布施の功德を讚歎し、後時には或は此の人の爲に布施を毀呰す。此の如きの意は人に隨つて成ずることを得。何を以ての故に、若し人財物に於て慳悋の心有れば、此の心を除かんが爲の故に先には爲に布施を讚歎するも、若し人已に行施を欲樂せんに、施は是れ下品の善根なれば、如來は後時に更に此の施を毀呰して、其の餘の勝行を渴仰せしむ。若し此の意に由らされば讚毀は則ち相違を成ず。如來には別意有るに由るが故に、一の施の中に於て讚毀するも而も相違せず。

論曰　施の如く戒及び[一五]餘修も亦爾なり。是を四種の意と名く。

釋曰　戒等も亦是の如し。有る人には如來は爲に[一六]餘修を讚毀す。此れは是れ世間の修なるが故

【一五】餘修とは隋唐兩譯には一分修と爲す、而して之を釋して世間の修なりといへば、釋文に於ては異る所なし。

【一六】餘修は本文には「讚毀於修」とあるも於の字は餘の字の誤寫なること明かなれば之を訂正せり。

釋曰　如來の說く所の正法は、四意四依を出です。此の意と及び依とは三性に由るが故に決了す可し。若し三性を離るれば別の道理の、能く此の法を決了するもの無し。

論曰　一には平等の意。

釋曰　譬へば人有り平等法爾に執して彼は卽ち是れ我なりと說くが如し。世尊も亦爾なり、平等の法身を心中に安置して、是の如きの言を說く。

論曰　譬へば昔是の時の中に我は毘婆尸と名け、久しく已に成佛せりと說くこと有るが如し。

釋曰　昔の毘婆尸は卽ち是れ今の釋迦牟尼に非らず。此の說の中には平等を以て意と爲せり。是を通の平等と名く。若し別の平等を說かば、謂く[一四]因果恩德皆同じと、是を平等の意と名く。

論曰　二には別時の意。

釋曰　若し衆生有り懶惰の障に由りて、勤めて修行することを樂はざれば、如來は方便を以て說く。此の道理に由りて如來の正法の中に於て、能く勤めて修行せしむる方便の說とは。

論曰　譬へば、若し人多寶佛の名を誦持すれば、決定して無上菩提に於て更に退墮せずと說くこと有るが如し。

釋曰　是れ善根に懶惰なるものは、多寶佛の名を誦持するを以て、上品に進む功德と爲すも、佛意は上品の功德を顯はさんが爲に、淺行の中に於て懶惰を捨てて勤めて道を修せしめんと欲するなり。唯佛名を誦するのみに由つて、卽ち退墮せず決定して無上菩提を得とにはあらず。譬へば一金錢に由りて、營み覓めて千の金錢を得るは、一日に千を得るに非ず、別時に千を得るが如し。如來の意も亦爾なり。此の一金錢は千金錢の因と爲る。佛名を誦持するも亦爾なり。菩提の因を退墮せざらんが爲なり。

論曰　復說いて言へる有り、唯發願するのみに由りて、安樂の佛土に於て往きて彼に生を受くるこ

【一四】修行證果一一の點に於て二佛平等なりと說くをいふ。

明かす。此は正しく是れ無性の意を顯はす。「自體は有に非らず」とは[一一]通の無性を顯はす。諸法は因緣和合を離れて、外緣に關せず自然に成ずることは、此の義有ること無きに由るが故に、一切法は無性なり。體の有に非らざる者も亦是れ無性なり。此れに別意有り、謂く過去未來に約して此の體は已に滅す。此の體に由りて更に法を立てて有と爲すは、此の如きの義無し。此の體は未だ有らざるに、此の體に由りて預め法を立てて有と爲すことも亦此の義無し。是の故に去來の二世は並に自性無し。

（論曰　自體住せざるが故に。）

釋曰　若し諸法已に生ずれば過ぐ。唯生ずる時のみにても能く住するの義無し。既に住すること能はざるが故に現在も亦體無し。此の三世の無性なるも、亦大小の二乘に通ず。

（論曰　取るが如く有ならざるが故に、三性は無性を成ず。）

釋曰　分別性の顯現する所は、實に所有無きに由るが故に、無相の性なり。分別性は體相無きが故に、依他は依止する所無きが故に無生性なり。此の二の無性は無の無性なるが故に眞實無性の性なり。此の三無性は但だ大乘の中にのみ有りて、餘乘には則ち無し。

（論曰　無性に由るが故に、前は後の依止と爲り、生滅無きと本淨と、及び自性涅槃とを成ず。）

釋曰　諸法は永へに實に無性なるに由り、一切の無生等の四義は成ずることを得。何を以ての故に、若し諸法無性ならば是の故に「生無し。」若し無生ならば則ち滅無し。生無く滅無きに由るが故に本來寂靜なり。本來寂靜なるに由るが故に、自性涅槃成ずとは、前は後の成立する依止と爲る。謂く無性は無生を成立するが故に無生の依止と爲る。[一二]後の三も亦爾なり。

顯了意章　第四

論曰　復次に[一三]四意四依有り、一切の佛世尊の教は應に隨つて決了すべし。

【一一】通の無性とは大小乘に通ずる一般的意義の無性の意。

【一二】後の三とは無滅と本淨と自性涅槃となり。

【一三】唐譯には意を意趣とし、依を祕密と譯し、更に隋譯は之を合と譯せり。

が如く顯現するが故に、非法に非らず。法に非らず非法に非らざるに由るが故に、無二の義を說く。

論曰 一分に依りて說いて言へば　或は有或は非有なり　二分に依りて說いて言へば　有に非らず非有に非らず。

釋曰 若し一一の分に依れば、諸法は有及び非有なりと說く、顯現する所の如く是の如く有ならざるが故に有と說く可からず、實に有に非ずと雖も有の如く顯現するが故に非有と說く可らず。若し一一の分を捉れば應に此の如く判ずべし。若し依他性に約すれば具さに二分を有して、諸法は有に非らず非有に非らずと說く。

論曰 顯現するが如く有ならず　是の故に永へに無なりと說く　顯現するが如く實に有り　是の故に無に非らずと說く。

釋曰 顯現する所の如く此の如く有ならず。有ならざる義に依るが故に「永へに無し」と說く。復有ならずと雖も顯現せざるに非ず。唯顯現の義有るに依るが故に「無に非らず」と說く。

論曰 自體は有に非らず、と　自體は住せざるが故に、と　取るが如く有ならざるが故にとに由りて　三性は無性を成ず、　無性に由るが故に　前は後の依止と爲り　生滅無きと本淨と　及び自性涅槃とを成ず。

(**論曰** 自體は有に非らざるに由り。)

釋曰 今當に如來の說く所の無性の意を顯はすべし。初句は一分に無性は大小乘に通ずることを

釋曰　如來は此の義を顯はさんが爲の故に、金を藏する土の譬を說く。金は藏する者と爲す、地界は是れ金の種子なるが故に說いて「金を藏する土」と名く。堅觸を以て地界と爲し、所造の色を以て土と爲す、謂く色塵等なり。此の三は了別す可し、此の地界は先に土相に由りて顯現し、後に金相に由りて顯現す。何を以ての故に、此の地界にして、若し火の鍊する所と爲れば、金相は則ち顯はる。是の故に地界に於て實に金有ること、此の義信ず可し。

論曰　此の如く本識は未だ無分別智の火の爲に燒鍊せられざる時は、此の識は虛妄の分別性に由りて顯現し、眞實性に依りて顯現せず。若し無分別智の火の爲に燒鍊せらるる時は、此の識は成就せる眞實性に由りて顯現し、虛妄の分別性に由りて顯現せず。是の故に虛妄の分別性の識、卽ち依他性には二分有り。譬へば金を藏する土の中の、所有の地界の如し。復次に有る處には、世尊は一切の法は常住なりと說き、有る處には一切の法は無常なりと說き、有る處には常に非ず無常に非ずと說けり。何の義に依りて常と說くや。此の依他性は眞實性の分に由れば常住なり、分別性の分に由れば無常なり、二性の分に由れば常に非ず無常に非ざるなり。此の義に依りて常・無常・無二と說くが如く、此の如く、苦・樂・無二と、善・惡・無二と、空・不空・無二と、有我・無我・無二と、淨・不淨・無二と、有性・無性・無二と、有生・無生・無二と、有滅・無滅・無二と、本來寂靜・不寂靜・無二と、本來涅槃・非涅槃・無二と、生死・涅槃・無二と說けり。此の如き等の差別に由りて、諸佛如來は義に依りて密語せり。此の三性に由りて應に隨つて常・無常等の正說を前に解釋せるが如く、決了すべし。此の中に偈を說く。

法は實に有ならざるが如く　彼れ種々に現ずるが如し　此の法と非法とに由る　故に無二の義を說く。

釋曰　諸法は法に非らず非法に非らず。此の法は實に所有無きに由るが故に、法に非らず。有なる

論曰　婆羅門問經の中に言く、世尊は何の義に依りて此の如きの言を說くや。如來は生死を見ず涅槃を見ずと。依他性の中に於て、分別性に依り及び眞實性に依る。生死を涅槃と爲すは、無差別の義に依る。何を以ての故に、此の依他性は分別に由りて一分は生死を成じ、眞實に由りての一分は涅槃を成ずればなり。

釋曰　依他性は生死に非ず。此の性は眞實性に因りて涅槃を成ずるに由ればなり。此の性は涅槃に非ず。何を以ての故に、此れ分別分に由れば卽ち是れ生死なるが故なり。是の故に〔一〇〕定んで一分と說く可からず。若し一分を見れば餘分の性に異らず。是の故に生死を見ず亦涅槃を見ずと。此の意に由るが故に如來は婆羅門に答ふること此の如し。

論曰　阿毘達磨修多羅の中に、佛世尊說く、法に三種有り、一には染汚分、二には清淨分、三には染汚清淨分なりと。何の義に依りて此の三分を說くや。依他性の中に於て、分別性を染汚分と爲し、眞實性を清淨分と爲し、依他性を染汚清淨分と爲す。此の如きの義に依るが故に三分を說く。

釋曰　阿毘達磨修多羅の中に說く、分別性は煩惱を以て性と爲し、眞實性は清淨品を以て性と爲し、依他性は兩分を具するに由りて、二性を以て性と爲すと。故に。法に三種有りと說く、一には煩惱を分と爲し、二には清淨を分と爲し、三には二法を分と爲す。此の義に依るが故に此の說を作す。

論曰　此の義の中に於て何を以て譬と爲すや。金を藏する土を以て譬と爲す。譬へば金を藏する土の中に三法有ることを見るが如し、一には地界、二には金、三には土なり。地界の中に於て土は有に非らざるも而も顯現し、金は實には有なるも顯現せず。此の土を、若し火を以て燒錬すれば、土は則ち現ぜずして、金相は自ら現ず。此の地界に土の顯現する時は、虛妄の相に由りて顯現し、金の顯現する時は眞實の相に由りて顯現す、是の故に地界に二分有り。

〔一〇〕此の句は隋譯に「世尊は依他の中に偏一の性無きを見る」といふ。

を成じて、顯現せざるに非らざるが如く、菩薩の生を受くるも亦爾なり。實には六道の受生の身無きも、一切の衆生を利益する事を作し、及び受生の身も亦顯現す。復何の義有りて、佛世尊は幻事の等の譬を說くや。[九]更に別義有り、今當に佛意を說くべし。幻事の譬は眼等の六内根を對治せんが爲なり。諸根は幻像の如く、實には有に非らざるも而も顯現して有に似たればなり。鹿渇は器世界に譬ふ、此の大に由るが故に、顯現して水の如くなるも、實には所有無し、而も鹿渇に於ては顯現して有に似たり。動搖するを以ての故なり。此の器世界を衆生は執して色等の受用す可き法と爲すは、鹿渇の中の水を執して爲れ飲む可しと謂ふが如し。此の執を對治せんが爲の故に夢相の譬を說く。譬へば夢の中に於て色等の諸塵は所有無きも、此に因りて愛憎の受用有るが如し。身業を對治せんか爲の故に影の譬を說く、善惡の身業に依りて別色の影に似て生ずる有り。口業を對治せんが爲の故に谷響の譬を說く、此の譬に由りて口業を因と爲して口業の果報有ること、谷響の如くなるに由ることを顯はす。意業に三種有り、一には不寂靜地、即ち是れ欲界の散動の業なり、二には寂靜地、即ち修慧なり、三には聞思の二慧なり。不寂靜地の意業を對治せんが爲の故に、光影の譬を說く。此の譬に由りて意業の果報は、譬へは光影の如くなるを顯はす。寂靜地の意業を對治せんか爲の故に、水月の譬を說く。意業の果報は、譬へは水月の如くなるを顯はす。水中の月は實には月有ること無きも而も顯現して月に似たるが如く、寂靜の心も亦爾なり。實には所有無きも、寂靜の心の中に於て而も動搖有りて、現在及び未來世の果現顯するも、此の寂靜の心を離れては別の果有ること無し。聞思の品類の意業を對治せんか爲の故に、變化の譬を說く。若し是れ聞思の熏習より生ずる業の果報ならば、譬へば變化の品類の非有なるも亦有として顯現するが如く、聞思の生ずる業の果報も亦爾なり。此の法爾の三性を相と爲すに由りて、如來の說く所の經に悉く皆隨順す。今當に經に隨順する義を說くべし。

【九】次は八喩を別釋す。

論曰　若し實に法無ければ、善惡の二業の愛非愛の果報は云何が生ずることを得るや。此の疑を決せんが爲の故に影の譬を說く。

釋曰　譬へば鏡中には實の影塵無きも、面相に於て影識の起るが如く、此の影塵は顯現せざるに非ず。愛憎の兩果も亦爾なり。實には有るに非ざるも而も顯現して有に似る。

論曰　若し實に法無ければ、云何が種々の智生ずるや。此の疑を決せんが爲の故に、光影の譬を說く。

釋曰　譬へば人の影を弄するが如く、影に種々の相貌有ることを見れば、影に隨つて種々の識を起すも、實の影塵無し、種々の識の塵も亦爾り、實には所有無くして而も種々の塵有りて顯現す。

論曰　若し實の法無ければ、云何が種々の言說起るや。此の疑を決せんが爲の故に谷響の譬を說く。

釋曰　譬へば實には響塵無きも而も顯現して聞く可きが如く、言說の事も亦爾なり。實には所有無きも而も顯現して聞く可し。

論曰　若し實に法無ければ、云何が眞實の法を緣ずる、定心の境界を成ずるや。此の疑を決せんが爲の故に水月の譬を說く。

釋曰　譬へば水月には實の塵無きも、而も顯現して見る可きが如し。水は潤滑にして澄淸なるに由るが故なり。若し人心に定を得れば、實の塵無きを境と爲し、亦顯現して見る可し。水は定に譬ふ。定心は潤滑にして澄淸なるを以ての故なり。

論曰　若し實に法無ければ、云何が諸の菩薩は故らに心を作し、無顚倒の心にて他の爲に利益の事を作し、六道に於て生を受くるや。此の疑を決せんが爲の故に變化の譬を說く。

釋曰　譬へば實には變化の塵無く、變化する者の作す所に隨つて、一切の所作の事は皆所化の塵

の意用の爲に如來は依他性を說くに、幻事等を以て譬と爲すことを、今當に此の義を說くべし。

（**論曰**「[八]若し四の清淨を說けば此の說は眞實に屬す、清淨なるは本性と無垢と道と緣々とに由る、一切の清淨の法は四にて皆品類を攝す。」）

何の因何の緣により是れ依他性は經に說く所の幻事等の譬の顯はす所の如くなるや。依他性の中に於て他の虛妄の疑惑を除かんが爲なり。云何が他は依他性の中に於て虛妄の疑惑を生ずるや。諸說は依他性の中に於て此の如き虛妄の疑心有り、若し實に物有ること無ければ云何が境界を成ずるやと。此の疑を決せんが爲の故に幻事の譬を說く。

釋曰　虛妄に於て疑を起して謂へらく、爲れ實に有なりと。是れ虛妄なることを信ぜざるが故に虛妄の疑と名く。此の法若し顯現して境界を成ずれば、云何が虛妄と言ふや。故に幻事を以て依他性に譬ふ。譬へば幻像の如く、塵は實に有らざるも境界を成ず。諸法も亦爾なり。此の疑を除かん爲の故に須らく譬を立つべし。

論曰　若し境界無ければ、心及び心法は云何が生ずることを得るや。此の疑を決せんが爲の故に鹿渴の譬を說く。

釋曰　鹿渴は心及び心法に譬へ、水を以て塵に譬ふ。鹿渴動搖して識を生じ、水を緣じて境と爲すも、實には水有ること無し。此の如き心及び心法は變異の事を起し、塵有ること無きに於て塵を緣ずる識を生ず。

論曰　若し實に塵無ければ愛非愛の受用は、云何が成ずることを得るや。此の疑を決せんが爲の故に夢相の譬を說く。

釋曰　譬へば夢の中に於て實には塵有ること無きも、亦愛憎の受用有ることを見るが如く、此の依他性の中にも亦爾なり。實に塵有ること無きも、亦愛憎の受用有ることを見る。

【八】此の一偈半は之を別出するも釋文無し、論本の連絡を明瞭ならしめんが爲に、何の因云云より特に行を改む以下は依他性の衆譬を說く。

論曰　何を以ての故に、

釋曰　云何が道を生ずる境界の清淨は、是れ眞實性の攝にして、分別及び依他に非ずと說くや。

論曰　此れ是の清淨の因を說くが故に、分別に非ず。清淨の法界より流るゝが故に、依他に非ず。此の四種の清淨の法に由りて、一切の清淨法を攝して皆盡す。

釋曰　此の正說若し分別性に屬すれば、染汚の因を成ずべし、是れ清淨の因なるが故に、分別性に非ず。若し依他性に屬すれば、依他性の如く亦應に虛を成ずべし。此れ清淨なる法界の流を體と爲す。是の故に虛に非ず。二性の外に出づるを以ての故に眞實性に屬す。若し四の清淨の中隨つて一の清淨を說くも、此れ大乘の中に於て說く、應に知るべし眞實性に屬することを。第一第二の清淨は變異無きに由るが故に眞實を成じ、第三第四は顚倒無きに由るが故に眞實を成ず。

論曰　此の中に偈を說く。

釋曰　重ねて此の義を明かして顯了ならしめんと欲するが故に更に偈を說く。

論曰

幻等は依他を顯はし　無と說くは分別を顯はす　若し四の清淨を說けば　此の說は眞實に屬す。
清淨なるは本性と　無垢と道と緣々とに由る　一切の清淨の法は　四にて皆品類を攝す。

(**論曰**[七]　幻等は依他を顯はし。)

釋曰　是の處に如來は一切の諸法は幻事の如く、乃至變化の如しとの譬を說く。應に知るべし、此の言は是れ依他を說くことを。

(**論曰**　無と說くは分別を顯はす。)

釋曰　若し色無く乃至一切法無しと說けば、應に知るべし、此の言は是れ分別を說くことを、此

【七】次は偈文を再出して之を釋す。

釋曰　若し此の性無ければ眞實性も亦無し。何を以ての故に、若し染汚有れば則ち清淨有り。若し兩法悉く無ければ則ち一切皆無し。此の一切の無なることは、此の方便に由りて能く其の成ぜざることを顯はす。何をか方便と爲すや。生死涅槃を撥無することは、此の義立す可らず。染汚品と及び清淨品とは(これあるを)見る可きに由り、是の故に兩の法顯現す。若し撥して無と言はゞ則ち邪見を成ず。亦損減の謗と名く。是の故に分別性は是れ無なるも、依他性は撥して無と言ふ可らず。故に知る、依他と分別とは同體を得ざることを。

論曰　四種の清淨法とは、一には此の法は本來自性清淨なり、謂く、如々・空・實・際・無相・眞實の法界なり。

釋曰　是の法は自性本來清淨なるに由る、此の清淨なるを如々と名け、一切の衆生に於て平等に有り。是れ通相なるを以ての故に、此の法は是れ有なるに由るが故に、一切の法を說いて如來藏と名く。

論曰　二には無垢清淨なり、謂く此の法は一切の客塵の障垢を出離す。

釋曰　是の如來藏は惑智の兩障を離れ、此れ永く清淨なるに由るが故に、諸佛如來は顯現することを得。

論曰　三には至得道の清淨なり、謂く一切の助道法と、及び諸の波羅蜜等となり。

釋曰　清淨を得んが爲に菩薩は道を行ず。此の道は能く清淨なることを得るが故に、亦清淨道とも名く。卽ち般若波羅蜜と、及び念處等の諸の助道法となり。

論曰　四には道の生ずる境界の清淨なり、謂く正しく大乘法を說くなり。

釋曰　道及び助道法の生ずる所緣の境界なり、謂く修多羅等の十二部の正說は、是れ清淨の資糧なるが故に、亦清淨と名く。

(論曰　法無くして似有を顯はし、染無くして而も淨有り。)

釋曰　此れ兩種の相違に於て疑を生ずることを明かす。法無くして似有の法を顯はすは、是れ第一の相違なり。無染の中に於て而も淨有りとは、是れ第二の相違なり。

(論曰　是の故に幻事に譬へ亦以て虚空に譬ふ。)

釋曰　卽ち此の譬を以て弟子の疑を釋す。譬へば幻像の如く實には無なるも顯現して有と爲る。諸の分別の法も亦爾なり、實には無なるも而も似有を顯現す。此の有も亦見るべし。譬へば虚空の如し。雲等の五障の染する所に非ず。自性清淨なり。雲等の障の後に滅する時、亦空を説いて淨と爲す。諸法も亦爾なり。本より染有ること無く自性清淨なり、客塵の障蓋後に滅すれば則ち清淨なるを見る。

論曰　[五]云何が此の如く顯現するも而も實に有なるに非ず、依他性の一切の種は有ならざるに非ずや。

釋曰　此れ問ふ、若し依他性は、顯現する所の如く此の如く所有無く、一切一切の種なる、此の性は亦無にもあらずとは、此の意云何んと。

論曰　若し依他性無ければ、眞實性も亦無く、一切の無なることは成ぜず。若し依他性及び眞實性無ければ、則ち染汚及び清淨品有ること無き過失あり。此の二品無きに非らざることを知るべし。是の故に一切は皆無に非ず。此の中に偈を説く。

　若し依他性無ければ　　眞實性も亦無く　　則ち恒に二品　　謂ゆる染汚と清淨とは無し

諸佛世尊は大乘の中に於て、[六]鞞佛略經を説く。此の經の中に説く、云何が應に分別性を知るべきや、品類有ること無しと説くに由りて、此の性を知るべし。云何が應に依他性を知るべきや。幻事・鹿渴・夢相・影光・谷響・水月・變化と説くに由り、此の如き等の譬にて其の性を知るべし。云何が眞實性を知るべきや、四種の清淨の法を説くに由りて、此の性を知るべし。

【五】十に廣く三性の有無等の差別を明かす。

【六】鞞佛略經(Vaipulya)譯して方廣經といふ。

相違す。是の故に若し[三]兩性にして一體ならば、則ち第二の相違を成ず。
論曰 名は不定なるに由り、體相ひ雜はるは此の義相違す。
釋曰 譬へば瞿の名は九義に目くるが如し。若し名と義と一體なりと言はゞ、是れ兩體相違して則ち第三の相違を成ず。瞿の名の目くる所の諸義は、相貌同じからず。一體なりと許すに由り、相違の法は一處に成ずるを得ん、此の如きの義無し。是の故に兩性は一體と爲す可からず。
論曰 此の中に偈を説く、
釋曰 重ねて前の義を顯はさんとす。是の故に偈を説く、初の偈は依他と分別と共に一體ならざることを顯はす。此の義の成ずるを得るは三の相違に由るが故なり。
論曰

名の前に於て智無きと　多名と及び不定とにて　義成ず、同體と　多と雜體との相違に由る。　法無くして似有を顯はし　染無くして而も淨有り　是の故に幻事に譬ふ　亦以て虚空に譬ふ。

([四]**論曰** 義成ず。)
釋曰 即ち依他性と分別性と同體ならざる義の成ずることを明かす。
(**論曰** 名の前に於て智無しとは、同體相違す。)
釋曰 此れ即ち第一の相違なり。
(**論曰** 多名にして同體ならば、多體相違す。)
釋曰 此れ即ち第二の相違なり。
(**論曰** 及び不定にして、同體ならば雜體相違す。)
釋曰 此れ即ち第三の相違なり、後の偈は弟子に教へんが爲なり、弟子は二事に於て疑を生ず。

【三】兩性とは依他と分別となり。

【四】次の六項の論曰は前の二偈の再出にして、前の四は第一偈の意義を取つて文意を明了ならしめ、後の二は第二偈を其のまゝ再出せり、故に論曰とあるも之を論本と見るべきものに非らず。

巻の第六

釋應知勝相の二

論曰　[一]云何が此の依他性は、分別性に由つて顯現せる似法なるも、分別性と同體にあらざることを知るを得るや。

釋曰　此れ問ふて言く、分別性の顯現せる似法なるも、此の似法は依他性を離れず、應に依他性と同體なるべし、云何が同體にあらずと言ふや。

論曰　未だ名を得ざる前に義に於て應に智を生ずべからざるが故に、法の體と名と一なれば則ち此の義相違す。

釋曰　依他性の性は復分別性の一分に由りて顯はるゝと雖も、分別性と同體ならず、此の義を顯はさんが爲の故に三證を立つ、此れ即ち第一證なり。若し依他と分別と共に一體と(いはゞ)、此の執は相違す。若し依他と分別と共に一體ならば、此の智は名を[二]聞かざるも義に於て應に生ずべし。譬へば瓶の名を離れて瓶の義に於ては瓶の智生ぜざるが如し。若し瓶の義と瓶の名と一體ならば、此の事成ずべからず。名と義とは同相ならざるが故なり。若し名義共に一體なりと執すれば、此の執は則ち相違す。此の證は名は是れ依他なることを顯はし、義は是れ分別なることを顯はす。何を以ての故に、此の依他は名に由りて分別せらるゝが故なり。

論曰　名は多なるに由るが故に、若し名と義と一ならば、名は既に多なれば義も應に多を成ずべし。此れ義と體と相違す。

釋曰　此れ即ち第二證なり。或は一義に多名有り。若し名と義と共に一體ならば、名の多きが如く、義も亦應に多を成ずべし。若し爾らば一義に多體有るべし。一物にして多體なるは、此の義

【一】九に依他性と分別性と同體にあらざることを明かす。

【二】聞は開に作るも錯誤なるべし。

釋曰　道理に異り有るが故に、相雜せず。

論曰　此の道理に由つて、此の性は、依他を成ずるも、此に由り分別と及び眞實とを成ずべからず。

釋曰　此は卽ち此れ前に明かす所の、種子に繫屬すると及び淨品不淨品等に繫屬するとの道理に由るが故に、依他を成ずるも、此の道理を以ては、分別と及び眞實との性を成ぜしむべからず。

論曰　此の道理に由つて、此の性は、分別を成ずるも、此に由りて依他と及び眞實とを成ぜず。

釋曰　此は卽ち前に明かす所の、自性を分別すると差別を分別す等の道理に由るが故に分別を成ずるも、此の道理を以ては依他と及び眞實とを成ぜしむべからず。

論曰　此の道理に由つて、此の性は、眞實を成ずるも、此に由りて依他と及び分別とを成ぜず。

釋曰　此は卽ち此れ前に明かす所の、自性成就、淸淨成就等の道理に由るが故に眞實性を成ずるも、此の道理を以ては依他と及び分別とを成ぜしむべからず。

て、無分別智生じ、無分別智に由つて、諸の分別の惑を滅す。

論曰　此の十種の散動の分別を對治せんが爲の故に、一切の般若波羅蜜敎の中に於て、佛世尊は無分別智を說きて、能く此の十種の散動を對治せり。應に知るべし。般若波羅蜜經の義を具足することを。般若波羅蜜經に言ふが如し、[九八]云何が菩薩は般若波羅蜜を行ずるや。舍利弗よ、是の菩薩は實に菩薩有るも、菩薩有ることを見ず。菩薩の名を見ず、般若波羅蜜を見ず。行を見ず、不行を見ず、色を見ず、受想行識を見ず。何を以ての故に。色は自性空なるに由つて、空に由らざる空なり。是の色は空にして色に非ず。色は空と異ること無きが故に、色は卽ち是れ空にして、空は卽ち是れ色なり。何を以ての故に。舍利弗よ、此は但だ名有るのみ。謂ゆる色なり。是の自性には生無く滅無く染無く淨無きも、假立の名に對して諸法を分別す。假立の客名に由つて、隨つて諸法を說く、隨つて說くが如く如く、是の如く是の如く執著を生起す。此の如きの一切の名を菩薩は見ず。若し見ざれば、執著を生ぜず。色、乃至、識を觀ずるが如きも、亦應に此の如きの觀を作すべし、と。此の般若波羅蜜經の文句に由つて、應に隨順して十種の分別の義を思惟すべし。

釋曰　八種に色陰を觀ずるが如く、亦應に八種に餘の四陰を觀ずることを作すべし。乃至、前の四事も亦應に八種の觀を作すべし。

論曰　[九九]若し此の別意に由らば、依他性に三性有ることを成ず。是の三性は、云何が性に三の異り有りて、[一〇〇]相ひ雜はることを成ぜざるや。

釋曰　此の問は、先に三性の異を分ち、次に依他性に別義有りて三性を成ずることを明かせり。若し依他性の中に於て、三性を明かして、三の異り有れば、則ち三性は相ひ雜はることを成じ。偏へに說いて一性と爲すべからず。云何が相雜せざるや。

論曰　相ひ雜はるの義無し。

【九八】此の經說は唐譯には出さず、但し隋譯は今と一致す。

【九九】八に依他性は三性を成して相雜せざることを明かす。

【一〇〇】相ひ雜はるとは混雜して區別し難きをいふ。

釋して曰く、唯だ名有るのみなるは、是れ色の通相なり。何を以ての故に。若し名を離るれば色は實に本性無ければなり。

論曰[九五] 別の散動と。

釋曰 已に執して色に通相有りとし、又色を分別して生滅染淨等の差別有りとす、此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く、是の自性は生無く滅無く、染無く淨無しと。

釋して曰く、此れ色の所有無きを通相と爲す。若し生有れば卽ち染有り。若し滅有れば卽ち淨有り。此の四義無きに由るが故に、色には別相無し。

論曰 名の如く義を起す散動と。

釋曰 名の如く義を執せば、義に於て散動す。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く假立の名に對して諸法を分別すと。

釋して曰く、名は是れ虛假の所作なり。諸名に對して一切法を分別す。

論曰 義の如く名を起す散動となり。

釋曰 義の如く名に於て舊執を起す。此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く假立の客名に由り、隨つて諸法を說くと。

釋して曰く、名は法と同相ならず。經に言く、[九六] 隨つて說く如く如く、是の如く是の如く、執著を生起すと。

釋して曰く、假りに立つる所の名に隨つて、諸法を說き、名と法と異ならずと計するなり。經に言く、此の如きの一切の名を、菩薩は見ず。若し見ざれば執著を生ぜずと。

[九七] 釋して曰く、十種の散動を對治せんが爲の故に、般若波羅蜜を說けり。此の說を因と爲すを以

【九五】 隋唐兩譯共に差別の散動といふ。

【九六】 說けば說くに隨つて語を逐ふて益〻執着を起すの意。

【九七】 此の釋は經說に依る十散動の總結にして隋唐兩譯にも之れ有り。

經に言はく、[九二]空に由らざる空なりと。
釋して曰く、此の色は眞如空に由らざるが故に空なり。

論曰　一執の散動と。

釋曰　謂く、依他と分別とは卽ち是れ空なりと。此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く、是の色は空にして色に非ずと。
釋して曰く、若し依他性と眞實性と是れ一ならば、眞實性は是れ清淨の境界なり。依他性も亦應に此の如くなるべし。

論曰　異執の散動と。

釋曰　謂く、色は空に異ると。此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く、色は空に異ること無きが故に、色は卽ち是れ空にして、空は卽ち是れ色なり、と。
釋して曰く、若し色と空と異らば、此の空は則ち色が家の法空を成ぜず(又)色の通相を成ぜず。此の義成ぜざるは、譬へば有爲法と無常の相と異ならざるが如し。若し分別性を捉へて、說いて色は卽ち是れ空なりと言はゞ、空は卽ち是れ色なり。何を以ての故に。此の分別の色は、永く所有無ければなり。此れ永く所有無ければ、卽ち是れ有にして、卽ち是れ空なり。此の空は卽ち是れ色にして所有無し。依他性は眞實性に於て一なりと說くべからざるが如くならず。清淨と不淸淨との境界に由るが故なり。

論曰　[九三]通の散動と。

釋曰　色の有する通相を執して性と爲す。謂く礙有りと、此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く、何を以ての故に、舍利弗よ、此れ但だ名有るのみ、所謂る[九四]色なりと。

【九二】唐譯には「空に由らざるが故に」と爲し、隋譯には單に不空といひ、之を釋して「色法は如にして不空なるが故に」といふ。

【九三】隋唐兩譯共に自性散動といふ、蓋し自性は諸法の通相なれば今は通散動といふ。

【九四】隋譯には、所謂る色なりの次に之を釋して「色の自性は卽ち是れ所有無きを以ての故に」とあり。唐譯も亦同じ。

を見ず」（といふ）。第二解に云ふ、初の二は人と法とを見ざることを明かし、次の二は人の法を行ずるを行と爲すことを見ずと、人の法を行ぜざるを不行と爲すことを見ざるとを明かす。後の一は、行の所對治は卽ち五陰なることを明かす。五陰は卽ち苦集の二諦にして、集の斷ずべきを見ざると、苦の離るべきを見ざるとなり。第三解に云ふ、初めの二は能行の人と及び所行の道とを見ざることを明かし、次の二は助道を見ず。後の一は所對治を見ざることを明かす。此の[八八]五事の中の一々の事は、皆[八九]八法を具す。

論曰　無有相の散動と。

釋曰　有相無きは是れ散動の因なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く、是の菩薩は實に菩薩有りと。

釋して曰く、實に有りと說くことに由つて菩薩有ることを顯はす。眞如の空を以て體と爲せばなり。

論曰　有相の散動と。

釋曰　有相は是れ散動の因なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言く、菩薩有るを見ずと。

釋して曰く、菩薩有るを見ずとは、[九〇]分別と依他とを以て體と爲せばなり。

論曰　增益の散動と。

釋曰　有を以て、所有無きを增益すれば、此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、經に言はく、何を以ての故に、色は自性空なるに由ると。

釋して曰く、[九一]分別の色性は、色性空なるに由るとなり。

論曰　損減の散動と。

釋曰　無を以て實有を損減すれば、此の執は卽ち是れ散動なり。此の散動を對治せんが爲の故に、

【八八】五事とは、名と事に各兩句あると物に一あるを合して五事といふ。

【八九】八法とは、十散動の中の後の八をいふ。

【九〇】唐譯に「遍計所執及び依他起を以て體と爲す」と爲す。

【九一】分別とは、分別性にして遍計所執のこと。

論曰　八には如理の分別なり。

釋曰　是れ前の分別の、正法を聽聞するを因と爲す。

論曰　謂く、正法內の人の正法を聞く類の分別なり。

釋曰　謂く、聲聞、緣覺、菩薩の人は、正しき聞思修の法の中に在ればなり。

論曰　九には[八七]決判して執する分別なり。謂く不如理なる思惟の種類にして。

釋曰　不正なる思惟を以て因と爲す。

論曰　身見を根本と爲して、六十二見と相應する分別なり。

釋曰　我見に依止することは、梵網經に明かす所の見の類の如し。謂く、六十二見と相應する分別なり。

論曰　十には散動分別なり。謂く菩薩の十種の分別なり。

釋曰　菩薩の分別は　般若波羅蜜と相應せざれば、悉く散動と名く。般若波羅蜜經に、十種の法對治を說けり。此の十種の散動の初めの二法は、正に是れ般若波羅蜜の事なり。謂く、眞空は俗有を遣ることを顯はす、卽ち是れ「實に菩薩有り。菩薩有ることを見ず」(といふ)。次に五事有るに、三解有り。第一解に云ふ、名と事と物とを遣るに、初めは兩ながら名を遣る。卽ち是れ「菩薩の名を見ず、般若波羅蜜を見ず」と(いふ)。(これ)初は人の名を遣り、後は法の名を遣るなり。次には兩ながら事を遣る。卽ち是れ「行を見ず不行を見ず」(といふ)。此に、三義有り。一には菩薩は能く行じ、二乘は能く行ぜざることを見ず。二には正勤助道を行と爲すことを見ず、懶惰等の所對治を不行と爲すことを見ず、三には菩薩の修道未だ滿ぜざるが故に行ずるを見ず、菩薩の修道已に滿ずるが故に行ぜざるを見ずとなり。後の一は物を遣る。此の名と此の事とは、何物を以て根本と爲すや。五陰を以て根本と爲すも、亦五陰を見ざるなり。即ち是れ「色を見ず受想行識

【八七】隋譯に見處相應分別といふ、決判すとは見の起因なり。

道の變異と名く。識は此の道を分別するが故に、道相變異分別と名く。等の言は餘の五道を攝す。

論曰 欲界等との變異なり。

釋曰 謂く、具縛と離縛との相の變異なり。三界の生を受くるに、具縛及び離縛の前後の變異有り。識は此の生を分別するを、生相變異分別と名く。等の言は色と無色との界を攝す。

論曰 五には[八四]依顯示の變異分別なり。

釋曰 謂く眼等の識の變異なり。此の分別は、眼等の識の變異の相を以て、相と爲す。

論曰 謂く前に說く所の變異の如く。

釋曰 前に說く所の老等の變異の如く、變異の位の中に於て、眼等の識の如きも變異す。

論曰 變異の分別を起す。

釋曰 意識も亦此の依顯示の變異の如く分別するが故に、依顯示の變異分別と名く。

論曰 六には[八五]他引分別なり。

釋曰 此の分別は他の言說に因つて生ず。

論曰 謂く、非正法を聞く類と正法を聞く類との分別なり。

釋曰 此の分別に、二種有り。一は非正法を聽聞するを類と爲す分別と。二は正法を聽聞するを類と爲す分別となり。謂く惡法を行ずる類の分別と、善法を行ずる類の分別となり。[八六]思修も亦爾なり。此の分別は、他の言說を聞くを以て相と爲すが故に、他引分別と名く。

論曰 七には不如理の分別なり。

釋曰 是れ前の分別の非正法を聽聞するを、因と爲す。

論曰 謂く、正法外の人の非正法の類の分別なり。

釋曰 謂く、九十六種の外道は、正しき聞思修の法の外に在ればなり。

【八四】隋譯は相似變異分別といふ。

【八五】隋譯に他授分別といふ。

【八六】前の聞に對して思と修とも亦爾りと推知せしむ。

論曰 三には[八一]依顯示分別なり。謂く依止の眼等を有する識識なり。

釋曰 此の分別は依と及び顯示とを以て相と爲す。亦は、是れ所分別にして、亦は是れ能分別なり。卽ち是れ六根と及び六識となり。六根は是れ所依止にして、六識は是れ能依止なり。

論曰 四には相變異分別なり。

釋曰 相とは謂く六塵なり。此の分別は相の變異を以て相と爲す。

論曰 謂く老等の變異と。

釋曰 是れ身の四大の前後に變異するを老と名く。若し識にして此の老を分別すれば、老相變異分別と名く。等の言は病及び死とを攝す。

論曰 苦樂等の受と。

釋曰 身心の苦樂の受の前後の變異なり。識は此の受を分別するを、受相變異分別と名く。等の言は不苦不樂受を攝す。

論曰 欲等の惑と。

釋曰 [八二]心欲の前後に變異す。識は此の欲を分別するを、欲相變異分別と名く。等の言は瞋癡等の惑を攝す。

論曰 及び枉時節等の變異と。

釋曰 理に非ずして逼害[八三]縛錄するを枉と爲し、候に乖かずして寒熱豐儉するを時節と爲す。枉と及び時節とは、前後に變異す。識は此の枉及び時節を分別するを、枉時節相變異分別と名く。等の言は、因緣有りて逼害縛錄すると、候に乖いて寒熱豐儉するとを攝す。

論曰 地獄等と。

釋曰 是れ道の變異なり。此の五陰を捨てゝ、地獄道の五陰を受く。諸道は前後變異するが故に、

【八一】隋譯には似相分別といふ。之を釋して「彼の相の種類の中に於て、若し分別生ずれば所分別の中に於て能く分別するが故に此の名を得」といへり。依とは所分別、顯示とは能分別をいふ。

【八二】心欲とは貪の意。

【八三】隋釋に「枉橫とは謂く殺縛等」となす。唐譯も亦然り。本釋の縛錄は恐らく縛殺の誤寫なるべし。

論曰　譬へば未だ義を識らざる名を分別するが如し。
釋曰　未だ此の名の訓ずる所の義を識らざるが故に、此の名を解せず。
論曰　四には義に依て義の自性を分別す。
釋曰　此の物の體を見て、未だ其の名を識らざる如きは、此の物の類を以て、此の物を分別し、方に其の體を識る。
論曰　譬へば、未だ名を識らざる義を分別するが如し。
釋曰　未だ名を識らざるに由るが故に、義を以て義を分別するなり。
論曰　五には、二に依て二の自性を分別す。
釋曰　金銀の二名に金銀の二體有るが如し。此の名の體に於て並びに未だ了せず、[七七]金の名は亦體に目くと爲すや、白體に目くと爲すや。銀の名も亦爾なり。赤體を主と爲すや、金の名を主と爲すや。銀を白體に名くるも亦爾なり。
論曰　譬へば、此の名と此の義とは、何の義なりや、何の名なりといふが如し。
釋曰　意は[七八]向に釋せるが如し。
論曰[七九]　若し一切の分別を攝すれば、復十種有り。
釋曰　前の如く、已に具攝の義有るも、但し未だ品類の具攝の義を明かさず。此の十種の分別は、更に品類の攝の義を顯はし、又一切を攝して皆盡くすことを明かす。
論曰　一には根本分別、謂く本識なり。
釋曰　是れ一切の分別の根本にして自體も亦、分別なり、即ち是れ阿梨耶識なり。
論曰　二には相分別、謂く色等の識なり。
釋曰　此の分別は[八〇]相を以て相と爲す。即ち是れ色等の塵識なり。

【七七】以下の諸句は未だ了せざる相を示すなり。
【七八】向に釋せりとは前の金銀の例釋を指す。
【七九】前二段に於て四種の分別と五種の分別とを說き以下第七に十種の分別を明かす。
【八〇】相を以てとは所緣の相を以ての意なり。

論曰　復、分別有り、更に四種を成ず。一には自性を分別し、二には差別を分別す。三には有覺、四には無覺なり。有覺とは能く名言を了別する衆生の分別なり。

釋曰　若し衆生にして、先に見聞等の四種の言説を了別すれば、名言に因つて分別を起すが故に有覺と名く。

論曰　無覺とは名言を了別すること能はざる衆生の分別なり。

釋曰　若し衆生にして、牛羊等の如き、先に見聞等の四種の言説を了別すること能はず。彼に由りて分別する所の如く、言語に由りて成立すること能はざるが故に無覺と名く。

論曰　復次に、分別に五種有り。一には名に依りて義の自性を分別す。

釋曰　義とは、謂く名の目くる所の法なり。先に已に此の物の名を知り、後に此の名を以て分別して此の物を取るなり。

論曰　譬へば此の名を、此の義に目くるが如し。

釋曰　此の名は、本來、此の體を主とするが故に、此の名を以て此の體を分別することを得。

論曰　二には義に依て名の自性を分別す。

釋曰　先に此の物の體を識りて、未だ其の名を知らず。後に其の名を説くを聞きて、即ち先に識る所の體を以て、分別して此の名を取るなり。

論曰　譬へば此の義は此の名に屬するが如し。

釋曰　此の體は本より此の名を主とするが故に、此の體を將て分別して此の名を取ることを得。

論曰　三には名に依て、名の自性を分別す。

釋曰　異國の物の名の如きは、始めて聞くときは、未だ解せざるも、後に常に習ふ所の名を以て、此の名を分別して方に此の名を解す。

釋曰　此れ體類と及び義とに並びに幾くの種有るやを問ふ。

論曰　若し略して說かば、二種有り。一には熏習せる種子に繫屬す。

釋曰　此は先づ依他の體類を明かすに、二種の熏習より生ず。一は業煩惱の熏習より生じ、二は聞熏習より生ず。體類は此の二の熏習に繫屬するに由るが故に依他性と稱す。若し果報識の體類を依他性と爲せば、業煩惱の熏習より生じ、若し出世間の思修の慧の體類ならば聞熏習より生ず。

論曰　二には淨品と不淨品に繫屬して性成就せず。是の故に此の二種の繫屬に由つて、說いて依他性と名く。

釋曰　此れ次に依他の義を釋す。若し[七〇]識は、此の性を分別して、或は煩惱を成じ、或は業を成じ、或は果報を成ずれば則ち不淨品に屬す。若し[七一]般若、此の性を緣じて、分別する所無ければ、則ち淨品を成ず。謂く[七二]境界の清淨と、[七三]道の清淨と、[七四]果の清淨となり。若し自性有りて他に依らざれば、則ち應に[七五]定んで一品に屬すべし。既に[七六]定性無ければ、或は淨品に屬し、或は不淨品に屬す。此の二分に由つて、隨つて一分は成就せざるが故に依他と名く。

論曰　分別性にも亦二種有り。一には自性を分別するに由る。

釋曰　眼等の諸界の中に、一界を或は眼、或は耳等を分別するが如きを自性を分別すと名く。

論曰　二には差別を分別するに由る。

釋曰　無常等に約して、更に此の眼等を分別するを、差別を分別すと名く。

論曰　眞實性にも亦二種有り。一には自性成就。

釋曰　謂く有垢の眞如なり。

論曰　二には清淨成就なり。

釋曰　謂く無垢の眞如なり。

【七〇】識とは染位に於ける本識をいふ。
【七一】般若は卽ち智にして淨位に於ける本識轉依の本識をいふ。
【七二】境界の清淨とは正しく大乘の法を說くなり。
【七三】道の清淨とは六度及び一切の助道法なり。
【七四】果の清淨とは菩提及び涅槃なり。
【七五】定んで一品に屬すとは染淨孰れかの一品に屬するの意。
【七六】定性無し云云とは不成就を釋す。

釋曰　依他性の變異を、色等の所分別の塵と爲す。此の塵は、實に所分別の如く是れ有ならず。依他性に約して、塵に所有無しと明かす。卽ち依他性を以て眞實性を成ず。道有ることを存せんが爲の故なり。依他性は是れ無爲の眞實性なりと明かさず。

論曰　[六八]復、何の義有りて、此の一の識に由つて、一切の種種なる識の相貌を成ずるや。

釋曰　此は更に問ふ、復、何の道理を以て唯だ是れ一の識なるも、或は八識を成じ、或は十一識を成ずるが故に一切と言ふや。一一の識の中に於て、眼識の青黄等の差別を分別するが如く、種種なる識の相貌有り。唯だ是れ一識のみならば、是れ何の識なるや。更に此の問を爲す所以は、前に已に異の義を釋したれば、此の下には、不異の義を釋して、依他性に、具さに三性有ることを顯はさんと欲するなり。一の識の種子より生ずるは、是れ依他の有なり。種々なる識の相貌は是れ分別なり。分別は實には所有無ければ、是れ眞實性なり。

論曰　本識の識は、

釋曰　一の識とは、謂く一の本識なり。本識、變異して諸識と爲るが故に「識識」と言ふ。今は變異して根塵と爲ることを論ぜず。故に但だ識識と言ふのみ。

論曰　所餘の生起識の、種々の相貌なるが故に。

釋曰　所餘は卽ち阿陀那識にして、生起は卽ち六識なり。變異して七識と爲るは卽ち是れ本識の相貌なればなり。

論曰　復、此に因つて相貌生ずるが故に。

釋曰　七識を以て、本識を熏習して種子を爲す。此の種子、復本識を變異して七識と爲す。後の七識は卽ち前の相貌の種子より生ず。

論曰　[六九]依他性に幾くの種有りや。

【六八】此の一段の文は唐譯に無し、但し隋譯は本譯と一致するも釋文を缺く。

【六九】四に三性の品類差別を明かす。

釋曰　此の下、亦一亦異の義は、唯だ是れ一識のみなることを總標す。識とは卽ち依他性なり。依他性の中に於て、別の道理を以て、成立して三性と爲す。三性、互に相ひ是ならず、卽ち是れ異にあらず不異に非ざる義なり。

論曰　別義有り、此れ分別を成ず。別義有り、此れ眞實を成ず。

釋曰　別の道理有りて、此の依他性は分別性を成ず眞實性も、亦爾なり。

論曰　何者か、別義に說いて依他と名くるや。熏習の種子より生じて、他に繫屬するが故なり。

釋曰　此の下、正しく三種の別義を釋す。熏習に、三種有り。一には名言熏習と識熏習。二には[六四]色識熏習と[六五]識々熏習と[六六]見識熏習。三には[六七]煩惱熏習と業熏習と果報熏習となり。此の三種の種子より生じて、因に繫屬するが故に依他を成ず。餘の二性には非ず。

論曰　復、何の義有りて、此は分別を成じ、此の依他性は分別の因と爲るや。

釋曰　識は能分別を以て性と爲し、能分別は必ず所分別より生ず。依他性は卽ち是れ所分別なれば、分別の生因と爲る。卽ち是れ分別の緣なり。依他性を緣ずるに、兩義有り。若し識體を談ずれば、種子より生じて、自ら依他性に屬し、若し變異を談ずれば、色等の相貌と爲りて、此は分別性に屬す。色等の相貌は識を離れて別體無し。今、依他性を分別の因と爲すと言ふは、依他の變異の義を取りて分別の因と爲し、識體は種子より生ずる義を取りて分別の因と爲すにあらず。

論曰　是れ所分別なるが故に分別を成ず。

釋曰　變異の相貌は、是れ識の所分別なり。此の義を以ての故に、所分別を成立して、分別性と爲す。

論曰　復、何の義有りて、此は眞實を成じ、此の依他性は或は眞實を成ずるや。所分別の如く、實には是の如く有ならざるが故なり。

【六四】色識熏習とは根境の相分熏習なり。
【六五】識識熏習とは本識自體の熏習なり。
【六六】見識とは意識及び意の依止なり。
【六七】煩惱等は惑業苦の熏習なり。

論曰 [六一]覺觀に由りて言說緣起し、

釋曰 自の所執の如く、覺觀を起し思惟して、自の爲に計度し、或は自の所執の如く覺觀を起し言說して他をして計度せしむ。云何が言說して他をして計度せしむるや。

論曰 見等の四種に由りて言說し、

釋曰 言說する所の如きは、[六二]見等の四種を出でず。此の四種 根と塵と識とに約して成就するが故に、一切の所說は分別の品類を攝して皆盡す。此の言說に約して顚倒を起す。

論曰 實に塵有ること無きを、實に有りと計して增益を爲す。

釋曰 四種の言說の如き、實に法有ること無きに、此の中に執を起して、謂へらく爲れ實に有りと、此を增益の執と名く。

論曰 此の因に由るが故に能く分別す。

釋曰 此の六因に由つて、意識は、能く依他性を分別して、所分別を成ぜしむるが故に。故に此の因を以て、分別性と爲す。

論曰 [六三]此の三種の性、云何ん。

釋曰 此れ三性の一異の義、云何んを問ふ。

論曰 他と異ると爲すや。異ならずと爲すや。

釋曰 依他性と餘の二性との如きは、一と爲すや異と爲すや。餘の二性も、互に論ずるに亦爾なり。

論曰 異に非ず不異に非ずと、應に此の如く說くべし。

釋曰 問に答へて、亦は一、亦は異なりと、應に此の如く說くべきことを明かす。

論曰 別義有り、依他性を依他と名く。

【六一】 覺觀は新譯には尋伺といふ。

【六二】 見等とは見聞覺知の四種卽ち所見と所聞と感覺と知覺となり。

【六三】 三に三性の非異非一を明かす。

論曰　云何が觀見し。

釋曰　先に何の方便を以て推尋し、後に決斷して依他性を計度するや。

論曰　云何が緣起し。

釋曰　何の緣に籍りて發起し、依他性を計度するや。

論曰　云何が言說し。

釋曰　何の言說を以て、依他性を計度するや。

論曰　云何が增益するや。

釋曰　云何が無の中に於て有と執して、依他性を計度するや。意識を分別と名くれば、依他は是れ所分別なり。此の六因に由つて、意識は能く依他性を分別す。今、當に此の義を顯說すべし。

論曰　名等の境界に由り。

釋曰　依他性は一切の分別を離れて、無分別を體と爲すに由るが故に、名等を立てゝ境界と爲し、此の性を分別し計度す。

論曰　依他性の中に於て、相を執著するに由り。

釋曰　先に名に約して分別し、此の名を串習するが故に、此の名を執著し以て相貌と爲し、後時に此の相を分別して、謂へらく爲れ眼等の諸根、色等の諸塵、識等の諸心なりと、相貌を執し已れば。

論曰　[六〇] 決判に由りて見を起し、

釋曰　先に是非を思量し、後時に決判して、我が所見の如き、眼等の諸根、乃至識等の諸心は、悉く是れ實有にして、所餘は妄言なりとす。此の見に由るが故に、意識は依他を計度して堅實に執し已れば、

【六〇】隋譯に「見に執著するが故に」と爲し、釋文に「見を執著すとは謂く彼の所取の相に於て決定して是の如しとなすが故に」といふ、今と釋意を異にす、尙ほ唐譯參照。

るなり。

論曰　但だ分別のみを名げて、說いて分別と名く。

釋曰　此の義に由るが故に、但だ意識のみを分別と名くるが故に、三種の分別の中に意識を說いて、分別と名くるなり。

論曰　此の依他は、但だ是れ所分別なるのみ。

釋曰　此の下は、第二問に答ふ。所分別の一切の法は、識を離れて別體無し。故に依他を以て、所分別と爲す。

論曰　是の因、能く依他の性を成ずるを、所分別と爲し、

釋曰　若し因に籍らざれば、依他性は成ぜず。若し依他性無ければ、則ち所分別無し。[五九]六種の因に由りて依他性を生ずるが故に、依他性を以て所分別と爲すことを得。

論曰　此の中に分別性と名く。

釋曰　此の中に依他性の因を成ず。此の因を說いて分別性と爲すなり。

論曰　云何が分別は能く此の依他性を計度して但だ萬物の相の如くなすや。

釋曰　此の下は、第三問に答ふ。先に更に問ひ、後に次第に答ふ。此の語は、先に總じて問ふなり。云何が、意識は分別に由るが故に、能く此の依他性を計度して、但だ萬物の相貌の如くし、但だ一物の相貌の如くせざるや。

論曰　何の境界を縁じ。

釋曰　此の下、別に六因を擧げて問を爲す。何の法を縁じて境界と爲し、依他性を計度するや。

論曰　何の相貌を執するや。

釋曰　何の相貌を執して依他性を計度するや。

【五九】六種の因とは次下に之を明かせり。

釋曰　此の三種の分別の義を問はんと欲するが故に、先に列して此の三分別の名を出せり。

論曰　此の中、何の法をか、分別と名け、何の法をか所分別とし、何の法をか分別性と名くるや。

釋曰　一々、別に問ふて、其の異相を求む。

論曰　意識は是れ分別なり。三種の分別を具するが故に。

釋曰　此の下、三問に答ふ。此は卽ち第一問に答ふ。六識の中に、但だ意識のみを以て分別と爲す。意識は[五八]自性と憶持と顯示との三分別を具するを以ての故たり。五識は則ち爾らず。

論曰　何を以ての故に。

釋曰　何を以ての故に、意識は三分別を具するや。

論曰　此の識は自の言熏習を種子と爲し。

釋曰　根塵の名を說くが如き、此の名を數習して本識に熏習し、以て種子と爲す。此の種子に由つて、後時に意識は根に似、塵に似て、名を起すを色識と爲す。「自」といふに二義有り。一には眼の名の熏習の如きは唯だ眼のみを生じて餘法を生ぜず、餘の熏習も亦爾るが故に自と稱す。二には本より法の體無く、言語は是れ自の分別の所作なるが故に自と名く。

論曰　及び一切識の言熏習を種子と爲す。

釋曰　六識の名を說くが如く、此の名を數〻修して本識に熏習して種子と爲し、此の種子に由つて、意識は後時に六識に似て起るを名けて識識と爲す。

論曰　是の故に、此は生ず。

釋曰　二種の熏習の種子に由るが故に、此の意識は生ずることを得。

論曰　無邊の分別に由つて、一切の處に分別有り。

釋曰　意識は此の二種の種子の所變と爲す。分別の功能は無邊なるが故に、一切の境界に似て起

【五八】新譯にいふ自性と隨念と計度の三分別なり。

生因と名く。此の道理に由るが故に、分別を成ず。

論曰　自相有ること無く、唯だ分別のみを見るが故に說いて分別と名く。

釋曰　自體既に無く、唯だ亂識のみを見るが故に、說いて分別と名くるなり。

論曰　若し眞實性ならば、分別性は永く所有無きを相と爲す。云何が眞實を成ずるや。何の因緣にて、說いて眞實と名くるや。

釋曰　分別性は、依他性に於て一分は永く無し。若し所有無きを以て相と爲さば、何が故に立てて眞實と爲すや。立てて眞實に非ずと爲すと說くも亦此の如し。

論曰　[五四]如は、如ならざる無きに由るが故に眞實を成ず。

釋曰　此の下の三義は兩問に答ふ。此は是れ第一なり。相違せざるの義を以て、眞實を顯はす。世間に眞實の友と說くが如し。

論曰　淸淨の境界を成就するに由る。

釋曰　此は是れ第二なり。顚倒無き義を以て眞實を顯はす。境界に顚倒無きに由るが故に、[五五]四種の淸淨を得。世間に眞實の物と說くが如し。

論曰　一切の善法の中の最勝なるに由る。

釋曰　此は是れ第三なり。無分別の義を以て、眞實を顯はす、卽ち[五六]五種の無分別にして、五種の眞實を謂ふ。世間に眞實の行と說くが如し。

論曰　勝義に於て成就するが故に說いて眞實と名く。

釋曰　前の三勝に於て、壞失有ること無きが故に、「成就す」と說く。成就するに由るが故に眞實なり。

論曰　[五七]復次に若し分別と及び所分別と有らば、分別性成ず。

【五四】隋譯には「一體に變異無きが故に」と爲す。

【五五】四種の淸淨とは後に之を說けり。

【五六】五種の無分別とは本釋論第十五卷に出づ。

【五七】次に三種の分別を明かす。

實に所有無きことを知る。

〔五三〕分別章 第三

論曰 若し唯識にして塵に似て顯現せば、依止を說いて依他性と名く。云何が依他を成ずるや。何の因緣にて說いて依他と名くるや。

釋曰 塵を離れて唯だ識有るのみ。此の識は能く生じ變異し顯現して塵に似る。此の如きの體相と及び功能との亂識を說いて依他性と名く。誰だ亂識には自體有るを見るのみ、他有るを見ず。云何が此の識を成立して、依他性と爲すや。若し能く生じ變異すと言はゞ、變異は此の識に依る、乃ち、是れ他の所依と爲る。云何が此の識を說いて、依他性と爲すや。

論曰 自の熏習の種子より生ずるが故に、因緣に繫屬して、自在なることを得ず。若し生ずれば功能有ること無く、一刹那を過ぐれば自ら住するを得るが故に、說いて依他と名くるなり。

釋曰 自の因に由りて生ずるが故に、生じ已れば自ら能く停住すること有ること無し。一刹那を過れば自の所取なるが故に。他に約して說くに由るが故に依他と名く。

論曰 若し分別性ならば、依他に依り、實には有所無きも、塵に似て顯現す。云何が分別を成ずるや。何の因緣にて、說いて分別と名くるや。

釋曰 此の問に、三有り。一には依止を問ふ。此の分別性は既に他に依止すれば、應に依他性を成ずべきに、云何が分別と名くるや。次には、所有無きことを問ふ。此の分別は既に實には所有無し。所有無き中に何の分別有りや。後には塵に似るを問ふ。此の分別は、既に塵に似て顯現す。云何が分別と稱するや。何の因緣の故に、說いて分別性と名くるや。

論曰 無量の相貌は、意識の分別にして顚倒の生因なるが故に分別を成ず。

釋曰 一切の塵の相貌は、是れ分別なれば說いて意識と名く。意識顚倒して境界を生ずるか故に

【五三】此の章には廣く三性を明かす、中に十段あり、初に三性の體義及び立名を明かす。

論曰　心に自由を得。

釋曰　已に心は事に隨つて成ずることを得。謂く、位の中に入り住し出づるなり。

論曰　願樂の自在なるに由るが故に。

釋曰　願樂する所の如く、諸塵は皆願樂に隨つて變異す。

論曰　願樂するが如く、塵は種々に顯現するが故に。

釋曰　若し地界をして水界を成ぜしめんと欲すれば、意の如く卽ち成ず。火等の界も亦爾なり。

論曰　若し觀行の人は、已に奢摩他を得て。

釋曰　「觀行の人」に、二種有り、一は正思を得、二は正修を得。今は正修を得るの人を明かす。

論曰　法觀の加行を修すれば。

釋曰　「法」とは謂く修多羅等の十二部經なり。十二部經の所顯の法相に依りて熟く毘婆舍那を修行するなり。

論曰　唯だ思惟するに隨つて義は顯現するが故に。

釋曰　一の五陰の中に於て、心に隨つて思惟すれば、或は顯現す。不淨・苦・無常・空・無我等、乃至、十六諦相の如き、悉り思惟に隨つて顯現し、及び餘の一切の法相も亦爾なり。

論曰　若し人、無分別智を得れば、未だ無分別觀を出でざるも、一切の塵は顯現せざるが故なり。[五一]境界等の義は三慧に隨順するに由り、前に引く證に由りて唯識の義を成就す。故に唯だ識のみにして、塵無きことを知る。此の中、六偈有りて、重ねて前の義を顯はす。此の偈は[五二]後に依智學の中に、當に廣く分別して說くべし。謂く餓鬼畜生人天、此の如き等なり。

釋曰　若し菩薩、已に無分別智を得て、正しく觀の中に在るも、若し塵にして顯現する所の如く實有ならば、無分別智は則ち成ずることを得ざらん。既に實に無分別智有るが故に、道理として

【五一】以上にて三慧の別釋を竟り、次に之を結釋す。
【五二】第十五卷を指す。

論曰　何をか、四と爲すや。一には相違識の相を知る。譬へば餓鬼畜生人天は、同境界に於ても、見識に由つて異り有るが如し。

釋曰　一境界に於て、分別同じからざるが故に「相違」と名け、相違識の境を「相」と名く。此の境は、實には所有無きも、但だ識の變異に隨ふが故に、分別同じからざるなり。菩薩にして、若し此の理に通達すれば、則ち唯だ識のみなることを解するが故に、名けて[四八]智と爲す。

論曰　二には、境界無き識を見るに由る。譬へば過去未來の夢影の塵の中に於けるが如し。

釋曰　有る時は、境界を離れて、識の生ずることを得るを見る。譬へば過去等の境を[四九]識るが如し。

論曰　三には、[五〇]功用を離れて顚倒無きことを應に成ずべきを知るに由る。譬へば實に有なる塵中に塵を緣じて識を起すが如し。顚倒を成ぜざるは、功用に由らざることを、如實に知るが故に。

釋曰　菩薩は此の如きの解を作す。若し塵は所顯の如く實有ならば、對治を修することを離れて、自然に應に無顚倒の智を成ずべし。如實に知るに由るが故に。既に此の義無し。故に知る、實に塵有ること無きを。但だ無の中に於て有と執するが故に顚倒を成ずるなり。

論曰　四には、義は三慧に隨順することを知るに由る。

釋曰　一切の塵の義は、悉く三慧に隨順す。菩薩は能く此の如く知る。

論曰　云何が此の如くなるや。

釋曰　云何が一切の義は三慧に隨逐するや。

論曰　一切の聖人は觀に入りて。

釋曰　「聖人」とは、謂く聲聞と緣覺と菩薩となり。此等の聖人の、正しく定中に在るを、名けて「觀に入る」と爲す。

【四八】これを相違識相の智と名くるが故に智の名を釋す。

【四九】識るは緣ずるの意なり。或は緣の字の寫誤ならんか。

【五〇】功用とは精進して修行すること。

[四四]亂るれば、眼等の識は、則ち生ぜず。意識の變異に由つて、眼等の根と及び識とを生ず。是の故に、意識は彼の生因と爲る。

論曰　復、別說有り。分別して十二入を說く中に、是の六識聚を說いて、意入と名く。

釋曰　此は更に聖言を引いて、唯だ意識のみ有りて、別に餘識有ること無きを證す。如來は經の中に於て、十二入を分別するに、六識聚を合して、以つて意入と爲せり。此の三義を以ての故に知る。唯だ意識のみ有りて別の餘識無きことを。

論曰　[四五]是の處に、本識を安立して[四六]義識と爲せば、此の中、一切の識を說いて相識と名け、意識と及び依止識とを、應に知るべし、見識と名く。何を以ての故に。此の相識は、是れ見の生因なるに由り、顯現して塵に似るが故に見の生ずる依止事と作る。

釋曰　是の本識は、二識の中に於て、安立して相識及び見識と爲すことを得べし。是れ本識を安立して塵識と爲さざるなり。「此の中、一切の識を說いて相識と名く」とは、本識は相見の二識の處に安立することを得べし。此の本識は意識と及び依止識とを以て、見識と爲し、眼識等の識と及び一切法とを以て、相識と爲す。此の生因は緣々に由るが爲の故に。彼の處の中に於て、是れ見の生因なるが故に。彼の法に於て、見と爲る。顯現して塵に似るが故に、意識の見は、相續し住して、因を斷ぜざるが故に、此の識の依止事と作る。

論曰　此の如く、諸識は唯識を成立す。[四七]云何が諸塵は現前に顯現するも、其の有に非らざることを知るや。佛世尊の說くが如し。若し菩薩にして、四法と相應すれば、一切識にして無塵なるを能く尋ね能く入ると。

釋曰　四法とは、是れ智なり。菩薩、若し四智と相應すれば、方便の中に在りて、能く理を尋ね、正解を得て、能く理に入る。故に一切は唯だ識のみにして、塵無きことを知るなり。

【四四】亂るとは散亂するの意なり。

【四五】次に三識を安立して唯識の義を釋成す。

【四六】義識とは實義の識の意。

【四七】次に四智を擧げて唯識無境を證す。

の緣有らば、身根は觸に似て起る。若し觸に似て起らば、自の依止の中に於て、或は損し或は益す。意識も亦爾なり。身に依止するが故に、觸に似て起る。

論曰　此の中に偈を說く。

釋曰　諸の菩薩の說は、但だ意識のみ有りて、別の五識無きが故に、法足經の偈を引いて、以つて此の義を成立す。

論曰

　遠行と及び獨行とは、　無身にして空窟に住す。　調伏し難きを調伏すれば、　則ち魔の縛を解脫す。

釋曰　能く一切の境界を緣ずるが故に「遠行」と名け、第二識無きが故に「獨行」と名く。「無身」に二義有り、一には色身無く、二には生身無し。身內を「空窟」と名く。[四三]識は身內に在るが故に、「空窟に住す」と名く。二に五藏中の心藏には、其の中に孔有り、意識は此の孔中に在るが故に、「空窟に住す」と名く。三に諸法は實に所有無きも、而も執して有と爲す、識は此の所有無き中に在るが故に「空窟に住す」と名くるなり。本より來、鄙惡なる煩惱を因と爲すが故に「調伏し難し」と名く。若し人能く此の識を調伏すれば、惑業に隨順せざらしめて、自在を得るが故に「調伏」すと名く。三界の惑障を「魔の縛」と名く。此の人は、調伏し難きを調伏すれば、則ち解脫することを得。復、別の聖言有り、以て此の義を證す。

論曰　經に言へるが如し、此の眼等の五根の、所緣の境界の一々の境界を、意識は能く取りて分別し。意識は彼の生因と爲ると。

釋曰　此の五根の所緣は色等の境なり。若し識能く色を緣ずれば、則ち立てゝ、眼識と爲す。一々の境を、意識は既に、悉く能く取り、又能く分別す。是の故に、五識には用無し。又意識若し

【四三】「空窟に住す」との句を釋するに三義を出す中、これを第一義となす、文前に標數なきは或は脫文ならん。

依止して惑に染汚せらるゝが如し。所依止に染汚有るに由つて、能依止の識の生ずる時にも亦染汚有り。意識も亦爾なり。

論曰　此の識は一切の依止に於て生ず。

釋曰　謂く眼等の諸根に依止して生ずるなり。

論曰　種々の相貌は、二種の法に似て顯現す。一は塵に似て顯現し、一は分別に似て顯現す。

釋曰　意識は六根に依つて生じ、顯現して二種の法に似る。一には多類の法、二には一類の法なり。多類の法は、此の分は塵に屬し、一類の法は是れ分別にして見に屬す。此の兩句に由りて、識は一法なりと雖も、一分は塵に似て顯現し、一分は分別の塵に似て顯現す。是の故に、前說には失無し。

論曰　一切處は觸に似て顯現す。

釋曰　「一切處」とは、謂く有色處なり。有色處には必ず身有り。若し身有れば必ず觸に似て顯現す。

論曰　若し有色界に在りては、意識は身に依つて生ずるが故に。

釋曰　何が故に、身有る處には必ず觸に似るや。意識は必ず身に依つて生ずるに由るが故に、觸に似て顯現す。此の意識は身に依つて觸に似て生ずるに由るが故に、觀行の人は正しく觀に入る時には、五識は復起らずと雖も、中間の色身に於て、喜樂の受の生すること有り。

論曰　譬へば有色の諸根の身に依止して生ずるが如し。

釋曰　有色の諸根、即ち眼等の根は色身に異るも、身に依止す。諸根は身に依止するに由るが故なり。此に因りて、諸根は身に於て或は損し或は益す。意識も亦爾なり。身に依止するが故に、觸に似て顯現し、身に於ても亦損益有り。復次に、譬へば身根の身に依止するが如く、若し外觸

定等を得たるものなり。觀行の人は先に已に通達し、後に他の爲に說く。此の通達すると、及び說くとは、何の位に成ずることを得るや。

（論曰 唯識に通達する時と、及び識を伏離する位となり。）

釋曰 初地より、乃し正覺地に至るまでを、唯識に通達する位と爲し、空處より乃し非想非々想、無想定、滅心定に至るまでを、識を伏離する位と爲す。所取の塵、若し無ければ、云何が識を說いて能取と爲すや。則ち唯量の義は成ぜざるべし。是の義然からず。何を以ての故に。唯識の義失せず、亦能取所取の義も無きにあらず。此の義を立てんが爲の故に三相の入を顯はす。唯量とは、唯だ識のみにして、塵無きことを顯はさんが爲なり。[四〇]所識、既に無ければ、云何が唯識を成ずるや。此の義を立てんが爲の故に、唯二と及び種々とを說く。唯二とは謂く相と及び見となり。相とは是れ所取にして、見とは是れ能取なり。種々も亦爾なり。是の故に、唯識と及び能取所取とは、此の義悉く成ず。後の半偈は、前に解するが如し。

論曰[四一] 諸師は、此の意識は種々の依止に隨つて生起し、種々の名を得と說けり。

釋曰 「諸師」とは、謂く諸の菩薩なり。一の意識の次第に生起することを成立せり。意識は一なりと雖も、若し眼根に依止して生ずれば、眼識の名を得、乃至身根に依止して生ずれば、身識の名を得。此の中、更に餘識の意識に異ること無し。阿梨耶識を離るれば、此の本識は意識の攝に入る。同類なるを以ての故に。此の意識は依止に由りて別名を得。

論曰 譬へば、[四二]作意業は身口等の業の名を得るが如し。

釋曰 此の作意業は、復是れ一なりと雖も、若し身門に依つて起らば身業と名け、若し口門に依つて起らば口業と名く。意識も亦爾なり。依止に隨つて、別名を得。若し人有りて說く、眼等の五根には分別有ること無し。若し意識にして、此に依止して生ずるも亦分別無し。譬へば意根に

【四〇】所識とは所緣の境としての識卽ち相分をいふ。

【四一】次に一意識說を明かす。

【四二】作意業とは唐譯に意思業といふ卽ち意志の作用をいふ。

名く。此の義、云何ん。諸識の中に隨つて一識は、一分變異して色等の「相」を成じ、一分は變異して「見」を成ずるが故に、「唯二」と名く。世等の六識は、此の二の識性を出でざるに由るが故に、唯二の所攝なりと說く。云何が種々の類に入るや。

論曰　種々相の生の所攝なるに由るが故なり、此の義云何ん。此の一切の識には塵無きが故に、唯識を成ず。相有り見有る眼等の諸識は、色等を以て相と爲すが故に、眼等の諸識は諸識を以て見と爲すが故に。意識は一切の眼識乃至法識を以て相と爲すが故に、意識は意識を以て見と爲すが故なり。云何が此の如くなるや。意識は能分別なるが故に、一切の識の塵分に似て生ずるが故に。

釋曰　是れ一の眼識なるも、所應の如く成じて、一分は能く種々相を起し、一分は能く種々相を取る。能く取る者は卽ち見と名く。若し意識にして、意識を取らば、一切の眼等の識と及び法識とを相と爲し、意識を能見と爲す。復次に、「種々相の生」とは、但だ意識のみ是れ種々相を生ず。境を緣ずること定まらざるが故なり。其の餘の諸識は定んで一類の塵を緣じ、分別すること能はず。能く分別すれば、則ち見を成じ、分別すること能はざれば、則ち相を成ず。此の三相の成立に由つて、世等の六識は唯識爲たることは、此の義、顯現せり。

論曰　此の中に偈を說く。

[38]唯量と唯二と、　種々とに入り、觀人は說く、唯識に通達するの時と、　及び識を伏離する位となり。

釋曰　[39]此の偈は三種の唯識に通達するの義を顯す。一には唯量に通達す。外塵は實に所有無きが故に。二には唯二に通達す。相と及び見とは唯だ識のみなるが故に。三には種々の色の生ずるに通達す。但だ種々の相貌有るも、而も體の異ること無きが故なり。此の如きの三相は、何人が能く通達するや。但だ觀行の人のみなり。觀行の人に自ら二種有り、一に入見位の菩薩。二は四空

【三八】　此の偈は諸譯と甚だ異る、且らく隋譯を擧ぐるに「唯量と二と種種とに、觀行の人は能く入る、唯心に入るを得る時、此の心も亦滅離す」とあり、釋文亦之に應ず、唐譯も亦同一の意趣なり、參照。
【三九】　本譯の釋意に依れば前の二句は「觀人は唯量と唯二と種種とに入り且つ說く」となし而して後の二句は次第の如く入る位と說く位とを示せるものと解すべきか。

有り。

論曰[三六]　無量の生と及び死の證得の差別の所攝なるが故なり。

釋曰　此の二果の中に、生有り死有り。初めて受くるを「生」と爲し、生後相續するを「得」と爲す。將に死せんとするを「證」と爲し、命、斷ずるを「死」と爲す。衆生の受用する二業の果に生有り、死有ることを明さんが爲に、一切の善惡兩道の生死を攝す。

論曰　云何が正に此の如き等の識を辯じて、唯識の義を成ぜしむるや。

釋曰　前に五の識を說いて、義已に唯識を成ぜり、後に六の識を說いて、云何が唯識を成ぜしむるや。

論曰　若し略說すれば三相の諸識有り、則ち唯識を成ず。

釋曰　此の六識を若し安立して、唯識を成ぜしむるに、三種の道理有り。道理は卽ち是れ三の相なり。一には唯量に入り、二には唯二に入り、三には種種の類に入る。入るとは通達するの義なり。云何が唯量に入るや。

論曰　唯だ識量有るのみ。

釋曰[三七]　六識の中に於て、若し理の如く研尋せば、但だ唯だ識を見るのみにして、餘法を見ず。何を以ての故に。

論曰　外塵には所有無きが故なり。

釋曰　識る所の諸法は識を離れて實に所有無きが故に、六識は「唯だ識量有るのみ」と說く。云何が唯二に入るや。

論曰　唯だ二有るのみ。謂く相と及び見との識の所攝なるが故なり。

釋曰　若し能く世等の六識に通達すれば、一分は相を成じ、一分は見を成ずるを「唯二に入る」と

【三六】隋譯に「無量の生老死の差別を受くるが故に」と爲せり、本譯の「證得」の義明了ならず、釋文も亦た異の感あり更に考ふべし。

【三七】六識とは世識等の六種の識を指す。

釋曰　此れ更に前の五識卽ち十八界は法を攝して已に盡せり、何ぞ更に[三三]後の六識を生ずと說くことを用ゆるやを問ふ。

論曰　無始より生死相續して斷ぜざるが故に。

釋曰　衆生の果報を顯はさんが爲に、無始より以來、三世の生死相續して斷ぜざるが故に、須らく世識を立つべし。

論曰　無量の衆生界の所攝なるが故に。

釋曰　衆生の果報を明かさんが爲なり。諸界に多少の不同有り、四界・六界・十八界等の如し。故に須らく數識を立てゝ、一切の數を攝すべし。

論曰　無量の器世界の所攝なるが故に。

釋曰　衆生の所居の處を明かさんが爲なり。人・天・惡道の如き、無量の差別有るが故に、須らく處々識を立てゝ、一切の處を攝すべし。

論曰　[三四]無量の作事は、更互の[三五]顯示の所攝なるが故に。

釋曰　見聞覺知を明かさんが爲なり。各ゝ多種の因有り。此に無量の言說、作事の言說有りて、見等と更互に相ひ顯示するが故に、須らく言說識を立てゝ、一切の言說を攝すべし。

論曰　無量の攝と及び受用との差別の所攝なるが故に。

釋曰　「攝」とは自他の攝に約し、「受用」とは自他の受用する所なり。衆生各各我を計するに多種有り。我所も亦然ることを明かさんが爲の故に、須らく自他差別識を立てゝ、一切の自他の差別を攝すべし。

論曰　無量の受用は愛憎の業の果報の所攝なるが故に。

釋曰　善業の果を愛と爲し、惡業の果を憎と爲す。衆生は此の二業の果を受用するに、無量の種

【三三】十一識の中の後の六識を指す。

【三四】此の句は隋譯に「無量の所作の事は更互に言說するが故に」となせり、唐譯參照。

【三五】顯示とは言說にて顯示するの義。

生ず。何をか色識と爲すや。若し五識に約すれば、五根と五塵とを、名けて色識と爲す。此の色識は、能く眼等の[二八]識識を生ず。此の色識は卽ち是れ[二九]亂因なり。若し此の識、起らざれば、無の中に於て有と執することを得ず。何の法をか、亂體と名くるや。謂く無色の識なり。若し五根に約すれば、卽ち是れ五識なり。若し意根に約すれば、但だ是れ意識のみにして、法識に非ず。法識と及び色識・[三〇]無色識とは、悉く是れ亂因なり。

(**論曰** 若し前識有らざれば、後識は生ずることを得ず。)

釋曰 前識は是れ亂因なり。若し本より有にあらざれば、亂體は是れ果、卽ち是の後識は、因無ければ則ち生ずることを得ず。

差別章第二

論曰 云何が身識と身者識と受者識と應受識と正受識とは、一切の生處に於て、更互に密合して生ずるや。

釋曰 此の五の識は卽ち十八界なり。三界・六道・四生の一切の生處に於て、此の十八種は云何か更互に密合して生ずることを得るや

論曰 具足せる受生の所顯なるが故に。

釋曰 一切の生處に於て、[三一]一刹那の中に具足して十八界を有す。十八界は既に相ひ離れずして、能く[三二]顯因と爲り、顯はれて更互に密合して生ず。又根塵識は必ず相ひ離れず。受生には根有りて、而かも塵及び識無きこと有る無し。餘の二を受くるも亦爾なり。一を受くれば、必ず餘の二を具す。餘の二を用ひて、以つて此の一を顯はす。相ひ離れざるが爲の故に、更互に密合して生ずることを得るなり。

論曰 云何が世識等は、前に說けるが如く、種々の差別有りて生ずるや。

【二八】識識とは五識をいふ。
【二九】亂因は唐譯には亂相といふ。
【三〇】無色識の三字は衍にあらざるが、解し難し。
【三一】十八界（根境識）は受生の身には一時に具足して生ずるが故なり。
【三二】顯因とは唐譯に「所顯の故に」を釋して「是れ彼の因性なり」といへり今も其の意なるべし。

や。故に知る應に別色有るべしとなり。

論曰　顚倒等は煩惱の依止なるに由るが故なり。

釋曰　顚倒は是れ煩惱の根本なり。識變異して諸の分別を起すに由つて、分別は卽ち是れ顚倒なり。顚倒の故に諸の煩惱を生じ、依他性と分別性と相應す。卽ち是の顚倒は煩惱の所依止の處なり。顚倒の煩惱に由つて、依他性をして分別性と相應せしむ。顚倒の煩惱は、又是れ識の變異する所依止の處なり。

論曰　若し爾らざれば、非義に於て義とする、顚倒は成ずることを得ず。

釋曰　若し互に依止と爲るの義無ければ、則ち識に變異無く、非物の中に於て分別して物と爲す、應に此の顚倒有るべからず。

論曰　若し義の顚倒無ければ、惑障と及び智障との二種の煩惱は、則ち成ずることを得ず。

釋曰　若し識、變異し分別して非義を義と爲すにあらざれば、豈に顚倒有らんや。若し顚倒無ければ、則ち煩惱を生ぜず。若し煩惱無ければ、聲聞に解脫の障無く、菩薩に一切智の障無からん。

論曰　若し二障無ければ、清淨品も亦成ずることを得ず。是の故に、諸識の此の如く生起することは、是れ實なりと信ずべし。

釋曰　若し煩惱無ければ、豈に聖道有らんや。故に此の義も亦成せず。是の故に應に識を離れて別法無きことを信ずべしとなり。

論曰　此の中に偈を說く。

亂因と及び亂體とは、　色識と無色識となり。　若し前識有らざれば、　後識は生ずることを得ず。

釋曰　無の中に、有を執するを亂と名く。此の亂識は何の法に因つて生ずるや。色に因つて識は

【二七】此に非義及び義といふは、義とは實有の境の意、釋文には物、非物といへり。

論曰　譬へば幻事夢等の如く、中に於て眼識等の識は唯識の義を成ずべし。

釋曰　前に幻等を擧げて、以つて別の根塵無きに譬へたり。今、唯識に成不成有ることを難ぜんと欲するが故に、須らく前に擧げし所の譬を引くべし。十一識の中に於て、十八界を具することは、前に正受識は即ち六識界なりと明かせり。(今は)唯識の義を說くべし。

論曰　眼色等の識に色有り。唯識の義は、云何が見るべきや。

釋曰　此れ餘の十界は應に唯識と說くべからずと難ずるなり。前に身識は即ち是れ五根なることを明かせり。謂く眼識、乃至身識なり。前に應受識は即ち是れ五塵なることを明かせり。謂く色識、乃至觸識なり。故に「眼色等の識」と言ふ。色有りといふに、三義有り。一に眼識の未だ生ぜざる時、先に已に色有り。二に識の變異を色と爲すも、亦是れ色有り。三に色境有るに由る。眼識、色に似て起れば、色を了別すと名く。若し色境無ければ、何をか了別する所なる。此の十界[二六]に約すれば、唯識の義は應に成ぜざるべしとなり。

論曰　此等の識は、阿含と及び道理とに由りて、前の如く應に知るべし。

釋曰　此れ向きの問に答ふ。前の二經と及び前に引く所の譬等の道理に由りて、應に此の如きの知を作すべし。

論曰　若し色、是れ識ならば、云何が顯現して色に似るや。

釋曰　此問は、若し別の色塵無く、唯だ是れ本識のみなりと言はゞ、何が故に顯現して色等に似るや。

論曰　云何が相續し堅住して、前後相似するや。

釋曰　此の問は、若し是れ識の變異の所作ならば、則ち應に乍ち起り、乍ち滅して、改轉定まらざるべし。云何が一色は多時の中に於て、相續し久しく住し、前後一類にして改轉有ること無き

【二六】　十界とは前に說くが如く身識としての五根と應受識としての五境となり、これ十八界の中の十界なるが故に十界といふ。

て、唯識の義を顯現するなり。

論曰　云何が此の如くなるや。

釋曰　此れ、云何が唯だ識のみ有りと言ふやと問ふなり。

論曰　是の時、觀行の人の心は、正しく觀中に在つて、若し青黃等の遍入の色相を見れば、即ち自心を見て、餘境の青黃等の色を見ず。

釋曰　若し散心に在る五識ならば現在の外塵を見て起ると言ふべく、若し散心の意識ならば、過去の塵を緣じて起る。若し觀中に在らば、必ず外色を緣じて境と爲すことを得ず。色は現前に在れば、又過去の境を緣ずるに非ず。當に知るべし、定心の緣ずる所の色は、即ち自心を見て、別境を見ざることを。

論曰　此の道理に由つて、一切識の中、菩薩は唯識に於て、應に此の如きの比知を作すべし。青黃等に於ける識は、憶持識に非ず。境の現前に在るを見るを以ての故なり。聞思の兩位に於ては憶持の意識なり。此の識は、過去の境を緣じ、過去の境に似て起る。是の故に唯識の義を成ずることを得るなり。此に由つて比知の菩薩は若し未だ眞如の智覺を得ざるも、唯識の義に於て比知を生ずることを得。

釋曰　前に十一識を明かして、通じて十八界を說けり。十八界の中には、根有り塵有り、菩薩は唯識の義の中に於て應に觀ずべし。定中の色には、既に別の境無し。定中の色を以て、定外の色に比するに、應に知るべし、亦別の境無きことを。

論曰[二五]　是の種々の識は前に已に說けり。

釋曰　十一識は前に已に具さに說けるも、將に難を立てんと欲するが故に、須らく先づ前に已に十一識を說けることを明かすべし。

【二五】　次に難を立てゝ解釋す。

論曰　佛世尊、言はく。彌勒よ、法の能く餘法を取ること有ること無し。此の識を取ること能はずと雖はも、此の如く變生し顯現して塵の如し。

釋曰　此の識は此の如くして相貌生ず。定中に於て二種の相を起す。一には能取の相に由りて不同を起し、二には所取の相に不同を起す。此の二相は一識より俱時に顯現す。此の青等の色相は是れ定境にして、憶持する所の識に非ず。[二〇]此の色は、定處に在らざるに由つて、前の[二一]所證の如く後に更に憶持すとは、此の義有ること無し。[二二]塵現前に起りて、分明に顯現す。此の憶持識には染汚有るも、此の現前に起りて見る所は、分明にして淸淨なり。若し汝、聞思の二境は數々習ふ所にして、今時已に過ぐるも追つて更に思惟し、昔の所見の如く今時に重ねて見ると言はゞ、是の義然からず。何を以ての故に。此の聞思の二境は過去せるに由るが故に、今は則ち有に非ず。此れ有に非ざる時、若し昔に似て起らば、昔の所見に非ず、則ち唯識の旨、此に於て彌々彰かなり。是の故に、唯識の義と及び塵に所有無きの義とは成ずることを得。

論曰　譬へば、[二三]面に依て面を見て我れ影を見ると謂ふが如し。此の影は顯現して相似せるも面に異る。

釋曰　此の譬は、但だ自面のみ有りて、別の影有ること無きを顯はさんが爲なり。何を以ての故に。諸法和合の道理は、思議すべきこと難く、法を見るべからずして、而も見ることを得しむればなり。猶ほ[二四]水鏡等の影は、實には別法無きも、還つて自面を見て、別の影有りと謂ふが如し。

論曰　定心も亦爾なり。顯現して塵に似るを定心と異ると謂ふ。

釋曰　定心に、二分有りて、一分は識に似、二分は塵に似るも、此の二種は實には唯だ是れ識のみなり。

論曰　此の阿含と及び所成の道理とに由つて、唯識の義は顯現す。

釋曰　阿含とは、卽ち前の二經なり。道理とは、謂く憶持識と過去色と及び面影の譬等の道理に

【二〇】是れ定境は憶持識にして現前の境にあらずといふ異計を破す、唐譯、特に無性釋を參照せよ。

【二一】所證の證は現見の意。

【二二】塵現前云云とは定境と憶持識との相違を辨す、定境は塵現前す。

【二三】鏡面に依つて自の顏面を見るに喩ふ。

【二四】水面及び鏡面等に映する影像なり。

釋曰　此の夢の譬に由りて、十八界等の處に於て、應に唯だ識のみにして塵等無きことを知るべし。何の故に、二阿含を引きて、聖教を明かすや。前は是れ略說にして、後は是れ廣說なり。即ち前を以て後を證す。

論曰　是の時、彌勒菩薩摩訶薩、佛世尊に問ふ。世尊よ、此の色相は、是れ定心所緣の境なり。心と異なると爲すや、心と異ならずと爲すやと。

釋曰　「此の時」に、三義有り。一に平等時、謂く沈浮顚倒無きなり。二に和合時、謂く令聞と能聞と正聞となり。三に轉法輪時、謂く正說と正受となり。「色相」とは、謂く[一七]十の一切入の中の前の八入等なり。此の色相は、是れ定心所緣の境なり。心別、[一八]境別なりと爲すや、是れ心、是れ境なりと爲すや。

論曰　佛世尊、言はく、彌勒よ、心と異ならず。何を以ての故に。我れ唯だ識のみ有りて、此の色相の境界は識の顯現する所なりと說けばなり。

釋曰　佛は唯だ識のみ有りて塵無しと說くが故なり。若し爾らば、此の色は是れ觀行の人の所見なり。是を何の法と爲すや。經に言へるが如く、此の色相の境界は識の顯現する所にして、實には境界無く、是れ識の變異の所作なり。先に唯識と說き、後に境界識を說く。此の二識は何の異り有りや。[一九]兩分有ることを顯はさんと欲するなり。前識は是れ定の體、後識は是れ定の境なり。此の體と及び境とは、本、是れ一識なり。一は能分別に似て起り、一は所分別に似て起る。

論曰　彌勒菩薩、言はく。世尊よ、若し定境界の色相と定心と異ならざれば、云何が此の識は此の識を取りて境と爲すやと。

釋曰　若し別の識有りて識の境と爲らば、則ち唯識の義は成ぜず。若し自體を緣じて境事と爲すことも、亦成ぜず。世間には此の類無きを以ての故なり。

【一七】十の一切入とは新譯の十遍處にして、地水火風、青黃赤白、無邊空處、無邊識處の十なり、此の中の前八は色相に屬す。

【一八】心別境別とは心と境とは別なりと爲すやの意。

【一九】兩分とは能緣の識と所緣の境をいふ。

明了ならず。眞、明了ならざれば、則ち俗を遣ること盡きず。是の故に、具さに十一識を説いて、通じて俗諦を攝し、十八界の如く根塵識を具有すと爲すや、爾からずと爲すやを（明かせり）。

論曰　此の如きの衆識は、唯だ識のみにして、塵等無きを以ての故に。

釋曰　識の變異する所に、内外有りて、事相同じからずと雖も、實には唯だ一の識のみ、塵等の別體有ること無きが故に、皆識を以て名と爲す。若し塵無ければ此の識は塵を離る、愛憎等の受用は、云何が成ずることを得るや。

論曰　[一四]譬へば夢等の如し、夢中に於ては諸の外塵を離れて、一向に唯だ識のみにして、種々の色・聲・香・味・觸・舍林・地山等の諸塵は、實の如く顯現するも、此の中に一塵として是れ實に有るもの無し。

釋曰　夢中の所見には、種々の差別有るも、並びに實の塵無く、悉く是れ識の所作なり。愛憎等の受用も、此の義、亦成ず。

論曰　此の如きの譬に由りて、一切處に應に唯だ識のみ有ることを知るべし。此等の言に由りて、應に幻事・鹿渴・瞖闇等の譬をも知るべし。若し覺人の見る所の塵ならば一切處に唯だ識有るのみなり。譬へば[一五]夢塵の如く、人の夢より覺むるが如し。夢塵を了別すれば、但だ唯だ識有るのみ。覺時に於ては、何の故に爾からざるや。此の義無きにはあらず。若し人、已に眞如の智覺を得れば、此の覺無きにあらず。譬へば人の正しく夢中に在りて、未だ覺めざれば此の覺生ぜざるも、若し人、已に覺むれば方に此の覺有るが如く、此の如く、若し人未だ眞如の智覺を得ざれば、亦此の覺無きも、若し人已に眞如の智覺を得れば、必ず此の覺有り。若し人、未だ眞如の智覺を得ざれば、唯識の中に於て、云何が比智を起すことを得んや。聖教と及び眞理とに由りて[一六]比度することを得べし。聖教とは、十地經の中に佛世尊の言へるが如し。佛子よ、三界は唯だ識有るのみと。又、解節經の中に説くが如し。

【一四】次には譬に約して無塵唯識の義を明かす。

【一五】夢塵とは夢中所見の諸法をいふ。

【一六】比度すとは理解力に由りて比知し推度するを云ふ。

論曰　分別性相とは、實に塵有ること無く、唯だ識の體のみ有りて顯現するを塵と爲す。是を分別性相と名く。

釋曰　我等無きが如く、塵には別體有ること無く、唯だ識のみを體と爲す。識を以て分別性と爲さず、識の變異し顯現する所を我等と爲し、塵無くして、有に似て識の所取と爲るを、分別性と名く。

論曰　眞實性相とは、是れ依他性なり。此の塵相は永く所有無きも、此れ實に無ならず、是を眞實性相と名く。

釋曰　虚妄の義は、永く顯現の因有らず、顯現の體有らざるに由るが故に亦得べからず。譬へば我等の塵、顯現して實有に似るが如し。此の顯現に由りて、證と比と聖言との三量[一]に依りて、其の體を尋求するも、實には得べからず。我塵の如く、法塵も亦爾なり。永く體有ること無きが故に、人法皆無我なり。此の如く無我は實に有にして無にあらず。此の二種の塵は、體有ること無きに由るが故に、依他性は得べからざるも、亦實に有にして、無にあらず、是を眞實性相と名くるなり。

論曰[二]　身識と身者識と受者識とに由りて、應に眼等の六の內界を攝することを知るべし。應受識を以て、應に色等の六の外界を攝することを知るべし。正受識を以て、應に眼等の六識界を攝することを知るべし。此の如き等の識を本と爲すに由り、其の餘の諸識は、是れ此の識の差別なり。

釋曰　此の言は、何の義を顯はさんと欲するや。眞實性の義を顯はさんと欲するなり。若し定んで一切法は唯だ識のみ有ることを明かにせざれば、眞實性は則ち顯現することを得ず。若し具さに十一識を說かざれば、俗諦を說くこと盡くさず。[三]若し前の五識を說くに止まらば、唯だ俗諦の根本を得るのみにして、俗諦差別の義を得ず。若し俗諦を說くこと遍ねからざれば、眞諦は則ち

【一】聖言とは聖教量のこと。

【二】次には重ねて十一識を擧げて十八界に配し唯識無境を明かす。

【三】俗諦の諸法に通了し、之を遣去して唯識の眞諦に悟入するを敎の目的と爲せばなり。

は卽ち是れ虛妄の分別なり。分別は卽ち是れ亂識にして、虛妄は卽ち是れ亂識の變異なり。虛妄の分別は、若し廣說すれば十一種の識有るも、若し略說すれば四種の識有り。一には[三]似塵識、二には[四]似根識、三には[五]似我識、四には[六]似識識なり。一切の三界の中の所有ゆる虛妄の分別は、此の義を出でず。此の如きの識は、卽ち顯現することを得るに由つて、此の如きの識は一切の虛妄分別を攝して皆盡くすと雖も、此の虛妄の分別の中に[七]就いて、何をか依他性と爲し、何をか分別性と爲すや。

論曰 此の如き等の識は、虛妄分別の所攝にして、唯だ識のみを體と爲す。

釋曰 「此の如き等の識」とは、卽ち十一識と及び四識とを顯はす。一切法の中に、唯だ識のみ有りて、更に餘法無きが故に、「唯だ識のみを體と爲す」なり。此の體有るに由るが故に、分別性に異り。虛妄の分別性に攝せらるゝに由るが故に、眞實性に異る。此の性は實に有なるに非ず、實に無なるに非ざるが故に、虛妄なることを免れず。此の虛妄は、是れ其の性なるが故に、「虛妄分別の所攝なり」と說く。

論曰 有に非ざる虛妄の塵の顯現する依止、是を依他性相と名く。

釋曰 定んで所有無きが故に、「有に非ず」と言ひ、有に非ざる物にして而も六識の[八]緣々と爲るが故に「虛妄の塵」と言ふ。根と塵と我と識とに似て、生住滅等に心變異して明了なるが故に「顯現す」と言ふ。此の顯現は、依他性を以て因と爲すが故に「依止」と言ふ。譬へば我を執して[九]塵と爲すが如し。[一〇]此の塵は、實には所有無し、我は有に非ざるを以ての故に、心變異し、顯現して我に似るに由るが故に、「有に非らざる、虛妄の塵」と說く。此の事を顯現するは、依他性を因として起るが故に、依他性を虛妄の塵の顯現する依止と爲し、此を說いて依他性相と爲すなり。

【三】似塵識とは色等の諸法を變似する識。
【四】似根識とは自他の五根を變化する識。
【五】似我識とは染汚の意の我痴等と相應する我執の識なり。
【六】似識識とは外境を了別する六識をいふ。
【七】「就いて」は大正藏經に「執して」と有るも誤寫なるべし。
【八】緣緣とは所緣の義。
【九】塵は對境の義。
【一〇】此の塵とは我相のこと。

ことを得るに由り、此の分別性を以て一切の諸識を攝して皆盡す。

論曰　何をか差別と爲すや。

釋曰　此れ通性を問はずして、但だ諸識の差別のみを問ふ。

論曰　謂く身識と身者識と受者識と應受識と正受識と世識と數識と處識と言說識と自他差別識と善惡兩道生死識となり。身識と身者識と受者識と應受識と正受識と世識と數識と處識と言說識と、此の如き等の識は言說熏習の種子を因として生じ、自他差別識は我見熏習の種子を因として生じ、善惡兩道の生死識は有分熏習の種子を因として生ず。

釋曰　身識とは謂く眼等の五界なり。身者識とは謂く染汚識なり。受者識とは謂く意界なり。應受識とは謂く色等の六の外界なり。正受識とは謂く六識界なり。世識とは謂く生死相續して斷ぜざる識なり。數識とは謂く、一より乃し阿僧祇數に至る數識なり。處識とは謂く器世界の識なり。言說識とは謂く見聞覺知の識なり。此の如きの九識は、是れ應知の依止にして言說熏習の差別を因と爲す。自他差別識とは、謂く自他の依止の差別識にして、我見熏習を因と爲す。善惡兩道の生死識とは、謂く生死道の多種の差別識にして、有分熏習を因と爲す。

論曰　此の如き等の識に由つて、一切の界と道と煩惱とは攝せらる。

釋曰　「一切の界」とは即ち三界、十八界なり。「一切の道」とは即ち六道なり。此の界と此の道との中に於て、三煩惱有り、即ち惑と業と果報となり、此の三を亦煩惱と名け。亦名けて濁と爲す。俗諦は此等の法を出です。即ち前の十一識を以て、此等の法を攝す。其の同性なるを以ての故に相ひ攝することを得。

論曰　依他性を相と爲して、虛妄分別は即ち顯現することを得。

釋曰　虛妄分別を顯はさんと欲し、但だ依他性のみを以て體相と爲す。[二]亂識と及び亂識の變異と

【二】　亂識の義は後に釋文あり。

巻の第五

釋應知勝相* 第二の一

相章第一

此の義に四章有り、一には相、二には差別、三には分別、四には顯了意依なり。

論曰 此の如く已に應知依止の勝相を說けり。云何か應に應知の勝相を知るべきや。

釋曰 前に次第に十義有りと說き、已に第一の依止の勝相を釋せり。次に應に第二の應知の勝相を釋すべし。此の義に幾數有り、何の名有り、何の相有りや。此の三を、云何が見るべきや。

論曰 此の應知の相は略して說くに三種有り。

釋曰 此の下、前の三問に答ふ。略して說くに第二の勝相の數に三有ることを明かす。即ち是の三を三相と名く。何等をか三と爲すや。

論曰 一には[一]依他性相、二には分別性相、三には眞實性相なり。

釋曰 此の語は、先づ數の三と及び三數の目くる所の名とを顯はす。三相は次後の文に別に解す。一二三は是れ數にして、依他と分別と眞實とは是れ名なり。

論曰 依他性相とは。

釋曰 此の下、三相を釋す。

論曰 本識を種子と爲し、虛妄分別に攝する所の諸識の差別なり。

釋曰 本識の能變異を十一識と作すに由つて、本識は卽ち是れ十一識の種子なり。十一識は既に異るが故に「差別」と言ふ。「分別」は是れ識の性なり。識性は何の所に分別するや。無を分別して有と爲すが故に「虛妄」と言ふ。分別を因と爲し、虛妄を果と爲す。虛妄の果は分別の因を顯はす

*明本は第五。

【一】唐譯には依他起相、遍計所執相、圓成實相といふ。

論曰　又、方便して善及び煩惱を起すことを得ること無からん。

釋曰、若し定んで、是れ善ならば煩惱は起ることを得ず。若し定んで、是れ惡ならば善は起ることを得ず。

論曰　故に解脫と及び繫縛と無けん。

釋曰　若し善無ければ、則ち解脫無く、若し煩惱無ければ則ち繫縛無し。

論曰　此の二の義無きが故に、是の故に果報識は定んで是れ無覆無記性なり。

釋曰　解脫無きの義無く、繫縛無きの義無し。既に定んで解脫及び繫縛有るが故に、本識は定んで是れ無記性なることを知る。

る。此の識を或は無分別智と名け、或は無分別後智と名く。若し衆生に於て利益の事を起す一分ならば俗智と名け、若し一切法の無性を緣じて起る一分ならば、眞如智と名く。此の二の合するを應身と名く。

論曰 若し此の煩惱無ければ、次第に滅盡することは、則ち成ずることを得ず。

釋曰 若し此の具相と不具相無ければ、凡夫と有學の聖人と無學の聖人との、次第に滅するは、此の義成ぜず。本識は三性の中に於て、何が故に但だ是れ無記性のみなるや。是れ果報なるが故なり。

論曰 何の因緣にて、善惡二法の果報は、唯だ是れ無覆無記のみなるや。

釋曰 煩惱染汚に非るが故に、無覆無記と名く。上界の煩惱の、是れ有覆無記なるに同じからず。何の故に同じからざるや。因は是れ善惡にして、而も果は是れ無記なればなり。

論曰 此の無記性は善惡の二法と俱生して相違せず。

釋曰 無覆無記性は、善惡の二性と相違せざるに由るが故に、無記の果報の中に於て、善惡の二業は生ずることを得。業に由つて生ずるが故に善惡の二道有り。

論曰 善惡の二法は、自ら互に相違す。

釋曰 若し果報、是れ善惡ならば、善惡の性は、互に相違す。若し是れ善ならば、惡は生ずることを得ず、應に惡道無かるべし。若し是れ惡ならば、善は生ずることを得ず、應に善道無かるべし。善惡の二道は、則ち隨つて一は無道ならん。

論曰 若し果報にして、善惡の性を成ずれば、方便して煩惱を解脫することを得ること無からん。

釋曰 若し果報是れ善惡の性ならば、善より更に善の果報を生じ、惡より更に惡の果報を生ぜん。報に更に報有るに由り、則ち生死は斷ぜざるが故に解脫を得るの義無からん。

能く衆生の明了に境を見ることを障ふ。阿陀那識、若し未だ滅せざれば、能變異の本識は六識を生じ、四種の上心の顚倒を起すが故に、本識は此の如きの事に似ると言ふ。

論曰　若し此れ無ければ、虚妄分別の種子なるが故に、此の識は顚倒の因緣を成ぜず。

釋曰　若し本識の一分と阿陀那識と相應すること無ければ、則ち本識は四顚倒の因緣を成ぜず。何を以ての故に。此の如く本識は、是れ虚妄分別の種子の因緣なるが故に、一切の虚妄分別は皆此の本識より生ず。

論曰　復、具と不具との相有り。

釋曰　此の譬喩相の識に約すれば、本識は更に二相を成ず。一には縛を具する相、二には縛を具せざる相なり。

論曰　若し縛を具する衆生ならば、有具相なり。

釋曰　謂く未だ欲界を離欲せざる衆生は、[四八]三煩惱を具するが故に具相と名く。

論曰　若し世間の離欲を得れば、有損害の相なり。

釋曰　若し衆生、欲色界を離欲すれば、肉と心との煩惱具足し、皮煩惱漸く損害せらるゝの義有り。此の二は凡夫に約す。

論曰　若し有學の聲聞と及び諸の菩薩とならば、一分の滅離有る相なり。

釋曰　肉煩惱の一分盡くるも、皮煩惱は或は損せられ、或は未だ損せられず。

論曰　若し阿羅漢と緣覚と如來とならば、具分に滅離有る相なり。何を以ての故に。阿羅漢と獨覺とは、單に惑障のみを滅し、如來は雙びに惑と智との二障を滅すればなり。

釋曰　阿羅漢と獨覺とは、但だ見修二道の所破の惑のみを滅離し、盡くすが故に解脫の障無し。如來は具さに三煩惱を滅離し盡くすが故に、如來の本識は永く一切の解脫の障と及び智障とを離

【四八】三煩惱とは皮、肉、心の三をいふ、前に釋文に解せり。

論曰 若し此の識無ければ、作と不作との善惡の二業有りて、果報を與ふるに由るが故に、受用盡くるの義は成ぜず。

釋曰 若し有受相の本識無ければ、善惡の二業に數々作及び不作有りて、果報を施與するに由り功能滅盡して、更に報を受けず、故に受用と名く、此の義は成ぜず。解脱の義を失するを以ての故なり。若し受けざること無ければ、復何の失有りや。

論曰 始生の名言熏習の生起することも、亦成ずることを得ず。

釋曰 若し先の名言熏習を離るれば、今時と未來時とに未だ曾て有らざるに、而も此の名言熏習有るは則ち成ずることを得ず。何を以ての故に。等流果若し無ければ同類因は則ち成ずることを得ず。[四四]若し生ずることを得れば、阿羅漢緣覺は煩惱を斷じ盡すも、應に更に煩惱を生ずべし。[四五]若し生ぜざれば、應に根本煩惱無かるべし。若し根本煩惱無ければ、則ち業無し。[四六]若し煩惱業無ければ、則ち有及び差別無し、則ち集苦の二諦は、自然に滅盡し、卽ち涅槃に入りて修道を勞せざらん。此の二義に由りて、[四七]無解脱と及び自然解脱と無し。故に知る、定んで受と不受との二相有ることを。

論曰 復次に譬喩相の識有り。

釋曰 譬へば幻事は象馬等の亂心の因と爲るが如く、此の如く譬相の本識は是れ虛妄分別の種子なるが故に、一切の顚倒亂心の因と爲る。

論曰 幻事と鹿渴と夢相と瞖闇等の如し。第一識を譬ふるに、此の如きの事に似たり。

釋曰 此の四事は四倒に譬ふ。幻事は我執に譬へ、鹿渴は我愛に譬へ、夢相は我慢に譬へ、瞖闇を無明に譬ふるなり。此の四の譬は同じく本識に譬ふ。本識は卽ち此の四事に似たり。幻事は、能く衆生の邪執を生じ、鹿渴は、能く衆生の貪愛を生じ、夢相は能く衆生の亂心を生じ、瞖闇は

【四四】若し同類因無くして而も果生ずることを得ればの意なり。
【四五】若し同類因無くして果生ずることを得ざればの意。
【四六】此の句は略疏に文字の訂正をなせるも原文のまゝにて解するが充當なり。
【四七】無解脱は前句に、自然解脱は後句に配す、略疏に無の一字を衍となすも不可なり。

す。

論曰　復次に、受と不受との相の二種の本識有り。[四三]

釋曰　本識の中の功能に、盡と不盡と有ることを顯はさんと欲す。

論曰　有受相とは、果報の已に熟せる善惡の種子なり。

釋曰　此の本識に昔より有せる善惡の種子は、果報を若し皆熟し用ひて種子盡くれば、但だ本識のみ識に在る有り。此の本識を有受相と爲す。

論曰　不受相とは、名言熏習の種子なり。

釋曰　此の本識は生死の中に在りて受用して盡くること無き同業の種子なり。是れに由りて相續して斷ぜざる因有るが故に、不受相と名く。不受相は其の體云何ん。謂く名言熏習種子なり、先に音聲を以て、一切法に目づくるを「言」と爲し、後に言を發せずして、直に心を以て、先の音聲を緣ずるを「名」と爲す。此の名は分別を以て性と爲す。若し此の名を以て內法を分別して、或は增し或は減じて、正理を壞し、非理を立つるを肉煩惱と名く。若し此の名を以て外塵を分別し、欲瞋等を起せば、皮煩惱と名く。若し此の名を以て、一切の世出世法の差別を分別して、前の二分別を離るれば、心煩惱と名く。是の故に、一切の煩惱は、皆分別を以て體と爲し、無分別の境と及び無分別の智とを障ふ。云何が此を說いて不受相と爲すや。

論曰　無量時の戲論はの生起する種子なるが故に。

釋曰　四種の世間の言說を戲論と名く、謂く見と聞と覺と知となり。但だ名言のみを以て分別するに、此の四種有りて、實義を緣ぜざるが故に、戲論と名く。前後際に約すれば、戲論窮まらさるが故に、「無量時の戲論」と言ふ。此の戲論、若しくは生じ、若しくは起るに、名言熏習に由りて生ずるが故に、名言熏習を說いて戲論の種子と爲す。若し此の二分無ければ、何の過失有りや。

【四三】　受と不受との相は、唐譯に「有受盡相と無受盡相」と爲せり。

論曰　是の不共の本識の差別は、有覺受生の種子なり。若し此れ無ければ、衆生世界の生緣は成ぜず。是の共阿梨耶識は無受生の種子なり。若し此れ無ければ、器世界の生緣は成ぜず。

釋曰　共・不共の二因は、內の五根と及び外の五塵とを生ず。自の六識の爲に、依止と作るが故に、不共因の[四〇]感と爲し、他の六識の境界の爲の故に、共因の感と爲す。若し雙びに二因の所感と爲らざれば、則ち色陰及び互に相ひ見ること無し。

論曰　[四一]復次に、麁重相の識と細輕相の識とあり。

釋曰　此の文は、本識は是れ善惡二業の相似果なるも、亦是れ善惡二業の生因なることを顯はす。

論曰　麁重相の識とは、謂く[四二]大小二惑の種子なり。

釋曰　理と及び事とに於て、心に功能無きが故に麁重と稱す。一切の未來の惑と及び業とは、皆此の識より生ずるが故に種子と稱す。

論曰　細輕相の識とは、謂く一切の有流善法の種子なり。

釋曰　理と及び事とに於て、心に功能有るが故に細輕と稱す。一切の未來の信等の五根の善は、皆此の識より生ずるが故に種子と稱す。

論曰　若し此れ無ければ、前業の果に勝能有ると勝能無きとに由りて、依止の差別は成ずることを得ず。

釋曰　若し此の識無ければ、習果と及び果報果とを分つことは、皆成ずること得ず。習果は是れ相似の果にして、果報果は是れ六道の本識なり。本識の中に於て、更に麁重相と及び細輕相と有り、習果も亦相似果と名く。勝能は是れ相似果の依止なり。是れ果報果は善道の中には人天の異り有り、惡道の中には地獄畜生等の異り有るが故に、「依止の差別」と言ふ。善道の依止には勝能有るも、惡道の依止には勝能無し。若し本識に此の二相無ければ、因果の義は皆成ずることを得

【四〇】　感とは果報を感招する義。

【四一】　以下は因に諸相有ることを明かす。文に五段あり、知るべし。

【四二】　大小二惑とは煩惱及び隨煩惱なり。

論曰　復、別の偈有り。

釋曰　此の偈は何の所顯を欲するや。二義を顯はさんが爲なり。一には、菩薩は內に於て修觀して、外に依らず。二には、此の觀に由り、唯だ識のみ有りて外塵有ること無し。是の二義は互に相ひ顯はす。

論曰　種々の願と及び見とを、觀行の人は能く成ず。

釋曰　觀行の人、或は自の自在を成ぜんが爲に、或は他を引いて正教を受けしめんと欲するが故に願ひ、種々の變異の願を皆成ずることを得。若し願、已に成ずれば自見他見は所願の如く亦皆成ずることを得。此の願には別の境有りと爲すや、是れ一境なりと爲すや。

論曰　一類の物の中に於て、

釋曰　若し多くの觀行の人、別願するも、同じく能く境を變異す。此の變異は成ずることを得。何の故に成ずることを得るや。

論曰　彼の意に隨つて成ずるが故に。

釋曰　實には外境無く、唯だ識のみ有るが故に、是の故に各彼の意に隨つて變異成ずることを得。若し實に外境有らば、觀行の人の願は則ち成ぜず。因、成ぜざるが故に、自他の所見の變異も亦成ずることを得ず。

論曰　種々の見、成ずるが故に、所取は唯だ識のみ有り。

釋曰　觀行の人の識を增上緣と爲すに由るが故に、餘人の識は變異す。觀行の人の願の如く顯現するが故に、定んで外塵無く唯だ本識のみ有ることを知る。前に已に、覺受の因は定んで是れ不共の種子にして、不覺受の因は定んで是れ共の種子なることを明かせり。今、當に更に共不共の因の同じく一果を生ずることを說くべし。

若し自の相續に約すれば、則ち共に爲さず。云何が此の惑は滅し難く解き難きや。

(論曰 觀行の人は心異り、相大なるに由り外を成ず。)

釋曰 [三八]識を離れて、別の外境無し。是の故に觀行の人は、但だ內法のみを觀ず。是れ外法を觀ぜざること無きが故に、「心は分別の相と異る」と言ふなり。十方世界に通ずるが故に、「相大」と言ふ。觀心と內の種子とは正しく相違し、外と相ひ鬪はらざるが故に「外を成ず」と言ふ。此の三義に由るが故に、外の結は解き難く滅し難きなり。若し此の結に、三義の滅し難く解き難きこと有らば、觀行修道は此の結に於て、何の功能有るや。

(論曰 清淨の人は未だ滅せざるも、此の中に清淨を見る。)

釋曰 對治道、生じて、不共の種子の滅する時、是の觀行の人は、或は分々に清淨に、或は具分に清淨なり。復、未だ外相を滅せずと雖も、中に於て法眼と慧眼とは清淨にして執無し。

(論曰 佛見の清淨なるに由る。)

釋曰 [三九]初地は是れ菩薩の見位なり。初地の中の清淨は、是れ見道の清淨なり。見道の清淨なる、是れを「佛見の清淨」と名く。此の清淨に由りて、能く佛土の清淨を得。何に況んや修位及び究竟位をや。又眞如觀を是れ佛見と名く。何を以ての故に。若し究竟地に至らば、得る所の眞如觀は此に異ならざるが故に、佛見と名くるなり。

又、佛の正教に依り修して、能く此の見を得るに由るが故に佛見と名く。又、菩薩も亦佛と名くることを得。定んで應に佛を得べきを以ての故に。因に果の名を受くるが故に、佛見と稱す。又、菩薩の對治道生ずれば、不共の種子滅して、則ち三の清淨を具す。一には法眼清淨、二には佛土清淨、三には見佛清淨なり。謂く三身を見るなり。菩薩は佛を緣じて見を起すが故に佛見と名くるなり。

【三八】無性釋には「心異ると言ふは種々の勝解各不同なるが故に」といふ。

【三九】此の段の釋も無性と異る參照。

釋曰　道は共種子に於て、功用無く、亦は功用有り。不共種子に於ける功用の如きは、[三五]此の中に則ち無きが故に「功用無し」と言ひ、道を得たる以後の所見は、清淨にして、前に見ると異り有るが故に、「亦は功用有り」と言ふ。云何が道は共種子に於て功用を同じくせざるや。他の分別に持せらるゝに由るが故なり。若し爾らば、道は共種子に於て何の功用有りや。但だ分別のみを除く、境界の中に於て無分別を起すが故に、法眼は境界に於て清淨なり。但だ[三六]無性のみを緣ずるが故に。[三七]若し慈悲般若に約すれば、更に分別を起すも、此の分別は眞如に依止するに由るが故に、則ち分別する所は清淨なる土を成ず。唯だ一の境界なるに云何が衆生の所見は不同なりや。

論曰　譬へば觀行を修する人の如く、一類の物に於ても、種々の願樂と種々の觀察とは、心に隨つて成立す。

釋曰　觀行の人の變化の心に由り、一類の物に於ても、衆生の見同じからず。此の如く、境界は他の分別の所持なるが故に、觀行の人は中に於て清淨の見を得るなり。

論曰　此の中、偈を說く、

滅し難きと及び解き難きとを、說いて名けて共結と爲す。觀行の人は心、異り、相大なるに由り外を成ず。清淨の人は未だ滅せざるも、此の中に清淨を見る、淨佛土を成就するは、佛見の清淨なるに由るなり。

釋曰　結に、二種有り、一は相結、二は麁重結なり。相結は「解き難く」、麁重結は「滅し難し」。心の諸塵を分別するを相結と名け、此の分別に由りて起る欲瞋等の惑を說いて麁重結と名く。若し無分別智を得れば、卽ち相結を解く。相結起らざれば、麁重結は卽ち隨つて滅す。又釋すらく、「滅し難し」とは無間道に約す。無間道は得ること難きが故に。「解き難し」とは解脫道に約す。無間道は得難きに由るが故に、解脫道得難し。共境界の中に於て、結を起すが故に「共結」と名く。

【三五】此の中とは共種子の識を指す。

【三六】無性とは三無性の理を指す。

【三七】前には如理智を說き以下は利他の如量智を明かす。

相貌章第七

論曰 相貌の差別とは、此の識に共相有り、不共相有り。無受生種子の相と、有受生の種子の相となり。

釋曰 相貌の差別の品類に多種有り。若し略して説かば、四種有り。

論曰 共相とは、是れ器世界の種子、不共相とは、各別の內入の種子なり。復次に、共相とは、是れ無受生の種子にして、不共相とは、是れ有受生の種子なり。

釋曰 本識は一切衆生と功能を同じくす、是れ衆生の共に用ゆる所の器世界の生因なり。「復次に共相は是れ無受生の種子なり」とは、此の本識は是れ無覺受の法なり。謂く外の四大五塵等の生因なればなり。若し此の如き相貌の本識無ければ、是の器世界の衆生の同用因は則ち成ぜず。「不共相は是れ各別の內入の種子なり」とは、各別は是れ自他に約して立つ。境界同じからず、種類同じからず、取相同じからざるが故に、各別と言ふ。又自に約すれば內と爲し、他に約すれば外と爲す。是れ內の根塵等の生因を不共相と爲す。「是れ有受生の種子なり」とは、此の本識は是れ有覺受の法の生因なればなり。若し第二の相貌無ければ、衆生世界は成ずることを得ず。若し別因に由りて成ずることを得れば、木石等の如く無覺無受たり。此の二の種子の何れの種子を、聖道の所破と爲すや。

論曰 若し對治、起する時は、不共の所對治滅す。

釋曰 此の不共の種子は、若し道起る時は、道と相違し、必ず道の爲に破せらる。何を以ての故に。一人、道を得るも餘人は解脱を得ること無ければなり。共の種子に於て、道は何の功用有りや。

論曰 共種子の識に於ては、他の分別に持せられて正見淸淨なり。

釋曰　善と惡と不動との業に隨つて、六道の中に於て受くる所の六根に差別有るに由り、是の故に本識に三有六道の差別有り。是を本識の第三の差別と名く。

引生章　第四

論曰　四種とは、謂く引生と果報と緣相と相緣との差別なり。引生差別とは、是れ熏習の新生なり。若し此れ無ければ、行を緣として識を生じ、取を緣として有を生ずることは、是の義成ぜず。

釋曰　引生の種類の差別は、此に何の相有りや。是れ熏習の新生なり。若し引生の本識の差別無ければ、行生滅して熏習する所の識は、[三〇]取の所攝に由るが故に。[三一]生に對して、有起るも、此の有は成ずることを得ず。此の有より生起するが故に、此を說いて[三二]有法と爲す。取及び善惡等は、是れ宿世に數習する所の果なり。

果報章　第五

論曰　果報の差別とは、行に依りて六道の中に於て此の法は成熟す。若し此れ無ければ、後時の受生に所有ゆる諸法の生起することは、此の義成ぜず。

釋曰　行有を引因と爲し、六道の中に於て、是の本識を成熟するを、說いて名けて引と爲す。若し此の更に生じて法と爲るもの無ければ、眼等の諸根も色等の諸塵も更に生ずることは、此の義成ずることを得ず。[三三]此の法とは卽ち果報の果なり。

緣相章　第六

論曰　緣相の差別とは、此の心の中に於て、相有り能く我執を起す。若し此れ無ければ、餘心の中に於て我相の境を執するは、此の義成ぜず。

釋曰　此の本識は、[三四]第二識の我執と爲り、第六識の我見には緣相と作る。是の本識に、若し緣相の差別無ければ、身見を以て因と爲す、我執の所緣の境は成ずることを得ず。是を相似果と名く。

【三〇】　取の所攝に由るとは取は有に緣たるの意なり。

【三一】　隋譯に「取に攝持せらるるに由るが故に生有現起するも、此の有は成せず」とあり、今も其の意なるべし。

【三二】　本文に有法取とあるも法の字は此の字の誤寫にあらざるかと略疏に指南せり、而し燉煌古疏は本文に一致するが故に本文のまゝ訓讀せり。隋譯に「能く後生を有するが故に此を名けて有と爲す」となす、唐譯も亦同じ。

【三三】　此の法とは前に「法と爲るもの無し」といふ其の法の字を釋したるなり。

【三四】　隋唐兩譯には第二識及び第六識と言はずして單に染汚の意と爲せり。

釋曰　此れ本識を問ふ。性に差別有りと爲すや、事に差別有りと爲すや。

論曰　若し略して說かば、或は三種に、或は四種に差別す。

釋曰　今は事に就て差別を明かす。唯だ一の本識のみ、其の性は異ならざるも、事に約すれば或は三種、或は四種、或は七種に差別す。

論曰　三種とは、三種の熏習異るに由るが故なり。謂く言說と我見と有分との熏習の差別なり。

釋曰　論本に此の三を釋せざる所以は、後に應知勝相を解して、初めに自ら此の三義を分別するが故に今は釋せざるなり。言說の熏習に由る差別とは、唯一の本識なるも、熏習に由るが故に、三種有り。言語は名を以て體と爲す。名に二種有り、謂く言說の名と思惟の名となり。此の二種の名は、音聲を以て本と爲す。能見に約するに、色根に聲有れば、說いて眼と謂ふ。數々此の言語を習し、中に於て愛を起して本識に熏習す。此の熏習は、是れ眼根の生ずる因なり。若し果報の眼根、應に生ずべきなれば、此の本識の中の言說の愛の熏習より生ず。是の故に言說の熏習を立てて、眼根の因と爲す。眼根の如く、耳等の根に於ても、一切の言說の熏習より生ずることは、應に此の如きの知を作すべし。是れ本識の第一の差別なり。

我見章　第二

(論曰[二九]　我見熏習に由る差別。)

釋曰　有染汚の識は、我見等の依止に由るが故に、本識に於て、我々所等の熏習を起す。此の熏習に由るが故に、分別を起す。謂く、自を我と爲し、我に異るを他と爲す。是を本識の第二の差別と名く。

有分章　第三

(**論曰**　有分熏習に由る差別。)

【二九】　論本には初に三種の差別を標するのみ、今は釋文に於て前段に言說熏習を釋したるを以て其の連續として我見と有分とを別に出して解釋せるなり。

治是れ滅諦ならば、因果は則ち一と成る。若し一と成ならば、復何の過有りや。若し對治を得れば、卽ち涅槃せん。若し人有りて、滅諦を立てゝ、轉依と爲さば、當に種子の滅を以て、轉依と爲すべしと爲すや、當に識の滅を以て、轉依と爲すべしと爲すや。

(**論曰**　種子無く法無きを、若し許して轉依と爲さば。)

釋曰　若し人有りて、能依所依の滅を轉依と說かば、意識の中の能依の種子滅す。能依の種子旣に滅すれば、所依の意識も亦滅するが故に轉依と名くるなり。若し此の二義を許して、轉依と爲さば、是は則ち然らず。

(**論曰**　無に於て、二無きが故に、轉依の義は成ぜず。)

釋曰　第六の生起識は、定位の中に於て、若し在らざる時は無種子無く、[二八]無作も亦無きが故に、轉依の義は成ぜず。若し本識有らば、生起識の熏習して生ずる所の種子は、本識の中に於て住す。生起識、復在らずと雖も、種子をして無ならしむることと、及び生起識をして無ならしむることとを得べければ、說いて轉依と爲す。若し本識を離れては、則ち二の無無きが故に、轉依の義は成ぜず、是の義を以ての故に、定んで應に本識有ることを信ずべし。

釋差別品第四

言說章第一

釋曰　此の品に、總じて二章有り、別して七章有り。總じて二章有りとは、一には熏習、二には事用なり。別して七章有りとは、一に言說、二に我見、三に有分、四に引生、五に果報、六に緣相、七に相貌なり。前の三品に已に本識を成立せり。是れに品類の差別有ることを、今當に更に說くべし。

論曰　此の阿梨耶識の差別は云何ん。

[二八] 無作は無法の誤寫なるべし、これ隋唐兩譯に無體といふに相當す、唐譯參照。

に相應せざるが故に、則ち「餘の五識を離る」と言ふ。云何が相ひ離れて生ずることを得るや。一切時に此の如く生ずるが故なり。

(論曰[二五] 餘心無ければ。)

釋曰 染汚の意識と及び有流の善識とを離る、若し但だ善識のみを説きて、餘心無きことを説かざれば、有流の善識は則ち其の中に在らん。

(論曰[二六] 轉依は、何を以て方便と作すや。)

釋曰 一切の染濁の種子は滅離するが故に、唯だ本識のみ在り。是を轉依の相と名く。何をか方便と作すや。後の偈に説くが如し。

(論曰 若し對治を轉依とせば。)

釋曰 若し汝、對治生ずるに由るが故に、依止の轉異するを説いて、對治を轉依と爲すと説かば、此の義は然らず。

(論曰 滅に非るが故に成ぜず。)

釋曰 滅を以て轉依と爲さゞるは、二義の不成有ればなり。一には、若し對治生ずるも、而も種子滅せざれば、[二七]依の義は本の如し、謂ゆる轉依に非ず。二には、對治は是れ轉依の了因にして轉依の體に非ず。對治は是れ道諦にして、轉依は是れ解脱及び法身なり。即ち是れ滅諦なるが故に、應に種子の滅を以て轉依と爲すべし。若し汝、對治生ずれば、染濁の種子滅すと執すれば、一時の中に此の二義有り。何の故に、滅を以て轉依と爲し、道を取つて轉依と爲さゞるや。此の執に過有り。

(論曰 因と果と差別無ければ、滅に於て則ち過有り。)

釋曰 果は是れ滅諦なれば、説いて涅槃と名け、因は是れ道諦なれば説いて對治と名く。若し對

【二五】以下論本は釋文の爲に前掲の本頌の一句一句を再出せるものなれば特に括弧して再出なることを示せり、以下之に準ずべし。

【二六】此の句は唐譯に「轉依は云何が汝當に作すべき」と爲す、釋文も唐譯は流暢にして意義更に明瞭なり參照。

【二七】依止の體相は依然として舊の如くなれば、依止の轉異即ち轉依とはならぬとの意なり。

ざるが爲の故なり。是の故に、應に此の義を知るべし。

論曰　若し次第緣を離れては、此の執は成ぜず。

釋曰　此の前刹那の色は、次第緣に由るが故に、後色と相應す。識も亦此の如く、因緣に由らざるが故に前後相應す。是の故に、此の執は若し次第緣を離れて因緣の義を立つれば、此の執は成ぜず。解脫に違するを以ての故なり。

論曰　此の如く、若し一切の種子の果報識を離れては、淨不淨品は皆成ずることを得ず。是の故に、此の心有るの義は成就す。應當に信知すべし。前に說く所の相に依りて、今當に更に偈を作るべし。

釋曰　此の義は、具さに前に釋せるが如し。若し人、但だ生起識のみ在りて、本識在らずとせば、轉依の義は則ち成ぜず。此の義を顯はさんが爲の故に、三行の偈を說く。

論曰

菩薩は、善の識に於て、　則ち餘の五識を離れて、　餘心無ければ、轉依は、　何を以て方便と作すや。　若し對治を轉依とせば、　滅に非るが故に成ぜず。　果と因と差別無ければ、滅に於て、則ち過有り。　種子無く、法無きを、　若し許して轉依と爲さば、　無に於て、二は無なるが故に、　轉依の義は成ぜず。

釋曰　菩薩に二種有り、謂く凡夫と聖人となり。十信以還は是れ凡夫にして、十解以上は是れ聖人なり。今は、凡夫の依を轉じて、聖人の依と作すことを明かさんと欲するなり。此の轉依は何の識に於て成ずることを得るや。但だ是れ本識の中にのみ成ず。若し本識無ければ、餘識に於て成ずることを得ず。云何が然ることを知るや。此の義は、三偈に、次第に之を顯はす。惡と無記とを離るるが故に「善」と言ひ、是れ第六識なるが故に「識」と言ふ。此の善は是れ出世の心と三十七品等の助道法とに相應するを名けて「善識」と爲す。此の善識は、五種の散動法を離れ、亦五識と恆

の和合にして無能ならば、則ち但だ觸のみを生じて、受を生ぜず。是の故に、此の定は、復是れ善なりと雖も、有能の和合を作すこと能はざるが故に受想無し。是れ方便心は三善根の相應すること有るも、[二四]相似果は則ち此の如くならずと。是の義、然らず。何を以ての故に。所依により、能依を拔除することは得べからざるが故なり。此等の難は、具さに前に說けるが如し。

論曰 若し人有りて、色心次第に是れ諸法の種子を生ずと執すれば、此の執は然らず。

釋曰 若し人有り執すらく、前刹那の色は、是れ後刹那の色の因なり、能く後色の爲に種子と作るが故に。前刹那の識は是れ後刹那の識の因なり。能く後識の爲に種子と作るが故にと。此の執は然らず。

論曰 何を以ての故に、已に前の過有り、復別の失有ればなり。

釋曰 前の過とは、謂く識の相續斷ずれば、後識は因無くして、應に生ずることを得ざるべし。又一期の報盡きなば、後胎に託することを離れては、更に生ずるの義無し。此の如きの失有ることは、前に已に具さに明かせり。此の如きの執を作す者有り、若し人無色界より退かば、還つて下の有色界に生ずと。後色、若し應に生ずべきに、前の種子久しく滅すれば、此の色は何の因より生ずるや。

論曰 別の失とは、若し人、無想天より退き、及び滅心定を出でんに、此の中に執する所は成ぜず。

釋曰 無想天に生ずると、及び滅心定に入るとには、心已に久しく滅せり。後、若し生を退き及び定を出でなば、云何が先の心を成就して後に當に生ずべき心の因と爲ることを得るや。若し定此の如くならば。

論曰 阿羅漢の最後心も、亦成ずることを得ず。

釋曰 阿羅漢は無餘涅槃に入るの義有ること無からん。何を以ての故に。後色も後心も、因盡き

【二四】相似果とは等流果のことにして加行心の等流果としての滅心定をいふ。

此の如きの滅を得べきも、[一九]一切行の中に於ては、此の如きの滅有ることを得るに非ず。若し遍行滅すれば、心も必ず隨つて滅すれば、佛世尊は應に識は身を離れずと說くべからず。[二〇]此の識有るに由るが故に知る、如來は本識は此の定中に於ても是れ有ることを成立せんが爲なることを。

復次に、經に識は身を離れずと言ふ。此の言を若し本識を離れて餘識に約すれば、則ち成ぜず。何を以ての故に。此の滅心定は、生起識を對治せんが爲の故に生ず。此の生起識の寂靜ならさることを觀ずるに由るが故なり。若し人有り、執すらく、出定の時に心、則ち還つて生ず、此の義に約するが故に不離の言有りと。此も亦然らず。何を以ての故に。若し此の如きの義有らば、出定の人の心は更に果報識を生ぜず。若し相續斷離せば、後生に託する時に、還つて生ずるの義無し。[二一]若し人有り、本識を離れ、意識に由りて、滅心定に心有りと計すれば、是の人の執する所の心は則ち心を成ぜず。善と惡と無記性とは成ぜざるが故なり。此の定は是れ善を性と爲すと說くに由るが故に、是れ惡に非ず。無記も亦爾なり。威儀・工巧・變化の心は、此の定中に有ることを得ざるが故に。若し[二二]果報無記の心有りと說かば、卽ち是れ本識なり。第五の無記無きを以ての故に。若し汝、此の心は是れ善なりと說かば、則ち應に無貪等の善根と相應すべし。何を以ての故に。染汚心、已に滅して、善心正しく起れば、意根にも亦境界有り、亦三法の和合すること有り、云何んが觸を生ぜざらん。若し觸有らば、云何が受無からん。若し爾らば、滅心定の義は生ずることを得ず。心と及び心法とは、中に於て滅せざるを以ての故なり。[二三]若し人有り執すらく、此の定は是れ善なるは引因に由るが故なり。方便に在りて善心の功用有り、能く此の定心を引く。定心は是れ相似の果なれば、復、是れ善なりと雖も、無貪等の善根と相應せず。是の故に、如來は觸の受を生ずることを顯はさんと欲するが故に、先に和合を簡別せんと欲す。根を依として、塵を緣じ、識を生ずることは、三の能く和合すること有るに由るが故に、觸は受を生ず。若し三

【一九】一切行とは遍行の心所なり。

【二〇】此の識とは本識を指す。

【二一】此の異計に相當する所を唐譯には論本に入れて別に釋文を出し、釋文に錯雜を來たせるも、本譯及び隋譯は一致して之を釋文と爲し文意順調なり、唐譯參照。

【二二】果報無記とは異熟無記のこと。

【二三】次には前難を避けんとする轉計を敍して之を破す。

如く、心行若し滅すれば、心も亦隨つて滅す。若し汝、身行の滅する時にも、人の定中に住する身は壞滅せざるが如く、是の如く定中に於ては、心行滅すと雖も、而も心は滅せずと言はゞ、此の義も亦然らず。何を以ての故に。

論曰 [一六]非一切行の如く、一切行は是くの如からざるが故に。

釋曰 身行、滅する時、別に住因有りて、能く持して此の身をして壞滅せざらしむることは、佛世尊の說けるが如し。若し出入の兩息を離るゝも、飮食壽命識等は、能く此の身を持して壞滅せざらしむ。身行滅する時、別法有りて身を持して住せしむるが如く、心行滅する時、別法の心を持して滅せざらしむるもの有ること無し。是の故に、汝の所立と並びに此の義とは、齊しからず。是の汝に、此の位には、此の道理に由つて、定んで心有ること無し。若し心有ること無ければ、云何か佛世尊は識は身を離れずと說けるや。是の果報心を、佛世尊は說いて名けて識と爲すなり。若し出觀の時には、意識は此の一切種子識より生ず。後識に因有ると及び定に在る身には識食有るとに由るが故に、本識は定んで有ることを知る。若し彼は本より來、是れ能依、所依にして大功用を作し、能依を拔除して所依を離れしむといはば、此の如き義無し。何を以ての故に。譬成ずるに由るが故なり。世間の中に於ては、本より以來、乃し盡際に至るまで、互に相ひ離れずして、恒に共に生起すれば、道理として能依を拔除し、所依を離れしむること無し。猶ほ[一七]四大と及び四大所造の色とは、道理として所造をして能造を離れしむること無きが如く、心法も亦爾なり。依止を離れしむべからず。是の故に、無心定に於ては、但だ心のみ有りて、心法無しとは、是の義然からず。若し汝、所依によりて能依を拔除すと執すれば、此の義成ぜず。但だ受と及び想とのみを厭惡するに由るが故に、唯だ此の二法のみ滅して、此の定中に於ては、二法は行ずるを得ざるも、餘法は爾らずといはゞ、是の義然らず。何を以ての故に。若し[一八]非一切行ならば、

【一六】本譯は論本の上では隋唐兩の如く十一句を爲すも、釋文に於ては此の一句を前の句と連續せしめて第十の過失に攝す。

【一七】此の四大種の譬は唐譯には次の無記の釋の次に出せり。

【一八】非一切行とは別境の心所等の如く一切の心識に遍行せざる心所をいふ。

する觸の生ずる時、作意信等の善根の生ずること有るは過を起すが故なり。若し觸有らば、心と相應して生ず。佛世尊說く、作意受等は必ず觸と俱に生ずと。若し作意有らば、必ず能く善等の心を生ずるが故に、信等の善根は即ち作意に隨つて起る。是の義の然らざるは、前に說く所の過失を免れざるを以てなり。若し汝、前に說く所の過失と及び阿含と相違する過失とを離れんと欲して、心法を厭惡するに由り、是の故に但だ心法のみを拔除するが故に、此の定には唯だ心のみ有りて心法有ること無しといはゞ、是の義は然らず。何を以ての故に。所依より、能依を拔除することは、道理無きが故なり。[一四]

論曰　能依を拔除し、所依を離るゝことは、得べからざるが故に。

釋曰　此れ第九の過失なり。復次に、若し汝、此の[一五]定の方便の中に、觸受想等を厭惡するに由るが故に、心法を拔除し、但だ心のみ有りて、觸等無しと言はゞ、是の義は然らず。何を以ての故に。所依より能依を拔除することは、得べからざるが故なり。所依は是れ心にして、能依は是れ心法なり。心と心法とは、是れ所依、能依の事なり。無始の生死より來、更互に相ひ離れず、此に由つて相ひ引く。是の故に、心は應に無貪等の善根と相應することを成就すべし。若し汝、定と及び定の方便と起るは、必ず無貪等の善根と相違するが故に、無貪等の善根生ぜずして、但だ善心のみ生ずと言はゞ、餘處に於て未だ曾て此の義有ることを見ず。諸法、若し因に相應する有らば、其の相似の果にも亦相應すること有るが故に、此の執は然らず。

論曰　譬喩有るが故に。

釋曰　此れ第十の過失なり。復次に、佛世尊、說く、此の定の中に於ては、一切の身行と語言行と心行とは、皆滅して起らずと。身行とは謂く、出入の兩息なり。語言行とは、謂く覺觀思惟なり。心行とは謂く作意想受等なり。覺觀思惟、滅盡すれば、語言は則ち生ぜざるが如く、是の

[一四] 所依は心、能依は心法なり。

[一五] 定の方便とは滅心定の加行をいふ。

論曰　想及び受の生ずることは過を起すが故に。

釋曰　此れ第五の過失なり。復次に、此の心を說いて善と爲すべからず。想受等の生ずる過失有るが故に。善根を離れては、善性は成ぜず。是の故に、善心は必ず善根と相應す。必ず善根と相應するが如く、亦應に必ず受想と相應すべし、異因無きが故に、此の義は成ぜず。[二]所對治、是れ有らば、能對治も亦是れ有り。譬へば欲等正しく生ずれば、不淨觀等は則ち有ることを得ざるが如し。若し汝は此の義を許さず、故に知る善心を成ぜざることを。

論曰　三の和合に於ては、必ず觸有るが故に。餘定に於ても功能有るが故に。

釋曰　此れ第六の過失なり。復次に、若し本識を信受せば、此の定中に觸の生ずる過患有ること無きが故に。譬へば餘定に於けるが如し。若し滅心定の中に、本識と異る別の善心の生ずること有らば、此の心は必ず觸を離れず。定は[三]安を生ずるを相と爲すに因り、能く樂受等を生じ、樂觸と不苦不樂觸と應に生ずべく、此の安觸に因りて樂受と不苦不樂とは必ず應に生ずべし。何を以ての故に。餘定に於て、樂捨の二受を生ずるが爲に、已に功能有ることを見る。此の定も亦爾なり。遮障無きを以ての故に。是の故に、此の定も亦應に觸に依つて受を生ずべし。是の義は然らず。何を以ての故に。

論曰　但だ想のみを滅するは、是れ過患なるが故に。

釋曰　此れ第七の過失なり。復次に、若し觸に由るが故に、此の定に受有りと信すれば、則ち此の定に唯だ想のみ有ること無し。是の義は然らず。何を以ての故に。佛世尊は想受倶に無しと說くが故なり。

論曰　作意信等の善根の生ずるは、過を起すが故に。

釋曰　此れ第八の過失なり。復次に、此の觸は應に有るべからず。餘識の處に於て、倶有し相應

【二】所對治は受想の心所、能對治は滅心定なり。

【三】安は輕安にして善の心所法の一、定中の快感なり。

釋曰　此れ第二の過失なり。若し心及び心法は是れ有りと執すれば、此れ有ならば必ず[七]解相と及び[八]境界と有らん。解相に二種有り、一には無分別、二には有分別なり。無分別とは、即ち是れ五識なり。意識は或は有分別、或は無分別なり。若し無分別の六識ならば、是れ[九]證知に同じく、若し有分別ならば、則ち是れ[一〇]比知なり。境界は、即ち是れ六塵と及び六塵の眞如なるが故に、心及び心法の解相と及び境界とは皆了別すべし。(而も)解相と及び境界とは、此の定中に於ては既に得べからざるが故に、此の定中には決して餘の識無きことを知る。若し此の定中に本識有りと說かば、則ち此の妨げ無し。[一一]此の識は能生依止の所顯なるが故なり。

論曰　善根と相應するの過なるが故に。

釋曰　此れ第三の過失なり。復次に、若し此の定に餘識の生ずること有りと執せば、此の識は三性を出でず。謂く善と惡と無記となり。此の心は、立てゝ善性と爲すべからず。善根と相應するの過の故に。此と彼と相違するに由るが故に。若し識は善根と相應せず。自性、是れ善なりといはゞ、則ち此の義無きが故に、此の心の善は、決定して善根と相應す。若し定心是れ善なるに由るが故に、定は是れ善なりと說くと說かば、是の義然からず。汝は無貪等の善根と相應すと許す所に非ず。此の義は應に以て滅心定の義を失ふに至るべきが故に。何を以ての故に。善心は通じて別有ること無く、一切の心法は、皆相ひ離れざるが故なり。若し相ひ離れざれば、則ち受想も亦滅せず。是の故に此の心を立てゝ、善と爲すべからず。

論曰　惡、及び無記とも相應せざるが故に。

釋曰　此れ第四の過失なり。復次に、亦、此の心を立てゝ、惡及び無記の性と爲すべからず。此の二性は成就せざるが故に。欲界を離欲する時、一切の惡法は、皆滅せり。故に惡性に非ず。此の定は是れ善なるに由るが故に、此の心を立てゝ、無記性と爲すべからず。

【七】解相とは新譯には行相といふ。
【八】境界とは所緣なり。
【九】證知とは現量知なり。
【一〇】比知とは比量知なり。
【一一】此の句は隋譯に「此の識は身を攝持するを以て名を得るが故に」といひ、唐譯も同義なれば今も其の意に解すべし。

離れずと說くは、唯だ是れ本識のみなりと。

論曰 若し人、滅心定に心有りと說かば、此の人の說く所は、則ち心を成ぜず。

釋曰 [四]第六心有るを名けて、心有りと爲すと言ふは、第六心に約して識は身を離れずと說くも、彼の所說の如きは則ち心を成ぜず。

論曰 何を以ての故に。

釋曰 更に通理を引いて、第六識を破し、本識を立てゝ、身を離れざること明かさんと欲す。若し[五]前に立つる所の相の如き、本識を離れて、生起識の中に、隨つて一識を執して、滅心定の中に有りと言はゞ、此の義、然らず。何を以ての故に。

論曰 定の義、成ぜざるが故に。

釋曰 此の下、十義を以て、滅心定の中に心、有りと立つる義の過失を顯はす。此れ卽ち第一の過失なり。心と心法とは、未だ曾て其の相ひ離るゝことを見ず。餘の心法と餘の心法との如きは、想無き時は受を離れ、受も亦無き時は想を離るゝが如く、心と心法とも亦爾なり。無き時は、相ひ離るゝことを得。若し相ひ離れざれば、滅受想定と及び滅心定とは、悉く成ずることを得ず。[六]三法を滅するに由るが故に、此の定成ずることを得るなり。

三法既に滅せざるが故に、此の定成ぜず。若し人、本識有りと執して、識は身を離れずと言はゞ、則ち此の過無し。何の故に、餘識皆滅するも、此の識のみ獨り滅せざるや。滅心定を修する者は、寂靜住を得んことを求め、能く寂靜住を障ふる心及び心法を對治せんが爲の故に、滅心定生ず。不明了の本識を對治せんが爲に、滅心定を修せざるが故に、餘識滅するも此の識は滅せざるなり。復次に、此の定の中に、若し本識を離れては、餘識は成ぜず。

論曰 觧相と及び境とは、得べからざるが故に。

【四】 第六心とは意識を指す、唐譯に「意識を以ての故に滅定に心有りと執するも此の心は成せず」と爲す。

【五】 前所立の三相の本識を指す。

【六】 三法とは心と想と受となり。

釋曰　若し人、寂靜に住せんことを得んと欲するも、此の識の過失を觀ぜず、此の識を對治せんが爲の故に滅心定を修せず。故に正に滅心定に入る時も、此の識を滅せざれば、卽ち此の識は身を離れずと說くなり。

論曰　云何が然るを知るや。

釋曰　此の如きの義は、云何が知るべきや。何が故に滅心定に入る時、實に復、心無しと言はざるや。心は永滅に非ずして、後時に更に生ずるが故に、識は身を離れずと說く。佛世尊、說く、若し人、第四定に入らば、身行則ち斷じ、若し人、第二定等に入らば、言行則ち斷じ、若し人、滅心定に入らば、心行則ち斷ずと、此の如く、身行斷ずるも、身は滅せず。心も亦應に爾るべし。但だ心行滅するのみ心は滅せず。故に識は身を離れずと說く。何が故に、此の如きの說を作さゞるや。若し人、執すらく、滅心定に入るも、後に出定の時には心は則ち還つて生ず。此の義に由るが故に識は身を離れずと說くと。是の義然らず。何を以ての故に。

論曰　若し此の定より出づれば、識は應に更に生ずべからず。

釋曰　若し此の定に在りて、識の相續斷ずれば、復、所餘無きが故に、復此の定より出づると、及び識の更に生ずとの義無し。

論曰　何を以ての故に。

釋曰　更に道理を引いて以て此の義を成ぜんと欲す。

論曰　此の果報識の相續已に斷ずれば、若し託生の識を離るゝ時は復生ずることを得ず。

釋曰　人の一期の報の已に盡くるが如きは、果報識の相續、永く斷じて還つて生ずるの義無し。識若し更に生ずとせば、必ず餘生の身に託せん。若し餘生の身に託することを離るれば、果報識は還つて本の身の中に於て生ぜん、是の處り有ること無し。故に知る、滅心定に入る時、識は身を

巻の第四

釋引證品の二

順道理章　第六

論曰　若し人、滅心定に入るも、識は身を離れずと說くに由り、是の故に果報識も定中に於て、應に身を離れざることを成ずべし。

釋曰　此の章には、復不違の道理を引いて、以て實に本識有りと顯はす。若し人、謂へらく、第三・第四果の緣覺菩薩等は、寂靜性を得、及び退失の過を離れんが爲めの故に、聖人は滅心定を修するも、心の體を滅するを滅心と稱するには非ず、心の法を滅するが故に滅心と名く。[一]能依を所依に從ふるを以ての故に、心の名を立つるなりと。佛[二]世尊說く是の人の定に入る時に於ても、識は身を離れずと。此の識は、但だ是れ果報識なるのみなり。若し此の識を離れては、六識の中隨つて一の餘識も身を離れずと說くことは、此の義成ぜず。何を以ての故に。此の滅心定を修するは、生起識を對治せんが爲にして、生起識には不寂靜の過失有ることを觀ずるが故なり。過失と言ふは、六識は外塵を緣じて、不正の思惟を起すの義有り、不正の思惟るに由つて定を退失す、此は是れ第一の過失なり。生起識は散動位の中に在る障に由つて、最細の寂靜處を得ず、此は是れ第二の過失なり。[三]已得は退失し、未得は得ず。此の二の過失を對治せんが爲の故に、滅心定を修す。若し識は身を離れずと立つれば、應に知るべし、卽ち是れ本識なり。

論曰　何を以ての故に。

釋曰　復、何の義を以て、識は身を離れざるは、但だ是れ本識のみなることを證知するや。

論曰　滅心定は、此の識の對治に非ざるが故なり。

【一】能依は心法、所依は心體なり。

【二】以上は異計を叙し、次に正義を立てゝ之を破す。

【三】已得は第一の失、未得は第二の失をいふ。

言ふ。此れ無餘涅槃を顯はす。此の義に由るが故に、本識と道とは後倶生すと雖も、而も増減の異り有り。

論曰　若し本識と非本識との共起共滅すること、猶ほ水乳の和合するが如しとせば、云何が本識は滅し非本識は滅せざるや。

釋曰　前に擧げし水乳和合の譬は、本識と非本識との和合なるが故に、還つて此を擧げて難を爲す。水乳は和合して既に生滅するに必ず倶にして、水と乳とは[四八]偏へに滅盡するの義有ること無し。本識と非本識との和合も亦應に爾るべし。云何が一は滅し、一は在るや。

論曰　譬へば、水に於て鵝の飲む所の乳の如し。

釋曰　卽ち譬を以て難を釋す。水乳和合すと雖も、鵝の之を飲む時は唯だ乳のみを飲みて水を飲まず。故に乳は盡くと雖も、而も水は竭きず。本識と非本識とも、亦爾なり。復、和合すと雖も、而も一は滅し一は在るなり。

論曰　猶ほ世間の離欲の時に、不靜地の熏習は滅し、靜地の熏習は増して、世間の轉依の義は成ずることを得るが如く、出世の轉依も亦爾なり。

釋曰　前には世間の了る所の事を引いて譬を爲し、後には世間の智人の了る所の事を引いて譬を爲す。世間の離欲の人の本識の中に於て不靜地の煩惱と及び業の種子とを滅し、靜地の功德善根の熏習を圓滿して、下界の依を轉じて上界の依を成ずるが如く、出世の轉依も亦爾なり。本識の功能、漸く減ずるに由つて、聞熏習等は次第に漸く增し、凡夫の依を捨てゝ、聖人の依と作す。聖人の依とは、聞熏習と解性と和合し、此を以て依と爲すなり。一切の聖道は皆此に依つて生ず。

【四八】偏へに滅盡すとは孰れかの一方のみが滅するの道理なしの意。

論曰　若し聲聞と緣覺との所得ならば、[四五]解脱身の攝に屬す。

釋曰　若し已に二乘究竟の果を得し人の有する所の聞熏習ならば、尙ほ解脱身の攝に屬す。何に況んや聲聞、緣覺、菩薩をや。何を以ての故に。此の三人は但だ解脱身を得るのみにして、如來の法身を得ること能はざればなり。此の三人は、解脱身に由るが故に、如來と等しきを得るも、法身に由らず。如來は法身を得るに由るが故に、一切衆生の中に於て無等なり。本識と聞熏習とは、相應して共起共滅すと雖も、而も本識は漸減し、非本識の相續は漸增す。此の義を我れ今當に說くべし。

論曰　此の聞熏習は、阿梨耶識に非ずして、法身及び解脱身の攝に屬す。是の如く是の如く。下・中・上より次第に漸增し、是の如く是の如く、果報識は次第に漸減し。

釋曰　聞熏習の體は、是れ出世の法にして、聞熏習の因果は法身と及び解脱身との攝に屬す。本識の體は是れ世間の法にして、因は是れ集諦、果は是れ苦諦なり。故に此の兩法の自性は相違す。此の義に由るが故に、聞熏習は漸增し、本識は漸減す。聞熏習の下品生ずれば、本識の上品滅じ、聞熏習增して中品に至れば、本識の中品滅じ、聞熏習增して上品に至れば、本識の下品滅ず。

論曰　依止、卽ち轉ずるなり。

釋曰　道諦の增すに由つて、集諦滅ず。道諦は卽ち是れ福德の智慧にして、集諦は卽ち是れ本識の中の種子なり。福慧の漸增に由つて、種子漸減するが故に轉依することを得。

論曰　若し依止、一向に轉ずれば、是れ有種子の果報識は卽ち種子無く、一切皆盡く。

釋曰　依止は卽ち如來の法身にして、次第に漸增して道を生じ、次第に集諦を漸減す。是を[四六]一向捨と名く。初地より二地に至り、乃し佛を得るに至る、故に名けて[四七]轉と爲す。煩惱業滅するが故に卽ち「種子無し」と言ふ。此れ有餘涅槃を顯はす。果報悉く滅するが故に、「一切皆盡く」と

【四五】解脱身と法身の相異は無性釋の此の一段の釋に出づ、參照。

【四六】轉依の中の轉捨の義なり。

【四七】これ轉得の義なり。

れ朽壞の義なり。

論曰　能く相續を引いて是の處に生じ、諸佛菩薩に隨順し逢事せしむ。

釋曰　此れ第四に依攝對治を顯はさんが爲なり。能く五陰の相續を引いて、佛菩薩の有る處に生ぜしむ。隨順し逢事せしめんが爲なり。意ふに非ずして、相ひ遇ふを「逢」と名け、始終承奉して相ひ離れざるを「事」と名く。是の人は善知識に依る。善知識は、善根を生ぜんが爲の故に、布施及び愛語の〔四四〕攝を修し、善根を成熟せしめんが爲の故に、利行の攝を修し、解脫の善根を得しめんが故に、同利の攝を修す。攝に依るは多聞の四義を顯はさんが爲なり。一に多聞の依止は、謂く善知識なり。二に多聞の因は、謂く菩提心なり。三に多聞の清淨は、謂く教の如く修行するなり。四に多聞の果は、謂く自利々他なり。初めの一は是れ逢の義にして、後の三は是れ事の義なり。又、前の三の對治は、第四の對治に依る。第四の對治は、前の三の對治を攝す。何を以ての故に。若し善知識無ければ、前の三は成ずることを得ざるが故に、前の三は第四に依る。前の三は卽ち善知識の功能なるが故に、第四の所攝と爲す。

論曰　此の聞熏習は、是れ世間の法なりと雖も、初修觀の菩薩の所得なり。應に知るべし、此の法は法身の攝に屬することを。

釋曰　耳識は聲を聞いて意識を引いて起らしめ、文句に依つて其の義を了別し、數々之を習して功能を生じ、執して忘れざるを「聞熏習」と名く。此の義に由るが故に、是れを世間の法なりと說く。菩薩に二種有り、一には凡位に在るもの、二には聖位に在るものなり。初發心の訖より、十信以還は、並びに是れ凡位にして、十解より以上は、悉く聖位に屬す。初修觀の者は、卽ち是れ凡夫の菩薩なり。若し初修觀の菩薩の所得の聞熏習ならば、說いて世間の法と名く。是れ世間の法なりと雖も、法身至得の因と爲るが故に、法身の攝に屬す。

【四四】　攝とは攝化の善巧にして菩薩の四攝法なるが故に攝といふ。

以ての故に、亦出世の心を成す。
論曰　何を以ての故に。
釋曰　何を以ての故に、此の法は、但だ是れ出世にして、世間法に非ずや。四種の對治有るが故なり。
論曰　此の種子は出世の淨心の、未だ起らざる時にも、一切の上心の惑を對治す。
釋曰　此れ第一に厭惡の對治を顯はさんが爲なり。此の聞熏習は明了の正理なるに由りて、能く諸塵の過患を知り、非理と及び諸塵とに於て厭惡を生ず。此の厭惡の心は、能く[四二]上心の惑を對治す。即ち是れ聞熏習の功能なるが故に、厭惡對治の種子と名く。即ち是れ聞熏習なり。菩薩の未知欲知根を出世の淨心と名く。此の心、未だ起らざる前は、是の聞熏習は聞思慧の位に屬し、聞思の位の中に在つて、昔未だ聞思の慧を得ざる時、見倒と及び想倒とに由つて、見修所破の煩惱は、恒に上心を起し、四惡業を生じ、四惡道の報を感ず。此の法を得るに由つて、未だ生ぜざる煩惱と及び業の果報とは悉く起ることを得ざるなり。
論曰　一切の惡道の生を對治す。
釋曰　此れ第二に除滅對治を顯はさんが爲なり。聞熏習の起るに由りて[四三]相續に附し、相續をして正定聚に入らしむ。聞熏習は、隨つて生ずれば隨つて惡法を滅して、能く四惡道の生を斷塞し、善道の生を引く。昔、曾て惡業を起し應に四惡道の生を引くべきも、此の法に由るが故に滅して復、受けず。
論曰　一切の惡行を朽壞對治す。
釋曰　此れ第三に遠離對治を顯はさんが爲なり。無始の生死の中に造る所の後報の惡業は、能く後報の時の中に於て、四惡趣に墮せしむ。此の法は能く轉じて後報をして報無からしむ。即ち是

【四二】上心の惑とは現行の惑をいふ。
【四三】相續とは受生相續の意にして現生の心身をいふ。

乘を信樂するは、是れ大淨の種子なり。二に般若波羅蜜は、是れ大我の種子なり。三に虚空器三昧は、是れ大樂の種子なり。四に大悲は是れ大常の種子なり。常樂我淨は、是れ法身の四德なり。此の聞熏習と及び四法とを四德の種子と爲す。四德圓かなる時、本識は都て盡く。聞熏習と及び四法とは、既に四德の種子と爲るが故に、能く本識を對治す。聞熏習は正に是れ五分法身の種子なり。聞熏習は是れ行法未だ有らざるに、而も五分法身有り。未だ有らざるに、而も有るが故に、正に是れ五分法身の種子なり。聞熏習は但だ是れ四德道の種子にして、四德道、能く成じて四德を顯はす。四德は本來是れ有りて、種子より生ぜざるも、因に從つて名を作すが故に種子と稱す。

論曰　阿梨耶識を對治するに由りて生ず。是の故に、阿梨耶識性の攝に入らず。

釋曰　此の聞熏習は、本識を增益せんが爲の故に生ずるには非ず。本識の力勢を減損せんと欲するが爲の故に生ず。故に能く本識を對治す。本識の性と相違するが故に、本識の性の所攝と爲らず。此れ法身は聞熏習の果と爲ることを顯はす。

論曰　出世の最も清淨なる法界より流出するが故に。

釋曰　七種の苦諦[四〇]を出で、三種の集諦[四一]を滅するが故に「出世」と名く。謂く三無性の眞如は本より染汚無く、後に三障の垢を離るゝが故に「最も清淨なり」と名く。三乘の道は此の法より生ず。故に名けて「界」と爲す。是の聞熏習は、最も清淨なる法界より流出するが故に、本識の性の攝に入らず。此れ法身は聞熏習の因と爲ることを顯はす。聞熏習の因は本識と異り、聞熏習の果も亦本識と異る。聞熏習の體は本識と同じと爲すや、異ると爲すや。

論曰　復、世間法なりと雖も、出世心を成ず。

釋曰　意識の如きは是れ世間の法なりと雖も、能く四諦の眞如に通達し、四諦の障を對治するが故に出世の心を成ず。聞熏習も亦爾なり、是れ世間の法なりと雖も、因果皆是れ出世の法なるを

【四〇】七種苦諦とは略疏に分段の三界と變易四種の生死なりといふ。

【四一】三種の集諦とは見惑思惑及び所知障なり。

ひ離れざるを以ての故に、恒に倶起す。云何が本識の對治なるや。

論曰　此の中、下品の熏習に依りて、中品の熏習生じ、中品の熏習に依りて、上品の熏習生ず。

釋曰　「此の中」とは、即ち此の依止處の中及び本識の中なり。聞熏習の功能に三品有り。謂く下と中と上となり。下は即ち聞慧、中は即ち思慧、上は即ち修慧なり。復、三品有り。三慧の中に就て、各々開いて三品と爲す。復、三品有り、謂く解脱分品と通達分品と通達品となり。聞に三義有り。一には聞の資糧。謂く音聲の詮はす所の名句味なり。二には聞の體。謂く耳識なり。三には聞の果。謂く聞慧と及び聞慧の了る所の法門となり。此の三品の聞熏習は隨つて一品生ずれば、隨つて能く本識の一品を對治す。若し下品生ずれば、能く上品の本識を對治し、乃至若し上品生ずれば下品の本識を對治す。

論曰　何を以ての故に。

釋曰　此に三義有り。一には、何を以ての故に、三品有りや。二には、何を以ての故に、[三九]相生するや。三には、何を以ての故に、能く對治するや。

論曰　數々加行して聞思修するが故なり。

釋曰　「數々」とは恒に行じて無間なることを顯はし、「加行す」とは功用を作し、悠々として修學するに非ざることを顯はす。數々加行するに由るが故に。三品有るが故に。相生することを得るが故に、對治するを得るなり。若しは數々加行するに由るが故に、三品と及び相生とを成ずることは、此の義、疑ふに非ず。云何が數々加行するに由りて、本識の對治を成ずるや。

論曰　是の聞熏習の下・中・上品の若(ごと)きは、應に知るべし、是れ法身の種子なり。

釋曰　何の法をか法身と名くるや。轉依を法身と名く。轉依の相、云何ん。十地及び波羅蜜を成熟し修習して出離し轉依する功德を相と爲す。聞熏習に由りて、四法を成ずることを得。一に大

【三九】相生とは轉展相生するの義。

謂く十二部經なり。「正聞」とは、一心に恭敬して無倒に聽聞するなり。此の正聞によりて、[三八]六種の熏習の義は本識の中に於て起る。出世の心、若し生ずれば、必ず此に因て生ずることを得るなり。

論曰　此の聞慧の熏習は、阿梨耶識と同性なりと爲すや同性にあらずと爲すや。

釋曰　若し爾らば、何の失ありや。

論曰　若し是れ阿梨耶識の性ならば、云何が能く此の識の對治の種子を成ずるや。若し同性にあらざれば此の聞慧の種子は、何の法を以て依止と爲すや。

釋曰　若し是れ本識の性ならば、云何が自性能く對治と作りて、自性を滅するや。若し不同性ならば、此の聞慧の熏習には應に別に依止有るべし。

論曰　諸佛の無上菩提の位に至るまで是の聞慧の熏習生ずれば、隨つて一の依止處に在りて、此の中に果報識と共に倶生す。

釋曰　此の聞の功能は何より生じ、相續して何の位に至るや。諸の菩薩の十信より以上、乃し無上菩提の位に至るまで、此の聞の功能は相續し住して失はず。未だ有らずして初め有るを生と爲し、已に有りて未だ滅せざるを住と爲す。此の生と及び住とは、六道の中に於て、隨つて一道の五陰身の處に依止す。六道の身の中に於ては、本識と倶生し相續して盡きず。本識と同性ならずと雖も、而も本識と倶生す。

論曰　譬へば水乳の如し。

釋曰　水と乳とは復、和合すと雖も、其の性同じからずして而も倶生することを得るなり。

論曰　此の聞熏習は卽ち本識には非ず、已に此の識の對治の種子を成ずるが故に。

釋曰　此の聞の功能は、是れ本識の對治なるが故に、本識と同性ならず。同性ならずと雖も、相

【三八】六種の熏習の義は已に本釋論に出づ。

論曰　云何が一切種子の果報識は、不淨品の因を成じ、若しくは能く染濁を對治する出世淨心の因を作すや。

釋曰　本識は應に不淨品の因と作すことを得べからず。若し本識は是れ染濁を對治する出世の因なりと立つれば、則ち本識を以て不淨品の因と爲すを得ず。不淨品は、卽ち集諦と及び苦諦とにして、是れ業煩惱の種子なるが故に。是れ集諦は能く生死を生ず、卽ち是れ苦諦なり、染濁を對治するは卽ち[三七]除惑にして、出世心の因と爲る。卽ち道を生じ惑を滅す。道を生ずれば、不淨品と相違す。既に立てゝ染濁の對治及び出世心の因と爲すが故に、應に復、說いて不淨品の因と爲すべからず。

論曰　此の出世心は、昔より來、未だ曾て習を生ぜず。是の故に定んで熏習無し。

釋曰　無始より來、未だ曾て出世の心を生ぜず。既に生ぜず、何に況んや修習せん。是の故に出世心は決定して疑ひ無く、本識に熏ずることを得ず。

論曰　若し熏習無ければ、此の出世心は何の因より生ずるや。

釋曰　若し熏習有りて種子と爲らば、出世の心は因有ることを得べきも、既に熏習無ければ出世の心は則ち因無くして生ずるや。

論曰　汝、今應に答ふべし。

釋曰　未だ因有るの道理を見ざるが故に責めて答へしむ。

論曰　最も清淨なる法界より流るゝ所の正聞熏習を種子と爲すが故に、出世心は生ずることを得。

釋曰　二乘所得の法界に簡異せんと欲するが故に、「最も清淨なる法界」と名く。云何が二乘の所得と異なるや。此の法界には惑障及び智障は滅盡して餘すこと無きが故に最も清淨なりと言ふ。法界とは如理如量は三無性に通ずるを以て、其の體と爲す。「流るゝ所」とは、正しく正法を說く。

【三七】除惑の惑の字は或とあるも義に依つて惑と訂正せり。

中に於ては、後の思慧は薄弱なり。復、正見を引いて起さしむること能はず、亦此を種子と爲して、正見の識を生ずと説くことを得ず。此の中には前後相熏の義無きことを明かすも、未だ同時相熏無きことは論ぜず。

論曰　復次に、世間心と正思惟と相應し、出世の淨品と正見と相應して、時として共生共滅するを得ること無し。

釋曰　正思と正修との慧は、四念處より世第一法に至るは是れ其の位なり。此の心は未だ四諦を證見せざるが故に「世間心」と名く。已に四諦を證見するが故に、出世の自性を離れたる法と名く。是れ修得の法なるが故に「淨心」と名く。「正見」とは即ち八正道の中の第一分なり。此の正見と三十七品とは相ひ離れず。修得の淨心に由るが故に三十七品生ず。三十七品生ずるに由るが故に出世を得。無始より以來、世出世の心は倶生倶滅の義有ること無し。性、相違するを以ての故なり。

論曰　是の故に、此の世間心は、淨心の所熏に關はるに非ず。

釋曰　既に倶に生滅せざるが故に相熏の義無し。

論曰　是の故に、若し一切種子の果報識を離れては、出世の淨心も亦成ずることを得ず。

釋曰　若し本識を離るれば、出世の心は既に因緣無きが故に成ずることを得ず。

論曰　何を以ての故に。此の中の聞思の熏習は、義として能く出世の熏習の種子を攝すること有ること無ければなり。

釋曰　「此の中」とは、即ち思慧の中なり。思慧の中には多くの聞熏習有り、若し本より來、已に出世の心の熏習を起さば、此の思慧は義として思慧を將つて出世の熏習を攝持して種子と爲すこと有るを得べきも、既に本より來、未だ曾て出世の心を起して、思慧に熏習せざるが故に、道理として思慧は出世の熏習を攝持して種子と爲すと説くことを得る無し。

り。此の二慧は、[35]單に耳意の二識に熏ずるの義有ること無く、亦雙び熏ずるの義も無し。

論曰　何を以ての故に。

釋曰　此の二慧は、何の故に耳等の二識に熏ずること能はざるや。

論曰　若し人、聞の如く解し、及び法を正思惟するも、爾の時に耳識は生ずることを得ず。

釋曰　若し人、已に他の音を聞きて、後に聞思の慧を生ずる中、聞思の慧は是れ意識なり。爾の時に耳意は生ずることを得ざるが故に、聞思の慧は耳識に熏ずることを得ず。

論曰　意識も亦生ずることを得ず。

釋曰　將に正見を生ぜんとするとき、思慧と相應するの意識も亦生ずることを得ず。

論曰　餘の散動の分別識に間てらるゝを以ての故なり。

釋曰　何の故に生ずることを得ざるや。中間に散動の分別識有りて、間起するを以ての故に、此の思慧は卽ち生ずることを得ず。

論曰　若し正思惟と相應して生ずれば。

釋曰　此は將に[36]未知欲知根を生ぜんとする時の思慧を明かす。

論曰　此の意識は、久しく已に謝滅し。

釋曰　初の已生の思慧は、久しく已に謝滅せり。

論曰　聞の所熏と共なる熏習は已に無し。

釋曰　前に初めて得たる多聞の所熏なる思慧は、熏習と倶に謝して過去せり。

論曰　云何が後時に前識を以て種子と爲して、後識は生ずることを得ん。

釋曰　初に得たる思慧を以て種子と爲して、後の思慧を生ずることを得べからず。前の思慧は已に久しく滅し、中間に、餘心の爲に間てられて、前の思慧の功能を度ることを得ず、後の思慧の

【三五】單にとは耳若くは意の孰れか一にとの意。

【三六】未知欲知根とは新譯には未知當知根といふ、三無漏根の初にして。出世無漏心の最初に生起するをいふ。

切種子の果報識を離れては、則ち立すべからず。

釋曰　若し四定に約すれば、欲界を離欲し、若し[三三]四空に約すれば、色界を離欲す。色界の心の因縁と增上縁と、無色界の心の因縁と增上縁とは、悉く應に此の如く了別すべし。

出世間淨章　第五

論曰　云何が出世淨品は、阿梨耶を離れては立つるを得べからざるや。

釋曰　今、當に此の義を說くべし。

論曰　佛世尊、說く、他より音を聞くと及び自ら正思惟すると、此の二因に由りて、正見は生ずることを得と。

釋曰　清淨品は正見を以て上首と爲す。此の正見は何の法を以て、增上縁と爲すや。謂く、他より音を聞き、及び正思惟する、此の二因は、即ち是れ正見の增上縁なり。此の兩因に各〻四義有り。一には、有る正見は是れ聞慧の攝なり。他より音を聞くことを以て因と爲す。有る正見は是れ思慧の攝なり。正思惟を以て因と爲す。二には若し聲聞の正見ならば、他より音を聞くことを以て因と爲し、若し獨覺菩薩の正見ならば正思惟を以て因と爲す。三には鈍根に約すれば[三四]第一句を爲し、利根に約すれば第二句を爲す。四には思慧に約して第一句を爲し、修慧に約して第二句を爲す。此の二因に由りて、正見は生ずることを得。此の二因は正見に於て是れ增上縁なり。今、言ふ所の因とは是れ通名にして、即ち縁を說いて因と爲すなり。

論曰　此の他の音を聞くと及び正思惟すとは、耳識及び意識にも、或は耳意の二識にも熏ずること能はず。

釋曰　「他の音」とは、謂く佛菩薩の立つる所の法門なり。「他の音を聞く」とは、謂く聞く所の如く解す。即ち是れ聞慧なり。「正思惟す」とは、謂く聞く所の如く是非を簡擇す。即ち是れ思慧な

【三三】四空とは無色界の四空定なり。

【三四】第一句とは聞慧、第二句とは正思惟を指す。

べからず。已に有ること無きが故に。

釋曰　無始の生死の中に、先に生ぜし所の色界の心、此を用て種子と爲すといはゞ、此の種子は既に法の攝持する無く、生ずれば卽ち謝滅す。六道の中に於て無量の生有り、一々の生の中に於て無量の心有りて、先に起せる所の心を隔てゝ、此の種子は久しく已に滅盡せり。云何んが此を立てゝ色界の心の因と爲すことを得ん。

論曰　是の故に此の義は成ずることを得。

釋曰　汝が立つる所の義は成ぜざるに由るが故に、我が立つる所の義は成ずることを得、云何んが成ずることを得るや。

論曰　謂く色界の靜心は、一切の種子なる果報識の次第に傳來するを立てゝ因緣と爲す。

釋曰　無始の生死の中に得る所の非至定と及び[三]四定の熏習せる本識は以て種子と爲り。本識の爲に攝持せられ、次第に相續して傳來し、今に滅せざるが故に、此を立てゝ色界靜心の因緣と爲すことを得。色界の靜心、若し生ずれば、卽ち此の自の種子より生ず。是の故に、汝が執する所の因緣有ること無しとは同じからず。若し宿世の種子を以て、因緣と爲せば、現在に修する所の聞思は、此れ復何の用ぞ。

論曰　此の加行の善心を立てゝ增上緣と爲す。

釋曰　此の加行の心は、無功用ならず、此の增上力に由るが故に、色界の心生ず。若し此の加行心無ければ、則ち欲界の欲を破することを得ず。若し欲界の欲滅せざれば、前の色界の種子は、現在の色界の心を生ずることを得ざるが故に、加行は但だ色界の心が爲に增上緣と作ることを得るのみにして、因緣と爲ることを得ず。

論曰　此の如く、一切の離欲地の中に於て、是の義應に知るべし。此の如く世間淸淨品の義は、一

【三】四定とは色界四禪の定。

釋曰　若し人、欲界を離欲して、色界の心を得んが爲の故に、加行を修すれば、是の修行の人に、二種有り。一は觀行に在る人、二は初めて修行を發す人なり。觀行に在る人は、聞思慧の中に在り。聞思慧に各〻三品有り。修習して增長せしむるが故に、加行と名く。初めて修行を發すとは、卽ち初めて聞慧を修するなり。此の二人は、並に未だ欲界を離欲せざれば、悉く未だ[28]非至定を得ず。非至定とは卽ち色界の心なり。

論曰　先づ欲界の善心を起して、欲界を離欲せんことを求めて觀心を修行す。

釋曰　若し人、未だ色界の心を得ずして、聞慧の中に在るを、「先づ欲界の善心を起す」と名く。聞慧の中に於て、欲界を離欲せんことを求めて觀心するは是れ思修の慧なり。欲界は離欲せんが爲の故に、思修の慧を修行す。

論曰　此の欲界加行の心と、色界の心とは俱起俱滅せざるが故に、所熏には非ず。

釋曰[29]　聞思の慧に各〻三品有り。卽ち是れ加行なり。何の故に、此の心と色界の心とは、俱起俱滅せざるや。一には[30]麁と細と異り、二には動と靜と異り、三には[31]自性と修と異り、四には繫縛と出離と異るが故に、俱起俱滅することを得ず。若し俱有ならざれば、則ち色界の心は欲界の心に熏ずることを得ず。

論曰　是の故に欲界の善心は、是れ色界の善心の種子には非ず。

釋曰　欲界の心は、既に色界の心の所熏と爲らざるが故に。色界の心の種子に非ず、則ち色界の心の生ずるには、因緣有ること無し。若し因緣無ければ、云何が生ずることを得るや。若し汝、無始の生死の中にて、已に色界の心を生じ、果報未だ熟せざれば、此の種子は未だ滅せずして、能く今の色界の心の爲めに因と作ると言はゞ、是の義然らず。何を以ての故に。

論曰　過去の色界の心は無量の餘生と及び別心とに隔てらるれば、後時に立てゝ靜識の種子と爲す

【二八】非至定とは未至定のこと、欲界の惑を斷じて得る初禪の近分定を未至定といふ、未だ根本定に至らざるの義なり。

【二九】次の出世間淨章に明かせり、參照。

【三〇】欲界の心は麁にして散動色界の心は細にして寂靜卽ち定心なり。

【三一】自性とは欲界の心は生得にして色界の心は修得なり、繫縛と出離の相違も知るべし。

ぜず。若し本識を離れては、此の如き無流心は何の法に依止するや。

論曰　復次に、若し人、已に善業及び惡業を作さば、

釋曰　若し人、世間の中に於て、不殺生等の十善業を作さば、決定して應に人天の生報を得べく。若し殺生等の十惡業を作さば、決定して應に四趣の生報を得べし。

論曰　正しく壽命を捨て、阿梨耶識を離るゝときは、或は上より、或は下より次第に依止の冷觸することは、應に成ずることを得べからず。

釋曰　是の人、死時の中に於て、若し善業有らば、定んで應に上に向ふべく、若し惡業有らば、定んで應に下に向ふべし。若し汝、本識有ることを信ぜざれば　云何が此の依止の身は、或は下より冷觸し、或は上より冷觸する、次第を成ずることを得るや。若し本識有ること無ければ、云何が本識の能く五根を執持することを成ずるを得るや。本識若し捨すれば、依止の身は所捨の處に隨つて、冷觸次第に起り、所捨の處は、則ち死身を成ず。

論曰　是の故に生の染汚は、一切種子の果報識を離れては、立つることを得べからず。

釋曰　生の染汚は、即ち是れ生を受けて生くることを得る依止、執持等なり。是れ染汚の因果なるが故に、通じて染汚と名く。又、生死は涅槃に對するが故に、染汚と名く。本識は是れ集諦なるが故に種子と名け、是れ苦諦なるが故に果報と名く。他の因なるが故に種子と名け、他の果なるが故に果報と名く。若し此の識を離れては生の染汚は、此の義成ぜず。

世間淨章　第四

釋曰　此の如きの道理に由りて、[二七]世間の淨品は成ずることを得ず。今、當に之を說くべし。

論曰　云何が世間の淨品は成ぜざるや。若し衆生未だ欲界を離欲せず、未だ色界の心を得さるものは、

【二七】世間の淨品とは色、無色界の善品をいふ。

して住することを得るや。何を以ての故に。此の二心は、本識に攝せらるるに由る。是の故に、自の種子より生じ、本識に依止するが故に、相續して住することを得るなり。

論曰　無色界に於て、若し無流心を起せば、所餘の世間心は、已に滅盡せり、便ち應に[二三]此の道を棄つべし。

釋曰　若し人、已に無色界に於て受生して、出世心を起さば、世間心は必ず滅盡せり。若し本識を離れては、則ち應に無色界の報を捨つべし。功用に由らずして則ち無餘涅槃に入ることは、既に此の義無し。故に此の識を撥無すべからず。

論曰　若し衆生、非想非々想の中に生じて、[二四]不用處の心と及び無流心とを起さば、即ち二處を捨てん。

釋曰　若し聖人にして、非想非々想處に生ずれば、有る時は不用處の地に依て無流心を起す。不用處の心は明了なるも、非想非々想の心は闇昧なるが爲の故なり。此の人は明了の地に在りて、無流心を修す。若し無流心を得れば、即ち非想非々想と及び不用處との二地を捨つべし。

論曰　何を以ての故に。無流心は是れ出世心の故に、非想非々想の道は、其の依止に非ず。不用處の道も、亦依止に非ず。

釋曰　第一・第二の道は、是れ世間の法なるが故に、無流心の爲に依止と作ることを得ず。是の人は、餘地に於て生じ、別に餘地の心を取る。此の二道も亦此の心の依止に非ず。何を以ての故に。此の心は、明了なるが故に、[二五]第一道に依止せず、已に第二道を捨つ。[二六]第二道も亦此の心の爲に依止と作ることを得ず。

論曰　直に涅槃に趣くも、亦依止に非ず。

釋曰　無流心有るに由り、煩惱の有餘なるを以つての故なり。此の三義は、依止を明すに既に成

【二三】此の道とは無色界の道趣をいふ。

【二四】不用處とは唐譯に無所有處といふ。

【二五】第一道とは非想非非想處なり、此の道の心は闇昧なるが故に明了心の所依とならずとの意。

【二六】第二道とは不用處なり、已に之を捨てゝ上地に在るが故に亦其の所依とならず。

靜地に在り。若し人、散地より死し、下の散動地の心を用て、上に於て受生するは義を得べきこと無し。何を以ての故に。凡そ受生する者は、必ず散心に在るが故に。若し本識を離れては、此の散動の識は得べからず。「若し人」とは、是れ離欲の人にして、此の欲界より色・無色界に生ずるなり。「染汚」とは、即ち中陰の人にして、上地の惑を起すなり。「散動」とは、即ち正しく受生する識なり。「彼に於て受生す」とは、即ち[三]方便生と及び正生となり。

論曰　是の染汚散動の識は、靜地の中に於て果報識を離れて、有餘の種子は、此の義成ぜず。

釋曰　若し正生を受くるには、必ず四義を具す。染汚を以て根と爲し、散動を位と爲し、果報を體と爲し、有餘の種子を功能と爲す。若し本識を離れては、此の四義は得べからざるが故に、應に阿梨耶識有りと信ずべし。何を以ての故に。此の識の中に於て、靜地の心熏習して、無始より以來、有餘未だ盡きず。此の功能に由つて、靜地の中に種子有り。散動の果報識は、彼に於て受生す。

論曰　復次に、若し衆生、無色界に生ぜんに、

釋曰　已に色界を解脫せることを顯はす。

論曰　一切の種子の果報識を離れては、

釋曰　若くは本識無く、若くは實有なるを、汝撥して無と言ふ。故に名けて「離る」と爲す。

論曰　若し染汚心と及び善心とを生ずるに、

釋曰　若し定の中に於て、滄定味の染汚心を起し、或は上地の有流の善心を起せばとなり。

論曰　則ち種子幷びに依止無くしては、染汚と及び善との二識は、皆成ずることを得ず。

釋曰　種子無きを無因と謂ふ。因無きに由るが故に則ち依止無きなり。復次に、若し種子無ければ、是れ則ち因無し。若し因無ければ、何によりて生ずるや。若し依止無ければ、云何んが相續

【三】方便生とは中有、次の正生とは正しく託生する生有をいふ。

益の事を作すこと、人の飢渇して飲食の處に至り、飲食を得んことを望まば、身を死せざらしむるが如し、是を思食と名く。識食は執持を相と爲す。此れ識は身を執持するに由るが故に、住して壞せず。若し識の執持すること無ければ、則ち死人と同じく、身卽ち爛壞せん。是を識食と名く。是の故に、汝等も亦應に此の如きの識食の義を信受すべし。能く身を利益する事を作すを以ての故にと。此の四食の中、觸食は六識に屬し、思食は意の望得に屬し、段食は色に屬して、心に關せず。識食は、三の義の中に於て、何の義に屬するや。若し汝、阿梨耶識有りと說かざれば、何の義に依て、此の識食を說くや。復次に、若し人の眠中に夢みざると及び心、悶絕すると、滅心定に入る等とには、六識は已に滅す。又段・思・觸の三食無ければ、何の法か此の身を持して壞せざらしむるや。若し阿梨耶識の執持すること無ければ、此の身は、則ち壞せん。故に知る、定んで應に阿梨耶識を以て、識食と爲すべきことを。

論曰　何を以ての故に。若し果報識を離るれば、眼識等の中、隨つて一識有るも、三界の中に受生せる衆生に於て爲に食事を作すに、能有ることを見ざるが故なり。

釋曰　若し本識を離るれば、六識の中に於て隨つて一識に於ても、三界の中に已に受生せる衆生に於て、此の識に功能有りて、能く食事を作すことを見ず。故に知る、餘識を說いて識食と爲すことは此の義成ぜず。

論曰　若し人、此の生より命を捨て、上の靜地に生ずるには、散動染汚の意識に由つて、彼に於て受生す。

釋曰　靜地の中に於て、本識を離れて受生するは、此の義、則ち成ぜず。若し人、受生するには必ず染汚の心に由る。若し靜地に於て受生するも、必ず染汚散動の心に由る。染汚とは、自の靜地の惑の爲に染汚せらるゝなり。此の惑は、何の相ぞ、定味を愛する等なり。此の惑は、定んで

釋曰 五識の中、自の所依の根に隨ひて、若し能く執持すれば、此の識は久しく堅住せず。相續、壞し易きを以つての故なり。或は無識地の中に在るが故に壞し、或は餘識間起するが故に壞す。

論曰 若し此の色根も執持識無ければ、亦成ずることを得ず。

釋曰 死人の色根は、識の執持すること無ければ、則便ち爛壞するが如く、若し執持識を離るれば、諸根も亦應に爾るべし。此の義も亦成せず。

論曰 復次に、此の識と及び名色とは更互に相ひ依ること、譬へば蘆束の相ひ依りて俱起するが如きは、[三]此の識は成ぜず。

釋曰 經の中に於て、佛世尊說く。識は名色に依て生じ、名色は識に依て生ずと。名は、是れ非色の四陰にして、色は卽ち柯羅邏なり。何者か、是れ名色に依るや。識は此の名色を依止と爲すに由つて、剎那に傳々して生じ、相續し流れて斷ぜず。能く名色を攝し、成就して壞せざらしむ。此の識を、名色に依るの識と名く。若し本識を撥無して、六識を以て識と爲すことは、此の義、成ぜず。若し阿梨耶識を離れては、六識の中に於て是れ何の識ぞ。此の問は、何の所顯を欲するや。餘識は識食を成ぜざることを顯はさんと欲するなり。

論曰 復次に、若し果報識を離るれば、一切の生を求むる已生の衆生の識食は成ぜず。

釋曰 此の言は、本識は能く名色の爲に、識食と作ることを顯はさんと欲す。何を以ての故に。佛世尊、說く。食に四種有り。生を求むる已生の衆生の相續して住するを得んが爲の故に、四食を說く。何をか、四と爲す。一には段食。二には觸食。三には思食。四には識食なり。段食は變成を相と爲す。何を以ての故に。此の段、若し變異すれば、身の利益の事を作す。是を段食と名く。觸食は、塵に依るを相と爲す。色等の諸塵を緣ずるに由つて、能く身を利益する事を作す。是を觸食と名く。思食は、得んことを望むを相と爲す。此の得んことを望むの意は、能く身の利

【三】果報識を離れては是の如き識の義は成ぜずの意。隋譯には「此の義」と爲すは意通じ易し。

ぜず。

釋曰　別の識の自ら種子と爲ること能はざるは、他に依つて種子を成ずるを得るに出る。所依の受生識は既に種子に非れば、能依の別識を立てゝ、種子識と爲すこと、此の義、豈に成ぜんや。

論曰　[一九]是の故に、此の識の託生し變異して、柯羅邏を成ずるは、此れ意識に非ず。

釋曰　此の識は、卽ち是れ阿梨耶識なれば、此れを名けて意識と爲すことを得ずとなり。

論曰　但だ是れ果報なり、亦是れ一切種子ならば。此の義成ずることを得。

釋曰　種子より生ずるが故に、果報識と稱し、能く種子を攝持するが故に、亦種子識と名く。若し此の說を作さば、義乃ち成ずることを得。

論曰　[二〇]復次に、若し衆生、已に託生すれば、能く所餘の色根を執持す。果報識を離るれば、則ち得べからず。

釋曰　前に已に正しく受生する義を明かし、今更に受生後の義を明かす。前には已に衆生の胎中に在るを明かし、今は衆生の胎外に出づるを明かすが故に。「衆生、已に託生すれば」と言ふ。衆生、若し已に託生すれば、則ち定んで三義有り。一には、執持して廢すること無し。二には、通じて諸根を攝持し。三には、體、是れ果報にして無記なり。若し阿梨耶識を離るれば、此の三義は得べからず。

論曰　何を以ての故に。所餘の諸識には、定んで別に依止有り。

釋曰　道理を引いて證と爲さんと欲するが故に、「何を以っての故に」と言ふ。六識の中、隨つて一識を「所餘の諸識」と稱す。眼識は定んで眼根を以て依止と爲し、乃至身識は定んで身根を以て依止と爲す。別の依止を明かすは、通じて執持すること能はざることを顯はす。

釋曰　久しく堅住せず。

【一九】前來の論究の歸結として正義を成立す。

【二〇】以下は本識を離れては色根を執持するもの無きことを明かすを初めとして本識の功能を列示す、文段明了なり。

論曰　若し此の意識、已に變異すれば。

釋曰　若し已に受生の意識と赤白と和合すれば、前識を變じて後識と作すものにして、後識は前識に異なる。

論曰　是の時意識は柯羅邏を成す。

釋曰　柯羅邏を成ずるに由つての故に、變異す。

論曰　此の識を、是れ一切法の種子と爲すや。此の識に依止して餘識を生ずるが爲に、一切法の種子と爲すや。

釋曰　當に受生識を以て、一切法の種子と爲すべしと爲すや。當に受生識に依止して、別に餘識を生ずべきが爲に、一切法の種子と爲すや。

論曰　若し汝、已に變異せる識を執して、一切種子識と名くれば、卽ち是れ阿梨耶識なり。汝、自ら別名を以て、成立して意識と爲すと謂ふのみ。

釋曰　若し汝、受生識を執して種子識と爲さば、則ち我が說く所の義と同じく、卽ち是れ阿梨耶識を說いて種子識と爲すなり。汝、自ら說いて阿梨耶識と名けずして、別に立てゝ意識と名くるのみ。

論曰　若し汝、能依止の識は是れ一切種子識なりと執し、

釋曰　受生識に依止して、更に餘識を生ずるを、能依止の識と名け、一切種子識と爲すとなり。

論曰　是の故に、此の識は依止に由つて、他の因を成ずとせば。

釋曰　別の識、既に他より生ずれば、則ち自ら種子と爲ること能はず。是の故に、此の識は受生識に依止することに由りて、方に種子を成じて他の因と爲ることを得となり。

論曰　此の所依止の識、若し一切種子識に非ずれば、能依止を一切種子識と名くることは、是の義成

ての故に。恒に染汚識を以て、依止と爲せばなり。此の所依止の識は、欲等に染せられ、生有の境を緣して起る。能依止の識は既に是れ果報なり。但だ無記性にして、所緣の境も、又知るべからざれば、立てる意識と爲すべからず。若し此を立てゝ、意識と爲さば、則ち並び起るの義無し。若し並び起ること有らば、應に同じく了別すべく、應に同じく滅無なるべし。若し同じく了別すれば、滅心定無からん。一の了別心は、滅するも、一の了別心は、在るを以ての故に。若し同じく滅無ならば、則ち功用無くして自然に涅槃せん。心、更に起らざるを以ての故に。

論曰　已に變異せる意識なり。

釋曰　初に生を受くるの識は、已に變異して柯羅邏と爲る。

論曰　成立して意識と爲すべからず。

釋曰　凡そ三義あり。初めて生を受くるの識を、意識と爲すことは立つべからず。

論曰　依止、淸淨ならざるが故に。

釋曰　意識は三性の心より生ず。初めて生を受くるの識は、必ず染汚の識より生ず。卽ち是れ依止は淸淨ならず。

論曰　長時に境を緣ずるが故に。

釋曰　初めて生を受くるの識は、始より終に至るまで境を緣じて廢すること無く、意識は境を緣ずること易脫不定なり。

論曰　所緣の境は知るべからざるが故に。

釋曰　初めて生を受くるの識の、所緣の境は知るべからず。意識は、三世の境と及び非三世の境とを緣ずることは、此れ則ち知るべし。此の三義に由つて、異り有るが故に、立てゝ意識と爲すべからず。

釋曰 是の識は卽ち是れ意識なり。一時の中に於て　柯羅邏と相應するが故に、「柯羅邏に託す」と言ふ。此の果報識は、前の染汚の識と異なるが故に、「變ず」と言ひ、宿業の功能に由つて風を起し、赤白を和合して、識と同ぜしむるが故に「合す」と言ふ。卽ち此を名けて受生と爲す。

論曰 [一八]若し但だ意識のみ變じて、柯羅邏等を成じ、此の意識に依止して、母胎の中に於て別の意識有りて起るは、此の如きの義無し。

釋曰 若し汝は、此の識の柯羅邏の數に入るは、但だ是れ意識のみなりと執すれば、若し是の意識の根塵の生起するとき、餘の意識と同と爲すや、異と爲すや。若し是れ同なりと言はゞ、此の識の謝する時は、柯羅邏も卽ち應に壞滅すべし。若し不同なりと言はゞ、則ち應に說いて意識と名くべからず。何を以ての故に。意識は通じて三性の識を以て根と爲すも、此の識は但だ染汚識のみを以て根と爲せばなり。意識は三世を緣じて境と爲すも、此の意の境界は知るべからざればなり。意識は有る時は興り、有る時は廢するも、此の識は恒に有りて廢すること無し。故に意識と同じからず。又若し同ならば、無識地の中に於ては、應に此の識無かるべし。若し此の識無ければ、應に無心定に入るも、識は身を離れずと言ふべからず。又若し識無ければ、身は則ち應に壞すべし。是の故に此を說いて意識と爲すべからず。若し汝、此の意識は分別すべからざるも、根塵生起して此の識に依止し、母胎の中に於て別に意識を生ずと說かば、是の義然からず。何を以ての故に。

論曰 母胎の中に於て、二種の意識の一時に俱起することは、此の義無きが故なり。

釋曰 此の言は、前の意識無しとの義を證す。二の意識は、同性なるを以て、必ず俱生せず、並びに作意すること無きが故に。此の意識は、柯羅邏に託し、赤白と和合して同じく依止す。此の識に、別の意識の生ずること有りて、一時に俱起せば、此の柯羅邏の識は意識を成ぜず。何を以

[一八] 前に結生の識は染汚識なることを顯はし以下は異計を破す。

此の識は[一二]三行に熏ぜられ、[一三]四取に隨ふを以ての故に、熏習、[一四]圓滿するに由るが故に、識は有を成ず。此の識は或は滅し、或は餘識に間てられて、此の識の體、已に謝すれば、功能も亦隨つて滅。當に何れの處に於てか此の行有二業の功能を安ずべき。故に業の染汚は成ぜず。染汚と言ふは、此の業は、煩惱と相應するが故に、染汚と名く。又染汚より生ずるが故に染汚と名く。能く六道生死の染汚の果報を感ずるが故に染汚と名く。

生不淨章　第三

釋曰　若し本識を離るれば、生の染汚有ること無し。道理として、此の義成ぜず、今當に之を說くべし。

論曰　復次に、云何が生の染汚は、此の義成ぜざるや。生を結ぶこと成ぜざるが故なり。

釋曰　此の生、若し業に由る功能を謝すれば、後報を結びて前の報に接することは、此の義、則ち成就せず。何を以ての故に。

論曰　若し人、不靜地に於て退墮すれば、心は正しく中陰に在つて、染汚の意識を起して、方に生を受くることを得。

釋曰　[一五]不靜地に、前生を退き後生に墮するが故に、退墮と名く。受生に、二種有り。或は[一六]中陰有り、或は中陰無し。[一七]今、偏へに中陰を受くる者を說く。若し中陰に在りて、將に生を受けんと欲すれば、必ず先づ染汚の識を起して方に受生するを得。

論曰　此に有る染汚の識は、中陰の中に於て滅す。

釋曰　此の中陰の染汚の識は、生有を緣じて境と爲す。此の識は、中陰の中に於て滅す。何を以ての故に。生陰には染汚無きが故なり。

論曰　是の識は、柯羅邏に託し、母胎の中に於て、變じ合して生を受く。

【一二】　三行とは口身意の三業なり。
【一三】　四取とは我癡、我見、我愛、我慢の四煩惱をいふ。
【一四】　圓滿すとは業の種子を圓滿するの意。
【一五】　不靜地とは唐譯に非等引地といふ、即ち欲界なり。
【一六】　中陰有るは欲色二界にして、中陰無きは無色界なり。
【一七】　今此には偏つて中陰より受生する者に就て說くの意。

を起すとせば、何の因より生ずることを得るや。
論曰　諸惑の熏習は、久しく已に謝滅せり。
釋曰　先に入觀の時に、諸惑の熏習は已に滅せり。云何が因無くして、世間の心を生ずることを得るや。
論曰　有流の意識は、種子有ること無くして生ずることを、應に成ずるを得べし。
釋曰　若し此の如きの識は、因より生ぜざれば、則ち解脫を得るの義無く、無學の人の惑心も亦應に因無くして生ずべし。
論曰　是の故に阿梨耶識を離るれば、煩惱染汚は則ち成ずることを得ず。
釋曰　若し汝、此の識を撥無せば、煩惱染汚の義は云何んが立すべき。

業不淨品章　第二

釋曰　若し人、本識を撥無せば、此の人は、道理として能く業染汚を成立する義無し。
論曰　復次に、業の染汚は、云何が成ずることを得ざるや。行を緣として、識分を生ずることは、成ずることを得る義無し。
釋曰　行に三品有り、謂く福と非福と及び不動とにして、念々に生滅す。若し本識を離るれば、何の處に於て功能を安立するや。若し汝、六識の中に安立すと言はゞ、是の義然らず。六識は諸業の功能を攝持すること能はざればなり。前に煩惱染汚の中に於て、已に具さに此の義を顯はせり。
論曰　若し此の義無れば、取を緣として有を生ずることも、亦成ずる義無きが故に、業の染汚は成ぜず。
釋曰　若し業の功能を有する識無ければ、謂ゆる行は識を緣とし、取を緣として有を生ずることは、道理として成ずることを得る無し。何を以ての故に。

是の故に此を以て、因と爲すことを得ざればなり。

論曰　復次に、惑を對治する識、已に生ずれば、所餘の世間の諸識は皆已に滅盡す。若し阿梨耶識無ければ、此の對治識は小大の惑の種子と共に倶に在ることは、此の義成ぜず。

釋曰　若し汝、本識を撥無すれば、則ち二の過失有りて、離るゝことを得べからず。一に[九]向中の人の聖道は、餘の煩惱と倶に在ることは、此の義成ぜず。若し[一〇]此の惑無ければ、則ち餘道を修するに因無し、應に四道三果の人無く、但だ無學の人のみ有るべし。此の義は、正教と相違するの過失を離るゝことを得べからず。二に[一一]無流識、已に滅して、世間心、更に起らんと欲するとき、無因にし能く此の心を生ずることを得せしめん。若し有流心には因無く、無流心より後に自然に生ずるを得といはゞ、則ち無學の人無からん。此の失も亦離るゝことを得べからず。須陀洹向の人の如きは、正に正諦の對治道を生ずる時、世間の六識と道と相違し、倶生することを得ざるが故に、世間の諸識は皆已に滅盡せり。所餘の煩惱は依止滅するに由るが故に、功能も亦滅す。故に對治識と小大の惑の種子と倶に在ることは、此の義成ぜず。若し爾らば何ぞ修道を用ゆるや。

論曰　何を以ての故に。自性解脱なるが故に。無流心と惑とは、倶起倶滅することを得ざるが故に。

釋曰　同類を自性と爲す。意識には煩惱有り、無流識には煩惱無きが如く、惑と無惑と異有りと雖も、而も同じく是れ識流なるが故に自性と名く。解脱は是れ離の義なり。若し煩惱識と無流識と倶起すれば、則ち自性は解脱するを得ず。無流識の起る時は、餘識は必ず生ずることを得ざるを以て、既に其の相離るゝが故に解脱と名くればなり。

論曰　復次に、後時に出觀して、正しく世間心を起すときは。

釋曰　須陀洹等の學人の已に道を得竟り、後時に出觀するときは、當に出世の心を起すべしと爲すや、當に世間の心を起すべしと爲すや。若し出世の心を起さば、出觀の義無く、若し世間の心

【九】向中の人とは八輩の聖者の中四向三果の有學の聖者をいふ。

【一〇】惑を斷盡せずして尙ほ殘留するが故に漸次に向上して修行す、然るに惑無ければ修道の因無く。從つて四向三果の階位も無く、惑を斷盡せる無學果のみとなるとの意。

【一一】無流識とは無流觀に入定せる識なり、空より出でゝ世間心の還起する時有流の世間心は何に由つて生ずるやとの意なり。

なり」とは、眼識は眼根を以て依止と爲し、耳識は耳根を以て依止と爲し、乃至、意識は意根を以て依止と爲すなり。此の諸識の依止は、各處に相應することを得ざるに由り、是の故に此の識の熏習は、彼の識に住することを得ず。「生滅倶ならず」[六]とは、[七]根と塵と作意とは、悉く同じからざるが故に、倶に生滅する義無し。生滅、既に同時ならず、云何か此の識を以て彼の識に熏ずることを得ん。是の故に、諸の熏習の義は、皆成ずることを得ず。若し汝、此の種子は同類の識の中に住すと說かば、此も亦然らず。何を以ての故に。

論曰 同類は同類と相ひ熏ずることを得ず。一時に倶に生滅すること無きを以ての故に。

釋曰 眼識は眼識に熏習することを得ず。何を以ての故に。一時の中に、二の眼識、並び生ずることを得ざればなり。若し並び生ぜざれば、則ち倶滅無きが故に熏習の義成ぜず。

論曰 是の故に、眼識は欲等の大小の諸惑の所熏と爲らず。亦、同類の識の所熏とも爲らず。

釋曰 前の義に由るが故に、眼識は別類の所熏と爲らず。亦、同類の所熏とも爲らざるなり。

論曰 此の如く眼識を思量す。所餘の諸識も亦應に此の如く思量すべし。

復次に、若し衆生[八]無想天以上より退墮して、下界の生を受くれば、大小の惑に染せられたる初識あり。此の識の生ずる時、應に種子無かるべし。

釋曰 上界より墮して、下界の生を受くるに、初めて受生する識は必ず惑の爲に染せらる。此の識と及び惑とは、何の種子より生ずるや。若し上界より生ずと言はゞ、是の義、然らず。何を以ての故に。上下の二界は、相違して倶起せざるが故に、相ひ熏ずることを得ざればなり。若し、未だ上界の定を得ざる前の心より、下界初生の心を生ずと言はゞ、是も亦然らず。

論曰 何を以ての故に。此の惑の熏習と、依止とは、並びに已に過去に滅して、餘無きが故なり。

釋曰 此の初識は應に但だ生して因無かるべし。此の熏習と及び依止とは、久しく已に滅盡せり。

【六】論本には「倶起倶滅無し」といふ。

【七】識の所依と所緣と行相となり。

【八】論本には無想天以上と有るも釋論の如く上地となすべし、唐譯には「無想等の上の諸地より」とありて本釋と一致す。

の故に。因は已に謝滅せるが故なり。

論曰　譬へば過去に已に滅盡せる業より、果報は生ずることを得ざるが如し。

釋曰　過去の業に、二種有り。謂く有功能と及び無功能となり。若し果報、已に熟すれば、則ち復功能無し。此の業に、二義有り。一には已に過去し、二には已に滅盡す。果報の果は、此の業より生ずるの義有ること無し。欲を有する眼識も亦應に此の如く、已に滅せし種子より生ずと説くべからず。若し人、前に已に滅せる識は、是れ有なりと執せば、過去の法、是れ有なるを以ての故に、毘婆沙師の執する所の如し。此の執は但だ語のみ有りて義無し。何を以ての故に。若し法是れ有ならば、云何が過去の諸法と言ふや。此の義に由るが故に、果報の果の生ずることは、道理に如はず。熏習無きを以つての故に。

論曰　復次に、眼識は欲等と、或は俱時に生起するも、熏習を成ぜず。

釋曰　眼識にして、前時に未だ滅心定に入らず、及び未だ餘識の爲に間てられずして、欲と俱生するも、後に滅心定に入り、及び餘識の爲に間てられて、熏習を成ずることを得ず。

論曰　何を以ての故に。此の種子は欲の中に住することを得ず。欲は識に依止するを以ての故に、又、欲の相續は堅住せざるが故なり。

釋曰　種子、若し住するときは、[四]必ず[五]自在の法と及び相續して堅住する法とに依る。此の二義は、欲の中に於ては、並びに無きが故に、欲は種子の所依處に非ず。

論曰　此の欲は、餘識に於ても、亦熏習無し。依止、別異なるが故に。所餘の諸識と俱起俱滅すること無きが故に。

釋曰　種子、若し欲の中に住するを得ざれば、應に餘の諸識の中に住することを得べしといはんも、亦此の義無し。何を以ての故に。依止、別異にして、又生滅俱ならざるが故なり。「依止別異

【四】自在の法とは他に依屬せずして自體あるをいふ、欲は識に依屬する心所法なるが故に自在ならず。
【五】堅住の義は已に前に熏習を釋する所に解釋せり。

汝の所執に違へば、汝の執は則ち壞せん。是の故に衆名と及び體相とは、本識を離れず。

論曰 煩惱不淨品。業不淨品。生不淨品。世間淨品。出世淨品等は、皆成就せず。

釋曰 三章を開いて、六章と爲さんが爲の故に重ねて此の名を說く。[一]

論曰 云何が煩惱不淨品は成就せざるや。根本の煩惱と少分の煩惱[二]との作る所の熏習の種子は、六識に於ては成就することを得ず。何を以ての故に。眼識は欲等の大小の二惑と、倶に起り倶に滅すればなり。

釋曰 欲は心に依て起るが故に、心に隨つて世に倶に起り倶に滅す。欲等は心に熏習することを顯はさんが爲の故なり。

論曰 此の眼識は、是れ惑に熏ぜられて、種子を成立す。餘識は爾らず。

釋曰 此の眼識は、欲等と倶起倶滅し、數々熏ぜらるゝが故に種子を成ず。耳識等は、則ち熏ぜられず。餘識の爲に遮せらるゝが故なり。

論曰 是の眼識、已に滅し或は餘識間起せば、熏習と及び熏習の依止とは、皆得べからず。

釋曰 若し無識地の中に在らば、謂く無想定等の故に是を識已に滅すと言ふ。或は有識地の中に在らば、耳識等間起するが故に眼識は滅す。此の二の滅の中に於ては、熏習の生ずる所の種子と及び依止する所の眼識とは、皆得べからず。

論曰 眼識は前時に已に謝して、現に體有ること無く、或は餘識に間(へだ)てられ、已に滅して法無なるより欲の倶生することと有るは成就することを得ず。

釋曰 若し眼識は前時に已に[三]二種に謝滅して、現在に復、眼識と及び欲の體とは無ければ、則ち是れ已に滅して無法なり。眼識、後に若し欲と倶生するには、前時に已に滅せる眼識と及び欲とを用つて種子と爲して現起の眼識と及び欲とを生ずるは、此の義、成就することを得ず。何を以て

【一】以上は此の品の序說にして、以下正しく煩惱不淨の成せることを明かす。

【二】少分の煩惱とは新譯には隨煩惱といふ。

【三】二種にとは無識地の已謝と有識地の間隔とをいふ。

卷の第三

釋引證品第三の一

煩惱不淨章　第一

釋曰　此の品に六章有り、一には煩惱不淨品。二には業不淨品。三には生不淨品。四には世間淨品。五には出世淨品。六には順道理なり。

論曰　此の阿梨耶識の、已に成立せることは、衆名と及び體相とに由る。

釋曰　此の如く、本識の衆名を已に說き、體相已に成立せり。此の二義は、但だ本識に於てのみ、理の如く成ずることを得、餘識に於てには非ず。今、此の二義を顯はさんが爲に、理と非理とに於て、諸師と共に諍を立つ。

論曰　云何か阿梨耶識を知ることを得るや。是の如き等の衆名を以ての故なり。如來の、體相を說くも亦爾なり。生起識には說かず。

釋曰　彼云く、是の如き等の衆名と又び體相とは我が法の中に於ても亦有り。但だ阿梨耶識無きのみ。云何か衆名と及び體相とは、定んで阿梨耶識に屬し、餘識に屬せずと言ふや。此の問に答へんが爲の故に。

論曰　若し此の名と相との立つる所の阿梨耶識を離れては、不淨品、淨品等は、皆成就せず。

釋曰　若し汝、本識を離れて、此の名と及び體相とを餘識に於て安立せば、此の安立は成ぜず。何を以ての故に。三義の違ふ所と爲るが故なり。此の三義は、是れ如來の正法の悉檀なり。謂く子淨品と淨品と及び正道理となり。此の義は、本識に由つて立つることを得。若し汝、本識を撥無せば、此の三義は安立の處無く、則ち此の義を成ぜざるべし。如來の所立は堅實に成就して、

具足す。

釋曰 四緣を以つて、三種の緣生に約するに、具と不具と有り。若し顯了の義に就かば、皆四を具せざるも、若し隱密の義に就かば、皆四緣を具す。

彼は本識の果と爲り、若し彼を本識の因と爲さば、本識は彼の果と爲る。此の如きの因果の理は佛有るも、佛無きも、法爾にして常住なり。

釋曰　此の如き三種の緣生は、一には窮生死緣生、二には愛非愛道緣生、三には受用緣生なり。此の三の緣生に、四種の緣有り。

四緣章　第七

論曰　若し第一の緣生の中に於ては、諸法と識とは更互に因緣と爲る。

釋曰　因緣の義は已に顯はる。重ねて問ふことを須ひず。何を以ての故に。諸法は熏習して、阿梨耶識の中に在るが故に、互に因果と爲ることを得。

論曰　第二の緣生の中に於ては、諸法は是れ何の緣ぞや。是れ增上緣なり。

釋曰　無明等の增上に由るが故に、行等は生ずることを得。增上に二種有り、一には不相離、二には但有なり。不相離とは、眼根の眼識の爲に增上緣と作るが如し。但有とは[七三]白等の能く黑等を顯はすが如し。若し無明等ならば、行等に於て、具さに二種の增上緣有り。若し[七四]苦[七五]下の無明無ければ諸行は生ぜず。若し行、已に生じて[七六]修道の無明無ければ、諸行は熟せず。何を以ての故に。[七七]須陀洹の人は、生報を感ずる業を造らざるが故に。[七八]阿那含の人は、下界の生報を受けざるが故に。

論曰　復次に、幾くの緣にて能く六識を生ずるや。三緣有り。謂く增上緣と緣々と次第緣となり。

釋曰　根より生ずるが故に、是れ增上緣なり。塵を緣ずるが故に、是れ[七九]緣々なり。前識滅して後識生ずるが故に、是れ[八〇]次第緣なり。前識、能く後識の生ずる時の與に、中間に隔無きが故に次第と名く。

論曰　此の如きの三緣生は、一には窮生死緣生、二には愛憎道緣生、三には受用緣生にして、四緣を

【七三】白等云云とは白といへば黑なきことを要す、故に白の存する爲に黑は不障の增上緣となる。
【七四】苦の字解し難し恐くは惑字か。
【七五】下の無明とは見道所斷の分別起の無明なり。
【七六】修道の無明とは修道所斷の俱生起の無明なり。
【七七】須陀洹 Srotāpanna は預流果と譯す、此の聖者は見所斷の惑を已に斷せる者にして生報を感ずる業を造らず、卽ち前句の例證なり。
【七八】阿那含、anāgāmin 不還果と譯す、此の聖者は欲界の惑を已に斷せるが故に欲界に生ずることとなし、故に修道の無明なければ諸行は熟せずといふ、卽ち後句の例證なり。
【七九】緣々とは新譯の所緣々なり。
【八〇】次第緣とは新譯の等無間緣なり。

一には説いて緣識と名け、 二には説いて受識と名く。 受を了するを分別と名け、 起行等は心法なり。

釋曰「一には說いて緣識と名く」とは、阿梨耶識は是れ生起識の因緣なるが故に、說いて緣識と名く。「二には說いて受識と名く」とは、其の餘の諸識は前には說いて生起識と名け、今は說いて受識と名く。能く塵を緣じて起り、一一の塵の中に於て、能く苦樂等を受用するが故に受識と名く。即ち是れ受陰なり。「受を了するを分別と名く」とは、此の三受に若し別有らば心能く了別して、此の受は苦なり、此の受は樂なり、此の受は不苦不樂なりと謂ふ。此の識を分別識と名く。即ち是れ想識なり。「起行等は心法なり」とは、作意等を起行と名く。謂く此は好し、彼は惡し等の思なるが故に作意と名く。此の作意は能く心をして此を捨て彼を受けしむるが故に起行と名く。起行とは即ち是れ行陰なり。六識を心と名け、此の初心より後の三心を生ずるが故に[七二]心法と名く。

論曰 此の二識は更互に因と爲ることとは、大乘阿毘達磨の偈に說くが如し。

諸法は識に於て藏す。 識の法に於けるも亦爾なり。 此の二は互に因と爲り、 亦、恒に互に果と爲る。

釋曰 此の言は本識と及び受用識との互に因果と爲ることを顯はさんと欲し、阿含を以て證と爲す。阿含と相違せざれば、則ち定んで信ずべし。又、若し此の言を作さざれば、未だ此の證は何より出で、是を聖言と爲すや、聖言に非ずと爲すやを知らず。故に此の說を作す。「諸法は識に於て藏す。識の法に於けるも亦爾なり」とは、若し本識を識法の因と作し、諸法を果と爲さば、必ず本識の中に藏するに依る。若し諸法を本識の因と作し、本識を果と爲さば、必ず諸法の中に藏するに依る。「此の二は互に因と爲り、亦恒に互に果と爲る」とは、若し本識を彼の因と爲さば

【七一】 後の三心とは受、想、行の三陰をいふ。
【七二】 心法とは心所有の法の義にして心所に同じ、無性釋に是の如き三蘊は皆能く心を助けて境界を受用するが故に心法と名くといへり。

し、道理とも亦相違す。是の故に本識は三業の爲に習熏せらるゝが故に因を成ずることを得。復次に云何んが穀麥等は熏習無くして、種子を成ずることを得るや。「内に由つて外は成ずることを得、是の故に内に熏有り」とは、外若し種子を成ずるも、自の能に由らず、必ず内の熏習に由つて、外を感ずるが故に種子を成ず。何を以つての故に。一切の外の法は、内を離るれば、則ち成ぜず。是の故に外に於ては、熏習を成ぜざるなり。一には、内に熏習有るに由つて、種子を成ずることを得。二には、若し内に種子無ければ、未作も應に得べく、已作も應に失ふべし。此の如きの義無し。三には、外の種子は内に由つて成ずることを得るが故に、内は外に異りて、必ず熏習有り。

[七〇]前に已に分別自性緣生と愛非愛緣生とを說けり。今當に更に受用緣生を說くべし。其の相、云何ん。

論曰　所餘の識は阿梨耶識に異なり。謂ゆる生起識なり。一切の生處と及び道とに、應に知るべし、是を受用識と名く。

釋曰　此の六識を云何んが說いて生起識と名くるや。自ら二義有り。本識の中の種子は、此の識に由つて生起するが故に。此の六識は是れ煩惱業の緣起なるが故に。一は能く本識を熏習して種子を成ぜしむ。種子に自ら二能有り、一は能生にして、二は能引なり。此の二能に由りて、六識を生起と名く。果に二能有るに由るが故に、因に二名を得。二は、本識の中の因の熟する時、六識は因に隨つて生起し、愛憎等の報を受用するが故に、此の識を生起識と名け、亦受用識とも名く。宿因の生起する所にして、果報を受用せしむるが故に、生起と受用との二名を得。此の生起識は一切の受身する四生、六道の處に、能く果報を受くるが故に、應に知るべし、此を受用識と名く。此の受用識の相貌云何ん。

論曰　中邊論の偈に說くが如し。

【七〇】以下は受用緣生を明かす。

を得と言はゞ、則ち箭は落つるの義無けん。外と內との種子も亦爾なり。生因、盡くるに由るが故に枯喪し、引因、盡くるに由るが故に滅盡す。

論曰 [六八]譬へば外の種子の如く、內の種子は爾らず。此の義は二偈を以て之を顯はす。

外に於ては熏習無きも、　種子の內は然からず。　聞等に熏習無くして、　果の生ずることは道理に非ず。　已作と及び未作とは、　失と得と並びに相違す。　內に由つて外は成ずることを得、　是の故に內には熏有り。

釋曰 若し內の種子と外の種子と異ならざれば、眼等の根は同じく是れ清淨の四大なり。何の故に互に相ひ熏ぜざるや。是れ外と爲すが故なり。外の種子には、三義有つて、內の種子と異なる。是の故に內は熏習の依止なるも、外は則ち爾からず。此の義を顯はさんが爲の故に、二偈を說く。「外に於ては熏習無きも、種子の內は然らず」とは、外の種子は穀麥等の如く、功能に由るが故に成じ、熏習に由るが故に成ずるにあらず。內の種子は則ち爾からず、必ず熏習に由るが故に成ず。此の義は[六九]證比の境界に非ず。云何んが知るべきや。「聞等に熏習無くして、果の生ずることは道理に非ず」とは、若し內に於て熏習無くば、昔より未だ聞慧を學ばざるに、思慧は生ぜず。聞慧を學ぶことよりして後に、思慧も、亦應に生ぜざるべし。何を以ての故に。同じく熏習無きが故なり。既に此の義無し。故に知る、內は熏習に由つて種子を成じ、熏習無ければ、則ち成ぜざることを。若し內に於て熏習無くば、復、何の失有りや。「已作と及び未作とは、失と得と並びに相違す」とは、若し內に熏習無ければ、二の過失有り。一には未作も應に得べし、二には已作も應に失ふべし。若し相續中に、熏習を因と爲すこと無ければ、此の苦樂等の果は因の所作に非ざるべし。即ち是は不作にして得るなり。若し已作の功用にし、心に於て熏習すること無ければ、則ち因は能く果を得ること無し。即ち是れ已作にして失ふなり。此の義は、世間の中に於て相違

【六八】以下は內外二種の不同を明かす、此の二句を釋論に偈頌に作るは錯誤なるべし、尙ほ「譬へば」の語は此には允當ならず、且らく類例の義に解すべし、隋譯には「此の內の種子は外種子に類せず」と爲せり。

【六九】證比の境界とは證知（現量知）と比知（比量知）との對象にあらずとの意。

無し。是の故に六識は並起せざるが故に熏習無し。若し汝、有識の生類は其の相、此の如きが故に能く熏を受くと言はゞ、是の義然からず。「餘の生ずるも、例するに應に爾るべし」とは、若し汝、不相應の義も亦相ひ熏ずることを得と執せば、汝の執する所の[六六]義を以て當に汝の所執に例すべし。眼等の諸根の如きは識と同じからざるが故に名けて餘と爲す。此の諸根の色の清淨なる同類も、亦應に更互に相ひ熏ずべし。同じ色の類なりと雖も、相應せざるが故に。若し汝、相熏を許さゞれば、六識も亦爾るべし。同じ識類なりと雖も、相應せざるが故に、云何んが、相熏を說くことを得ん。

[六七]前に已に、二種の種子を說けり。謂ゆる外と及び內となり。若し因の義を以て、之を顯はせば、二種の因を成ず。一は生因、二は引因なり。此の義を顯はさんが爲の故に、「此の外と內との種子の能生と及び引因」とを說く。外と內との種子を、若し生因と及び引因と作さば、其の相、云何ん。能く芽等を生じ、乃至、果の熟するは、是れ外の生因なり。能く果報を生じ、乃至、命終るは、是れ內の生因なり。引因とは、「枯喪するも猶ほ相續し、然る後に方に滅盡す」とは、外の種子、若し穀ならば已に陳(ふる)びるも、內の種子、若し身ならば已に死するも、引因に由るが故に猶ほ相續して住すとなり。若し此の二種に、但だ生因有るのみならば、生因已に謝すれば、果は卽ち應に滅し、相續して住することを得ざるべし。若し汝、剎那に轉々して相生ずるに由り、前の剎那は後の剎那の爲に因と作るが故に猶ほ相續して住すと說かんか、若し爾らば、最後に應に都て盡きざるべし。既に此の二義無きが故に、別に引因有ることを知る。此の二種の因は、譬へば人の射るに彎弓より箭を放つが如し。箭を放つを生因となし、彎弓を引因となす。箭を放つて弦を離ることを得ば、遠く至る所有り。若し但だ箭を放つを以て因と爲すのみにて彎弓を以て因と爲さざれば、則ち箭は遠きことを得ず。若し前の剎那の箭は、後の剎那の箭を生ずるが故に遠きこと

【六六】本文には「以」の字は「非」となすも錯誤なるべし、義通せざるが故に、

【六七】以上熏習の義を釋し竟つて、以下は後の一頌を釋し內外の二種に生、引の二因有ることを明かす。

是の故に、金銀石等は可熏ならず。熏を受くること能はざるを以ての故に。若し物の、衣油等の如きものならば、能く熏を受くるを以ての故に、名けて可熏と爲す。四に若し能、所、相應すれば、則ち能く熏を受く。若し、生ずる無間ならば、是を相應と名くるが故に熏を受くることを得、若し相應せざれば、熏を受くること能はず。「若し異ならば、熏ずべからず。是を熏の體相と說く」とは、若し此の四義に異れば、則ち熏ずべからず。是の故に阿梨耶識を離れて、餘法は、熏を受くること能はず。阿梨耶識は前の六義を具するを以てなり。一には、念々に生滅す、二には、生起の識と俱有なり。三には、隨逐して、乃し治際に至るまで生死を窮む。四には、決定して善惡等の因と爲る。五には、福非福不動の行を觀じて、因と爲して、愛憎の二道に於て成熟して、[六三]道體と爲る。六には、能く同類の果を引顯す。一切の生起識は、六義を具して、種子と爲ることを得と雖も、但だ熏習の四義と相ひ反す。阿梨耶識は種子の六義と及び熏習の四義とを具するに由るが故に、能く熏習を受けて轉じて種子と爲る。餘識は則ち爾からず。何を以て故に。「六識には相應すること無し」とは、六識には前、後、相應するの義無し、動壞し易きを以ての故なり。復次に、但だ動壞し易きが故に相應すること無きのみに非ず。復、餘義有り。「三の差別にて相違す」とは、隨つて一一の識は別の依止より生じ、別の境界にて生じ。別の覺、觀、思惟を生じ、[六四]別の想を生ずるが故に、相違と名く。六識は更互に相ひ通ぜざるが故に差別し、差別するが故に相違す。經部師は說く、前念は後念に熏ず。何を以つての故に。二識は一刹那に、並び起らざるが故に。同時なることを得ざればなりと。此の義、然からず。何を以つての故に。[六五]一念に、二俱ならず」とは、能熏と所熏と若し一時に在らば、同生同滅して熏習の義は、成ずることを得るも、若し同時ならざれば熏の義は成ぜず。何を以つての故に。能熏、若し在らば、所熏未だ生ぜず、所熏若し生ぜば、能熏已に謝せん。前後の刹那は、一時に並び起ることとは是の處り有ること

【六三】道體とは道は道趣の義にし善惡趣の果報體となるの義。

【六四】隋譯に「一一の識は各々の依止より生じ、各々攀緣し、各々作意す、復別義有り謂く諸識は各別の相なるが故に」と、唐譯亦相似たり、案ずるに本譯の「別の想を生ず」とは別義の說にして前三句の所依と所緣と作意(思惟)とを三の差別と見るべし。

【六五】此の句は偈文には「二念俱有ならず」とあり。

ば、卽ち此の時、果生ず。是の故に、二を俱有と名く。「隨逐して治際に至る」とは、治とは謂く金剛心の道なり。阿梨耶識は此の時に於て、功能方に盡くるが故に、際と名く。外の種子は、果熟し及び根壞するの時に至つて、功能則ち盡く。是の故に、三に隨逐して治際に至ると名く。「決定せり」とは、此れ決定して、一切に從はざるに由りて一切の生ずることを得る、果は並びに決定せり。若し是れ此の果の種子ならば、此の果、生ずることを得。是の故に、四を決定すと名く。[六〇]「因緣を觀ず」とは、此の種子は、別の因緣を觀ずるに由りて方に復、果を生ず。是の故に、一切の時に非ず、一切のもの生ずるに非ず。是の時、若し因有らば、是の時に因は生ずることを得。是の故に恒に生ぜざるなり。若し因を觀ぜずして、而も因を成ぜば、則ち一因は一切の果の因と爲らん。因緣を觀じて成ずるを以ての故に、漫りに因と爲らず。是の故に、五を因緣を觀ずと名く。「能く自果を引顯す」とは、是れ自の種子は能く自果を引生するなり。若し阿梨耶識ならば、能く阿梨耶識の果を引生すること、穀等の種子の能く穀等の果を引生するが如し。是の故に六を能く自果を引顯すと名く。此の如きの六種は是れ因の果を生ずる義なり。此の如く方便して熏習の相貌を見易すからしむ。今、當に更に說くべし。「堅と無記と可熏と能熏と相應す」とは、熏の義に四種有り。一には、若し相續し堅住して壞し難ければ、則ち能く熏を受く。若し踈動ならば、則ち然らず。譬へば、風の熏を受くること能はざるが如し。何を以ての故に。[六一]此の風は、相續して、若し一由旬の內に在るも、熏習は亦隨逐すること能はず。散動すると踈なるとを以ての故なり。若し[六二]瞻波花に熏ぜられし油ならば、百由旬の內にも熏習は則ち能く隨逐す。堅住なるを以ての故なり。二に若し無記の氣ならば則ち能く熏を受く。是の故に、蒜は熏を受けず。其の臭を以ての故に。沈麝等も亦、熏を受けず。其の香を以ての故に。若し物にして香臭の記する所と爲らざれば、則ち能く熏を受くること猶ほ衣等の如し。三に可熏とは、則ち能く熏を受く。

【六〇】因緣を觀ずとは唐譯には「衆緣を待つ」と爲し、隋譯には「緣を待つ」と爲す、故に觀は觀待の意なり。

【六一】此の句は隋譯に「風は熏習を持すること能はず、熏習は風に隨つて轉じて一由旬にも至ること能はざるに由るが故に」と、倚唐譯參照。

【六二】瞻波花、Campaka は金色花と譯す香氣ある花なり。

すれば、能く六道の體を成ず。何を以ての故に。三業に熏ぜらるゝは、是れ諸道の種子なるが故なり。此の義に由るが故に三界の一切の生と一切の道とは、皆な此の識の攝に入る。

論曰 此の義を顯はさんが爲の故に、偈を說いて言く。

[五五]外と內とは、不と明了となり。二に於て但だ假名と、及び眞實となり。一切の　種子に六種有り。念々に滅すと俱有なると、隨逐して治際に至ると、決定せると因緣を觀ずと、[五六]能く自果を引顯すとなり。堅と無記と可熏と、能熏と相應すとなり。若し異れば熏ずべからず、是を熏の體相と說く。六識には相應すること無し、三の差別にて相違し、二念は俱有ならず、餘の生ずるも例するに應に爾るべし。此の外內の種子に、能生と及び引因となり、枯喪するも猶ほ相續し、然る後に、方に滅盡す。

釋曰 已に阿梨耶識を說いて、一切法の種と爲し、今更に種子の義を顯はさんと欲するが故に、斯の偈を說く。「外と內とは不なり明了なり、二に於て」とは、種子に二種有り、一は外、二は內なり。外とは穀麥等を謂ひ、善惡の二性のに於て、不明了なり。是れ[五七]無記なるが故なり。內とは謂く阿梨耶識なり。善惡の二性に於て、則ち明了なり。或は染汚と清淨とを以て二と爲す。「但假名と及び眞實となり」とは、外の種子は但だ是れ假名なるのみ。何を以ての故に、一切法は唯だ識有るのみなるが故なり。內の種子は則ち是れ眞實なり。何を以ての故に、一切法は識を以て本と爲すが故なり。「一切の種子に[五八]六種有り」とは、此の如きの內外の種子は、六種に過ぎずとなり。何をか六と爲すや。「念々に滅す」とは、此の二の種子は刹那、刹那に滅し、先に生じて後滅して、間有ること無きが故に、此の法は種子を成ずることを得。何を以ての故に。常住の法の種子を成ぜざるは、一切時に差別無きが故なり。是の故に、一を念々に滅すと名く。「俱有」とは、俱に有れば則ち種子を成ず。[五九]過去と未來とに非ず、及び相ひ離るゝにも非ず。是の時、種子有れ

【五五】此の句は具さには「內と外とは不明了と明了となり」といふべきを頌文なるが故にかく窄略せられたるものなり。

【五六】論本には「如引顯自果」とあるも釋文には「如」を「能」と爲すが故に之を訂正せり。

【五七】原文には有記とあるも隋唐兩譯に對校するも又意義より見るも有は無の誤寫にして無記なること明かなり。

【五八】六種有りといふも種子の種類にあらずして、種子の具備すべき六種の條件をいふ、所謂種子の六義なり。

【五九】同時に同處に俱存するの意。

論曰　諸の盲人有りて、或は其の鼻に觸れ、或は其の牙に觸れ、或は其の耳に觸れ、或は其の脚に觸れ、或は其の尾に觸れ、或は其の脊に觸るゝ等。有る人、之に問ふ。象は何の相と爲すやと。盲人答へて云く、象は犂柄の如しと。或は說いて杵の如しと、或は說いて箕の如しと、或は說いて臼の如しと、或は說いて箒の如しと、或は說いて山石の如しと。若し人、二種の緣生を了せざる無明の生盲ならば、或は自性を說いて因と爲し、或は宿作と說き、或は自在の變化と說き、或は八自在の我と說き、或は無因と說き、或は作者なり受者なりと說かん。

釋曰　六觸は六の偏執に譬ふ。一には自性、二には宿作、三には自在、四には我、五には無因、六には作者受者なり。「等」とは六十二見等を等す。

論曰　阿梨耶識の體相と及び因果の相とを了せざるに由つて、彼の生盲の象の體相を識らずして、種々の異說を作すが如し。

釋曰　品の初めに自體を立つるは、自相を顯はさんが爲なり。因を立つるは、因相を顯はさんが爲めにして、果を立つるは、果相を顯はさんが爲なり。此の二種の人は、無明に由つて、本識の三相を了別すること能はざるが故に、分別自性緣生に通達すること能はざれば、自性等の五執を起し、愛非愛緣生に通達すること能はざれば、第六の作者なり受者なりとの執を起す。

論曰[五四]　若し略して阿梨耶識の體相を說かば、是れ果報識なり、是れ一切種子なり。

釋曰　阿梨耶識の因相とは、一切法の熏習は本識の中に於て有るが故に名けて因と爲す。果相とは、此の識は餘法の所熏なるが故に、諸法の果を成ず。體相とは謂く果報識なり。一切種子は是れ其の體相なり。

論曰　此の識は、一切の三界の身、一切の六道、四生を攝して皆盡すに由る。

釋曰　三界の身とは、謂く六道四生の中に於ける等類と不等類との差別なり。此の識、若し成熟

【五四】以下正しく本識を說く。

論曰　若し第二の緣生に迷はゞ、我は作者なり受者なりと執す。

釋曰　亦、三惑に由るが故に、第二の緣生を了別せず。若し因果と及び事とを增減せば、是を第二の緣生を了別せずと名く。因を增すとは、無明等の因を除き、不平等の因を立てゝ、因と爲すなり。因を減ずとは、行等は無因なりと謂ふ。果を增すとは、行等は本より自ら體有つて、後、無明を緣じて生ずと謂ふ。果を減ずとは行等は無明の果と爲ること無しと謂ふ。事を增すとは、無明等は行等を生じ、唯だ衆緣の和合を離れて、無明等の別事有つて、能く行等の別事を作すと謂ひ、事を減ずとは、無明等は功能有りて能く行等の事を生ずること無しと執す。無明等には動も無く、作も無きが故なり。若し此の三處の增減を離るれば、是を第二の緣生を分別すと名く。若し此の如く分別すること能はざれば、卽ち緣生に迷つて增益の執を起し、謂ゆる我を作者なり受者なりとの執を執せん。先づ[五一]本識に約して我執を起し、後に因果に約して、作者なり受者なりとの執を起す。若し我を作因となさば、名けて作者と爲し、若し[五二]我を受報とせば、名けて受者となす。

論曰　譬へば、衆多の生盲の人の、曾て象を見ざるものに。

釋曰　「衆多」とは[五三]一闡提と及び外道とを譬へ、「生盲の人」とは阿梨耶識の體性と因果とに迷ふ三種の無明に譬へ。「曾て見ず」とは、了別すること能はざるに譬へ、「象」とは阿梨耶識に譬ふ。生盲の人は一期の報の中に於て、曾て色を見ず、一闡提と及び外道とは、無始の生死より來（このかた）、未だ曾て阿梨耶識の三相を了別せず。

論曰　有る人、之を示し、彼をして觸證せしむるが如し。

釋曰　「有る人」とは邪師に譬へ、「之を示す」とは、爲めに邪法を說くことを譬へ、「彼をして觸證せしむ」とは、彼をして不正なる思惟と及び偏見とを生ぜしむるに譬ふ。

【五一】本識は因として諸法を生ずといふより作者の執を生ず。

【五二】本識は果として執取の用ある故に受者の執を生ず。

【五三】一闡提 icchāntika は斷善根と譯し、無佛性の有情をいふ。

時は、自性より智を起し。智より我慢を起し。乃至、五大より十一根を起す。若し自性無ければ、壞する時は、應に盡きて、更に起るの義無かるべく。若し更に起るに本無ければ、次第に生ずるの義無からん。

論曰　或は宿作なりと執す。

釋曰　[47]路柯耶胝柯の說なり。世間一切の因は、唯だ宿作有るのみ。現在の功力は、果を感ずること能はざるが故に、現在は因に非ず。世間に二人同じく一主に事ふるに、倶に功力有るも、一は禮遇せられ、一は則ち爾らざるが如し。故に知る、唯だ宿作のみに由つて現在の功力に關はらざることを。

論曰　或は[48]自在の變化なりと執す。

釋曰　前きの所立の如きは、皆、因を成ぜず。唯だ一因有るのみ、名けて自在と爲す。我等をして善惡を生じ、生死に輪轉せしめ、後、厭離を起し、解脫を得んことを求めしむ。自在因論は智慧を生じ、諸の繫縛を解きて、自在の體に會す。

論曰　或は八の自在我なりと執す。

釋曰　[49]鞞世師、[50]那耶修摩の如く、我を執する者は何をか相とし何をか德となすや。智性を相と爲し、八自在を德と爲す。火の熱を以つて相と爲すが如く、我も亦此の如し。若し獨存し及び雜住するも、智性は改まること無きが故に、智性を以つて相と爲す。八自在とは、一に細に於て最も細なり、二に大に於て最も大なり、三に遍至、四に意に隨ふ、五に繫屬無し、六に變化、七に常にして變異無し、八に清淨にして憂無しとなり。

論曰　或は無因なりと執す。

釋曰　世間の果は因の一分なることを了別せざるに由つて、以て例して餘果も皆無因なりと謂ふ。

【四七】　路柯耶胝柯 lokāyatika 譯して順世外道といふ。

【四八】　自在とは自在天のこと。

【四九】　鞞世師 vaiśeṣika は譯して勝論といひ、六派哲學の一なり。

【五〇】　那耶修摩は尼乾子外道の別名。

此の差別は十二緣生を出でざれば、卽ち十二緣生を以て、差別の因と爲す。故に、十二緣生を說いて愛と非愛とを分別す。

論曰 [四一]若し人、阿梨耶識に於て、第一緣生に迷はゞ。

釋曰 迷ひに、三惑有り、一には無知、二には疑知、三には顚倒知なり。若し此の三惑を起さば、則ち二種の見を生じて、或は不平等の因を執し、或は無因を執せん。不平等の因を執すとは。

論曰 或は自性は是れ生死の因なりと執す。

釋曰 [四二]僧佉は五義を引いて、自性は是れ實有なることを證立す。一には、別は必ず總有るに由つて、自性有るを知る。世間の中に於て、若し是れ別物ならば、決定して總有り。譬へば一斤の金を以つて、用ひて鐶釧等を作るが如し。鐶釧等の別に數量有れば、則ち金の總にも亦數量有ることを知る。變異の別に、數量有ることを見るに由つて、則ち自性の總にも亦數量有ることを知るなり。二には、末は本に似るに由つて、自性有ることを知る。譬へば、一斤の白檀を分つて、多片となすが如し。片々の中の香は、皆、本に似る。變異の別の中に、悉く三德を有す。謂ゆる憂と喜と闇となり。則ち自性の總の中にも、亦三德有ることを知るべし。三には、事に能有るに由つて、自性有ることを知る。譬へば鍜師は鍜の中に於て、能有るが故に、能く器を作るが如し。自性は變異の中に於て、體有るに由るが故に、能く萬物を作る。此の能に、若し依なければ、能は則ち成ぜず。四には、因果の差別に由つて、自性有ることを知る。譬へば、土聚を因と爲し、瓶を以て果と爲すが如く、此の如く自性を以て因と爲し、變異を果と爲す。五には、三有に分別無きに由るが故に、自性有ることを知る。若し世間、壞するの時は、[四三]十一根は、壞變して[四四]五大と爲る。五大は、壞變して[四五]五唯量を成じ。五唯量は壞變して我慢を成じ。我慢は壞變して[四六]智を成じ。智は、壞變して自性を成ずるが故に、三有は自性に於て、復分別すること無し。若し世間、起るの

【四一】以下は二種の緣生に對する妄計を列擧す。

【四二】僧佉。sāṃkhya は譯して數論といふ、六派哲學の一なり。

【四三】十一根とは五知根（眼、耳、鼻、舌、皮）と五作根（手、足、舌、生殖器、排泄器）と及び心根とをいふ。

【四四】五大とは地・水・火・風・空をいふ。

【四五】五唯量とは色・聲・香・味・觸をいふ。

【四六】智は或は覺ともいふ。

是の故に諸法は此の識に由つて、悉く同一性なり。二に分別愛非愛とは、

論曰　復、十二分の緣生有り、是を分別愛非愛と名く。

釋曰　三世に約して、十二分を立つ。因を顯はし果を顯はし、及び因果を顯はさんが爲の故に、[三五]根本の八分を離して、十二分と爲す。根本の八分は三法を出でず。謂ゆる煩惱と業と果報となり。煩惱とは、譬へば種子より芽等を生ずるが如く、煩惱より煩惱を生じ、煩惱より業果を生じ、煩惱より果報を生ず。又、龍の池水に在りて、恒に竭せざるが如く、煩惱若し在れば生ずること續いて窮まる無し。又樹の根を未だ拔かざれば、時至れば則ち生ずるが如く、未だ煩惱の根を除かざれば、六道の報は、恒に起る。業とは譬へば米に糠有れば、則ち能く芽を生ずるが如く、業若し有流なれば、則ち能く報を感ず。又、[三六]烏沙絺の如し。謂く芭蕉、竹等は果熟すれば則ち死す。業も若し已に熟すれば、更に果を生ぜず。又樹花は、是れ果を生ずる近因なるが如し。業も亦此の如く、近く能く果を生ず。果報とは、譬へば飲食を成熟するが如し。飲食、若し已に成熟すれば、但だ應に受用すべきのみにして、更に成熟せず。果報、若し熟すれば、更に後の果報を結ばず。若し重ねて果報を結ばゞ、則ち解脫することを得ざるが故なり。十二の緣生は此の三を出でず。此の十二分を、能く分別すれば、[三七]二種の生身有りて無窮に差別す。彼の緣生に由るが故なり。何を以ての故に。此の無明に、三品の業の緣生有り。謂く[三八]福と[三九]非福と[四〇]不動行となり。此の行に、三品有るに由り、是の故に識等は或は生ずるに福行に隨ひ、或は生ずるに非福行に隨ひ、或は生ずるに不動行に隨ふ。此の三品の中、福と及び不動とは、是れ可愛にして、非福は是れ不可愛なり。故に分別愛非愛と言ふ。

論曰　善惡の道に於て、愛非愛を分別するに、種々の異因を生ずるが故なり。

釋曰　善道は是れ愛にして、惡道は是れ非愛なり。此の善惡道の中に、無量種の差別の分別有り。

【三五】根本の八分とは十二因緣の中、三因五果をいふか。

【三六】烏沙絺とは原音不明、略疏に芭蕉の梵名かと推定せり。

【三七】二種の生身とは愛非愛の二身をいふ。

【三八】福行は欲界人天の果を感ずる業。

【三九】非福行は三惡趣の因業。

【四〇】不動行は禪定にして色無色界の果を引く業なり。

を以て因と爲すやと。此の義は異ること無し。何を以ての故に。彼の人は[三二]果に於て因を說くも、大乘は[三三]果に於て果を說けばなり。

緣生章第六

論曰　此の緣生は大乘に於て、最も微細甚深なり。

釋曰　大乘と小乘との異を顯はさんと欲するなり。大乘は具さに[三四]三種の緣生を有するも、小乘は但だ二種を有するのみ。大乘の第一の緣生は、小乘に於ては、則ち無し。何の故に大乘に有りて、小乘に無きや。此の第一の緣生は最も微細甚深なるが故に餘乘に於ては說かず。凡夫の智は、通達すること能はざるが故に微細なり。阿羅漢　獨覺の智も、其の底を窮むること能はざるが故に甚深なり。此の緣生に幾種有りや。若し廣說すれば三種有るも、若し略說すれば二種有り。何をか二と爲すや。

論曰　若し略說すれば、二種の緣生有りとは、一には分別自性緣生、二には分別愛非愛なり。

釋曰　此の二名に由つて、此の二種の緣生の差別は、已に顯はる。

論曰　阿棃耶識に依止して、諸法、生起す。是を分別自性緣生と名く。

釋曰　諸法の種子に由り、阿梨耶識に依つて諸法の生ぜんと欲する時、外緣若し具はらば、阿梨耶識に依つて則ち更に生ずることを得。諸法の生ずるは、阿梨耶識を以て通因と爲す。是を分別自性と名く。何を以ての故に。種々の諸法の體性の生起するは、分別の差別にして、同じく阿梨耶識を以て因と爲すが故なり。若し諸法の緣生の自性を分別すれば、此れ唯だ阿梨耶識なるのみ。

論曰　種々の法の因緣と自性とを分別するに由るが故に。

釋曰　三界に遍ずる諸法の品類も、若し生起の因を分別すれば、唯だ是れ一識のみなり。若し諸法の性を分別するも卽ち是れ此の識なり。若し諸法の差別を分別すれば、皆、此の識より生ず。

【三二】果に於て因を說くとは種子は熏習の果なり之を異熟の因となすも、有記といふは熏習の因についていふ。
【三三】果に於て果を說くとは熏習の果としての種子を無記となすの意。
【三四】三種の緣生とは分別自性緣生、分別愛非愛緣生、受用緣生なり。

るや。

釋曰　此の難は、俱有因を難ぜんと欲すれば則ち難を成せず。果と因と一時ならずと執するを以ての故なり。若し[二八]果報の因を難ずれば、此の難を成ずべし。果報の因は必ず是れ[二九]有記にして果報の果は必ず因と同時ならざればなり。

論曰　譬へば多縷にて結ばれたる衣は、衣に多色無きも、若し染器に入るれば、後に衣上に於て、種々の相貌方に顯現することを得るが如し。

釋曰　此の譬を引いて果報の因果を明かさんと欲すれば、皆成立することを得。人の衣上に於て諸の相貌を作さんと欲するに、先づ縷を以て衣を結び、此の衣の結ばれし時に當つては貌に異無きも、染器に入れて後、若し先の結びを解かば、則ち多種の相有りて現ずるが如し。

論曰　此の如く阿梨耶識は、種々の諸法に熏せらる。

釋曰　阿梨耶識の、善、惡、不動の三業に熏せらるることは、衣の結ばるるが如し。

論曰　熏ずる時には一性にして、多種有ること無し。

釋曰　熏する時に自ら三種有り、一には方便時。二には正作時。三には作後時なり。復、三種有り。一には自ら作す時。二には他をして作さしむる時。三には隨喜して作す時なり。種子は阿梨耶識と同じく無記性にして、此の識を離れては各々の異體無し。

論曰　若し果を生じ、染器現前すれば、則ち不可數の種種の相貌有りて、阿梨耶識に於て顯現す。

釋曰　若し衆緣、已に具はれば、衣を正しく染器に入るるが如く、此の如く、種子と本識とは、[三〇]現生後の三時に於て、隨つて一時に現前すれば、則ち不可數の種の果報の相貌有りて、此の識に於て顯現す。是の故に熏ずる時には、復、異ならずと雖も、果報の熟する時には、則ち無量の差別有り。譬へば染衣の如し。若し汝の意に謂へらく、果報は定んで有記を以て因と爲す、[三一]云何が無記

【二八】果報の因とは異熟因のこと。

【二九】有記とは善若くは惡なるをいふ。

【三〇】現生後とは順現業、順生業、順後業をいふ、即ち現生に熟する業と、次生に熟する業と其の後の生に熟する業となり。

【三一】異熟果の因は必ず善惡なるべし、何ぞ本識に順じて無記なる種子を因と爲すやと難ずるの意なり。

阿梨耶識と彼の一切法とは[二六]共有の生因と爲る。應に此の如きの義を知るべし。何を以ての故に。此の因、現在に住して、未だ壞せざるに、果の生ずることも亦見るべし。

論曰　又蘆束の一時に相ひ依持するが故に住立することを得るが如し。

釋曰　二の蘆束の、一々の刹那の中に、互に相ひ依り、互に相ひ持するが如し。

論曰　應に知るべし、本識と能熏習との更互に因と爲る、其の義も亦爾なり。識は染汚法の因と爲るが如く、染汚法は識の因と爲る。

釋曰　此の阿梨耶識を種子の生因と爲す。若し此の識無ければ、三業の生滅は依るべき所無けん。體の謝滅するが如く、功能も亦爾なり。故に此の識に由つて、諸法の體、生じ、功能も亦立す。是の故に本識を彼の生因と爲す。彼の法も亦爾なり。若し彼の法は此の識無くして起りて、現在に在ることは、道理有ること無し。轉じて後は前に異る。此の變異は是れ彼の法の果なればなり。

論曰　何を以ての故に。

釋曰　何の故に、別に餘法相ひ對して、互に因果と爲ることを說かずして、唯だ識と染汚法と互に因果と爲ることのみを說くや。或は是れ外道か、或は是れ二乘ならば、此の如き問を作さん。

論曰　此の二法を離れては、異因得べからざるが故なり。

釋曰　世間の中に於て、分別と依他との二法を離るれば、更に餘法無し。阿梨耶識は是れ依他性にして、餘の一切法は是れ分別性なり。此の二法は一切法を攝す、皆、三界を盡くして唯だ識有るのみなるが故なり。是の故に此の二法を離れては、異因得べからず。若し二法は共有因と爲さば是の[二七]功力果は因の品類に隨ふ、其の品類も亦應に爾かるべし。

因果別不別章　第五

論曰　云何か、熏習は異ならず、多種ならざるに、而も能く異有り多種なる諸法の爲めに生因と作

【二六】共有の生因とは俱有因として同時に更互に生する因となるの義。

【二七】功力果とは新譯には士用果といふ。

釋曰　若し不異ならば、先に熏習の未だ生ぜざる時の如きは、此の識は但だ是れ果報なるのみにして、他の作因と爲ること能はず。若し熏習の生ずる時は、此の識も亦應に此くの如くして生じ、本と異なること無かるべし。既に此の義無きが故に不異に非ず。此の義無しとは。

論曰　熏習の生ずる時、功能の勝異有るを、說いて一切種子と名く。

釋曰　此の識は、先に未だ功能有らず。熏習生じて、後、方に功能有るが故に前に異なる。前識は但だ是れ果報なるのみにして、一切種子と名くることを得ず。後識は能く他の生因と爲るを說いて一切種子と名く。前識は但だ自の相續を生ずるのみなるも、後識は能く自他の相續を生ずるが故に前に勝る。譬へば麥の種子は、自の芽を生ずるに於て、功能有るが故に、麥は是れ芽の種子なりと說くも、麥、若し陳久なるか、或は火の爲めに損せらるれば、則ち功能を失す。麥の相は異ならざるも、功能壞するを以ての故に種子と名けざるが如し。此の識も亦爾なり。若し一切法を生ずる功能有らば、功能と相應するに由つて、說いて一切種子と名くるも、此の功能、若し謝して餘無ければ、但だ說いて果報識と名くるのみ。一切種子には非ず。是の故に不異に非ず。

更互爲因果章　第四

論曰　云何んが、阿梨耶識は染汚と一時に更互に因と爲るや。

釋曰　阿梨耶識は、或は一切法の因と爲り、或は一切法の果と爲る。一切法の阿梨耶識に於けるも亦爾なり。此の如きの義は、如何んが知るべきや。此の義を顯はさんが爲の故に、應に譬を說くべし。

論曰　譬へば燈光と燈炷とは生じ、及び燒然して、一時に更互に因と爲るが如し。

釋曰　炷體を依止と作すに由つて、能く光焰を生ずるが故に、炷は是れ光焰の生ずる因なり。光焰は卽ち此れ生ずる刹那の中に、能く炷を燒然すれば、光焰は卽ち炷の燒然する因と爲る。此の

論曰　此の染汚の種子と阿梨耶識との同異云何ん。

釋曰　是の不淨品の法の種子は、阿梨耶識の中に在りて、別體有りと爲すが故に異り、別體無しと爲すが故に異ならざるなり。若し爾らば、何の失有りや。若し異ならば、諸の種子は應に分々に差別有るべく、阿梨耶識も亦應に是の如く無量の分を成すべし。若し種子は、自ら異り本識は異らされば、刹那刹那に滅するの義は、則ち成ぜず。若し此の識と種子と異らば、識の中に於て、善惡の二業の熏習は、業に隨つて或は善、或は惡に、種子を生起せん(而かも)汝は、種子は是れ無記なりと許す。云何んか異なることを得ん。此の識と種子と若し異ならざれば、彼は多にして此は一なり。云何んか異ならざる。此の難は二種の過失を顯はす。彼の難の二の過失を離れんが爲の故に、須く不一不異の義を明かすべし。

論曰　別の物體に由るが故に異なるにあらず。此の如く和合して分別し難しと雖も、而も異ならざるに非ず。

釋曰　此の阿梨耶識と種子とは、此の如く共に生して、能依所依有りと雖も、別體なるに由るが故に異なるにあらず。眼根と及び眼識とは、眼根は色を以て體と爲し、眼識は無色を以て體と爲すが如し。此の識と種子とは此の異體無きが故に異なりと說くべからず。旣に異なりと說くべからず、何ぞ一と說かざるや。此の如く和合して、分別し難しと雖も、而も[二五]能依は是れ假にして體無く、所依は是れ實にして體有り、假實和合して、識相を分別すべきこと難し、二體無きを以ての故なり。譬へば苦集二諦の如し。苦諦は實に有にして果報の五陰を體と爲し、集諦は是れ假名にして、苦諦に依て顯はるることを得、別體有ること無きも、假りに說いて因と爲す。五陰は分別し難しと雖も、不異なるには非ず。識と種子とも、亦爾なり。何を以ての故に。

論曰　阿梨耶識は此の如くして生ず。

【二五】能依とは種子、所依とは本識なり。

釋曰　同じく生滅する義は前の如し。「彼」とは、欲等の行なり。「數々生ず」とは、或は一生に約し、或は一時に約し先に未だ熏習有らざるに、今、變異して彼の生因と爲る。能く心を變異する、是を熏習と名く。不淨品の中に於ては、是の一類を煩惱濁と謂ふ。

論曰　若し多聞の人ならば、多聞習氣有り。

釋曰　多聞の人は、或は思位に在るも、或は修位に在るも、多聞習氣有り。此に何の相有りや。

論曰　數（しばしば）所聞を思ひ、心と共に生滅す。

釋曰　前に聞く所の名句味の如きを、多くの道理を引いて恆に思量す。是の思量の中に正思と意識とは共に生じ共に滅す。

論曰　彼れ數々、生ずれば、心の明了の生因と爲る。

釋曰　是の所聞を正思することとは、意識の中に於て數々生滅し、意識は聞中に於て旣に明かに了して、阿梨耶識に熏習す。此の意識、若し滅するも、後に更に起らんと欲して、次第に轉勝するは、此の熏習に由つて成ずるなり。是の故に聰明の事、失せず。

論曰　此の熏習に由つて堅住を得るが故に。

釋曰　思慧に於て堅きを得、修慧に於て住することを得るなり。

論曰　故に此の人を說いて、能く法を持すと爲す。

釋曰　此の熏習に由つて、能く忘失せず。若し人、別に餘事を緣ずるも、亦說いて能く法を持する人と名くることを得。

論曰　阿梨耶識に於て、應に此の如きの道理を知るべし。

釋曰　若し善惡の熏習し生起する道理を、應に此の如く知るべし。

ぜん爲がに、後に轉じて因と成る、是を因相と名く。

論曰　果相を立つとは、此の識の種々の不淨品の法の無始よりの習氣に因つて、方に乃ち生ずることを得、是を果相と名づく。

釋曰　[二二]三種の不淨品の法の熏習に依止して、後時に此の識は生ずることを得。無始の熏習を攝藏するが爲の故に、是を果相と名く。

熏習章第二

論曰　何の法をか習氣と名くるや。此の習氣の名は、何の義を顯はさんと欲するや。

釋曰　此の二問に何の異り有りや。前は名の目くる所の義を問ひ、後は義の得る所の名を問ふ。

論曰　此の法は彼と相應して共に生じ共に滅し、後に變じて彼の生する因と爲る。此れ卽ち所顯の義なり。譬へば麻に於て花を以て熏習するが如く、麻と花とは同時に生滅す。彼、數々生じて麻香の生ずる因と爲る。

釋曰　「此」とは能く熏習を受くる法を謂ひ、「彼」とは能く熏習する法を謂ふ。「共に」とは一時一處に同生同滅するを謂ふ。若し法に生滅有らば、則ち能熏、所熏有り。若し[二三]此に異ならば、則ち然らず。能く熏する者は相續すること短く、熏せられたる者は相續すること長し。是の故に能熏は、已に謝するも、所熏は、恒に在りて、後變じて彼の生する因と爲る。[二四]變とは卽ち彼に當る。彼の生ずる功能なるが如く此も亦、復爾なり。此れ卽ち所顯の義とは、義は卽ち名の所目にして、名は卽ち義の所成なり。

論曰　若し人、欲等の行有らば、欲等の習氣有り。

釋曰　數起る煩惱は、是を行と名く。此の行に習氣有り。習氣とは何の相ぞ。

論曰　是の心は、欲等と同じく生じ同じく滅す。彼れ、數々生じて、心變異して生ずる因と爲る、

[二二] 三種とは名言熏習等の三種の熏習をいふ。後に本論に出づ。

[二三] 此に異るとは法に生滅なければ熏習有ること無しとの意。

[二四] 變とは變異の義にして生果の作用をいふ。

勝と爲す。此の品の中には、諸名を總攝し、道理を引いて本識を顯はすが故に衆名品と稱す。

相品第二

相章第一

釋曰　此の品に七章有り、一には相、二には熏習、三には不一異、四には更互爲因果、五には因果別不別、六には緣生、七には四緣なり。

論曰　復次に、此の識の相を成立するは、云何が見るべきや。

釋曰　已に衆名に依つて、阿梨耶識を成立せり。此の衆名に由るも、阿梨耶識の體相は了別すべからず。若し體相を了別せざれば、此の識は、則ち解すべきこと難し。今、此の識に通達せしめんと欲するが故に、次に應に其の體相を示すべし。

論曰　此の相は略して說くに三種有り、一には自相を立て、二には因相を立て、三には果相を立つ。自相を立つとは、一切の不淨品の法の習氣に依つて、彼れ生ずることを得んが爲に、種子を攝持する器と作る。是を自相と名く。

釋曰　決定藏論の中には、本識に八相有ることを明かせり。彼の廣說に異なるが故に、「略して說くに三種あり」と言ふ。[一九]自相の義とは云何。一切の不淨品の法の熏習に依つて、此の識は最勝にして、彼れ生ずることを得んが爲の[二〇]功德なり。此の功德の相は復云何。謂く種子を攝持するなり。云何が攝持するや。熏習して[二一]一と成るが故に「攝持す」と言ふ。

論曰　因相を立つとは、此れ一切種子の識なり。不淨品の法を生ぜんが爲に、恒に起つて因と爲る。是を因相と名く。

釋曰　八識の中、隨つて一識の不淨品の法に熏習せられて、已に功德の勝異を得れば、彼の法を生

【一九】　自相とは諸識の熏習を受くる自體に名く。
【二〇】　功能とは生果の功能にして種子のこと。
【二一】　一と成るとは熏習せられたる諸法の種子と本識とは合して一體となるの意。

の我愛に由つて我を滅することを求めず、此の我を安樂ならしめんと欲するが故に、外具を滅離せんことを求むるなり。

論曰　第四定より以上に受生する衆生は、復、有欲の樂受を樂はずと雖も、阿梨耶識の中に於て、是の自我の愛は隨逐して離れず。

釋曰　前に已に衆生の惡道の中に於て、止だ苦を離るることを求めて、我心を捨てんと欲すること無きを明かせり。此の中には、衆生は捨受の處に在りて、樂受の愛樂すべきもの無く。樂受を厭惡することは、惡道の人の苦受を厭惡するが如くなることを明かす。因緣無くして、阿梨耶識の中に於て、我愛を捨てんと欲するが故に、阿梨耶識は是れ愛著の處なり。

論曰　復、次に正法の內の人は、復、無我を願樂し、身見に違逆すと雖も、阿梨耶識の中に於て自の我愛有り。

釋曰　[一四]前の復次は佛法外の人に約し、[一五]此の復次は佛法內の人に約す。自ら三品有り、一には正思に在るもの、二には正修に在るもの、三には有學に在るものなり。此の三品の人の(中)二人は我見を伏し、一人は我見を滅す。何を以ての故に。前の二人は無我を比知し、後の一人は無我を證知するが故なり。「身見に違逆す」と言ふは、阿梨耶識の中に於て、長時に數我愛を習すれば、復身見に違逆すと雖も、本識の中に於て、我愛猶ほ恒に隨逐す。是の故に身見は愛著の處に非れば、應に阿梨耶と名くべからず。

論曰　[一六]阿梨耶の名を以て此の識を安立するは、則ち最勝と爲す。是の名は阿梨耶の別名をも成立すればなり。

釋曰　此の愛著處の名に由つて[一七]諸師の執を比度すれば名義相ひ稱はざるも、若し此の名を取つて[一八]第一を比度すれば名義相ひ稱ふ。故に彼の立つる所の名を引いて、本識を成立すれば則ち最

[一四] 前の復次とは當卷の最初に小乘異計を叙する所に在り、故に此に佛法外の人とは小乘の人を指すと見るべし。

[一五] 此の段は大乘の修行者に約して說くの意。

[一六] 前來の所說を結ぶ。

[一七] 諸師の說は名と義と相應せずとなり。

[一八] 第一とは此の章の劈頭に阿梨耶の名を出すが故に之を第一といふ。

釋曰　若し樂は三界に遍せず、若し樂を受くるの人にして、此の樂を離れんことを求むれば、此の樂を立てゝ、愛著處と爲すことは則ち道理に稱はず。

論曰　若し是れ身見なりといはば、正法の內の人は無我を信樂して其の所愛に非れば、中に於て喜樂を生せず。

釋曰　若し身見、是れ愛著處なりと說かば、是も亦然らず。何を以ての故に。佛法の內の人は、或は聞慧に約し、或は思修の慧に約して、無我を信じ、及び無我を樂ひ、發願して道を修するは我見を滅せんが爲なり。是の故に我見は其の所愛に非ず。無生智を得んことを求むるに由つて、我見と及び我愛とをして未來に更に生ぜざらしむ。此の故に中に於て喜樂を生ぜず。此の身見は一分の衆生の愛著する所と爲るも、一分の衆生は愛著せざるが故に、身見を愛著處と爲すと說くべからず。

論曰　此の阿梨耶識を衆生は心に執して自の內我と爲さば、

釋曰　六道の衆生は執著の心を起して謂へらく、此の法は是れ我が眞の內我なりと。此の內我は自在清淨にして能證を相と爲すも、外具に由るが故に或は樂、或は苦なり。是の人若し此の如きの我見を起せば、

論曰　若し一向苦受道の中に生せば、其は苦陰の永く滅して起らざらんことを願ふ。

釋曰　此の人、若し惡業の因緣有るが故に一向苦受の惡道に墮すれば、其れ我は清淨にして變異無きも、[一三]外具に由つて但だ證變異し及び染汚すと計して、無有愛を起し、我と外具とは永絕して相ひ離るることを願はん。何を以ての故に。

論曰　阿梨耶識は我愛に縛せらるるが故に曾て自我を滅除せんことを願樂せず。

釋曰　此の識を了別せざるに由つて、此の識を緣じて我執を起す。我執に由つて我愛を起し、此

【一三】外具とは內我の外部的作具の意にして所謂身心をいふ。

時は樂受を生ずるも、此の樂受は惡趣に於ては〔一〇〕果報果には非ず。但だ〔一一〕相似果と名くるのみ。唯だ苦受のみを以て果報果と爲す。是の罪人は惡趣に處して、苦報受くるが故に、「彼に於て生を受くれば」と言ふ。

論曰　此の取陰は最も〔一二〕惡逆すべし。

釋曰　生時と住時とには、忍ぶべからざるが故に惡むべしと言ふ。此の中に於て、恒に貪欲を滅離せんとの意を起して謂へらく、我何時かは當に死すべし、何時かは當に此の取陰を捨離すべしと。故に名けて逆と爲す。

論曰　此の取陰の中には、一向に愛すべきに非ず。衆生の喜び樂ふといふは道理に應ぜず。

釋曰　此の惡道の陰は一向に是れ苦惱の資糧なり。中に於て云何んが愛を生ずべき。故に喜び樂ふといふは理に乖く。(故に)若し取陰を說いて阿梨耶と名けば此の義成ぜす。

論曰　何を以ての故に。彼の中の衆生は、恒に取陰の斷絕して生ぜざらんことを願へばなり。

釋曰　彼の中の衆生は此の苦に因つて苦しみ、現在の陰を滅せんことを願樂し、後陰をして更に生ぜざらしめんことを願樂す。

論曰　若し是れ樂受と欲と相應すといはゞ、第四定より乃し上界に至るまで、皆此の受無し。

釋曰、此の受は三界に遍ぜず。但だ生死の一分の中にのみ此の受有り。

論曰　若し人、已に此の受を得ば、上界を得んことを求むるに由つて、則ち厭惡を生ず。

釋曰　若し人、已に樂處に生し已つて、有樂の定を得るも、此の樂は麤動にして是れ放逸の處、成し難く壞し易きを見れば、厭怖の心を起して上界の寂靜を得んことを求め、則ち此の樂を厭惡し、樂處に於て離欲心を生じ、不苦不樂の中に於て喜樂の心を生ず。

論曰　是の故に衆生は、中に於て喜樂すといふは道理に稱はず。

〔一〇〕果報果とは果報としての果體の義にして、新譯には異熟果といふ。
〔一一〕相似果とは新譯に等流果といふ。
〔一二〕惡逆とは憎惡し、反逆するの意。

論曰　小乘の教と及び行とに隨ふに由つて、是の師の所立の義は道理に中らず。

釋曰　諸師は小乘教に依り、及び阿梨耶識を離れて別名を立つ。若し小乘の道に約して推度すれば、此の義も亦中らず。小乘の理は自の[七]悉檀に違する所なるが故なり。

論曰　[八]若し人有つて、阿梨耶識に迷はずして、小乘の名に約して此の識を成立するは、其の義最勝なり。

釋曰　迷はざるの人は是れ菩薩なり。阿含と及び行とに由つて、諸佛は人の根性を觀じ、根性に依つて阿含を立つ。下品の者に於ては、祕密の說有るも、上品の者に於ては、祕密の說無し。是の故に具さに諸識を明かす。此の阿含に由つて、菩薩は此の識に迷はず。行に由るとは、若し人、修行して能く欲界の惑を破すれば、則ち自身は色惑の爲に縛せらるることを見る、乃至無色界も亦爾なり。若し修行して無色界を出づれば、身は縛せられて阿梨耶識の中に在るを見る。此の縛を滅せんが爲の故に十地を修す。諸の菩薩は甚深の行に由るが故に、此の識に迷はず。若し人、能く此の識を了別すれば、小乘の名を以て此の識に目くるも、名義相ひ稱ふが故に、名義を成立するを則ち最勝と爲す。

論曰　云何んが最勝なるや。

釋曰　小乘の義の過失を顯示するも、大乘の義の中に於ては則ち過失無し。是の故に大乘の安立は最勝なり。小乘の過失とは、

論曰　[九]若し取陰を執して阿梨耶と名くれば、惡趣に於て隨つて一道の中、一向に苦受の處に、彼に於て生を受くれば。

釋曰　惡趣とは卽ち四惡趣なり。四惡趣の中に於て、隨つて一道に入る。此の道は定んで是れ純惡業の果報なり。餘受の相ひ雜ること無きが故に、一向に苦受の處と名く。彼の中に於て、有る

【七】悉檀 siddhānta は成就せる義卽ち宗義の意。
【八】以下第四に大乘の安立する名義の最勝なることを顯はす。
【九】以下前說の小乘の異計を擧げ一一理を以て之を破斥す。

釋曰　此の愛著の境は、其の義同じからず。或は執すらく是れ五取陰なり、取は是れ貪愛の別名にして、貪愛を縁とする所の自の五陰を名けて取陰と爲す。此の取陰は是れ衆生の愛著の處なるが故に、說いて阿梨耶と名くと。

論曰　復、餘師有り執すらく、樂受と欲と相應するを、說いて阿梨耶と名くと。

釋曰　此の五陰は愛著の處に非ず。若し樂受無く、樂受に於て若し顚倒無ければ、云何んか五陰に於て愛著を生ぜん。是の故に、樂受の中に於て、欲の顚倒心未だ滅せざるに由るが故に、此の樂受は是れ愛著の處なり。五陰と樂受と相應するが故に五取陰を說いて愛著の處と爲す。是の故に樂受を正しく愛著の處と爲す。

論曰　復、餘師有り、執すらく、身見を說いて阿梨耶と名くと。

釋曰　若し人、樂受は是れ愛著處なりと說かば、是の義然らず。此の受は能く自我を安樂にするに由りて、自我を愛するが故に樂受を愛す。譬へば人の壽を愛するが故に、壽の資糧を愛するが如く、此の如く我を愛するが故に我の資糧を愛するなり。

論曰　[六]此の如き等の諸師の、

釋曰　餘の執を攝せんか爲なり。有は壽命は是れ愛著處なりと說き、有は道は是れ愛著處なりと說き、有は六塵は是れ愛著處なりと說き、有は見と及び塵とは是れ愛著處なりと說く。

論曰　阿梨耶に迷ふは、阿含及び修得に由る。是の故に此の如きの執を作す。

釋曰　此の如く小乘の中の諸師は、阿梨耶識を了別せず。云何か了別せざる。了別せざるに二種有り、一は敎に由り、二は行に由る。敎とは謂く小乘の阿含是なり、阿含は理の如く此の識を決判せざるが故に、阿含に依つて此の識に迷ふ。行とは謂く麁淺の道なり。道理の、能く此の識の義を證すること無きが故に、行に由るも亦此の識に迷ふなり。

【六】此の如き等といふは次の四執を等取し攝すとの意。

論曰　此の名に由つて、小乘の中に是の阿梨耶識は已に王路を成す。

釋曰　此の衆名に由つて、廣く本識を顯はす。是の故に見易きこと猶ほ王路の如きなり。王路と言ふは、三義有り。一には直にして岐無し。二には廣平にして熟す。三には光明障り無し。本識も亦爾なり。直にして岐無しとは、定の疑ひ無きに譬へ、廣平にして熟すとは、大小乘倶に此の義を弘むるに譬へ、光明障り無しとは、無量の道理を引いて以て此の識を證するに譬ふ。故に王路に譬ふるなり。

論曰　[五]復、餘師有り執すらく、心と意と識と、此の三は但だ名異るのみにして義は同じと。是の義、然からず。

釋曰　此の義は小乘に約して、還つて小乘を反質す。小乘に云く、阿梨耶識と阿陀那識とは、自らの僻執に由つて、同義異名の中に於て立てて異義となすと。此の説は然からず。何を以ての故に。

論曰　意と識とは已に義の異るを見る。當に知るべし、心の義にも亦應に異有るべし。

釋曰　小乘の中に意と識とを立つるに、名義倶に異れり。能く了別するを識と名け、若し了別、已に謝して能く後識の生ずる方便と爲るを名けて意と爲すが故に。識は了別を以て義と爲し、意は生ずる方便を以て義と爲す。小乘の中の二名に二義有るか如く、本識には體有りて名無し。故に知る、心の名は應に本識に目くべし。此の義、違ふべからず。

論曰　復、餘師有り執すらく、是の如來の說く、世間に阿梨耶を喜樂すとは、

釋曰　小乘の諸師は、阿梨耶の名に約して、執を起すこと同じからず。阿梨耶とは何の義を顯はさんと欲するや。愛著する境界を阿梨耶と名く。

論曰　前に說く所の如く、此の中には五取陰を說いて阿梨耶と名くる有り。

【五】以下第三に異計を斥く。

卷の第二

釋依止勝相衆名品の二

衆名章の餘

論曰 復、次に[一]摩訶僧祇部の阿含の中に、根本識なる別名に由つて、此の識を顯現せり。譬へば樹の根に依るが如しと。

釋曰 此の識は一切の識の因となるが故に、是れ諸識の根本なり。譬へば樹根の如し。芽節枝葉等の依止する所を說いて樹根と名く。若し此の根を離るれば、芽等は成ぜず。此の識の餘識の根本と爲ることも、亦爾なり。

論曰 [二]彌沙塞部も亦、別名を以て此の識を說けり、謂く窮生死陰なり。何を以ての故に。或は色と及び心とは有る時は相續と斷とを見るも、此の心中の彼の種子は斷絶有ること無し。

釋曰 云何んか、此の識を說いて、窮生死陰と爲すや。生死陰は色心を出でず。色は有る時は有るも、諸定の中には相續斷絶す、無色界の如し。心も亦、有る時には有るも、諸定の中に相續斷絶す、無想天等の如し。阿梨耶識の中に於ては、色心の種子は斷絶有ること無し。何を以ての故に。此の熏習せる種子は、窮生死陰に於ては恒に在りて盡きざるが故に。後時の色心は此に因つて還生し、[三]無餘涅槃の前に於ては、此の陰は盡きざるが故に窮生死陰と名く。

論曰 是れ應知依止、阿陀那、阿梨耶、質多、根本識、窮生死陰等なり。

釋曰 [四]此の三は是れ大乘の中に立つる所の名なり。質多は是れ大小乘に通じて立つる所の名なり。根本識は是れ摩訶僧祇部の所立の名なり。窮生死陰は是れ彌沙塞部の所立の名なり。等とは、正量部に立てゝ果報識と名け、上座部に立てゝ有分識と名く(等)なり。

【一】摩訶僧祇部 mahāsaṃghika 譯して大衆部といふ、根本二部の一なり。

【二】彌沙塞部 mahīśāsaka 譯して化地部といふ、上座部の末派なり。

【三】無餘涅槃に入る以前にはの意。

【四】此の三とは前の三名を指す。

はすことを欲するには非ざるも、此の識は功德と相應するが故に此の識を說く。二には別名。如來は但だ名のみを說いて、義を說かず。三には別義。微細なる境の所攝にして、二乘に於ては說くに宜しからず。但だ義相應するに由るが故に、名を說いて義を釋せざるなり。

重ねて名を說くことに因るが故に解を得しめんと欲し、或は[九六]別方の弟子をして若し一名を解せざるも餘名に由つて解を得しめんと欲するが故に四句を說く。名は異なるも義は同じ。

論曰 世間は聽かんことを樂ふ。

釋曰 信智の兩根に依るなり。

論曰 故に耳を屬し、

釋曰 散亂の心を離るることを顯はす。卽ち是れ定根なり。

論曰 作意して知らんと欲し、

釋曰 恭敬を起して放逸ならざることを顯はす。卽ち是れ念根なり。

論曰 正勤を生起して、

釋曰 此に因つて勇猛を起して、惡を捨て善を取る。卽ち是れ精進根なり。此の中に明かす所は卽ち是れ三慧なり。

論曰 方さに阿梨耶を滅盡することを得。

釋曰 此は道果を明かす。卽ち是れ盡無生智なり。

論曰 乃至、如來の正法、及び似法を受行す。

釋曰 敎の如く行ず。是を如來の所說を受行すと名く。名句味を正法と稱し、[九七]名句味の目くる所の義を似法と稱す。復次に、正法は正說を謂ひ、似法は正行と正得とを謂ふ。復次に、正法は[九八]阿含を以て體となし、似法は[九九]所得を以て體と爲す。

論曰 如來の出世に由つて、是の第一希有なる不可思議の法は世間に於て顯現せり。本識の如し、此の如來出世四種功德經には別義に由つて聲聞乘に於て此の識を已に顯現せり。

釋曰 別義に三種有り。一には、別意、如來は自らの出世の功德を說かんと欲し、阿梨耶識を顯

【九六】別方とは別異の方處に在る弟子の意なるべし。

【九七】名句味とは新譯には名句文にして、能詮の敎をいふ。

【九八】阿含とは言敎。

【九九】所得とは證理をいふ。

耶に著す、と。阿梨耶を滅せんが爲に、如來は正法を說く。

釋曰 初句は略して根本を說き、後に三句を以て、現在、過去、未來に約して、更に廣く之を釋す。「阿梨耶に著す」とは、現在世に約し、「阿梨耶を習す」とは過去世に約し、「阿梨耶を愛す」とは未來世に約するなり。復、別釋有り。「阿梨耶を喜び樂ふ」とは是れ現在世なり。云何が現在世なるや。阿梨耶を喜び樂ふは過去世に阿梨耶に著せるに由るが故なり。過去と現在とに阿梨耶を數習せるに由りて、是の故に未來は阿梨耶を愛す。復次に、或は此の四句は義異ならずと執す。若し異ならざれば、云何が四句有りや。決定藏論に明かす所の如し。二種の愛有り、謂く有愛と無有愛となり。有愛とは卽ち三界の愛にして、無有愛とは謂はく三界の斷を愛するなり。「喜樂」とは、若し人生じて欲界に在れば、已得の塵を緣じて喜を生じ、未得の塵を緣じて樂を生ず。「著」とは、若し人、生じて色界に在れば、未だ小欲を離れざる色界には色界の生と及び色界の塵とに貪著して、已に得たる色界の定に由つて、定に於て染を生じ、未だ得ざる所の定を樂はず、中に於て執して解脫となすが故に說いて著と名く。「習」とは、若し人、無色界に生ぜば、未だ欲を離れざる無色界には先に且らく欲界の過失を觀じて色界の欲を生じ、後に色界の過失を觀じて色界の欲を捨てゝ、無色界の欲を生ず。此の欲は諸定を習するに由つて、成ぜらるゝが故に說いて習と名く。此の三は有愛と名け、常見に依つて起る。愛とは、若し人、多く惡を行ぜば、苦報を受くることを畏る。或は斷見を執して、更に生ぜざらんことを求むるが故に說いて愛と名く。此の一は卽ち無有愛にして、斷見に依つて起る。或は四倒に約して四句を釋し、或は四愛に約して四句を釋す、卽ち飮食、衣服、住處と、有と無有との愛なり。或は自の法辯を顯はし弟子をして法辯の因を得しめんと欲し、或は一義に多名有ることを顯はさんと欲し、或は鈍根の人をして、若し此の義を忘るるも、別名に由つて、還つて憶することを得しめんと欲し、或は鈍根の人をして

論曰　何を以ての故に。聲聞の人は勝位有つて爲めに一切智々を得ること無し。

釋曰　何が故に聲聞乘に於ては微細の境界を說かざるや。聲聞の人は、正しく如來の境界を知らんと勤求することを作さずして、修行は唯だ自利のみを爲すが故に。諸の聲聞の人の惑障は、[九三]苦等の智の麁淺の觀行に由つて、除滅することを得ればなり。

論曰　是の故に聲聞の人に於ては、此の說を離れて智を成就するに由つて、本願を圓滿ならしむるが故に爲めに說かず。

釋曰　諸佛は、聲聞の人は少欲知足にして、自の惑障を除かんことを求むるを見る。此の障は、若し此の智を離れて、餘の智に由つて滅除することを得ば、本願は成ずることを得るも、他の障を解脫することを爲さず、如來の法身を求めて微細なる甚深の道を修行することを發願せず。故に爲に說かず。

論曰　諸の菩薩は應に勝位有つて、爲に一切智々を得べきが故に、佛は爲めに說く。

釋曰　諸の菩薩は自他の惑障及び智障を滅せんことを求むるが故に、修行正勤するが故に、諸の菩薩の爲に說く。

論曰　何を以ての故に。若し此の智を離れて、無上菩提を得んこと是の處り有ること無し。

釋曰　若し甚深微細の境を離るれば、[九四]十種の次第の修は、則ち成ずることを得ず。若し此の修を離れて、心煩惱除き易く、法身得易きことは此の義有ること無し。

論曰　[九五]復、次に此の識は聲聞乘に於ては、別名に由つて、如來曾つて顯はす。

釋曰　復、別の道理有り。此の識は是れ有りと信ずべし。何を以ての故に。聲聞乘に於ても、此の義は別名に由つて、處々に顯現すればなり。

論曰　增一阿含經に言ふが如し。世間に於て阿梨耶を喜び樂ひ、阿梨耶を愛し、阿梨耶を習し、阿梨

【九三】苦等の智とは四諦の觀智をいふ。

【九四】十種とは本論所說の十の勝相をいふ。

【九五】次に正しく聲聞乘に別名を以て此の識を說くことを明かす。

論曰　是の故に阿梨耶識を成就して意となす。此に依つて種子を爲すを以て餘識生ずることを得。

釋曰　第一識を離れて、別の識體の、第二識の因及び生起識の因と爲るもの無し。佛の心の名を說くは、此の名は第二識に目く、佛の識の名を說くは、此の名は六識に目く。佛の意の名を說くは、此の名は第一識に目くるなり。何を以ての故に、第二識及び生起識は、若し前に已に滅して後識生ぜんと欲せば、必ず第一識に依つて生じ、及び能く自類を生ずるが故に、說いて意根と名く。

論曰[九〇]　云何が此の意を復說いて心と爲すや。多種の熏習せる種子の所聚なるが故なり。

釋曰　第一識を或は質多と名く、質多の名には何の義有りや。謂く種々の義と及び滋長の義となり。種々とは自ら十義あり。一には增上緣、二には緣々、三には辨相、四には共作、五には染汚、六には業熏習、七には因、八には果、九には道、十には地なり。此の義の中に各々多種の義有るが故に種々と名く。滋長に三義有り、一には此の十法聚集するに由りて、心を相續して久しく住せしむ。二には此の心は能く一切法の種子を攝持す。三には是れ種々の法の熏習せる種子の滋長する所なり。種子とは、謂はく功能差別の因なり。滋長する所とは、謂はく變異して三界と爲るなり。此の義に由るが故に、佛は第一識を說いて、亦質多と名く。

論曰[九一]　云何が聲聞乘に於て、此の心相を說かず、及び阿梨耶、阿陀那の名を說かざるや。微細なる[九二]境界の所攝なるが故なり。

釋曰　名を問ひ、名の體を問ふ。答は通じて兩問に答ふ。此の識は所知の中に於て、最も微細なり。二乘の所緣に非ざるが故に。此の識も亦是れ境界なり。若し佛果を求むる人は、必ず須らく此の識に通達すべし。此の識は是れ應知等の九義の所依の藏なるが故に。故に「所攝」と名く。復次に、菩薩には微細なる境界藏有り、此の識は解し難きが故に微細なる境界藏の攝に屬す。

【九〇】　次には心の名を明かす。

【九一】　以上心意識の名を說き竟つて、次に聲聞乘の中の異門密意の別名を擧ぐ、中に四段あり、初に大小二乘の所說の不同なる理由を明かす。

【九二】　境界とは所知の對境となるべきものとの意なり。

釋曰 此の心は是れ無明の所依なり。三性の中に於て、此の心は何の性に屬するや。染汚に由るが故に、有覆無記性に屬す。何を以ての故に。染汚有るが故なり。云何が染汚有りや。

論曰 恒に四惑と相應す。

釋曰 無我の境を了ぜざるが故に、我執を起し、我執に由つて我愛と我慢とを起す、此の四惑は一切處に恒に起る。

論曰 譬へば色・無色界の惑は是れ有覆無記なるが如し。此の二界の煩惱は、奢摩他の所藏なるが故に。

釋曰 界は生性を以て義と爲す。婬欲及び段食欲を離れて、色欲に由つて生ずるが故に色界と名く。下の二界の欲を離れて、無色欲に由りて生ずるが故に無色界と名く。此の二界の惑は第六の麁識と相應すと雖無記性なることを失はず、[八六]八定の所藏に由るが故なり。此の惑、若し欲界の散心に在らば、應に不善を成ずべし。依止、麁なるに由るが故に。若し[八七]第二の識と相應すれば、定中に在らずと雖も、亦不善に非ず。依止、最も細なるを以ての故に。若し色・無色界に在らば、依止、麁なりと雖も、八定に攝せられて心、軟滑なるが故に、亦不善に非ず。能く生死を生ずれば、亦、是れ善なるに非ず。故に有覆無記性に屬す。第二の識の起す所の惑も、亦爾なり。依止、細なるが故に不善に非ず。是は生死の因なるが故に、亦是れ善にも非ず。

論曰 此の心は恒に生じて廢せず。

釋曰 此の染汚心は、三性の中と、八定と無想定と無想天との處に、恒に生じて廢せず。

論曰[八九] 第二の體を尋るに、阿梨耶識を離れては得べからず。

釋曰 第二の識は[八九]第一の識を緣じて我執を起す。若し第一識を離るれば、此の識起ることを得ず。故に第一識有つて、今第二識を成就することを知る。第一識を顯はさんが爲の故なり。

【八六】八定とは色界の四禪定と無色界の四空定なり。
【八七】第二の識とは染汚の意を指す。
【八八】次に染汚の意は本識を離れざることを明かす、此の一段の釋文は隋唐兩譯と甚だ相違せり、對撿せよ。
【八九】第一の識とは前に說ける前滅の意識なり。

に於ては染汚心無しと說く。此の人に對しては二定は則ち差別有り。若し此の如くならざれば、二定に於ては意識行ぜざるが故に、二定は則ち異り無し。

論曰　復次に、無想天の一期に於て、應に無流無失を成ずべし。染汚無きが故に。中に於て、若くは我見及び我慢等無けん。復次に、一切時の中に我執を起して善、惡、無記の心中に遍ず。若し此の如くならざれば、但惡心のみは我執等と相應するが故に、我及び我所には此の惑行ずることを得んも、善と無記との中に於ては則ち行ずることを得ず。若し二心同時に生ずと立つれば、此の過失無し。若し第六識と相應して行ずと立つれば、此の過失有らん。

釋曰　無想天の生に於て、若し染汚心無ければ、一期の生の中には則ち我執及び我慢等無からん。此の生に便ち[八〇]流失無ければ此の定は聖人の厭惡する所と爲るべからず。旣に聖人の爲に厭惡せらるゝ故に此の定には染汚識有ることを知る。我執恒に相ひ隨ふに由つて、施等の諸善は常に我執の爲に[八一]雜せられ、我執恒に隨ふ。若し無明を離るれば、則ち此の事無し。此の無明は、若し依止を離るれば、則ち有ることを得ず。此の無明の依止は、若し阿陀那識を離れては、別の體有ること無し。

論曰

[八二]獨行無明及び　相似の五識無く、　二定の差別無く　意の名に義有ること無く、　無想に我執無く、　一期の生は無流なり、　善惡無記の中に、　我執は應に起るべからず。[八三]汚心を離れては有ならず、　[八四]二と三と相違す。　此れ無ければ一切處に　我執は生ずることを得ず。　眞實の義を證見することを　惑障は起さゞらしめ、　恒に一切處に行ずるを、　獨行無明と名く。

論曰　[八五]此の心は染汚なるが故に、無記性に攝す。

【八〇】流失とは染汚の意、即ち流轉の過失なり。
【八一】雜せらるとは雜染せらるゝの義。
【八二】唐隋兩譯には此の頌の釋文あるも、本譯釋論には無し、故に今は略疏の指南に依つて訓讀せり、從つて唐譯とは其の意を異にす、參照。
【八三】此の句は染汚心を離れては對治道有らずとの意なり。
【八四】二と三と相違すとは略疏に依れば二とは染と離染、三とは三性の心を指すといふ。
【八五】次に此の識の識性と恒相續とを明かす。

障を爲すこと能はず。何を以ての故に。若し是れ對治道の生ずる處は則ち是れ障處なればなり。染汚の意識に於ても、此れ亦、有るに非ず。何を以ての故に。但此の惑に由つてのみ、心應に染汚すべきが故なり。餘の惑と相應して共に行ぜば、獨行の名は則ち成ぜず。若し汝、第六識は獨行無明に由つて染汚すと說かば、則ち第六識は一向に清淨ならず。此の無明は暫くも息まざるを以て、云何が施等の心、善を成ぜん。第六識は恒に無明と相應するを以ての故に。若し人有りて、心は善と相應して生ずと說かば、此の人には、則ち過失有り。若し第六識恒に染汚せらるれば、則ち對治道を引いて生ずることを得ず。若し人、染汚心と相應して別の善心有りと說かば、此の善心は能く對治道を引生するが故に、染汚心は卽ち滅す。若し此の說を作さば、則ち過失無し。

論曰　五識と相似せる此の法は應に無かるべし。何を以ての故に、此の五識は共に一時に自の依止有り。謂ゆる眼等の諸根なり。

釋曰　猶ほ眼識等の五識は眼等の五根に同時に依止と爲るが如く、意識にも必ず應に同時の依止有るべし。若し餘識を立てざれば、亦此の依止無けん。眼識の依止無くして生ずることを得ざるが如く、意識も亦應に爾るべし。

論曰　復次に、意の名は應に義有ること無かるべし。

釋曰　云何が、義無きや。若し前滅の心を立てゝ、意と爲さば、此れ但名のみ有りて義無し。何を以ての故に。意は了別を以て義と爲す。無の中に於て、云何が立つべきや。[七九]是の識は六識に隨つて前に已に滅せり。此の意の名は得べからず。了別すること能はず。體無きを以ての故に。

論曰　復次に、無想定と滅心定とは、應に異り有ること無かるべし。何を以ての故に。無想定は有染汚の心の所顯なるも、滅心定は爾らず。若し爾らざれば、此の二定は應に異らざるべし。

釋曰　若し人、染汚心有りと立つれば、此の人は無想定に於ては則ち染汚心有りと說き、滅心定

【七九】是の識とは前滅の心を指す。

て意と爲し、正しく生ずる者を識と名く。此れ卽ち意と識との異りなり。

論曰　二には有染汚の意、四煩惱と恒に相應す。

釋曰　此れ阿陀那識を釋せんと欲す。何をか四煩惱と云ふや。

論曰　一には我見、二には我慢、三には我愛、四には無明なり。

釋曰　我見は是れ我を執する心なり。此の心に隨つて、我慢を起す。我慢とは、我執に由つて、高心を起すなり。實には我無きに我貪を起すを說いて我愛と名く。此の三惑は通じて無明を以て因と爲す。謂ゆる諦實と因果とに心迷つて解せざるを名けて無明と爲す。

論曰　此の識は、是れ餘の煩惱識の依止なり。此の煩惱識は第一に由つて依止して生じ、第二に由つて染汚す。

釋曰　此の染汚識は第一に依止するに由つて識生じ、第二に由つて識染汚するなり。次第に已滅するを說いて意と名く。餘識の生ぜんと欲するに能く與に生ずる依止なるが故なり。第二の識を染汚識と名く。煩惱の依止なるが故なり。若し人、正しく善心を起すも亦此の識有り。

論曰　[七六]塵を緣じ、及び次第して、能く分別するに由るが故に此の二を意と名く。

釋曰　能く[七七]塵を取るを以ての故に識と名け、能く他の生ずる與に依止となるが故に意と名く。第二の識は是れ我相等なり。或は依止して能く分別するが故に意と名く。

論曰　[七八]云何が染汚心有るを知ることを得るや。

釋曰　何の道理を以て、能く此の義を成立するや。

論曰　若し此の心、無ければ獨行無明は則ち有りと說くべからず。

釋曰　獨行無明とは、其の相云何ん。若し人、未だ對治道を得ずして、能く實慧を障ふる惑を獨行無明と名く。此の無明は五識に於て有るに非ず。何を以ての故に、若し人、五識に在らば、

【七六】此の一段は識と意との相異を辯ず。唐譯更に明了なり參照。

【七七】塵を取るとは境を了別するの義。

【七八】以下染汚の意を明かす、中に三段あり、第一に六證を擧げて其の存在を證す。

論曰　能く一切の有色の諸根を執持し、一切の受生の取の依止なるが故なり。何を以ての故に、有色の諸根は此の識に執持せられて、壞せず失せず、乃し相續して後際に至る、又、正しく生を受くるの時、能く取陰を生ずるに由るが故なり。故に六道の身は皆是の如く取る。此の取の事用は識に攝持せらるゝが故に說いて阿陀那と名く。

釋曰　今、道理を立つるは、阿陀那の名を成ぜんが爲なり。道理とは、「能く一切の有色の諸根を執持する」ことなり。此の識は有色の五根を執持するに由つて、死人の身の、黑脹壞等の變異有る位に在るが如くならず。若し死位至れば、阿梨耶識は五根を捨離す。是の時、黑脹壞等の諸相は卽ち起る。是の故に定んで知る、此の識の爲に執持せらるゝに由つて、一期の中の五根は破壞せざることを。「一切の受生の取の依止なるが故に」とは、此の言は重ねて前問に答ふるなり。此の識は衆生の正しく生を受くる時、能く取陰を生ず。此の取の體性は識に執持せらる。此の識は是れ正しく受生する識なるに由る。是の故に正しく生を受くる時、一切の生類は皆此の識の所攝と爲る。一期の受身も亦此の識の爲に攝せらる。阿梨耶識の中に於て、身の種子具足するが故なり。是の義を以ての故に、阿梨耶識を亦阿陀那と名く。

論曰　或は說いて心と名く。佛世尊の心意識と言へるが如し。

釋曰　阿梨耶識と及び意とは、此の二義同じからざるを見る。心の義も亦、應に異り有るべし。此の三の異相、云何ん。

論曰　意に二種あり、一は能く彼の生ずる與に、次第緣の依なるが故に、先に滅せる識を意と爲し、又識の生ずる依止なるを以て意と爲す。

釋曰　若し心は前滅後生して、無間に能く後心を生ぜば、此を說いて意と名く。復、意有り、能く正しく生ずる識の依止と作り、現識と相ひ妨げず。此の二は識の生ずる緣と爲るが故に、名け

及び鏡面の如し、此の本識に依りて、若し一の能く眼識を起すの緣、至る有れば、則ち一の眼識起り、乃至若し五の能く識を起すの因、至る有れば、則ち五識起る。廣慧よ、此の如く菩薩は法如智に依つて聰慧有り、意心識の祕密の義に通達す。諸佛如來の如理如量は、此の如きの義に由つて、諸の菩薩の能く意識心の祕密の義に通達することを記說せず。廣慧よ、諸の菩薩は如實に本識及び阿陀那識等を見ざるに由つて、內に於ても外に於ても、藏住を見ず、生じ及び長ずる等を見ず。識、眼、色及び眼識を見ず。耳聲及び耳識を見ず、乃至身觸及び身識を見ず。廣慧よ、諸の菩薩は法如智に依つて聰慧有り、能く意心識の祕密の義に通達す。諸佛如來の如理如量は、此の如きの義に由つて、諸の菩薩の能く意識心の祕密の義に通達することを記說す。復、次に偈を引いて、重ねて經に說く所の義を釋す。「執持識は深細にして」とは、云何が此の識を或は說いて阿陀那識と爲すや。能く一切の有色の諸根を執持す、謂ゆる能く有依の五根と、及び相等の習氣とを執持するが故に、此の識を亦阿陀那と名く。「深細にして」とは、滅し難く解し難きが故なり。「法の種子は恒流す」とは、一切の不淨品の法は能く生じ熏習し所依として住することと、水流の念々に生滅して、相續不斷なるが如し。「凡に於て我れ說かず」とは、諸の凡夫人には甚深の行無く、一切智を求めず、根鈍なるが故に、凡夫及び二乘の爲には說かずとなり。「彼れ執して我と爲すこと勿らん」とは、[七四]一相起り相續して長ず。若し衆生經(說)に依つて、邪分別を起さば、卽ち此の識を執して我と爲さん。邪執を起すことを恐るゝが故に我れ爲に說かずとなり。

論曰[七五] 云何が此の識を或は說いて、阿陀那識と爲すや。

釋曰 前に已に正理及び正教を引いて、此の識を阿梨耶と名くることを證せり。云何が今、復、此の識を說いて阿陀那と名くるや。

【七四】一類に長時に相續して斷ぜざるの義。

【七五】以下本識の異名を明かす。

釋曰 前に阿毘達磨の偈を引いて、證と爲す。此の中、更に經の偈を引いて、證と爲す。阿毘達磨は理を以て勝と爲し、經は教を以て勝と爲す。教には必ず理有り、理は必ず教に順(したが)ふ。此の二を證と名く。若し此の二の證を離るれば、義を立つること成ぜず。此の證は解節經より出づ。佛、廣慧菩薩に告ぐ、廣慧よ、六道の生死に於て、是の諸の衆生は隨つて衆生聚に在り、或は卵生、胎生、濕生、化生を受け、此の中に身を得て、及び成就す。初に生を受くる時、一切種の識先づ熟し合して[七二]大長圓かなり。二種の取に依る。謂ゆる有依の色根と及び相名を分別する言說の習氣となり。若し有色界の中ならば二種の取有り、若し無色界ならば二種の取無し。廣慧よ、此の識は或は說いて阿陀那と名く、何を以ての故に、此の本識に由つて能く身を執持するが故なり。或は說いて阿梨耶識と名く。何を以ての故に、此の本識は身に於て常に藏隱して、成壞を同じくするが故なり。或は說いて[七三]質多と名く。何を以ての故に。此の識は色、聲、香、味、觸等の諸塵の生長する所なるが故なり。廣慧よ、此の本識を緣とするに依りて、是の識聚は生ずることを得。謂ゆる眼識、乃至、意識なり。有識の眼根に依つて、外の色塵を緣じて、眼識生ずることを得。眼識と同一時に境を共にして、分別の意識の起る有り。若し一の眼識生ずれば、是の時、一の分別の意識生じて、眼識と境を共にす。此の眼識、若し二識と共に、或は三、四、五と共に起れば、是の時にも一の分別の意識有り、五識と共に境を緣じて生ずること、大水流の如し。若し一の能く浪を起すの因至る有れば、則ち一浪起り、若しは二、若しは多くの能く浪を起すの因至れば、則ち多浪起り、是の水は常に流れて廢せず斷ぜず。次に復、清淨なる圓鏡の面中に於て、一の能く影を起すの因、至る有れば、則ち一影起り、若くは二、若くは多の能く影を起すの因、至れば則ち多の影起り、是の圓鏡の面は轉ぜず、影を成ずるも亦損減無し。此の本識も猶ほ水流

【七二】 大、長、圓とは有情の形體をいふ。

【七三】 質多 citta は分別慮知の心をいふ。

釋曰　「諸法は藏に依りて住す」とは、第二句にて第一句を釋し、「一切種子の識なり」と謂ふ。煩惱と業とに由るが故に變じ、阿梨耶識相續して前の果報は後に因を成ずるなり。「故に阿梨耶と名く」とは、義を顯はし、名を證し以て識に名目く。「我れ勝人の爲に說く」とは、勝人とは諸の菩薩を謂ふ、[六七]是れ菩薩の境界の依止にして、及び能く菩薩道を障ふるが故に、菩薩の爲に說くなり。

論曰　此の阿含の[六八]兩偈は識の體と及び名とを證す。云何が佛は此の識を說いて阿梨耶と名くるや。

釋曰　此の語は立名の因を顯はさんと欲するなり。

論曰　一切の有生の不淨品の法は、中に於て隱藏して果と爲るが故に。

釋曰　「一切」とは、謂はく三世なり。三世の中にて、正生と能生との不淨品の法を取る。謂ゆる[六九]五種の淨品に翻するを不淨品と名く。

論曰　[七〇]此の識は諸法の中に於て隱藏して因と爲るが故に。

釋曰　「諸法」とは、謂はく阿梨耶識の果にして、不淨品等なり。阿梨耶識は此の果の中に藏住して因と爲る。

論曰　復、次に諸の衆生は此の識を藏し中にて我相を取るに由るが故に、是の故に阿梨耶識と名く。

釋曰　「藏」とは、執を以て義とす。阿陀那識及び意識に約して衆生の名を說く。何を以ての故に、一切の衆生は我執無きもの無し。我執若し起らば、何の境を緣ずるや。本識を緣じて起る、微細にして一類に相續して斷ぜざるが故なり。

論曰　阿含に云く、[七一]解節經に說く所の偈の如し、

執持識は深細にして、　法の種子は恒流す、　凡に於ては我說かず、　彼れは執して我と爲すこと勿らん。

【六七】是れとは阿梨耶識を指す。

【六八】兩偈云云とは前節の無始の偈は體を顯はし、次前の偈は名を證す、此の一段は前を承けて後を起す。

【六九】五種の淨品とは資糧位等の修行の五位の淨品をいふ。

【七〇】藏の三義に配すれば前段は能藏、此の段は所藏、次の段は執藏の義なり。

【七一】解節經とは眞諦の譯、玄奘譯の解深密經の異譯なり。

る時は阿羅漢道に、有る時は人道に、有る時は人道に、或は流れ或は[五五]接す。比丘よ、汝等は此の如く長時に苦を受け、增益し貪愛して恒に血滴を受く」と。

此の證に由るが故に、無始の時なることを知る。[五六]經に言へるが如し、「世尊よ、此の識界は是れ依、是れ持、是れ處にして、恒に[五七]相應し及び相離れず、智を捨てず、無爲の恒伽沙に等しき數の諸佛の功德なり。[五八]世尊、相應するに非ず、相ひ離れ智を捨つる有爲の諸法の、是れ依、是れ持、是れ處なるが故に、「一切法の依止」と言ふ。[五九]經に言へるが如し。世尊よ、若し如來藏有るも、了ぜざるが故に、生死は是れ有なりと言ふべきが故に。「若し有れは諸道有り」と言ふ。經に言へるが如し、世尊よ、若し如來藏有るに非れば、苦に於て厭惡すること無く、涅槃に於て欲樂の願無きが故に、「及び涅槃を得ること有り」と言ふ。[六〇]復、次に、「此の界は無始の時より」とは、即ち是れ因を顯はす。若し因を立てざれば、始有りと言ふべし。「一切法の依止」とは、此の識は一切法の因と爲るに由るが故に、一切法の依止なりと說く。「若し有れば諸道有り、及び涅槃を得ること有り」とは、此の一切法の依止、若し有らば是の[六一]道は則ち有り、果報も亦有らん。此の果報に由つて、衆生は生を受くれば、[六二]邪正の兩說の分別して異り有ることを解せしむべきこと易し。[六三]後に復、能く上品の正行を得て、應に勝德を得べし。煩惱の依止に由るが故に[六四]極重の煩惱、及び常起の煩惱を生ず。是の[六五]果報等の四種の差別を依止の勝能と名く。能く此の四種に翻すれば依止の下劣と名く。[六六]生死の中に但だ道等の非有なるのみならず、涅槃の義も亦有に非ず。何を以ての故に。若し煩惱有れば、則ち解脫有ればなり。應知依止の中に復阿含有りて能く阿梨耶識の名を證す。

論曰 阿毘達磨の中に、復、偈を說いて言く。

諸法は藏に依りて住す、　一切種子の識なり、　故に阿梨耶と名く。　我れ勝人の爲に說くと。

【五五】接すとは住するの意。
【五六】以下は一切法の依止といふを釋す。
【五七】相應し云云とは自體と相應し、自體を離れずの意、智を捨てずとは本覺の智明を捨離せざる義。
【五八】前は淨法、次は染法の依止たることを明かす。
【五九】以下は偈文の第四句を釋す。
【六〇】以上は偈文の第一釋を了り、次に第二釋を擧ぐ。
【六一】道とは人天等の六道趣のこと、
【六二】邪正の兩說とは流轉と還滅の染淨の異相をいふ。
【六三】次は偈文の後の二句を合釋す。
【六四】唐譯に「猛利の煩惱と長時の煩惱」となす。
【六五】果報等の四種とは果報は有情自體なり、次に解と行と及び所對治を等取して四種といふ。
【六六】此の句は唐譯を參照せよ。

及び因果とを說かば、其の數は此の如し。故に次第を說く。復、[四六]別釋有り、此の十義は能く無上菩提を引き、[四七]無虛の無分別智を生ずるが故に「成就す」と名け、四の道理と及び三量とに相違せざるが故に「隨順す」と名け、先に隨順して後に相違するに非ず。偈に言へるが如し。

　能く愛と及び悲とを持し、善に隨順するが故に、黑白の我見に、益有り亦損有るに非ず。

故に「相違せず」と名く。「能く一切智々を生ず」とは、一切法に於て無間に如理、如量の智を生ずるが故なり。復、[四八]別辨有り、後を以て前を釋するなり。

衆名章　第三

論曰　此の初に說く應知依止は、立てて阿黎耶識と名く。世尊は何れの處に於て此の識を說き、及び此の識を說いて阿梨耶と名くるや。佛世尊は、阿毘達磨略本の偈の中に說けるが如し。

　「此の界は無始の時より、一切法の依止にして、若し有れば諸道有り、及び涅槃を得る有り」と。

釋曰　今、阿含を引いて阿梨耶識の體及び名を證せんと欲す。阿含とは謂はく大乘阿毘達磨にして、此の中に佛世尊は偈を說けり。此れ即ち此の阿梨耶識の界なり。[四九]辨を以て性と爲す。此の[五〇]界に五義有り。一には體類の義。一切の衆生は此の體類を出でず。此の體類に由れば衆生は異ならず。二には因の義。一切の聖人の法なる四念處等は此の界を緣じて生ずるが故に。三には生の義。一切の聖人の所得の法身は此の界の法門を信樂するに由るが故に成就することを得。四には眞實の義。世間に在つて破せず、出世間にても亦盡きざるなり。五には藏の義。若し此の法に應ずれば、自性善なるが故に內を成じ、若し此の法を[五一]外にせば、復、相應すと雖も、則ち[五二]殼を生ずるが故なり。[五三]此の界に約すれば、佛世尊說く、比丘よ、衆生の初際は了達すべからず。無明を蓋と爲し、貪愛に縛せられて、有る時は[五四]泥梨耶に、有る時は畜生に、有る時は鬼道に、有

【四六】此の別釋以下偈文は唐譯には前章の終りに在り成就と隨順と、不相違との釋なるが故に唐譯を取るべきか、但し隋譯は本釋に一致す。
【四七】無虛のとは隋唐兩譯に無戯論となす。
【四八】此の意は唐譯に註せり。
【四九】辨とは如來藏の覺照の義、普寂は之を起信論の本覺と大旨相似たりといふ。
【五〇】界の五義は佛性論等の如來藏の五義に配して釋せり。略疏參照。
【五一】外にすとは正理にはづれること。
【五二】殼を成すとは無明の殼に蔽はれて染汚を成するの意。
【五三】以下は無始の時を釋す。
【五四】泥梨耶 niraya. 地獄と譯す。

故に、十義の次第を立つ。次に復、若し人、已に諸法の因を了別すれば、十二緣生に於て、則ち聰慧を得ん。何を以ての故に。果は因より生じ、自在天等の不平等の因より生ぜず、亦無因にして生ぜざるに由る。是の故に因果の二智を立つ。

次に是の法は因より生ず、菩薩は應に其の相を識るべし。何をか相と爲すや。分別性は實には體有ること無きも、執して是れ有なりと言ふは、名けて增益と爲す。實には眞實性有るも、執して是れ無なりと言ふは、名けて損減と爲す。無なるを增し有なるを損す、是れを二邊と名く。聰慧は能く此の二邊を離る。

次に所執は唯だ識のみ有りと、此の智に由るが故に、是と相應して通達すべし。此の通達は復、障礙無きに由りて、次に隨順して唯識に入る。世間の六波羅蜜は俗諦に依るも、眞諦に依ることを得て淸淨なる意の所攝なる出世の六波羅蜜をも亦應に學すべし。次に十地の中に於て、差別に隨つて應に各々三阿僧祇劫を修習すべし。聲聞の修得に同じからず。何を以ての故に。聲聞は三生の中に於て、對治の種を下して對治の道を成熟す。對治の道成熟するが故に、第三生の中に於て、三界を解脫して阿羅漢果を得ればなり。次に此の差別して修する中に、戒等の三學を應に圓滿せしむべし。次に三學の果なる涅槃は煩惱障、智障等、滅して、無上の菩提と及び三身と、此等を應に覺すべきが故に此の如きの次第を說く。若し大乘を立つれば、此の法を出でず。何を以ての故に、若し緣生の義を釋せんと欲すれば、卽ち阿梨耶識の中に入る。若し法相を釋せんと欲すれば、卽ち三性の攝に入る。若し得を釋せんと欲すれば、卽ち唯識の中に入る。若し因果を釋せんと欲すれば、卽ち唯識觀の處に入る。若し地を釋せんと欲すれば、卽ち因果の處に入る。若し三學を釋せんと欲すれば、卽ち十地の處に入る。若し滅を釋せんと欲すれば、卽ち三學の處に入る。若し無上菩提及び三身を釋せんと欲すれば、卽ち無住處涅槃の攝に入る。若し佛の體と

如し。復、地々の中に生死涅槃有るも、相ひ妨礙せず。是の故に十義は能く無上菩提を引く。

論曰　諸の衆生は一切智々を得るが爲なり。

釋曰　此の十義は三德を具足するに由る。謂ゆる無等の境と無等の行と無等の果となり。若し人、此を[四四]聞思修すれば、必ず無上菩提を得るが故に、「諸の衆生は一切智々を得るが爲なり」と言ふ。

論曰　而も偈を說いて言はく、

應知の依と及び相と、入と因果と修の異りと、三學と及び果の滅と、智とは無上乘の攝にして、十義は餘處に無し。此れ菩提の因なるを見る、故に大乘は佛言にして、十義を說くに由りて勝る。

十義次第章　第二

論曰　云何が十義を此の如く次第して說くや。菩薩は初めて學するに、應に先づ諸法の如實の因緣の觀すべし。此の觀に由るが故に、[四五]十二の緣生に於て應に聽慧を生ずべし。次いで後に緣生の法に於て應に其の體相を了別すべし。智に由つて能く增益損減の二邊の過失を離る。此の如く正しく修して應に所緣の如實の諸相に通達すべし。次いで後に諸障より應に解脫すべし。次に心、已に應知の實相に通達せば、是れ先に行ぜし所の六波羅蜜を、應に更に成就し、淸淨にして、復、退失すること無からしむべし。意內の淸淨を依とするに由るが故なり。次に內淸淨に攝せらるゝ諸の波羅蜜を、十地の差別に依つて應に隨一に三阿僧祇劫を修すべし。次に菩薩の三學を應に圓滿ならしむべし。圓滿し已れば、是の學果の涅槃と及び無上菩提とを、次いで後に應に得修すべし。十義の次第すること此の如し。此の次第の說の中に一切の大乘は皆圓滿なることを得るなり。

釋曰　此の十義の境界に次第有り、正行に次第有り、果に次第あり、此の次第を觀ずるに由るが

【四四】聞思修すとは聞慧思慧修慧の三慧に依りて修すること。

【四五】十二の緣生とは十二因緣のこと。

應に知るべし、此の二は能依、所依なるに由るが故に相應することを得。若し應身を離るれば已に大地に入れる菩薩も法樂を受用すること無し。若し法樂を受用すること無ければ、菩提の資糧具足せず。譬へば色を見るが如し。若し應身を離るれば化身は成せず。若し化身無ければ諸の菩薩は願樂位の中に在るも、聲聞の瘦澀なる願樂にして、初發の修行は皆成ずることを得ず。是の故に決定して應に三身有るべし。

論曰　此の如き十種の處は、唯大乘の中にのみ有りて、小乘に異るが故に第一と説く。

釋曰　此の十法は是れ無上菩提の因にして、次第に相ひ引いて乃し無上菩提に至る。

論曰　佛世尊は但菩薩の爲めにのみ、此の十義を説く。

釋曰　大乘は但だ是れ佛説にして、小乘は則ち[四二]共説なり。大乘は但だ菩薩の爲にのみ説き、二乘の爲に説かず。此の[四三]三義に由るが故に小乘に勝る。

論曰　故に大乘に依てのみ、諸佛世尊に十の勝相の、所説の無等なる有りて餘教に過ぎたり。復、次に云何が此の十の勝相の所説の無等なるは、能く大乘は、是れ如來の正説なることを顯はし、小乘は決して大乘に非ずと遮するや。小乘の中に於ては未だ曾て此の十義の、隨つて一義をも釋するを見ず、但大乘の中に釋するを見るのみ。復、次に此の十義は能く無上菩提を引出し、成就し、隨順して相違せず。

釋曰　此の三義は十義の能く無上菩提を引くことを證す。是れ無上菩提の因なるを以ての故なり。「成就す」とは、若し聖教及び正理に約して、簡擇し思惟すれば、此の十義の成就は破壞すべからず、譬へば已に導師の所説の道相を見るが如し。「隨順す」とは、若し人、觀行して修位の中に在れば、此の十義は隨順し修觀して住す。譬へば導師の所説の道に隨順して住するが如し。「相違せず」とは、十地の中に於て障因無く、譬へば導師の所説の道の中に、劫盜、虎狼等の障無きが

【四二】共説とは佛のみならず菩薩も共に説くの意なり。
【四三】三義とは無上菩提の因と、佛説と、菩薩の爲に説くとの三をいふ。

のみ說くことを顯はす。

論曰　復、次に云何が此の中の略釋は能く大乘の餘敎に勝れたることを顯はすや。今、此の略釋は、斯の十義は唯だ大乘にのみ有りて、小乘の中には無きことを顯はす。何をか十と爲すや。謂はく阿梨耶識を說いて、應知依止相と名け。三種の自性(卽ち)。一には依他性。二には分別性。三には眞實性を說いて應知の相と名け、唯識の敎を說いて應知の入相と名け、六波羅蜜を說いて入因果の相と名く、

釋曰　何を以ての故に。唯識の道に由つて三性に入ることを得。願樂位の六波羅蜜は、是れ世法なりと雖も、能く出世の法を引き、能く唯識の道を生ずるが故に、是を三性に入るの因と說く。菩薩は已に地に入れば、出世淸淨の六波羅蜜は卽ち是れ三性に入りたる果なり。

論曰　菩薩の十地を說いて、入因果修差別の相と名く。

釋曰　出世の十種の菩薩地は、是れを入因果の修差別と名く。

論曰・菩薩の受持し守護する所の禁戒を說いて、修の差別に於ける戒學の相と名け、首楞伽摩、虛空器等の定を說いて心學の相と名け、無分別智を說いて慧學の相と名け、無住處涅槃を說いて、學果寂滅の相と名け、三種の佛身たる自性身、應身、化身の此の三を說いて、無分別智の果の相と名く。

釋曰　地の中に於て、三種の修觀有り、說いて三種の依學と名く。此の學果は卽ち是れ滅にして、[註一]謂ゆる三障を滅するなり。無分別智を慧に依る學と名く。此の智は若し聲聞に約すれば、四倒の分別無きを無分別と名け、若し菩薩に約すれば、一切法の分別無きを無分別と名く。二の無分別の異相は、此の如し。三種の佛身は、是れ無分別智の果なり。若し自性身を離るれば法身は成せず。譬へば眼根の如し。若し法身を離るれば應身は成せず、譬へば眼識は根を離れて成ぜざるが如し。

【註一】此の一句は次の「二の無分別の異相此の如し」の次に入るべく、三障とは二障なるべし、唐譯を參照せよ。

釋曰 「入因果」とは卽ち出世間の六波羅蜜なり。「修」とは謂はく四德を數習するなり。此の修は地地同じからざるが故に差別と名く。卽ち是れ歡喜等の十地なり。

論曰 六には修の差別に於ける戒に依る學の勝相。

釋曰 謂はく「修の差別に於ける」とは、諸地の中の戒學なり。戒に依りて菩薩は觀を修す。卽ち十地の中の菩薩の一切の戒にして、諸の惡法に於て復、心を作(おこ)すこと無し。

論曰 七には此の中の心に依る學の勝相。

釋曰 學の義は前に解するが如し。心とは卽ち是れ定なり。定は一心を以て體と爲し、一心に依つて修習す。謂ゆる一切の菩薩の定を心に依る學と名く。

論曰 八には此の中、慧に依る學の勝相。

釋曰 能く果を得るが爲に「慧に依る」と名く。慧を以て依止と爲し、修行の心を發す。是の慧に依るは、卽ち是れ無分別智なり。

論曰 九には學果寂滅の勝相。

釋曰 謂はく滅の差別に三種有り。一には最勝、二には[三九]品類、三には[四〇]自對解脫の定智なり。障の滅は卽ち是れ無住處涅槃なり。

論曰 十には智差別の勝相。

釋曰 謂はく已に一切の障を離れたる智なり。「智」は卽ち無分別智にして、對治道の差別に名く。卽ち佛如來の智は已に一切の隨眠の障を離る。此の智は無分別智の差別なり。

論曰 此の十義の勝相に由りて、如來の說く所は餘敎に過ぐ。此の如く修多羅の文句を釋して大乘は眞に是れ佛說なることを顯はす。

釋曰 云何が能く顯はすや。此の略釋の文句に由りて、十義は小乘の中に於て無く、唯だ大乘に

【三九】品類とは轉依の品類の義にして六轉依の如きをいふ。
【四〇】自對解脫とは隋譯に「自體は煩惱障と智障とを滅す」とあり、自對は自體なるべし。

釋曰　唯だ大乘の中にのみ勝れたる功徳有りて、餘乘の中には無く、大乘の不共の徳を明かさんが爲の故に、「大乘に勝れたる功徳有ることを顯はさんと欲し、大乘の教に依りて」と言ふ。

論曰　是の如きの言を說く、諸佛世尊に十の勝相と所說の無等なる有りて餘教に過ぐと。

釋曰　此の言は、何の所明を欲するや。大乘に勝れたる功徳有ることを顯はさんが爲に、實有と及び利他との爲の故なり。諸佛世尊とは[三七]十號の中に解するが如し。

論曰　十の勝相とは、

釋曰　依止等の十相は異なるに由るが故に勝る。十義を因と爲し、言說を果と爲す。義勝れたるを以ての故に所說も無等なり。

論曰　一には應知依止の勝相、

釋曰　應知とは、謂ゆる淨、不淨品の法にして、卽ち是れ三性なり。此の三性は三性の因に依止す。卽ち是れ勝相なり。此の依止の勝相に由りて、如來の言說も亦勝る。卽ち是れ阿梨耶識の依止、卽ち是れ勝相なり。譬へば[三八]石子の如し。乃至智果勝相も亦是の如し。

論曰　二には應知の勝相、

釋曰　「應知の勝相」とは、謂はく、應知の自性なり。或は應知は卽ち是れ相なり。

論曰　三には應知入の勝相、

釋曰　「應知」とは謂はく三性なり、入とは謂はく能成入と及び所成入とにして、卽ち是れ唯識なり。

論曰　四には入因果の勝相。

釋曰　唯識に入る因は、卽ち是れ施等の世間の六波羅蜜にして、願樂位の中に在り。入の果は卽ち唯識に入るなり。後の六波羅蜜は、通達位の中に在りて、果を轉成するを出世間と名く。

論曰　五には入因果修差別の勝相。

【三七】十號とは如來の十號、其の中に、佛と世尊とあり。

【三八】石子とは小石を石子といふ、石と子と同體の持業釋なることを示す。

には身口に由つて心に由らず、六には心口に由つて身に由らず、七には身口心に由る。八には身口心に由らざるなり。還淨とは、善心に由つて、治罰に由らざるなり。善心とは、本の如く對治を受持するなり。出離とは、七事有り。一には各々[三二]發露して相續を遮す。二には[三三]學の罰を受與す。三には先に制して彼に開く、先に已に戒を制し、後に別意に由るが故に開く。四には更に捨す、若し大衆、聚集して同意すること本の如くならば、更に捨す、先に罪を犯せる人は、是の時還淨す。五には轉依、比丘、比丘尼の男女の二根を轉ず、若くは不共の罪なり。六には如實觀、四種の[三四]法鬱陀那に由つて諸法を觀察し、又對治の法相の如く恒に自罪を觀察するなり。七には法爾に得、若し四諦を見れば、小隨小罪は更に故らに犯さず、法爾の所得に由る。

復、次に毘那耶に四義有り。一には人、佛世尊、此に由つて戒を立つ。二には立制、已に過失を說けば、大師は衆を集めて學處を立つ。三には分別、已に略して制を立て、更に廣く解釋す。四には決判、此の立制の中、云何が犯罪にして、云何が不犯なりやと。（決判す）今當に本文を釋すべし。

論曰　佛世尊の前にて、

釋曰　恭敬と及び異言無きことを顯はさんと欲するなり。

論曰　大乘の句義に善く入れる菩薩摩訶薩は、

釋曰　已に陀羅尼等の功德を得て、此の功德に由つて、文と句と及び義とに於て、善く能く攝持し、又能く理の如く顯說するが故に「善く入る」と名く。何が故に但だ菩薩摩訶薩とのみ言ひて、名を說かざるや。諸の菩薩摩訶薩衆には通じて此の能有ることを顯はさんと欲するなり。何が故に[三五]兩名を說くや。[三六]二行を具足することを顯はさんと欲するなり。

論曰　大乘に勝れたる功德有ることを顯はさんと欲し、大乘の敎に依りて、

【三二】發露とは罪過を懺悔すること、是に由つて罪過の相續することを遮斷するの意。

【三三】唐譯には「誓つて治罰を受く」とあり、學とは學處にして戒律をいふ。

【三四】法鬱陀那とは唐譯に脚註せり參照。

【三五】兩名とは菩薩と摩訶薩とを指す。

【三六】二行とは上求菩提と下化衆生となり、菩薩を前者に、摩訶薩を後者に配するの意なり。

[24]能熏と覺と寂と通との故に、解脱を得。三藏を聞思するに由るが故に、能く熏じ、熏ずるに由るが故に覺し、覺するに由るが故に寂す。寂するに由るが故に通じ、通ずるに由るか故に解脱を得るなり。

若し略して三藏を說かば、各〻四義有り。菩薩にして若し能く此の義を了別すれば、則ち一切智を具し、若し聲聞にして、能く一句一偈の義をも了すれば、則ち[25]流盡に至らん。云何んが一一の藏に各〻四義有りや。修多羅の四義とは、一には依、二には相、三には法、四には義なり。能く此の四義を顯示するが故に、修多羅と名く。依とは[26]是の處と、是の人と、是の用となり。此の三に依つて、佛は修多羅を說くが故に、依と名く。相とは、謂ゆる眞俗二諦の相なるが故に相と名く。法とは、陰、界、入、緣生、諦、食、定、無量、無色、解脱、[27]制入、遍入、助道、無礙辯、無諍等の故に法と名く。[28]義とは、所作の事の故に義と名く。道を生じ、惑を滅するは是れ事なり。

阿毘達磨の四義とは、一には對、二には數、三には伏、四には解なり。對とは是の法は無住處涅槃に對向す。何を以ての故に。能く諦道門を顯はすが故に對と名く。數とは、諸法の中の隨一の法を、或は名を以てし、或は別相を以てし、或は通相を以てする等、[29]數々に此の一法を顯はすが故に數と名く。伏とは、此の法は能く諸說を伏す、[30]立破の二能は正說、[31]依止等の方便に由るが故に、故に伏と名く。解とは、阿毘達磨に由れば、修多羅の義は解し易きが故に解と名く。毘那耶に四義有りとは、一には罪過に由る、二には緣起に由る、三には還淨に由る、四には出離に由る。罪過とは、謂ゆる五篇七聚罪なり。緣起とは、或は四、或は八有り。四とは、一には無知、二には放逸、三には煩惱熾盛、四には輕慢なり。八とは、一には心に由つて身口に由らず、二に身に由つて心口に由らず、三には口に由つて身心に由らず、四には心身に由りて口に由らず、五

【二四】　莊嚴論第四に此の問答あり、「聞に由るが故に熏じ、思に由るが故に覺し、止に由るが故に寂し、觀に由るが故に通ず、此の四義に由りて生死の諸の事大に解脱を得」とあり、今の釋は稍異るも其の趣旨なるべし。

【二五】　流盡とは煩惱を斷盡すること。卽ち無漏の聖果なり。

【二六】　是の處とは何れの國土、是の人とは何れの佛、是の用とは何れの衆生をいふ。此の三種に依つて契經を說く。

【二七】　制入、遍入とは唐譯に勝處、遍處と譯す、卽ち八勝處と十遍處定なり。

【二八】　義の釋意は唐譯と相違す、參照。

【二九】　數々にとは種々にの意。

【三〇】　立破の二能とは因明に所謂能立、能破の二門にして、能立は能く正義を成立する論式にして、能破とは能く邪義を破する正しき論式なり。

【三一】　依止等とは瑜伽論の七因明を指すものにして、此に依止とは論の依止卽ち論所依をいふものなるべし。

非ざること有ればなり。復、次に阿毘達磨の名を說くは、此の論は是れ菩薩藏なることを顯はす。復次に、藏を立つるは、何の所爲を欲するや、自の惑を大乘の中に於て滅せんが爲なり。是れ菩薩の煩惱なり。何を以ての故に、諸の菩薩は分別を以て煩惱と爲し、阿毘達磨は甚深廣大の法性を相と爲せばなり。此の菩薩の藏に凡そ幾種有りや。亦、三種有り、謂ゆる、修多羅と阿毘達磨と毘那耶となり。此の三は上下乘の差別に由るが故に二種を成ず。謂ゆる聲聞藏と菩薩藏となり。此の三、及び二は云何んが藏と名くるや。能く攝するに由るが故なり。此れ何の法を攝するや。一切の應に知るべき義なり。云何んが三を成ずるや。九種の因有りて別立す。修多羅とは、他の疑惑を對治せんが爲なり。若し人、此の義の中に於て、疑を起さば、決定の智を得しめんが爲の故に、修多羅を立つ。受用の二邊を對治せんが爲の故に、別に毘那耶を立つ。佛は罪過有る受用を遮するに由つて、毘那耶を立てて樂行の邊を對治し、佛は罪過無き受用を隨喜するに由つて、毘那耶を立てて苦行の邊を對治す。自の見取する偏執を對治せんが爲の故に、別に阿毘達磨を立つ。能く無倒なる實法の相を顯はさんが故なり。

復、次に三種の修學を說かんが爲の故に、別に修多羅を立て、戒に依り心に依る學を成ぜんが爲の故に、別に毘那耶を立つ。何を以ての故に。若し人、戒を持すれば、則ち心に悔無く。無悔等に由つて、能く次第に定を得ればなり。慧に依るの學を成ぜんが爲の故に、別に阿毘達磨を立つ。何を以ての故に。能く無倒の義を簡擇するが故なり。

復、次に正しく法と及び義とを說くは修多羅に由り、法と義とを成就するは毘那耶に由る。何を以ての故に。若し人、或は毘那耶を修行すれば、此の二の法及び義に通達することを得ればなり。法と義との決定の勝智は、阿毘達磨に由る。此の九の因緣に由るが故に三藏を立つ。此の三藏の[三]通用は云何ん。生死を解脫する、是れを其の通用と爲す。如何んが解脫することを得るや。

【三】通用とは共通する功用の義。

秋の月のごとく日の光の如くにして　文詞、　世に遍ねく。　甚だ深大なる種々の　句[16]義は了經に依り　能く聰慧の人をして、　心を下し、尊敬を起さしむ。[17]細密なる法は通じ難く　智は著すること無く礙ふること無く、[18]利等の八の世法も　心に常に染著すること無く、[19]無礙の名は義に稱ひ、　通敏なる者は恒に誦し　天人は普く識知して　大師の足を頂禮す。[20]辯說は常に盡くること無く、　甘露の文義を雨らす、　尊に依りて分に隨つて聞くこと、[21]猶、雨を乞ふ鳥の如し。[22]決定藏を披閱して　以て攝大乘を釋す　願くは此の言は大文海を　怖るる人を利益せんことを。

衆名品第一の一

釋曰　此の品に三章有り、一には無等の聖教、二には十義の次第、三には衆名なり。

無等聖教章　第一

論曰　攝大乘論は、卽ち是れ阿毘達磨敎にして、及び大乘修多羅なるに、

釋曰　此の言は何の義に依り、何に因つて起るや。一切所知依の甚深廣大なる諸法の實性に依る。若し佛菩薩の威力を離るれば、何人か此の功能有りて、能く此の義を說かん。云何か、論を造るに此の相に由りて說くや。若し阿毘達磨の名を離るれば、此の論は是れ聖教なることを知らず。此の義の爲めの故なり。又經名を顯はさんが爲めなり、譬へば十地經の如し。

今、此の論を造る、其の用云何ん。衆生の無知にして顚倒なるものをして解を得しめんと欲するなり。復、次に此の論に「阿毘達磨大乘修多羅」の名を說くは、如來の法門の別類を顯はし、及び此の論の別名を顯はさんと欲するなり。「大乘」と言ふは、小乘の阿毘達磨に簡ばんと欲す。何が故に、但だ阿毘達磨の名のみを說かずして、復、修多羅の名を說くや。阿毘達磨は是れ聖教に

す。中に於て、初に正しく論の興起を叙す。
【一六】了經とは了義經の意。
【一七】次に論主の智辯を讃歎す。
【一八】利等とは利、衰、毀、譽等の八風をいふ。
【一九】此の句は唐譯に「故に名は決定して自の德に稱ふ」とあり。無着論師の名に稱ふの意なり。
【二〇】後に正しく此の釋論を造る所由を述ぶ。
【二一】此の句は唐譯に脚註せり參照。
【二二】決定藏とは瑜伽論の攝決擇分を指す。

攝大乘論釋

世親菩薩釋

陳天竺三藏法師眞諦譯

卷の第一

[一]依止勝相を釋する中、衆名品第一

[二]智障は極めて盲暗にして、 謂ゆる眞俗を別執するを、 如理如量の 無分別智の光に由つて、[九]破して無等の覺を成ず。 [四]心の惑を滅して餘すこと無く、 常に德の圓かなる智に住し。 [五]恒に隨つて大悲を行じ 衆生の根性の如くに 極解脫の眞道を 十方界に於て說く 能く無功用の心（を以てす）。 [六]無分別智に由つて、 生死に住せず、 常に大悲を起すが故に 涅槃に入らず。 [七]智と方便とを攝するに由つて、 自他の極利に至る。 我、 身口意を以て、 佛世尊を頂禮す。 [八]是れ無上の正法にして、 如來の自覺の說なり、 [九]若し人、能く正しく行せば、 甘露の妙迹に至らん。 [一〇]若し此の法を誹謗せば、 無底の抂抗に沒せん。 智と及び信心とに由つて、 眞實の法を頂禮す。 [一一、一二]道に住し果に住する僧は、 普く一切の衆に勝る、 [一三]智道に浴して清淨に、 世の無上の福田なり、 片善を中に投ずるも 廣大なること空地の如く 世間の樂と及び 清涼なる涅槃とを成就す。 我、一心に佛の 聖なる弟子衆を頂禮す。 [一四]聰明邪慢の人は、 阿含の修得を退し、 行說は自執に隨ひ、 正理は證する所に非ず。 [一五]彌勒菩薩に事へて、 日光定に依止し、 實の法相を照了し、 無動にして及び出世し、 我等の爲めに正法の 眞の道理を宣說したまふこと

【一】此の品名は歸敬序の後に在るべきを文便に從りて最初に出せるものなるべし。
【二】初に三寶に歸敬することを叙す、中に於て最初に佛寶に歸敬す。初の二句は所破の障、次の二句は能破の智を明かす。
【三】此の一句は障盡果滿を叙す。
【四】次の二句は斷智の二德。
【五】次の五句は恩德を顯はす。
【六】次の四句は不住處涅槃を明かす。
【七】次の二句は二利究滿を明かす。
【八】次に法寶に歸敬す、初の二句は正しく法寶を顯はす。
【九】次の二句は受行せば勝果を得ることを叙す。
【一〇】次の二句は誹謗の罪を明かす。
【一一】次に僧寶に歸敬す、初の二句は正しく僧寶を標す。
【一二】此の句は唐譯に學、無學といふ。
【一三】次の六句は僧寶の德を擧ぐ。
【一四】以下は釋論を製する由來を叙す、中に於て初に時人の弊を痛嘆す。
【一五】次に本論の興起を明か

も、觸れざるを得ない問題であるから、敢て此に未定稿のまゝ私見を述べたのであるが、若し識者の叱正を得て、今後の研究に資することを得ば甚幸である。

尚ほ本論及び釋論には幸に西藏譯があるから、此の方面の學者の研究に依つて本論の諸問題の解決に、一途の光明を與へらるゝ日の遠からざることを期待して筆を擱く。

因みに本國譯も亦前卷に續いて、安田一雄君の助力に負ふ所多く、又當學堂の研究生、山久瀨一弘、土屋篤信、鹽谷廉芳、岡田宏道、篠原裕明等の諸君も亦能く筆受の勞を頒つち此の業を援助せられた、此の予の擔當する國譯を完了するに際して、特に芳名を記して感謝の意を表したいと思ふ。

昭和八年七月十五日

洛北紫竹林學堂に於て

譯者　衛藤卽應　識

く現はれてゐる爲に、護法系の唯識では、多く之を依用するものではないかと思ふ。果して然らば之を逆に考ふると、無著の佛敎は世親に依つて繼承せられ、攝論を中心として云ふならば、一方に一乘系統に進む安慧の學風があるに對して、他方には三乘唯識系に發展すべき學風か無性に依つて興り、護法に至つて大成せられたのではあるまいかと思はる。蓋し護法の唯識說も必ずやこゝに至るまでの思想系統が有つたものとすれば、其の多く依用する無性釋に關係を求むべきは當然であるからである。然し其の間の史的關係が全く不明であるから、之を今後の研究に期待する外はない。

× × × ×

以上、攝論の國譯に際してこれに關する一通りの解說を試みたのであるが、本論は陳、隋、初唐の間に所謂攝論宗として講究せられた以後は殆んど獨立に之を研究する者なく、多くの末釋すら悉く佚散して傳はらず、特殊の學者以外には、敎界ですら全く之を忘れてゐた狀態であつた。然し本論は前述の如く瑜伽敎系の要論たるのみでなく、佛敎一般としても、本論の初に「此說中一切大乘皆得二究竟一」といひ、無性之を釋して「其所有大乘綱要無二別說一」といひ、普寂の略疏の開卷には「實乃攝大乘之玄軌、趣二菩提一之王路也、苟學二大乘一者、寧可下外二手此一而異求上焉哉」と推賞してゐる如く、本論は實に組織整然たる大乘佛敎概論である。されば解題者は之に中觀學派の基本的要論である龍樹の中論を對立せしめ、更に一般に普及せる大乘起信論を加へて、大乘佛敎の基礎學三論として之を一般に推奬したいと思ふ。蓋し此の三論は大乘佛敎の主要の論部であつて、而も現代の諸宗派の直接所依の論部でないから、宗派的色彩を有せない點に於て、大乘佛敎の一般的基礎知識を獲るに最も好都合であるからである。勿論此の三論には各特色があるが、殊に攝論は之を釋論を通して見るならば、他の二論に比して一層廣繁なる大乘敎學の敎相に接することが出來るのみならず、前に一言觸れて置いた如く、本論は一部の宗敎論書として現代的に攻究すべき價値を有するのであるから、他日之か解說をも試みて普及の一助に資したいと念願してゐる。此の解題に於ては敎義上の事は此に盡くし難いから、僅かに大綱を述ぶるに止めた。本論と諸學派の關係に就いては、佐々木月樵氏の四譯對照の攝大乘論の前篇を、眞諦三藏に就いては宇井敎授の印度哲學研究第六卷を參考せられたい。

尙ほ本論の異譯及び學派の系統等に關することは、今後の研究に待つべき問題であつて、解題として推定的の論述をなすことは、好ましくないのであるけれど

攝論を對照するに、新譯では多く三性といへるに對し、舊釋では常に三無性といへることも、又攝論と唯識論とを比較するに、攝論は三性又は三無性を中心とする唯識觀が全體の基調を爲してゐるに對して、唯識論は八識の能變論を中心となしてゐることも、其の教學の立場の相違から來る當然の歸結である。後世の三一權實の爭の如きも、佛教全體の上から見れば各一面の發達であつて、決して優劣を褒貶して取捨すべきものでなく、寧ろ賢首大師の如く融會止揚すべきものである。普寂は略疏に於て「始より終に入るの密意」なりといふ態度を以て、舊譯攝論全篇を通して、新舊を對照しながら評釋し、大いに舊譯の眞意を發揚して教學上の價値を向上せしむることに努力してゐるが、然し此の態度は固より支那佛教の教判的見地よりの見方であつて、今日佛教一般の立場から見れば、本論は決して普寂のいふが如く、圓教に到る一楷梯ではなくして、獨立に大乘佛教の眞意を開演せるものといふべきである。

次に無性の釋論と世親釋とを比較するに、世親釋は論本を釋するに繁簡其の宜しきを得て、多く枝葉末節に亘らず、一通り論旨を釋明したものであつて、釋論の體裁としては典型的のものであるといへる。之に反して無性の釋は一應の釋文だけでなく、隨處に深く探つて論旨を究明するといふ態度に出でゝゐる。從つて多く異說を擧げて評論し、能く一家の識見を以て論の兩端を盡くさねば已まぬといふ風があつて、時には文法上の解釋をも試みてゐる。無性の傳は全然不明であるが、世親の後輩にして瑜伽教系に於て一家の見識を有する有力なる學者であつたことは、此の釋論に依つて明かである。然し此の釋論には一度も世親釋に觸れてゐないのみならず、全く之を關知しないやうであるから、世親釋とは全然獨立した解釋と見なければならぬ。此に注意すべきは、世親の佛教を宣揚する玄奘所傳の成唯識論には、屢本論が引用せられてゐるが、其の多くの場合に無性釋に依つて世親釋に依らないことである。從つて慈恩の述記にも無性釋を引證すること多く、世親釋の方は甚だ少い。唯識家では世親釋を敢て捨てるのではない、只其は略釋であるから廣釋の無性に依るといふてゐるが、單に其だけの理由ではないやうである。世親釋は、舊譯を排斥する玄奘譯では、勿論新譯唯識家の譯語を用ひてゐるから、其の所宗と一致してゐるやうに見ゆるけれども、世親釋自體としては、其の解釋が深入りしてゐない爲に從容として迫らず、少くとも積極的に護法宗を論證するものではない。之に反して無性釋は異計を擧げて評破し、其の間自ら新譯唯識說の權證となるべき主張も多

いて修學したと傳へらるる波羅頗蜜多三藏の假譯であるから、新舊の論諍を決するには最も好都合の資料である。莊嚴論第三卷菩提品に「一切無レ別故、得ニ如淸淨一故、故說ニ諸衆生一、名爲ニ如來藏一。といひ、又第六卷の隨修品に「正說下心性淨、而爲ニ客塵染上、不下離ニ心眞如一、別有中心性淨上。とあるを釋して「說ニ心眞如一名レ之爲レ心、卽說ニ此心一爲ニ自性淸淨一、此心卽是阿摩羅識」といひ、或は又「由下離ニ法性一外、無ニ別有レ諸法上」是故如レ是說、煩惱卽菩提。といひ又第七卷の教授品に「無體及似體、自性合三空、於ニ此三空一解、此說名ニ解空一」と說いてある。

かくの如く心淨說あり、九識說あり、三無性說ありといふ如く、公平に之を解するならば、此の論は始終を通じて明かに一乘思想であるといへる。然らば三無性の思想を基本として九識說を立つる舊譯は決して誤譯や情執でなく、寧ろ此の教系の眞意を發揚するものといはざるを得ないのである。然し之が爲に決して新譯家を排斥するものではない。若し佛教の教學全般より考察せんか、觀智の內容を說く般若の思想より開展せる中觀佛教は、佛の世界としての諸法の實相を開示し、之を仰ぐ衆生の立場より阿梨耶識に出發せる緣起系の佛教は、佛智を衆生に反映せしめて唯心觀となり、三性は三無性に歸する瑜伽教系の佛教として開展し、此の二大思想系統は實相と、緣起と表裏隱顯して佛教教學の二大潮流を爲してゐるといへやう。而して中論が天台に、本論が華嚴に合流して更に一段の發展を爲すに至つたのも亦當然のことといはねばならぬ。而して本論は前に云へるが如く、直に現實の考察より出發せるものであるから、般若空の方面は隱れて、俗諦有相の方面に開展すべき素地を有するものである。中觀佛教に於ける教學の基本的範疇は空假中の三諦であるが、之に對して瑜伽教系の基本的の分類は遍依圓の唯識三性である。唯識觀の上から云へば、眞諦系の舊譯攝論でも、玄奘系の新譯唯識でも結局は三性は三無性に歸すべきもので、此の間に取捨はないのであるが、教學上の立て前から云へば、依他の本識を中心として圓成に向ふか、遍計に出づるか、此に唯識教學の新舊に分岐する契機がある。圓に向ふ方面では、本識を通して如來を見る如來藏緣起となつて、三性は三無性の眞如に歸入する觀法中心となるのであるが、遍に向ふ方面では、本識は第七末那の我執の根本となつて、唯識能變を說く能變論に發展せざるを得ないのである。されば前者は勝義諦に立つて三無性を高調し、後者は世俗諦に立つて三性を强調するに至るのである。權實の論爭の如きも畢竟は此の根本の立場の相違に歸著する。されば新舊兩譯の

つて、全く特殊なる教說である七阿僧祇、三十三阿僧祇の出づることは、論本の調子からでも允當でないと思ふ。前に述べた如く、故意に釋論を本文とした外に、第九卷の修習章の末後の一句の如きは、確かに論本が釋論に混入したのであるから、釋文が論本に混入せないとも限らないのである。

次に眞諦譯釋論の教學上の立場に就いては、此に詳述する餘裕はないが、全然默過することも出來ないから、簡單に之に觸れて置かう、已に攝論學派の說として知られてゐる如く、眞諦三藏の根本思想は如來藏緣起の一乘思想に近きものであつて、玄奘三藏所傳の護法系の唯識では阿賴耶識を妄識とする八識說であるに對して、阿梨耶識を眞妄和合とし、其の眞識を別開して阿摩羅識となす九識說である。又新譯唯識宗では、阿陀耶識は第八識の別名であるが、眞諦譯では、第七識にも通ずるものとなすことは、延いては識の本質上の見解の相違を來す等、兩者の間には頗る涇渭ありて教義上相容れないものが少くない。されば新譯家は舊譯を誤りとして排斥するけれども、普寂も「舊亦有二道理一非二必錯謬一也」といへるが如く、之を譯者の責任に歸すべきものでない。又阿梨耶識自體の性質についても、普寂は古來の融會說を擧げて、「兩俱有レ理、何者此識有二二門一、諸業煩惱所感義門、是異熟果故非二是迷執一、護法等師乃得二此義門一。若據二根本無明所發義門一、是等流果、是卽迷執、安慧等師乃得二此義門一」といひ、之を評して「此辨固有二一理一、恐未二允當一、余竊謂護法所計乃大乘始門之義、安慧等說、是從レ始入レ終之義、故有二此異一耳、季唐以來泥二慈恩家一之流、偏倚二護法一以爲二正義一、貶二安慧等一爲二不正義一、蓋不二是公論一。といふてゐるが、これ能く、隆々たる新譯家の教勢を以つて當時の教界を威壓し、護法正義の慈恩宗の情黨に依つて徒らに舊譯を貶斥したる偏見を打破したるものといふべきである。固より無著世親の思想には、護法正義の唯識宗として發展すべき素質を有したるものであらうが、之を以て直に其の本旨を得たといふことは出來ないのであつて、寧ろ其の本意は舊譯家に在つたやうに思ふ。攝論宗の學說の特色として知られてゐる九識說の如きは、其のまゝ攝論には見えないけれども、眞諦の他の諸譯、例せば決定藏論、三無性論等に出て、攝論にも明かに其の思想は現はれてゐる。これに關する新舊の論諍は且らく措くも、攝論と最も關係深くして且つ唯識家の所依の要論である大乘莊嚴經論に依つて、眞諦譯は決して私見に依る任意の譯でないことが證明せらるゝのである。此論は兩三藏の中間、唐の貞觀七年に譯出せられ、而も玄奘と同じく那蘭陀寺に於て戒賢に就

見章第二と有分章第三とは、眞諦譯の別行論本の方では、他譯と同じく別出してゐない。此の分類は他の釋論では釋文に出てゐるのであるから、これ明かに三種差別の分類を說明する必要上、之を論本として前後の體裁を整へんが爲に、釋論の文を標出して「論曰」としたものであつて、決して傳寫の錯誤ではない。

前述の如く眞諦三藏は、釋論を講說し譯出する必要から、論本の文を再出增補してゐるのみでなく、釋文の中に於て論本の原型を、自由に變更してゐる處さへある。卽ち釋論第六卷の後半に、經文解釋の軌範として出したる最淸淨慧の二十一句と、次の十六業十六句の三十二法相應の文は、釋論に於て論本の文を前後自由に按配して釋意を明瞭ならしめてゐる。(同處の國譯脚註參照)

以上の如く其の內容を檢討しても、陳譯釋論は原本其のまゝの忠實なる翻譯とは考へられない。經錄を檢するに、仁壽錄、內典錄等の諸經錄に、眞諦譯攝論釋に十二卷本と十五卷本とが並べ出してあるし、歷代三寶紀には眞諦再譯して廣略ありといふてゐることから察するに、翻譯の當初は二種の釋論が行はれてゐたやうである。謂ふに十二卷本は單純なる翻譯であり、十五卷本は現流の講述の譯本であつて、譯出當時から勿論後者が便宜であるから之のみを依用した爲に、早くより前者は佚散したものでは無からうか。從つて又後に笈多の再譯の必要も感ぜられたものではあるまいか。慧愷の序文にも、本論三卷、釋論十二卷、義疏八卷、合二十三卷とあるが、義疏を別出した單純の譯本としては十二卷となり、之を合糅したものとしは、十五卷本となつたと見られないことはない。八卷の疏も之を別行すれば一一本文を標出する必要があるか、現在の釋論が果して之を合糅したものとすれば、本文標出の必要が全くないから甚だしく縮少せられ、三卷の增加位で濟むとも考へらるゝのである。若し然らば廣略の二本を並べ出した經錄も自ら理解せらるゝわけである。

眞諦譯の釋論は翻譯しながら講說して門下を敎導したものであり、其の間 釋論は勿論、論本の文までも自由に再出し、前後し、補足して講述に便したものとすれば、眞諦譯論本の因果修差別勝相の下の、修時章第五の論本に出づる、七阿僧祇、三十三阿僧祇の如きは、釋論では他の所にも出てゐるが、特に此の條下では可成詳細に解釋してゐる。然るに他の諸譯では、通途の三阿僧祇の說のみであつて、七阿僧祇、三十三阿僧祇の說は全然之を見ないから、或は論本の轉入にあらざるかを疑はざるを得ないのである。全體として、要義を說いて來た論本としては、通說である三阿僧祇だけで充分であ

他の翻譯三藏の如く單に經論を傳譯することを任とし滿足したものではない。されば主として譯出した所宗の論部は、之が解釋に努めたのであり、從つて「偏へに攝論を宗とし」て攝論宗の源泉を爲した本論は、單なる傳譯といふよりは寧ろ新思想を求めて來集した學匠等に之を理解し會得せしめて、佛敎の眞意此に在りと信受せしめねば已まざるものがあつたに相違ない。三藏は翻譯に際して義疏を製したといふことは、かゝる事情から決して之を疑ふことは出來ないのであるが、而も全然傳はらざるのみならず、其の敎系を繼承する多くの攝論學者の傳記中に一度もこれに觸れてゐないことは、其の始めより疏と釋論とは合糅して行はれたことを示すものではなからうか。蓋し現存の釋論に於ては釋意は充分に盡くされてゐるのである。又前項に述べた如く攝論の盛んに講究せられた時代に、其の源流を爲す三藏の義疏を無視するの理由は毛頭無い筈であるし、又若し義疏が別に行はれたものならば、恰も唯識論述記を中心として其の傳燈的研究が此に集注した如く、必ずや其の註釋が出づべきであるが、僧傳及び各種の章疏目錄中に見ゆる四十餘部の古章疏が、其の題目より見る限り、悉く直接釋論に依る點を思ふならば、本論が單純なる翻譯でなくして、義疏と合糅せられたものであらうと推定せざるを得ない。

以上は釋論の比較と傳譯の事情とより推して、現存の釋論十五卷は眞諦の講述せる義疏と合糅せられたものであらうと想定したのであるが、三藏は本論を翻講し竟つて最後の廻向の偈文に、譯者自ら「翻二解攝大乘一」といつてゐるのは、偶此の間の消息を語るものではあるまいか。更に少しく其の內容から之を論證しやう

先づ第一に注意すべきことは、他の譯本では、一段若しくは一節一章を標出して、其の中の要義を解釋し、各段の趣旨を明かにし、通じ易き點は別に釋の必要なしとして略してあるが、眞諦譯では、論本の殆んど一句一句を標出して之を釋してゐる。かくの如きは傳譯釋論には見ない形式であつて、明かに釋論を以て論本を講說する態度であるといふべきである。從つて論本の偈文の如きは、必要に應じて再度、一句一句を別出して之を釋してゐる。單に偈のみでなく、散文の所でも解釋の便宜上再出してある。(再出の論本の文は本國譯に於ては特に括弧內に入れて之を示して置いた)

斯くの如く、論本の文が必要に應じて屢再出せられてゐるのみでなく、時には釋論の文が「論曰」として論本の文の如く標出せられてゐる。即ち第四卷の差別品第四の中の言說章第一の初に、阿梨耶識の三種四種の差別を擧げてゐる所に、我

し、本論の國譯も亦かゝる期待から敢て之を擔當したので、之を好機會として出來るだけ精密に比較對照して、誤譯なからんことを期し、得る所も亦少くなかつた。然し此に詳細なる比較に依る考證的の論述をなすことは不當でもあるし、其の餘裕もないから、簡單に歸結の大要だけを述べて置かう。

世親釋に於ける新舊二譯の甚しき相違からして、從來、印度に於て護法系の唯識と、安慧系の唯識との二流の發展があり、攝論釋の原本も亦所傳に依つて異つて來たやうに考へられ、普寂の略疏にも「世稱二三論同本異譯一矣。寂竊謂、此非二必同本一也。所二以知一者、前譯有之而後譯無レ之者豈三五數也。而其此有彼無者多。是從レ始入レ終之奇說也。蓋印度已有二兩本流行一而傳譯不レ同乎、然兩譯之所二有無一學者評論云云」といふてゐる。新舊の釋論には幸に、二譯の中間に隋譯があつて、其の量に於て唐譯と同じく、其の內容も亦同本異譯と見らるべき程一致してゐる。然し釋文の出入異同に至ては、國譯脚註に處々に注意して置いたやうに、唐譯に無くして寧ろ陳譯に一致する點が少くなく、其の分科の如きは全然陳譯と一致してゐる。其の點から見ると、唐譯は玄奘三藏の所傳の宗旨に依つて、多少添削せられたものではあるまいかとさへ疑はざるを得ない程である。眞諦譯は其の量に於て、殆んど倍加せられてゐるが、而も其の中に於て、他の二譯の釋論の文は大體上其のまゝ見出すことが出來るので、全體に亙つて其の增補せられし點を見るに、前後の釋文の關係や、科段的の說明を一々指示し、釋文として簡決に過ぎ去りし所や、又は省略せられし點を追補註釋し、或は又釋文中の語句を敎學的に敷演してあるので、假りに他譯を臺本とせんか、內容は且らく措いて其の體裁の上からは、之を講述したものと見らるゝのであり、從つて亦眞諦の學風の判然と現はれてゐるのは特に此の部分に於てである。されば眞諦譯の原本も亦他の二譯と少くとも釋論の體裁に於ては同一のものであつて、若し所傳を異にするものならば、其は語句の上の相違だけであつて、現存せる眞諦譯の如く、倍大に增補せられたものでは無かつたのであらうと思はざるを得ない。傳に依ると、眞諦三藏は譯出に際して論旨を敷演し解釋して義疏を作つたといふが、其の講述のまゝの譯本、謂はゞ義疏と釋論と合糅せられたものか、現在の釋論では無からうか。三藏は其の傳を見ても、攝論を中心として無著世親の佛敎を宣揚弘通することを使命として來東せるもので、戰亂流離の間に在つて、轗軻不遇に悲歎しながら、尙且つ弘法の精神に燃えてゐたことは實に身命を堵しての宣敎者であつて、

論疏十四卷等があつて、此の學系でも獨立に攝論を研究したものが有つたやうであるか、大勢は已に去つて復見るべきものない、之等の末釋も、其の名のみ傳へられてゐるに過ぎない。但神廓の疏に就いては、普寂の略疏に「世傳三神廓疏在三於南都庫藏一而未レ聞レ有三親閲覽者一未審、昔在而今已湮没乎」といひ、湛慧之を引用せる所より察するに、古く南都に傳はつてゐたやうであるが、惜哉今に傳はらない。

以上は、攝論の傳譯講究の概況であるが、之を要するに、攝論の研究が獨立した一の學統を爲して研究せられたのは、眞諦三藏の傳譯以後、唐初まで、約百年の間であつて、其の以後は、所謂舊譯に依る攝論宗としては、地論と共に華嚴宗に合流し、玄奘の新譯は、其の當初より獨立の學風なく、唯識宗の一資料として其の思想中に包容せらるゝに至つた。

四、異譯諸本に就いて

前項に述べた如く、本論は論本として別譯せられたるものに三譯あり、隋譯釋論の中の論本を加ふれば、前後四譯となり。釋論では世親釋の三譯と無性釋の一譯とがある。本論の如き參考すべき古代の註釋か全部逸佚して傳はらないものに在ては、異譯諸本の對校比較か其の研究の第一條件とならざるを得ない。論本の四譯を比較するに、固より譯語の異同、語句の多少の廣略出入は免れない。特に第一の魏譯は譯語簡古にして、處々に文の缺けたるものあり、陳譯は後に述ぶるが如く、眞諦三藏の學統に依つて譯語に特色あり、本文亦多少、増補せられたる點あるも、大體に於ては四譯は一致してゐるので、同一原本の異譯と見らるべきものである。從つて之を對比することに依つて、論本の原意を明かにする點が少くない。

次に世親釋の三譯に就いては、隋唐二譯は大體から見て同一原本の異譯と見らるゝのであるか、獨り眞諦譯のみは、其の分量に於て倍加せられたのみでなく、其の學風を異にする所からして、釋意も亦同じでないから、全體に於て同一原本の異譯とは見られない程に相違してゐる。之を教學史に見るも、玄奘譯は三乘家として立つ唯識宗の所依の要論として引證せられ、眞諦譯は主として一乘家の華嚴宗に依用せられて、永く教學史上の對立を見るに至つた。かくの如く同一世親の釋論が、傳譯の相違からして教理上の對立を見るに至つては、著者世親の眞意は果して孰れに在りやといふことは、教理史上興味ある問題とならざるを得ない。開題者も亦曾て經に於ては楞伽經を、論に於ては本論を中心として、唯識思想の二系統の源泉と、分流とを探らんと志

最も盛に行はれた時代に、本論の第三譯が出た。即ち隋の開皇十年に來朝せる北天竺の達磨笈多三藏は、煬帝の保護の下に、主として大業年間に譯業に從ひ、行矩等と共に攝大乘論釋十卷を譯出した。これ即ち世親の釋論の再譯であるが、無着の論本も亦會本として其の中に在るから若し之を別出すれば、論本として、第三譯となるわけである。何故に笈多三藏は、眞諦譯攝論の盛に行はれてゐる此の時代に新に再譯したのであるか、其の理由を知るに苦しむのである。若しこれが推測を許さるゝならば、當時流行せる眞諦譯は、後に述ぶるが如く忠實なる譯本でなく、學徒の理解を助くる爲の多くの解釋が附加せられてゐた爲に、適ゝ三藏所持の梵本に依つて忠實に之を譯出したものではあるまいか。從つて笈多三藏には眞諦の如く特に攝論を弘通すといふ如き意志は無かつたと思はざるを得ない。然し此の譯が、其の後の攝論研究者に依つて如何に參考せられたかは、未だ之を徵すべき文獻に接しない。されども後に玄奘譯出でゝ眞諦譯と對抗し、新舊兩譯の論爭が烈しくなつて見れば、其の孰れが果して作者の眞意を傳へ、且つ原本に近きものかを決するには、恰かも其の中間に於ける第三者の飜譯として、笈多譯は實に貴重なる唯一の參考資料といはざるを得ない。且又本譯は、科段に於て全然眞諦譯と一致するも、其の分量及び體裁は大體に於て玄奘と同じで、而かも譯語が玄奘譯に比して頗る達意的であるから、比較對照することに依つて文意の通じ易き點が尠くない。

次いで本論最後の傳譯は、正しく無着世親の佛教を傳へ、新に門戶を張つて大いに唯識宗を鼓吹した唐の玄奘三藏に依つて爲された。玄契三藏は入竺求法實に十七年間にして、唐の貞觀十九年に歸朝し、朝廷の保護に依り、國家的の事業として譯業に從ひ、支那の譯經事業に一新時期を劃したことは改めていふまでもないか、其の飜譯の初期、即ち貞觀二十一年から同二十三年（西紀六四九）に至る間に、攝大乘論本三卷、攝大乘論世親釋十卷の外に、更に新に攝大乘論無性釋十卷を譯出した。然し玄奘三藏の奉ずる所の宗旨は、瑜伽系統の佛教であるけれども、其の修學の系統からして、特に護法を通じての世親の唯識論を中心とした爲に、其の上足慈恩大師窺基は、其の學統を繼承祖述し、唯識法相宗として發展するに至つた。其が爲に新に攝論は譯出せられたけれども、特に攝論の研究としては見るべきものなく、但唯識論研究の參考に資せらるゝに止つた。文獻の上では慈恩に攝大乘論抄十卷、神泰の疏等があり、又無性釋には功逈の無性攝論疏、智嚴の無性釋論疏四卷、神廓の無性攝大乘論釋

時の學匠として聞えたる、曇延、慧遠等も其の法筵に列したと傳へられてゐる。

次いで靖嵩は曾て南地に在つて眞諦の法席に列し、上足法泰に疑義を諮決して新宗の奥義に通曉した人であるが、曇遷と前後して開皇十年彭城に歸つて大いに門戸を張り、江北の地は風を望んで新宗に歸し、門下に法護、智凝等あり、智凝の下又法燈盛にして、攝論の講究流布に力を盡した。

其の他、眞諦三藏の直系曹毘の下に法侃、道奘等あり、慧曠の下に法常等ありて各攝論を弘め、地論の宗匠として知られたる慧遠、靈潤等も亦攝論の弘傳に力を致し、かくして眞諦三藏の傳譯以後、隋より初唐に至る約百年の間は攝論の講究大いに行はれ、所謂攝論宗全盛の時期となつた。

斯くの如く攝論の講究は、當時の教界を賑はしたのであるから、自ら之が註釋を作るものも多く、唐の僧傳に依るに、譯者眞諦の義疏八卷を初とし、智愷の疏二十五卷、靖嵩の疏六卷、曇遷の疏十卷、法護の旨歸、靈潤の義疏十三卷、玄章三卷僧辯の章疏十五卷、法常の義疏八卷、玄疏五卷等が傳へられ、之等の章疏は其の當時には廣く行はれた如く僧傳に述べてあるが、早くから佚散して今日では一部も傳はつてゐない。尙ほ諸種の章疏目錄に依ると本論の註釋として此の外更に數十部の章疏が集錄せられてゐるか、現存する者は一部も無い。然るに幸にも大正新修大藏經中には燉煌本古寫本五種が古逸部中に編入せられてゐる。其のいづれも隋より初唐にかけて攝論隆盛時代の著作であつて、從來は此の時代の他の學系の人の著作及び僧傳中の斷片的の敍述を通して、間接に此の時代の攝論の宗風を知ることを得るに過ぎなかつたのであるが、之等の諸書が世に出たので、今日では直接其の宗風に接することが出來るのである。然し惜むらくは五部共に極小部分の殘篇であつて、完全してゐないから、實に望蜀の感に堪へない。されば眞諦釋の註釋として完全せるものは依然として我が國近世の學匠、長泉院の普寂の略疏を推さねばならぬ。此の書は前述の如く參考すべき一の末釋もない眞諦譯釋論十五卷を通して、諸譯を比較し、廣く關連せる經論章疏を涉獵して博引旁證、能く文旨を闡明し、一家の識見を以て終始一貫之を辨釋してゐる。されば此の書は眞諦譯釋論の唯一の指南であるのみならず、諸譯の攝論を通して現存する唯一の完全した註解書である。此の書は久しく一個人の珍襲として秘藏せられてゐたのであるが、初めて大日本藏經中に刊行せられ、次いで大正藏經に編入せらるゝに至つた。

眞諦三藏の傳譯に依つて、攝論の講究

特に攝論弘通を以て來東の使命となせるもので、傳に「自三謂來二東夏一、雖三廣出二衆經一、偏宗二攝論一。」といへるは能く三藏の眞意を傳へたものである。此の時代は北地に在ては地論の研究漸く盛んにして、瑜伽系統の新思想將に興らんとする黎明期であるから、求法の念厚き篤學の士は、其の教系を宗とする眞諦三藏に大いに期待する所あつて、遠隔邊地を厭はず來訪就學せるものが少くなく、就中、法泰、智愷　曹毘、慧曠、智敫等は攝論の學燈を傳へたる逸才であつた。眞諦は在留二十三年にして太建元年(西紀五六九)壽七十有一歳にして廣州に示寂した。

眞諦三藏の來夏宣教の間は、其の時と處とを得ず、轗軻不遇に始終して、唯識無境の瑜伽の深旨も「言乖二治術一有レ蔽二國風一」と謳られて世に行はれず。靖嵩の傳に「有二天竺三藏一厥號親依、賁二攝舍二論一遠化二邊服一、初歸二梁季一終歷二陳朝一、二十餘年通傳無レ地、雖レ云二譯布講授一無レ聞」と云はしめた程である。正法弘通の不拔の信念に動かされ、遠大の抱負と深廣の學識とをもつて來東したる三藏をして、斯の如く不遇に終らしめたることは、啻に三藏に對して無限の同情禁じ難きものがあるのみでなく、教界の恨事これに過ぎたるものはない。然し三藏自らも門下の俊才に期待する所あつて、傳に「諦以レ手指二西北一曰、此方有二大國一、非レ近非レ遠、吾等沒後、當二盛弘一レ之、但不レ覩二其興一、以爲二太息一耳」といつてゐるが、眞諦の沒後も南地に於ては依然として振はず初南地に在り、後北地に移つて攝論を宣揚したる九江道尼の傳に「自レ是南中無二復講主一、雖レ云二敷說一、蓋無レ取矣」といへる狀態であつたが、而も三藏の法燈は流れて北地に移り、此に三藏の豫言の如く攝論の宗風大いに興り、地論と共に一時教界を壓するの盛況を呈するに至つた。

攝論を北地に傳へて其の流行の先驅をなした第一人者は曇遷である。曇遷は緣起系の佛教の達者にして從つて又巳に唯識にも通じた人であるか、北周武帝の破佛に際して難を金陵に逃れ、此の地に於て計らずも攝論を獲、是に由りて唯識無境の要旨を探ることを得て、自ら如意珠を得たるが如く喜び、深く硏鑽するに至つた。後彭城に歸つて、慕聖寺に於て攝論を開講し、併せて楞伽經起信論等を講して緣起系の宗風を鼓揚した。傳に「攝論北土開創、自レ此爲レ始也」といひ、又「受業千數」といふてゐるが、其の盛況を推知すべきである。眞諦三藏が曾て大根性の人有つて能く斯の論を弘めんといひしは「求レ今望レ古豈非二斯人一乎」と其の傳に讃嘆してゐるが如く、其の門下に復英才多く出でて攝論の法燈を繼ぎ、宗風愈盛んになつた。門下の錚々たる者は靜凝、淨業、道哲、淨辯、靜藏、慧休等であり、又當

い新舊兩譯の中間に於て第三者の手に傳譯せられたものであるから、これが精密なる比較は攝論の研究に資するのみでなく、或は之に依りて其の本據である大乘阿毘達磨經の正體を窺ふ祕鍵が得られるかも知れないと思ふ。

三、傳譯及び講究

本論は前後四回支那に傳譯せられ、釋論には世親釋に三譯、無性釋に一譯ある。本論の多くの末釋は殆んど全部逸佚して傳はらないに拘らず、本、釋二論の數次の傳譯が一も缺くることなく今日に傳つて比較研究に資することを得るのは學界の慶事である。

本論の最初の傳譯は、梁武帝の時、北天竺の佛陀扇多三度來朝して、洛陽及び鄴都に於て譯業に從事し、普泰元年（西紀五三一）攝大乘論二卷を譯出した。此の時代には初めて瑜伽系統の佛教を傳へたる菩提流支及び勒那摩提に依つて、入楞伽經、不増不減經、十地經論、寶性論等の緣起系統の經論が多く傳譯せられ、十地經論の飜譯には佛陀扇多も亦之に參與したと傳へられてゐるが、此の論の傳譯に依つて華嚴經十地品の研究は、十地論を通して阿梨耶識中心の唯心緣起の佛教に轉向し、所謂十地論學派の將に興らんとした此の時代に、期せずして此の教系の重要の論部である攝大乘論が譯出せられたのであるが、當時の學界は從來の華嚴研究の餘勢として、自ら其の研究が十地論に集中して未だ攝論に注意するに至らなかつた。然るに其の後間もなく梁の大同二年（西紀五三六）に來東せる眞諦三藏に依つて、世親の俱舍、唯識等と共に本論及び釋論が譯出せられ、其の門下の俊才に依つて攝論研究の氣運が作らるゝに至つた。眞諦は來東後、護法の志篤き梁の武帝の保護の下に、大いに宏懷を伸べんとして、太清二年鄴都に出でて譯業に從事したが、偶國難勃發して此の地を去り、爾來騷然として戰亂鎭まらず、艱難流離して轉々居處定まらざる間にも尚ほ數十部の飜譯を爲したが、而も弘法其の時を得ずして孤影東來の意を阻むものあるを慨嘆し、歸國の情すら禁じ難きものがあつた。然るに道俗求法の士の懇請に慰留せられて南越に住せし時、建業の沙門僧宗法准等の來つて法を求むるもの多く、三藏は欣然として來意を承け、廣州制旨寺等に於て攝大乘論等を飜譯し且つ講述した。就中攝大乘論三卷及び世親釋論十五卷は高弟慧愷の筆受に依り、天嘉四年（西紀五六三）から五年に亙つて完成せられた。

眞諦三藏は支那の四大飜譯三藏の中に數へらるゝ程に、譯出の經論も其の數多く、六十餘部に及ぶけれども、其の中心は無著、世親の佛教にして、其の中にも

處を明かにすべきである。

此の阿毘達磨經は唯識論所依の六經の隨一と數へられて、成唯識等にも引用せられてゐるが、一度も支那に傳譯せられない經である。而かも寶地房證眞は七百卷というてゐるが、全くの憶測とも考へられないから、或は玄奘三藏の所傳に由るものか、寡聞にして其の典據を知らない。陳譯攝論には「阿毘達磨略本」として偈文を引證せる所が、應知依止の最初に在るから、或は廣略二本が行はれたものではないかとも考へらるゝ。いづれとも此の經の組織內容は全然不明であるが、若し前述の推定にして誤りなしとすれば此の經中の少くも攝大乘品の一品だけは其の內容が推知せられ、同時に攝大乘論の釋論としての意義及び體裁も明かになるわけである。

尙これと關連して一言すべきことは、大乘莊嚴經論と本論との關係である。此の論は唯一度のみ其の題目を標示して、本論の應知入勝相、（唐譯では入所知相）の最後の所に五現觀の偈として引證せられてゐる。然しながら本論の偈文は始終を通じて莊嚴論と共通せるものが甚だ多く、啻に偈文のみでなく、散文に於ても共通した點が尠くない。例せば最初の大乘佛說論の如き、十種散動の如き、四意四依の如き、本論として重要なる敎說が、殆んど其のまゝ莊嚴論に見出さるゝものが頗る多い。然るに題目を標示する所は唯一處に限られてゐるのは如何なる理由であらうか、本論全體を通じて、必ず其の典據を明かしてある論師の態度からして、決して任意に一ヶ所だけ名稱を擧げて、他はすべて省略したものとは考へられない。若し然らば他の處では一々其の出處を明かにせることが意義を失ふことになる。然らば兩者共通した敎說にして其の出處を擧げてないものは、其の所依の本據を同じうするもの、換言すれば莊嚴論の偈頌も亦阿毘達磨經の攝大乘品に依るものと考ふる他はない。此の論は藏經中の波羅頗蜜多の譯では「大乘莊嚴經論」とあるが、攝論の引用では陳譯のみ之と同じで、隋唐の二譯では「大乘經莊嚴論」とあり、梵本も亦然りである。此に云ふ大乘經は或は大乘阿毘達磨經等の大乘經を指すものではなからうかと思ふ。若し然らば此の論の李百藥の序文に「大乘莊嚴論者無著菩薩纂焉」とあるが如く、阿毘達磨大乘經等の大乘經中より編纂して之を解釋したもので、其の中の主要の一品である攝大乘品の頌文及び敎說が自ら多分に集錄せられた爲に、期せずして攝大乘論と共通したものではなからうか。これ單に解題者の憶測に過ぎないものであるが、此の二論は共に瑜伽敎系の主要の論部であり、敎理上密接の關係に在るものであつて、而かも水火の論爭の絕えな

語ニ(唐譯)如來所說過ニ於餘敎一、如レ此釋ニ修多羅文句一顯ニ於大乘眞是佛語一(陳譯)といへば、此の十勝相は經の文句であることは明かである。此の十勝相を、諸經論を引證しながら順次に解說して一論の組織をなし、最後に「阿毘達磨大乘經中攝大乘品、我阿僧伽略釋究竟」(唐譯)「阿毘達磨大乘藏經中名ニ攝大乘一此正說究竟」(陳譯)といひ　隋譯亦同樣に「阿毘達磨大乘修多羅中攝大乘品解釋竟」といふが、最初に十勝の經文を揭ぐるのみで、經釋を究竟すといふは實に不思議である。尤も攝大乘品なるものが通じて十勝相を說くものとすれば、之を最初に出して解說すれば、自ら攝大乘品の解釋となるといへないこともないが、然し他の經論を引證する位であるから、其の解說の中には、所釋の經文の少くも主要なる語句は引用せられ、論述の中に自ら解釋せらるべきが至當である。是の如き考を以て本論を見るに、特に引證の經論の名稱のない偈頌には、常に「是中有レ頌」(唐譯)「此中說レ偈」(陳譯)又は「如レ有ニ頌言一」(唐譯)「如ニ偈說一」(陳譯)等といひ、或は又、「如ニ經言一」といひ「如ニ所說一」等といふ。是の如く名目を擧げずして引證せられたる偈頌及び散文は、所釋の攝大乘品の文句でなからうかと思はざるを得ない。若し果して然らば　本論は所釋の經文を擧げながら解說を進めたものといへるから、「略釋究竟す」とも、「解釋し竟る」ともいへるのである。然らば何故に前に云へるが如く「阿毘達磨大乘經に曰く」として、特に所釋の經題を標示した引證文があるかといふに、これ恐らく當面の所釋である攝大乘品以外の經文を引用した偈に、特に經題を擧げたものと、推定することが出來る。若し然らば能釋の論に所釋の經題を標示して引證することは決して不自然ではないのみならず、かく解する他に理解の途はないやうに思ふ。尙此の推定を助くるものは、應知勝相の中に「如ニ佛世尊說一」(陳譯)(他の諸譯も同意)として散文にて、唯識觀の菩薩の四智を說いてゐる。而して又此の同じ意味が頌文として依慧學勝相の中の無分別智を說く中に、「復說ニ別偈一」として六偈が擧げられてゐる。此の文が偈成唯識論第七に四智を成就せる菩薩として說かれ、其の下の述記に「然是阿毘達磨經、攝論但言レ如ニ世尊言一、不レ出ニ經處一」といひ、又義林章一末には「阿毘達經云」として散文を擧げ、次に復「阿毘達磨契經頌云」として偈文を引用してゐる。然らば攝論の此の文は阿毘達磨經攝大乘品の中に在るもので、前に云へるが如く能釋の攝論としては別に出處を標示する必要はないから、單に「佛世尊言」とし、或は又別偈として出したのであるが、義林章の如き引用文としては當然經題を標示すべく、述記亦其の出

としての分別性と、當爲の理想としての眞實性と、此の二性を擔ふものとしての依他性となり、これに依つて衆生性の眞實の姿を見ることを得、阿梨耶識自體が流轉還滅の契機卽ち如來藏であることが明瞭となつた。かくして衆生の現實の反省と眞實性の自覺とは、自ら解脫救濟の欲求となり、其の實踐修行の可能と方法とか、此の三性に理論的の根據を置いて入勝相の開示となり、此に教學としての理論と實踐との組織は完成し、次いで其の實修の道程と方法とを說いて、最後に當爲として彼岸に在つた理想實現の姿として、佛身觀を以て論を結ぶ。かくの如き本論の結構は、衆生心を基點とし、本覺不覺の二面の關係を說いて巧妙なる體系を僞せる起信論と、大體に於て其の軌を一にするものであつて、概論としての組織の完全せるものといへやう。

又之を、宗教一般の立場から考察せんか、信仰は果して各自の心の奧底より湧き出づる生命の力であるならば、之を外に求めずして內に探り、自心の實性を深く掘り下げて、生命の根源に於て之を捉へ、此に如來藏の光として信仰の源泉を掬し、之を生命の力とし、心の光として向上修入の宗教生活に入ることを教ふる佛教こそ、人間性の考察に始終して、此に其の根柢を置く眞實の人間の宗教であるといへやう。此の點から云へば本論の如きは、實に大乘佛教の概論とし役立つのみでなく、直に以て宗教自體の研究に資すべき要論であり、宗教哲學として現代的に攻究すべき價値あるものであるといへやう。

二、大乘阿毘達磨經に就て

本論は大乘阿毘達磨經中の攝大乘品の釋論であるが、而も十地論の如き隨文解釋でなく全然達意的の論であることは一讀明瞭である。然らば本論は釋論ではあるが、十地論の如く隨文釋でなく、達意的であり、達意論であるが、而も起信論の如く全然自由獨立の論でなくして釋論であるといふことになり、此に本論と所釋の阿毘達磨經との關係如何が問題とならざるを得ない。本論の教證として引用せられたるものを見るに、阿毘達磨經はいふまでもなく、其の他に般若經、十地經、解深密等の大乘の經典と、論部では此の教系の要論である辯中邊論(中邊分別論)瑜伽論の攝決擇分(決定藏論)及び大乘經莊嚴論(大乘莊嚴經論)が屢〻引用せられてゐる。就中、阿毘達大乘經の名を擧げて引證せる文は、論を通じて四回に及ぶが、能釋の論に於て特に題目を擧げて所釋の經を引證することは甚だ不自然のやうに思ふ。又阿毘達磨經の釋論として論の劈頭に十種の勝相を擧げて、「由二是所說諸佛世尊契經諸句一顯二於大乘眞是佛

結んでゐる。

以上本論の組織を要約すれば、第一と二とは教學上の理論的原理であり、第三は其の實踐的原理である、此の理論と實踐の教學的基本原理に立つて實修觀行の方法道程を示すものが、第四より第八に至る五段の解說である、更に此の前八段の所說を現實因位の相とすれば、之に對して理想としての果位の相を明かすものが第九、十の後の二段である。而して其の目的とする所は、前に云へるが如く大小二乘を對比して大乘の佛說なることを主張し、其の優勝無比の教學なることと明かにせんとするに在つて、特に大乘宣揚の精神は實に本論の始終を通じて之を觀取することが出來る。されば世親が本論を機緣として大乘に轉向し、大乘宣傳の最初に本論を釋したといふ傳說も本論の內容から見れば當然のやうに思はるゝのである。

本論が阿梨耶識の考察に出發し之を基點として最後に佛身觀を以て歸結せる一論の組織を通觀すれば、大乘佛教概論として一般に普及せる大乘起信論と並べ稱すべき重要なる論部であることが推知せらるゝであらう。大乘佛教の根本思想は般若經の空思想と、十地經に依つて代表せらるゝ華嚴經の唯心緣起說とを經緯として織り出さるゝものとすれば、緣起教系に於て、般若教系に於ける中論の如き位置を占しむるものは何ぞといへば、正しく此の攝大乘論を推さゞるを得ない。尤も十地論の如き直接華嚴經に關するもので、而かも此の教系の權證となるべき要論があるけれども、其は唯心緣起の本源となるべき根本思想を開說したのみであつて、本來經說の逐字釋であるから、組織的に唯心思想を開展したものでない。從つて此の思想の組織整然たる體系的の論部としては攝大乘論と同日に論ずべきものでない。

本論が阿梨耶識を考察の基點として、教學組織の理論と實踐とを開展せることは、之を佛教一般の立場から考察するに、般若は佛智であり、華嚴の法界は佛自性の境界を說くものであるやうに、大體に於て大乘の經典は佛陀の立場から說かれてゐるのであるが、佛意を解說して衆生を教導せんとする論部に於ては、其の考察の基點を教導せらるべき衆生自體に置き、生命の根源を探り求めて之を阿梨耶識に歸し、此に教學の基礎を置くものが唯心緣起の佛教である。されば阿梨耶識を中心とする教學は、現實に與へられたる衆生性の考察より出發するものであつて、本論の第一段依止勝相は正に之に當る。而して第二段の應知勝相に於て、衆生の本質、生命の根源としての阿梨耶識の意義及び價値を考察して、唯識三性の說に開展し、此に與へられたる現實の相

して唯識の三性、卽ち依他性相（依他起相）、分別性相（遍計所執相）、眞實性相（圓成實相）を説いて唯識觀の根據を究明してゐる。此の一段は相章、差別章、分別章、顯了意依章の四章に分たれ、相章には唯識三性の自相を説いて、染淨の諸法は凡て唯識の所現なることを示し、差別章には諸法の差別を論じて之を唯識に歸し、更に諸識を根本の阿梨耶識に歸して唯識無境を明かにし、次いで分別章に入つては三性各自の體義立名を釋し、三性相互の關係及び品類を明してゐる。以上第一段に阿梨耶識を説き、次いで三性を論じて唯識觀の根據としての原理を示し、此に依つて大乘佛教の教學的基礎は確立したのである。されば此の段の最後の顯了意依章には一轉して大乘教説を理解し、解釋すべき一般の方規として四意四依を開示し、大乘の教説は隨時隨處に機に應じて説いたものであるから、單に文相の表面を見たのみでは、佛陀の眞意を理解し得ざることを明かしてゐる。これ實に大乘經典を學ぶ者の明記すべき指南である。此の一段は陳譯釋論では五、六兩卷、唐譯では四、五の兩卷を占めてゐる。

以上の二段に於て本論の教學的基礎原理が確立したので、次に第三の應知入勝相に於ては唯識無境の理に體達して、三性の理に悟入すべき實踐的の基礎知識を明かしてある。陳譯の分科に依れば、一、正入相章、二、能入人章、三、入境界章、四、入位章、五、入方便道章、六、入資糧章、七、入資糧果章、八、二智用章、九、二智依止章、十、二智差別章、の十章に分つて、實踐修行に必須の知識を詳説してゐる。かくして第四段の入因果勝相に入つては、正しく實踐修行として菩薩の六波羅蜜の行を説いてゐる。此の一段は一、因果位章、二、成立六數章、三、相章、四、次第章、五、立名章、六、修習章、七、差別章、八、攝章、九、對治章、十、功德章、十一、互顯章の十一章に分つてゐる、以て其の内容を推知すべきである。

次に第五段の入因果修差別勝相には、修行進展の過程として菩薩の十地の階位を示し、一、對治章、二、立名章、三、得相章、四、修相章、五、修時章の五章に分つて廣く十地の義を説いてゐる。

次の依戒學勝相、依心學勝相、依慧學差別勝相の三段は十地に修すべき戒定慧の三學を各別に説いて、特に二乘の三學と異る點を明かにし、第九段の學果寂滅勝相には三學六度の行に依つて十地圓滿したる二轉依の妙果として無住處涅槃を説き、二乘の涅槃に異れる勝相を明かにし、最後の智差別勝相の一段には解脱知見として法身を中心として佛の三身を説き、本論の教學の歸結として、廣く諸方面に亘つて佛身觀を明かにして此の論を

三、應知入勝相。
四、入因果勝相。
五、入因果修差別勝相。
六、依戒學勝相。
七、依心學勝相。
八、依慧學勝相。
九、學果寂滅勝相。
十、智差別勝相。

三、入所知相殊勝殊勝語。
四、彼入因果殊勝殊勝語。
五、彼因果修差別殊勝殊勝語。
六、增上戒殊勝特勝語。
七、增上心殊勝殊勝語。
八、增上慧殊勝殊勝語。
九、彼果斷殊勝殊勝語。
十、彼果智殊勝殊勝語。

此の十種の勝相の分類及び次第配列は任意のものでなくして、教學組織の必須の要目であつて、增減は勿論のこと、順序の變更をも許されない程に必然の關係に立つものである。從つて本論が「此次第說中、一切大乘皆得圓滿」(陳譯)といへるが如く、一部の大乘佛教概論として組織整然たるものとなるのである。

本論は此の十義の次第辨說に入る以前に更に一段を設け、著作の目的及び綱領を述べてゐる。玄奘譯(唐譯)では特に之を總標綱要分とし、眞諦譯(陳譯)では之を依止勝相中の第一衆名品の中で、無等聖教章、十義次第章の二章に分けて之を釋し、其の第三衆名章より各論に入つて第一の依止勝相を釋してゐる、隋譯も亦之と同じであるが、然し本論全體の組織としては十相の各論に入る以前を一段として一部の大綱を示すものとした玄奘譯の分科の方が允當である。

十勝相の第一、依止勝相の一段には阿梨耶識(阿賴耶識)の衆名を評論し、教證と理證とを擧げて其の存在を論證し、其の本質及び意識を詳細に究明し、本論の、從つて又大乘佛教の根本を確立してゐる。されば釋論の上でいへば唐譯では前、三卷、陳譯では前四卷を占めてゐる。今其の論述の內容を一瞥する爲に、陳譯釋論の分科を見るに、衆名品の第三衆名章に小乘異部の立つる衆名を擧げて評釋し、正に阿梨耶識と名くべきことを述べ、次いで相品第二に入つて阿梨耶識の自相、因相、果相を明かして、熏習を論じ、因果を說き、緣起を示してゐる。陳譯では此の相品を七章に分つて、相章、熏習章、不一異章、更互爲因果章、因果別不別章、緣生章、四緣章となしてゐる、次いで引證品第三に入り、之を煩惱不淨章、業不淨章、生不淨章、世間淨章、出世間淨章、順道理章の六章に分つて諸方面より阿梨耶識の存在を論證し、最後の差別品を更に言說章、我見章、有分章、引生章、果報章、緣相章、衆貌章の七章に分つて種々の觀點よりする阿梨耶識の差別相を說いてゐる。

第二の應知勝相の一段には應知の相と

攝論解題

一、組織及び綱領

本論は彌勒菩薩の教說を繼承して瑜伽系の佛教を大成した無著論師の著作にして、未渡の經典である大乘阿毘達磨經の攝大乘品を解釋したものである。經釋とはいふもの丶、通途の釋論の如く經文を逐字的に解說したものでなく經中に說く所の大乘十殊勝の義を論の劈頭に掲げて之を解說敷演して一部の論となしたものである、所謂十殊勝の義は、小乘の教學に對して大乘の殊勝なることを教學組織の始終を通じて之を明かにし、此の時代に教界の問題となつた大乘非佛說論に對して大乘佛說を論證して其の要義を示したものであることは、「如レ此釋ニ修多羅文句一顯ニ於大乘眞是佛語ニ」(陳譯)の一句に依つても明かである。從つて本論は其の題號の示すが如く大乘の要義を攝したる達意論であり、瑜伽教系の立場より見たる優れたる佛教概論であるといふべきである。而して此の教系の祖述宣傳に努力して多くの著作をなし、偉大なる功績を後世に貽した世親論師は、肉兄である無著の十地經及び攝大乘品を誦するを聞いて、翻然とし省悟する所あつて大乘に轉向し、自ら前非を後悔して爾後大乘教の宣揚を誓つたと傳へられてゐるが、果して此の傳說の如き事情に依つて世親が廻小向大したか否かは問題であるとしても、此の二經は瑜伽教學の根本思想を說けるものであり、從つて世親は其の各に釋論を作つてゐる所から見ても、世親の大乘思想は其の根柢を此に置き、これより發展せるものであることは明かである。而して又、無著世親の教學が支那に傳へらるゝや本論を中心として隋唐の教界を賑はし、爾來支那日本の教學上に解き得ない諸種の論題を殘した此の教系の眞意を究明すべき根本の要書も亦本論であるといはざるを得ない。

本論の組織は論の劈頭に掲げたる大乘の十種の勝相を逐次解說するに在るから自ら十段に分けられてゐる。且らく陳唐兩譯を對照して之を示せば次の如くである。

(陳譯)	(唐譯)
一、應知依止勝相。	一、所知依殊勝殊勝語。
二、應知勝相。	二、所知相殊勝殊勝語。

卷の第八……〔二〇七――二三三〕……二二七

卷の第九……〔二三四――二六四〕……二五四

卷の第十……〔二六五――二九四〕……二八五

卷の第十一……〔二九五――三二九〕……三一五

目次

瑜伽部　九

衞藤即應譯

國譯一切經

大東出版社藏版